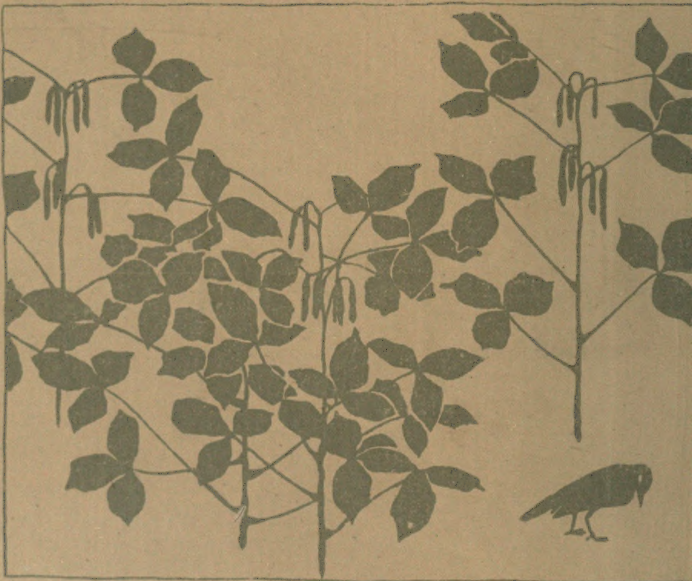
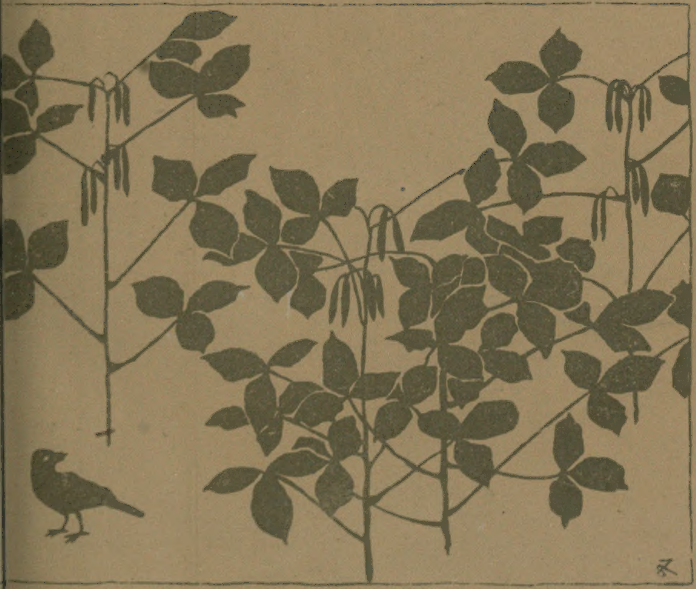




大正三年八月七日印刷
大正三年八月十日發行

有朋堂文庫
海音半二出雲宗輔傑作集（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

出雲半二 海音宗輔 淨瑠璃傑作集索引 終

チ

ス

シ

サ

エ、ヱ

オ、ヲ

出雲半二 海音宗輔 淨瑠璃傑作集索引

（主要の事物人名思想等を採り發音に依り五十音順に排列す）

巧のものゝ巧は功か

しつかとかけ、水もたまらず首打落す。かゝる所へ熊谷入道飛鳥のごとくかけ來り、義經公に打向ひ、「東へ下る道すがら、始終の樣子承る。時忠卿は大納言の位有ば私には成難し。蓮生法師が出家の役、都へ連れ行禁廷の御差圖を蒙らん。何とぞ愚僧に御預下されかし」と願へば、義經打うなづかせ給ひ、「ヲヽ神妙々々。高位の身なればうかつには殺されず。いかにも和僧が願ひに任せ、時忠を預くべし。直に都へ連上り、院の廳の御沙汰にかけ、兎もかくも計ふべし」と、仰に「はつ」と蓮生法師、時忠を預り申、莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌、「極樂にも巧の者とや思ふらん、西に向ひて後見せねば」と詠歌を殘し、暇乞して歸りけり。實末の代にいたりても、敵に後を見せぬとは、此ことわりとしられたり。義經御喜悅限りなく、「祿を貪る佞人原を亡せし此上は、三種の神器を守り奉り、兄弟打連都へ登り、此趣を奏聞せん。いさめやかた〳〵打立」と、御諚に任する岡部の六彌太、「御立ざふ」と呼はれば、御供奉の大小名綺羅を餝て歸洛有。朝敵亡の凱歌の聲、太刀は鞘、弓は袋と納りて、千代榮へぬる源氏、四海太平豐なる、國こそ久しかりけらし。

出雲 牛二
海音 宗輔
淨瑠璃傑作集 終

さしつたり—オイ合點

獅子忿迅云々—獅子虎のあれたる如く

二人が命—醒井馬場の命

尾筒—馬の尾のつけもと

鳩胸—胸部の高くつき出たるもの

ソレより馳向ひ、討取んと思ひしに、遙々とようぅせた。某が手をおろすに及ばず、ソレ兩人、物ないはせそ討取」と下知しながらに引かへす。「畏つた」と醒井番場、無二無三に討てかゝる。「さしつたり」と渡合、持て開いて眞向かざし、尖き刃の電光石火、獅子忿迅虎亂入、馬手は竪割弓手は胴切、二人が命は草葉の露。「ソレ遁すな」と軍兵共、おめいてかゝるをこと共せず、向ふやつばら嫌ひなく。大げさ小げさ車切、片端切立まくり立、追立〳〵めつた切。平「こりやたまらぬ」とばら〳〵〳〵。跡をしたふて忠澄が、遁さじやらじと追て行。さしもの平山途を失ひ、馬のはなを立かへて、落行んとせし所へ、岡部六彌太取てかへし、やらじと尾筒をしつかと取、「コリヤ〳〵〳〵」と引戻す。平「シヤ邪魔ひろぐな毛二才め。そこ立去らずば蹄にかけ、胴腹に風間を明ん。爰を放せ」と、鐙の鳩胸、あをり打立鞭打くれ、「ハイ〳〵〳〵」と乗出せば、忠「どつこいどこへ」と引留る。追立引留はみ轡、音はちりょんからころり。駒の嘶土煙。六彌太いらつて突放せば、馬は前立頭轉倒。ころりと落つる平山を、起しも立ず取て引伏せ、首引抜かんとせし所へ、源義經公平大納言を引立させ、しづ〳〵と立出給ひ、義「ホウ手柄々々。我々兄弟へ敵せんと工む平山、縛首打刑罰糺せよ」と、仰に「はつ」と六彌太忠澄、手早に取繩

汝等兄弟同士打させ、一天下を一吞、と巧し事も水の泡。よし〳〵此上は絶體絶命、命限りに切拔ん」と、太刀ひん拔て切付る。引ぱづして勾欄より、白洲へどうど蹴落し給へば、六彌太すかさず飛びかゝり、高手小手にいましむる。頼朝心地よげに打守らせ給ひ、「國家をさはがす大罪人、刑罰急度糺すべし。それはからへ」と宣ふ所へ、土砂踏散しあはたゞしく、しらせの早打かけ來り、「扨も平山の武者所、謀叛の工顯れし故、扇が谷に野陣を構へ、此御殿を追取卷き、攻入んとの催故、早速御注進仕る」と、大息ついで訴ふれば、義經につこと打笑給ひ、「ヤア〳〵六彌太、扇が谷平山が陣所に馳向ひ、行無をいはさず討取るべし」と仰は重き兩將の、詞につるゝ岡部の六彌太、「いざ打立や」「尤」と、御前に並居る隨兵共、我先がけん〳〵と、勝色見せたるやへ梅の、花芳しき弓取の、聲も淸しき軍立、扇が谷へと三重急ぎけり。平山の武者所、頼朝兄弟誅罰せんと、扇が谷に陣屋をしつらひ、士卒を隨へ控へゐる。かゝる所へ岡部の六彌太、軍兵引具し眞先に大音上、「ヤァ平山の武者所、汝が惡事顯れし故、此所に陣所を構へ御兄弟へ敵せんよし。頼朝の仰を蒙る、岡部の六彌太向ふたり。手に立武士はおりあへ」と、高らかに呼はつたり。かくと聞より平山末重陣屋より踴出、「ヤア〳〵岡部の六彌太、此方

敗亡—あつけに取られる
騒れそ—さわぐな
棟梁の臣—天子輔佐の臣
もつてうじられ—尊敬され
横紙破り—横道者

投付れば、「是は」と皆々仰天敗亡。時忠は緩々と座に直り、「ヤア騒れそ頼朝。あの寶劍は紛れもなき眞赤な贋物」頼「シテ〱其贋物といふ慥な證據が」時「ヲヽ證據なくて折るべきや。寶劍を所持したる者、當宮に立ると有故、云聞するよつく聞け。都にて義經某を招き、何とぞ三種の神寶奪ひ取てくれよと有、密の頼みのつぴきならず、智略を以て奪取しかど、呑込ぬ義經が心服ゆへ、先二色は渡したれ共、御寶隨一の寶劍は某が、肌身も離さず屹度所持せり。疑はしくば是見よ」と、懐中より取出せば、邊もかゞやく十握の御劍。頼朝公を初として、列座の人々一時に、あつと恐れをなしにけり。頼朝重て宣ふは、「今より時忠卿を將軍の宮と仰奉らん。ヤア〱諸大名萬歳を唱へられよ」と、棟梁の臣の一言に、もつてうじられ勝に乘り、時「此上は贋宮を引出し面縛させん」と、ずつと立寄り御簾引ちぎればコハいかに、思ひがけなき判官義經、寶劍奪取もんどり打せ、足下にぐつと踏付給ひ、「ヤア天命しらずの大納言。安徳天皇寶劍をいだき入水有しと偽りしを、合點行ずと察するに御邊が奪ひ所持する由、兄頼朝と云合せ、様々心を盡したは、此寶劍を奪ひ返さん謀。サア尋常に繩かゝられよ」と、仁心深き義經の、詞にひるまぬ横紙破り、無念の顔色はがみをなし、「エヽたばかられし奇怪千萬。平山と心を合せ、

十握の御劔—神の寶劍

迚容赦はならず、討取て我存念を晴すべし」と、氣色かはつて宣へば、時忠は思ふつぼ、心の内に含む笑。六彌太猶もすゝみ寄、「然らば義經公、誠の謀叛にもなされよ、三種の神器の内、神璽内侍所、此二品は先達て、義經公の御手に有、帝都を守護しましませば則官軍。それに敵對弓引給ふは朝敵も同前。武備盛なる時は返つて其身を害すと申。此義いかゞ」と言上すれば、頼朝騒ず、「ヲヽ其義は某工夫をこらし置たる事あんなれ其子細は、安徳天皇十握の御劔を携、入水有しと聞より早く、都八條大納言兼房卿と申合せ、老松若松といふ海士子供を浪間に入て海底を捜させけるに、龍宮城へ奪ひたる十握の御劔を取返し、兼房卿に指上しを、御所持有て御下向、頼朝拜諾仕る。此桐が谷へ御新殿をしつらひ、將軍の宮と傅き、則此宮より綸旨を乞受け、義經との戰は、官軍と官軍のはれ勝負、幸の諸大名一同の出仕。それ〳〵」との詞の中、「はつ」と領掌謹で、御劔の筥を携て、御簾間近く持出る。頼朝公恭く、寶劍を取かざり、天顔の恐れ有と玉座の御ずし、半頃迄巻上れば、各一度に尊敬する。時忠大口明てから〳〵と笑ひ、「頼朝は、智仁兼備の大將と、聞しに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劍を所持したる者あらば、將軍の宮と敬ふか」と、つゝと立寄り寶劍取て打折々々、白洲へかつぱと

魏王は云々―韻府に「魏王遺楚美人、夫人鄭褎愛之甚於王、鄭知王以已爲不妬、因謂美人曰、王惡子之鼻見王必掩之、美人從之、王謂鄭曰、美人見我必掩鼻何也、對曰、似惡聞王之臭、王劓其鼻」

第五

魏王は鄭褎が讒によつて、美人の鼻を劓しむるとかや。征夷將軍頼朝公、相從ふ大小名、岡部の六彌太忠澄を初め、威義を正して相詰る。頼朝御簾に向はせ給ひ、「此度の戰ひに、平家の一門西海の浪の泡と消失し事、全く頼朝が武略にあらず。是皆神明佛陀の御加護と存奉る」と、卑下の詞も奥床し。平の時忠、笏取直し、「西國にて源九郎義經、平家を悉く討亡し、其虚に乘て兄頼朝も討取、一天下を併呑せんと、某をたばかり京の君を娶、神璽内侍所を奪ひ、直に鎌倉へ攻入ん由、急ぎ告げ知らせん爲來つたり。屹度征伐然るべし」と、賢人顔の佞人は、いはねど夫と知れける。六彌太聞兼つゝと出、「何と云るゝ時忠卿。義經公に限り、左樣な御所存少もなく、腰越迄御出有しを平山が讒言故、鎌倉へも御入なく、直に御切腹召るべきを、舊臣の輩押とゞめ、我君への取なしは、六彌太が披露承る。夫に御邊が何しつて。扣へ召れ」ときめ付れば、時忠も反打かけ、互に色立見へければ、頼朝「しばし」とせいし給ひ、「やをれ六彌太、佞人原が讒言を用ゆべき我ならず。義經腰越に屯するは、鎌倉をくつがへさんとの手配ならん。さすれば弟

あいろ―黒白

八重櫻―かさねる意をかく

老木―林をさす

ヤア〳〵後藤兵衛が妻娘、此家に叶はぬ早出て行け」と、聞て菅原今更に、「そりや餘りじやどうよくじや」と、いふをも聞ず姫と林を引立、庭へ突出し、六「女房去た。ハテこりやナ、やり手の付た傾城菅原、敵の娘と聞ては添れぬ。もとの廓へ流し者、付添あるくはやり手の役目」初羂「スリヤ此わしは」六「ヲヽサ兄弟の緣が切ればコリヤ女房。一世の別れの名殘を惜め」と情の詞。「ハア盡せぬ御恩」と伏しをがむ。折から柏子木家中の夜廻り。六彌太邊に心付、「コリヤ〳〵そこな傾城やり手、古鄕へ歸る錦の袋、ソレ持て行」と投出す。二人は立寄り取上見れば、行暮て木の下影を宿とせば、ヲヽ其下の句は、花や今宵のあるじならまし。忠度卿のさいごの一首、菊「ヤア扨は筐か。ハアはつ」と、歎き給へば林も倶に、ありし昔を悔泣。「ハテ扨これ此六彌太が寸志の情。源氏は今を盛の日の出、平家は暮行く、アレ約束の暮六つ。夜に入ば敵味方のあいろが見へぬ。ソレ早ふ〳〵」「ハアお志忘れはせじ　もふおさらば」と立上れば、手負は今ぞ此世の名殘、花や今宵のちり櫻。妹は一人親兄の、別れを胸に八重櫻、姫は筐の言の葉に、むすぶ心のいと櫻。あとに老木のうばざくら。涙の雨や小夜あらし、生死不定は世の中の、ふだん櫻といさめても、つきぬなごりの山ざくら、ちり〴〵にこそわかれゆく。

はし折かゞみ—縁に繋がる

かくすけ—奴の通名

勘當を—下に許し下されの句を略す

押しづめ、「平家方の此兄を、切たは妹が源氏へ忠義。此一刀の手柄にめんじ、申六彌太殿、必見捨てやつて下さりますな。たつたふたりのはし折かゞみ、わたしやあいつがふびんにござる。成人して名は菅原と聞たを便り、上方へ上つた次手に九條の町、なつかしさに逢うと思へど、身はかくすけのさびた形、全盛かざる妹が恥と、三筋の町の格子の先、よいよ鹿子樣、ヨウつりひ樣と、ぞめきに紛れて名をとへば、客に揚られ柏やの、二階の障子に影法師、三味せん取てなげぶしの、聲を聞たが、コリヤ兄弟の名乘。其時音色も聲もあり〱と、おりや耳の底にしみ付て、今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三味せんで、慥に妹と見極めても、平家に緣有るそちなれば、よもや添ては下さるまじと、現在妹に、女房になれの惚たのと、心に思はぬ惡黨も、かくはからはん心の内、推量してたべ母者人。エヽついに一日孝行せず、先だつ不孝赦して下され。せめて未來は、勘當々〱を」と跡いひ兼るいぢらしさ。母は取分妹も、正體涙に菊の前、「我とても恩と情にからまされ、敵さへなき身の上は、兎にもかくにも我夫の、甲斐なき御運」と計にて、見合す四人がとも涙、前後ふかくに見へけるが、何思ひけん六彌太は、林がなはめ引ほどき、「太五平が白狀にて、家名知れば詮議に及ばず。女ながらも敵の餘類。

不覺—不心得
しなしたり—しくじつたり
けどる—樣子を悟る

でも源氏に紛れ込、雑兵と成り裏切し、親守長に對面せんと、いさみに勇む一の谷、後藤兵衛守長は、主君中將重衡を、ふり捨て逃たりし臆病者、畜生武士と軍中の取ざた。なむ三寶我親は、不覺の惡名取しかと、胸に磐石五臓に石火矢、なんぼう無念に有けるが、よし〳〵源氏の侍の首取て高名し、親子の恥を雪がんと、心を砕く生田の戰場、夕暮空のほのぐらく、浪打際にひつ組で、上になつたは慥に貴殿、シヤ六彌太殿と思ふより、右の腕を只一討。よく〳〵見ればこはいかに、薩摩守忠度卿。アヽしなしたりな。よし其場にて腹切んとは思ひしかど、イヤ〳〵忠義を顯はす時節もと、味方顔にて御首を、やみ〳〵こなたに討したる、無念といふも我誤り。かくけどられし上からは、我一分の我を立ても、迚も詮なき平家の御運。せめてはいらざる此命、姫君に討れんと、殺されに出た手柄咄し。エヽおでかしなされた姫君樣。忠度卿の右の腕、切た刀で切るゝも、此世の因果をはたす道理。思へば〳〵不運なる、我身の上」と悔泣。「扨は」と驚く人々の、中に妹が傍に有、刀取上涙ながら、顔見ぬ父の筐かと、思へばいとゞ胸せまり、くどき歎ば太五平は、妹が持たる拔刀、手を持ち添てめての脇腹、ぐつとつゝこむ覺悟の最期。「こは〳〵いかに何故」と、親子は心取亂せば、太「アヽさはぐまい〳〵」と

おこがましう─生意氣にも
さみ─蔑にする
そびき入れ─誘ひ入れ
わんぱく─あがき猿

郎の汝、思ひがけなく後より、右の腕を切し故、いたはるかひも涙ながら、御首討ておこがましう、武門の數に列る中、合點のいかぬは汝が胸中。忠度卿に打かけしは、紛ひもなき源氏方、夫には違ひ詞のはし〴〵、源氏をさみする面魂、ハテ心得ずと思ふより、兼て見置し此頭巾、裏に正しく書付しは、三位中將重衡の戒名、朝夕いたゞく心の底、扨こそしれ者手ばなされずと、思ひ付たる恩ごかし、親と敬ひ是迄に、心を付しは其方が、謀叛を押ゆる情の獄屋。今日是へ兩人を、そびき入しは汝が素性、責さいなんで尋んため。所に思はず其方が、己と名のるはこりや下郎の猿智惠。なんと思ひしつたか」と、始終を聞て太五平は、肌骨を貫く吐息の炎。母は涙の顔を上、「後藤兵衛守長殿に連添有しは二十年以前、七つと三つのあの子供を、付て離別の憂難義、妹が乳にて漸と、俊成卿へ乳母奉公。妹は傾城あの兄は、有にあられぬわんぱく太郎。侍の子といふたらば、猶我儘が募らふかと、勘當して置く其中に、いつぞや太五平我内へ、刀を盗みにはいつたを、見付て聞ば軍に出ると、いふこそ幸ひ高名して、侍の名を顯はせよと、家の系圖を折紙と、刀に添てやつたるが、却つて害になつたよな」太「ヲ、いかにも貰ひし其系圖、開いて見れば我親は、後藤兵衛守長。ア、恥しからぬ平家の侍、おのれ何

いぶせき―窮屈な

念なう―ざうさなく

や稚い時に別れた、わが兄の兵之介じやはやい」と、聞にいよ〳〵ふしぎはれず、菖「ムム其又現在兄樣が、此妹に惚たといひ、そして何じや姫君樣、よう切て下さつたと、覺悟の樣子は合點がいかぬ」太「ヲヽ疑はしいは尤。今さら語るも淚の種、姫君樣も聞てたべ。元我親は」六「ヲヽ其譯は此六彌太が推量に違はず、汝が親は平家の大將、三位中將重衡の家臣、臆病者の名を取し、後藤兵衛守長で有ふがな」と、聞て太五平「ハヽはつ」と仰天、「ア扨々驚入たる忠澄殿の明察。草にも心置露の、やどり定めぬ我生立、御存しられし樣子はいかに」六「ヲヽそれ誰か有、繩付ひけ」と詞の下、思ひがけなき乳母の林、見るめいぶせき繩目の耻、妹は見るより「ノウ母樣かおなつかしや」と走寄り、「此でア繩目は何故」と、姫も手負も驚けば、六「イヤ始終の樣子一通六彌太が云聞さん、菊の前もお聞あれ。さいつ比都出陣の折から、御身の父上俊成卿より密の內意、和歌の弟子たる忠度は、一方ならぬ緣も有ば、くれ〴〵と賴むと餘義なき仰。所に源平生田の合戰、向ふ敵と渡合、互に馬を乘はなし、念なう下に組敷しが、而ざし見れば見知有忠度卿。扨こそ俊成卿の御賴みは爰ぞ、と心得、助んと思ひながらも名ある敵、いかゞはせんとためらふ中、力勝りの忠度卿に、はね返されて此六彌太、組しかれしを下

撥鬢ーはけ長くたてかけといふ中ぞりあり（我衣）

も動いて見よ」と、鎧をもつてさん〴〵に、折れよ砕と打なやせば、頭巾はぬけて撥鬢奴、輿の醒たる風情なり。恥を恥共思はぬ強悪、「ヤイこな六彌太の恩しらずめ。今鎌倉で岡部の六彌太といはれて、榮花に暮すは、誰様が蔭じやぞやい。わりやおめ〳〵と忠度に組しかれたを忘れたな。其時に此郎等、右の腕を切落さずば、コリヤ此首は有まいがな。いはゞ手柄は此奴。よいは、是からばれ次手、鎌倉殿の御所へいて、六彌太が高名は、此鼻がさしました、と注進の上武藏一國、我手に入るが意趣晴し。待てをれべら坊め」と、かけ行く所を菅原が、「そふはさせぬ」と切付る。六彌太は只たばこの烟、さはがぬ太五平、菅原を膝の下にしつかとねぢ付、「コリヤまづ此如く薩摩守忠度が、あの六彌太を下に組敷、首をかゝんとせし所を」一間をかけ出菊の前、「かう切たか」と太五平が、右の腕を打落し、菊「敵といふは六彌太殿と思ひの外、誠の敵は此太五平。夫の恨をとゞめの刀、おもひしれ」と立寄給へば、太「ヤアこれ今暫く待てたべ」と、起上る太五平は、手負に屈せぬ強氣の面色。「アヽ忝い〳〵姫君。此奴が念がとゞいて、よう切て下さりましたの。コリヤ 妹 初霜」と、聞て悔り菅原は、「ムウ初霜といふは私が稚名。夫を知たこな様は」と、問れて太五平涙をうかめ、「ヲヽかう計いふては合點の行ぬは尤。おり

きり〳〵—はやく
子は三界の首かせ—譬にて子の爲に親は自由にならぬ意
ほでてんごう—ばかな冗戯
眞のあて—誠のあて身
面ばれ—體面を持つため
方量—方圖

まに若後家。娵に歎をかけるも不便。コリヤ子より達者な此親父、思ひこんだる戀の意地、おうといはふがいふまいが、けふの今から身が女房。おうといへやい〳〵、親孝行じや。ヤイ悴、きり〳〵暇の狀をかけ。子は三界の首かせとは、今身の上にしられた」と、傍若無人の横車、持餘してぞ見へにける。菅原涙打はらひ、「ほんにそふじや。よその女に見かへる夫、心中立るは大きな愚痴」單「そんならおれに隨ふか」單ヲヽ隨ふ段か帶といて、ねて花やろ」と立寄るふり、そばなる刀拔打に、切てかゝるをかいくゞり、「ヤアこりやちよこざいな、ほでてんごう」と跳飛せば、透間なく又切かくるを、眞のあて、うんと計に倒れば、六彌太透さず取て投、注連を餝し箱よりも、陣笠鎧引出せば、見るより樂人齋、ひるむ所をはつたとねめ付、陣笠鎧兩手にさゝげ、單「なんと親人、此二色の笠鎧、覺が有ふ見しりつらん。誠や故人の詞にも、用ひられる時は鼠も虎となるといふは、まだも能有人の身の上。こな天命しらずの匹夫め。今改ていふにはあらねど、女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ。もとこなやつは六彌太が旗持の雜兵、所存有て此ごとく、親と敬ひ尊敬すれば、方量もなき兼ての我儘。あまつさへ我女房に無體の戀慕。無法非道の人畜め。わるく動かば五體を八つ裂。サアぴつとで

ねぐさつた―寐腐か

づかひすな、モウ暮六つに程も有まい。勝手へ入て用意々々」菊「ア、忝いコレこちの人、必詞違へまい」と、敵討ふの氣ははり弓。「ア、これ〳〵」と菅原が、とむるもよそに走入。やらじとかけ入る菅原を、引とゞめて樂人齋、「我上方に有し時、見ぬ戀風にあこがれし、九條の里の傾城菅原、けふといふけふめぐり逢も不思議の因緣。悴六彌太、此女に暇をやれ」六「エ、それは」樂「夫はとは得心せぬな。サア、〳〵どうじや」と、せり詰られて返答も、あきれ果てぞ見へにける　菅「イヤこれそこな若い親父樣、こなさんは〳〵あちらをほんの菅原じやといふて、今又私を菅原じやの、イヤ見ぬ戀に風ひいたのと、がつくりそつくりな物の云やう。若又六彌太樣がさらんしたら、どふしやうと思はんす」樂「ヲヽ女房にして抱てねる」菅「エヽ」樂「ムヽヽ、今奥へやつたはな、ありや、薩摩守忠度が云かはした菊の前さ。悴六彌太は夫の敵、祝言といふは僞り、女に涙もろい悴のうんつく。敵を討れるアリヤ約束じやはやい」と、聞より菅原狂氣の如く、「そんならあの今の女中樣に、命をやつて此わしとは、どの命で添はしやんす。海山こへてはるばると、添ひにきた女房の、身にも成て見たがよい。餘の事に涙さへ、胸に氷て出ぬはいな」と、たゝく疊のいひがひなき。樂「ヤアとても命のねぐさつた六彌太、連添てもいん

ほうろく頭巾―大黒天の被る頭巾

こふけ―豪家にて威勢

らぬ中。直々逢て吟味する。サヽおじやいかふ」と、立上れば、「ヤア〳〵兩人待々」と聲かけて、ゆるぎ出たる此家の隱居、名も身の上も樂人齋、ほうろく頭巾大袍、左右に胡弓と三味せんを提、二人を尻目にかけ、「ヤア紛はしき二人の菅原、詮議の道具は此胡弓と三味せん。誠や傾城白拍子は、酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも、誠傾城菅原に極まれば、祝言さするは此親のこふけ。サア引け聞ふ」と褥の上、脇息取て打もたれ、「サア兩人、ハテしぶとい、何隙どる」と手詰の場所。六「ヤア〳〵親人、君曲お聞なさるゝに及ばず、其一人の紛者引出して、お目にかけん」と立出る、六彌太を取て引よせ、樂「ヤア小ざかしい。親をもどく不孝者、見るも中〳〵いま〳〵しい」と脇息取てつゞけ打。「なふコレ待て」と菅原と、倶に驚く菊の前、わなゝきふるへば六彌太が、衿がみ取て引よする、ともに若木の親子の中、樣子有げに見へにける。樂サア〳〵彈け女。ヤアきよろ〳〵と何うぢつく」とせんかたも、涙かた手に連引の、心々やかはるらん。歌身をすつる、里あればこそ浮む瀬の、あるを賴にうき勤。樂「ヤアもふよい、ひくな、詮議は濟だ。九條の町の傾城菅原といふは、此女に極つた」と、思ひがけなき菊の前、「アイ〳〵おまへはきつい調子聞。とてもの事に祝言を」と、いそ〳〵すれば六「氣

とけしなく—待遠にて

しやーそれしやの路か

和歌三神—住吉玉津島人麿の三神

鼬—生物の血を吸取る故

氣疎い—いやな

味せんは、御隱居樣をいさめの御酒宴、ほんに歌のふしでは有。何ぼ六彌太樣の心はかはるまいと思ふて居れど、三とせ隔て逢迄は、わしやどふも心が濟ぬ、逢たらどふしてかふして」と、案じも同じ菊の前、暮六つ迄もとけしなく、だまして討ん下心、忍び出たる背と背、べつたり行合、「ア、こは」と、飛のく〳〵二人が顏じろ〳〵、菊「ハ、おまへはどなたじやへ」菅「ハイわしは私じやが、マアそふおつしやるおまへはどなたじやへ」と、問かけられて菊の前、「わしは、アノ慮外ながら、岡部の六彌太が奧樣、都九條の菅原といふしやの果でござんす」と、聞て菅原、「ホヽヽ、こりやおかしい。其菅原といふ傾城の、御本家樣をとらまへて、菅原といふしやの果じやとは、テモきつい間違ひやう。ム、奴衆か但又家中衆のお内儀樣か。近付に成ましよ」と、上から出れば菊の前、「イヤ〳〵和歌三神を證據、其菅原はわしじやわいな」菅「イヤおれが事じや」菊「イヤ〳〵わしじやわしじや〳〵」と、聞て菅原あきれ果、「コリヤまあ何のこつちや。ム、ウ聞へた、扨は大事の夫を吸取ふとする、鼬の樣な女じやな。そしてまああた憎てらしい、あの美しい器量はいの。サア〳〵こりやもふ氣疎い。かんしやくが發つてきたはいな」二人「ム、よいよい。互にいふては水かけ論、深い淺いは夫が證據、たとへ年號は變る共、いかな〳〵かは

付た門口は、心覺へが有そな物」と、云捨て奥へ入跡へ、岡部の六彌太忠澄は、威勢も高き廣書院、しづ〳〵歸る廊下口、二人は見るより「ヤアあのこなたは、きのふ逢た深編笠の侍。いか樣口外見しり有る、六彌太殿に似た顔と、思へどかはりし形恰好。ふしぎに有たが其こなたが」六「いかにも横目の忍姿、岡部の六彌太忠澄さ」兩「スリヤ願ふ所の夫の敵」と、手早く懐劍突かくる、二人の利腕しつかとおさへ、六「コリヤサ〳〵、まだ祝言もせぬ中から、悋氣いさかひ早い〳〵。ナ合點か。此六彌太を付ねらふ、ナ付つ廻しつ戀慕ふ、其女房を合點で、呼迎へたは互の心底。年月疎遠に打過た、恨も有ふ憎からふ、道理じや。ハテサ 歌 憎い〳〵は可愛の裏よ。ハヽヽ、嬉しい〳〵。したが走を妾といひ娶を妻といふ、婚儀は人の大禮なれば、表立て祝言を、取結ぶは暮六つ。寝物語は浮世の夢。老女一間に伴ひ、用意をしめされ。身は大切な親人へ、今日の御機嫌伺ひ。マア夫迄はおいきやれさ」二人「スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意。忠澄殿。忠澄樣。待てをりますぞへ」忠「ハテ扨せく事はないおいきやれ」と、詞の目釘打しめし、心隔の襖と襖、引別れてぞ 三重 入にける。さを鹿の、夫待兼て菅原は、そろ〳〵出る奥の間は、音も耳なれし里の歌、歌 誠なれ共、あはねばうそよ、しんき心のやるせなや。「アノ胡弓三

川竹―遊女
花車―遣手、遣手は赤前垂を著るより綴けたり
別れにし云々―死せし忠度を戀ふ意
夕の雲云々―楚の襄王が巫山雲雨の夢の故事

狐ではないか。是非一人は紛れ者に極つた。どふやら奥にござるのが、ヲヽ笑止の詞付、尻聲がなかつた。化されまいぞ合點か」と、睫をぬらす其際に、日がさにつるゝ八もんじ、梅や櫻と見ゆれ共、散りてかひなき袖の露、やつせばやつす菊の前。昔は雲井の月にめで、けふは浮身を川竹の、流れに染るはで衣裝。林は花車に身をかへて、赤前垂の紅も、顔の紅葉と照添て、餘所目を包む里詞、林「コレ申 太夫さん、爰が日比逢たがらんしたむつ樣のおやしき。けふといふけふ天下晴ての奥樣遠慮はない。必氣をしつかりと持しやんせ」と、いへどしほれし菊の前、我のみ世をばかこち顔、「別れにし其日計は廻りきて、又も返らぬ人ぞ戀しきと、上東門院の女房伊勢大輔の歌の心、夕の雲朝の雨と誓ひしことも楚王の夢、はかないは浮世、あぢきなの此身の上」と計にて、思はず結ぶ露時雨、林「ア、これ〳〵、夫はまあ何いわしやんす、あられもない事ばつかり。エヽ聞へた、昔の勤を隱そふと、堂上めかして、ヲヽ虚言。都九條のお傾城菅原といふ事は、何ほ隱しても知て有。皆の女中は都勝り、粹のうはもりナア皆樣、宜しう萬事お指圖」といふ間あらせず先走り、「旦那お歸り〳〵」と、しらせに婢口を揃へ、「サアもふ樂じや。一時に二人來た娵御の正體、本阿彌樣にかけたらば、つゐくら紛れにさぐつても、はいり

しろとめかざる—黒人らしい

喜六州云々—州は里詞なれば喜六は制する爲にシッ〳〵といふ

むつ樣—大弼太の諢名

なめた—無禮

を倶廻り、思ひ付なる出立は、しろとめかざる風情なり。中にも小槙は局役、しとやかに手をつかへ、「是は〳〵長の御道中、御機嫌宜しうおめでたいお國入。いざマアお入」と乗物の、戸を明けお手を取々に、かしづかれつゝ立出る、姿は武家をやつせ共、昔を殘す詞くせ、菅「是は〳〵皆樣いかいお取持、どれがどれやらうろ〳〵しい。萬事は皆を頼むぞへ。なんと喜六州宗助州」と、いはれて喜「シッシはてこれ申」菅「いよゝいなア、わしや聞へぬはむつ樣、久しぶりの女房の顔、ヤレ菅原か久しや〳〵と、出さんしそふな所を、昔にかはらぬおもはせぶりか。わしや逢たら一通り、きつと一番云ねばならぬ」と、長ふすわるも、日比のならはせ。傍には手に汗、「コレシッシ」にちやつと居直り、菅「ほんにマアわしとした事が、始ての付合になめたらしい。ヲヽ笑止」と袖覆ふさへ里めかし。小槙「何と皆見やつたか、都女中はわさ〳〵と、かぶき芝居を見る樣な風俗。ほんにそれそれ。いや申奥樣、殿樣は今日叶はぬ御用で外へお出、お歸りも追付。まあ夫迄はお勞休め、お湯でもめして緩りつと、御祝言の御用意遊ばせ。皆のお衆は勝手で休息。いざさせ給へ」と皆々は、奥と口とに立別れ、打連てこそ入にけれ。程なく又もしらせの侍、「奥方樣都より只今お入」と、詞の下より腰元局、「こりやまあどふじや。どちらぞが

ナント作藏—岡部の宅の話に移る

こなやつ—お前

けうがる—をかしな

十文字—八文字を訛りていふ

すつきり—とんと

兄分—若衆の兄分を念者といふ

あたらしい—初耳

とつかは—忩はしく

末社—遊廓にて客を取持つもの

通り敵の方への入込やう。御縁あらば重て逢ふ」と立歸れば、二人「ハアはつ」と押いたゞき、「イヤこれ申お前のお名は」と問ふ隙も、松吹風に隔られ、主從二人點頭合、立別れてぞ 三重急ぎ行。甲「ナント作藏彌嘉内、上方からけふ奥樣がござるといふが、旦那六彌太樣の奥樣か、但は隱居樂人齋樣の奥樣かいなア」「こなやつしらないな〳〵。けふござる奥樣といふはな、旦那樣が上方でこつてりと談じやつたお色だはやい」甲「何、お色とは紅の事ではないかい」作「イヤこいつけうがる兵では有。色といふはな都九條で菅原といふお傾城の事だはやい」甲「スリヤあの十文字とやらふんであるく、國太夫節の親方殿か」甲「ヲイやい。旦那六彌太樣の奥樣になりに、けふ此内へぬめり込のさ。なんとうまい事ではないか」甲「イヤサ夫はそふと、合點のいかないは是の隱居樣、御子息の六彌太樣とは、同年ぐらゐの親子の中。おらは新參者で樣子はしらないが、ありやマア何たる事だいなア」作「おらもすつきり合點がいかない。親御樣じやといふて、あの樣に大事にさつしやるは、若は旦那の念者では有まいか。したが念者を兄分といふは聞たが、親分とはあたらしい」と、仇口々の折からに、門前賑はふ遠見のしらせ、「上方の奥樣只今是へ御入」と、いふもとつかは奥よりも、待設の女中方、著連打連出迎へば、早舁入る乘物に、牽頭末社

しどけなうては ─埒がなくては

や。跡に殘りて自は、何樂しみにながらへん。なむあみだ佛」と懐劒にて、自害と見ゆるを、「なふコレ待て」と、林がなだめとゞめても、菊「イヤ〳〵はなして殺して、情じや」と、とゞむるかひも泣さけぶ。侍「イヤサ是女中、死る命を忠度卿の爲に捨ふと思ふ心はないか」菊「ムヽ何といはしやんす、過行給ふ忠度卿の爲に、此命を捨いとは、どふしたら又お爲に成ませうな」と、いふに浪人傍をながめ小聲に成、「さすがは俊成卿の御息女、雲の上人程有て、敵を討ふといふお心が付ぬか」と、云れて姫君涙をはらひ、「ほんにそふじや。悲しいと計に心が付て、夫の修羅の妄執をはらす、敵といふは岡部の六彌太。林おじや」林「お姫樣ござりませ」と、逸散にかけ行を、侍「アヽこれ〳〵待た〳〵。其樣にしどけなふては、アヽ敵討心元ない。岡部の六彌太忠澄といふては、武藏一國の大名なれ共、おのれ討で置うかと、女心の一念力、とくとかたまりましたかな」と、心さぐれば二人共、「ほんにそふじや」と懐劒にて、互に自身の髻を、切んとすれば押とゞめ、侍「いかにも御心底見へました。未來の夫へ命を捨、又の夫は重ねぬといふ切髪、倶に付添尼法師と、さまをかへても主人の敵、討そふといふ老女の誠、ヲウ遖見事〳〵。縁はなけれど見捨ぬは、武士の情」と矢立取出し、涕紙にさら〳〵さつと書認め、「コレ此

た所が忠度の妻菊の前、平家の餘類遁れぬ所」と林を引退け、姫君に飛かゝるを、林「なふコレ待て」と、とむるを蹴倒し、泣叫ぶ菊の前をひんだかへ、既に危き折からに、深編笠の侍が、兵太が利腕ぐつと捻上げ蹴飛せば、兵「アイタヽヽ、ヤア爰なあみ笠め。大切な科人を召捕役目の妨ひろぐ。先汝から詮議有やつ。くゝれよたゝけ」と立かゝれば、物をもいはず雜兵を、宙に摑で天狗の礫、はらり〳〵と投飛せば、兵「命が大事じや家來共、皆こい〳〵」と云捨て、逸散にこそ迯て行。跡に二人は胸押なで、林「是は〳〵どなたかは存ませぬが、危い所へおかげ故。コレおまへもお禮おつしやれ」と、姫君倶々嬉し泣、手を合すれば、侍「アヽこれ〳〵、お禮には及ばぬ嘸御難義。シテ承れば女中には、忠度殿に縁の有菊の前とな」菊「ア、いや左樣では」侍「ハテお隱しなされな、とつくと樣子承つた。おいとしや忠度卿には、早御果なされたはいの」菊「エ、そりやほんか。シテ〳〵樣子は。御存ならば聞してたべ」と、そゞろ涙のふるひ聲。侍「ヲ、悔りはお道理お道理。さいつ比すまの浦の合戰に、岡部の六彌太忠澄に渡り合、右の腕を打落され、つゐにあへなく御さいごと、慥に世間の取沙汰。拙者京都の者なれば、兼々和歌の名人と、聞及んだ忠度卿、お咄し申も他生の緣」と、聞内よりも姫君は、「こは何とせんおいとし

醒井ー覺めるにかく
林ー囃しにかく

じめになれば二人の牽頭、「醒井兵太頭が高い」兵「ハア」聟「まちつと高い」「ハア〳〵」と、家來も一度に眞倒、額を土にすり付る。其間に菅原目までしらせ、乗物上させ足早に、引添てこそ急ぎ行。跡には、一度に顔を上、「是はしたり夢ではないかや」「サ夢ぢやによつて醒井兵太。皆こい〳〵」と打連て、松かげにこそ走行。跡へしと〳〵二人連、花や楓と見し夫の、便を何と菊の前、詞の林打連て、あてども波のかけ遠き、宮居を暫し伏をがみ、菊「何とマア林、此樣にうか〳〵とさまよふも、忠度樣のお顔が見たさ。須磨の軍の亂れより、どふ成なされた事じややら。此中は打つゞき夢見の悪さ。わしやいかふ氣にかゝるはいの」林「お道理〳〵。そりや此乳母も同じ事。以前の夫は平家の侍、兄と妹と二人の子の親。樣子有て退去した、かはいけもない夫さへ、思ひ出すが女のならひ。娘は都に勤奉公。兄太五平も軍に出ると云ひましたが、どふ成おつた事じややら。おまへも私も思ひ出す事計で、夜がなよつぴと泣くらす、長の旅路の御氣休め、ちと床几へ」とすゝめられ、涙交りの身の上咄し。並木のかげに誰やらん、深編笠の浪人姿、後の方には醒井兵太、樣子立聞家來共、「ソレ搦よ」と追取まく。林は姫を後にかこひ、「ヤア聊爾せまいぞ。我々は八幡樣へ參詣の者、何故に搦よとは」兵「ヤアぬかすまい。闇

路考慶子—瀬川路考中村慶子いづれも女形の名人

こんたん—魂胆工夫して

地黄丸—精を増す薬

御すいはう—御粋方

はきゝ—はゞき

つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の內、御一門のお付合などは路考慶子で雲上に、萬事そこらはちよんの間で、お付合なされませ」と、餘所へ通ぜぬ教の詞、しつた同士こそすどしけれ。萱「そこらはわしがこんたんしてゐる。帶の仕樣も此形も、藏屋敷の振舞で、よう見て置いた屋敷の風俗。遁す物じやないはいな」共「おつとよし／＼。それはそふじやが、久しぶりのお寐間の段、御勞の出ぬ樣に、地黄丸でもあがつて。したが必ず藥酒は御無用」と、咄し半へ、家來引連醒井兵太、「ヤア鎌倉に見馴ぬ女の風俗、都者に極つた。平家の餘類も疑はしい、連歸つて吟味する。ソレ引立い」と立かゝれば、傍に二人の牽頭はわな／＼、「都者とは御すいほう。したがお尋なされます、平家とやらかつけとやら、微塵も覺へはござりませぬ」兵「ヤア僞るまい／＼。武士に似合ぬがち／＼と震ふは曲者。ソレくゝれ」と二人を投付蹴飛せば、物に馴れたる萱原は、騒ぬ色目しとやかに、「イヤこれ聊爾さんすなお侍、自は岡部の六彌多忠澄が女房」と、聞よりも醒井兵太、「スリヤおまへ樣には六彌太殿の御內證とな。是は／＼存ぜぬ事迚慮外千萬。拙者義は則六彌太殿の下目付。イヤモウ何が物でござります、當時はきゝの六彌太殿へ、かういふ事が聞へては。何さ／＼、とにかく是は家來共が麁相。ハテ不調法千萬」と、ま

菅原─爲るにかく
水銀なしに云々─水銀は手品師の種
いかさま─成程
チヽしんき云々─斯る里詞にてはつりあはぬ

りのつさ〱、供人引連れ醒井兵太、「ヤア家來共、道々もいふ通り、主君頼朝公より、平家の餘類は根を斷て葉を枯せとの仰によつて、隱れ忍ぶ殘黨を取縛る身が役目。隨分四方に眼をくばり、うさんな者と見るならば、男女に限らず搦めとれ。手柄はそち達はうびは某、急度申渡した」と、家來「はい〱〱」も仰山に、社深くぞ入りにける。跡に社參の一むれは、徒士の附々も、一際目立旅乘物、松かげに舁すへて、「是は鶴が岡八幡宮と申まして、源氏の御代を守りの御神。御拜がてらに風景も、御覽なされて然るべう、存まする」と、頭をさぐれば乘物より、武士にはあらぬ風俗は、九條の町に全盛を、菅原といふ太夫職、「是は〱今都では口利の牽頭樣、喜六樣宗助樣などといふて、大がいあまい客樣達は、水銀なしにてん〱からくり、天上さするからくりの名人樣達。それを供の侍にして、ほんにマアかはつた趣向ではないかいなア。かう打揃ふていたらば、主はきつい機嫌であろ。そしてもふ六彌太樣の屋敷は、爰からはつい近いげな。三年ぶりで顏見よふかと、わしや飛立つやうに思ふてゐるはいなア」供「いか樣是は御尤。此喜六宗助は日比旦那のお氣に入、お供をするもお馴染だけ。是からおまへは大名の奥樣。訛りちらす女中の中へ、チヽしんきわしやいやいな、と今迄のせりふでは、マアぶたい

關—伊勢の地名せくにかく
かゝりまりこ—さしかゝるにかくかゝりは蹴鞠の庭の四隅にある楓、柳、松、櫻をいふ蹴鞠の縁に鞠子の地名をよせたり
富士のけぶり—風に靡くふじの烟の空に消えて行方も知らぬ我思ひかな（新古今集）
わやく—冗戲
したがひ云々—内襟、褄と從ひ夫にかく
大いそ—逢ふにかく

の涙にて濡し筐の片袖は、忍びあふ夜の添臥も、冷泉君は左か寐がつてに、打きせ給ひし口ずさみ、面影のかすめる月ぞやどりける、はるや昔の袖の涙に。袖の涙や有し夜の、ぬしは雲井に隔りて、昔語りと成給はゞ、此身の果はいかならん」と、歎に草の露ぞうく。おなじ思ひを押かくし、老女は力つく杖に、道をたすけて行さきを、たぐり寄なん布引山、心も關の別より、伊勢やおはりの海づらに、立波を見ていとゞしく、過にしかたは遠ざかり、しらぬ山々里々に、日をかさね夜をかさね、ほつれし鬢に風いとふ、濱松過ぎて山坂に、かゝりまりこやおきつなみ、富士のけぶりの立のぼり、行方もしらぬ旅人の、姫ごぜ連と惡口に、歌君と添ねにともしびよせて、かゝげて見ればそふだかく。いとはづかしや。けせばいとしいお顔が見へぬ、是ぞ誠に戀のやみ。そふいふたがむりかへ。いとはづかしや。けせばいとしいお顔が見へぬ、是ぞまことに戀のやみ。そふいふたがむりかへ。むりもわやくもしたがひの、つまにふたたび大いそと、心計はいそがれて、足はもつるゝ藤澤や、ゐにしの便りほし月夜。かまくらにこそ三重著にけれ。榮へぬる平家の一門悉、西海の波に亡び、再び榮る源氏の御代、猶長久の御祈願と、鶴が岡の八幡宮、新に造營有ければ、口々に威を増神詣賑はふ空も長閑なる。向ふの方よ

菊の前―聞くにかく
心細布云々―陸奥の狭布の里にて出す幅狭き布をよせたり
うばらの里―姥にかく
玉ほこ―道
しら浪の云々―知らぬにかく
武庫川昆野のは攝津にあり
ふしみ―臥寐と伏見
近江路―逢ふにかく
つまさきあがり―聊かの上り道
にほの浦―琵琶湖

磯千鳥、いく夜寢ざめの物あんじ、二世とかねたるたゞのりは、はかなくうたれ給ふ共、又鎌倉へとらはれ共、噂とりぐ〜菊の前、心細布胸あはず、けふ立そむる旅衣、きつゝなじみをかさねつる、やしなひ君とかしづきの、老女ひとりをつゐはしら、名は有ながら呼なれし、うばらの里を出こして、あづまの空へと思ひ立、心の内こそはるかなれ。足よわづれの玉ほこに、末しら浪のむこ川や、昆陽のの池にすむ月も、心はくもる片袖の、其移り香も筐かと、思ひぞつもる芥川、いつかふしみも跡になし、殿御にやがて近江路と、見へ渡りたる風景も、心せかれて行道は、つまさきあがり小石はら、老女は足をいたはりて、「申々お姫様、行先遠き旅の空、御身の勞も出やせん。マアしばらく」と道芝に、立やすらへば菊の前、「ヲヽみづからが氣のせく儘、跡先見ずに道を急ぎ、年寄たそなたの難義、足が痛みはせぬかや」と、鉢タヽキ互にとふつとはれつる、しんみなじみの底ふかき、にほの浦なみ山々も、しげりし峯は八わうじ、いそべに見ゆる唐崎の、松は扇のかなめとや。「あれこそしがの山ごゑの、よき詠ぞ」と敎ゆれば、菊の前打ながめ、「ナフしがの山とはあれ成か。なつかしや忠度樣の御詠歌を、千載集へ父上が、撰み入給へ共、勅勘の御身をはゞかり、讀人しれずと末の世迄、御名を削しほいなさを、御歎

不隨者—妻子珍寶及王位臨命終時不隨者（大集經）

こがねざね—金札

コレ義經殿、若又敦盛生返り、平家の殘黨かりあつめ、恩を仇にて返さばいかに」義「チヲ夫こそは義經や、兄頼朝が助りて、仇を報いし其ごとく、天運次第恨を請ん」直「げに其時は此熊谷、浮世を捨て不隨者と、源平兩家に由緒はなし、互にあらそふ修羅道の、苦患を助ける回向の役」宗「此彌陀六は折を得て、又宗淸と心の還俗」直「我は心も墨染に、黑谷の法然を師と頼み、教を請けんいざさらば、君にも益々御安泰。お暇申」と夫婦づれ、石屋は藤の御局を、伴ひ出る陣屋の軒。「御縁が有らば」と女同士、「命があらば」と男同士、「堅固で暮せ」の御上意に、有がた涙名殘の涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將、此須磨寺に取納め、末世末代敦盛と、其名は朽ぬこがねざね、武藏坊が制札も、花を惜めど花よりも、惜む子を捨て武士を捨て、すみ所さへ定めなき、有爲轉變の世の中や、と互に見合す顏と顏、さらば／＼おさらばの、聲も涙にかきくもり、わかれてこそは出て行。

第四

道行花の追風

もぎどふ—無慈悲

望は—下になしの二字を省けり

九品蓮臺—極樂の蓮華のうてな

柊—厳めしき直實の顏に譬ふ

れんじやく連着にて鎧の括紐

つくりと譯もいはず、首討たのが小次郎さ、しれた事を、ともぎだうに、しかる計が手がらでも、ござんすまい」と聲を上げ、泣くどくこそ道理なれ。心を汲んで御大將、いさみを付んと、「ヤア〱熊谷、西國出陣時移る、用意いかに」と仰に直實、「恐ながら先達て、願ひ上し暇の一件、かくの通り」と兜を取ば、切拂ふたる有髮の僧。義經も感心有、「ホ、さも有なん。それ武士の高名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目。其傳ふべき子を先立、軍に立ん望は。ホウ尤。コリヤ熊谷、願に任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ、父義朝や母常盤の回向も賴む」としたしき御諚。直「ハ、ア有がたし」と立上り、上帶を引ほどき、鎧をぬげば袈裟白無垢。相摸「是は」と取付を、直「ヤア何驚く女房。大將の御情にて、軍半に願ひの通り、御暇を給はりし我本懷。熊谷が向ふは西方彌陀の國、悴小次郎が拔がけしたる九品蓮臺。一つ蓮の緣を結び、今より我名も蓮生と改めん。一念彌陀佛即滅無量罪。十六年も一むかし。ア夢で有たなあ」と、ほろりとこぼす涙の露、柊に置く初雪の、日かげにとける風情なり。「ヲ、そふじや〱。我子の罪障消滅の、加勢は是」と切たる黑髮。詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞくれ給ふ。「長居は無益」と彌陀六は、鎧櫃にれんじやくを、かけた思案のしめくより、宗「コレ〱

大あらめ」鎧の札の荒く縅したものにて重し

筋は」下にないの二字を入れて見るべし

しや」と、或は悔み或は怒り、涙は瀧を爭へり。元來さとき大將義經、「ヤア〱熊谷、障子の内の鎧櫃、ソレこなたへ」直「はつ」と答へて次郎直實、出陣の出立と、好む所の大あらめ、鍬形の兜を著し、抱出でたる鎧櫃、御目通りに直し置。義「コリヤ親父、其方が大切に育る娘へ、此鎧櫃居てくれよ。コリヤ彌陀六」宗「ヤアみだ六とは」義「フウ宗清なれば平家の餘類、源氏の大將が頼むべき筋は」宗「ムヽ面白い。みだ六め頼まれて進ぜましよ。したが娘へは不相應な下され物、マア内は何でござります、改めて見ませう」と、蓋押明れば敦盛卿。「ナウなつかしや」と藤の方、かけ寄り給へば蓋ぴつしやり。宗「ヤア此内には何にもない。ヲヽ何もない〱〱。ホヽ是でちつと虫が納まつた。ナウ直實、貴殿への御禮は、コレ〱此制札、一枝をきらば一子を切て、ヘツエ忝い」と、いふに相模は夫に向ひ、「我子の死んだも忠義と聞ば、もふあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛樣と、小次郎を取かへやうが」直「ハテ最前も咄した通、手負と偽り、無理に小脇にひつぱさみ、連歸つたが敦盛卿。又平山を追かけ出たを、呼かへして首討たのが小次郎さ。知れた事を」と尖なる、咄に相模はむせび入、「エヽどうよくな熊谷殿、こなた一人の子かいなふ。逢う〱と樂んで、百里二百里きた物を、と

老子―周の老聃にて母の胎内にあること八十年生れて頭髪白し

獅子身中の虫―仁王經の句

重盛卒去の後は、行方知ずと聞しが、ハテ堅固で居たな満足や」と、聞よりみだ六つかつかと立寄、義經の顔穴の明ほど打ながめ、「テモ恐しい眼力じやよなア。老子は生れながらにさとく、莊子は三つにして人相をしると聞しが、かく彌平兵衛宗清と見られた上は。エヽ義經殿、其時になたを見遁さずは、今平家の楯籠る鐵枴が峰、鵯越を責落す大將は有まい物。又池殿と云合せ、頼朝を助ずは、平家は今に榮ん物。エヽ宗清が一生の不覺。是に付ても小松殿御臨終の折から、平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隠し、一門の跡弔へと、唐土育王山へ祠堂金と偽り、三千兩の黄金と、忘筐の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門先立給ふ御方々の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建置し、施主の知ぬ石塔は、皆是彌平兵衛宗清が、涙の種と御存じしらずや。今度敦盛の石塔誂に見へし時も、御幼少にて御別申せし故、御顔は見覺ね共、心得ぬ風俗は、ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより、心能く受合しが、扨は命にかはりし小次郎がほだいの爲、此濱の石塔は敦盛の志にて有けるか。ヘツエいかに天命歸すれば迚、我助けし頼朝義經、此兩人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハアヽ是非もなき運命やな。平家の爲に獅子身中の虫とは我事。嘸御一門陪臣の魂魄、我を恨ん淺ま

障子ごし云々—義經が敦盛を障子の陰に隱しゝなり

箒木の云々—薗原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えて云々の歌による

こつぱ—木片にて無用物の梶原をさす

隱れのない—原本い字なし

嬉しさ—原本嬉しき

出し敦盛の幽靈、人目有と引とゞめ、障子ごしの面かげは、義經が志」と、聞いて御臺は我子の無事、悟りながらも箒木の、有とは見へて隔られ、又も涙にくれ給ふ。折節風に誘はれて、耳を突ぬく螺貝の、音かまびすく聞ゆれば、義經はいさみ立、「ヤア〳〵熊谷、著到知せの螺の音。出陣の用意〳〵」と、仰に直實畏り、急ぎ一間に入にけり。最前より樣子を聞居る梶原平次、一間の内より踊り出、「斯あらんと思ひし故、石屋めを詮議に事よせ窺ふ所、義經熊谷心を合せ、敦盛を助し段々鎌倉へ注進」と、云捨かけ出す後より、はつしと打たる手裏劒は、骨を貫く鋼鐵の石鑿、梶「うん」と計に息絶る。「スハ何者」といふ中に、立出る石屋の親父、「ハヽア お前方の邪魔に成る、こつぱを捨て上げました。扨幽靈の御講釋、承つて先安堵。もうお暇」と立行くを、「ヤア待て親父、コリヤ彌平兵衞宗清待て」と、義經の詞に恂り、はつと思へどそらさぬ顏。「ハレやれやれとつけもない。御影の里に隱れのない白毫のみだ六といふ男でゑす」義「ハヽヽ、誠や諺にも、至て憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは、人間一生忘れずといふ。其昔母常盤の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情を以て親子四人が助りし嬉しさ。其時は我三歳なれ共、面影は目先に殘り、見覺有眉間のほくろ、隱してもかくされまじ。

たる首のゆるぐのを、うなづくやうに思はれて、門出の時にふり返り、につこと笑ふた面ざしが、有ると思へば可愛さふびんさ。聲さへ咽につまらせて、「申藤の方樣、御歎有た敦盛樣の此首」藤「ヒヤア是は」相「サイナアフ申、これよう御らん遊して、お恨はらしよい首じやと、譽めておやりなされて下さりませ。申此首はな、私がお館で、熊谷殿と忍び逢、懐胎ながら東へ下り、産落したは、ナコレナ、此敦盛樣。其節おまへも御懐胎、誕生有し其お子が、無官の太夫樣。兩方ながらおなかに持、國を隔て十六年、音信不通の主從が、お役に立たも因縁かや。せめて最後は潔う、死なされたか」と怨げに、とへど夫は瞬も、せん方涙御前を恐れ、餘所にいひなす詞さへ、泣音血を吐く思ひなり。藤の局は御聲曇り、「ナフ相摸、今の今迄我子ぞ、と思ひの外な熊谷の情、そなたは嘸や悲しかろ。かうした事とは露しらず、敵を取ふの切ふのと、いうた詞が耻しい。我子の爲には命の親、忝い」と手を合せ、「此首の生世の中、逢見ぬ事の悔しや」と、倶に歎かせ給ひしが、「是に付いふかしきは此濱の石塔、敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ、祕藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひし迚我手に入、最前其笛吹いた時、あの障子に移りしかげは、慥に我子と思ひしが、詞もかはさず消失しは」熊「アいや其笛の音を聞てかけ

息の根とめ—語らせず
はしたなう—不謹愼

南面の嫩—南面は帝王をさす嫩は幼君敦盛をいふ此本の表題は是をとる
一指を切べし—一指を一子小次郎にかけていふ

願ふ汝が心底いぶかしく、密に來りて最前より、始終の樣子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首實檢せん」と、仰を聞より熊谷は、「はつ」と答へ走り出、若木の櫻に立置し、制札引抜き恐げなく、義經の御前に指置、「先頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短册、此熊谷には敦盛の首取よとて、辨慶執筆の此制札。則札の面のごとく御諚に任せ、敦盛の首討取たり。御實檢下さるべし」と蓋を取ば、「ヤア其首は」とかけ寄る女房、引寄て息の根とめ、御臺は我子と心も空、立より給へば首を覆ひ、直「コレ申實檢に備へし後は、お目にかける此首、おさはぎ有な」と熊谷が、いさめに遉はしたなう、寄るも寄られず悲しさの、ちゞに碎くる物思ひ。次郎直實謹んで、「敦盛卿は院の御胤、此花江南の所無は、則南面の嫩、一枝をきらば一指を切べし、花によそへし制札の面、察し申て討たる此首。御賢慮に叶ひしか、但直實過りしか。御批判いかに」と言上す。義經欣然と實檢まし〱、「ホヽ花を惜む義經が心を察し、アよくも討たりな。敦盛に紛れなき其首、ソレ由緣の人も有べし。見せて名殘を惜ませよ」と、仰を聞より、直「コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へお目にかけよ」相「アイあい」と計女房は、あへなき首を手に取上、見るに涙にふさがりて、かはる我子の死顔に、胸はせき上身もふるはれ、持

香の煙云々―漢の武帝反魂香にて故李夫人を見し故事
實方―藤原實方一條帝の勘氣を受け陸奥に流され死しても都の戀ひしきに姿を顯す

「ヤレなつかしの我子や」と、かけ寄給ふを相摸は抱とめ、「香の煙に姿を顯はし、實方は死て再び都へ歸りしも一念のなす所。有まい事にはあらね共、いぶかしき障子のかげ。殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、御姿は消失ん」藤「イヤなふ四十九日が其間、魂中有に迷ふと聞。せめては逢ふて一言を」と、ふりはなし〳〵障子ぐはらりと明給へば、姿は見へず緋威の、鎧計ぞ殘りける。はつと計に藤の方、相摸も倶に取付て、二人「扨は鎧のかげなるか。戀しと迷ふ心から、お姿と見へけるか」と、倶にこがれて正體も、泣きくどくこそ哀なれ。時刻移ると次郎直實、首桶携へ立出れば、相摸は夫の袂を扣へ、「コレ申是が親子御一生のお別れ。せめて御首になり共、御暇乞を」と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、「ナフ熊谷、そちも子の有身でないか。野山の猛き獸さへ、子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを辨へて、情に一目見せてたも」と、縋り歎かせ給へ共、直「イヤ實檢に備へぬ中内見は叶はぬ」と、はね退け突退け行く所に、「ヤア熊谷暫し暫し。敦盛の首持參に及ばず、義經是にて見やうずるは」と、一間をさつと押ひらき、立出給ふ御大將、「ハ、、、はつ」と次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に、あきれながらに平伏す。義經席に著給ひ、「ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇を

入相—入るにかく

歌口—笛の吹く穴

ほだし—羈絆

はいやな。覺悟の上も今さらに、胸もせまりて悲しや」と、くどき歎かせ給ふにぞ、御尤とは思へ共、相摸は態と聲はげまし、「イヤ申お局様、御一門殘らず八島の浦へ落行給ふ中に、一人踏とゞまり、討死なされた敦盛様、數萬騎に勝れた高名。但迯のび身を隱し、人の笑ひを受給ふが、おまへの氣では嬉しいか。御未練な御卑怯な」と、いさめに熊谷、「ヲヽでかした〳〵。コリヤ女房、御臺所此所に御座有てはお爲にならぬ、片時も早く何方へも御供せよ。サア〳〵早くいけ〳〵。我も敦盛の御首實檢に供へん。軍次はおらぬか早參れ」と、呼はる聲と諸共に、一間へこそは入相の、鐘は無常の時を打、陣屋陣屋の灯火に、いとゞ悲しさ藤の方、「アヽ思ひ出せばふびんやな。今はの際迄も肌身はなさず持たるは、コレ此青葉の笛、我と我身の石塔を建て貰ふた價にと、渡し置た此笛の、我手に入しも親子の縁。魂魄此世に有ならば、なぜ母にはま見へぬぞ、聞へぬ我子やなつかしの此笛や」と、肌に付身に添へて、盡せぬ思ひやるせなき。相「コレ申其笛がよいおん筐、經だらにより笛の音を、手向るが直に追善。敦盛様のお聲をば、聞と思ふて遊ばせ」と、すゝめに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるふて音をぞすましける。親子の緣の絆にや、障子にうつるかげらふの、姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより、

いざよふ云々―十六才にて小次郎と同年

よろふた―甲冑をつけた

打物二打三打、いでや組んと馬上ながらむんづと組み、兩馬が間にどうど落ち」熊「ヤアヤア何と其若武者を組敷てか」直「されば御顏をよく見奉れば、かね黑々と細眉に、年はいざよふ我子の年ばい。定て二親ましまさん、其歎はいか計、と子を持たる身の思の餘り、上帶取て引立塵打はらひ、早落給へと」相「すゝめさしやんしたか。そんなら討奉るお心ではなかつたの」直「ヲヽ早落給へとすゝむれど、イヤ一旦敵に組しかれ、何面目にながらへん、早首取よ熊谷」熊「ナニ首取といふたかいの。健氣な事をいふたなふ」直「サア其仰にいとゞ猶、涙は胸にせき上し、まつ此通りに我子の小次郎、敵に組れて命や捨ん、あさましきは武士の、ならひと太刀も抜け兼しに、迯去つたる平山が、後の山より聲高く、熊谷こそ敦盛を組敷ながら、助るは二心に極りし、と呼はる聲々。エヽ是非もなや、仰置るゝ事あらば、言傳へ參らせん、と申上れば、御淚をうかめ給ひ、「父は、波濤へ赴き給ひ、心にかゝるは母人の御事、きのふにかはる雲井の空、定なき世の中を、いかゞ過行給ふらん、みらいの迷ひ是一つ、熊谷頼むの御一言。是非に及ばず御首を」と咄す中より藤の局、「ナフ左程母をば思ふなら、經盛殿の詞に付、なぜ都へは身を隱さず、一の谷へは向ひしぞ。健氣によろふた其時は、母も倶々悦んで、すゝめてやりしか

聊爾—粗忽
年はも行ぬ—年も行かぬに同じは字無用と難波土産にあり

夫敦盛の首取たり」と、咄に扨はと驚く相撲、後に聞ゐる御臺所「我子の敵」と有あふ刀、「熊谷やらぬ」と拔所、鐺攫んで、直「ヤア敵呼はり何やつ」と、引寄るを女房取付、「ア、これ〳〵聊爾なされな、あなたは藤の御局樣」と、聞て直實恟し、「ハア思ひがけなき御對面」と、飛退敬ひ奉れば、藤「コリヤ熊谷、軍のならひとは云ひながら、年はも行ぬ若武者を、ようむごたらしう首討たな。サア約束じや相撲、助太刀して夫を討せ。何と〳〵」と刀追取せり付給へば、相「アイあい〳〵」と返事も胸にせまりながら、「エヽ直實殿、敦盛樣は院のお胤としりながら、どふ心得て討しやんした。樣子が有ふ其譯を」と、いふもせつなきうろ〳〵涙、直「ア、おろか〳〵。此度の戰ひ敵と口ざすは安德天皇。夫に隨ふ平家の一門、敦盛は扨置、誰彼と鎬を削るに用捨がならふか。イヤナウ藤の御方、戰場の義は是非なしと、御諦め下さるべし。其日の軍のあらましと、敦盛卿を討たる次第、物語らん」と座を構へ、「扨も去ぬる六日の夜、早東雲と明る比、一二を爭ひ拔がけの、平山熊谷討取れと、切て出たる平家の軍勢、中に一際勝れし緋威、さしもの平山あしらひ兼、濱邊をさして迯出す。ハテ健氣なる若武者や、迯る敵に目なかけそ、熊谷是に扣へたり、返せ戻せ、ヲヽイおいと、扇を持て打招けば、駒の頭を立直し、波の

國元出立の節、陣中へは便も無用と、堅く云付置たるに、詞を背くといひ剰へ、女の身で陣中へ來る事、不屆至極の女め」と、不興の體に相摸はもぢ〳〵、「其お叱を存じながら、どふかかうかと案じるは小次郎が初陣。一里いたら様子がしれうか、五里來たら便があろかと、七里歩み十里歩み、百里餘りの道をつゐ都迄、ホヽヽヲヽしんき。登つて聞けば一の谷とやらで、今合戰の最中と、取々の噂ゆへ、子に引されるは親の因果、御了簡下さりませ。マア此小次郎は息災で居ますか」と、問へば熊谷詞をあらゝげ、「戰場へ赴くからは命はなき物、堅固を尋る未練な性根、若討死したら何とする」相「いゝゑいな、小次郎が初陣に、よき大將と引組で討死でも致したら、嬉しい事でござんしよ」と、夫の心に隨ひし、健氣な詞に顏色直し、直「ホヽ先小次郎の手柄といふは、平山の武者所と爭ひ、拔がけの高名、軍門にかけ入ての働、手疵少々負ふたれ共、末代迄家の譽」相「エヽして其手疵は、急所ではござりませぬか」直「ソレまだ手疵を悔む顏付、若急所なら悲しいか」相「イヤ何のいな、かすり疵でも負程の働は、出かしたと思ふて嬉しさの餘りお尋。其時お前も小次郎と、一所にお出さなれたか」直「ホウ危しと見るより軍門にかけ入、小次郎をむりに引立小脇にひんだき、我陣屋へ連歸り、某は其軍の搦手の大將、無官の太

五りん云々―當時の石塔は地水火風空の五輪に重ねたるもの夫を錢五厘一厘にかく

そんしやうぼだい―損にかく頓生菩提をもぢる

願以此功德云々―讀經の終りに讀む文句なれば話の終りにきかす

三ッ鐵輪―一人を謡にとつて三人にて論じ定むる（俚言集覽）

わつて流し込」と、おどしかけても正直一遍、軍「テモ扨も御無理な御詮議。先程も申た通り、石塔の誂人は敦盛の幽靈。五りんの事は扨置、一りんも手附はとらず、建ると其儘石塔の喰逃。せめて人魂でも手附に受たら、小挑燈の代りに致ませうに、冥土へ書出しはやられず、本の是がそんしやうぼだい。有やうの申上、願以此功德施一切、此通りでござりまする」と取しめなき。「アヽ、何おつしやつても糠に釘」と、軍次が詞に平次は悪智惠、「大かた石塔を建させたわろも合點〳〵。熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議。先そやつめを引立來れ」と、一間へ入ば家來共、石屋の親父をむりやりに、引立奥へ連て行。相摸は障子押ひらき、日も早西に傾きしに、夫の歸りの遲さよと、待間程なく熊谷の次郎直實、花の盛の敦盛を、討て無常を悟りしか、遉に猛き武士も、物の哀を今ぞしる、思ひを胸に立歸り、妻の相摸を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆になり、「先達て平次景高殿、何か詮議の筋有とて、御影の石屋を引連御出有、奥の一間に御待ち」と委細を述れば、直「ムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一獻を催し、梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ〳〵。ハテ扨何を猶豫する」と、叱りちらされ是非なくも、相摸に顔を見合して、心を殘し入にけり。跡見送りて熊谷は、「コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た。

なまくら親父ー
鈍物の親父

不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自が申なだめ御所の御門を、夜の内に落してやつたを覺へてか」相「アツア其時の御恩、何の忘れませうぞいな」藤「ム、其恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を、自に討してたも」相「エ、イそりや又何のお恨で」藤「サア最前も咄した、院の御所のお胤、無官の太夫敦盛を、そちが夫熊谷が討たはいの」相「エ、そりやまあ誠でござりますか」藤「スリヤそなたは何にもしらぬか」相「サアはる〴〵と東より、今來て今の物語、聞いてとむねの誠しからず、追付夫が歸り次第、樣子を尋る其間、暫くお扣へ下され」と、詞を盡し理を盡し、なだむる折に表より、「梶原平次景高、所用有て推參」と呼はる聲。相「ヤア何梶原とや。見付られては御身の大事。先々こちへ」と御臺の手を取、一間へ伴ふ其中に、堤の軍次立出、「今日は主人直實 志有て廟參。御用あらば某に仰置れ下され」と、地に鼻付れば平次景高、「何熊谷殿は他行とな。ソレ家來共、其石屋の親父め引立來れ」「はつ」と答へて科もなき、白毫のみだ六を、平次が前に引居ゆれば、景「ヤイなまくら親父め。己何者に頼れ、敦盛が石塔は建てたやい。平家は殘らず西海へほつくだし、詠ゆべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が、頼みしに違ひは有まい。サア眞直に白狀ひろげ。僞ると鉛の熱湯、脊骨を

時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴染、御所を抜出東へ下り、お前樣のお身の上を承れば、御懷胎のお身ながら平家の御家門、參議經盛樣方へ緣づき給ふとの噂、其折は世盛の平家、御威勢はます／＼と、かげながら悦びましたに、此度源平のたゝかひ、御一門もちり／＼と聞に付、アヽ此藤の方樣は何となされたどふ遊ばした、と一人苦にしておりましたに、マア御機嫌なお顏を見て、おめでたやお嬉しや」藤「ヲヽそなたも無事で、マア嬉い。懷胎で出やつた時の子は、姬ごぜか男か。息災で育て居るか」と、ちよつと寄ても女同士、問ふつとはれつ年月に、つもる言の葉くりかへし、嬉淚の種ぞかし。藤の方淚ぐみ、「世の盛衰はぜひもなや。其時に產落したは、無官の太夫敦盛迚、器量發明揃ふた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ殘るうきなんぎ。淺ましの身の上」とかこち給へば、相「お道理／＼。以前の御恩も有、連合にも語り、お身の片付後世の營、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申て、北面同然の武士、只今にては武藏國の住人、しの黨の旗頭、熊谷の次郎直實と人もしつた侍」と、聞より御臺は、「ヤアそなたの連合の佐竹の次郎、今では熊谷の次郎といふか」相「アイ」藤「すりや あの熊谷次郎はそなたの夫よな。「ハアはつ」と吐胸の氣をしづめ、「何と相摸、以前大内にて

けはしき—事急なる

甲「扨も咲たり〳〵。花より見事な此制札、辨慶殿の筆じやげな。さても見事一つも讀ぬ」乙「ヲヽあれはの、義經樣が此花を惜み、一枝きらば指一本切べしとの法度書」丙「ヤア花のかはりに指きろとは首切下地。ヲヽこはや、見てゐる中も虎の尾を踏心地する皆ござれ」と、花に嵐の臆病風、ちり〴〵にこそ別れ行。はる〴〵と尋て爰へ熊谷が、妻の相摸は子を思ひ夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰やかしこと尋しが、幕に覺えの家の紋、嬉しや爰と内に入。折節家の子堤の軍次立出て、「是は〳〵奥樣か」相「ヲヽ軍次そなたも息災そふな。マアめでたい〳〵。熊谷殿や小次郎もかはる事はないかの。早う逢たい逢せてたも」軍「ハア旦那は今日御廟參、小次郎樣は先比より御前勤て御下りなし。マア〳〵長の御旅路、お勞をお休め」と、挨拶とり〴〵なる所へ、敦盛卿の御母藤の局、虎口の難の遁れきて、こけつ轉びつ花のかげ、陣屋をめがけ走付き、「跡より追手のかゝる者、かげを隱して給はれ」と、けはしき體に驚きて、相摸は傍へ走寄、見るに見かはす互の顏、相「ヤアお前は藤のお局樣ではないか」藤「さういやるそなたは相摸じやないか。テモ久しやなつかしや」相「お床し樣や」と手を取て、「マアこなたへ」と伴ひ入、したしき體に心をきかし、軍次は勝手へ入にけり。相摸はやがて手をつかへ、「誠に一昔は夢と申が、大内に御座遊ばす

とれいもよ—とれよ
よんでした—數へて鬮を拵へた

かろ。ヲヽそりやいやおういはさぬやう、此庄屋がしてくる」と、手早に繩切後でもちやくちやひん握り、「コリヤ結んだのを取た者がいくのじやぞ。サアとれいもよ」「チツト市かゝどれとりやる」「西國廻つて是々」と、てんでに繩先引ぱれば、孫「ハア、あたま數よんでしたが、コリヤ一筋餘つたは」百「ハテそりや親の繩じや。庄屋殿とらしやれ」孫「ほんにそふじやおれがとろ。サアひけ〳〵かたはしからいなしてくりよ」「ヤすつとせいせい」孫「ハア悲しや結んだのはおれじや有た」百「サア庄屋殿いかしやれ〳〵」孫「イヤ待よ、おりやいかふ筈がない。此場の樣子を知てゐるわいらが云譯する筈じや」百「デモ鬮が當つた物」孫「そんなら最一度」百「イヤ仕直しはならぬ〳〵。むりいはずといかしやれ」と、寄てかゝつて引立押立、ヨイヤサツサ 孫「是はめいわく」ヨイヤサツサ「待つてくれんか」ヨイヤサツサ「了簡ならぬか」ヨイヤサツサ「あんまりどうよく」ヨイヤサツサおつ立ひつ立、ヨイヤサツサ、てヨイヤサツサ、こゝヨイヤサツサそ。三重行空も、いつかはさゑん須磨の月、平家は八島の浪にたゞよひ、源氏は花の盛を見る。中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構、要害嚴しき逆茂木の、中に若木の花盛、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし。花おらせじとの制札を、讀んで行人讀ぬ人、一つ所に立集り、

ちよびくさ―つべこべ

聞やれ。今梶原様の郎等番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し、家來運平を殺したる由につくいやつ、残らず引立來るべしと、嚴しい云付。アヽひよんな事しておらに迄、厄介をかける。遲なはつたら猶こはい。サア〳〵おじや」といふに皆々尻込の、中にみだ六すゝみ寄、「殺したと聞しやつたは大きな間ちがひ、ありや目がまふて死だじや。其證據にはソレ死骸に一つも疵がない」丹兵「ムウ夫が定ならおらも嬉しい。ドレ〳〵」とからだをあらため、「ほんにどこにも疵はない、こりやあつちのが大きな麁相。ハテそち達が殺さぬからは、何のこはい事はない。此中でよう物いふ者たつた一人いて、さつぱりと云譯すりや濟事じや」彌陀「ほんにそふじや。ハア誰がよかろなア」百「いやこれ年の功じや、みだ六いかしやれ」彌陀「イヤいく分はかまはぬが、おりや口くせの念佛が邪魔に成てどふもならぬ」丹兵「そんなら此庄屋が指圖せう。日比ちよびくさようしやべる、雀の忠吉やらふかい」忠「イヤわしやあんまり口早で、何のこつちや譯が知まい」丹兵「扨はびしやの九太衞門かい」九「おりや聲が鼻へ入ぞ」丹兵「というて丹兵衞は咽がごろつく、與次郎は齒ぬけ也、指詰又平おいきやれ」又「イヽいやコヽこちやドヽどもりますはいの」丹兵「ハテ扨其様に讓合ては埒が明ぬ。幸ひ爰に石を運だ繩が有、是で鬮取したらよ

そつ首—素首

尻がむづかし—後は面倒になる

濱邊をさしてかけり行。跡打ながめ彌「サア樂じや。此間に早ふ」と御臺を出し、「コリヤ
コリヤ娘、あなた一人は覺束ない、寺迄送つて內へいね。ちやつと〳〵」といふ所へ、思
ひがけなき木影より、須股運平飛で出、「ヤア〳〵どこへ〳〵。かう有ふと推量し、忠太
が我を殘し置れた。サヽ早う御臺を渡せ。邪魔ひろぐとかたつぱし、そつ首ころり打落
す。何と〳〵」と罵れば、百姓共せゝら笑ひ、「コリヤやい、そつ首のそつくいのと、
わいらがうでの動く間に、うつかりとして居よふかい。サア相手仕事じや手早にこい」
と、てん手に鋤鍬大熊手、打てかゝれば運平始め、數多の家來も一同に、拔連〳〵渡り
合ふ。打あふ隙にみだ六が、「ソレ御臺樣迯た〳〵。娘も迯よ」とあせる中、元來達者の
百姓共、腕先揃へてからざを打、かたはし家來を打なぐり、運平を追取まき、投たり
ふんだりけとばしたり、寄てかゝつて打たゝく。急所にや當りけん、うんとのつけに反返
れば、「ソリヤ死だは」と迯行家來。又追かくるをみだ六が、「コレ〳〵待た」と呼かへし、
「御臺の難義を救ふ爲、ほつちらす計でよいに、アヽ死だりや尻がむづかしい。コリヤま
あどふした物であろ」「どふといふたら迯たがよい。サア皆ござれ」といふ所へ、かけつ
てくる庄屋の孫作、死骸見付て、「扨こそ〳〵、一人もちらす事ならぬぞや。コレ皆よう

れば、こなたに石塔誂へたお若衆とひとつじやないか」彌「いかにも」亘「サ其死だ人が來そふな物じやないぞや」彌「いかにも」亘「ハヽア聞へた。さつきに爰迄連立つてきて、あのよ物のいふ中かきけす樣に見へなんだは、扨は幽靈で有たよな」と、いへば皆々興さめ顏。御臺は猶も悲しさの、思ひいやます御歎。小雪も始終を聞に付、「はかない事や」と計にて、倶に袂をしぼりける。折ふし遙の松かげより、むら〳〵鳥の羽うつがごとく、かけくる大勢みだ六が、「あれこそ慥に追手の者。先々あなたを隱すに幸、此石塔の後へ」と、御臺の手を取忍ばせて、彌「何と思やるいづれも。追手のやつらが此所をすなほに通ればあなたの仕合、若も何かといぢばらば、是迄平家の領地に住だ御恩の爲、一働せうじやないか」亘「ヲヽサてん手に鋤鍬の、むね打くらはせほいまくろ」と、いふ間もあらせず砂煙、蹴立踏立かけくるは、梶原が郎等番場の忠太、須股運平先として、數多引連つよと寄り、「コリヤ〳〵百姓共、三十餘の女一人、此所へきたで有ふ。どつちへ迯たそれぬかせ」彌「ハイ成程〳〵、其女はアレあの道を横切に、濱邊傳ひに走つたが、アアもふ二三里も行ませう。追手の衆なら一足も早ふござれ」とせかすれば、忠「扨こそ遁すな皆こい」と、かけ出すふりにて立留り、運平が耳に口、しめし合せてこかげに殘し、

ぬかれた—騙られた

いぢらしい—可愛らし

むごたらしいめにあふた」と、悔にかいもあら笑止や、みだ六がぬかれた、と傳へて諸事の誂物、手付を取るといふ事は、此時よりと知られたり。時しも跡の松原より、足早にくる女は、何者なるといふ中に、走り近付藤の局、「コレ〳〵ちよつと物とはふ。船寺はどつちじやの。敎てたも」と有ければ、彌「ハア丶夫は是からちよつと程遠いが、見れば賤しうない女中の、たつた一人かちはだしで何故寺を尋さつしやる」藤「さればわらはは樣子有て、跡より追手のかゝる者。しばらくかげを隱さん爲」と宣ふ中に目早くも、娘が持たる袋を見付、「なふそれちよつと見せてたべ」と、手に取給へば紛ひなき青葉の一管。「ヤア是は我子の敦盛が、肌身はなさぬ祕藏の笛。どふしてこなたの手に有」と聞て親子も不審顏。百姓共口々に、「其敦盛といふ人は、此間の戰ひに、源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝり、死しやつたじやないかい。ナア與次郎」與「ヲ丶其時にいぢらしい、玉折とやらいふ内裏上臈も殺されて居たげな」と、聞て御臺は、「ヤア〳〵何敦盛は討れしとや。福原の館にて母樣御無事でおさらばと、玉折諸共いさぎよう、いうたが此世の暇乞、長い別れに成たか」と、有し事共くどき立、人目も恥ぬさけび泣、前後ふかくに見へにける。百「イヤこれ親父殿、合點のいかぬ事が有。死しやつた敦盛樣があの笛の主な

よめた―判つた

さもしい―卑しい

あたまで―初手から

ざります」耳「イヤこれ親父殿、お若衆の施主人のと、人もないにそりや何いはしやる」親「何とはわいら目がさめぬな」耳「アレまたどこに人がゐるぞいの」親「ハテこれ爰に。ハアほんに見へぬは。ハレ面妖な。たつた今迄爰にで有たが、ハアどつちへござつたな。お若衆様〳〵」と、よべば倶々百姓共、爰かそこかと尋る所へ、娘の小雪がかちはだし、息もすた〳〵走り付、「お若衆様にたつた一言、いひたい事が有てきた。ちよつと逢して下さんせ」親「イヤ逢して所じやない、影も形も見へぬはい」耳「コレ親父殿、お若衆がゐやらねば、忽こなたの損じやぞや。所を知てか、但先銀でも取て置しやつたか」親「いやてや。仁體が能から所も問ず一錢も受取なんだ。ハア夫でよめた。石塔をかこ付に、何ぞせしめる下工、扨は衒に極つた。遠くはうせまいぼつかけん。サア皆こい〳〵」と立さわげば。小「イヤこれ〳〵待しやんせ。よもやそんなさもしい心なお方では有まい。其證據はわしにやるとて、コレ此笛を」親「貰ふたのか。ハアどれ〳〵、こりやまあ袋が結構な赤金襴じや。扨笛は生竹でもないが、節からちつくり枝葉が有。いか樣是を錢にせうなら百が物は有ふかい」耳「ナウ親父殿、ハテ扨何の錢にならふ。夫も娘が一ぱいくたのじや」親「エヽこんな事ならあたまで半銀取て置いたら、まんざらの損もせまいに。あた

五百崎—云はうにかく。
忉利天—三十三天の一にて通りにかく
ちつくり云々—笠石が少し曲つて居る
希有な—をかしな
三悪道—餓鬼、畜生、地獄

かなたと五百崎に、つゞく藪池村里も、急いで忉利天上寺、摩耶のお山を右手に見て、行道筋も直ならぬ、脇の濱邊や磯傳ひ、神戸も跡に湊川、流るゝ水の淀ならば、爰も繼橋かけ渡す、舟を守りの神垣や、森もしげみて置露の、垂水の里も早過て、行ば程なく上野山、一の谷にぞ著けるが、しのゝめ近き横雲の、たなびく空も青々と、枝葉しげりし松かげに、つゝくり立た御影石、遠目にそれとみだ六が、走寄て「是じや〳〵。先達て遣はされた所書に合せ、若者等に云付たりや、建はたてたがちつくり笠にふりがある」と、抑直してためつすがめつ、「サア恰好見て下さりませ。何とようござりませうがや、是からくるひのない様に、𦢌を合すは漆喰」と、懐より蓋物取出し、重の際々塗所へ、山畑かせぐ百姓共、鋤鍬かたげどや〳〵と通りかゝつて、「ホウ石屋の親父殿か」彌「おいやいこりや皆とうから精が出るな」甲「イヤこちとらよりこなたがとうからあぢな所へ石塔を建さしやつたの」乙「ハテあの人は商賣じやによつて、どこで有ふが持運んで、建ねばならぬが、誂手が希有なやつじやの」彌「アヽこれ〳〵むざと麁相言まい。其施主人が爰にござるぞ。ナアお若衆樣、我も人も亡者の爲、卒都婆一枚立ても三悪道を遁るゝといふ、まして大そうな此石塔を、お建なさるは御奇特なお若衆樣。結構なお志でご

ゑいにーよいに
爰やあそこー間近き所
かんまへてー注意して

いらしたか」岩「アイ」彌「なむあみだ〳〵」岩「ヲヽ旦那様とした事が悪い聞やう。此門口にござつたを内へはいらしなされたといふこつちやはいな」彌「ハテさうしつかりいへばゑいに。どうやら紛はしかつたで、はつと思ふた。どりやお目にかゝろか」とずつと通つて「是は〳〵、嘸お待遠にござりましよ。扨お誂の石塔、今日の約束なりや、夜を日に次いで漸出來し、今朝から若い者等に運ばせたが、大かた建たでござりましよ」者「それは嬉しや、いかゐ世話でござつた」彌「イヤ世話は家業じやがお氣に入たらこちも仕合。マア御らふじて下さりませ」者「成程々々同道して參りたい」彌「そんならお供致しましよ」と、立て用意を取急げば、小「コレ〳〵とゝ様、わしも一所に行たいはいな」彌「そりや何で」小「ハテ石塔の恰好見に」彌「ハテわけもない、何のわれが見る事ぞ。爰やあそこの所じやなし、殊に夜道じや。あほういはずと背戸門しめてよう留守せい。コリヤお岩、そちも傍から隨分氣を付、誰がこふ共かんまへてついはいらすなよ、合點か。サア〳〵お出」と打連立、急ぎてこそは出て行。月もさやけき夜もすがら、四方の景色もすみのぼる、光りを掩ふ雲ならで、雀のやどりかげくらき、松の林に風あれて、汀の波のおのづから音もはげしく打寄せて、高根にひゞく山彦は、とう〳〵さつと布引の、瀧のしら糸たへずと人の、とへば

逢は別れの始—諺
ひよんな事—とんでもない事
いとしぼい—いとほしの轉
うぢかは—ぐづぐづ

ながら、逢は別れの始といふ譬に洩ぬ我身の上。頼置たる石塔が今にも成就してあらば、再び此家へ來らぬ故、逢見る事も叶ふまじ。只儘ならぬは世のならひ、はかなき物は人の身の、一生は皆夢と思へばさのみ迷ひも有まじ。去ながら今を限りの別れといへば、誰しも名殘惜い物、若も戀しき折からは、心のいさめ共ならん。いで〱筐に參らせん」と、錦の袋押ひらき、青葉さかへし笛竹を、渡す心もあぢきなく、戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく、「ひよんな事じや」といふより外、詞も涙にくれゐたる。折から道々口くせになむあみだ、なむあみだ六逮夜よりいきせき戻り門の戸を、「明い〱」と打たゝけば、「あい」と奥から返事してお岩がかけ出、「旦那樣のお歸りそふな。コレ小雪樣、折角戀になされたあなたを、此儘で思ひ切おまへの心が、いかにしてもいとしぼい。せめてもの心ゆかし、此間にちやつと抱付なされ」と、むりに押やり庭におり戸口を明、「ホウ旦那樣早かつた」彌「何の早かろ。百萬べん〱だら〱と跡の咄しで途方もなふ夜が更けた。アなむあみだ〱。ヤお若衆はござつたか」岩「サア其お方は」彌「どふじや〱」岩「サさつきに見へたけれど、恥しかつたか門口でうぢかは〱はいりにくそふにしてど有たを、もどかしがつて娘御がつゐはいらしなされたはいな」彌「ヤ、何じや、娘がもうは

うぢかは云々ーうぢ〳〵ともどかしい

めんようー不思議

理々。したがコレ小雪様、うろ付てござる所じやない。ちやつといて敎た通り、何かなしにあたまから抱付いて、こけたが益いぞや。夫も上へならぬやう、下から随分あしらひなされ。アレまだうぢかはもどかしや。サア〳〵早ふ」とむりやりに、押やり突やり跡ぴつしやり。「ア丶世話やの。どふやらこふやら首尾なつた。是から休もと儘なれど、たつた一重の壁ごしに、隣の餅搗聞やうで、寝られそむないよさりじや」と、いひつゝ勝手へ入跡へ、小雪は立出興さめ顔。「テモめんようなお若衆様、慥に奥へいかしやんしたが、かいくれ姿が見へぬはどふじや。ふしぎ〳〵」とうろ〳〵きよろ〳〵尋る内、こなたの障子さつと開、耆「イヤ爰に居ますはいの」小「是はしたり意路の悪い。いつの間に抜けなさつた。人の思ふ様にもない、心づよいお方じや」と、云つゝ傍へ指寄れば、飛しさつて、「ア丶これ〳〵、始終の様子を見聞に付、優しき人の志、嬉しいとは云ながら、我身は深き様子有て、假にも妹脊のかたらひをなす事叶はず。縁なき事は前生の約束ならめと諦めて、思ひ切て下され」と、いふも道に氣の毒の、打しほれたる其風情。小雪ははつと力を落し、「譬様子が有迚も、是程に思ひ詰め心を盡すかひもなく、情なふもふり捨ていやとおつしやりや生ては居ぬ。むごい難面お心」と恨歎けば、耆「いやとよ恨は去事

はぢ楓—恥と楓にかく

れてこそは入に 半太夫 けれ。既に其夜も丑滿の、風しん〳〵と更渡り、いと物すごき時しもあれ、ねとりの聲の哀れげに、ほの聞ゆればいとゞ猶、心ぼそさといぶかしさ。小雪は部屋を立出て、灯火かゝげ窺へば、門の戸ほと〳〵打たゝき、「頼ませふ〳〵」といふ聲は、まがふ方なきお若衆様。ヤレ嬉しやと飛んでおり、戸口を明けて、「ようこそお出。サア〳〵こちへ」と伴ふて、下に居る間も胸せかれ、顔は上氣のはぢ楓、指俯てもじ〳〵と、挨拶も出ぬ其内に、お岩が聞付走出、「是は〳〵お若衆様、今日お出の約束故、只今迄待ましたが、なぜ更けてお出なされた」若「されば手前は少樣子有て、人目を忍ぶ者なれば、晝は勿論夜とても密な時刻を心がけ、態只今參りしが、先達て誂へ置た石塔が出來ましたら、彼地へ建て貰ひたさ。先御亭主に逢ましたい」小「イヤとゝ樣は只今留守でござりますが、おまへがお出なされたら、待せまして置樣にとナフお岩」岩「アイ申付て出られました。歸られます迄名代は、此娘御。お咄の相手にしてうつゝ答つやつつ返しつ、とかくお心安うして進ぜて下さりませ。サア〳〵奥へ」とすゝむれば、若「然らば左樣致さん」と、何の心もつる立て、一間へ通る後かげ、見送るお岩が手を打て、「テモ扨も能器量。あの樣なお若衆は、日本國を尋ても今一人と有まい。惚さしやんすも道

なら茶―茶飯の事

しよざい佛法云云―佛法より何より食ふ事が肝腎といふ諺、しよざいは所帯の訛り

る迄待して置け」男「サア／＼ござれ、ちやつと念佛かき込で、夜食を申そじや有まいか」[illegible]「ヲイ／＼佛も百味のおんじき、こちもなら茶の御食せう」しよざい佛法腹念佛、門念佛を口々に、打連てこそ急行。跡へ下人の彦介が、枴の先にぶら／＼と細縄引かけ立歸り、「ヤレ／＼しんどや。お岩殿肩も腕もめり／＼いふは」岩「ヲヽ道理／＼嘸草臥。そして石塔は建ましたか」岩「イヤまだ建はせぬが、おりや内に用があると思ふて先へ戻つたが、旦那殿は奥にか」彦「イヤ／＼同行中に百万遍が有て參らしやつたはいの」彦「ホウそんなら幸、此間小雪樣が病氣じやとて引込んでござるは、彼石塔を誂さしやつたお若衆に、戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入ぬ内異見せうじや有まいか」岩「イヤそりやわしも如在はない。此間からいろ／＼といふてもいかな／＼。此戀が叶はねば、井戸へ身を投るの、首しめて死るのと、こはい事計いうてじや」彦「ホウそりやいやなこつちやの。ハアそんならかうしや。たつた一度で思ひ切しやれと、とつくりと合點さして、いつそ逢はそぢや有まいか」岩「ハテもふせう事がない。幸今夜お若衆が見へる筈じやが、其間に旦那が」彦「アヽ何のいの、百万遍ならちやつとじや有まい。マア娘御に其譯いふて工面さつしやれ。おりや寐所で彼時分、獨角力を取ましよ」と、言つゝ勝手と奥の間へ、別

人の心を種として萬の言の葉とぞなりにけるとあり

なづみて―進みかねて

世にあらば云々―下の句御影の松よ面がはりすな(續古今集)

白毫―佛の眉間にある相にいひかく

なむあみだ―無しにかく

かざす、流の枝の短册は、世々に譽を殘す種、歎の種の離れ際、いさめを種と隔つれど、はてし涙の悲しみを、倶になづみて耳をたれ、いなよく聲も哀そふ、駒の足取り諸手綱、引わかれ行曉の、空も名殘や惜むらん。

第三

歌 世にあらば、又かへりこん津の國の、御影の松と詠置し、一木と倶に年を經し、額の黑痣口くせに、佛の御名を唱をれば、白毫の彌陀六と、人にしられし石屋有。實に交りも信心の同氣同行相求め、朝暮勤る看經の、責念佛の終には、諸國諸山に建置し石塔に有戒名の、數も限りもなむあみだ、願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり。日暮紛れに門口へ連立てくる石屋共、「親父殿内にか」といふ聲聞てずつと立出、彌「ホウ同行衆ようござつた。けふは大分忙しさに仕事の形で直に看經。たつた今仕廻た。サ、あがらしやれ。なむあみだ〳〵」朋「イヤこれ彌陀六殿、今夜は珠數くりの數右衞門が逮夜、百万遍中によつて誘に來ました」彌「ほんにそふじや、どりや參りましよ。コリヤお岩まだ彦介は戻らぬか。ソレ娘が起たら藥あたゝめて飮せ。若石塔を誂さしやつたお若衆が見へたら、戻

おんでもない事—勿論の事

心の種云々—古今集序に倭歌は

魂にてつして今さら返す詞もなし。惜からぬ命なれ共、明なば陣所へ立歸り、はなぐ〵敷軍をせん」㊂其時望は御邊が首、忠度卿は我討取」㊂「必討れよ」㊂「おんでもない事。アレ〳〵八聲の鷄もなく、明る間近しと申せ共、路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ソレ〳〵用意の馬引」と、飾立たるくろの駒御前に指よする。辭するに及ばず忠度卿、立髮摑んでゆらりとめせば、一間の内より菊の前、「コレなふしばし」とかけ出給ふを、林は押とめ立身で隱せば、岡部の六彌太、夫と悟つて忠度の、脱懸給ひし上著の袖、刀を拔いてふつゝと切、「コレ〳〵乳母」といふに恟り。㊂「ハテ扨ふしぎな顏せまい。總じて老女は嫗といひ、又姥共よぶ。今宵忠度卿の、お宿を申せし御はうびに是を遣はす。それ共若々敷錦のかた袖、年寄が貰うて益なしと思はゞ、外にほしがる方も有べし。是も其人の形見と思へ共、猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心、其方が耳に、ソレきくの前よく心得てお受申せ」と指出せば、「コハ冥加なき仕合」と、いたゞく右のかた袖は、右の腕を落かたの、軍に討死し給ひし、後の哀としられたる。思ひの種や涙の種、仁義を種の六彌太が、東雲近し急がんと先にすゝんで立か弓、いはぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顏に、見送る姿ふり返る、心の種の詠歌も昔ながらの山櫻、散行身にも指

盛なる時は云々
ー先んずれば人
を制し後るゝ時
は人に制せらる
の句をとる

しは義經の嚴命。其子細は、先達て俊成卿へお頼有し御詠歌の内、さゞ波や、しがの都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな、右の御歌千載集に入しかど、勅勘有御身なれば、名は憚りて讀人しらずと成し趣。則集に入たる印、此短册御覧に入よと」山櫻の流枝に、結び付たる以前の短册、うや〳〵敷指出せば、忠度につこと打笑給ひ、「我詠歌を我筆の、願ひも仇花ならぬ印、御芳志の山櫻。ハア丶忝し」と押いたゞき、「敵味方と隔つれば打捨置るべかつしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて、歌人の數に加はり、和歌の譽を殘す事、生涯の本望、死ても忘れぬ悅びぞや。迚も遁れぬ身の不運、死すべき時に死なざれば、死に勝る恥有と、名もなき愚人の手にかゝり、見ぐるしきさいごもせんかと、後悔せし折に幸、武勇の聞へ隱れなき、六彌太に生捕れば、忠度が恥辱はあらじ。サアよつて繩かけられよ」と、御手を廻し待給へば、岡「コハ心得ぬ御仰。某君の討手には參らず。敵味方の勝負は戰場。其時は兩家のはれ業容赦はないぞ。互に時の運に任せん。但梶原がごときよわみを見かけ、ぬけがけして手がらにせんと、思ふ樣な六彌太と思召るゝか。ハ丶丶はつ」とあざ笑へば、忠度卿理にふくし、「實々是は誤つたり。盛なる時は制し、衰ふる時は制せらるゝ理。いかなれば義經といひ汝迄、誠有一言。心

ざましかりける 三重 次第也。勇力無双の働に、さしもの景高氣おくれし、逸足出せば雑兵共、叶はじ物と夕波の、立足もなく我先に、むら〳〵ばつと逃失けり。相手なければ忠度卿、息を休る其中も、油斷ならざる埴生のやどり、いかゞしてふせがんと、心をくばる時しもあれ、又もよせくる 鬨 貝鉦 鼓責太鼓、手に取如く聞ゆれば、忠度はつと心付、「扨こそ景高、大軍を催し重て向ふと覺へたり。戰場ならば敵の勢、何萬騎にてかこむ共打破りかけなやませ、譽を顯はし見せんず物。軍中に引かへし願ふ詠歌も腰おれの、望も叶はず剰へ、さしも名高き忠度が、斯あばらやに身を忍び、敵にかこまれやみ〳〵と、生捕れんは後代迄、屍の恥辱名の穢れ。口惜や淺間しや」と、拳を握り歯噛をなし、怒の涙てる月に、雹をふらすが如くにて、いたはしくも又道理なり。透もあらせず表の方、寄くる軍兵むら立挑燈、天地をてらし亂れ入よと見る所に、さはなくして討手の大將、かけゐほしに花田の大紋さはやかに、長袴のくゝりなとき、悠々然と立向ひ、「武藏國の住人岡部の六彌太忠澄、忠度卿に見參」と、しづ〳〵と打通り、傍近く謹で、「此度源平兩家の軍は、私ならぬ院宣を蒙り、範頼義經罷向へば、兩陣互にはれ勝負。潔き軍はせずして、拔がけせし景高が卑怯の振舞、聞に忍びず此六彌太が參り

あやどり―糸を指に纏ひさま

いのふ。アゝうとましいお子では有」と、詞を盡して倶々に、いさめすかせどいやおふの、答も涙中々にはなれがたなきふぜいなり。折節風に誘はれて、間近く聞ゆる鯨波、耳を突抜く鉦太鼓、亂調に打立々々、どつとかけくる討手の大將、眞先に大音上、「平家の落人薩摩守忠度、此家に忍びおはする由、注進有て慥に聞。召捕ん爲梶原平次景高が向ふたり。譬鬼神なればとて、八方を取かこめば、迚も遁れぬ。尋常に繩かゝられよ。異議に及ばゝふん込で搦とる。いかに／＼」と呼はつたり。人々扨は茂次兵衛が、注進せしかと驚けば、忠度ちつ共動じ給はず、二人を奥へ忍ばせて、太刀おつ取てつゝ立上り、「ヤアおこがましや景高。源平互に鎬を削り刃をあらそふ戰場には向はず、我一人に多勢を以て取かこむ卑怯者。汝ごときにやみ／＼と繩かゝる忠度ならず。いでや手並を見せんず」と、太刀抜放し身繕ひ。景高いらつて「ソレふんごめ」下知に從ふ雜兵共、門の戸蹴破り一同に、かけ入／＼かけ向ふ、多勢を屈せぬ早業に、眞向立わり車切、四方八方はつし／＼、なぎ立給へば雜人ばら、皆我一に跡ずさり。忠度いかりの御聲にて、「うぬらごときに刃物はいらず」と、大手をひろげ待給ふ。手並にこりぬ雜兵共、一人がかりは叶はじと、大勢一度にどつと寄。引摑では人礫、あやどりなんどを見るごとく、め

十が九つ味方の敗軍。某も討死と覺悟極めし事なれば、いつを期してか添果てん、思ひ切て歸られよと、いへ共中々聞入ず、陣所へ伴ひ行んと有。時には忠度女に迷ひ陣中迄倶したりと、世の人口にかゝるといひ、死後迄緣を切ざれば、俊成卿の御身の上、平家にしたしき咎を受、つひには源氏の仇と成て、亡び給はん悲しさに、態と難面いひ放し、暇をやりしは忠度が、師の厚恩を報ぜん爲、恨と思ひ給ふなよ。とはいへもしも運に叶ひ、軍に勝ばながらへて、二度逢んも計がたし。夫を頼に行末の、契を樂しみ待給へ」と、口にはいさめ心には、是今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇にはり詰し、弓弦の切し心地にて、ゐるもゐられぬ座をそむけ、脇目に餘る御涙つゝみ兼させ給ふにぞ、夫と悟りて菊の前、「イヤ／＼何ぼ其樣に、ふたゝび逢ふの添れるのと、潔うおつしやつても、誠しからぬ身の覺悟。討死としりながら何と見捨ていなれふぞ。いづく迄もお倶して、生る共死ぬる共、一所でなけりやわしやいや／＼。むごいつれないお心」と、縋り付て泣給へば、林も心根思ひやり倶に袂をしぼりしが、態といさめの聲はげまし、「今の程事を分け、利害を說いて云ひなさるに、達てお供とおつしやれば、親御樣へは不孝といひ、殿御の爲には猶ならぬ。いかに姫ごぜなればとて、其辨へがないか

くつ入云々―老病と見えて
とつかは―急忙

ありそ海―有礒海にて有りにかく

菊「イヤモ手じやくでたべつおさへつ、銚子切引かけたりや、くつ入かしてぐつたりと寢てのけた。内に大分用が有。いかゐ馳走。其内きましよ」と言捨て、とつかは急ぎ立歸る。時しも一間さはがしく、何の様子か菊の前、襖をあけの裾けはらし、かけ出給へば林は驚き「コレ〳〵申」と引とゞめ、「何事がおこつたか氣色をかへてとつかはと、お前はどこへござります。様子おつしやれ。どふじや〳〵」姫「サア其様子はの、忠度様がどうよくな、わしに暇をやるといの」林「ムヽそんならお前のお腹立は尤じやが、高いも低いも夫が女房に暇をやるは、よく〳〵了簡ならぬ筋か。其譯を立なされにや、コレ科ないお前に瑕が付ぞへ。マアとつくりと氣をしづめ、思案して御らふじませ」姫「イヤ思案迄もない、其譯は立て有ど、互に思ひ初しより、夫よ妻よと云かはし、一生添ふと思うた物。縁切れてはかた時も、何とながらへ居られうぞ。恨つらみもありそ海一思ひに身をしづめ、底のもくずとなる覺悟、とめずと殺してたもいのふ。死る〳〵」と計にて、跡は詞も涙なる。「イヤ〳〵何ぼそふおつしやつても、乳母はどふも合點がいかぬ。是には定めて深い樣子が」忠「ホウ其子細は忠度が、とくと申聞せん」と、しづ〳〵と立出給ひ、「天の憎む所、天必誅罰すと。入道の不善一門の積惡によつて、かく迄傾く平家の運。此度の戰ひも、

おもはゆく―恥かしく
ひらく―眉と襖にかけていふ
まじくら―交りに

る一つ家の、門の戸けはしく打たゝき、「明けて〳〵」と宣へば、林は聞付、「誰じや〳〵」菊「イヤ大事ない者じや」林「大事ない者とは」菊「ハテわしじや、菊の前じやはいの」林「ヤアお姫様とは心得ぬ」と、庭にかけおり戸を明けて、「ほんにそふじや。まあ〳〵お入遊ばせ、といふ中もどふやら氣づかひ。見れば付添人もなし。何として夜に入てお一人お出なされたぞ」姫「さればいの、忠度様の遊ばした、お歌の事にとやかくと隙取内を待兼て、お立有しと聞と早、跡をしたふて出たれ共、心に任せぬ女の足、爰迄來ても追付れぬ。道はしらず日は暮る。そなたの所は前方に、摩耶參りの時よつたを便、漸尋あたりしが、此やうにおくれては、忠度様に逢ふ事は」林「成共〳〵」姫「そりや又どふして」林「コレ、忠度様は先程お出なされて奥にござる」姫「ヤアそれはほんか、嬉しや〳〵。早う逢たいあはしてたも」林「成程お逢なされませ。じやがコレ旅草臥で休んでござる。けたゝましう起さずと、そつとはいつて肌身を付、しつぽりと御寢なれ」と、粋な詞におもはゆく、「ヲヽ乳母とした事が、じやら〳〵と何ぞいの。わけもない事計」と、いひつゝ片頬に笑の眉、ひらく襖も待兼て、いそ〳〵として入給ふ。折節納戸の暖簾上、欠まじくら立出る茂次兵衛、「ばさま、いかひ雜作でござつた」林「是は扨わしとした事が、不作法な亭主ぶり」

たけしらず—間違なし
どんざ—布子
まいつて—呑んで

けしらずといふ物じや。其段は此茂次兵衛が受合。コレ即先様からきた、丈夫な裝束見せましよ」と、風呂敷ほどき取出すは、雑兵なみの陣笠鎧。見るに太五平ぞくつき出し、「そりやおれが望所じや。大勢に打交り、ゐい〳〵わいがいうて見たい」母「ヲヽサそんならちやつと身拵へ」と、てん手に帯とくどんざぬぐ。じばんの上に黒革の、鎧上帯しつかとしめ、一腰「さすが侍の、小手脚當も似合ふた」と陣笠著せて、茂「コレ太五平、そちは先様知るまいから嗅に所を」太「ヲツト合點母者人」母「ヲヽそんなら太刀の折紙を、添へてやらふ」と納戸より、取出し渡せば、「忝い〳〵」母「コリヤ怪我すなよ」ヲヽ夫もよい〳〵、此形もよい、よいやな、よい、よいやな、よい〳〵〳〵よいやな。身ぶりは練物見るごとく、いさみすゝんでこそは急行く。林は跡を打ながめ、「かたはな子がかはゆいと、有様は不便にござる。とにもかくにもお前のお世話、忝うござります。お禮がてらに酒一つ進ぜたいが、奥には仕事を取ちらして置ました。納戸で成りとまいつて下され」茂「イヤそりや御無用」林「ハアテ買ふては進ぜぬ。餘所から貰ふた諸白に、鰯の肴でたつた一つ。是非に〳〵」と無理やりに、納戸へ押やり勝手から、銚子盃持行も、子故のあいそとしられたり。風さそふ道の時雨も懲ゆへに、身は濡鷺の菊の前、走付た

しんどう—苦辛

えいか—よいか

思ひ付は付ても、是も丸腰ではならぬ商賣。夫で此刃物を盗とはいふ物の、親の物は子の物じや。コリヤ貰ひますぞや」母「アレまだのぶとい事計。子なればやれど、わりや勘當したりや他人じやはい」太「そんなら借ります」母「イヤならぬ」と、せり合中へによつとくる、人足廻しの茂次兵衛が、「ハア太五平爰にか。ばさま何やらせり合しやるが、アア扨は勘當の詫を聞まいといふ事か」母「イヤなふ詫所じやござらぬ。やつぱり性根が」茂「ア丶コレ／＼直らぬとはいはれまい。おれが世話にしてからちめつきりとよう成りましたぞや。もふ了簡してやらつしやれ。コリヤ／＼太五平、うつかりとしてゐる所じやない。此度の軍に付て弓持の鑓持のと大分人夫が入故、それ／＼の人をせんさくしてやつたが、まだ籏持がたらぬ故、そちをやらうと思ふて一遍尋た。外の事よりしんどうはせいで、マア賃がよいがいかぬか」と、聞て林が早氣遣、「賃がようても軍場は命がけ、こりやよしにしたらよかろ」茂「ハテやくたいもない。高で命に氣遣ひが有ば、雇はれる者は一人もござらぬ。あつちの手人と違ふて、道具持は切合の勝負はせず、若流矢でもくれば楯の後へちやつと隱れる。ばさまゑいか。鑓長刀がひらめけば、人の後へちやつとかゞむ。とかくちらほら氣轉きかして立廻れば、怪我する事は微塵もない。ほんのこ

まだな事―鈍な事

れぞ―錢の事か

有事か、親の内へ盗にはいるとは」太「アヽこれ〳〵、こなたもほんに年に似合はぬまだな事いはしやるわいの。コレ他人の所へはいるとの、忽此首がござらぬはいの。そこで若見付られても命に氣遣ひのない樣に、高をくゝつて親の内へはいつたは、我子ながらもアヽ發明な者じやと譽めてはくれいで、何じややらぐど〳〵〳〵と、愚痴な事計いはしやるはいの。コレそんな事聞きや氣が盡きます」と、いひつゝ腰のすつぽんから、有あふ茶碗へどぶ〳〵。母「ソレそれ〳〵其酒が止まぬから發つて橫著な氣も出るはい。コリヤやい、見るかげもない此母がな、人仕事して漸〳〵と、其日を送ればいかな〳〵、一錢の貯も」太「サア有てたまる物かいの。ない事はおれがよう知てゐる。じやによつて錢銀の望はない。コレ此一腰がほしさに」母「イヤそりやならぬ」太「といはしやるは、エヽ親父殿が殘し置かれた重代といふ事か。サア夫じやによつてよふ切れうと思ふて盜心は、商せうにも資本はなし、仕覺へた職もなければ、人足廻しの茂次兵衛所にかゝつて居て、歩荷持しても儲にくい物はれそじや。夫に毎日飯代を拂はにやならず、三文でも餘つた時は、かたかはくんでやつてのける。是じや濟ぬと思ふから、ふつと氣の付たは、今源平軍の中、うそ〳〵と見廻つて、拾ひ首でもしたら、知行に成まい物でもないと、

しすまし―知らずにかく

これ〳〵も云々―賭事などにつきても餘り他人に馬鹿にはされぬ

事も有ど、こりやおつての事。まあ〳〵遠路のお草臥、あれへござつてお休み」と、いふもやさしき饗に、貧家の塵も繕はぬ、主が案内に打連れて、一間にこそは入給ふ。まだ宵ながらかきくもる、空も心もくら紛れ、うそ〳〵窺ふ大男、枳殻の生垣押破り、ねつとはいつて揚口、納戸へしかける指足ぬき足、忍び込間に主の林、物音聞付立出でて、窺ひゐる共しすまし顔、袋に入りし一腰かい込、そろり〳〵と表の方、出んとするを、主「コリヤ待」と、聲かけられて恟りし、迯行所を飛びかゝり、むしやぶり付て引戻せば、遁れんやらじと摑付き、引つぱるはづみに頬かぶり、脱げて落ちたる顔見付、主「ヤアわりや太五平ぢやないか」太「アヽこれ〳〵母じや人、聲高にいはしやんな。盗人を捕へて見れば我子也けりじや。人がしつてはおれよりまあ、こなたの外聞が悪いの」母「テモ扨も憎やの〳〵。汝が様な性の悪いやつが有ふか」太「ハテ有ばこそ酒も飲みます、色事はこつち任せ、三絃もしつくりかぢるてや。喧嘩もめつたに前先の見へぬ事はせず。又これ〳〵もあんまりにじりかすりはくひませぬはいの。アヽ慮外ながら萬能に達した男」母「サア其悪い事が積つて親に様々難儀をかけ、妹娘を勤奉公にやつたも皆汝故。まだ其上にうはぬりかけ、盗する様に成つたは、よく〳〵因果な生れ性。そしてまあ外でも

かゝるべき身を寄せるべき

ないか」圭「成程々々、ハテめづらしや、お久しや。先こなたへ」と伴ひて、上座に直し手をつかへ、「マア何か指置お尋申ませうは、此度源氏の軍勢、平家を責めんと都へ亂れ入に付、御一門殘らず西國へ落させ給ふと承りましたが、お前計何として今迄都にはござりました」忠「ホウ其子細は兼てそなたもしる通、某は俊成卿の和歌の弟子といひ、分けてしたしき中なるが、此度師卿撰れし千載集に、我詠歌を加はりなば、讐敵の手にかゝり、かばねは野山にさらす共、此世の本望敷島の、道を求めしかひならん、と思ふ心の一筋に、狐川より引返し、俊成卿の館に立越願ひしが、かかる時節に平家の詠歌、私に加へん事もいかゞと、息女をもつて尋の爲、源氏方へ迯られしが、いまだ其沙汰なき内に、早合戰最中と聞、心せかれて立歸る。生田の陣所も程ちかしとは言ひながら、暮に及べば陣門もひらくまじと、此所へ立寄しもふしぎの緣」と宣へば、圭「さればわたしも稚なじみの夫が不所存、置去にして行衛知れざる折から、緣を求めて俊成樣へ乳母奉公。養君菊の前樣御成人に付お暇申、かゝるべき悴も有たれど、性がわるさに勘當致し、今獨身の貧樂と、應ぜぬ苦勞はござりませぬが、承はればおまへと菊の前樣は、どうやら譯の有、ハアいや私に御遠慮はない事。夫に付てお咄申

鞦手—鞍の前輪後輪とに二箇づつ付くる紐
檀特山云々—釋尊檀特山にて馬別れし給ふをいの口取車匿と云ふ
埴生—見苦しき家にいふ
つゞりさせてふ—秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふきり〴〵すなく
いさよめ—かりそめ
つげ櫛—黄楊の櫛と告げ
歌枕—歌に讀入るゝ名所

くれけるが、是非もなく〳〵玉折のなきがらを取おさめ、母衣をほどいて敦盛の、御死骸を押しつゝみ、總角取つて引結び、手綱をたぐり結付る、鞍の鞦手やしを〳〵と、弓手に御首たづさへて、右に轡の哀げに、檀特山のうき別れ、悉陀太子を送りたる、しやのく童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに 三重歸りけり。昔より爰も名におふ津の國の、兎原の里に幽なる、埴生の宿に獨居の、林は老の營に、糸針取つて人仕事、つゞりさせてふ洗濯の、糊かい物を打盤の、手元も暗き黄昏時、世のうきにいさよめならぬ身の願ひ、忍びて人につけ櫛の、薩摩の守忠度は、俊成卿の館より、須磨の陣所へ歸らんと、急ぎの道も行暮れて、やどりもがなと爰かしこ、あれし軒端もまばらなる、ふせやの門に立寄給ひ、「都方より西國へ歌修行の旅の者、案内もしらぬ道に勞れ、日も暮れたれば迷惑致す。卒爾ながらお宿の御無心、賴入」と有ければ、圭「ハア、いや爰は所の法度にて人宿は致さね共、我も人も行暮れて、宿のないはなんぎな物。殊更優しき歌枕、御修行のお方と聞ば別條も有まい。宿はせず共マアはいつて、たばこでも參りませ」と、戸口を明て、「ハアおまへはどふやら見た樣なお方じやが、ヲヽそれよ、前方都でお目にかゝつた忠度樣でござりますな」忠「ムヽそなたは五條の三位に居た、菊の前の乳母で

よびのくわげん―宵の管絃か

あまざかる―ひなの枕詞

顔を一目見せて」といふ聲も、深手によはる息づかひ。見るより熊谷御首携へあゆみ寄り、「敦盛をしたひ給ふはいかなる人」と尋れば、今はの苦しきこはねにて、「我こそは敦盛の妻と定まる玉折姫。お首はどこに。エヽもふ目が見へぬ」と撫廻せば、直「ム、何お目が見へぬとや。ヲいとしや〳〵、御首はコレ〳〵爰に」と手に渡せば、わつと泣々しがみ付、膝にのせ抱きしめて、消入絶入歎きしが、「ノウこれ敦盛樣、アはかない姿に成給ふなふ。陣屋を出させ給ひしより、御跡したひ方々と、尋る中に源氏の武士、平山の武者所我を見付て無體の戀慕。だまし討んも女業、此ごとく手にかゝり、二人が二人で悲しいさいご。せめて別れに御顔が、見て死にたいと思へ共、深手に心が引入て、目さへ見へぬか悲しや」と、又御首を撫さすり、「よびのくわげんの笛の時、後にと有し御詞が、今生後生の筐かや。此世の縁こそ薄く共、來世では末ながう、添ひとげてたべ我つま」と、顔にあて身に添へて、思ひの限り聲限り、なくねはすまの浦千鳥、涙にひたす袖の海、引汐時と引息の、ちしごと見へて絶果てたり。熊谷は茫然と、どちらを見てもつほみの花、都の春よりしらぬ身の、今魂はあまざかる、鄙に下りてなき跡を、とふ人もなき須磨の浦、なみ〳〵ならぬ人々の、成果つる身のいたはしやと、ひたんの涙に

よ」と、西に向ひて手を合せ、御目をとぢて待給へば、いたはしながら熊谷は、御後に立廻り、彌陀の利劍と心に唱名、ふり上は上ながら、玉の樣なる御粧ひ、情なやむざんやと、胸も張裂氣おくれに、太刀ふり上し手もよはり、思ひにかきくれ討かねて、歎きに時も移るにぞ、敦「ア丶おくれしか熊谷、早々首を討たれよ」と、捻向給ふ御顏を、見るに目もくれ心きへ、「悴小次郎直家と申者、ちやうど君の年恰好、今朝軍の先がけして、薄手少々負ふたる故、陣屋に殘し置たるさへ、心にかゝるは親子の中。それを思へば今爰で討奉らば、嘸や御父經盛卿の、歎きを思ひ過されて」と、さしもに猛き武士も、そぞろ涙にくれゐたる。敦「ア丶愚や直實、惡人の友を捨て、善人の敵を招けとは此事。早首討つてなき跡の、回向を賴さもなくば、生害せん」とすゝめられ、直「ア丶是非なし」とつゝ立上り、「順緣逆緣倶に菩提、未來は必一蓮託生。なむあみだ佛南無あみだ佛」首は前にぞ落にける。人の見る目も恥かしと、御首をかき抱き、曇し聲をはり上て、「平家の方に隱れなき、無官の太夫敦盛を、熊谷次郎直實討取たり」と呼はるにぞ、磯に臥したる玉折姫、絕入し氣も一筋に、夫をしたふ念力の、耳に入しかむつくと起き、「ノウしばし待てたべ。敦盛樣を討つたとは、いかなる人かノウうらめしや。せめて名殘に御

はづし、兩馬が間にどうと落つ。すはやと見る間に熊谷は、敦盛を取ておさへ、「かく御運の極る上は、御名を名乘直實が、高名譽を顯はし給へ。又今生に何事にても思ひ殘す御事あらば、必達し參らせん。仰置れ候へ」と、懇に申にぞ、敦盛御聲さはやかに、「ヲヽやさしき志、敵ながら適勇士。かく情有武士の、手にかゝり死せん事、生前の面目。戰場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、兼てなき身と知るゆへに、思ひ置事さらになし。去ながら忘れがたきは父母の御恩。我討れしと聞給はゞ、嘸御歎思ひやる。せめて心を慰む爲、討れし跡にて我死骸、必父へ送り給はれかし。我こそ參議經盛の末子、無官の太夫敦盛」と、名乘給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も、見るめ泪にくれけるが、何思ひけん引起し、鎧の塵を打ちはらひ〳〵、「此君一人助けし迚、勝軍に負もせまじ。折節外に人もなし。一先爰を落給へ。早う〳〵」と言捨てゝ、立別れんとする所に、後の山より武者所數多の軍兵、「ヤア〳〵熊谷、平家方の大將を組敷ながら、助けるは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」と聲々に罵るにぞ、熊谷はつと計、いかがはせんと默然たり。敦盛卿しとやかに、「迚も遁れぬ平家の運命、爰を助かり行先にて、下主下郎の手にかゝり、死耻を見せんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされ

まさなふ―きたなく
いそふれ―さあ來い
しほらし―感心

駒を引寄飛乗りて、逸散に其場はるかに落失せけれ。去程に御船を始めて、一門皆々舟にうかめば、乗おくれじと、汀に打寄すれば御座船も兵船も、遥にのび給ふ。無官の太夫敦盛は、道にて敵を見失ひ、御座船に馳付いて、父經盛に身の上を、告げしらす事有と、須磨の磯邊へ出られしが、舟一艘も有らざれば、詮方波に駒を乗入、沖の方へぞ打せ給ふ。かゝりける所に後より、熊谷の次郎直實、「ヲヽイ／＼」と聲をかけ、駒をはやめて追かけ來り、「ヤアそれへうたせ給ふは平家の大將軍と見奉る。まさなふも敵にうしろを見せ給ふか。引返して勝負あれ。斯申某は、武藏國の住人熊谷次郎直實。見參せん返させ給へ」と、扇を上て指招き、「暫し／＼」と呼はつたり。敵に聲をかけられて、何か猶豫の有べきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷もすゝみ寄、互に打物拔かざし、朝日にかゞやく劍の稻妻、かけ寄りかけよせてう／＼／＼。てふの羽がへし諸鐙、駒の足竝かつし／＼。かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひら／＼／＼。むれゐる千鳥村千鳥、むらむらばつと引汐に、寄せてはかへり返りては、又打かくる虚々實々、勝負も果てし有らざれば、「いそふれ組まん」と敦盛は、打物からりと投給へば、「コハしほらし」と熊谷も、太刀投捨てゝ駒を寄せ、馬上ながらむづと組み、ゑい／＼／＼の聲の内、互に鐙を踏み

なんぼ尋ても敦盛の行方、水の底迄有所はしれぬ」玉「そりやなぜに」末「ヲヽ敦盛はたつた今、我手にかけて討て仕廻ふた」玉「ヤアなんと、敦盛様を討つたとや。ハアはつ」と計にどうどふし、人目もわかず聲を上、歎きしづませ給ひしが、「夫の敵」と身がまへじ、切付る腕首摑んで、末「ヤアこいつ手向ひか、モウ了簡ならぬ、といふ所をいはぬ。ても此手のやはらかさ、じんじやうな事はいな。モどふも〳〵。エヽ武者震ひのする程どふもならぬ。コレ悪い合點じや。とんと心を入かへ、おれに隨ふ氣にならしやれ。女房に持てかはいがる。サヽどうか〳〵」と猫なで聲、姫はいかりの涙まじり、「コリヤ世が世なら、そちが様なむくつけな侍は、傍邊へもよせ付ぬに、隨へのなびけのとは、穢はしいいまはしい。エヽ腹立や」と又切付る、腕首捻上取ておさへ、末「サア女房に成かならぬか、いやなら殺すが何と〳〵」と、太刀拔持て傍若無人。玉「ヲヽ殺さば殺せ畜生め。エヽ誰ぞ強い人が來て、こいつを切てくれぬか」と、もだへ給ふぞいたはしゝ。强氣の平山むつとせき上、「ヤアヽにつくい女め、なびかぬ上に色々の雜言、恥面かゝされ堪忍ならず。生置て人の花と詠めさすもむやくしい。思ひ知れ」と持たる刀、胸板ぐつと突通せば、「あつ」と一聲苦しむ折から、後の方に鯨波、末「すは又我を追ひくるや」と、

イ合點
じゆつながろ―苦みに堪へぬ
あた―馬鹿

「アきたなし返せ」と聲をかけ、いづく迄もとあせり立、跡をしたふて三位追ふて行。玉「敦盛様ア、太夫様いのふ。此くらいのに只お一人、あぶないはいのふお歸り」と、いへどあてども波ちかき、磯ばたをうろ〳〵と、袖は涙の玉折姫、夫を尋て朧夜に、心細身の一腰かい込み、あなたへ走りこなたへ迷ひ、すまの浦邊をそこよ爰よと、尋さまよひ給ひけり。早しのゝめに人顔も、ほのかに見へし山道より、平山の武者所、漸く迯げのびすまの浦、駒の足を休めんと、暫く息をつぐ中に、玉折姫と見るよりも、やがて馬より飛んでおり、つか〳〵と立寄つて、平「コレお娘、チモよい所で出合ました。いつぞや京で見初めてから、目の先にちらつくやうで、起てもねても忘られず、思ひ餘つてそ様の親御、時忠殿へいふたれば、やらふと有を幸に、迎ひにやつた其跡でも、アヽた娘ならじゆつながろ、マアねてからどふしてかふしてと、ほんに〳〵どこもかも、木のやうに成て待てゐたに、迎ひにいた玄番を殺し、よう待ぼうけにめさつたなふ。サア乘物のかはり此馬に乘せ、連れていんで女房にする」と、引立ればふりはなし、玉「エヽあたいやらしい。親が赦そがどうせうが、敦盛様とは二世の約束。かういふ内にも御行方を尋逢ふて死なば一所。邪魔仕やんな」とかけ行をひんだかへ、「ムウ敦盛を尋るのか。コレ

くゐ〳〵—くよくよ

六具—胴、小手、袖などの六種の武具

まつしぐら—向ふ見ずに

さしつたり—オ

と、聞より直實髮逆立ち、子を失ひし獅子の勢ひ、敵の陣へかけ入たり。爰やかしこの鬨の聲、聞に平山獨ゑみ、「ホウ思ふたつぼ〳〵。親子共に袋の鼠、今の間に討れおろ。日頃からあの熊谷めと六彌太めが出頭を、くゐ〳〵と思ふて居たに、エヽ時節も有ば有物、手を濡さず風の神よりよい敵。其上親子も剛の者、死物狂ひと働かば、よつぽど敵もなやましおろ。あらごなしさせ討死さし、其跡へしかくれば、高名手がらは思ひの儘。うまいぞ〳〵」と、ぞく〳〵いさみ悦ぶ所へ、木戸口にあまたの大聲、スハ敵ぞと身がまへし、窺ひ居るもくらまぎれ、熊谷次郎直實我子を小脇にひんだかへ、陣門をずつとかけ出、「ノウ平山殿おはするか。悴小次郎手を負ふたれば、養生加へに陣所へ送らん。お手がらあれ」と言捨てゝ、飛ぶが如くに急ぎ行。平山案に相違して、油斷ならずと馬引よせ、打乗る間もなく門内より、あまたの軍兵抜つれて、我討留めんとかけ出れば、心得たりと抜合せ、受つながしつ多勢を相手、火花をちらしていどむ内、無官の太夫敦盛は　さはやかに六具をかため　駒をすゝめて乗出し、平山を見るよりも、まつしぐらに打寄給へば、さしつたりと渡り合、しばしはさゝへ打合しが、先を取られし武者所、殊に多勢に取まかれ　臆病神の誘ひてや　駒の頭を引かへし、行先しらず迯出せば、敦「ヤ

しの寫―私の寫
武藏七寫の一

健氣さに先陣を汝に讓る。氣遣なしに切入〳〵」小「イヤなふ平山殿、あの管絃の音御聞なされ。扨も雲の上人は又やさしさが違ひますの」直「イヤサ夫を和殿は得知るまい。昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ詮方つき、櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て、謀もあらんかと、我智惠に迷ふて仲達は迯しと聞。アレあの管絃も其通り、何怪しむ事はない。早かけ入て高名せよ。但和殿がおそろしくば、某が先陣せうか。何と〳〵」と氣を持され、血氣にはやる小次郎直家、木戸口に走寄、門打たゝき大音上、「敵の陣へ物申さん。武藏國の住人しの黨の籏頭、熊谷次郎直實が一子同苗小次郎直家、先陣に向ふたり。平家方に名有人々出あふて勝負有」と高らかに呼はれば、門内も騷立ち、「すはや敵の寄せたるぞ。出向ふて討取」と、木戸押ひらけば小次郎は、太刀拔きかざしかけ入を、「ソレ遁すな」と軍兵共、俄にさわぐ鯨波、太刀音人聲かまびすし。平山いかゞとためらふ所へ、熊谷の次郎直實、我子の先陣心にてつし、足を空にかけ來り、「ヤア平山殿候ふな。悴小次郎見給はずや」と、尋を待たず、「されば〳〵、最前是へ見へし故、小次郎に色々段々あの大勢の敵の中へ、一騎打は叶はぬぞや、ひらによしに召れ後詰を待つての事がよかろ、といろ〳〵にいさめても、はやり切たる若者、無二無三に切込れし」

猪首―兜を仰向けて敵に恐れぬ體

ゆゝしく―勇ましく

の西の木戸陣門に走りつき、息ついで四方をながめ、小「ハッァ嬉しや。我より一番に先がけする者もなし。跡より人のつゞかぬ中、切入ん」とかけ廻れど、亂杭さかもぎ透間なく、嚴しく戸ざす陣所の門、「いかゞはせん」と見廻す内、遙の奥に管絃の音、夜は深更に及んだり。折節山路に風もやみ、海上も波しづまれば、伎樂のしらべ哀れげに、さも面白く聞へけり。小次郎は思はずも、心耳をすまし聞とれて、「ハッァ實も上﨟都人は、情もふかく心もやさしと父母の物語、今こそ思ひ合せたり。かゝる亂れの世の中に、弓矢さけびの音はなく、糸竹の曲をしらべ、詩歌管絃を催さる。ハヽア床しさよ。いかなればゞ我々は、邪見の田舍に生れ出、鎧兜弓矢を取、かくやんごとなき人々を、敵として立向ひ、修羅の劔をとぐ事は、淺ましさよ」と計にて、覺へず涙をながしたる、まだうら若き小次郎が、身の程々を汲分けて、感ずる心ぞしほらしき。後の方に蹄の音、誰なるらんと窺ふ内、平山の武者所馬上ゆゝしくかけ來り、小次郎が影見るよりも敵か味方かいぶかしく、「何者なるぞ」と聲かくれば、小次郎もすかし見て、「ヤア末重殿か」末「さいふ和殿は。コハ小次郎か」と馬よりおり立、「アウ我より先へ來る者はよもあらじと思ひしに、ホヽ心がけ神妙々々。外の人なら平山が、先陣を爭ふて一番に乘入んが、初陣の

染衣云々―染める、裏、巻と女房の名にかく

小櫻威―小櫻の模樣を除く外藍に染めたる皮にて威したる鎧

乘りて、八島へ渡り殿樣に、尋逢せ奉らん。又も敵のこぬ内に、いざさせ給へ」といさみ立、すゝめ申せどつまや子の、別れ思へば便なく、足ももつるゝ藤の方、涙に袖を染衣が、いさんで見せる心は裏葉、げに武士の女房は、敵も舌を槇の尾と、ふり返つたる女武者、みたり四人が打連れて、あゆめど跡へ引戻す、濱の眞砂路つきせぬ思ひ、通ふ千鳥の浦傳ひ、船場の磯へと急行く。

第二

酒極る時は亂る、樂しみ極る時は悲しむとかや。二十餘年の榮花の夢、跡なく覺めて都をひらき、平家の一門楯籠る、須磨の内裏の要害、前は海上はけはしき鵯越、追手は生田搦手は、一谷の山手より、浪打際迄柵ゆひ廻し、赤旗風に吹靡かせ、參議經盛の末子無官の大夫敦盛、父に代つて陣所をかため、事嚴重に見へにける。比は彌生の初つかた、月さへ入てくらき夜に、熊谷が一子小次郎直家、先がけして初陣の高名を顯はさんと、出立姿は澤瀉を、一しほ摺つたる直垂に、小櫻威の兒鎧、猪首に著なす星兜、星の光りに只一騎、心は剛の武者草鞋、足に任せてはやりをの、山道岩角嫌ひなく、一谷

けもない―少し
もない
げんさい―衒妻

者所末重、時忠卿と相談有、玉折姫を取戻し、他人と成て經盛一家、討亡ぼせとの仰を受、成田の五郎向ふたり。急ぎ玉折姫を渡し覺悟せよ」と罵れば、「やア推參なる小二才め。敦盛卿の簾中に定まつた姫君樣、武者所でもむしやくしやでも、けもない〳〵やる事ならぬ。長居せばめに物見せん、早く歸れ」と呼はつたり。五「ヤア延過ぎたげんさいめ、かたつぱし打殺せ」と、下知に隨ふけらい共、拔連れ〳〵切てかゝれば、心得多勢を相手にして、ひるまずさらず三人が、蜘手かくなは十文字、或は大げさ車切、太刀長刀の稻妻に、「こりや叶はぬ」といふやいな、主もけらいも我一に、表をさして迯出るを、「のがさじやらじ」と、三重追ふて行。跡にみだいは「これのふ〳〵、長追無用あぶない」と、あせりながらも油斷なく、一間に錺し弓と矢つがひ、立出で給ふ折も折、取てかへす成田の五郎、かけ向ふ出合頭、切て放せばあやまたず、胸板はつしと射ぬかれ、どうと倒れて死したるは、云合せたるごとくなり。追々歸る女房達、此體を見て、「お手がらお手がら、あはれ成田が身の果」と、どよめく所へ又むら〳〵、討ちもらされの家來共、「主人の敵」と込入を、「イヤ面倒な」と三人が、まくり立たる太刀先に、刃向ふ者も嵐の木の葉、ちり〳〵ぱつと迯げちつたり。女房達聲々に、「サア〳〵中みだい樣、此浦船に打

どうどひれふし給ふにぞ、女房達走寄り、「いかゞ渡らせ給ふぞ」と、樣々いたはり參らすれば、みだいは涙の顏を上、「悲しい物は浮世の義理。敦盛計此母が、臆病に育てし故、軍にも得立ぬとさげしみが口惜さ、討死にやる母が思ひ。十五や六の小腕といひ、稚い時から舞樂を好き、軍の事はしらぬあの子、つゐ殺さるゝは知れた事。鎧兜を著て出たのが、千騎萬騎を討取て、ぶん取高名したも同然。わけてかはいや玉折が、歌の會か香きゝに行やうに跡を追ひ、いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが、夫婦と成たしるしには、一夜の枕もかはさせたく、二つには敦盛が、妹背の緣にひかされて、軍をまとめてゐるならば、一日でも討死の、便を遲ふ聞ふかと、はかない事を心の頼。親の因果」と計にて、身を投ふして泣給ふ。槇の尾裏葉染衣も、めいく夫の行方迄、思ひくらべて一時に、又もや袖をしぼりける。歎きの耳を驚かす、ゐいく聲に人々は、「すはや敵こそ入たれ」と、みだいを奥へすゝめやり、通路の鈴の綱引ちぎり、てん手にたすきにかけ置たる、長刀大太刀小太刀をかまへ、恐れげもなく待かけしは、遉名におふ平内左衞門、越中かづさが妻女とは、いはねどしれてかひぐし。時もあらせず入來るは、平山が郞等成田の五郞、大勢引具し大音上、「ヤア經盛はいづくに有。主人平山の武

あおり云々—鐙に障泥を打つて走らす

さき立つ不孝の罪、御赦されて下さりませ」と、思ひ込んだる其有様。母上思はず兩手を上、「ヤレでかしやつた敦盛、それでこそ我子なれ。ヂヽ嬉しいぞや〳〵。いで餞別を祝わん」と、召したる裲ひらりと脱ぎ、「總じて軍に立時は、敵に矢種を隠す爲、母衣をかけると聞傳ふ。是をかけて出陣仕や」と、心の内は筐ぞと、いはぬ情や母の衣、やなぐひに打かけ給へば、「ハツア御芳志有がたし〳〵。コレ〳〵玉折、跡に残つて我にかはり母上に孝行有。戰場へ連行事は叶はぬ」と宣へば、姫はわつと泣出し、年月待た夫婦の盃、かはす間もなく振捨てゝ、残れとはどうよくな。わたしやどこ迄も付て行。邪魔に成なら今爰で、おまへの手にかけ殺してたべ。なんぼうでも離れはせぬ」と、鞍に取付鐙にすがり、歎したふぞいぢらしき。敦「イヤ未練なりそこ放されよ」と、あせり給へばみだい所、「ノウ敦盛、一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事ない、連れて出陣〳〵」と、聞より姫は有がた涙、母の方を伏拜み暇乞さへあら駒の、手綱に引添ひいさみ立、女房達も取々に、御見立申せば敦盛卿、時刻移ると鞭ふり上、「然らば母上もふおさらば」「ヲヽさらば」さらば〳〵の別れの聲も、母の耳にはきつと立、駒のいななき轡の音、あおり立つてぞ打たせらる。跡見送りて藤の方、こらへ〳〵し溜涙、一度にわつと聲を上、

かな糸―かたしにかく

同じ毛云々―同し緋威の兜に鍬形打つたり

母衣―鎧の後部につけて矢を防ぐもの

ず。かねて妻子に別れは告ぐる、再び逢ふも互の輪廻、此儘に出行ん案内せよ」と使を引連れ、急ぎ濱邊に出給ふ。かくとはしらず藤の方、けふ別れてはいつか又、逢見ん事はかた糸の、結馴れにし夫婦の緣、せめて名殘を惜まんと、座敷をそつと立出て、「經盛卿我つま」と、尋給へど面影は、見ぬ隈々を爰かしこ、見廻す中に落ちたる一通、ひらき見るより恟りし、「コレ〳〵皆の衆早ふ〳〵。殿は出陣なされたはいの」と、呼はり給ふ御聲に、玉折姫女房達、追々に走り出で一つ所に寄集り、互に顔を見合せて、呆れ果たる計なり。かゝる折節奥庭より、間近く聞ゆる轡の音、何事やらんと見る所に、江戸敦盛其日の出立には、雛鶴縫ふたる直垂に、鎧は緋威同じ毛の、鍬形打ちたる兜を着て、廿四さいたる染羽の矢、重藤の弓を持ち、いさみすゝんで乘出し給へば、玉折見るより帶引きしめ、小づまかい取かひぐ〳〵しく、なげしにかけたる長刀追取、「母様さらば」と庭に飛びおり、轡面に引添ふたり。みだいは驚き、「ヤア〳〵敦盛、都へ登れと父の仰、其出立は心得ず」と、尋給へば、敦「おろかや母上、父の命に從ふは一旦の孝行。兄上達一門殘らずかばねをさらす必死の戰場、我一人都へ歸り、何面目にながらへん。是より一谷へ馳行、父にかはりて陣所を固め、潔う討死して、名を後代にとゞむる覺悟。親に

ず。譬いづれの胤にもせよ、後の親こそ親ならめ。東西覺へて今日迄、御意を背し事なけれど、是計は御免有、一所に出陣仕り、御馬の先にて潔う御恩を送らせ給はれ」と、涙にくれての御願ひ。經盛卿押かへし、「一旦の義心尤なれ共、親の恩と天子の御恩一つに云ふも恐有。是非御承引なきならば、法皇への申譯、某は切腹」と面色かはれば敦盛卿、「ハヽア誤り入奉る。此上は仰に隨ひ兎も角も仕らん」經「ムヽ都へ歸り給はんとな。ホヽ承引有つて嬉しや〳〵。源氏の勢は丹波路と津の國の街道より、二手によすると聞及ぶ。敵の見ぬめの浦傳、難波大江の岸を越へ、河内路より登給へ。早ふ〳〵」畏て敦盛は、「用意」と一間へ入給へば、經「ソレ藤の方玉折も、旅の支度を急れよ。ヤアコリヤ〳〵染衣、皆の者取賄ひにいけ〳〵」と、仰にみだいは、「サアおじや」と、皆引連て入給ふ。經盛悦喜限りなく、「サア心安し是からは、一の谷へ馳向ひ、持口を固めん」と、獨言しておはする所へ、内府宗盛の使として、雜兵一人馳來り、「經盛卿へ火急の御用」と、一通を指出せば、何事やらんと押ひらき、何々三くさの合戰味方敗北、是に依て主上を始め門院二位殿密に讃岐八島の浦へおひらき有、貴殿御船を守護との仰によつて、迎ひの兵船指遣はす、急ぎ出立有べき由、讀みも終らず心せき立、經「サア事急なり猶豫なら

菊のしたゞり―聞くにかけて南陽縣の菊水齢を延ぶ故事をひく

涙云々―なしと涙の玉にかく

御いつくしみ。かく由緒有敦盛なれば、いかなる高位高官も、望の如く成るべけれ共、官位を受ては臣下の列、重て帝位をふむ事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛、まさかの時は春宮にも立給はん御心やと、叡慮をはかり今日迄態と官位の望もせず、扨こそ無官の太夫と呼ばせしぞや。斯物語る上からは、其土器は天盃同然、流を汲んで玉折姫、三々九度を納むべし」と、仰を菊のしたゞりに、千代を結の番蝶、祝ひ納る姫君の、心の内の嬉しさは、「早う其日の暮したからん。」經盛詞を改めて、「敦盛卿へ願ひ有。都騒動の折柄、法皇御幸の御行方は知ず、御身を残しとゞめても、襲來る源氏の軍兵、うめきや見せ奉らんかと、心ならず一門と、諸共是迄伴ひ申せし事、嘸や跡にて法皇の叡慮くるしめ給はん勿體なや。其上今度の合戰は、必定平家滅亡にて、一門残らず討死せば、都へ伴ひ申人も有まじ。御身は是より藤の方と、玉折姫を具し給ひ、都はいまだ騒しからん、暫く北嵯峨へ御入有、折を見合せ法皇の御殿へ移り給ふべし。今生の對面も今日限の經盛、暇乞に御顔ばせ見せもし見もしなされよ」と、涙にくれて宣へば、みだいとかうの詞も涙、玉折姫女房達、驚く計うつとりと、顔見合せて居たりけり。敦盛大きに恐入、「コハ存寄ぬ父の仰。生れぬ先から親子と成、けふ迄御恩を受し事、須彌蒼海も競たら

いもが子の云々—妹が子ははふ程にこそなりにけれたゞもりとりてやしなひにせよの歌

成程」と御夫婦は、點頭き合ふて藤の方、「コレ玉折、そなたに見せる事が有、待て居やゝ」と云捨て一間に入給ふ。無官の太夫敦盛は父と一所に出陣の、用意取々なる中に、母のしらせに奥の間より、「御用いかに」と出給へば、跡よりみだい女房達、銚子土器携へて、「君は千代ませ婿君は、三國一」と祝しける。樣子しらねば敦盛は、悄りうろ〳〵あたりをながめおはすれば、經盛は取あへず、「ナウ敦盛卿、玉折姫と婚儀の結び、其盃を取上られ姫へさして壽を」と、聞より染衣打笑ひ、「申殿樣、御祝言の盃は、姫ごぜより飲初めて、夫へさすが世上のならひ、思召忘れの樣に存ます。ホヽヽ」と袖覆へば、經盛卿打點頭せ給ひ、「ホヽ女房の盃を夫へさし、壽を祝ふ下つかたの婚禮は其通り。譯をしらねば不審は尤。幸の折柄なれば語り聞す事有」と、云つゝ立て敦盛の、御手を取上座に直し、其身は次に座を改め、「口外へ出さねば知人有まじ。そも此敦盛卿は、我子にて我子にあらず。元此みだい藤の方は、法皇に宮仕へ、御寵愛ふかうして、御胤を身にやどせしが、人の妬の強ければと、先祖平の忠盛へ、白河院より下されし祇園女御の例に任せ、懐胎の身を其儘、某が宿の妻に給はりて出生有し此敦盛、我子として育しが、院参の折ごとに、人なき間にはいもが子の、歌によそへて御尋、淺からぬ

身は身で云々—獨り身は矢張獨り身

はしたなう—不謹愼に

尋給へど姫君は、何と返答いは枕、胸もふさがる思ひにて指俯いて詞なし。御臺「ホヽ返事のないはいにたい氣じやの。アヽあぢきないは人心、ちいさい時からいつくしみ、手しほにかけ育ても、身は身で通るといふが誠。暮かゝる平家を捨て、日の出の源氏に細し給ふ、親御に隨分孝行仕や」と、涙交りの恨の詞。經盛卿打消して、「ハテくど〳〵と何を諄。源平と引別れ、互に心よからぬ中、娘を戻せと有こそ幸。コレ〳〵立番、お使者の趣承知致し、則娘を返し申すと、立歸つて達すべし。其方迎に參りし上は、此方より人に及ばず、早く姫を連歸れ」と、仰にはつと大館立番、玉折姫の傍に寄、「ナウ姫君何をうぢ〳〵隙入給ふ。時忠のお心は呼戻すと其儘嫁入の御相談。コレお悦びなされ、其婚殿といふは、平山の武者所末重とて源氏の兵、姉婿の義經殿と肩をならべる大大名。あやかり者とはお前の事。サア〳〵早ふ乘物に、お乘なされ」と立寄る中、姫はとかうの答なく、ずつと寄て立番が刀、拔手も見せず切付れば、肩先ずつぱと切込れ、是はと寄るを又一太刀、うんとのつけに倒るゝを、飛かゝつてとゞめの刀、さしもの經盛仰天に、膝の方は走寄、「ヲヽ玉折、れき〳〵の武士も及ばぬ手際心の健氣。サア〳〵こちへ」と誘ひて、「女心のはしたなう、いふて今さら恥かしい。其心を見る上は、ナウ申」經「ヲヽ

おぼこ—未通女
ちよびくさ—少しは
いかつがましく—いかめしく

尋れば、忠淸が妻の槇の尾、「サアじたい御姬樣がおぼこで、しかけを待てござる故、いつ迄も埒が明ぬ。ちよびくさ噺しもしかけたり、人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり、御祝言のない先に、內證の祝言は濟樣にせにや、姬ごぜは立物じやないわいな」と、なぶれば姬は眞請にして、「ほんにとうから、そうしたら、つる夫婦になられう物。それしらなんだそしてまあ、寢てから何といはふや」と、袖打おほふ其風情、葉の裏に咲玉椿、色を含みてかはゆらし。取次の侍罷り出、「時忠卿よりのお使者、大館玄番殿御出」と、知らする聲に女房達、「ナウ申お姬樣、お里の便殿樣へ申上ん」と三人は、打連てこそ入にけれ。參議平の經盛卿、時忠の使と聞一家ながら不平の中、いかなる事か云送ると、御臺諸共立出給ひ、しづ／＼と座に直り、「時忠卿の御使者、是へ通せ」と仰の內、頰も形も大館玄番いかつがましく畏り、「主人時忠申越候は、先達て其元へ遣はし置く玉折姬、いまだ敦盛殿と祝言も御座なき事、是以て互の幸、存ずる旨候へば御戾し下されよと主人が口上。則迎ひの乘物も、ようゐ致し參つたり。早く姬をお渡し有」と、さも橫柄にのべにける。經盛卿の詞を待ず、みだい所藤の方姬君に打向ひ、「ナウ玉折、親御から迎ひにきたがいぬる氣か、いにともないか。そなたの心次第ぞ」と、

のべ—述べと野邊
古鄕を云々—降るにかく經盛の歌に古鄕を燒野が原とかへり見て末は煙の浪路をぞ行く
落汐—引き汐おつにかく

るより愕りし、景「ア、こりや死んでゐるは」「ヤア〱やあ」と時忠も、平山諸共指覗き、驚く中にも時忠は、「添たる一通こりや何じや」と、ひらき見るより又仰天、「ヤァ扨は最前から相談した、樣子を知つての自害と見へた。ハツはつ」と計さしうつむき、途方にくれて居たりける。景高はくつたく顏、「エ、埒もない、是はまあどうせうぞいのふ平山殿」平「サアどうといふたらどうせうぞい」景「申時忠卿御思案はござりませぬか」時「ハテ思案といふてどうせうぞい。得心で死んだればねだりにもやられまいし、此儘で葬禮せう。婿の役に景高、供をして燒香めされ」景「ハイ。いやこれ末重殿も相婿、葬に立ずにや居られまい。サア〱ござれ」と誘れて、平山は不請〲の佛頂面、時忠は涙ながら、「平山景高遠路墓所迄御出御苦勞千萬」と、禮狀文句を口上で、のべの送の營みと、打つれてこそ 三重 露時雨、古鄕をやけ野が原と見返りて、修理大夫經盛卿一門の人々と、倶に都を落汐の搦手をかためんと、福原にとゞまりて、手配何や萱の御所、しばし假居の事しげき、中に養子の玉折姫、軍の事も色事も繪で見た計味しらぬ、行儀育の器量よし、女房達と諸共に、浮世咄の跡や先。越中次郎兵衞盛次が妻の裏葉、ひそ〱聲にて、「申皆樣、此亂のない先から姫君と敦盛樣、許嫁計で御祝言の遲いのは、どふした事」と

手ぐすね―まちかまへる

うづ虫―蛆虫

身を恥て詞さへ、かはさず果した不便やな。みじかき契りで有しよ」と、やゝ御涙にくれ給へば、悲しさ増る腰元共、血氣にはやる小次郎も、倶に涙にくれ居たる。暫く有つて御大將、急度思案をめぐらし給ひ、「小次郎こよ」と耳に口、コレナかうくとつどく
に言含め、「よくはからへ」と計にて、編笠に人目を忍び、館に歸らせ給ひける。直家は指心得邊を見廻し、「京の君の御立也」と高聲に呼はれば、かたへの幕には平山梶原、「スハよき首尾」と夕暮時、頰かぶりに顔かくし、けらいに呵き領き合、手ぐすね引いて待所へ、腰元婢付隨ひ、御乗物を先に立、小次郎跡に引添ふて、歩來るを見るよりも、爰かしこよりむらくと走寄て乗物を、奪ひ捕んとおつ取まく。小次郎すかさず身がまへし、「ヤア慮外なるうづ虫めら。忝くも義經公の御臺京の君の御乗物。狼藉を働いて後悔すな」ときめ付る。「ヲヽサく京の君知つてゐる。四の五のなしに渡さぬと、其前髪首さらへ落す」と罵れば、小次郎はたまり兼引ぬいて切かゝるを、こなたも拔連渡り合、切結ぶ太刀かげに、女中は殘らず迯ちつて、直家一人ン多勢を相手、受つ流して戰へ共、遉小腕の言甲斐なく、やうく其場を切ぬけて、乘物捨置迯歸る。「サアもふよいは長追すな。いでまあ早ふ戀人の、お顔を見ん」と平次景高、乘物の戸を明て、斯と見

水の月云々―目に見えて手に取られぬ喩

平山殿お出なされ」平「アいや〳〵貴様は姉婿マアお出」共「イヤ先舅殿から御入あれ」と、俄に舅婿呼はり、水の月取る猿松共、伴ひてこそ入にけれ。こなたの幕より小次郎は、勢ひ込んでかけ出すを、「待」と一聲かけながら義經立出、「ヤア〳〵小次郎、けしからぬ勢ひにていづくへ行や」と宣へば、小「君しろしめされずや、此前にて三人が最前よりの相談。末々君の仇するやつばらかたつぱし打殺し、禍の根をはらはん」と又かけ行を、義「ヤレ早まるな」と引とゞめ、「汝より義經が始終の様子は知つたれ共、軍を出さぬ其内に、一人でも味方の勢討取は不吉〳〵。又某を亡さんと彼等がいか程もがいても、燈心で磐石及ばぬ事、構はず共捨置け」と、さも大様に宣ふ中、幕の女中聲々に、「のふ悲しや京の君様御自害遊した」と、さけぶに義經小次郎も驚きさわぎかけ付れば、御いたはしや京の君劍にふして事切給ひ、枕に殘る一通有、こはいぶかしと押ひらき見給へば、筆のはこびも定まらず、讀むも哀の文のあや、「誠に御館へ入しより幾千代迄も末かけて、御情を受參らせんと悅びも仇夢となる、我親の惡心と見るより心附々にも、聞へを憚りとく〳〵」とくり返し讀終り、義「ヘツエ是非もなし。親の惡事に心をくるしめ、世を見限りしか殘念や。死なず共濟むべきに、遉女の細き心、傍に居ながら別れにも我

ふか〳〵—うかうか

平次、幕より立出小手招ぎ、一つ所へ寄りつどひ、武者所時忠に打向ひ、「先達て景高を以て御願ひ申上たる、彼經盛へ遣はされし玉折姫、呼戻して某が妻にせよとの御事、則今日此所で婿舅の結の盃、外に御相談の義も有と景高の内意によつて、是迄推參仕る」と、挨拶すれば打頷き、時「ホヽ、貴殿を婿に取ば、此時忠も大慶。其子細は、義經が邪智にほこり、三種の神器を奪はん爲京の君を望みしを、何心なく緣を組、神寶をふか〳〵と渡したる今の後悔、義經は末々迄我と同意の者にあらず。何とぞ姫を取かへし是なる平次景高、相婿二人都の守護に据へおかば、禁廷は我心の儘、此上もなき悦び」と、いふに平次はしやゝり出、「ノウ武者所、貴殿も我も娘達を女房に貰ふて有ながら、京の君は義經が館に居らるゝ、玉折姫は經盛が西國へ連下れば、兩方ながらおも長な談合」平「サア其事を此平山も、いろ〳〵工夫してゐる」と、案じに時忠打笑ひ、「ハヽアいや其義は何より安い事。經盛と某頃日不中に成たれば、娘を戻せと云ひやらば、緣切つて戻すは治定。又京の君が事は、コレかう〳〵」と囁けば、平次聞よりぞく〳〵踊り、「ハハア奪取とはおちゐ〳〵。幸けふも此所へ參詣と聞し間、首尾を窺ひ奪ひ捕らん。扨此上は義經を亡す術が肝要〳〵。幕の内にて熟談申さん、いざ」と三人立上り、景「サア

わやく—冗戯
かんのう—滿足
しほ—愛嬌
だくぼく—どきどき

世風のやさ姿、お姫様御らうじやれ。ようにたじやないかいな」と、いふ間程なく九郎義經天滿神へ日參に、けふ百日の滿願も、人目を忍ぶ深編笠、熊谷の小次郎を供の丁稚に引連れて、しづかに下向ましませば、「けさとく參詣遊ばして、今比の御下向は、定て道に面白い、お心寄が有たてあろ。さすられなされた此肌を、改めたい」と引寄せて、ふと股ふつより、義「アイタヽヽ」姫「何がいたいへ、ま一つ」と、つめつた跡の紫は、ゆかしの色と見へにける。義經も御機嫌よく、「イヤ是はめいわく。けふは遊山と聞し故、大内は色所嫁入ぬ先に結ばれた、よしみの人にもお出合かと、遠慮で態と遲うきた」と、もたせ詞に姫君は、顏打赤め「コレ申、そんなさもしい濡衣の疑受る覺へはない。わやくな事を」と計にて、おろ〳〵涙に腰元共、「こりや殿樣の皆御無理。何ほ程隱しても、新枕が證據人、たいそに有たかなかつたかお心に覺がある。アレ〳〵申お姫様の癪が上つた、療治して上なされ、何ぞでたんのうなされたら、虫が下ろ」とむりやりに、押やるもしほ行もしほ、「小次郎來れ」と打連れて、幕の内にぞ入給ふ。己が心のだくぼくに、人を埋めて平山の武者所、荷擔の人と出合の約束。かたへに打し幕の紋、目覺のめうが巴、あほうな事を企てゝ、我身をしらぬ平時忠、跡に續いて梶原

此花江南の所無
—江南の所無は
梅の一名なるを
櫻にしたり一枝
を敦盛に一指を
一子小次郎に當
つる事後にあり
此高札今猶須磨
寺にあり其文は
此花江南所無也
一枝於折盜之輩
者任天永紅葉之
例伐一枝者可剪
一指壽永三年二
月日(南畝莠言)
かう〜〜—神々
しい

說し、集に入たる其印、此短册を結びたる山櫻を送るべし。又熊谷は搦手の、經盛敦盛固めたる、須磨の陣所へ打向ひ、若木の櫻を汝が陣屋、義經花に心をこめ、武藏坊辨慶に筆を取せし高札、此花江南所無也、一枝折盜の輩においては、天永紅葉の例に任せ、一枝を伐らば一指を剪るべし。此禁制の心をさとし、若木の櫻を守護せん者、熊谷ならで外になし。其旨屹度心得よ」と、高札は直實、歌は岡部に給びければ、「はつ」と兩人領掌し心を含む禁札の、外を和ぐ和歌の道、花をいたはる大將に、實有色有情有。恥有時忠詞なく、ふせう〴〵に立上れば、二人の勇士も退出の、底の底意を堀川や、深き惠を汲分けて、祝ひことぶく三重御代の春、柳櫻や松梅も、皆御慈愛に生茂り、北野の社かう〴〵と、木の間〳〵に打幕の、内は男女の色はへて都ぞ春の錦なり。九郎義經の御臺京の君、幕しぼらせて出給へば、跡に付々腰元共、「申々姫君樣、いつにないそは〳〵と何を御覽遊ばす」と、尋られて姫「さればいのふ、義經樣は此社へ毎日の御詣で、則けふが滿ずる日と、けさ程より御參詣、お道迎ひの心にて思ひ立た此遊山、木々の花より紅葉より早ふお顏が見たさに」と、夫婦に成つても惚てゐる、心は詞に出にけり。「腰元共も氣をのぼし、「うはのそらめかあれ〳〵、社の方より深編笠、立派な若衆供に連、當

謀を帷幕の云々—史記漢皇本紀の句

さへ給ふな—かけ給ふな

ら、謀を帷幕の内にめぐらし、勝事を千里の外に顯はすこそ始終の勝利たるべき也。義經發向遲なはるは、安德天皇所持し給ふ三種の寶、都へ返すを妬く思ひ、唐土天竺へも渡すか、若海底のみくずとならば、寶祚の傳へます、日の本はくらやみ、とやせんかくやと心をいため、是におはする平大納言時忠は、心惰弱なる御方なれば騙つて緣者と成、賴むより早かけ入て是見よ、神璽内侍所は御手に入、寶劍は安德帝、御身を離させ給はねば、術を以て奪ひかへさん。要害嚴しき平家の備へ、繪圖に畫せて案内をしる、見よ〳〵方々嶮岨を賴みの油斷を見合せ、鵯越より眞下り、逆落しに攻入ば、あはてふためく平家の一類、討取は手裏に有」と、智仁勇備の良將の、軍慮を聞て諸大名、はつと感ずる計也。「ノウ時忠卿、一旦緣を組し上は別心なき婿舅、天下の爲の謀御心にさへ給ふな」と、忿をなだむる頓智の詞、時忠は默然と指俯いて居たりける。義經重ねて、「ヤア誰か有用意の制札」「はつ」と答へて高札さゝげ、御前に指置けば、ずつと立て床の間の、筒に生けたる薄櫻に、件の短册結び付、「いかに兩人、今度の軍は勅諚の一戰、私の趣意にあらず。六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ、御願ひの此御詠歌千載集には入しか共、勅勘の御身なれば、名を顯はすを憚りて讀人しれずと記されし趣を演

いひほぐす―いひこなす

いひほぐせば、菊の前詰寄つて、「イヤ申弟子を贔屓に平家へ心寄るとは大切なるお詞、それには慥な」時「ホヽ、證據といふは其方と薩摩守、兼てより樣子有事知つてゐる。其緣に俊成が平家をかばふ所存といふが某が誤りか」と、我も平家で有ながら、前後揃はぬ詞たゝかひ、義經「暫し」ととゞめ給ひ、「平家方に緣有と、一旦不審立上は俊成卿迄越度となり、集に入事かたかるべし。去ながら所存あれば此短冊、義經が預り兎も角もはからはん。此趣を傳へられよ」と、始終を遉良將の、風雅の返答尤と、時忠詞を控ゆれば、力及ばず菊の前猶も摺寄手をつかへ、「父俊成も此秀歌惜む心に候へば、跡よりよきに御差圖」と、思ひ定めし言の葉も、花に嵐の時忠に、心殘してお暇申五條の館へ立歸る。お次の方より、「武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄、熊谷次郎直實參上」と、披露を待ず立出て、六彌太御前に手をつかへ、「賴朝公より御墨付到來」と指出し、「西國の軍數日延引に付再三の御催促。一日も早く御出陣」と、諫と倶に次郎直實、「君御存しられずや。鎌倉には佞臣おほく、義經は平大納言時忠の娘、京の君に御心を寄られ、亡慮のかまへなんどと賴朝公に讒言申族も有と承り候へば、時移るは惡かりなん、急ぎ御出馬然るべし」と、詞を揃へ申ける。大將莞爾と打笑給ひ、「ホヽ兩人が諫尤なが

のつしりと一置
みありて

り」と取出し手に渡せば、逐一細見有所へ、「五條の三位俊成卿よりのお使者、只今是へ御出」と、取次聲や長袖の、花の香名のみ菊の前、裲姿のつしりとたばひ頃なる白菊の、露をおびたるごとくにて、おめず臆せず打通り、大將の御座近くしとやかに手をつかへ、「わらはゝ五條三位が娘菊の前と申者。父俊成は禁裏にて、千載集の役、折から旅人とおぼしき者、此歌を集に加へて給はれと一向の願ひ、見れば天晴秀逸と感じながらも、私に加へん事もさだかならず、御伺ひの爲參上」と、入る事計詞數いはぬ色なる戀人の、短册御前に指置くも、ゑしやくこぼるゝ風情なり。義經も忠度の詠歌としれどさあらぬ體、手に取て吟じらる。歌「さゞ波や志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな」「ハレ香ばしやあてやかや。何かは苦しかるべき」と、賞美の詞を時忠打けし、「ヤア其歌集には入られまじ。罷ならぬ」と傍若無人、さゝゆる詞を菊の前、「イヤ申 時忠樣、お聞の通りあの歌は、父俊成も感心し、君も御賞美ましますを、集に入なとおつしやるは、誤りばし有ての事か。憚ながら今一度吟じかへして御評議有」と、いひも切せず時「ヤア愚々。ソレ其歌は薩摩守忠度、白髭明神社參の時、志賀にて詠みしは犬打童も知る所。元より忠度は俊成が門家、弟子ひいきに平家へ近寄、後ぐらき此使、追かへされよ」と

戰克の將云々—大將は國の輔弼

京の君—義經の奥方、

念なふ—雜作もなく

一谷嫩軍記

第一

序詞　戰克の將は國の爪牙、犬馬の人を勞ふ則帷蓋を以て是を覆ふ、況大功の人においてをや、重ぜずんば有べからずと、漢書に見へしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて、奢る平家を討亡し、朝家をやすんじ奉らんと、軍慮をうながす堀川御所、日夜に評議區々なる。いで其頃は壽永三年二月半、京の君の御父平大納言時忠、密に須磨の皇居より入來を、儲の上座にすゝめ、義「先以て遠路の所御苦勞千万」と挨拶あれば、時「されば〳〵、樣々術を以て、神璽と八咫の鏡は念なふ奪ひおふせしが、十握の御劍は安德天皇、晝夜隨身ましませば思ふに任せず、先二色の神寶受取給へ」とありければ、謹んで頂拜有、「コハ忝き御念志。是偏に舅君の御働き」と、悦喜の詞に時忠重ねて、「扨又平家の要害、嶮岨を賴みの地理陣取、中々容易の事にあらず、則繪圖に記せ

四つのかり物—地水火風
出—發語にてどれ

共四つのかり物を、かへししまへば油なき、燈火きゆる如くにて、がつくりと伏す有様は、哀にも又おしかりし。「出追つかん」と半兵衛、主のゆかりの一尺五寸、最期のきはと押戴き、只一刀にのどぶえを、貫かれて死したりけり。生年既に三十八、花過比の若緣、木の下闇は青物や、町人なれど古への、武道の燈かゝげたる、末に名をこそてらしける。

やつす—窶す

うぶすな樣—子生れて百日目に此神に參る

じんでう—晨朝にて卯の刻の鐘

暮抱いつすかしつの、愛らしい事見る度に、憂が中をも打忘れ、夫婦は猶もしたしみの媒と成、一つには、世には子をもてば世帯じみ、なり形をもやつすとや、然らば我が思はずの、だても自然とやらむであろ、姑御にも氣にいらふ、あゝ嬉しやなうぶすな樣、平産させて給はれと、願ひしことは徒に、身持ながらにきえて行、名殘は我身一つにて、別れは二つ人間の、種を斷つのも同じこと。何のとがなき腹な子を、共に死なする不便さよ。ゆるしてくれよ」と詞さへ、なく〳〵帶を取上て、肌に廻し引しめて、「皃見ぬ母が形見ぞ」と、かつぱとふしてなきにける。早引渡す山かづら、寺のじんでう告げ渡れば、「いざや最期の時こそ」と、座を打拂ひ身がまへす。おちよは覺悟の面ざしも、名殘の花のあてやかに、露持餘る風情にて、手を合せてぞ座しにける。半兵衛につこと打笑ひ、「ヲヽ出かしたりいさぎよし。未來は一所ぞ迷ふまじ」と脇指を、取直せしがさすが又、永きわかれの顏ばせに、心もさはぎ腕たゆく、さしつけてはためらひ、突かんとしては堪兼ねて、しばし時刻をうつせしが、「なむ三寶おくれし」と、氣を取直し一心に、「南無阿彌陀佛」と刃のさき、喉にぐつと突通せば、あつと計に身をもだへ、手足をのべて苦しげな、中にも夫を打守り〳〵たる一念の、輪廻の心ぞ果しなき。され

末期の祝ひ―娠みて五月になれば帶の祝ひありその帶を岩田帶といふ

かみかたかれ―頭堅くあれ

や、あはてゝほどくかゝへ帶、心は何と白縮緬、用意の剃刀取出し、せきくるふ手もふるひながら、やう〳〵中より押切て、夫の肌を引廻し、しつかとしめてうろ〳〵と、顏を詠めて涙ぐむ。半兵衛詞おだやかに、「そなたがさいごの良も見ず、何しに先立行べきぞ。此脇指は某が、此地へ養子に來る砌、主君よりの拜領。武士の刀は忠義を旨とし、町人は又禮義にさす。太切の一腰を、武道にも用ひず、禮義にもかゝはらず、けがらはしき兩人が、さいごに計つかはん事、勿躰なし冥加なし。武士のまねして引廻すは、主君への追腹。山脇氏に立もどれば、親十藏が封印も、やぶつてやぶらぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが、今の八百やの半兵衛ぞ」と、齒をくひしめて息をつぎ、「是おちよ、其半分のかゝへ帶、そなたが腹にしつかとしめ、四月に成かならぬ子に、せめて末期の祝ひおさめ。世に有ならば來月は、帶の祝よお乳母よと、さもいさましく有べきに、明日をも待ぬ今の身は、五月共產月共、つゞめて名殘おしむぞ」と、そゞろ涙にくれにける。おちよは帶を取上て、しやくり上〳〵、前後涙にしづみしが、「生れぬ先に行末を、かみかたかれといはた帶。それは世に有人の事、是はそれとは引替へて、永き別れの親子の緣。かくなる身とは知らずして、嬉しや子をばうんだらば、二人が中の樂に、明

さ も、死する時節に二つはなし。そちこそ早ふ書置しや」千代「イヤわしとても先立て、さ られた時の書置が、をば樣の手に有からは、是ぞ末期のとゞめ筆。あだの思ひの數々は、 迚もに書きはつくされず。しかし辭世の言のは、殘し給へ」とすゝむれば、半兵衞うな づき筆を取、「げに世の常に死したらば、野邊のをくりの引導に、一句一偈もうくべきに、 此まゝ行かんはかなさよ。そなたも一首口ずさみ、自是を引導共、經帷子のぼんげ共、 廻向の種」と案じつゝ、硯引寄せ書付る、文字もちら〳〵星月夜、讀みつゞけたる其歌に、 「はる〴〵と濱松風にもまれきて涙にしづむざゝんざの聲」おちよ同じくかく計、「古 を捨てばや義理も思ふまじ朽ちてもきえぬ名こそおしけれ」と、兩首一所に卷きおさめ、 半兵衞は懷中より、件の狀箱取出し、辭世に相添へ前にすへ、思ひ入たる體なりしが、 胸押し寬げ脇指を、すらりとぬいて脇腹より、前へなかばひき廻す。おちよは取付聲を 上、「こは情なの御事や。女は心おろかにて、覺悟してさへうろたゆるに、ひとり先立給 ふのは、扨は我身を捨つるのか。恨めしやどうよく」と、もだへふるひて歎きける。半 兵衞ちつ共わるびれず、「女心の淺はかさよ。是程の手で死なんとは、おろかなり〳〵。 樣子有ての切腹、かゝへ帶を二つに切、其一筋にて切口を、いそいでまけ」と聞よりは

はに顯はれ—顏に顯はる

入まへの程—晩年

のつきつめた、氣質ながらも半兵衛は、武士を捨てよと御異見は、我行末を安穏に、あらせん爲の敎をば、今やみ〳〵と死したらば、さぞやおくやみ歎の程、思ひやるさへ勿體なや。養親の仁右衛門殿、おきのよはい生付、此わけを聞給はゞ、老後のうれひ持病のたね。かれといひ是といひ、一方ならぬ不孝の罪、空恐しき身の上」と、くどき立ればおちよも又、ほに顯れて叫入り、「ア、我とても道ならぬ、歎きをかくるは同じ事。老ひたる母の手一つに、そだてあげられ人となり、丁度今年が廿四の、年重なれどけふが日迄、是ぞと思ふ孝もなく、終には刃に身を果し、愁を見する計かは、入まへの程世渡る業、老の湯水は誰取て、御心をやすむべき。不孝共つたなし共、我からわかぬ身の上を、許してたべや母様」と、ほとりも知らず手を合せ、わつと計に泣きまどふ。半兵衛は顏を上、「いつ迄いふても同じ事。夜明ぬ先にさいごをば、心靜にとぐべし」と、西に向ひて手を合せ、「利劍卽是彌陀號、南無阿彌陀佛」と廻向する。おちよはしづむ涙さへ、落ちてかはかぬ小硯を、懷より取出し、「かふならふとは知らずして、西の宮參して、須磨や明石の名所をも、しるしをかんともとめしが、今引替へて書置の、御用意もや」とさし出せば、半「ナフよい合點去ながら、我一代の書置は、懷中の狀箱。心にも文言に

人間一生云々―變化極りなきをいふ、禍之與福兮何異糾纆一也（文選）

ぎゑん―緣喜

流の女―遊女

今引きかへて、死出の門出の相むしろ、未來は蓮の臺共、變じて浮むよすがぞ」と、二人靜に座をしめて、「人間一生あざなへる、繩のごとしと傳へしは、今日の身の上。八軒やで出合し時、互に書置あかしあひ、あやうき命を夫婦共、のがるゝ上は生さきも、諸白髮迄そひはてん、思へば愁のふみではなく、結の神の守札、末賴もしやめでたやと、祝ひしことも夢現、さむればもとの書置よな。とても角ても死神に、引るゝ緣は辻占の、時のぎゑんもなき物」と、身を觀じてゐたりける。おちよはいとゞ打萎れ、「心中とかくふた文字は、流の女に限りしと、昨日はよそに思ひしに、今日は夫婦が身の上に、飽きもあかれもせぬ中を、よしないさはりに隔てられ、あだにくち行是非なさ」と、ひれふしてこそ泣きにける。半兵衞涙にくれながら、「アヽ愚成くやみ事。とかく二人がくさり合、きられぬ緣を恨むがよい。女房さるに七つの法、去らぬに三つの教有、中にも親の氣にいらぬ、女房にそふは不孝也。又いに所なき妻を、去るは夫の義にあらず。とくにいとまをやつたらば、孝行の道は立。しかしそなたの親里は、養ふふぜいもない貧家、すりやいに所ない同前。さるにさられぬ敎なり。此二道にさしつまり、かく成くだる有樣は、もとより覺悟」と詞には、いへ共もるゝ露涙。「いたはしや十藏殿、つねさへ武士

すばる—昴星にて縮まるにかく

十ぐわんじ—三十三所の重願寺と十願

利劔即是—般舟讃に利劔は即ち是彌陀の號一聲稱念に罪皆除かるとあり

四手のたをさ—郭公

ほしとは七夕の、ゆかりと聞けどまゝならぬ、うき世に似たる類ぞや。光も薄くうしとらに、あれ〳〵見ゆるほし樣は、ヲヽ假のうつゝのほし佛。やどり星とはいつまでも、妹脊かはらぬ夫婦あひ。我身のはてはすばるぼし。アヽ思ふまい心から、たとへ奈落におつるとも、三下り祭文あとにかへらじさりながら、女はいとゞ罪深く、したがふ道も忘水。あはれ都のひぼのほし、結目とけて濁江に、うかれし事を思ふには、あまねきかどに立寄るも、爰ぞ一ねん十ぐわんじ、念彼觀音のちからぼし、助け給へともろ共に、心をこめてねがひぼし、みだれ心のみだるゝ共、利劔卽是の誓にて、心やす〳〵極樂に、いたりいたらんこなたへと、互にいさめすゝむ身の、勸進所にぞ著きにけり。捨つるに極めし身の上も、そゞろに心細げにて、三途の川は目の前の、麥吹く風のさゞ浪や、空さびしくも名乘るてふ、四手のたおさを友がねに、さいたら畠の案山子かと、見るにつけ聞くにふれ、あの世にたぐふぞあぢきなき。半兵衞おちよにさしむかひ、「此勸進所のお寺には、談義のたゆる時もなふ、千萬人の參詣に、一遍づつの御廻向も、つひに罪障消滅の、法の緣こそ頼もしき。爰ぞ最期の場所」と、やがて用意を敷きかくる、朱のしとねの毛氈や、「嘉兵衞がくれし其時は、長く身上持ち固め、町屋に住宅すへよとの、心には

たりが中に名取川、およそれ、ふたりと〳〵名取川、ぬれて涙の血に染むる、田みのの島とよみおきし、難波の事も是ならん。よしあしのやかはる世の、それも思へば夢うつつ。うつぼを出でて二人連、色のほかなる色毛氈、ひじき物よとかたにかけ、つらき名殘も今宵ぎり。生れかはりて先の世は、迚も殿御の古里の、はま松風にさそはれて、離れぬ中の睦言を、あだになさじと思ひつめ、よるの玉ぼこ道いそぐ、ちしごくる〳〵數珠のかず、煩惱菩提ときく時は、あの世ばかりの樂に、ゆかんとすれど卯月やみ、涙にくれて道みへず。思ひまはせばはかなしや、かはせしことの淺からぬ、隔の雲のかさなりて、二世とちぎりし中をさく。月にみづまさ花に風。津村の土手をあだしのの。其俤と草深き、螢かすかに飛びつるゝ、身より思ひのあまればや、虫さへ胸をやこがすらん。夜もはやいたくふけぬらん、わけとなき行郭公、實めいどの鳥ならば、地獄の有樣かたれきこ。聞く共いかでかはらめや、今宵限のうき命。とめてとまらぬみつせ川。岸につなぎし綱手こそ、弘誓の舟と觀念し、歎く心はくもれ共、くもらぬ空の星月夜、あらまほしやといふ星も、年に一夜の契ぞや。たとへば雲の上とても、天の川をへだてなば、人のつらさにかはらじな。糸かけ星のほそ〴〵と、つきそひぼしや妬むらん。思ひ

田みのの島―難波潟汐みちくらし雨衣田蓑の島にたづなき渡る(古今集)
よしあしのや―やは助辭よしあしは難波の緣
うつぼ―現を受けて新勢の家をさす
ちしごくる〳〵―知死期が來ると繰るとかく
隔の雲―姑の邪魔
聞く共云々―冥途は恐ろしと聞くとも死ぬ決心はかはらぬ
みつせ川―三途の川
綱手―引き船
年に一夜―七夕をさす

了簡。母の言分一々に、尤至極と思ふ故、千代めは身共が去りました。誰に恨もないからは、家出を致そふ樣がない。それに此者追出せば、結句にお名が出る事。同行衆にも今迄の、千代めが扱捨てをいて、親仁樣へ嘉兵衛をば、佗言頼み存ずる」と、聞くより三人領合ひ、「婆はこちとが手に合はぬ。仁右衛門殿の結構者。嘉兵衛事を佗びまする」仁「ハテ何樣なりと御意次第」三人「あんまり早ふて本意ない」と、笑ふてこそは歸りけれ。母は兎角の詞なく、奥へはひれば仁右衛門も、入らんとせしが立戻り、「半兵衛一つ飲んで寢や。酒は愁を拂ふとは、醫書には書いて有げな」と、しほ〳〵として入にけり。親の恵は深けれど、御縁は今が限ぞと、お千代もそつと這出でて、共に見送る後影。嘉兵衛は何の氣も付かず、締明にする潛戶、「早ふ〳〵」と招けども、猶も名殘は鴛鴦の、泣かじとすれどせきかねて、わつと叫べば漏さじと、打ちかぶせたる毛氈の、闇より闇に　三重　出て行く。

道行ほしのかず

二上り歌　われが戀路はいとなき三味よ、〳〵、なんのねもせで泣明す。見れば思の雲の帶〳〵、拗も短夜、心のせくにござんせ。いやとおしやろとこちやもふ、そふさんせ。ふ

鴛鴦—惜しにかく

ねもせで—ねは音と寐にかく

が、忽ち水になる事を、見ながら嫁が可愛くば、はてどふなりと成されませ。したが私には暇下され。短い浮世に氣に入らぬ、顔見て修羅を燃やそより、頭こそげて未來をば、助かる様に致そふ」と、緩む氣色はなかりけり。仁右衛門今は詮方なく、「半兵衛嘉兵衛爰へ來い。様子は今聞通りの事。いかにお千代に添ひたふても、母を坊主にや仕られまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扨又嘉兵衛も能つく聞け。今では心持直し、身を持そふに見ゆる故、幸甥子の事なれば、家督にせんと思ひ付、嫁を追出し半兵衛も、出て行く様に仕かけると、世間の人に謡はれては、仁右衛門が名が汚れる。一夜も足は留めさゝれぬ。今出て行け」と云渡す。嘉兵衛驚く氣色もなく、「お前の詞を請けずとも、此方から出て行こと、思案極めてをる故に、恨には思はぬが、胴慾なは姑御。嫁一人が憎いとて、大勢に憂目を見せ、嘉兵衛は爰を出て行くと、明日から路頭に立ますぞや。お寺參りの行戻り、薦を冠つて附廻らば、餘りみめでも有まいが。夫でも嫁が去りたいか、堪忍がならぬか」と、恨みてもかこちても、心つれなく返事せず、見向もせねば詮方なく、ずつと立て行所を、半兵衛は引留め、「ヤレ狼狽者何所へ行く」嘉「お隙が出たで去にまする」半「先待て」「イヽヤ」「暫」とて、押合へし合引据へて、半「コレ親仁様、早まり過ぎた御

ひづみ—ゆがみ寝ふる
侘言の手は云々—詫言のすべはないやうになる
八文字は云々—八文字に歩く様なはではなけれど字一字書けぬが難なり
結構者—すなはなもの
冥加—若荷にかく
ところ—所と野老とかく

い衆の、嫁御にしては似合ふが、此方づれの内にて、飯をも焚かにやならぬ身で、肌には小袖鼻紙は、延でなければ手に觸れず。わし等はお寺の奉加さへ、百日の銀は太儀なに、五兩とやらの櫛をさし、鳥甲ほど髻出して、太夫の道中する様に、狹い所を八文字、其所らあたりの青物は、踏潰されて芥になる。其つひゑでも積つたら、此身代はひづみましよ。是が八百屋のお内儀に、成り遂げふか」とゑせ笑ふ。七兵衛にじり寄り、「此方の様にいひ立れば、侘言の手はあがれ共、何所を聞ても其様に、よい事計はそろはぬもの。身共が嫁は隨分と、世帶は能うする歩くにも、八文字は踏まね共、一文字を得引かいで、是も又氣の毒。仁右衛門殿、其方も少と物いはしやれ」嚊が怖さに默つてか、結構者じや」と囃されて、仁「あんまり自慢あそばすな。結構とは冥加の事、とうなんとはところなり、せいなんとはせりの事。半兵衛連添ふお千代なら、小殿原では御座らぬか」七「もし闇の夜のつれをのこ、心中などを召れたら、取返しはならぬぞや。少相談もして見給へ」仁「如何にもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば、短氣を出すまい物でもなし。腹に物いひ有共聞く。孫を愛して遊ぶなら、嫁の憎さも忘られん。ナウ嚊何と思やる」と、やはらを入て占問へば、婆「いか様此方は如來様、二三十年身の油、絞り溜めたる金銀

いはれぬ—無用
引つかける—茶碗酒を呑む事
あへんど—何の返答も
ふくれ—立腹
ひげこ—竹の端を編み殘したる竹籠
ちん〳〵—仲善し

に椎茸の、莟を選つて居たりけり。仁右衛門戸口に立休らひ、「太郎兵衛殿五右衛門殿、七兵衛殿には取分けて、遠方といひ夜も更ける、ひらにお歸り遊ばされい」七「ハレヤレいはれぬ御遠慮。おひざをだきに三人が、申合せて參るから、七兵衛一人は歸られぬ。夜食は喰る引つかける。煙草一服御亭主の、お氣扱には成まい」と、明くる潛戸我一と、せり合ひ内に入にけり。五右衛門先へ進み出、「早速ながら申ましよ。御夫婦共に能ふ聞かしやれ。是の嫁御が去られても、手前に損も仕らず、呼戻されても此方に別に利德もなけれ共、よく〳〵懇意に思ふ故、宵から今迄三人が、取付引付頤の、かいだるいほど佗びれ共、あへんどもうたれぬは、侮つての義か但又、大切な事他外で、言づてわざな仕方じやと、ふくればし有てかと、是迄附いては來れ共、いふべき程は最前に、底を叩いて仕廻ふた故、急に才覺成りませぬ。兩人出やれ」と押しすさる。太郎兵衛ひげこに腰をかけ、「夫婦合に別義なし、不義放埓だに有らざれば、何をしおち、何を非難に去なすべき、姑去に極つたり。假令五日が十日でも、お千代の顔を見ぬ内は、太郎兵衛が朝夕を、此内で養はれん。かた〴〵如何に」と佗びにける。姑はつゝと出、「アヽ太郎兵衛樣よい推量。仁右衛門殿は佛樣、女夫の中はちん〳〵、去なしたは此母。お前の樣なよ

叶はずし―叶はずして

た様に打晴れた。借屋の事も内證も、萬端お主を頼み入。當分は先親里へ、戻してをくが能い道理。女房、嘉兵衛に禮いや」と、僞知す目くばせに、お千代もやがて合點して、「お志の數々は、どふも詞に盡されず。夫婦が命の親樣」と、手を合すれば此方にも、嘉「若輩者のいふ事を、得心有て嬉しや」と、誠と嘘の笑ひ聲、夢に夢見る如くなり。仕濟したりと半兵衛は、お千代と共に立上り、半「伯母の方迄宵の内、送り屆けて明朝は、古郷へ送るべし。親父や母の歸られたら、未庚申から戻らぬと、とき〴〵首尾を合せて」と、云捨行くを引留め、件の毛氈差出し、嘉「お駕籠の内の敷物に、進上致すと申義は、慮外がましく候へ共、嘉兵衛が僞の寶物。追出されたる其砌、朋友どもが指さして、疊の上では死ぬまいと、陰事いふが無念さに、心をなをしていんで見しよ、夫とも願叶はずし、辻かいもとで死ぬる共、毛氈敷いて居るならば、疊の上も同然と、意地を立てたが身の幸、一度此家へ立戻る、嘉兵衛にあやかり給へとの、御祝儀なり」といひければ、お千代はじつと笑顔して、「何より嬉しいお心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らん」と、詞のはづれ氣も付かぬ、流石若氣の不覺なり。然る折節仁右衛門夫婦、同行衆と高咄、はや門近く立歸れば、嘉兵衛騒がずお千代をば、小櫃のさきに屈ませて、半兵衛共

おもはゆげ—恥かしさうに

やれぬ。私事は二三度も、追出されたる身なれ共、伯父仁右衛門に色々と、侘事立て給はりし、お前の情で立て居る、嘉兵衛に何の遠慮が有。いか程隠し給ふても、聞ねど知た御心底。同行衆の扱ひが、叶へば重畳さもなくば、刺違へんとの云合せ、見付た所は違ふまい。切なふも悲しうも、思召さるゝ筈なれ共、死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど、銀に詰るか逢ふ事の、ならぬ切迫の時にこそ。八百屋と云ば軽けれど、勝手乏しい事はなし。上町邊に貸屋をかり、行通ふても逢給へ。假令五貫目三貫目、帳面合ぬ事あらば、嘉兵衛一人が引負て、お二人の名は出すまい。命の替に立たいと、思ひこんだる私が詰らぬ異見は仕らぬ。思案をかへて下さりませ。縋付ても取付ても、中中死せはしませぬ」と、誠を立る男泣、優しくも又わりなけれ。半兵衛も稍涙ぐみ、「慈悲成親の血筋とて、頼もしい氣を持ものかな。其心共汲知で、隠せし所が面目ない。お千代〳〵」と呼かくれば、おもはゆげにも立出る。目は泣腫れて顔痩て、見交す計打守り「ナウおいとしや」と、いふより外はなかりけり。半兵衛心に思ふ様、死ぬるといはば此者が、付纒ふて放れまじ、賺して此場を脱れんと、世に嬉し氣に打笑て、「實負た子に教へられ、淺瀬を渡るといふ如く、其方が異見にて、兎や角思ひくづおれしも、洗ふ

せたげられ―責められ

うちら―ら は助辭

みのづるし―みのぼし

と、契をかはす間々に、市とやらいふ生娘と、ちえ〳〵くり事がこふじてきて、はや五月の腹に帶、隱されもせず親も知り、つい呼入て嫁廣め、祝儀の樽を送るやら、三國一を謠ふやら、其所ら近所がざゞめけば、なをが燃立つ胸の火に、よね傍輩が焚付て、彌兵衛が往て居る先々へ、付て廻つて恨泣、喰付嚙付しがみ付、去るか死か死か去るか、二つ一つとせたげられ、孕んだ女房は去されず、なをは彌々堪忍せず、是非に及ばず心中し、難波の野邊の草の露、名は繪双紙に留まりぬ。色と義理とに迫つては、日比の智恵も出ぬ物。其所が膝とも談合で、此方とが樣な者にても、明していはゞどふぞ又、死なさぬ首尾も有べきに、聞へぬ堀江の彌兵衛や」と、むしりかけたる口占に、半兵衛ぎよつと行詰り、物をも云ず押込の、内にお千代はわくせきと、身を悶へたる胴ぶるひ、襖に響き敷居迄、びりゝ〳〵と鳴渡れば、女はうちらで鼠なき、男は外から猫の眞似、憂が中にも可笑けれ。嘉兵衛そろりと立上り、「みのづるしなどひかれては、もとが子になる穿鑿」と、つか〳〵と立寄るを、半兵衛あはて突倒し、「嘉兵衛お主も相應の、惡所遊びもする男、ひよつと出合の初戀を、見現しては興がない。其所らは粹め氣をとほせ。とほせ〳〵」と侘にける。嘉兵衛疊打叩き、「あんまり夫は曲がない。なぜ有樣におつし

とろく―底

子持鮒―娵めるも千代をさす

吸物―推量にかく

恨葛餅―葛の葉は風に裏を見する故續けたり

押當―よい加減に

手だれ―巧者

敷包の疑なら、是御覽あれ赤毛氈」半「ハテ似合ぬ物を持て居る」嘉「イヤ樣子は追て申べし。夫婦の衆の留守の内、櫃のとろくへ納ん」と、明にかゝれば手を取て、半「近比小氣な男かな。見付られたら半兵衛が、遠叅土產といふてをけ。先下にゐよ商賣の、返事が聞たい獻立は、何樣じや〳〵」と紛らかす、詞のはづれ顏の色、心は付どつかぬ振、押鎭りて畏り、嘉「明日のお振廻、お客の方から獻立が、謎に致して參りしを、有增計覺書、聞し召」とぞ讀上ける。文句「先本汁に大寺や、邊に遊ぶ童は、ちしや白魚と知れたり。有情非情の乘合に、棹なき舟の行方とは、貝燒などの事ならん。木の葉折敷其上に、から紅の心中とは、憐とぞ見る子持鮒。添ふに添れぬ中々に、寧刃に指身とは、包めど我が吸物に、幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が替れば氣も替る、又面白い獻立の、出來まい物にも候はず。定めなき世は人の常、何をか恨葛餅が、後段の筈に候」と、心に餘る異見狀、押當てこそ讀にける。半兵衛はさあらぬ顏、「扨面白き獻立や。併魚類の振廻を、なぜ肴やは請取ぬ」嘉「されば夫にも話有。お出入致す魚賣に、堀江彌兵衛と申せしは、器量は左のみよからねど、戀路の手だれ上手者、惚れたお山が三百人、忍んであふが四五十人。中にも若松やなをと、互に腐り合、女房に持ぞ持たれん

打明ぬ—事實を打明ぬ

先成小板敷、撫つ擦つゝ戴いて、「仁右衛門樣の折節に、爰に座つておはせしと、思ひ出すも懷しや、不調法なる自が、悪い所を陰になり、日向になつて明暮に、姑御へのお取なし、數限なき御恩をば、死しても如何で忘るべき。去るゝ朝も膾して、手づから御膳据たれば、物をも云ずほろりつと、泣いてお箸を取れたる、其面ざしが見おさめと、なり行身こそ悲しや」と、咽返るこそ道理なれ。ともに鳴音の半兵衛、「尤なり去ながら、そなたの事は數ならず。國を離れて十五年、誠の親より大切に、介抱有し甲斐もなく、先立ッ我は不幸とも、物知ず共思されん。御心底こそ恥し」と、しやくり上てぞ居たりける。よそにも嘸な袖の雨、風呂敷包手に提て、嘉兵衛すた〳〵立歸り、しやくれど明ぬ表口、割る計に打叩く。二人ははつと立上り、うろつく内に外よりは、「明けよ〳〵」と喚く聲。半「おゝ〳〵」と計にて、彼方此方と這廻り、やう〳〵と身を押込に、千代を忍ばせ半兵衛は、戸を開れども打明ぬ、胸塞りてきよろ〳〵と、物をも云ず立まへば、嘉兵衛も共に隅々を、覗き廻りて押込を、明んとするを立隔たり、半「嘉兵衛慮外な、何故明る」嘉「ハテ珍らしい御咎。此押込は道具入、用が有て明まする」半「イヤ〳〵用が有にもせよ、宿へ戻つて直樣に。其上包んで手に提しは、何方で取て來た」嘉「ム、風呂

つて來い。參れ〳〵」とそやされて、常も利助は飛介で、帶もそこ〳〵駈出れど、嘉兵衞はじろりくわんとした、顔つきさへも氣味惡く、稍暫したためらふて、半「親父や婆は同行衆、兎や角と有挨拶に、夜明でなくば歸られまい。隱れて嘉兵衞も參つておじや」嘉「いやまあ止に致しましよ。相場の惡い折節、ひよつと知れたら彼婆が、竝大體じや有まい」と、取ても付ぬ挨拶に、重ねて返す詞なく、半「成程夫は能い嗜み。其心から此比は、商賣に精がいる。旦那衆から青物の、御用はいふて來なんだか」嘉「誠に忘れて居りまする。平野屋殿から、明日は振廻をする、半兵衞にちよつと參れとお使が、二三度も立ました」半「ム丶左樣であろ〳〵。行かずばなるまい去ながら、殊の外なる草臥やう、名代に往て聞ておじや」嘉「イエ〳〵先より念入て、獻立も相談する、直にと有の御使。御太儀ながら」と動ねば、半兵衞わざと腹立聲、「子細をこねる男が有。獻立一つ書く程の、器量を持ぬ其方なら、明日にても半兵衞が、死だら八百屋仕まふか」と、きめ付られて是非もなく、不審顔して出て行。影見送つて表へ出、千代が手取て引入る。跡は戸鎖に詮方も、淚先立計なり。千代は覺えず聲を上、「移れば變る世の中や。二人添寢の諸白髮、千年と賴む我家を、今日は冥土の旅やどり」手馴し襖押入も、名殘惜げに彼處此處、見世の

わゝしいわろ—騒がしい奴
耳より—何より よい事を聞く
まいまいと—うろ／＼と
ける程に—強める爲にかさねていふ詞

と頼まれますと聞と早、わゝしいわろが小聲に成り、何樣やら夫は耳よりな、兼々お主も知る通り、役に立ずの嫁御寮、さらりと去て其跡へ、どふぞ世話して貰ふてたも、燗を仕てこい一杯と、天目酒に呑こんで、先へ云込む此方へも、返事聞せてひつそく／＼、領あひの最中」と、聞くさへ胸も冷やりと、お千代は其所を立退ど、半兵衛はまだまいまいと、這入たそふに覗き居る、袖口取て引戻し、千「扱衆の返事迄、待事もない我々が、最期の衣裳も守り迄、小宿へ出して有上に、うろ／＼そこに居給ふは、今の咄しにお心が、残りやする」と恨むれば、半「アヽ由ない事をいふ人かな。おれは心が残らねど、去れた其方を此内へ、呼戻したる心にて、中戸口から手を引ば、夫ぞ誠の夫婦連、恨み悔みも晴ぬべし。思案こそあれ暫く」と、立忍せて半兵衛は、潜押あけずつと入、半「両人共に待たであろ。日暮れぬ先に戻らふと、思ひの外に當月は、いつにかはつて大参り。子細を聞ば去ぬる夜、音樂響き花降て、雲中に御聲を上、庚申の御神體、青面金剛童子とは、文字も青き面と書く、青きを好み給ふ故、青物賣を守らんと、新に御告有し由、言傳へ、聞傳へ、市の側から打あけて、参る程にける程に、御門前から押あふて、鰐口の緒へ取つく迄、ゆつくりと三時半。斯る尊き物語、聞て内には居られまい。嘉兵衛も利助も参

見ざる云々—庚申塚には必ず目、耳、口を塞ぎし猿の像あり
呟き—粒にかく
熊手性—熊手でかきさらふ程取りたがる慾心

戸をば明まいぞ。合點がいたか」といひければ、与「コレ噂さがなふ物をおいやるな。養子に來てから今日迄、夜泊をせぬ半兵衛が、庚申參りすればとて、戻るまいとは何故おしやる」婆「サア半兵衛のまゐりやつた庚申樣は石町。伯母の所へ先度から、嫁のお千代めが來て居るげな。顔付合せ夜もすがら、庚申待をしをらふ」と、女の性は嫁や子の、中もほうがい悋氣口。内外の者の聞前も、迷惑そふに仁右衛門は、「はて扨夫もまゝにしや。見ざる聞かざるいはざるが、庚申樣の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と繰る數珠の。呟きながら打連て、表へこそは出にけれ。續木の枝は雨露の、惠も薄き桃櫻、半兵衛夫婦が身の上に、今こそ思ひ知れたれ。五日と限る約束の、今日さへ暮れて初夜の鐘、覺期は胸に極まれど、同行中の扱ひを、若やと計頼みにて、知死期待間の二人づれ、親の目ぬすむ夜歩行は、我宿ながら忍ばしく、そつと潛に耳寄せて、内の樣子を窺へば、嘉兵衛は筆を持ながら、つく〴〵物を思ひ顔、「ナント利助、お婆が先の氣相でも、寺同行の御異見で、邪見の角が折れふかい」利「イエ〳〵存じもよらぬ事。生れついたる熊手性、今度の起りも根が慾から。按摩取の印可めが、跡先なしの饒舌口、さる浪人の娘とやら、年は十八敷銀は、大金で七十兩、氏系圖より慥成商人へ遣たい、

地水火風―人の五體は此四つよりなる
八百屋―矢にかく
吉野葛―よしにかく、以下野菜にかけていふ
ふきの姑―蕗の葉のたちたるもの、姑にかく
嫁菜―嫁お千代
千代とは云々―千代とは末長き意なれども女松茸の如く短命にかく
談義―說教
同行結―同行の寄合
當屋―番の當り宿
しゆんだら―酣になる
つこど聲―尖聲

る。

第三

世の中は、しんき〳〵の新うつほ、地水火風をかり住居、光陰早き八百屋店、內證ともに吉野葛、練れた親父は結構者、ふきの姑苦口に、嫁菜の袖をひたし物、千代とはあだの女松茸、二世の緣さへ瀨にかはる、淺草海苔と身は焦れ、何としやうがも松露にも、心計をつく〴〵し、筆には盡ぬ憂ふしや、宵庚申を精進の、だしに仕ふて半兵衛は、晝より出し留主守り、仁右衛門甥に嘉兵衛とて、戀の物馴譯しりが、首尾をくろめる墨硯。手代利助が算盤も、きのどく〳〵と彈くなり。後世の元手の念佛講、闇路を照す小提灯、仁右衛門夫婦奥より出、「ホヽウ嘉兵衛、きどくに精が出る。若い間は銀ずき、年寄つての談義ずき、是人間の一大事。同行結の掛錢も、ない袖ふつては交際れぬ、今宵の當屋はいつとても、法度を背いて夜食が出る、酒もしゆんだら夜が更ふ。半兵衛が追付戻る迄、見世をば明な寢まいぞ」と、老の繰言細やかに、詞のあとも釘をもつ、姑はつこど聲、「半兵衛は今夜戻りやせぬ。表も裏もしめて寢や。夫婦が聲でたゝかずば、必

せつぱして―是非共工夫して

付しねうち云々―駕籠賃五十文なりと舁夫がいふ言葉は坂東聲なり齋藤實盛が手塚に名乘りし聲は坂東聲なればいふ

三百目―密夫の科料は三百目の定め

聞入て、そうさへなれば互の爲。若も五日が過たらば、此方の内へ持込むぞや」半「夫迄なしにせつぱして、手廣ふ迎ひに遣りまする。違ひはない」の誓文と、互に堅め居る折ふし、カゴ「駕籠遣りませふ駕籠遣い、遣りましよい」とぞ云掛る。幸 東も白んだり。人目を忍ぶ夫婦連、千代をば乗せて駕籠の戸に、付しねうちも坂東聲、さねもりなりと人や見ん。斯る所へ與次兵衛が、噂に寄りし忘八の者、ばた〳〵と駈來り、「此駕籠なは紛者、ソレ引出せ」と罵れば、半兵衛駈隔て、「近比無體千萬。此内は身が女房、荒氣を出さずと通られ」と、斷りいへど聞入ず、「お内儀樣拜みたい〳〵」とばれかゝれば、半「ヲヲ女房の開帳なら、先三百目持て來い」忘八「ヤアいつはろまい吐すまい。夫見よ」と駈寄るを、半「ならぬ」と支へて入亂れ、彼方へ押合此方へくづれ、暫し揺あふ其隙に、一人はづして駕籠を明け、提灯揭げびつくりと、「こりや違ふた」と飛退けば、皆一同に首尾わるく、揉手をして腰屈め、「ハヽ〳〵結構なお内儀樣。是を次手にお近付、笠の御用に立ましよ」と、云捨てこそ迯にけれ。半兵衛怒り押鎭め、本意なけれども親よりの、意見の狀箱押戴き、「堪忍するが町人風、女房は又當世風。世間の人が譏ふが、母者人がくすべうが、此ばつとした俤を、我等が宿のお千代じや」と、打連てこそ 三四 歸りけ

片附—再縁

いつまで草—壁などに生える蔓草、いつまでのつりもその縁

した我身をば、酷い」と計半兵衛を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、滿來る汐ぞ涙なる。伯母は思はず聲を上、「アヽしほらしの心やな。世には去れた夫への、面當の又意地のとて、つい片附も有に扨、命を捨て先の世を、頼むと迄は古の、嫁鑑にも勝るべし。去ながらとつくりと、合點をして見てたも。和女一人を親伯母が、頼み切たる杖柱、男へ計道立て、二人に孝はないものか。嫁らそふ共いふまいし、奉公さしよ共申スまい。いか成貧苦を凌いでも、まめな顔見りや嬉しいぞや。必死んでたもるな」と、歎き佗るぞ切なけれ。半兵衛涙押拭ひ、「思ひ詰たる志、滿足せり過分なり。何を隱さん某も、國元で口論し、打果さんと思ひ詰、早書置迄認めしを、親十藏の異見にて、命を繋ぐ封印を、此狀箱におされし故、深き疑ひ受ながら、開く事なりがたし。半兵衛が書置は、父が見付て命をのぶ、今又和女の書置を、半兵衛が見て助くるも、行末目出度吉左右なり。町衆又は同行中、たゞきまはして近日に、再度内へ呼戻さん。伯母御お千代を暫しの内、此方へお預け申たい」伯「ムヽ口では美事捌けれど、いつまで草のつり詞。合點がゆかぬ」と頭ふる。半兵衛は思案して、「然らば今より日を切て、五日が内にさつぱりと、お千代を内へ呼入ん。夫迄のお情を、了簡あれ」と手を摺れば、伯母もやう〳〵

いつかい—大なる

あめ山—天山

な。暇を取は取たれ共、不慮に逢ふての間に合口。間男の出合宿。伯母御のいつかい返禮に、痴話文讀んで聞さん」と、封押切て繰開けば、コハ如何に最期の一通。ハット思へど心を鎭めて讀上る。文句「形見ながらに書置の事。一我身拙ふして、半兵衛殿と夫婦に成り申ス上は、お二人樣をば誠の親より大切に思ひり〳〵。され共足はぬ心から、お氣にいらぬのみならんに、今迄の御憐み、あめ山忝く思ひり〳〵。一夫婦となり申てより、ついに一度の詞もあらし申さぬ中に、思ひもよらぬ別を致し候事、よく〳〵の緣の切目と悲しさ此事に候。一高麗橋の伯母樣へ、歸り候事も恥しく、石町の伯母樣京の母樣、何れも貧しき活計に候へば、身を寄せ候事も痛はしく候。彼是思ひに迫り、命の際に成申候。殘り多きは盡せぬ中、取分可愛きは宿りし我子、共に消失せ候事、わく方もなき此身の因果、夢の世の中とは申ながら、又改めて夢の樣に、かへす〴〵も、はかなく思ひり〳〵かしく」ハット計に讀終り、三人共に差俯き、聲も立ずに泣沈む。お千代やう〳〵顏をあげ、「兎や斯ふ思ひ直しても、夫に離れ存らへて、あらぬ命と覺悟して、此世の名殘母樣の、お目にかゝつて其後は、身を淵川に沈めんと、思ひ詰しに伯母樣に、逢ての後は折もなく、今迄存らへ候ふぞや。此世の緣は薄く共、未來で永く添ふべしと、樂に

抜やった—欺いた
はち言放つ—断言して

道理去ながら、神以て存ぜぬ段、いか様の義も致さん」と、立寄る拍子に懐中より、狀箱の落ちけるを、伯母は取あげつく〴〵見て、伯母「宛名は八百屋仁右衛門様、山脇氏半兵衛とは、此方の事では御座らぬか。狀通は致さぬと、ぬけ〳〵と能ふいはしやるのふ。定めしお千代が事であろ、何の様な酷い談合ぞ。封切て見ましよはい」半「いや〳〵そうした物でない。此方へ遣はされい」伯母「ハテ紛れない隠すまい。讀んでなり共腹愈ん」と、既に封印切かゝれば、半兵衛あはてもぎ放し、箱を開くれば忽ちに、疑ひは晴るれ共、親の異見の命の封、切るに切られぬ恩愛の、深きに換てさがなくも、養ひ母の胴慾さ、思ひ廻せど流石又、隔てし中と義を立て、口には出さぬ品々の、恨は切て目に漏る、涙に晴す計なり。お千代はくはつとせきあげて、「欺しやつたの抜やつたの。其心とは知らずして、母様や伯母様の、恨み誹りを云宥め、半兵衛殿はいとしげに、さもしい心は御座らぬと、はち言放つて今更に、面目ない恥しい。恨めしの男や」と、肩に喰付膝に寄り、身を悶ゆれば袂より、一通の文落ち散たり。半兵衛ちやくと取上れば、其手に取付噛付て、「大事の物じや戻してたべ。見せては悪い」と周章しを、取て突退け睨み付、半「去れた様子が知れかゝる。勿體なくも母人を、邪見な心と恨みしが、却つて慈悲であつたよ

さがなふて―よくなうて
影ひなた云々―影になり日向になりて妻を愛する
人あいなら―人つきあひといひ

方と兼て相談の、慥な印是見やしやれ。姑どの直筆、お千代をば去狀。夫婦の中ののきざりは、試の親でも我儘に、さつぱりとはならぬ物。腹かさぬお袋が、心一つで書れふか。是でも物が云るゝか」と、半兵衛に投付れば、不審ながら取あげて、つく〴〵見れば暇の狀。是はと計差俯伏き、二度悃れて見へにける。伯母は恨の詞さへ、胸に餘りて目に涙、「聞へぬぞや半兵衛殿。此方は元がよし有身、仁衛門殿もれき〳〵。千代が一家は吹けば散る。此方風情は疎れても、元より緣はきたない物。女房さへ可愛くば、そこに隔ては有ぬ筈。姑御のさがなふて、取惡い御機嫌に、辛抱するは何故ぞ。男の顏を樂みに、暮す女房に口出して、贔屓こそ成るまいけれ、影ひなたになる程の、氣骨は折て遣れても、さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに、物もみん事繕ひまする、書出し一ツする程の、目は親立があけておく。紡績なら人あいなら、器量は此方の覺てなり、少の落目ははでなれど、若い時が二度はない、さのみ無理にもあらぬ筈。花の盛をうろたへて、京の親元三界へ、行ても居られぬ貧しさを、睨みあふても濟ぬ故、身の片付を奉公と、思ひ定めて連て來た。嘸本望で御座ろふ」と、たぐりかけ〳〵、口說かこつぞ道理なる。半兵衛終始を聞入て、「成程々々一通り、かふ見た所は私に、恨みは

かたむくろ―堅意地
問はぬも云々―武藏鐙さすがにかけて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし（伊勢物語）。

お前も一つ云々―半兵衛も姑と同じ腹
けでん―怪顚にて驚き怪しむ
しがく―才覺か

ならめふ―並べう

た。はあ是もいふまいさあ來い」と、急ぎ立れば半兵衛は、猶も向ふに立隔て、「夫は餘りにかたむくろ。疑ひまがひも有ならひ、善惡共にいつ迄も、樣子を聞ん」と苛ちける。お千代涙の下よりも、「問ぬもつらし問ふも又、むさし鐙のかけてだに、知し召れぬ事ならば、聞て哀をかけてたべ。お留守の内に思はずも、姑ざりの力なく、せふ事なさにすご／＼と、里へ戻りて母樣の、朝な夕なの煙さへ、立かね給ふ其中に、四五日かゝつて居る内に、此伯母樣が京參り、立寄り給ふを幸に、行方定めぬ下り船、淀まぬ水の緣にて、相見る顏は變らねど、變るは今の我身の上。男の心は川の瀨に、譬へてあれど自は、飽れた中とは思はねど、母樣や此伯母樣は、お前も一つつらさぞと、恨みて今のすね詞。云譯をして給はれ」と、口說歎くぞ道理なる。半兵衛「ハッ」トけでんして、騷ぐ心を押鎭め、「歎くは道理去ながら、不慮に爰にて出逢ふが、夫婦の緣の切れぬ故。思案しがくも有べきぞ、氣遣すな」といひ宥め、「是伯母御お腹立は聞へたり。身共へあたりは不了簡。當月初つかたよりも、參宮致し直樣に、國元へ罷越、逗留は只二日、其外は皆旅の空、狀通致さん樣もなし。留守の間の云事を、半兵衛も一所とは、廻り過たるお疑ひ。機嫌直して此上の、相談あれ」と佗ければ、「ナフ當どのない事ならめふか。此

喰ぬ顏—信ぜぬ顏
こうと—質素
はまつて—欺かれて

るゝ如くなり。與次兵衞立寄て提灯の、影に見るより打頷き、「ハヽァ大かた是臭い物。ぬく〳〵と駈落じやの。追手の衆が此方にじや。いざ御座れい」とせる所へ、次の舟より半兵衞は、遠刕よりの歸り足、何心なく揚場に、男女の喚く聲、立寄て小提灯、半「ヤア女房か」千「半兵衞殿」半「是伯母樣扨々」と、互に餘儀なく見へければ、與次兵衞は猶うさんげに、扣へて樣子を窺ひける。半兵衞はしとやかに、「誰方かは存ぜね共、誰も心のせく時は、人違は有物。正しく是は身が女房。外をお尋ねなされい」と、いへども與次兵衞喰ぬ顏、「扨は左樣かいか樣にも、町方の御内儀には、ばつとこうとな御風俗。御亭樣なら一連かと、思へばそうでも有そむない。はれやれ御麁相申た」と、詞を殘し歸りける。半兵衞打笑ひ、「麁相物と惡銀は、いかさま世間に多い物。して先お千代伯母樣と、何故の上のぼり。お袋は御無事なか、どふじや樣子が聞たい」と、詞の内よりせき立て、お千代はやがて取付を、伯母は駈寄り引放し、「エヽ未練な、何にも云やる事はない。此方へおじや」と手を取を、半兵衞留めて興醒顏、「伯母御はいかふ不機嫌な。女房に恨か身に當りか。何共合點のゆかぬ事。お千代どふじや」と尋ぬれば、伯母は彌〳〵氣を悶へ、「扨しら〳〵しい空とぼけ。夫にはまつてお千代はの、とぼけ倒れになりまし

蒲團はり―馬に蒲團敷く

八軒や―八ツにかく

上の衆―京坂地方の人

るいせん―類船

ぼつとり―肥えて愛嬌ある

那八つがなる。あぶ付跡付布團ばり。早ふく」と呼立れば、半兵衛ハツト立上り、「時刻に及ぶ御暇」千「ヲヽ〳〵まめで」半「御堅固で」千「是程目出度別れはない。さらりと笑ふて〳〵」と、良見合するにつこりも、後の名殘と 三重 成にける。

第二

難波津や、賑ふ門もさ夜更て、軒比ぶる鐘の聲、數は幾許ぞ、八軒や、あまの漁火と揭げたる、宿の行燈しん〳〵と、濱風あをつ揚場に、遠近人の下り舟、押竝んでぞ乘り寄る。船頭眠りを呼醒し、「サア〳〵著たぞ揚らしやれ。置忘のない樣に、諸事改めて」といふ所へ、泊宿の亭主、三笠屋與次兵衛出來たり、「待た〳〵船頭衆、改める事が有。宵の内から我方に、上の衆じやが二三人、駈落者のお尋ね、島原の色じやげな。殘らず舟を吟味して、賴む〳〵」と犇けば、船頭共聲々に、「るいせんの内やう〳〵と、女中は二人ばつかり、一人は内儀樣、一人は若いぼつとり樣、それ〳〵其所へ揚らるゝ。勝手次第に穿鑿」と、ざはめく内にしと〳〵と、苫漏る露も情知る、由緣に靡くなぎ袖や、小褄に色を抱へ帶、華美な姿の女房に、はゝの連立其風情、荒し軒端に三日月の、光こぼ

瀧津瀨―溢るゝ淚に袖は筏の如く浮くとなり

丑滿―午前三時

なとこそ敎ゆるに、町人にして其方が、安穩なれとの御哀み、親十倍の主君の恩。夫を忘れて短慮にも、討果さんとは何事ぞ。天命知ずの不忠者」と、口說立てぞ泣にける。稍有て淚を押へ、狀箱をしつかと封じ、我印判を取出し、とぢめにひしとおし認め、半兵衞が前に据へ、「心を靜めて能く聞け。其脇指は君の魂、此印判は身が魂。書置開くは死後の事。夫を閉るは太切な、命の門を固むる封印。堪忍の締口を、開くまじとの誓文にも、起請文にも此文箱、肌を離さず懷中し、是神明のお祓い共、守共印文共、誓を立て忠孝を、思はゞ身をば顧みて、死でくれるな半兵衞」と、心詞も瀧津瀨に、袖はいかだと浮きにける。半兵衞前後淚にくれ、物をもいはず居たりしが、押直り聲をあげ、「ハア淺ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲、養父へ孝の三つの海、渡り比べて數ふれば、假令我身を百千に、碎きても飽足らず。生あればこそ骨に染み、胸にとほりし御異見を、何しに他になし申さん。ふつゝと心を取直し、武道は口にも出すまじ。過り入て候」と、手をつかへてぞ侘にける。十藏につこと打笑て、「出かしたり滿足せり。いよく〜相違有まいな」半「ハア何が扨飜へさぬ」十「ヲヽ嬉しや落付た。是もお主が可愛さ」と、又打とけし淚なり。はや丑滿の鐘の音に、續くしやん〜馬の鈴、門外に聲高く、供人「サア旦

當言―當てこすり

十藏頓て立寄りて、懐中したる狀箱を、引たくれば詮方なく、差俯いてぞ居たりける。十藏涙をはら〱と流し、汝が短氣を知りし故、襖の間より差覗き、最前よりの有樣を、一々殘らず見屆けし。二人の親の恩計、思ひ出して大殿の、御恩の程は忘れしよな。十二の年より御前へ出、小性數多有中にも、勝れて御不便加へられ、其餘慶にて十藏も、不時の御加增頂戴し、喜悅の眉を開きしに、長崎よりの客僧、賢藏主といふ相人、汝に刃の難有と、密に殿へ傳へし由、殊なう驚き思召、御前に人なき折ふし、某を招き寄せ、しか〲の御咄。天命とはいひながら、陣中の討死か、忠義の爲に相果ば、高名とも成べきが、短慮の生れ出頭の、當言咎口論に、討果さんは無慚なり、町人にして一命を、繫げと有の重き御意。元より迷ふ親心、何が扨我子の爲畏り奉る、とお請申て其處此處と、尋る內に緣有て、仁右衞門方へ契約し、お暇乞に汝をば、召連出し其時の、亡君の御悅び、今見る樣に忝し。則只今指して居る、藍鮫の脇指を、お膝元より取出し、永く武道の絆を切り、町家に住めば一腰は、命の親共主君とも、敬ふてもあき足らず、刃は命を滅せ共、助るも又刃なり、輕々しく用ひなと、御手づから賜はりしは、汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれ共、我子を君にさし上れば、忠義の爲に一命を、惜む

乞食になる法もあれ—乞食になつてもかまはぬ

でない、大坂の養親仁右衛門方へ聞へても、たま〳〵國へ立歸り、恥辱を取にきよろりと、實父がわき見して居るは、よく〳〵半兵衛惡事ぞと、疑はせては猶立ぬ。爰を放せ」と詞の下、半「ハアさりとては聞分ない。其仁右衛門も町人、國元へ行き手をひろげ、榮耀をしたと噂せば、悔腹立有べきが、喧嘩の場を穏便に、濟したと聞れたら、いか程か悦ばれん。少しも氣遣遊ばされな。御身の武士に引あてゝ、世間の氣々も量れず、かろがろ敷生害は、御年に似合ぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。子孫の爲と思召、止まり給へ」とさま〴〵に、心を籠めてぞ諫めける。十藏つく〴〵聞入て漸と打頷き、「ムウ思廻せば一理有。然らば生害止まらん」と、持たる鑓を下に置き、ゆう〳〵とこそ座しにける。半兵衛は悦びて、「御聞入忝なし。迚もの事に御誓言、承はらん」と根を推せば、十「侍冥利大小かけ、神〻もつて僞りない。扨其方はいふごとく、町人の氣になりぬいて、武士の恥は用ひぬな」半「ハテ扨餘り御念が入、毛頭虚言仕らぬ」十「ム、然らば慥な誓言々々」半「ハア何が扨町人冥利乞食になる法もあれ、武士道は立ますまい」十「イヤ町人の誓言は、利欲に迷へばふだんも立る。汝に望む誓言は、最前書いた狀箱、只一目見て安堵せん。其誓言が望ぞ」と、せり立られて半兵衛、ハット許にうろつくを、

逸興—風がはり

生所遠州濱松山脇氏と書所に、奥よりけわしき足音す。南無三寶と懐中へ、隱すとはいさ白無垢に、尻ひつからげ鉢巻締め、手鑓かいこみ十藏は、一さんに駈出るを、半兵衞頓て駈塞り、互に顔を見合せて、ハット驚く計なり。半兵衞は取縋り、「死出立にて遽しく、逸興千萬何事」と、問はれて猶も氣を苛ち、十「ヤアいはず共知れた事。元來今日の口論も、元を糺せば此十藏、娘が事を先立て、彼奴めが妻に貰はんと、一向申越したれ共、無骨者を知つたる故、再應使を請けつけず、山名郡の代官豐田新之丞と内縁を取結び、家督を立る鬱憤にて、思ひもよらぬ汝に迄、恥を與へし其段は、許してくれよ半兵衞。ヱヽさぞ無念口惜かろ。見て居る親を推量せい。即座にうつは知たれ共、汝に怪我の有時は、養親への言譯がない。それ故事を靜めたり。半兵衞が一分を、十藏立て遣るべし」と、又飛出るを押留め、半「おせきなされな待てたべ。私が名を下さじと、命に換への親の慈悲、忝くは候へども、心を鎭め御思案あれ。出合の詞爭ひにも、恥を研くは武家の事。町人の半兵衞が、恥といふは駈落か、身上仕失ふたるか。是より外は叱られても、打れても踏れても、此境界の今の身に、一分立は候はず。然るに何の御生害、覺し留まり給はれ」と、事をわけてぞ佗びにける。十藏は聞入ず、「其方許へ義理

かうても―買うても

子は送り出、慇懃に一禮し、次の一間に立歸り、互に無念さを、胸に持てども持ぬ顏。十藏は何となく、「コレ半兵衞、夜の短いに八ッ立、草臥も續いた。寛いでお寢やれ」半「ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は、かうてもせいと申します。御老體の養が大事、先お休みなされませ」十「ホウ老ひては子に隨へとは、得手勝手の諺。然らば行て寢る程に、追付まどろみめされい」と、言捨奥へぞ入にける。半兵衞は差俯き、とつゝをいつの胸の内、溜息ほつとつき出し、最前の悪言を、無念と思ふ私より、百千層倍口惜しう、お腹が立てなりますまい。天晴山脇十藏と、誰に劣らぬ武士の身を、半兵衞といふ町人を、子に持給ふ故により、いかい恥辱を見せまして、面目なふて成ませぬ。姿形こそ町人なれ、もと侍の悴じやもの、斷入て死んでくりよ。イヤ〳〵、夫では仁右衞門殿、よしない武士の子をもらひ、憂目を見ると悔恨み、歎き給はんおいとしや。武士と町人二人の親、中に立たる半兵衞は、何れへ孝を立べしと、拳を握り居たりしが、短氣の虫のせき上て、兎角堪忍なり難く、討果さんと覺悟を極め、そつと立て目を配り、奥を窺ひ床に有、硯引寄せ行燈の、火もかき立る筆の跡、死る子細は書かね共、是迄の御恩の書置一通り、さら〳〵と認めて、巻納めたる箱の葢、新靭油掛町八百屋仁右衞門殿、

いかつがましく—いかめしく
かさにかゝる—あたまからかゝる
ほぐれ—外す

負」とせり立れば、義に詰められて杢之進、不承〴〵に身拵、いかつがましく「いざ來い」と、かさに掛つてつゝと寄る。半「心得たり」と身をかはし、互にあてつ跳ねあひしが、半兵衛は手利の達者、ほぐれて蹴返す腰の骨、仰向にどうど倒れしは、心地よくこそ見へにける。塵打拂ひ杢之進、はう〳〵起きて大聲上、「表裏者の賣人め。重荷に草鞋しめ穿いて、平生荒氣に働く故、畢竟相撲同前の、暴れ業は間にあはぬ。いで眞劍の切先に、命の取手を見すべし」と、既に刀に手を懸くれば、半「ムヽ町人の刃にて、侍の柔術を見ん」と、飛で懸るを定七源八、杢之進に取付ば、十藏は半兵衛を引とめて叱付、十「お師匠の御差配にて、一端の無念を晴れ、喧嘩は互に五分の持。事相濟んだ其上に、假令先から募る共、最早見ぬ皃聞ぬ皃、穩便に治める筈。此上ながら卜齋老、杢之進殿心底に、憤なき樣に、偏に賴み存る」と、さも神妙にいひければ、卜齋は打頷き、ト「いかにも某受取て、重ねて盃させ申さん。兎角云間に日も暮るゝ、最早お暇申さん」と、皆打連れて立ければ、杢之進振返り、「偶腕が利いたとて、いきり立は商人故。武道は格別劍術が、知りたくば此方へ習に來い。其時はさつぱりと、首と胴との別の指南、ぎやつと言はせて見すべし」と、肘押張て睨付け、然も憎さ氣に立歸れば、十藏親

弓のこぶし—弓の藝

いはれぬ—無益の

身の要害に云々—まさかの時の習に修業する

も、空矢なしに見せ付、又掛川の大會にも、二日續けてゐもぎに勝ち、其外機により折にふれ、餘程手ごりの覺がある。其意趣ならば猶以、わつさりと立合ん。いざ御出」といひければ、杢之進ゐせ笑ひ、「珍しい事いふ男。シテ先其方が某と、弓のこぶしに勝たとな」「ハテ先立てしれた事」「シヤ存外千萬な。其時相手に立たるは、慥山脇半六とて、御家中の武士友達、大坂の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人、相手に取た覺がない。いはれぬ弓を引ふより、相應に算盤の、利合を引が近道」と、さも憎體にいひこなす。半兵衛今は堪忍の、胸に迫りし顏色を、卜齋早く見て取て、眞中につゝと出、「よしない所望仕出して、半兵衛手前某が、何共迷惑致せ共、武士の權威を立らるゝを、達て共申されず、と云ふて是で果しては、何樣も一座が濟みにくひ。中取て了簡せん。弓の稽古は取をいて、是から柔術の勝負を見よ。さあ〳〵急いで立合」と、あせれば半兵衛力を得、「いざお相手」と差向ふ。杢之進尖聲、「武士町人の辨へなく再三のお望みは、お師匠にも曲なし」と、いはせも果てず、卜「ヤア無法なり杢之進。元より弓馬は武士の藝、取手柔術は町人も身の要害に嗜みて、すはや取ぞと立向ふに、武士は相手にならぬとて、懐手して居らるゝか。是非立合はざ成まいがの」半「然らば有無に及ばぬ事。さあ〳〵勝

収めし—落着きし

ばいかい—媒介

手が悪い—仕方がわるい

はせまい去ながら、互に挑みし由縁有、いざ立合て勝負あれ。はや〳〵見ん」とぞ勧めける。半兵衛押退り、「左様の論は武家の沙汰、我〳〵しきが何共はや。御免〳〵」と辭退する。十藏は聲をかけ、「未練に見ゆる半兵衛。指當てお師匠の、仰を背くは無禮なり。手練達者の沼津殿、町人が射負けしとて、少しも恥にならぬ事。罷出よ」と弓と矢を、取添へて與ふれば、答に及ばず立上り、半「杢之進殿さりとては、久しうぶりのお相手」と、言へ共収めし不肖顔、頭を振れば半兵衛、「相手の不足は兎も角も、無興に見ゆる御出」と、詞をかくれど返事もなく、苦り切つたる其風情、定七見かねつゝと立、定「時によつては氣無性に、進まぬ事も有物。某相手」といはせも果ず、杢之進聲を上、「アヽ是々いらぬ物。師匠の御意を承る、我等さへ動かぬに、外のばいかい心得ず。ひかへられよ」と詞の下、「然らば拙者參らん」と、源内やがて立所を、鐺を取て引留め、杢「ハレヤレ世話をやく衆かな。相手になればいづれもの、名が廢るが合點か。且はお爲を存る故、是非〳〵お控へなされよ」と、物有げなる有様に、座はしらけてぞ見へにける。半兵衛も憖ひに、無念に及べどさらぬ顔、「杢之進手が悪い。貴殿の藝を仕揚しとて、左のみ高ふは吹かぬ物。今は格別其以前、互に勝負を比べし時、五社明神の後堂、百本が一本

花うつぼ云々―うつぼは矢を入れるもの八百屋に矢をかく

はつかう―譽をとる

ちらばねば―ちらねば

とうじ―東寺にて瓜の産地

ひがいす―底弱

おぞい―怖ろしい

定七殿、源八殿をはじめとして、御ぶさた計、顔見れば昔を思ひなつかしい。先は御無事で珍重」と、身は町人を卑下しても、どこやら武士の花うつぼ、八百やさするぞ惜しかりし。卜齋は手を打て、「扨も〳〵久しぶり、山脇半六時分より、殊の外肥滿にて、屈強な若者。其骨柄を見るに付、思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬せられなば、恐らくはつかうせん物と、つね〴〵皆共此うはさ。町人とても隱し藝、折節射てもみらるゝか、いかに〳〵」と問ひかくる。半兵衛は打笑ひ、「仰のごとく私めも、折角ならひ受たる弓、何しにすては致さね共、町屋に道具ちらばねば、もとより學ぶ人もなく、宮地を心がくれ共、はやるは稽古淨瑠璃で、半弓も見當らず。たま〳〵ごとに瓜時分、とうじ駒野へ行足を、祇園の方へ駈廻り、稽古を見ればぞく〳〵と、遠慮も忘れ肌押脱ぎ、よつぴき兵どやる風情、座中擧つて舌ふるひ、ひがいすな男じやが、扨てもおぞい弓力と、手を置れて歸りしも、偏に師匠のおかげぞと、あだ疎略には存ぜね共、青物賣の風情故、殘念ながらいつとなふ、消えて仕まはん是非なさ」と、へりくだつてぞ語りける。卜「ム、さこそ〳〵推量した。五年十年射ぬとても、心を捨てねば下らぬ物。幸 垜も構へて有、久しぶりじやに只一手。其上是成李之進、前かど互角の藝なりしが、すさむと勵む違にて、及び

射る事は云々―射有ㇾ似ㇾ乎君子ㇾ失ㇾ諸正鵠ㇾ反求ㇾ諸其身ㇾ(中庸)
同名―同苗
判形云々―山脇の子たるを證明する爲判する
如才者―疎略者

計ははげみでない。一ぶんに油斷なく、工夫の心すはりなば、自然と的中致すもの。すでに孔子の曰ふにも、射る事は君子にたとへ、あたらざれば其身にもとむ。手前を直し隨分と、功をつむこそ第一」と、さもこまやかにいふ所へ、あるじ山脇十藏は、同名半兵衛もろ共に、かしこに歸れば卜齋、「ハア十藏殿お歸りか。兼てお心やすさのまゝ、お留守をもかへりみず、射場を借用仕り、ゆる〳〵稽古致すだん、無禮の至り」と相述ぶる。十藏會釋して、「是は扨いたみ入る。よい場を持ば品により、物ほしにさへかすならひ。ましてや御念比といひ、殊にはかねて極の稽古日、在宿致す筈なれ共、同名半六只今は、名も半兵衛と改め、大坂の住居、町人に罷成候へ共、當所の人數改にて、年に一度は極つて、判形に罷越す。其義によつて今朝より、御役所へ召連出、それより一家のはし〴〵へ暫の對面。則今夜八ッ立に大坂へ立歸る、用意何かに取紛れ、不亭主の段御免あれ。コリャ半兵衛、以前のお師匠友立衆、對面致せ」と詞の下、半兵衛慇懃に、「先以卜齋樣、御息災に御しのぎ、ひとへに滿足仕る。師弟のちなみ折々は、御恩の御見廻申ス筈。何をいふても只今は、商人の身のいそがしく、年に一度の參着さへ、昨晩參りて明朝は、罷上る仕合故、おのづからの如才者、御ゆるし下さるべし。杢之進殿

紅の云々―紅は園に植えても隠れなしの諺をとる

おもき山脇―泰山の重き意をとりて小身者の山脇重用さるゝ事

心中二ッ腹帯

第一

草に木にたとへて見れば若衆梅、女は櫻坊樣の、山吹衣ま袖より、牡丹のさかりりんとした、武士の姿はおのづから、うぶにそみたる紅の、園生のたねや末葉迄。わきて遠州濱松は、御家中ひろき其中に、小身なれど手を置て、おもき山脇十藏の、屋敷作のおものずき、其折節の月花に、かへて嗜む武藝の道。みぎりもふかきやぶがきの、むかふに目あての垜をかまへ、本弓の稽古的、戸田卜齋を師範に立テ、門弟沼津杢之進、南條定七はた源八、いづれも弓矢引つがひ、拳をかためひぢをはり、矢じりを揃へ聲をかけ、我劣じと爭ひしは、いかめしうこそ見へにけれ。卜齋はつく〴〵と、稽古に氣を付目をくばり、「ホウおの〳〵見事々々。射法力の入所、村のしょをき矢の輕重、羽の吟味にいたる迄、殘る所はなけれ共、どふでも體がかたまらぬ。あながち人に射勝たふと、思ふ

汝も冥途云々―時鳥を死出の田をさといふより

潔き、詞の中に曇行、目元に哀残すらん。吉三も涙押隠し、「我身を庇ふ志、喜ばしや」と振歸り、役人に手を突いて、吉三「科の起の本人は、私にて御坐候。急いで彼をお助けなされ、我等を仕置下されよ」と、たつて申せど役人は、「おろかや一度代官所で、詮義極まる科人を、我計ひに叶はぬぞ。死なんず命をあの者が、望のごとく出家して、跡弔ひて得させよや。急ぎ立去れ。それ科人、時刻移る」と下知すれば、吉三も今は力なく、「生て居られぬ我命、いで〳〵冥途の道連に、我先立て待べし」と、腹一文字に搔切て、露と消行露の世や、お七は今年十六才、吉三郎は十八の、花や月雪時鳥、汝も冥途の友となる。戀にはたして武藏野の、草の緣と色深き、浮名諸國にひろごりて、語り傳へる末の代に、哀は盡きぬ物語。

竹の子云々―子にかく以下八百屋なれば青物にかけていふ
めうが―茗荷と冥加
わかめ―和布と若女
しめじ―示しとしめじ茸
ずゐき―隨喜と芋莖

てゝ、我と火に入夏の虫、焦れ死とは此事か。竹の子ゆへに迷ふ親、めうがも知らず恩知らず、如何にわかめといへばとて、氣儘に心持なして、あられ少なきしめじとは、神も佛もしらまゆみ、三つば四つばのよめがはぎ、脛も現に三田の郷、亂れし髪と諸共に、ずゐきの涙おちこちの、祭文眺は此も鳰の海、小波寄する品川や、いよ、いよ、いよ、濱に入江の海人小舟、見へつ隠れつひとかすみの、彼からさきを見渡せば、吉原雀口々に、とがのよしあし夕時雨、戀の邪魔する男こそ、色の命をせたしどみ、我は佛になりもよし、ふりもよしなやよいさよ、戀故に、命の峠今暫し、暫しと留むる人もなく、心も駒も忙しげに、行道柴も露ぞうく。ひく足なみのうすづきて、此處ぞ名にふる鈴の森、最期場にこそ著きにけれ。かゝる所へ吉三郎、思ひ切たる白装束、群集の中を押分け〱、人目も恥ぢずつか〱と、立寄らんとしけれ共、警固の武士に隔てられ、泣音計の間替し、吉「我故斯る罪科は、淺ましの有様や。此身も共に」と焦れける。お七は顔を振上て、「愚にござる吉三様、我心から偽す業を、少しも悔む事ならず。逢ふて死ぬれば今ははや、心にかゝる事はなし。お前は命めでたふし、御出家なされ亡き跡を、よく〱訪ふて下さんせ。いふ事とては是計。はや〱お歸り遊ばせ」と、名殘に心亂るれど、人目を恥ぢて

つく〴〵云々—つく〴〵と見て涙を流すによす
ひのへ馬—丙午
玉の緒—玉と命とかく
簪木—母に寄す
御げん—逢ふた事
疊算—疊の目を數へて吉凶を占ふ法
湯島に云々—當時少女の額を神にあげて行末を祈る風習あり

歌祭文呼子鳥の、哀れなるかなお七こそ、戀路の闇の暗黑に、よしなき事を仕出して、戀の罪科我一人、かきあつめたる玉箒、あこがれ焦れ行末は、かゝる憂身を此處彼處見付見付に曝されて、日本橋より引かれ行。見る人袖を絞る人、見歸る人も皆人も、柳原野のつく〴〵し、餘所目に餘る涙川、渡りかねたるひのへ馬、富士の江戸異煙と諸共に、消ゆる命ぞはかなけれ。首に懸けたる玉の緒の、絕へなば絕へね簪木の、形見の念珠繰返す。守は父の給はりし、一部一卷後の世を、助け給へや南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、歌いつしか君と馴昵み、變るまひぞや變らじと、起請を書いて取替し、小指を切りて血を絞り、互に語る睦言に、祭文去りし御げんの夜の雨、殿御待つ間の轉寢、逢ふ夜逢はぬのよ、いさよ怨みても、外に惡所は誓文と、仇し男の仇事や、貧の盜に戀の歌、「二十字一文字書習ひ、湯島にかけし松竹梅、本郷お七と記し置く、十一歲の筆の跡、見し人あらば私の、形見と思ひ一遍の、御回向賴み奉る」と鎌差入るゝ懷の、內より洩るゝ振袖に、溜る涙ぞ哀なる。身は人くずといはゞ云へ、笑はゞ笑へ一筋に、思ひ初めたる戀なれば、假令此身は貫かれ、骨は粉となれ灰となれ、魂は此世に留まりて、陰に付添ひ身に移り、二世も三世も我夫と、手に手を取りて蓮華臺、祭文法の縁切れは

引れぬ足云々―足と藁一節と一夜とかく

情知らず」と泣惑ふ、久兵衛は押しづめ、「愚の事を云人かな。お七が爲に正眞の、敵といふはこち夫婦。學問立る家でもなし、武士の一門持もせず、纔な八百屋商ひして、娘が徒すればとて、さして恥にもならぬ事。お寺へいふて早速に、吉三を聟にもらふたら、今日のつらさは有まいに。小家一軒建てふとて、厭がる縁を結びし故、むごい死をばさするとて、最期に親を怨めふ物。千部萬部を讀んだりと、此方夫婦が弔は、露程も請まいが、戀しと思ふ吉三殿、一遍の題目も、草の蔭にて悅ばん。扨又此場へ見へぬのは、猶以の情ぞや。お七が吉三の顔を見ば、心亂れて生中に、臨終の迷ひと成、未來の程も不便なり。願ふた後生はなけれ共、見物群集の人々の、御回向の功德にて、佛にもなれかしと、思ふもせめて親の闇」あじき涙の諸聲に、他處の袂も濡にけり。はや刻限と相見へて、拔身の鎗のひら〳〵と、朝日眩く輝けば、夫婦は共に叫出し、人目も恥も警固をも、厭はずかまはず駈出すを、彌三衞門跡より取付て、諫賺して漸〳〵と、歸るや夢の浮橋を、娑婆と冥途の二道に、盡きぬ名殘の袖の露、跡へ戻れば先へとて、引れぬ足の一よだに、泣くねや三重是を。

八百屋お七江戸櫻

見づ—見ず

んだか。駈落するといふ術を、杉は心も付ずして、我から身をや焦すらん。年寄りたりし我々が、身は去年にも相果てば、かゝる憂目は見まい物。今は死なふも生けふにも有にあられぬ世界や」と、足手慄はし目くるめき、性根なきこそ道理なれ。所へ年寄彌三右衛門、涙片手に駈來り、詞「ヲヽ悲うござろ尤じや。心一杯訴訟もする。お上にもどふぞして、助けたふ思召、云譯の仕樣をば、くゝめる樣にの給へ共、年の行かぬ悲しさは、吉三樣に逢いたさに、火を付ましたと有樣に、云放せば是非もなく、法の如くにお仕置を、悔みても返らぬ事。それについて武兵衛奴が、かふした中に取混ぜて、二百兩の金子の儀、たつて御訴訟申せし故、委細御詮議遊ばされ、此事ゆへに此度の、科人も出來たりと、殊の外の御憎しみ。只今牢へ打込まれ、右の金子は久兵衛ゑ、下さるゝとの御上意じや。せめてはそれを力にして、歸らしやれい」と引立れば、久兵衛は手を合せ、「金子に念はなけれ共、娘を憂目に沈めたる、元の起の武兵衛奴が、牢へ入たと聞たれば、いづれ力が付たやら、ちつと眼が見へます」と、悦ぶも亦哀なり。女房は聲を上「此吉三めは如何なれば、お七が最期我々が、歎を他處に見づ知らず、尋來ぬこそ怨しけれ。行方も知らぬ者迄も、口々云て譏るのが、耳へ入らぬか聞へぬか。娘の敵胴欲者、

石に根繼の云々―極めて大丈夫なる事の喩

ばう〳〵―謗法

子は三界の云々―諺にて親は子の爲に引かさるる

月ならば二匁―新月を價二匁の饅頭といひかけたり

ひがいすな―尫弱な

置が氣遣さに、入聟取て何時迄も、石に根繼の情あいが、過ての今の苦みを、よく見覺へて世の中の、娘持たる親御達、假令いか成徒なも、見逎にして置給へ。我身はこりて悔みても、歸らぬ事か淺ましや」と、大地にどうど打伏して、消ゆる計に見へにける。久兵衛はさし寄りて、「ヲヽ、理りじや去ながら、假初ならぬ科なれば、代官樣のお慈悲にも、町衆の詫事も、叶はぬ事と初より、あきらめながらも〳〵と、我も迷ふて朝晩に、法華の數珠をかけながら、愛宕樣の方へ向き、娘が沈む火の難を、どふぞ救ふて給はれ、とばう〳〵とは知りながら、頼し事の恥かしや。子は三界の首枷とて、現世未來を取外す、悲しき老のしまひや」と、同じく側に伏轉び、聲を立てぞ泣にける。斯る處へ人夫共、柱を擔げて口々に、「何と不便に思はぬか。誠譬に云通り、花ならば初櫻、月ならば二匁どり、饅頭のやうな手足をば、在所で團子燒く樣に、火にくべるのは惜い事。それに相手の若衆奴は、何をしてけつかつて、今日が日迄に尋來ぬ。因果はお七獨じや」と、心なき身も哀知る、目を擦りてこそ通りけれ。夫婦は見上見下して、「世にひがいすな娘をば、あの柱へ縛付、四方から燒立て、阿鼻焦熱の苦を、まじ〳〵と見て居られふか。共に灰共成たやな。可愛の者や去とては、火を付ず共どふぞ又、外に思案は出な

日親様云々—鍋冠とて足利義教の為に迫害を加へられ焼きたる鍋を頭に被らせしに法華経の功力にて恙なかりしと也

さもたか—さもなければ

八歳の龍女—女人は成佛しがたけれども八才龍女成佛せし事法華経に見えたり

ぬに久兵衛は、我を忘れて大聲も、「わつ」と叫びて伏轉ぶ。女房は取付て、「けたゝましや何事ぞ。様子が早ふ聞たい」と、縋責むるぞやるせなき。久「ハテ泣とて別の事じやない。可愛ひやつと思ふから、思はず知らずの落涙ぞ。さあ往にましよ」と包め共、女房「イヤ此方の言葉の端、如何にとしても氣遣な。隠すも事による物」と、手を取つて引留れば、久兵衛包むに力なく、「流石は其方は女の身、様子を知らぬは尤じや。總て牢舎と云物は、殺さるゝ日は大法で、彼方よりも扶持が出る。お七が命も今日限り。あれ見や其處な柴薪、わか木の花を生ながら、煙と爲すは胴慾」と、立寄つて杖振上げ、叩いつ泣いつ現なき。母は餘に興覺めて、泣も泣かれずうろ〳〵と、「頑是もなしに爲た事を、何故お町衆はひたすらに、詫事をして給はらぬ。代官様も了簡の、無いは餘り胴欲や。頼を掛けし日親様、法華經の功力にて、焼けたる鍋は空に飛び、お命恙なかりしとや。夫婦の者が歳月に、袂の下で數へたる、お題目の力にて、若や焼けずに戻らふか。さもなか母は何うせふぞ。八才の龍女様、雨車軸してたび給へ。國土の内に何時迄も、火と云物のなかれかし。世界の人の恨にも、母には罰が當る共、娘一人が助からば、情なしとは思ふまじ。三年四年前よりも、仲人が來て彼地此地と、似合の縁も有たれど、人手に

ごもく所—はきだめ
牢字は穴冠りに牛とかく
かうに木で—かさにきるにかく
思ひ—重い
居られづ—居られず

かと見廻して、ほいと投ぐるれば戀風に、我より先へ三重煙るらん。

下之巻

罪科のごもく所を牢といふ、文字は戀路の穴冠、繋ぐや牛のお七こそ、今日火あぶりと町々の、役人夜番柴薪、歎きを此處に持運ぶ、煙はいづれ變らねど、哀はいとゞ增さりけり。母は今日さへ牢の飯、持つ手も撓く足弱く、道も涙に見へね共、我手づからに煮焚せし、物と思はゞ暫くも、添ふ心地して嬉しかろ、自らとても此椀を、手に觸れたりと聞ならば、それをお七と抱かゝへ、逢ふた心とたのしみに、漸牢屋に辿著き、門ほとほとと音づれて、「お七が飯」と云入る。番の者の聲として、「今日のお上の書付に、お七が養ひいらぬ筈、持て歸れ」と云聲も、權威をかうに木で鼻を、こくる下部も所柄、ぞつと身の毛も立戻る。向の方より久兵衛は、歎きに輕い思ひ共、いづれあやなし暫くも、宿に獨は居られづと、よろぼひ來たる老の杖、久「ヤア嬶戻りやるか。ナントお七は機嫌よふ、物も喰ふたか進んだか。何ふじや〳〵」尋れば、女房「サレバイノ聞かつしやれ。あの内でさへ義理じゆんぎ、振廻でもあつたやら、今日はお飯が戻つた」と、いひも果

我妻—我夫

おき—燠におこつた火

やろ」と立て行、冥途の坂の腰を押す、詞と後は悔しけれ。お七は内の者に迄、恥しめられてしほ〳〵と、「如何樣私が惡かつた。ついいや〳〵と云たらば、お嬉しそふな顔を見て、今比は寢て語らふに、どふ狼狽へて泣ては居た。そばからさへもあの樣に、愛想盡せば其身には、嘸やお腹が立たであろ。云譯せふも侘びやうにも、最早お出は有まいし、文も屆けてくれまいし、賴も綱も切れ果てた。あゝ懷しや戀しや」と、起て見居て見眺め遣り、移香殘る簑を著て、笠も被つて此樣に、悄然としたなりをして、此處につま待つ水鳥の、翼にあらぬ簑笠は、仇の形見よ取るもうし、脱ぎも遣られぬ袖の雨。著て見ては泣、捨ては泣、爰に歎けば座敷には、三國一と云はやす、お七「聟とは憎や穢らはしや。それ故にこそ相思ふ、中をおのれに引裂かれた。我妻戻せ呼戻せ。さなくば寺へ連て行け。出家落して生ながら、火へ陷つても大事ない。逢ひたい見たい行たい」と

ウタイ 形も亂れ氣も亂れ、亂心のあどなくも、家が燒けたら寺へ行、又逢ふ事のあらふかと、ふつと付いたる出來心、そろり〳〵と這寄りて、巨燵のおきを四ッ五ッ、簑に包み小袖にて、上を引卷きうろ〳〵と、慄上るや箱階子、三惡道の通ひ道、二階は地獄の這入口、鬼が攻來る身の因果、廻りくる〳〵くる〳〵、車長持戸棚の上、此處か其處

彼の人に逢ふてかへ」七「ナニ彼の人とは誰ぞいの」杉「すりやまだ御存無いそふな。吉三様に逢いまして、此處に御坐れと教へたる、所に簑笠有ながら、お姿は見へませぬ。人が見付て去したか、但わしを待かねて、歸り給ふか氣遣な」と、其處よ此處よと尋ぬれば、お七も共にうろ〳〵と、彼方此方と見廻せど、其かひもなき簑笠に、ひし〳〵と抱付、暫し消入歎きしが、やゝあつて云やうは、「いや〳〵人が咎めたでも、其方が遲い故でもない。奥には今宵聟入の、はや盃の取結。母様最前此處へ來て、様々の御異見を、否とも應とも得言はずに、泣てばつかり居た故に、それが心に障つてがな、お歸りあつた物であろ。間のない事じや追付て、呼まして來てたもらぬか。是なふ頼む」と手を合す。杉は聞よりゑせ笑ひ、「何がそふした事じや物、歸らしやれいで何とせふ。親御で有ふが主様の、敕諚にてもいやなれば、いやと云のが戀の意氣、朝晩泣てござつたは、人目威しの僞よ。そふとは知らで此事を、取持つ口からお兩人の、いか成御苦勞遊ばす共、何處迄も引添ふて、奉公せふと思ふたは、よしなき案じ過しを爲た。私も一所に水臭い、者と恨であらふ物。其中へは行かれまい。もふ今比はお頭が、圓ふかなつてあろ。お前は明日から笄に、結ふて嫁入の御稽古あれ。男は持たずせめてまあ、寢て花

ふつ〱と—決して

にし〱と—しみ〲とか

重きが上の云々—さらぬだにおもきが上の小夜衣の歌をとる

わくせき—急忙

取なり—姿形

らまかしたる天罰の、忽當ると云事を、今といふ今身に覺えた。あら勿體なや恐ろしや　立歸て明日は　發心するぞふつ〱と、おれが事をば思やんな。此方には忘れ果たるぞや。さはいへ今宵來たと云、事ばつかりは知らせたい　納に顔がにし〱と、見たい事や」と這寄りて、障子覗けば我影の、若や勝手に見へんかと、そつと退いては又立寄り、「杉は何とて戻らぬ」と、又さめ〲と歎きしが、「ハア是も亦誤つた。お七には早武兵衛とて、親の許した男有。目を盗むは正眞の、間男も同前よ。叶はぬ事をくど〱と、よしない浮名濡衣の、重が上の小夜衣、何の簑笠いらぬ」とて、左や右に脱捨て、涙の氷柱玉霰、袖を翳して出て行。かくとは如何でしら雪の、道踏分ける高足駄、杉は心のわくせきと、行違ひたる取なりも、緣の薄さに見紛いて、內を覗けば夫婦共、勝手に見へずよい首尾と、やがて立寄る緣の下、簑笠取て「是は扨。仲人は宵の程、最早　祭が渡つた」と、障子明れば　お七「やれお杉、悲しい事が出來たは」と、袂に縋りて泣出せば、杉「イカニモ〱そふであろ。もふ何ぼ程むつかつた。お脈見よふ」とじやれかゝる。お七「エヽ面白さふに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の、叶はぬ首尾になつた物。脈がよふてもおりや死ぬる、死なせてたも」とせき上る。杉「ハアどふやら拍子が違ふたが、まあ

かゝり―かくあり

乞の、母は野の末山の奥、飢へ凍へて此世から、餓鬼道の苦を見するのも、たつた一つの胸の内、孝行な子は佛神の、憐有て後々は、願ひの様に成物ぞ。世間の掟は夫をば、大事々々と教ゆれど、顔も心も憎體成、武兵衛に添ふは世界の義理。厭かるゝ様に身を持なしや、何時去ておこすとも、忝しと請取て、其時こそは打晴れて、好いたお人に添はせてやろ。親の難義に暫の、勤をすると思ふなら、吉三殿の目の前で、帯紐解いて寐るとても、徒とは思やるまい。合點がいたらあいといや。あいといや」とて撫摩り、「初心な心一つにて、胸の内が捌けまい。追付杉が戻つたら、母が無理か理か、談合して返事しや。我身は奥へ」と立ながら、心元なき親心、鋏剃刀櫛笥の、中を捜して持出る。お七は更に夢現、何か定めん中々に消へなば消へね玉の緒の、かゝりとだにも其人に、知らせて後に死にたやと、障子一重を關の戸の、明くればやがて逢坂の、道共知らず泣盡す　吉三郎は羽脱け鳥、手も足もなき心地して、漸そつと蹂出、涙を簑に押拭ひ、つく〴〵と思案して、「母のつど〳〵いはれしに、一つとして無理は無い。いや共おう共返答の、ないは道理じや理じや。必々怨みはせぬ。嫁入するも我々が、薄き契りも過去よりの、定まり事と知らずして、うか〳〵何しに來た事ぞ。親の命又師の目をば、く

ぢぶん―時か

あどなき―あどけなき

やうちん―氷沈地獄

りけれ。母は奥より走寄り、暫泣て云樣は、「合點の惡い娘やな。此身も一度は若盛ぢぶんに花もやつて來て、惚れた惚れぬのすべもしり、器量の好いと惡いのは、老の目にさへ見ゆる物。其方のが皆尤故、嫌と云やるを無理にとは、今日迄いはぬ兩親が、惨いとはいはれまい。世が世の時で有ならば、假令其方が合點でも、あんな男を持たそふか。器量發明揃ふたる、聟と竝べて見よふ爲、分に過たる廿荷の、簞笥長持ゑり數を、恥かしからず取揃へ、かやは手織と急がしき、中に自ら機上て、織調し物迄も、類火に仇と成たるは、因果な男に焦付た、先性よりの奇緣じやと、思ひあきらめくれよかし。ならぬとならば此家を、銀の替に突出して、出て行分は構はぬが、親の難義を顧ず、思ふ人には添はれまひ。よし添ふとても出家をば、引落したる罪科は、閻魔の帳に付られて、火の車にて迎へられ、等活地獄の火の中へ、生ながら陷められて、煙の下に其人を、戀し床しと叫ぶ共、甲斐なきのみか夫迄、奈落の底へ墮すのが、何心中に成物」と、威しつ又は賺すにぞ、お七はあどなき心から、涙の顔を振上て、「暫しも君に添ふならば、此身は假令生ながら、火に入とても厭はぬが、いとしい人がやうちんへ、沈むと有ば悲しや」と、おろ〱するに力を得、母は猶々口説立、「其方の返事次第にて、忽夫婦は柵

肩骨が云々—骨が折れると己れとかく
ちつくりあやかり—少し似る
火の臓—脾の臓にかく

に、云廻されて夫婦の者、兎角の應答云かねて、さし俯いて居る所へ、武兵衛はしろりとした顔で、つか〳〵と伸上り、「何もお待久しかろ。横山殿會いませぬ、小栗が今宵の參會に、毒など盛つて給はるな」と、かさにかゝつた云分を、むつとはすれど是非もなき、金に卷かるゝ苦笑ひ。乾の隅へいざ〳〵と、伴ひ奥に入にける。お七は巨燵に假寐の、夢何とやら魘はれて、ふつと起れば勝手には、三方土器束熨斗、母は銚子に蝶々の、折すへ付て忙しげに、持行奥の高笑。合點の行ぬと見る内に、でつちの彌作取肴、手に持ながらさし覗き、「コレお七樣嬉しいか。嫌の應のと有とても、親と銀には肩骨が、おれもちつくりあやかりたい。吉三樣の聞しやつたら、胸の火が燃ゆるであろ。燃ゆるつい手に御前程、火に縁の有お方はない。火事故寺で徒し、火事故今度の嫁入し、火の臓強い男持、雲雀の樣にならんしよ」と笑ひて走行にけり。お七は覺へず聲を上、「ナウ父樣母樣怨めしい。私が心にどの樣な、行れぬ義理が有事やら、親子の中で問はれずば、人傳にても聞もせず、死ぬると言やといひはなす、事を好しなされかた。娘を獨捨るのか。余りに慘い心や」と、かつぱと轉び泣聲が、洩れて誘ふ縁の下、吉三は顏を差出せど、姿は流石隱れ簑、隱れ笠なら抱付て、聲をも立て泣たやと、足摺してこそ居た

笑止—氣の毒

立てやる、手廻し自由に成迄は、二百年でも待つ金子、手形取にも及ばぬ、と投出されたる嬉しさに、思慮分別も要らばこそ、忝と戴いて、初の如くそこ〳〵迄、斯樣に申請致せし事、一門よりも大切な、友達中と悦びしに、十四五日も以前の事、それ成太左殿挨拶にて、娘お七を所望と有。夫婦の者は猶以、滿足に存れど、いか成事か娘めが、ふつ〳〵嫌と云放すに、親子ながらも此事は、曲げて曲らぬ道理故、其段返事致たる、明の口よりも金子をば、戻せ〳〵と五度三度、毎日々々立せがみ、金子がなくばおじをば、くれるか有無の返事をと、無體至極の使立。如何に貧成久兵衛とて、賣買にする娘じやと、見立られたる無念さが、どふ堪忍が成物」と、聲打慄い腹立る。彌三右衛門領きて、「段々至極仕つた。武兵のが不屆じや。そりや身共でも堪忍せぬ。然し斯ふした事も有、沙汰に及んだしはん坊、親の病氣に人參を、盛らぬ樣成慾者が、二百兩と云鎚をば、手形もなしに預たは、眞から底から息女をば、ほしいと思ふ餘の事。賣買にせぬ證據には、其節分も云出さねば、侮ると云物でもない。それに兎や角意地張れば、證文のない金子故、待て共いはれぬ義理。とあつて折角普請した、家を賣らすも笑止なり。此入分をとつくりと、云聞せたらお七にも、合點がなふて何とせふ。ひらに〳〵」と物馴

釘―冷たく

御宿老―町内の取締

始末しがく―始末才覺

お使に行て戻つたら、首尾見合て雪よりも、積る事共何方からも、云ついはれつさせませふ。必ずそふ」と畊きて、馳行戀の道橋や、渡りに舟の心地して、敎へしまゝに這入て、土に此身を打任せ、釘に成たる手足をば、君が膚に打付て、寢もせぬ内に睦言の、心企ぞはかなけれ。かゝる折節町の年寄彌三右衞門、相客誘ひ入來る。久兵衞夫婦悦びて、「コレハ〳〵何も樣、珍しからぬ饗應に、却つて御苦勞かけまする。さあ〳〵奥へ」と手を取れば、彌三右衞門打笑ひ、「如何にも參る上からは、奥へも屋根へも通らふが、序ながら御夫婦へ願ひと云は武兵衞の事。組中と云、平生に、兄弟よりも懇し中、俄に不中な樣子をば、聞て去とは氣の毒故、どふぞ挨拶致さふと、最前武兵衞に云たれば、ハテ久兵衞さへ合點なら、身共に別義ござらぬと、結構な返答に、今宵の祝義を幸に、跡から是へ見ゆる筈。押付がましい樣なれど、萬事は我等が貰ひます。御夫婦賴」と云ければ、久兵衞居直りて、「御心遣と申さふか、御宿老殿のお詞を、背くは慮外に候へ共、畏つたと申されぬ、樣子は定し何もの、お耳へも早入た筈。私類火の砌には、半櫃一つ得退けずに、やう〳〵寺にかくまはれ、二度お町へ立歸る、始末しがくもない時節、彼の武兵衞が尋來て、金二百兩膝に置、預るでもない遣るでもない、普請の用に

泣子も目明―諺

こしき―甑

ふごもねぜり―畚も根芹もか

百夜通ひし少將―深草の少將が戀故百夜小町の許に通ひし故事

浮思ひ―憂き思ひ

のれは其處に何して居る。泣子も目明いて泣物ぞ。殊には今日の餅搗が、年寄た久兵衞や、婆が正月祝ふのか。類火に遇ふて諸道具も、足らぬ中から毎年の、佳例の通搗く餅に、小米一升減じぬは、生先の有お七じやと、子に絆さるゝ親の慈悲、近所鄰へ聞へては、驕な事と譏るであろ。一門共も笑ふであろ。其上に娘に迄、拗てもちふは是非がない。構はずと捨て置け。やがてこしきもしまいじやげな。男共は隙がない、兩替町のてうは殿、針立の玄伯殿、お出なされと云て來い。あた面倒な」と喚かれて、笠も足駄も取敢へず、髪さへ今日は結ふ隙の、中戸口より呟いて、吹雪を凌ぐ前垂に、走出たる軒の下、ふごもねぜりも埋もれて、雪重げなる簑笠に、臥せる里の子哀やと、云捨過る裾を引、顏差出すは吉三郎、「ハツ」ト計に立戻り、杉「こは淺ましき御有樣、いか成事」と抱付、人目も分かず泣出す。吉三郎は押しづめ、「何故ぞとは怨めしや、色故身をば窶す事、いか成高位高官の古へ今も同じ事。百夜通ひし少將の、雨夜の憂は知らね共、雪に身内は冷抜きて、顏見ぬ内に消ゆる身」と、泣音もいづれ弱氣なり。杉「御尤々々。此方も同じ浮思、只今迄云出して、二人が泣て居りました。幸表に誰もない。そろりと其處を這入て、廚を左へ五六間、行けばお部屋の縁の下、少時蹲んで居やしやんせ。

常磐かきは―永久變らぬ
かちん云々―餅の暖かさを試みる意か
水晶―推するにかく
ひしはなびら―ひしは災難

中之巻

歌やよ柳、もとの梢の雪ならで、餅搗く宿の梅とのみ、冬籠する大根も、蕪も千代のもろかづら、常磐かきはの交讓木や、橙 柑子榧搗栗、昆布串柹 商ひの、店を其儘蓬萊の、八百屋萬の神の餅、御藏のかゞみお雜煑の、かちんあたゝけ心見を、こゝへ取このひつちぎり、契ほぐれて戀病の、娘お七は奥の間に、春をも待たず行年を、惜むでもなし世の中は、無常と外へ見せかけを、色とは誰も水晶の、願ひの玉を手にかけて、題目繰つて居たりけり。中居の杉は差寄りて、「一年一度の餅搗に、小忌々しい何ぞいの。親御樣への意地張は、却つてお身のひしはなびら、移ろい易き人心、先方には忘れてござるやら、最早坊樣になつてやら、知れぬ相手に義理立は、損な事や」と諫むれば、お七「聞えぬ事をいふ人かな。心の變る變らぬは、色品數多見盡して、濡の巧者の仇比。吉三樣にも我身にも、戀の手習血に染めし、起請の罪も有ぞかし。何しに仇に成るべき」と、しやくり上たる顏形容、愛らしく又優しくも、重て返す詞なく、杉「有樣云へばお道理」と、贔屓目にさへ持つ涙、洩れて袂を濡らしけり。臺所より親方は、「杉よ〳〵」と尖聲、「お

月ばかり（古今集）
いての云々—出てにかけて堰手は水を溜るものなればたまりかねと續けたり
たばふ—かばふ

りかね、つか〱と駈寄りて、「コレ吉三様、迚も此方の性根魂、曇を磨く此刀、某が手に掛けて、我も冥途のお供して、父御の前で拙者奴が、一分立る、御覺悟」と、氣相變へて見へければ、上人中へ押隔り、「主に諫めは家來の役、最前よりも宥免す。腑甲斐ない此法師と、末頼なふ侮りて、近比過言聞にくし。出家にも佛にも、爲すべき我が親切は、先にから目に見へぬか」と、氣色變れば十内も、吉三もはつと感涙の、首を下げて渇仰す。武兵衛や太左は何とやら、小むづかしさにこつそりと、立て行を十内は、後様に襟がみを、引摑み引戻し、「おのれ等最前親旦那を、横著者の非道のと、何者にか聞たるぞ、眞直に白狀せよ。改ていはね共、若殿様の御難義を、身に被りたる忠義とは、一國に隱ない、出放題成たは事を、よふも〱吐出した。討て捨たい奴なれど、御出家なさるゝ悅びに、命計は助くる」と、右左へ取て投げ、起んとすれば踏倒し、迯る所を又蹴倒し、廿三十五六十、腰も背骨も立兼て、はう〲迯て歸りしは、心地よく又可笑けれ。久兵衛夫婦も氣味惡く、そろ〱出る玄關口、戀に泣子を引立て、母がくり事ねすり事、「はて何とせふもいやんな。薬物類なら何にても、たばふて虫は入るまいに、魚屋ならねば蛤の、口のあいたは是非ない」と、つぶやきてこそ立歸る。

物ごし—そぶり
身を知る雨—涙をいふ
すつぱ—盗賊
うぢついて—ぐづ〳〵して
自分相應に—身分相應に
いなにもあらず—最上川のぼれば下る稲舟のいなにはあらず此

物ごしに、それはと答ふ詞なく、身を知る雨やさめ〴〵と、泣て俯き居たりけり。十内涙押拭ひ、「親旦那の御意見が、篤とお耳に止まつたか。是からは又十内奴、推參を顧ず、一言申上ます」と、飛退り手を突いて、「申 吉三樣、善と惡とは北南、足振變ゆる迄の事。それ程の義はいはいでも、辨への有御發明、殊に短慮なお性質、家來の者に人中で、蹈れた事の無念なと、定て遺恨におぼすであろ。町人連の口先に、家一軒を見込じやの、いや盗人のすつぱのと、云散されてきよろりつと、うぢついて居る人じやない。コレ徒といふ大病に、勇も武略も拔けましたの。昨日迄も今日迄もの、千石取の御一子と、あがめ育てし此方をば、雜言せられし其時は、舌切割いて捨てふか、と刀の柄に二三度も、忍びに手をば懸けたれど、いや〳〵自分相應に、大事の娘をおかされて、腹の立が道理じやと、のめ〳〵おきて十内も、腰拔に成つたぞや。家來の恥は此方の恥、お前の恥は親御の恥、此世で不孝爲足らいで、又未來迄なさるゝか。欲心でない言分に、さつぱりと隙やらしやれ。何うじや〳〵、サア〳〵〳〵」とせはしなく、問詰められてうろ〳〵と、覺へず其處へ流す目に、お七は顔を振袖の、下から手にて物いはす、いなにもあらず稲舟の、應ともえこそ云はれざる。十内二人が口なしの、色にぞいでのたま

恩にも三つ云々―四恩とて天地の恩、父母の恩主の恩、師の恩

八逆罪―謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義

がて起直り、骨桶を左手に持、怒れる顔も其樣も、別れし親の物言にて、「ヤイ忰の吉三郎、源次兵衛が冥途から、汝に尋る事共を、云譯あらば返答せい。形は人に生れても、恩を知らぬは畜生よ。恩にも三つの品が有、差當つては親の恩、身を立子孫を養育する、お主の恩は猶重く、文字を習ひ目を開く、師匠の恩は取分て、大海よりも又深し。喩を以て云時は、親は子を憐めど、お主には見替へぬ事、主は家來を養へど、身に替へて贔屓はせぬ。師匠の恩は目前に、汝が不義に替らんと、四十余年戒行の、譽も名をも顧ず、玉子酒を參るのを、のめ〱として見て居る事、畜生と云はふか腰抜者と云はふか、八逆罪の科人奴よ。次に此源次兵衛、假に勘當せし事、某豫て若殿の、御爲に死ぬる覺悟故、流浪させんも不便なり、亡からん跡も訪はれたく、少しの事を云立に、出家にならぬ其内は、對面せじと此寺へ、追遣はせしは慈悲ならずや。其效もなく今日明日と、遁世を延すよし、内々人の知らせし故、末頼なき躮奴と、眞實の心になつて勘當はしたれ共、自然法師に成ならば、十内我に成替り、勘當も許して遣れ、骨に成共、懐き、顔に對面致させよ、と頼みし手前も恥かしき、非義非道成性根にて、親の爲に奉公せう、武士に成のが孝行とは、よふもおのれは吐した」と、一度は怒り一度は又、打ち萎れたる

いらんの林云々—伊蘭にて臭き木栴檀は香木
七字の首題—南無妙法蓮華經のお題目

緩怠—横着

云るゝ身に、玉子酒を飲まそふとは。身共が無間へ落つるなら、お手前は叫喚の、苦を請ふのが不便なはい。と云て呑まずば聞かれまい。いらんの林に交れ共、しやく旃檀の香は失せず、泥より出て泥ならぬ、胸の蓮は宗門の、七字の首題只今の、妙法蓮華」と一息に、ずつと干さんと爲給ふを、十内手を上「待つたく、待ませふぞや待ふく」と、盃取て彼處へ投げ、吉三郎を取て伏せ、拳を振上遠慮なく、さんぐに打ければ、吉「ヤア家來の身にて推參な」と、一腰拔かんとする所を、隙間あらせず二つ三つ、足の下に蹈付て、「何が推參緩怠な。親の安森源次兵衞、見忘れたか」と懷中より、骨桶出してさし擧る。踐まれながらに吉三郎、振仰向て「こは如何に、親父樣は死なしやつたか」十「ヲヽサく。エヽ、問ふも語るも浦めしや。先月廿九日の夜、御切腹遊ばされた。忠義とは申ながら、御無念な御最期の、其中にてもおつしやるは、云置く事は外に無い、何卒悴吉三郎が、出家相續する樣に、くれぐ十内賴むぞとて、家來に御手を合されし、お志のいとをしさが、骨に通つて有故に、お主を叩いた天罰も、踐んで奈落へ沈むのも、身共は何共思はぬ」と、其まゝ其處にこけ伏して、男泣こそ切なけれ。吉三郎は骨桶を、手に乘せて見つ膝に置、「エヽ替果てたるお姿」と、咽入く消へかへる。十内や

迄—強辭にて意なし
おんでもない事云々—勿論の事ぢやおあがりなさい
げんぎ—玄義か

玉子酒一つ參れ」と突付る。隹「何じや、身共に是呑めか」武「いかにもお七同前の、八百屋の玉子まいる氣か、參らぬ氣かで眞實の、底を洗ふて見る合點」隹「ハテ疑ひ深い男じやなふ。佛祖をかけてお七への、戀は僞なけれ共、邪淫は思案の外の事、殺生戒は忍破るまい」武「イヤ〳〵〳〵何程佛祖をかけられても、是を呑みやらにやいつ迄も、吉三が垢は脱けられまい」隹「ムヽすりや是非共に呑めじや迄」武「おんでもない事。聞こしめせ」隹「ハテ扨々是非もない。ハア實に昔もためし有、鳩のはかりに身をかへし、佛の慈悲の古も、愚僧が今も菩薩の行。此酒則清淨池。吉三が垢さへ脱けるなら、呑んで見せう」と引受て、手に持初むる盃の、朱を注いだる血眼に、涙は霰の如くにて、「武兵衛餘り慘いぞや。久兵衛夫婦は大切な、娘に浮名立られし、其腹立に如何樣な、無理無體も云筈じやが、寺檀の好によしなにも取合有筈を、難題いはるゝお手前が、胸の中に物が有。探して見たい物なれ共、法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の、家を離れて七才より、佛の前に受戒して、難行苦行師の苛責、誠に出家の文字の樣、住家と定む宿もなく、雨露霜雪に身を痛め、此に馴るれば彼處へ行、有時は飢に疲れ、けんぎ文句に眼を曝し、四十有餘の此比は、色衣を著し敬も、一字の寺を司り、樂人共

いたいけ―愛くるしい

家一軒を見込にて、仕掛けた戀に乘せられたな。大白痴奴盗人奴」と、彼方を睨み此方をば、引摺寄せてさん〴〵に、打るゝ杖の下よりも、お七は吉三を打見遣り、吉三は爰に居ながらに、消へも失せたき心なり。住持はしばし默然と、涙を隱し居られしが、稍あつて、住「是御夫婦、全くお七に科もなく、吉三が徒したでもなし、科人は此坊主。お七が爰に居られし節、はれいたいけな發明な、娘の子じやと思ふから、戲言を二三度も、申た事の候が、女は何處やら愚にて、まん誠かと某へ、送ふとがな思ふたを、しどけなふして拾はれて、無き名負ふたる不便や」と、衣に落つる涙こそ、二人が袖にわかるらし。武兵衛はせいて大胡座、「是御寺樣、御贔屓が餘り過てむつとする。鷹を鷺となされうが、起請の文字ははがされまい。是御覽ぜ」と投出す。住「いや見る迄もないお手前が、最前讀んだ文言に、其方樣に御出家を、止めさすからとはなかつたか。吉三は出家じやおじやらぬぞ。宛名に書しよし樣は、愚僧は勿論吉祥寺、何と擬は有まい」と、眞顏造つた諍ひに、何れ誠と分き兼ねて、皆々興をぞ覺ましける。武兵衛住持を睨付けて、「これ御坊、女房狂を爲さるなら、魚も定て參るであらふ。幸ひ道で求めたる、玉子を是に持合す。お饗應を申さふ」と、袖の内より取出し盃に打入て、「サアお寺樣、

旦方―檀那方

すつはのかは―惡黨

三は不便に思へ共、お寺には替へませぬ。云ても御合點ないならば、無理に吉三を引出ぞと、太左と身共兩人が、牒し合せて置ました。サア吉三立て行け」と、傍若無人罵れば、住持顏色損じつゝ、「兩人存外千萬な。出家の弟子は子も同然。其吉三郎を我儘な雜言は何事ぞ。難義が懸りや師弟共、此寺を開く分。其方の世話にや爲ますまい。お手前計が旦方か、不出來な差配」と叱られて、武「エヽ何にも御存ない故に、御贔屓が一がいな。お前は弟子と思そふが、お七と云てあれに居る、娘が吉三のお内義樣、坊主の女房」と冷笑ふ。久兵衛夫婦腹を立、「そりや武兵衛殿何言やる。大事の娘を吉三には、誰が仲人で嫁つたぞ。麁相な事はおしやるまい、證據を見よ」と立かゝる。武「はて喧ましう云はいでも、こちからお目にかける」とて、件の起請取出し、「コレ讀みまする、聞かつしやれ。其方樣に御出家を止めさすからは、此方にも嫁入致し候まじ。次に色々神おろし。よし樣參る、お七より。何と」と云を聞よりも、吉三は袂打振い、はつと計の風情なり。お七はおろ〳〵涙ぐむ、景色も何れ笑止なり。久兵衛目鼻を顰め、つく〳〵と打まもり、疊を叩き身を慄はし、「やい其處な徒者、何時の間にまあ此樣な、大膽な義を仕出して、大勢の眞中で、親に面恥かゝせおる。すつはのかはな若衆が、此久兵衛が僅成

ひじ—非事午前中の食事

だいそれた—飛でもない

茶持來い。ひじも拵へ莨盆」酒よ銚子よさん〲の、中に立たる御師匠の、心遣ぞ殊勝なる。然る折節方丈より、八百屋久兵衛親子連、續いて武兵衛太左衛門、住持の前に會釋して「お暇申」と立出る。住「エヽこりや早御歸りか。最前より此に居て、御挨拶もせなんだ故、武兵衛殿や太左殿は、定めて酒が足りますまい。お客も心安い仁、よふござるはい遊ばしやれ。平に〲」と留むれば、兩人は立留り、武「久兵衛殿聞かしやつたか、御遠慮の無い御方と有。然らば序に今の事、お寺へ御咄致ませう」久「ハテ武兵衛殿それはまあ今日に限らぬ事、嚊や娘も連れたれば、暮れぬ内にいにたいが、ござれ」と云もさらぬ顏、是非なく共に立戻る。兩人は上人の膝元に畏り、「御酒は望に候はぬが、急にお知せ申たき、いはくは是なる吉三郎、親御は名有武士とやら、承ればだいそれた事仕出して、此頃追放せられた共、縛首を討れた共、口々の取沙汰故、親の子なれば如何樣の、義がござらふも知れませぬ。片時も早く暇をば、遣はされたらよからふと、憚ながら存ます」住「ハア心遣は忝し。先だつて其事は、愚僧も聞ていまするが、世間の沙汰とは裏表、樣子は分ていはれぬ義。苦勞に思ふて下さるな」「ハヽ〲、否それはお寺へ遠慮して、取合せ云最屓口、其横著さ非道さは、聞も身の毛のよだつ事。吉

しぎ―しわざ

に浪人致せしを、若殿御滿足に思召、御身持直れば浪人せしかいあらん。然れ共此趣大殿御存無き時は、親たる人仇奉公をした道理。本國へ立歸り、隱れし忠義を顯す事、今日遁世致すより、拔群の孝行」と、詞飾るも好色の、噓に馴れたる證なれ。十内涙を袖に受け、「おほくの書物を見ひろげて、深き道理を思召す、御所存感じ入たるが、武士の作法は外の事、主の善惡顧みず、討死するも世の習、そこは差別はない所。お前が奉公お望でも、不屆者の躮とて、親殿御抱なされまい。申開もならぬ筈、すご〳〵歸給ふのは、恥に上塗する同前。よく〳〵おぼし直されよ」と、理を正せ共、吉「イヤ〳〵〳〵、身共が勘當受たのは、大殿も御存有、さあれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望が誤りか。何の遠慮有べき」と、いはせも果ず十「是吉三樣、勘當を言立に、御奉公ある此方なら、孝行顏もいらぬ物。アヽどふやらお前の御胸中、紛らはしうて飲込まれぬ。是も非もいらぬ發心を、さあ爲さるゝか爲されぬか、返答次第拙者奴が、分別有」とにじり寄る。上人は聲を上、「アヽ氣が短い十内殿。武道のしぎは其許に、いか樣共捌かれい。法師の道は此方へ、預置かるゝ筈の事。數ならね共師と頼む、愚僧が指揮致す義な、吉三も否とは申まい。世話をやかすと緩りつと、心靜めて語らしやれ。こりや〳〵辨長

精ー原本情

一合ー一點

「頼みませふ」と云入る。折節住持は方丈へ、吉三伴ひ出給ひ、「何人成ぞ用あらば、此方へ」と有けるに、「ハッ」ト答へて編笠を、取て彼處に入ければ、住「ヤア十内殿お久しい。先申さふ。御主人には、不慮成事の御浪人、殘心推量仕つた。吉三は親子の中なれば、さぞ歎かふと存たに、さすがは學文精にいれ、出家に染る程有て、世界は無常とあきらめて、頓著も致さぬ段、去とは奇特に存ル」と、取なしあれば十内は、「滿悦至極の御詞、それと申も上人の、日比お示しあるいはれ。就いては主人源次兵衞、浪人せしは何故と、お耳へ入しは知らね共、自分にをいて一合も、非道の沙汰は致さね共、若殿の御難義を、救い申さん爲計。私慾の科を身に被り、不時の虚名を請たる事、さら〳〵悔候らはず。それに付ても吉三郎、出家の願ひをひたすらに、貴僧樣へ申上、剃髮禪衣の姿をば、篤と見屆立歸れ、と拙者を差越候」と、慇懃に相述る。上人暫し頷いて、「苦勞の中にもそれ程に、子は大切な物じやよのふ。成程々々今日にも、出家致させ申さふ」と、頼もしげなる返答を、胸に手を置く吉三郎、兎や角思ひ廻らして、眞中へずつと出、吉「ムヽ珍らしや十内。扨某が出家の事、御師匠仰有通り、心に待兼居つたるが、今其方が咄を聞、忽心底ひるがへり、二度武士に成思案、先一通り承はれ。父源次兵衞、若殿への忠義

はめた—歎いた
つがもない—わけもない
よみ—博奕
にくずし—ぶちこわし

ば鉢巻を、そつと外して「こりやどふじや」と、四邊を見廻し打頷き、起請を出して押戴き、「一杯はめたと思やろが、其裏喰はせ此方には、吉三の袖の内に有、これしてやつた。良い氣味じや」と、打笑ふたる後には、萬屋武兵衛太左衛門、先より樣子を聞濟まし、「新發意爰に何してじや」辨「エヽ、お二人樣お參りか。久兵衛樣も先にから、客殿にござります。お出」と云て駈行を、武「アヽ是辨長殿、此方が只今戴いた文を、身共に下されい」辨「ハテつがもない事計。忝も是はな、お七樣と吉三郎、戀慕れょつの起請とやら。お前もらふて何さしやる」武「サア其お七と吉三奴が起請じや故に、もらひたい。其替には常々に、欲い〳〵といはれたる、木佛の大黒と布袋や、加留多一めんじやが、何と」と背を叩かれて、辨「こりや談合が面白いが、だまくはすのじやござらぬかや」太「ハテ何の嘘をば吐く物ぞ、則太左が請合じや」「ムヽ、歴々の證據人。そんなら遣ろ」と差出せば、武兵衛悦び請取て、「是さへあれば、此方の戀は叶ふた」太「手に入た」と、兩人呟き入にけり。辨長は只一筋に、「武兵衛樣必ずや、明日共いはず晩からは、六介が部屋へ行て、二文四文のよみ打て、釋迦に契を結ぶ」の神、お七が戀のにくずしと、知らぬ事こそ 三重 悲しけれ。主從の緣はさすがふか編笠、用有氣なる侍の、玄關に佇みて、

はしりー流し
けはふてー假粧ひて
風呂敷の云々ー吉三の小袖を風呂敷の代りに
顔に起請ー顔に著せるにかく
書院ーしやうにかく
濡縁ー戀にかく
如是本末ー如是は經の最初の句にして徹頭徹尾の意に用ふ
めかりー目利
めんないちどりーめくら鬼の遊び

此方へ寄れば後から、毛の生へた手で投廻す。あをぬけば二階から、俯けば簀から、」「是はならぬ」と迯廻り、吉三が袖に顔差入、法蓮華經も本道も、付ふ藥のない首尾を、杉が氣轉の手療治に、引抱へ來て風呂敷の、小袖を取て辨長が、顔に起請をはや／＼と、まづ良い事を書院先、硯を取てくれえんより、濡縁有こそ嬉けれ。互に向ふ顔と顔、彼方に抱けば此方にも、恐ろしがりて抱付いて、お題目よりお經より、如是本末や屈竟の、子供をだます方便ほん。膝の間より坊主首、によつと出して「見た／＼、おりや見付た」と駈寄るを、杉も續いて走寄。「其處を彼の幽靈が後より引摑み、なふ怨めしやそち故に、多くの屋内が世話を燒く。小意氣過ぎたる小坊主奴と、まつこのやうに抱へ帶、くる／＼と目を卷きて、執念き聲で、やい其處な、二人の者はうつかりと、何狼狽へて立て居る。そちらではない此方へじや。ハアテ彼方へ。めかりのない。帶解く事も時による。ついちよこ／＼とねる物」と、氣を付られて頷いて、飛石傳やう／＼と、圍の内へ内ければ、「さあしすました幽靈も、最早冥途へ歸る」とて、搔消すやうに丈方へ、迯て形は無かりけり。辨長獨うろ／＼と、「杉こりや何とする事ぞ。めんないちどりか合點じや」と、座敷一間を舞歩き、「吉三殿お七樣、杉々々」と呼ばへども、返辭無けれ

ねつな事—ねつはこねる
八官—法華經の卷の數八卷にかく
びくにん云々—比丘尼の死骸が大きくて棺桶につまる比丘の唄ふ拍子の「少觀くわん」にかく
丸太—比丘尼の一名と丸き材とかく
ぢんだつざい云云—十界の作業迷悟の根原に深く達する深達罪福相徧照於十方（法華經）
ふるなの辨長—富樓那の辯にかく
せつき—節季と赤鬼
身體云々—身代に穴をあける
くき桶—澤庵漬の桶

やろがの」辨「ハアねつな事をばいやるのふ。其幽靈を浮めてやる、胸に納めた法華經の、八官町のびくにんの、ちと棺桶の詰つたが、迷となつて幽靈が、そこな丸太の間から、出たをぢんだつざい福相、浮めてやつた」と意氣過ぎた、習はぬ經の談義口、悉皆ふるなの杉「辨長樣、是から私が咄そふ」と、膝に抱寄せ「聞かしやんせ。こちの隣に分限者の、造り倒れがあつたげな。男は去年の正月に、初の子產んで死なれたげな。跡で後家御が奢られて、傾城狂を爲られたげな。揚錢の見入にて、せつきといふ鬼になり、慾に眼が光るやら、身體に尾が見ゆるやら、額に江口倉橋の、大根程な角生へたを、くき桶に入れ其家の、はしりの側にうづんだげな。其執心で夜々は、屋鳴震動雷電し、天井板がむち〱、はしのこがぐはた〱、四方の壁がどろ〱」辨「モウ此咄措いて給も。どふやら面白なさそふな」杉「ハテまあ跡を聞かしやんせ。又膳棚がぐはら〱、庭の薄がざは〱、明障子がほうつと燃へ、其中から幽靈が、しろ佛程けはふての、おはぐろは烏羽色、髮うつさばき倒に、屛風の陰にによつこりと、顏さし出してけら〱、ハヽ〱ハツト笑ふたげな。家内の者が一時は、ワヽ〱ワツト目を廻せば」小坊主は狼狽へて、彼處へ向けば「向ふから又其顏が出る。

常香云々—常香盤に香をもり終らずに
曼陀羅—淨土寶相の圖
淨土の一枚起請—法然上人の作こゝは二人かはらぬ起請に用ふ
琉球芋—今の甘諸
こま付—手なづけられず
できました—よくいはれた

皆僞り。誠を見する誓紙をば、只今致て進ぜふ」と、棚より料紙硯箱、筆おつ取て書く所へ、新發意常香盛りさして、後の方を立覗き、「コレ吉三樣何さしやる。上人樣の曼陀羅を遊ばす筆で、勿躰ない穢らはしい」と尤められ、はつと下にさし置て、吉「ハア辨長、其方は先からそこに居て、樣子は何も聞きやらぬか。お七樣のおつしやるは、曼陀羅が欲しけれど、お師匠樣へは憚りな、身共にとのお望故、書ふとしたが何とした」辨「エヽ如何にもそんな事そふなが、お七樣から遣らしやつたは、淨土の一枚起請とやら、有難そふに戴いて、こなたは宗旨替へる氣か。曼陀羅書くとおしやれども、そりやあんだら」と笑ひける。お七はやがて手を取て、「いつ見ても〱、可愛らしい坊樣じや。巾著でも紙入でも、欲しくば縫ふて進じよぞや。ちよつと見たこと聞た事、いはぬ物じや」と賺せ共、中々頭打叩き、辨「愚僧今年十二才、出家の道を相守つて、女の手から物とれば、五百生が其間、手のない者に生れます。又嘘吐けば獄卒が、かねの剪刀で舌を拔く。それでは日比好物な、琉球芋が食はれぬ」と、こま付られず立去らず、取付く虫の辨長や、花の嵐と持餘す。杉は捕まへ「できました。目に入樣な御前でも、出家侍佛の使者、位の高いお人じやが、それでも爰へたつた今、幽靈が出ましたら、恐ろしがつて泣かし

ねちがい—願ひのなまり。ねちふにかく
あたふた—急忙
てちだ—手傳はうかへ
とめ袖—とゞめるにかく
誓文くされ—神佛に誓つて

をいらいつ手を撫でつ、もぢ〳〵するももどかしく、杉「ハテまあ初心な何ぞいの。親御は後生ねらがいに、御前は小性ねらがいに、あたふたと取急ぎ、こんな尊いしゆびへ來て、あかりの戀が始でも、何が恥かしござんす」と、背をついとおしやられ、倒けかゝるのを機にして、とんと後へもたれ寄り、てちだをかへと手を取れば、吉三郎振回り、「ハアハお七様お久しや。道も忘れず今日の御參詣は奇特なり。然し御親父久兵衛様お袋様は二時も、先から參つてござるのに、跡へ下つて何ぞ又、あじな趣向があつた物。聞ば毎日堺丁、木挽丁への御遊山に、歌舞伎若衆の美しい、姿でうまい狂言を、御覽じた目で私などが、抹香計とめ袖に、秋の來たのは御尤。戀のいろはを敎へても、手が惡るければお師匠を、替へて嫁入遊ばすげな。目出度事じや」と氣を持たす。お七はさすが正直の、顏を赤めて涙ぐみ、「誓文くされ何時からか、芝居へ足も向けませず、心に立てお猫さへ、膝に抱いたる事もない。此方樣こそは方々から、女子の弟子がついたやら。ちつとの内に大人びて、小面の憎い此口が、私は因果で可愛いもの。何處へ嫁入をするものぞ。お前はやがて坊樣に、成らしやんすとの取沙汰が、氣掛りでならぬ故、互の固めせふ爲に、これ起請をと差出す。吉三はやがて戴いて、「忝ない〳〵。鬼や角云たは

木の端―法師を無用な木の端に譬ふる事枕草紙に見ゆ
まいら戸―横に細長きサンの有る戸
こい茶―戀と濃にかく次の新茶の口を切ると初にいふとかく
玉ぼこ―道の枕詞、給ふとかく
ていやつて―しなつくつて

八百屋お七

上之巻

謡下タセ 木の端と誰が片意地な筆ずさみ、それは浮世を捨坊主、是は煩惱菩提所の、寺は華麗の大書院、唐戸まいら戸違棚、掃きちぎつたる鳥箒、塵に交れど法性の、水は濁らぬ瀧川の、戀に小性の吉三郎、遊びがてらに挽く茶臼、眠たからふと人目には、見へて寐もせぬ憂ことに、花の姿も萎れ行、君をこい茶に口切の、主は誰樣お七さま。立つ名はげにも本鄕の、八百屋の花柚松茸の、蕾も何れ初物の、緣は可笑や假初の、過し火難に此寺へ、親子主從厄介の、內のもや〳〵氣も付かず、普請も出來て鴛鴦の、つがいつれなき水離れ、立ても居てもあられねば、せめてお顏を拜みにと、親の跡追う寺參、釋迦も見許し王ほこの、道のかいどりおしおろし、襟繕ふてていやつて、座敷へ出れば君が顏、見るよりはつと氣上りし、お七「ノウ杉や、もふおじや。なんといぬまいか」と、髮

て、頓て全部十冊物、此上もなき敵討、今に譽を殘しける。

鍔ぜり―つばもとか

韋駄天―南方の天王、八將の一にて能く疾走す

練の和田志津馬、爰に顯はれ彼所に切拔、飛鳥の如く早業に、股五郎もあしらい兼ね、突かける鎗先を、鍔ぜりに受留られ、跡退りに成てたぢ〳〵、坂の下へと引て行。「こは心得ず」と團四郎、股五郎を救はんと、勢ひ込でかけ行所へ、「どつこいやらぬ」と政右衛門、仁王立につゝ立たり。團「シャ邪魔ひろぐな」と打かくる。政「心得たり」と受流し、付込所を身をひらき、飛よと見へしが團四郎、から竹割に切伏たり。返す刀に助太刀共、一人も殘らずすくい切。志津馬が身の上氣遣はしと、二人の家來を跡になし、坂の下へと飛で行。孫八武介は死物狂ひ、數多の付人相人に取、切つ切れつ戰ひしが、數箇所の手疵に目をくらみ、同じ枕に死してけり。股五郎相人に和田志津馬、手利の晴勝負、いづれ拔目はなき所へ、政右衛門が韋駄天走り、「助太刀の奴原は一人も殘らず討留しぞ。殘るは其奴只一人。ソレ踏込で討留い」と　聲の介太刀百人力、よろめく所を付入て、肩先ざつふと切付たり。こは叶はじと股五郎、死物狂いと働け共、動ぜぬ武士の太刀風に、さしもの澤井も切立られ、しどろに成を疊かけ　尖き一刀、大地へどつさり。起しも立ず乘かゝり　志「年來の父の敵、舅の敵、主人の仇、一度に晴る胸の月」「空に知れし上杉の、家の譽れ」と悅ぶ唐木、武名は世々に鳴ひゞく。和田が手疵も日を追

立附―袴の一種

先へ廻りて、代官所の屆けも濟て、北谷の四つ辻に、主從四人我劣らじと入來る。政右衞門聲をかけ、「孫八武介は我に構はず、志津馬をかこい。我兼て聞及ぶ、股五郎には付人有由、目ざす敵は只一人、譬助太刀何十人有迚も、何程の事あらん。最早來るに間も有まじ。身拵へを」と制すれば、志津馬は今日を一世の晴業、「心得たり」と片肌脱げば、南蠻鎖の差込に、鎖り鉢卷、拜領の不動國行覺への名作。同唐木も立附に、澁の鉢卷信國の、ねた刃は兼て合詞、いづれ劣らぬ古今の勇士。池添石留引添て、日頃の念願指す敵を、今や來ると待かけたり。程も有せず股五郎、惡黨原に前後をかこはせ、一番手は林左衞門、さゞめき渡り我一と、小田町筋へと打通る。斯と見るより和田志津馬、木影より飛で出、向ふに立て大音上、志「ヤア〳〵いかに澤井股五郎、汝が手にかけし和田行家が一子、同苗志津馬、此所に待受たり。尋常に勝負せよ」と聲かくれば政右衞門、「オヽ久しや櫻田林左衞門、郡山にて眞劍の勝負を望みし其方、今日に至つたり。サア覺悟せよ」と呼はつたり。「心得たり」と林左衞門、馬上より飛下るを、走りかゝつて政右衞門、豁より肩先かけて切付たり。「ソレ逃すな」と聲々に、一流を得し附人共、志津馬を目當切かくる。「心得たり」と池添石留四人を相手に切結ぶ。股五郎志津馬は一騎打、兼て手

わけて云々ー別てとりわけてとかけ此上ながら妹の事を頼むとなり
ぼつ付てー追つきて
三ツ瀬川ー三途の川、見るにかく

にて九刕相良へ、落失せんとの云合せを、お知せ申て相果るが、志津馬様へのせめての寸志。町人なれ共敵の端くれ、股五郎に頼れた一つの命を兩方へ。わけて願ひは此上ながら」政「ヲ、瀬川が事は政右衛門が、刀にかけて志津馬に添す」士「ハ、武士の鑑の政右衛門様、其御一言は呉服屋が冥土の晴著。サア〳〵片時も早くぼつ付て、此年月の御本望。早く〳〵」と氣をいらつ、手負に取付く妹が、歎くを制して政右衛門、「ヲ、いかにもぼつ付討留んは、我掌の中に有ど、志津馬が亡君上杉殿の、御家門たる畠山、政家公よりすへ置れし、宇内公の石碑有伊賀路において本望達する物ならば、泉下にまします顯定公、行家殿への追善ならん。譬何百何十人、彼に力を添る共、天理に背敵の介太刀、何條恐るゝ事有じ。時は初更の戌の刻、先へ廻つて伊賀越に、多年の本望今此時」と、唐木が諌めに力足、手負を跡に三つ瀬川、三途の瀬ぶみは敵の魁、さらばさらばを夜嵐に、聲吹分る海道筋、跡を慕ふて三重急ぎ行。

第十　敵討の段

されば唐木政右衛門、股五郎を付出し、夜を日に繼で伏見を出、伊賀の上野と心ざし、

欠入—駈入

従一度に身繕ふ。舉「ヤア〳〵、コリヤ伜眼が見へるな。贅宅こりやどふじややい」贅「ヲヽ目醫者と成て入込し、此贅宅が本名は、孫八が兄池添孫六。志津馬様と云合せ、明らかな兩眼を目病と僞り、伜が俗性敵の行衛を知ん爲。首尾よふ參つた櫻田殿」と、云れて悚り、舉「ヤヽヽヽスリヤ股五郎を見出さん爲、云合せて有たよな。此上は一味の者へ告知せん」と駈け出る。「敵の加擔人迯さじ」と、拔手も見せず主從が、働しき手練の働きに、さしもの櫻田叶はじと、旅宿をさして迯込だり。「ヤアいづく迄も」と孫八志津馬、駈入んとする奥の間より、「どつこいならぬ」と呉服屋十兵衛、かけ隔て支ゆるを、血氣の志津馬が切先に、肩先ずつぱり切下られ、うんと倒るゝ其隙に、奥を目がけて欠入を、「ヤレ暫く」と聲をかけ、濱邊に繫ぎし苫船より、船裝束を其儘に、武介引連政右衛門、しづ〳〵と歩み出、「手に入た敵なれ共、爰では討れぬ子細有。町人ながら義心有十兵衛が此深手。非道に組せし先非を悔、志津馬が手にかゝりしは、本望ならん」と有ければ、手負はむつくと起上り、「ヲヽ御推量の上は我所存、今更くど〳〵申に及ばず。股五郎始め一味の者共、西國へ落失ては御本望の妨げと、政右衛門様の計略にて、最前の似せ飛脚を、誠と心得裏道より、小倉堤を伊賀越に、志州鳥羽の湊より、大廻し

り殺すは安けれど、某始め股五郎が有家を知れては一大事と、贅宅に申合せし身が計略。眼も見へぬ分際でも、見事親の敵を討か。相手は大敵其上に、城五郎殿のお心付にて、劍術勝れし侍數多付添ふ股五郎、所詮叶わぬ事だとあきらめ、首でも縊つてくたばれ」と、惡口雜言脚にかけ、踏付られて無念の齒ぎり。志「エヽ侍の有まじい比怯未練の此仕業。親の敵の股五郎に緣を引たる其方が、土足にかけられ、手向ひもならぬは、此目が見へぬから。エヽ口惜や無念や」と、拳を握り男泣。見るに瀨川が氣は狂亂、「目界も見へぬ志津馬樣に、慘い辛い大惡人。天道樣の明らかな、お目には是がかゝらぬか。孫八殿は何してぞ。神も佛も恨めしや」と、聲を限りに泣叫ぶ。贅「エヽやかましいわい〳〵。コリヤ眼の見へぬ計じやない、毒氣が五臟へ廻るが最期、追付ころり。百兩の褒美がほしさの仕事じやわいやい」贅「ヲヽ贅宅が働きにて、此志津馬めを仕廻ふて取、待伏ひろぐ政右衛門め、鼻明すのが此方の方便。荷物の内に忍ばせ置し股五郎にも落付せ、うぬらが苦痛を肴にして、一獻汲ふ。ハレよい態」と踏飛し、駈け行鏥をしつかと取、志「すりや差敵の股五郎は」贅「ヲヽ身共と一所に昨日より、是に逗留致し居るはい」孫「エヽ忝い。今こそ敵の在所が知た。志津馬樣嘸御本望」と、ぬつと出たる池添孫八。主

素破の骨項云々—悪黨の親玉なれば落付いてゐる

うつそり共—間抜共

つぱ〱、素破の骨項納た頬付。志津馬は苦痛堪へがたく、「申〱、是迄の御藥とは違ふて、五臓迄も染渡り、いかう苦しうござります」と、聲に瀬川も走り出、「若お藥は違ひはせぬか。お心慥に持しやんせ」と、一方ならぬ介抱に、じろりと眺め、玄「うつそり共め今藥じやといふて差たのは、我が目を潰さふ計。おれが祕方の毒藥じやはやい」志「ヤアヤア〱、そんなら今のは毒で有たか。何意趣有て此仕業。サ樣子が有ふ樣子は」と、立上れ共よろ〱〱。「瀬川何處に居やる、瀬川。爰が苦しい〱、せつないわいの」と、夫の惱を見る悲しさ。有にもあられず縋り付、瀬「そんならお目が見へぬか。ハア。ヤイ胴欲醫者の鬼め魔王め。ずた〱に刻でも恨ははれぬ」としがみ付、小腕取て膝に引敷、玄「ヤア〱〱、ばた〱と刎廻てももふ叶はぬ。イヤ申隣のお客、何と拙者の七加減を」與「ヲ、とくと是にて見屆たり」と、物影より林左衛門、したり顔に歩み出、「和田行家が躮同苗志津馬、無念に有ふな」志「ヤナニ某を和田志津馬と知たこなたは」與「ヲヲ澤井股五郎に力を添る伯父の櫻田林左衛門。其方連が股五郎を討んなどとは及ばぬ事」と、聞より扨はと這寄〱、志「敵の片われ遁さじ」と、刀の柄に手をかくるを、襟がみ摑んでぐひと捻付、與「ヤア劍術無双の此櫻田に、刃向はんとは、小賢しい蚊蜻蛉侍。捻

めんけん云々―孟子に見えたる語、めんけんは瞑眩

は一間を出、「ヲ、是は御苦勞千萬。扨お歸りを待兼ました」齋「ヲ、そふでござらふ。晝からお見舞申筈が、御存じの流行醫者、あそこからも竹中家からも贅宅樣、生藥師じやと持囃して、漸只今罷歸つた。何と晝の洗ひ藥で、さつぱりとよからうがの」志「イヤさして替つた事も」齋「ハテめんよふな、アノ藥でよい筈じやが。ドレ〳〵今一度、見て進ぜふ」と、行燈引寄せ灯明りに、ためつすがめつすかし見て、「コリヤ内障立じやはいの。是なら洗藥では行ぬ筈。コリヤ取て置の點藥を出さずは成まい。コレ大切な藥じや程に、うつかりと思はしやんなや。氣遣ひ召るな、今の間に本復さして進ぜふ」と、こて〳〵取出す藥箱、志「アヽ是はよいお方に、かゝり合して拙者が仕合せ。此お禮は本望を、イヤ追付本復致したら、急度致すでござりましよ」齋「ハテ心遣ひさつしやるな。醫道は仁術、人を救ふは醫者の役ぢや。サアもそつと此方へ寄らつしやれ」と、片手に眶押明て、すくふ件の毒藥は、直に志津馬が命を斷、七の刃金の差藥、忽毒氣廻ると見へ、志「アヽきつふ此目が」齋「ヲヽ痛む筈。しゆむか、しゆむで有がの。少しの間じや、こらへさつしやれ。藥めんけんせざる時は、其病治せずと申て、一旦動かねば藥は利かぬ。追付兩眼明らかに、此生藥師が治して進ぜる。ドレ其間に一服致さふ」と、煙管取上す

左少ー些少

慥ならば」〔櫻〕「先は過分。然らば打明お咄し申。子細有て某始め、別宿に逗留致す、組の者共へ仇有奴、と夜前より心を付るに、身共が推量少共違はず、彼が實名知たる上は、討て捨んと思へ共、彼者に力を添る劍術無双の曲者有故、我々が手にかくる時は、返て此身の有所も知、帶紐解て夜が寐られず。サア頼といふは爰の事、何卒貴公の働きにて、毒薬を薬と僞り、彼奴が眼の見へぬ様に、何と手段は有まいか。此事成就致しなば、一廉お禮を仕らふ。先頼の印」と、懐中より金子の包取出し、左少ながら」と手に渡せば、〔貧〕「ヤアコリヤ金子五十兩。テモ結構なお印しやな。隣の病人治したとて、高々貳朱か、能ふくれて百疋は覺束ない。ほんの是が牛を馬に乘かへたと申物。後共云ずたつた今、我等が祕方の毒薬を、差が相圖に兩眼より、五臟へ染込腐り薬、ちやくと用意致して置た。コレ刀入らずに仕廻うて取は、此貧宅が手の中に有」〔櫻〕「エヽ早速の得心、滿足致いたく〳〵。必手ぬかりなき様に」「イヤモお氣遣ひなされますな、生す覺へはなけれ共、殺す事ならこつちが得物。委細はあれから御覧じませ」〔櫻〕「いかにもよきに」と打點頭、謀し合して店の間の、障子引立窺ふ櫻田。何でもしめたと貧宅が、物に懸りの掴み頬、上べに見せぬ塗骨の、扇ぱちく〳〵隣の店、「ヤ貧宅でござる。御見舞申」と、聲に志津馬

内證—ないにかく
居士衣—白い野服

覺束ながら押開く、襖の内より林左衛門、差足拔足表口、戸脇に隱れて立聞共、心付ねば、瀬「テモ扨も政右衞門樣のお氣の付た。私でも讀る樣に假名交りの此手紙。ナニ〳〵、彌御無事と存じ候。然れば敵の落足とゞめん爲、大坂川口の出口々々は、門弟共數多付置、油斷なく手當致し、我等事は武助諸共、尼崎兵庫の邊りに待受候間、其地にて替りし事も御座候はゞ、早速御知らせ下さるべく候。此由申入度早々以上」志「スリヤ政右衞門殿には、大坂を立て、兵庫の邊りへ參られしか。此方よりも委細の譯、返書に委しく申送らん。コレ瀬川、爰は端近奥の間で、太義ながら書てたも。飛脚の來ぬ中サア早ふ」「アイ」と瀬川は夫の手を、引連這入後影、とつくと窺ひ聟「扨こそ〳〵、和田志津馬に相違なし。踏込で討放そふか。ハテ如何はせん」ととつ置つ、思案半へひよつか〳〵、一僕さへも内證の、薄いを黑める木綿の居士衣、見るから藪井の竹中贅宅、療治仕廻ふて戻り足、夫と見るより、「ヲヽ是は〳〵隣座敷のお侍樣、コリヤ端近にござりますな」聟「ヲヽ昨晩ちよつと、御意得申た贅宅老。サ是へ〳〵」と片脇へ、招き寄て聲をひそめ、「今朝も申如く、隣家に逗留致して居る若侍がアノ眼病、貴殿が療治召るゝに付、折入て賴し密事、彌御承知下さるゝや」贅「イヤモ御大身のあなた樣のお賴、お禮物さへ

氣作な―磊落

料物―賞錢

りましよがな。是を名付て天照太神、天の岩戸開きと申ます」櫻「何を馬鹿なことを。したが氣作な按摩取。シテ其方が名は、何と云ぞい」孫「ハイ私は板屋勘兵衛と申まして、此間大坂から登ました。貴方もお下りなされたら、外を差置、芝居へお出なされるで有ろア、面白い事でござります。コレ則爰に持ておりますが役者の番附、お慰に御覧じませ」櫻「ムウナニ是が役者の番附」孫「ハイ歌大坂土産に何を貰たナ、申、役者の番附日傘でござります」櫻「ムウナニ日傘」孫「チエ日傘」櫻「シテそちが假名は、板屋の勘兵衛」孫「チエ板勘兵衛」櫻「ナニ板勘兵衛」孫「ハヽヽヽヽ、ヤ是からお下をやりましよが、横にお成なされませぬか」櫻「イヤ〳〵下の療治は後程頼。料物も一所にくれふ。中々氣作な男め故、長旅の欝氣を散じた。さらば是から、夕飯の宿屋の知行に有付ふ。勘兵衛後に」と櫻田は、刀提げ立上り、一間へ入ば孫八は、上の町へと急ぎ行。道摺違ふていづこかは、飛脚と見へて門口から、「ハイどなたぞ頼んませう。是のお客林新五様へ、大坂からの此御狀」と、聞より志津馬は覺への替名、志「ヲヽ是は〳〵、則此者林新五、直々に受取ました」飛「ハイお返事をなされるなら、追付取に參りましよ」と、云捨飛脚は立歸る。志「コレ瀬川、唐木殿よりの此書狀、何事じや讀でたも。早ふ〳〵」と封じめ解、

長し－なくにかく

南蠻流－外國傳來の按摩術

めんないの千鳥－目なしどり

でも、衰へると盛ふるは、是程にも違ふ物か。心を盡して尋扨す、敵には廻り逢ず、困窮の上此眼病。よつく武運に盡たか」と、悔むに瀬川も倶涙、「ほんに思へばおいとしや。沼津でお別れ申てより、お跡をしたい尋ね逢ふ、甲斐も長しい日は立ど、是ぞと思ふ手がかりも、ないを苦にして此樣に、ほんに悲しい病目より、傍で見る目の私が心、推量して下さんせ」と、かこち歎くを此方には、聞耳立る櫻田が、兩耳ぴつしやり。櫻「ア丶コリヤ何とする、放さぬかやい」瀬「ア丶お前樣も辛抱のない。斯致して引さげねば、お頭痛が直りませぬはい」櫻「ハテ仰山な按摩だな。シテコリヤ何といふ流ちやぞい」瀬「是は南蠻流の隣の今宮流でござります」櫻「ハア聞へた、それで蠻にするのじやな。ハ丶丶ハ丶」志「コレ瀬川、したが其樣に案じてたもんな。此宿の亭主が引合せで、隣に逗留してござる眼醫者、竹中贇宅老の加減の藥、湯煎に立て洗てたも」瀬「アイ」と云つゝかい立て、勝手へ入て汲で出る、夫に盡す貞節の、心は淸き淸水燒、白湯に振出し差出せば、始終聞居る林左衞門、詞の五音心得ず、と延上つて差覗くを、ちやつと兩手でめんない千鳥。櫻「ア丶コリヤ／＼／＼何とする、目が見へぬはいやい。又是も今宮流か」瀬「イエイエ／＼斯致して置まして、ト一時に手を放すと、何とお目がはつきりと成てよござ

導引—按摩

我達—汝等

高木風に倒るゝ—器量の有る人やられる喩

の療治」と、覗く隣の八百屋の店、奥の間よりのか〳〵と、出るは櫻田林左衛門、「ア、旅勞れで殊の外頭痛がする。幸の導引、一つ頼もふかい」孫「ハイ〳〵左樣ならお座敷へ」櫻「イヤ〳〵表を見るも又氣ばらし。苦しうない爰で」孫「成程それもよふござりましよ。ヤ旦那、御免なされませ」と、庭から直に店の間へ、上る孫八櫻田も、互に夫と面體を、知ねば何の氣も付ず、櫻「イヤコレ療治人、身は隨分きついが好、遠慮なく揉でくりやれさ」孫「ハイ〳〵。アヽきつう凝てござります。そふしてマア見受ました所がお歷々樣、骨組と申 丈夫なお產れ、嘸お力も強かろな。アノ兵法とやら劍術とやらも、定て拔てござるじや有な」櫻「フム我達が目にも左樣見ゆるは尤々。天が下廣しといへ共、某に立合ん者は恐らく覺へない」孫「成程左樣に見へまする。そふしてあなたのお國は何國で、何方へお出なされます」櫻「ムヽ身共は西國方の者成が、智謀劍術勝れし故、高木風に倒るる習ひと、傍輩の讒によつて、浪人して長々と漂泊せしが、サア身共程の達人がおらぬは、國の弱と有て、此度歸參を仰付られ、先知の上に過分の御加增、古鄕へ歸る曉の道中、數多有供廻りは、別宿に扣へおれば、跡荷物の揃ひ次第、明貴船にて下る積り」と、口から出次第僭上を、隣の店に漏聞志津馬、「アレ瀬川、あれを聞きや。同じ武士の身の上

萱にも云々―木にも萱にも心置くと奥口とかく

よござい―ようござるか

ないにこそ―なきにあらず

きな聲で。コレ〳〵誰も聞ては居なんだか」と、萱にも心奥口へ、聞へ憚り差寄て、ひそ〳〵咄す店先へ、志津馬に連て孫八が、忍ぶ姿の按摩取、頭巾すつぽり船著の、宿屋宿屋の門口から、孫「按摩よござい」瀬「ヲヽ孫八殿」孫「コレ〳〵瀬川樣、去とは物覺への惡い。我等按摩取の勘兵衛、必麁相仰しやるな」と、云つゝ差寄小聲に成り、「若旦那のお供仕て、二三日以前から、此伏見に逗留して、思ひ付た按摩痃癖。毎日〳〵此船宿、入込で氣を付れど、さして是はと申樣な手がかりもござりませぬ。夫はそふと、若旦那少お目はよふござりますか」志「ヲヽ孫八の心遣ひ忘れはせぬ。某とても此程より、歩行はならず、出入の旅人に、心を付て窺へ共、敵の行衛知ざる故、次第に重る眼病は、口おしさよ」と計にて打しほるれば、「お道理」と瀬川も涙、孫八も、俱に目をすり居たりしが、孫「アヽ去迚はお氣の弱い。何の神佛樣がないにこそ。アレ天道が正直なれば、御孝行な心が屆て、御本復も本望も、今の中でござりましよ。其樣に思召すは養生の大きな毒。ヤ毒の次手に瀬川樣、兎角病人は介抱が大事、お如才は有まいけれどお若い同士、何よりかより、お持合せの彼毒忌が肝心でござります、ハヽヽヽ。ヤ是から上手の宿屋を廻つて、後程お見舞申ませう」と、云つゝ立て表口、出るより早く聲張上、「按摩痃癖鍼

夕日云々―夕にいふ呉竹に暮をかく

志津馬―しやうにかく

折しも―下りにかく

灘―なくにかく

第九　伏見の段

船頭「男共々々、ソレ胴の間へお蒲團は入たかな」「ハイ艫の間の四人様、水菜は爰に置まする」客「コレ船頭衆、此荷物破物じやぞ、ソレ氣を付て貰はふ」と、世話を素焼の土産物、積より早く押出して、舟を見送り、「御機嫌よふお下りなされ」と、そこ〱に、夕日程なく呉竹の、伏見の里の船著場、軒を竝べし舟宿の、客に絶間もなかりけり。世の憂を、何と志津馬は此處彼處、敵の行衛尋ね兼、心氣勞れて眼病を、いたはる瀬川も諸共に、暫しは爰に宿して、北國屋が奥二階、手を引連てそろ〱と、梯子を折しも黄昏の、人なき隙を幸と邊り見廻し、瀬「イヤ申志津馬様、二階計もお氣詰り。月の夜すがの川景色見やしやんすのが目の養生」と、介抱如才撫さする、心遣ひぞわりなけれ。志「イヤモウ何ほう養生仕ても、はか〱しうもない眼病。見かけに替りなけれ共、今日此比は此様に、そなたの顔さへわかり兼る。ぶら〱月日を過す中、主人上杉公急病にて、御死去遊されし由、御存生の中に、敵も討ぬ殘念。頼に思ふ政右衛門殿、武介諸共引別れ、大坂へござつた故、此伏見に逗留するも、若や敵の。ヲヽ是はしたり、思はず知らず大

そぎ尼―髮を短く切りたる尼

半蓋云々―馬士眼八最に此半蓋の中に入りたり

と、見れば籬の小影より、思ひ切髪墨染の、袈裟にかはりしそぎ尼姿。「お袖か。ヲヽ出かしやつた。悪人の股五郎に、假にも女房と名の付た、其間違がそなたの不運。可愛や盛りの黒髪を」袖「アコレ申、もう何にも申ませぬ。顔は見ね共云號の、男持のがうるささに、屋敷を戻つた其時から、尼に成氣で袈裟衣、今日一日に氣が替り、染違ふたる鐵漿付を、元の白歯と墨染に、染直しても脱しても、思ひ染た煩惱の、心が兀ぬ佛様、御赦されて」と身を背、泣ぬ氣を泣親心。幸「股五郎にも志津馬にも、縁を離れたお袖道心、袖振合ふも他生の縁、子に別れた順禮に、菩提の爲のよい道連、關役人の我娘、關所關所も切手入らず、中仙道への案内者、勝手に連て行れよ」と、娘に敵の道引を、流石子故に踏迷ふ、未來の契り鉦撞木、涙で渡す父母の、恵も深き觀世音、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀、我子は冥途の道しるべ、志津馬唐木も恥合ふて、しほれぬ表武士の禮。師弟は內證敵同士、幸「此儘歸るは比怯者、返せ」と一聲切付る。志「得たり」と請る半蓋に、馬士の胴切重切。幸「まつ其通りの手柄を待つ」政「まだお手の内は狂ひませぬ」幸「ハヽヽヽヽやがて吉左右々々々」と、笑ふて祝ふ出立は、侍なりけり。三重

あへ亡骸―あへなきながら
てうち―子供の手を拍つ戯
したり黒星―うまく推測したり

戸直に轉び入、あへ亡骸を抱き上、谷「コレ巳之助、物云てたも。母じやはいのく。夕部迄も今朝迄も、憂い辛い其中にも、てうち仕たり藝づくし、爺御によふ似た顔見せて、自慢せふと樂しんだ物、逢と其儘差殺す、惨たらしい父様を、恨むるにも恨られぬ。前生にどんな罪をして、侍の子には生れしぞ。こんな事なら先刻の時、母が死だら憂目は見まい。佛のお慈悲の有ならば、今一度生返り、乳房を吸てくれよかし」と、庭に轉びつ這廻り、抱しめたる我が身も、雪と消べき風情なり。志津馬涙押拭ひ、「此上は包ん樣なし。迚もの事に眞實の、敵の有所を」幸「何が扨此方も隱しはせぬ。有樣は此幸兵衛、最前庄屋へ呼れた時、股五郎に逢て來た」志「ヤアすりや敵は庄屋の方に。心得たり」と駈け出すを、政右衛門引とゞめ、「愚々。我々爰に有と聞て、暫時も此地に足を留ふ樣がない。はや五六里も行過て、もふ爰等に敵は居ぬ。此行先も用心して、海道筋へはよも行まい。道をかへて落たと見へる。親仁樣、何と左樣でござらうがな」幸「したり黒星其通り。迚も非道の股五郎、天道の御罰にて、どうで討るゝ者なれ共、此岡崎で勝負さすれば、肩持ねばならぬ幸兵衛。藥師堂の山越に、中仙道へ落したは、城五郎へ一旦の情。股五郎との緣も是迄。思はぬ方便が緣に成、志津馬殿と云かはした、娘が身の果不便や」

返つて―却て
三寸俎板―眼識の明かなるをいふ

よもや違ひはせまいがの。今宵澤井股五郎と名乘來る年配格好、聞及びしとは拔群の相違。扨は返つて付狙ふ志津馬か、但し余類の者か、肌赦させて詮義せんと、態と一ぱい喰た顏、三寸俎板見ぬいたれど、我弟子の庄太郎が、政右衞門といふ事を、知たは漸たつた今。骨柄といひ手練といひ、適股五郎が片腕にせん物と、頼めば早速承知仕ながら、股五郎が有家を根を押て、聞たがるは心得ずと思ひしが、子を一刎りに差殺し、立派に云放した目の中に、一滴浮む涙の色は、隱しても隱されぬ肉身の恩愛に、始てそれと悟りしぞよ。澤井にさせる恩はなけれど、娘お袖を城五郎方へ奉公に遣た時、筋目有人の娘、末々は我一家の股五郎と娶合せん、ヲヽいかにもお頼申と、つい云た一言が、今更引れぬ因果の緣。その後娘は奉公引て歸りしかど、今落目に成た股五郎、見放されぬは侍の義理、かくまふ幸兵衞、ねらふは我弟子。惡人に組してくれと頼に引れず、現在我子を一思ひに殺したは、劍術無双の政右衞門、手ほどきの此師匠への云譯、去とては過分なぞや。其志に感じ入、敵の肩持片意地も、最早是切、只の百姓。町人も侍も、替らぬ物は子の可愛さ。こなたは男のあきらめも有、最前ちらりと思ひ合す、順禮の母親の心が察しやらるゝ」と、悔めば門に堪へ兼て、わつと泣聲内よりも、明る

居合腰—相手に仕懸るさま

幸兵衛驚き、「コリヤ庄太郎、大事の人質何故殺した」政「ハヽヽヽ此躮を留置、敵の鉾先を挫かふと思し召先生の御思案、お年の加減か　こりやちと撚が戻りました。武士と武士との曠業に、人質取て勝負する比怯者と、のち〱迄人の嘲り笑ひ種。少分ながら股五郎殿の、お力に成此庄太郎、人質を便りには仕らぬ。目指す相手政右衛門とやら云奴、其片われの此小躮、血祭に差殺したが頼まれた拙者が金打」と、死骸を庭へ投捨たり。幸兵衛手を打、「ハヽア尤。其丈夫な魂を見屆たれば、何をか隱そふ、股五郎は奥へ來て居るはいの。祖母聟殿を起しておじや。コレ〱股五郎の片腕に成、頼しい人が來たと、いふて爰へ呼でおじや」政「スリヤ澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか。フウシテ外に連の衆でもござるかな」幸「イヤ〱供もなしたつた一人。奥底なふ咄してたも」と、打明語るは思ふつぼ、何條知たる股五郎、手取にするは安かりなん、と手ぐすね引て待大膽。志津馬は女房が案内に、股五郎が片腕とは、何奴なり共只一討、と鯉口くつろげ居合腰、氣配り目配り、互にきつと、二人「ヤア、こなたは〱」と一度の仰天。幸兵衛むんずと居直り、「唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面満足で有ふな」と、先がけられし二人より、思ひがけなき女房が、むどぎまぎ不審顏、幸「ナント老人の目利、

出かける所」幸「ナンノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴の燃さし、非人共が業で有、不用心な」と、見廻す挑燈、政「イヤ私が」と取拍子、態とばつたり、「コリヤ麁相」幸「だんない／＼。きつい風で、すでに道で取られふと仕た。まだもゐい所で火が消た」と、いふもこたへる疵持足、天氣も大方上り口、庭から足拭く下駄直す、師匠思ひに機嫌顔。幸「イヤ馴染程結構な物はない。是から緩りと夜と共咄そふ。彌最前頼んだ事、違變はないの」「是はお師匠共覺へぬくどいお尋、心元なふ思し召なら、鈍刀でない魂を、只今金打」幸「アヽコレ何のそれに及ぶ事」政「及ばぬとおつしやつても、お頼なさるゝ本人の股五郎殿の有家、御存じないとおつしやるは、お師匠の詞に鞘が有かと存じられ、頼まれるに力がない。ナント左樣じやござりませぬか」と、探る心の奥より女房、稚子抱走り出、「コレ親仁殿、最前行倒れの順禮が、抱て居た此乳呑子、今肌を明て見れば、守りの中に此書付、和州郡山唐木政右衛門子巳之助と、書て有わいの」「ヤア」と幸兵衛立寄て、「誠に／＼。シヤア好い物が手に入たぞ。敵の悴を人質に取て置ば、此方に六分の強み、敵に八分の弱み有。股五郎殿の運の強さ。」其がき隨分大事にかけ、乳母を取て育るが、計略の奥の手」と、悦び勇めば政右衛門、ずつと寄て稚子引寄、喉笛貫く小柄の切先。

風に當じ云々―子供を火燵に入れて風に當らぬやうにする
いひ柴―飯をたく料の薪木
けぶらいでも―うす〳〵にても
暗き夜―くらますにかく

遣ませう」風に當じと寐巻の繻袢、あかの他人は慈悲深く、比翼とかはす女房を、憐ふ引出し戸を引立、奥口見廻しさし足し、勝手は見置釜の前、附木の明り見咎て、人は何とかいひ柴を、そつと隱して門の口、伏たる妻に氣を付る、柴の焚火の煖り、嚙しめる歯を押割て、雪に潤す氣付の一滴、耳に口寄聲かすめ、「お谷」といふも憚りて心の内で呼生る、夫の誠通じてや、「うん」と一聲、政「氣が付たか、コリヤ女房」谷「ハアヽマア〳〵政右衛門殿かいの」と、いふを押へて、政「コリヤ何にもいふな。敵の有家手がかりに取付たぞ。此屋の内へ身共が本名、けぶらいでも知されぬ大事の所。其方が居ては大望の妨、苦しく共こたへて、一丁南の辻堂迄、這ふてなり共行てくれい。吉左右を知す迄氣をしつかりと張詰て、必死るな。サア早ふ行〳〵」と、夫の詞は千人力、谷「觀音様のお引合せ。お前に逢たは人參熊膽。エヽ忝い〳〵。が坊は何處へ」政「氣遣ひすな、坊主は奥で寐さして置た。ソレ〳〵向うへ來る挑燈、見付られな。早ふ〳〵」とせり立れど、此年月の悲しさと、嬉しさこふじて足立ず、杖を力に立兼る、兎やせん側に脱捨し、菰に積りし雪の儘、著せて人目を暗き夜を、ほか〳〵戻る達者親仁。政「ヲヽ、お帰りなされましたか」幸「ヲヽ、庄太郎、寒いに門に何して居る」政「イヤお帰りが遅い故、お迎ひに

どみ―かすむ
いぢらし―かはいや
とつかは―急忙

ゆれ共、旦那殿や弟が、敵を尋る辛抱は、まだ〳〵こんな事では有まいに、其艱難にくらべては、雪は愚釼の上にも、寐るのがせめて女房の役。氣は張詰ても此積の、重るに付ては二人の身に、勞れの病が起りはせぬか。萬一悲しい便やなど、聞たら何とせふぞいのふ。頼上るは觀音樣、弟夫の武運長久、我子の命息災延命、未練な事じやが私も、此子を夫に渡す迄は、生て居たい死ともない」と、傍に夫の有ぞとも、知らぬ不便さ喰しばる、喉に熱湯内外に、水火の責苦雪霙、子を濡さじと抱しめ〳〵、天道哀れ白雪の、積り重なる旅勞、積と寒氣にとぢられて、アツと一聲氣を失ひ、どうど倒れし物音は、肝にこたへて「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」も口の内。「今のは何ぞ」と主の母戸を引明ればばつたりと、身は濡鷺の目はどみたり。母「こりや眩暈が來たのじやはいの。エヽいぢらしや、如何せうぞ。夫よ幸此氣付」と、とつかは文庫に用意の薬、政「ア、申、そりや御無用になされませ」母「なぜにいの。こりや親仁殿の道中で持しやつた結構な氣付」政「サア其結構な氣付を、非人同然の者に呑して、それでも氣の付ぬ時は、かゝり合に成ますぞへ。此儘にして放り出して、お仕舞なされませ」母「じやといふて、どふ見捨に成物。アレ可愛や、乳を扒して泣わいの。せめて此子を殺さぬ樣に、奥の火燵で溫て

身はならわし―人の身もならはしものをあはずしていざ試みん戀やしぬると（古今集）

き歸るも頼みなき、人の詞もせめての頼、火影を力、戸口に這寄、谷「幼い者を連た順禮でござります。お情に今宵一夜さ、「お庭の端に」と計にて、積に苦しむ息切の、聲に主は涙もろく、「いとしや積持そふな。門中に寐てはたまるまい。泊てしんじよ」と立て行。南無三寶と裾引留、政「ア、是は又御麁相千萬。此お觸の厳しい中、殊にお役柄の此内、何處の者やら知もせぬに、滅多に引入、跡の難はどふなさるゝ。急度止しになされませ。夜中に一人歩女子、碌な者じやござりませぬ。戸を明ずと、ほい逝したがよござります」母「いか様のふ、親仁殿の留主の中は用心が肝心。コレ〳〵旅人、いとしけれど一人旅を泊るは御法度。御城下の中は軒下にも寐る事はならぬ程に、宿はづれの森の中へ往て寐やしやれ」と、和らかに云て引出す糸車、歌「來いと云たとて行れる道か、道は四十五里波の上。」谷「ハア何處へ行ても一人旅は泊てくれふ様もなし。はる〳〵の海山も、此子の顔を旦那殿に、見せたいと思ふ精力で、産落すから此巳之助、漸忌も明や明ず、國を立てついに一夜さ、家の下で寐た事がなけりや、身はならわしと山寺の、鐘がなれば寐る事にして、星の光りを燈火と、思ふて寐入ど今夜のくらさ、氷の様な此肌で、寐苦しいは道理じやはいの。殊更積で乳は張らず、雪に寒雨にうたるゝ、つらさは骨にこた

郡山—氷にかく

いんのこ—子供をすかす唄にて犬の子の略

爪はづれ云々—身のこなし

て置いたら濕りましよ。留守事に刻で見ませう、幸爰に切臺庖丁」底に釼の葉拵へ、敵を聞出す煙草の小口、葉卷手早くきり〳〵と、大の體を小廻りの、奉公振も哀れなり。外は音せで降雪に、むざんや肌も郡山の、國に殘りし女房の、思ひの種の生れ子を、抱てはる〴〵海山を、たどり〳〵て岡崎の、宿より先に日は暮て、何國を宿と定なく、がはと轉ればわつと泣、子をすかす手も冷氷る、雪の蒲團に添乳の枕、いんのこ〳〵に、友誘ふ犬の聲々、夜廻りの番が見付る小挑灯、「ヤイ〳〵軒下に何で寐るのぢや。きり〳〵往け」と呵られて、谷「ハイ〳〵〳〵、私は秩父坂東廻る順禮、積でお中を痛めまする、ちつとの間置しやつて」番人「順禮でも幽靈でも、在の中に寐さす事はならぬ〳〵。意地ばるは猶胡盞者、棒いたゞくな」と挑灯突付、見る爪はづれの尋常さ、白眼んだ眼うつかりと、細目に明る戸の透間、内から覗く夫婦の緣、思ひがけなき女房お谷、ハツと恟り差合せ、包む我名の顯れ口、惡い所へ切かけた、煙草の刃金、胸を刻むと人知ず。番人「フウ見た所が小盜する風俗共見へぬ。此雪に乳呑子かゝへて難義じや有。何所ぞ後生氣な所を頼んで、泊て貰はしやれ。」エヽ見れば見る程比合なゑい女房、一人寐さすは殘念なれど、此方も寒氣にとぢられ、瘦畑の鬼灯で、あつたら物を見遁す事」と、論

歩行―あるにかく歩行は村の使あるきするもの
大太刀―原本大たらとあり
海老錠―海老型の錠、屈むの縁
解やらぬ―意を解せぬと雪の縁
五調作―偉な躰格
御上根―根機のよき事
服部―攝津の煙草の産地

押明て差覗く、影をちらりと見付る幸兵衛。心付ねば、母「ヤレ〳〵嬉しや、庄太郎の今の詞聞たからは千人力、ドレ聟殿へ」と立上るを、幸「ハテ扨いらざる女の差出。股五郎殿の行衛は知らぬ。ナ、ハテ壁に耳有世の諺、それと慥に知ね共、云聞すには折が有ふが、うかつにそれと明されぬ、咄しの蓋は取ぬが祕密」と、何處やら一物歩行の小助、門の戸叩て、「申々、庄屋殿から急な御用、只今御出」ととんきよ聲、幸「ハア又關破りの詮義で有ふ。いやといはれぬ役目の不祥」と、云つゝ羽織引かけて、たしなむ大太刀差こなす、腰もかゞみし海老錠を、葛籠にしつかと、「コリヤ女房、今も云た咄の蓋、戻つて來る迄明ぬ樣、心におろした此錠前。ナ合點か」と詞の謎、聞女房も解やらぬ、雪道いとはぬ高足駄、さす傘の骨組も、人に勝れし五調作り、歩行を先に幸兵衛は、心を殘して出て行。母「戻らしやる迄寐られもせまい、糸績ながら咄しませう」娘「ハア今に御上根な事。マア火にお當りなされませ。私も是から下男同然に、お遣ひなされて下さりませ」母「何のいの。此方樣は大事のお客。マア煙草呑でゆるりつと、寐轉んだがよいはいの」娘「イエ〳〵勿體ない師匠の內。ホンニ此煙草は何處から參つた」母「ソリヤ親父殿が旅戻りに、貰てござつた上方煙草」娘「ハアあなたのお口に合のなら、服部か國分か、此天氣に斯し

假名ー通解

き方もなければ、若上方に有付もやと、心ざして參る所、思ひがけなく先生に、面目もなき對面」と、うかつにそれと身の上を、云ぬ底意は白髮の母、樣子聞てや一間を立出、「ヲヲ庄太郎か、テモ成人仕やつたの。連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達。器量を見込で賴たい子細が有」と聲をひそめ、「そなたの家出した時は、三つ子のアノお袖、もふ十七に成はいの、緣有て云號の其婿殿を、親の敵と付ねらふ者が有故、まさかの時の後楯、力に成て下さらば、餘の人千人萬人にも、勝つて嬉しう思ひます」幸「ヲヽいかにも〳〵。庄太郎と知ぬ先、難義を見兼救ひしも、其義を賴まん下心」と、師匠の詞聞もあへず、政右衛門摺寄て、「ムウ其付狙ふ敵の假名は」幸「ヲヽ聟といふは上杉の家來澤井股五郎といふ侍、付狙ふは和田志津馬と聞た計、面體は知ね共、高で知たる若輩者、幸兵衛が片腕にも足ぬ相人。ガ爰に一つの難義といふは、彼奴が姉婿、唐木政右衛門といふ奴、音に聞へし武術の達人、譬五十人百人加勢有とて、政右衛門には及ばぬ〳〵。まだしも唐木に立合んは、其方ならで外にはない、何とぞ聟に力を添、助太刀賴む庄太郎」と、餘義なき賴に政右衛門、「先生に內緣有股五郎殿に力を添れば、少しは師恩を報ずる理り、いかにも助太刀仕らふ。サヽ此上は澤井殿の隱れ家へ御案內」と、せき立唐木忍びの眼八、蓋

去事―尤な事

ヲ稚顔に見覺有、庄太郎に相違ない。ハテ健に生立しな」政「ハア先生にも御堅勝で」幸「ヲヲサ〳〵、無事の對面互に滿足。さりながら、アヽ思ひ廻せば過行月日。其方は山田の神職荒木田宮内が躮なれ共、幼少の砌父母に離れ、孤となる不便さに、手鹽にかけて育つる所、稚立より武藝を好むは、末頼もしく思ふより、門弟共へ稽古の次手、一手二手と教ゆる中、一を聞て十を知、頓智といひ器用といひ、十五以下にて鎗術、劔術、鎖鎌、體術柔に至る迄、諸歴々の弟子を追拔、眞影の奥義を極むる無双の達人、何卒大家へ仕官致させ、親の氏をも繼せんと、心頼みに思ふ中、未熟の師匠と見限りしか、家出致して十五年、便なければ折に觸れ、此庄太郎は如何なりし、と雨につけ風につけ、思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄其方が噂。シテ只今の住所は何國、行付とてもあらざるか」と、師匠の慈愛に政右衛門、思はずはつと手をつかへ、「親にも勝る大恩の、師匠を見限り家出せしと、御疑ひは去事なれど、常々武術の御講釋、小耳に覺ゆる其中に、一派に心を凝さんより、諸流に渡り修行をなすこそ、此道の心がけと御教訓、心魂にしみ渡り、十五歳にて國を出、普く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行、天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど、生れ付たる好色者、亂酒に主人の機嫌を損じ、只今は元の浪人、便るべ

昨今なれどー俄のお近付

心憎しー奥床し

ためつすがめつー縦からも横からも見る

者。彼は町人此丸腰、悍りながら人達へ。斯やうな義に隙取中、彼曲者を取迯さば詮なき事。早々お手當なされよ」と、云れて實もと捕人の小頭、「ムウ其方が存ぜしと申詞に相違も有まい。是よりは山手へかゝり、彼曲者を詮義せん。家來參れ」と引連て、元來し道へ引返す。影見送つて政右衛門、「ハヽア危ふき場所を遁れしも、全貴公の御厚志故。ガお禮は重ねて。心もせけば失禮ながらお暇申」と立上るを、「暫し」と止め、「昨今なれど折入て、お尋ね申子細もあれば、見苦しけれど拙者が宅へ、暫時ながら」と老人の、詞に是非なく政右衛門、「然らば御免」と打通れば、門の戸引立主の幸兵衛、傍近く差寄て、「多勢を相人に今の働き、感心の余り役人を欺歸し、難義を救ふは身共が寸志。それに付ても不審きは貴殿の柔術。正しく拙者が流義に同じき眞影の極意、手練せられし旅人は」と、訝かる色目此方も不審、政「眞影流の極意なりと見極られし御老人。ハテ心憎し」と双方が、ためつすがめつ見合す顔、政「ムヽお別れ申て十年余り、相好は替られしが、生國勢州山田にて、武術の御指南下されし、要樣ではござりませぬか」幸「ヲヽ其詞で思ひ出した。我勢劦に有し節、幼少より育上し庄太郎で有ふがな」政「成程々々、然らばあなたが」幸「其方が」是は〳〵と手を打て、盡ぬ師弟の遠劦行燈、搔立〳〵打眺め、幸「ヲ

左右なく—むやみに

死活のいけ—柔道に活を入れる事あるをいふ

し、苦もなく首筋一掴み、一振ふつて右左、弱腰蹴すへて狗投。透間を得たりと二番手が、腕がらみを振ほどき、ほぐれを取て眞逆樣、頭轉胴骨雪道に、打付られて叶はじと、入替つたる三番手、打込十手かいくゞり、脾腹を丁ど眞の當、勵しき手練にさしもの組子、左右なくも寄付ず、跡じさりする計なり。見兼てかけ寄捕手の小頭、「ヤア上意によつて向ひし我々、手向ひなすは關破りの浪人者に相違はない。腕を廻せ」と詰かくれば、政「ヤレ麁忽なりお役人、急用有て此ごとく、夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破りし浪人とは、身に取て覺へぬ難題。外を御詮義なされよ」と、ちつ共恐れぬ丈夫の振舞。始終を見屆幸兵衞は、戸口をかけ出押隔、「憚りながらお役人へ申上る、關破りの御詮義半、深夜に一人歩行の旅人、御疑ひは御尤。併此者は鎌倉飛脚、子細有て此幸兵衞、能く存じ罷有ば、慮外の段は御用捨有、無難にお通し下さらば、有がたき仕合」と、かばふ詞に政右衞門、「ムウさいふ此方は何人」と、いふを打消、「イヤサコリヤ身に覺へないにもせよ、お役人に慮外の手向ひ。ア、不屆至極」と叩り付、しづ〳〵と歩み寄、倒れ伏たる組子共、引起して死活のいけ、「いづれもお心慥にござるか、お役目御苦勞千萬」と、苦い挨拶氣の付く捕人。幸兵衞猶も威儀を正し、「承はれば關所を破りし科人は、帶刀の浪人

何はなくと―何はなくとも

ごつちや煎―まぜこぜとかく

七十五日云々―初物を食へば七十五日生延るといふ諺

かねて―鐘にかく

あたふた―急忙の意

兩腰―腰なる大小

幸兵衛が、命にかけてかくまふからは、志津馬づれが付ねらふ共、何程の事かあらん。去ながら爰は端近、幸奥に別家も有ば、心置なく打寛いで。ツレ女房娘、希の珍客、何はなくと盃の用意を仕やれ」志「アイヤ〳〵其お心遣ひ返つて迷惑」母「ハテ聟殿の他人がましい。舅入やら、聟入やら、祝言もごつちや煎の在所料理、みしり肴の舟盛より、外に馳走は手入ずの、娘のお袖が初物一種で、ホヽヽヽヽ」幸「ハヽヽヽヽ、いか様、祖母の云やる通り、敵持の聟殿に、七十五日生延るとは、是も吉左右目出たい〳〵。ドレドレ案内致さふ」と、おどけまじりに先に立、親の手前を恥らひて、赤らむ顔の色直し、解て見せても下心、赦さぬ志津馬が肌刀、胸にねた刃を相の間の、襖引立入にける。既に其夜もしん〳〵と、遠山寺に告渡る、早九つのかねてより、内の案内は知たる眼八、裏から忍んで納戸口、思はず躓明がらの、駄荷の葛籠を幸と、あたふた押明忍び込、鼻息もせず窺ひ居る。斯とは人も白雪の、道も厭はぬ政右衛門、心も闕の忍び道、遁れて急ぐ跡よりも、數多の捕人が見へ隱れ、慕ふ足跡氣轉の唐木、兩腰そつと道端の、雪掻集め押隱す、透もあらせずばら〳〵〳〵、「腕を廻せ」と追取卷く。政「ヤア子細もいはず理不盡に、繩かゝるべき覺へはない」と、云せも果ず双方より、「捕た」とかゝるを引ぱつ

云號の聟殿ぢやはやい」袖「エヽそんなら私が鎌倉へ御奉公の其中に」幸「ヲヽサ城五郎殿のお勸故、其方を遣はさふと、面談には及ばねど、約束致した花聟殿。能ふこそ尋ねて下された」と、悅ぶ聲の洩聞へ、母も立出、「ヤレ〳〵思ひがけない、此方樣が聟殿で有たかいのふ。したが氣には支へて下されな、云號は有ながら、股五郎と云名を嫌ふて、今迄娘が不得心、それ故疎遠に打過ました。ガ聞たと違ふてヲヽよい男。此樣な聟殿でも、其方はやつぱり否かいのふ」袖「ヲヽ勿體ない事云しやんす。云號の殿御じやと、今の今迄知らいでさへ、添たふてならぬ物、緣は切てもお主の差圖、父樣や母樣のお赦しの出た股五郎樣、わたしが何の嫌ひましよ。二世も三世も替らぬ夫、もふ〳〵是から何方へも、やります事じやござんせぬ。いつ迄も爰に居て、可愛がつて下さんせ」と、心に思ふ有たけは、云で思ひを押包、お袖が嬉しさ二親も、倶にほた〳〵悅び顏。思ひがけなき云號の、噂に志津馬は、「成程〳〵、上杉に仕官の中、城五郎殿お差圖にて、顏はしらねど云號のお袖殿で有たよな。一方ならぬ股五郎が一世の大事に及ぶ時節、御願ひ下さらば、生々世々の御厚恩」と、わざと其身をへり謙り、詞を盡し頼むにぞ、幸「イヤエヽ何が扨〳〵、狩人すら懷に迯入鳥を助るならひ、まして聟殿違背はない。年こそ寄たれ

れば御浪人とな。定て仕官のお望で、上方へござるのかい」志「イヤ〳〵樣子有て世を忍ぶ獨旅、則當所岡崎にて、山田幸兵衛殿方へ密に參る浪人者」と、聞て不審の眉に皺、幸「其山田幸兵衛とは身共が事。ハテ其元は何方から」志「ム、スリヤ貴殿が幸兵衛殿とな、拙者は鎌倉の昵近武士、澤井城五郎殿に緣有者、委細は是に」と藤川にて、手に入一通手に渡せば、封押切て老眼に、つぶ〳〵讀も口の內、樣子知らねば氣遣ふお袖。幸兵衛とく〳〵讀終り、「ム、某が性根を見込、和田行家を討て立退、澤井股五郎が力と成てくれよと有、お賴の書面の趣、先達て鎌倉の樣子承はりし砌より、待に待たる此お賴、慥に承知仕た。遠途の所御太義〳〵。此使を勤らるゝ其元は、城五郎殿の御家來か」と、尋る詞は敵の手筋、是幸と氣色を正し、「ハア幸兵衛殿の御懇切、承はる上からは何をかくさん、某こそ刀の遺恨止事を得ず、和田行家を手にかけし、澤井股五郎と申者」幸「さア御自分が股五郎殿か」志「いかにも左樣。鎌倉出立致せし折は、澤井殿より附人も數多有共、人目立も如何と存じ、別れ〳〵に罷登る。城五郎殿には、前以て御懇意の幸兵衛殿、何とぞ御助力下さらば、此上もなき拙者が悅び」幸「ム、さすれば貴殿が股五郎殿か。是は〳〵存寄ぬ、是迄互に御意得ねば、双方共に知ぬ同士。コリヤ〳〵娘、

うつぼれ—現抜かす

へらず口—負けず口

所存有故赦してくれる。此以後きつと嗜おらふ」と、投付らるゝと思ひの外、突放したる手強さに、底氣味悪くうぢ／＼もぢ／＼。見るにお袖が嬉しさと、いとしい人の納りを、心一つにとやかくと、案じ彌増す思ひなり。弱みを見せぬ悪者根性、お家にべつたり上股打、「役目々々と云はるゝが、其大切な關所をぬけた、科人を吟味する最中に、爰の娘が連て戻た旅の侍、引込で置ながら、詮義する此眼八、何故しめ上て手ごめにしたのじや」幸「ム、娘が連立歸つたとは、其侍は何處に居る」眼「ヤア慥さつきに爰の内へ」幸「默りおらふ。お袖にうつぼれ最前より法外の有條、承引せぬ故無法の當推。よし又其侍とやら、此内へ來たにもせよさ、鎌倉通行の東海道、數限りなき旅人の往來、是ぞと云べき證據もなく、侍とさへ云ば、悉引捕へ、關破りと云べきか。勿論俤は當所の馬追、誰赦しての詮義呼はり、長居ひろがば括し上、御地頭へ引立ふか。何と／＼」ときめ付られ、眼「ア、中々お氣の短い。商賣が馬方だけ、豆から發つたいざこざで、親仁樣の寐所迄、踏馬御免」とへらず口、跡をも見ずして迯歸れば、跡見送りて落付娘。忍ぶ志津馬も一間を立出、「覺なき身に關破りと、今の危難を免れしは、御亭主の御厚志故、忝し」と手をつかへ、禮の詞に、幸「ヤ是は／＼痛入。先々お手を上られい、サ、平に／＼。承

しども涙―しどもなきにかく

毛虫―いやがらるゝものをいふ

れない事をいふ手間で、つい可愛と一口に、云れぬかいな」とすがり寄、しども涙のかこち言、岩木ならねば逍にも、振捨がたき戀の蹄。かゝる折から門口へ、いきせき來かかる蛇の目の眼八。お袖は目早く一間の内、無理に志津馬を忍ばせて、何氣ない顏。入口から差覗いて、眼「ヤ味いぞ〳〵。毛虫の親仁や母者は居ず、お娘一人は無い圖な首尾」と、這入や否や後から、帶際ほふと引だかへ、「常から目顏で知らしても、ぴんしやんぴんしやん駻廻る、馬よりおれが太鼓のぶち、立場で驍驛見付た樣に、さんばい仕兼て居るはいの。否應なしにちよこ〳〵と、孥でおくれ」としなだるれば、袖「エヽ穢ない、うるさい、嫌らしい」と、突付られても押強く、眼「誰でも初手はいや〳〵と口では云が、がさ汁と色事は、味覺へてから止られる物じやないて。それ共否ならおれも意地じや。今夜藤川の關所を破つて、忍び道を通つた奴、召捕よふと岡崎中は、上を下へと詮義のどう中、胡盞なやつとの相合傘、ちらりとつないだ此眼八、灰汁で洗ふた蛇の目が詮義、ほへ頰かゝしてこまそふ」と、かけ入向ふへ立ふさがる、お袖を突退立切し、障子引明見て悧り、「こりや違ふた」と狼狽眼、かけ出す蛇の目が利腕捻上、立出る主の幸兵衛、「百姓なれど新關の下役をも相勤る、身共が居間へ、泥脚を切込狼藉やつ。了簡ならぬ所なれど、

四ツ―四ツにすると午後十時
當言―あてこすり
あどない―あどけない

臥せば、戸は立られぬ人の口。其上連合幸兵衛殿、國守よりのお目がねにて、新關の下役を勤さつしやる今の身分、常の百姓とは違ふて、物事を正しうするも役柄故、必悪ふ聞やんなや」と、いはれて何と返事さへ、お袖が異見の相伴に、志津馬も手持投首を、見る氣の毒さ母親も、さのみは如何と何氣なふ、母「此様に異見するも、轉ばぬ先の杖とやら。イヤ申御浪人様、お心にさへられて下さりますな。泊ます事はならずとも、せめてお茶なと入花を、一つ上ふ」と尻輕に、勝手へ行間待兼て、娘はおづ〳〵志津馬が傍、「誰も來ぬ間に云殘した、咄しの殘りを納戸で」と、取手をすけなく振放し、志「見る影もない旅の者に、關所での情といひ、道すがらあた嬉しい、詞を誠と思ひの外、云號が有からは、主有花に落花狼藉、密夫なぞと重て置て、モウ四つに間も有まい、夜の更ぬ中宿取て、寐て花やろ」と立上る、袂に縋り、袖「コレ申、有て過たる縁定め、今更とやかう母様の、今の詞がお心にさはつて、私へ當言を、無理とはさらさら思はねど、恥かしながら今日迄も、殿御に惚たといふ事は、知らぬあどない不束な、在所育の此身でも、結ぶの神の御利生で、お顏見るから思ひ初、どふぞ女夫に成たいと、胸はしがらむ白川の、關は越てもこへかぬる、戀の峠の新枕、かはさぬ中に胴欲な、つ

わりない―無理

道連のお方とは」袖「アイ行暮した旅のお方、それは〱きつい御難義、今宵一夜は此方の内に、留て上て下さんせ」母「申苦しうござりませぬ。此方へお這入遊ばせ」と、呼れて志津馬は怯々と、小腰屈めて、「御赦されませ。獨旅の浪人者、日は暮れる、足は損ふ、詮方盡て此お頼、近頃わりない事ながら、一夜のお宿を御無心」と、いふも心に荷物の葛籠、お袖見るより、「申母樣、父樣の旅葛籠、彼處に戻つて有からは」母「ヲヽ親仁殿も今日暮前歸らしやつた。旅草臥で寢てじやはいの」袖「エヽ遲ふても大事ないに、早い事や」と其跡は、云ぬ色目を見て取母、「日頃から二親がちよつと出ても、戻りを案じる孝行なそなた、どふやら不興な顔持は、かたい爺御の氣質故、折角お宿を借ませふと、お供仕やつた道連樣へ、約束が違ふかと案じ過ての事で有ふ。譬爺御は得心でも、此母が不得心。何故といや、今でこそ茶店の娘、去年迄は鎌倉のお屋敷方へ婢奉公、御主人樣のお差圖で、さる武家方へ末々は縁に付ふと堅い約束、其云號の夫を嫌ひ、無理隙貰ふて、親の内へ戻つて、間も無ふみだらが有ては、以前のお主計じやない、顔は知らねど約束仕た聟殿へ、どの顔さげて云譯せふ。サア斯いふはいふ物の其方に限り、そふした事は有まいけれど、時分の來た若い娘の有内へ若い男。一夜は愚半時でも、ひとつ所に寢

苦は色かゆる―諺にて苦は何處に行きても免れぬ
心を奥口―心を奥(遠慮)にかく
三河の澤云々―三河の八橋の事を歌にとる杜若に冠く八橋に八ツをかく
じやらくら―冗談話し
雪の段―謡曲鉢の木に佐野が時頼に鉢の木を焚いて馳走したるをとる

第八　岡崎の段

世の中の、苦は色かゆる松風の、音も淋しき冬空や、霰交りに降積る、軒もまばらの放れ家へ、岡崎の宿はづれ、百姓ながら一理屈、主は山田幸兵衛と、人も心を奥口の、障子隔て女房が、績車の夜職歌。歌いとし殿御を、三河の澤よ、戀の棧文杜若、更て忍ばよ、夜は八つ橋の、水も洩さぬお手枕。鄙も都も小娘の、誰教へねど戀草を、見初惚初打付に、雪の夜道の氣散じは、互に手先折添る、糸の志津馬に縺れ合ふ、じやらくら咄しいつの間に、戻るお袖が我家の戸口、「ヲヽ辛氣、いつもは遠ふ覺へたに、意地惡ふ今夜の早さ。まだ咄しが殘つて有、跡へ戻て下さんせぬか」志「去迚は譯もない。日は暮る草臥足、跡へも前へも雪の段、鉢の木の燒火より、暖なそもじの肌で、暖めて貰ふが御馳走。早ふお宿を御無心」と、ぢやれた詞にどふいふて、よいか惡いか白齒の娘、聲聞付て、母「誰じや〳〵」袖「アイ〳〵母樣わたしじやはいな」母「ヲヽお袖とした事が、此寒いのに何して居やる。戻りが遲さに待兼た、早ふ這入や」と母親の、詞を幸に内へ入、「疾ふ歸らふと思ふたけれど、道連のお方が有て、それで思はず夜に入ました」母「ムヽ

不敵―大胆

雲突く様な大男、怐り驚き身を忍ぶ。探り當りし政右衛門、竹藪押分忍び行。とつくと見届け助平が、狀箱腰にくゝり付、「味い〳〵」と抜道の、跡を慕ふて急ぎ行。不敵なるかな政右衛門、天に一命投打つて、目ざすもしらぬ眞の闇、降來る雪の道踏分、裏道づたひ壹丁計、行よと見へしが、關所の内に聲高く、「忍びの鳴子の音するは、裏道を越る曲者有」と呼はれば、「それ遁すな」と捕人の人數、兼て用意の高挑灯、人數を配つて取巻しは、危かりける　三重次第なり。政右衛門は事共せず、三角に眼を見開き、「山を食する猿松め、皮引ぱいでくれんず」と、大刀引ぬき待かけたり。「それ遁すな」と組子共、一度にかかる四方詰、政「イヤ小癪な」と振ほどき、付入所を宙にて切取、飛くる熊手を受流し、切立〳〵切立れば、詞には似ぬ組子供、跡をも見ずして迯ちつたり。迯るを追ず政右衛門、「道の案内は此挑灯」と、勝手覺へし杣道の、足跡しるべにしたい行。跡におくれて助平は、道の勝手は方角知らず、うろつく折柄、取て返す組子共、「それ」といふにも及ばゞこそ、高手小手にくゝり付、狼狽奴と夢にも知らず、組子の頭大音上、「強敵の曲者を、組子仲間へ捕捕たり」と、引立てこそ　三重急ぎ行。

わいら—汝等
撫—撫斬
さい先—幸と先
れとかく

底。譬我を付狙へばとて、何程の事あらん、見付次第に返討、わいらもちつ共氣遣ひすな」と、家來引連れ打通る。此海道を住家とする蛇の目の眼八、人喰馬に櫻田が、手に入顏に先に立。櫻「コリヤ蛇の目、今咄した事、男と見込で賴むぞよ、何で有ふと見付次第に合點か」眼「エヽ親方氣遣ひさあんな。此蛇の目が見入れたら、一寸も動かしやせぬ」櫻「ハテサテ氣味のよいやつ」と、紙入より取出し、金子千疋手に渡し、「當座の褒美納て置さ」眼「エヽ忝い、馬士に千疋とは、仕合よしの此蛇の目。何で有ふと見付たら、皆撫にする一鍔」と、祝ふさい先林左衞門、「晩の泊りで何かの事、諜し合さんサア來い」と、門內さして入相の、鐘諸共に關の門、門はつしとしむる音、宙をかけつて政右衞門、關所の前に立寄ば、門戶かためて出入もならず。政「暮時でわからねど、うしろ姿は林左衞門に違ひなし。スリヤ股五郎を同道には極つた。エヽ付込だ敵を取迯せしか口惜や」と、齒噛をなして身を悶へ、門內を白眼付、無念泪にくれ居たる。「ヲヽそれよ、志津馬と兼で出合約束、但し先へ入込だか。何にもせよ、出合所は一筋道。今夜中に此關越ねば、最早敵は手に入ぬ」と、行つ戻りつ思案を極め、兼て聞居る拔道は、慥に竹の林の中、押分行ば山傳ひ、探り廻りし眞暗がり、うろ〳〵眼に助平が、是も窺ふ拔道を、すかし見れば

水氣取れし云々ー河童の頭の皿に水なければ働けぬと同じく奴も切手を失ふて氣拔せり

昨日にかはる云云ー飛鳥川昨日の淵も今日の瀬となるの歌をとる

る茶釜の茶、天窓へざつぷり打かくれば、悔り氣の付助平が、邊り見廻し起上り、さも苦しげに聲揮はし、「アヽどなた樣か忝い。生れ付て躮めが虫早く、時々おこる疱瘡子に湯がかゝつて助つた」と、咄せば二人は顔見合せ、おかしさ隱す計なり。時も違へず關所には、打拍子木に助平が、一つ二つと指折て、「ムヽフヽ、アリヤ七つの時がはり、大切の此狀箱、一時も早くお屆申さん。關所の切手」と紙入の、内を捜せど「ハテめんような。南無三寶跡の茶店で落したか。ドリヤ一走り」と立出れど、水氣取れし河童奴、ふならふならと池水の、泥埃に逢たるごとくにて、元來し道へ引返す。お袖は跡を見送りて、「此間に早ふ」と、茶店の道具を門内へ、運ぶ片手に顔眺め、見飽ぬ目鏡の戀男、志津馬は一心敵の手がかり、白歯娘が手を引て、岡崎さして歸りける。鎌倉の奧女中、お里歸りの道中と、人目に見せる鋲乗物、關所の前へ舁居る。家來お傍へ立寄て、「お關所で候へば、暫く是より御歩行」と、聞とひしとしく戸を開き、旅姿に身を省し、兜頭巾に目計出し、昨日にかはる勢も、淵瀬と澤井股五郎、邊り見廻し、「コリヤ駕籠の者、太義で有た、是より早く歸てたもれ。林左殿は何してござるな」駕「あれへ御出でござります。お旦那にはお先へお通りなされませ」股「ヲヽ木にも萱にも心置は、世話人の志、無足にせぬ我心

切米—扶持米を金銭にかへて渡す

登詰云々—奴の逆上にかけ糸は叉凧の縁

こそ、おらが切米打込で遣たぞよ。コリヤ其折、おらに何と云た、お前と夫婦に成て、夜も晝も、樂しもといふたじやないか。それに何だ、我見る前で尾籠千萬、其男と抱れて寐るか、よくもおらを欺したな。鎌倉で人も知つたる、澤井殿の家來澤井助平、もふ了簡が成ぬはい」と、駈け出せしが、「ハア〳〵今のは何所だ。何だ、何にも見へない。コリヤどふだ」と、言ふにお袖がさし覗き、「アリヤ吉田の茶屋の二階、爰から一里も有所。腹立なさるだけが損、もふ了簡なされ」助「如何樣、いへば一理有。遠方から悋氣するは、鄭に耳とらするに同じ。とは云ながら殘念」と、又差覗き現に成ば、是幸、扨は澤井の家來よな、と志津馬は邊に氣を付て、狀箱の封押切、一通奪取元の如くに直すのも、知らぬ助平一心不亂、打眺め、「エヽアレ口中を契りをる。こりやもふ堪忍ならない」と、お袖が腰を力草、袖「エヽ放して下さんせ」助「何と是が放されう、ハヽ〳〵」と古木の如くしやちばり返り、横にどつさり朽木倒し、登詰たる奴凧、糸目の切しごとくなり。傍に落たる紙入の、中より出る關所の切手、見るにお袖は飛立思ひ、嬉しいやら強いやら、結ぶの神の此切手、と志津馬に渡せば懷中し、志「我身の難義は遁れたが、かうして置れぬ奴殿。コリヤ虫腹か癲癇病か。コレ顏へ其水吹かけた」と、いふにお袖は狼狽て、沸返つた

悪ちやり―悪洒落
ちやは〱云々
―ちやが〱と
冗戯はいふまい
私は眞實の事じ
やを茶の詞にて
續けたり

濱松泊り、日が短くて漸々爰迄」と、聞より志津馬は心當り、だまして問んと傍に寄、「扨々早い事。私共は何としてく〱。エ浦山しい足元」と、咄しを鹽に茶の出花、一目見るより餘念なく、お袖が傍にぐにやと成、奴「コリヤ忝い。白歯娘のお初穂、一口呑す氣はないか。一目見るから戀茶と成た」袖「エ丶奴殿悪ちやり置んせ」奴「ちやは〱とちや〱入まい。こちやずつどほんのこつちや。コレイノ〱、そつちや向まい、どうぢや〱」志「アア去とは貴公も顔に似合はぬやつし形。名は何と云ます」奴「身共が名は助平。イヤもう飯よりも好物だてや。コレサお娘どう仕てくれる」袖「エ丶じやら〱と、そんな事より此様な、面白い物見る氣はないか」と、目鏡の傍へ突やられ、助平は差覗き、「ハアコリヤ面白い」と、眺め入、「テモ大勢人が見ゆる。ハア向ふに見へるはア、あれは、おらが仲間の頭だ。コレ頭、何ぞ用はないか。何じや金比羅様の挑灯も有、ハア川が見へる。何じや藤屋の二階で客が樂しみよる。ヨヨ味い事〱。ハアあの女は見た樣な、それだそれだ、ヤわりやおきのでないか」と、一目見るより仡相かへ、「ヤ倅は〱、ようもおれに退狀おこし、其處に樂しんで居るな。コリヤヤイ、云かはした事忘れはせまい。旦那へ願ふて奉公引し、女房に持と思やこそ、春からも一歩遣、三歩やり四歩遣、女房じやと思や

一森―茶の名一番にかく

袖―衣の袖と名にかく

暮六つ―午後六時

呼かけられ云々―女より挑まれて恥かゝしてはよろしからず

八ツ―午後二時

の初紅葉、男の潔粋一森に、戀の出花と見へにけり。志津馬も扨はと心付、我に心をかけしこそ幸、切手の手がゝり、と心で點頭きすり寄て、「コレお娘頼たい事が有、何と聞てくれる氣か」と、思ふた壺へ和らかに、云かけられて返答の、詞に詰るが女子の情、何と返事の云様も、袖「わたしもお前に頼が」志「サどの様な事なりと、頼と有ば引はせぬ」袖「エ、忝い、わたしもお前故ならば、どの様なお頼でも、厭ひはせぬ」と寄添ば、志「それ聞て落付た。何を申さふ我身の上、今夜中に此關を通らねば、我一命にかゝる事。こなたの覺し抜道を、何卒教へて貰ひたい。死でも忘れぬコレ頼む」と、色で仕かける我身の大事、じつと締むれば締めかへし、恥しいやら嬉しいやら。抱付てはしめかはす、袖は人目の關の門、「暮六つからは通路ならず。それ迄に私が働き。若間違ばわたしがお供し立退ん、必氣遣ひ遊ばすな」と、思ひ合たる他生の緣、二人が望は一道の、一筋道を急ぎの道中、狀箱刀に括り付、通りかゝればお袖は呼留、「お飛脚樣お休」と、いへば奴が立どまり、「呼かけられて姉樣に、恥かゝしてよいものか。まだ八つには間も有ば、一ぷくせい」と腰打かけ、「ヤレ／＼しんどや／＼。巾お客樣、御免なされ」と、いへど志津馬も何氣なふ、「お飛脚はどれからお立」奴「イヤ下拙は、鎌倉扇が谷の四つ辻切通し、夜前

花香―茶の入れたて
汲で―茶を汲むと心を推察する
とかく

しやれ、其夜から目が明ましたといの。それから吉田中がひつくりかへし、山中がお泊り故、毎日の參詣人、有難い事ではないか」乙「ハテそりや其筈いの。炭屋の子なら、黑谷樣に御緣が有、ハヽヽ。ヤこちらも逝で緣の有、嬶が焚いた御符をば、戴きませう」と打笑ひ、我家々々に歸りける。父の教を守らざる、其罪科の降積る、雪氣の空も厭ひなく、姿を略す和田志津馬、敵の行衞知れざれば、空しく過る光陰の、矢竹に心關所前、「コレ姉樣、最前より此茶店で、待合す體の人は見へなんだか」袖「イヱ〳〵左樣なお方は見受ませぬ」志「然らば暫し」と腰打かけ、「姉樣、此遠目鏡は往來の慰みか」袖「イヱイヱ慰ではござりませぬ。わたしが父樣は、此關の下役人、若切手なしに拔道を通る人が有ふかと、吟味の爲の遠目鏡」と、聞て志津馬が心の當惑、差當つたる切手の用意、ハテ如何がなと思案顏。お袖は一心志津馬が顏テモよい男と思ひ初、云たい事も娘氣の、口へ出兼る茶の花香、顏を眺めて汲手元、脇へ流すも氣もそゞろ、茶碗計を手に持て、差出す心の思はくは、汲で知かし目遣ひも、相手に藝氣が有ばこそ。「是はきつい御馳走、余り茶に福が有。然らば今一つ。迚もの事にほんまの茶をいくつも〳〵、呑たい」と、思はぬお茶の捨詞、袖「お前故なら何度でも、入花を上たい」と、何と云寄方もなく、顏は上氣

白齒—知らずにかく

すはいの〳〵。名僧知識の引導より、前生の我子が介抱受、思ひ殘す事はない。早ふ苦痛を留て下され」親子一世の逢初の逢納め 十「親仁樣」平「兄、エヽ、顔が見たい〳〵、顔が見たいわいやい」十「南無阿彌陀佛、なむあみだ〳〵」と唱ふる十念十兵衞が、こたへ來たる悲歎の涙。始終窺ふ池添が、小石拾ふて白刃の金、合す火影は親子の名殘、跡に見捨て 三重 別れ行。

第七　關所の段

藤川の新關と、人には云ど影の郷、一村籠る松影に、茶屋の娘のお袖とて、年は二八の跡や先、まだ内證は白齒の娘、雪氣厭はぬ寒空に、水の出花や煎じ茶の、佛をだしに參詣人、黒谷の御上人、鎌倉へ下向の道、山中の法僧寺に今日で三日の御逗留、御符御札のお影にて、瘖が物いふ聾が治る、膝行のお祖母が禮參り。御禮參の三人が、茶屋の床几に腰打かけ、乙「何と太郎兵衛、きつい人群集の。扨皆聞しやれ、御符のお影で奇妙な事がござる、吉田の宿の搗栗屋といふ炭屋の子が、疱瘡で目が潰れ、何が一人子の事故、夫婦の衆が發心して、罪亡しに西國に出る所へ、上人樣の御立寄、何か御符を戴くやら、聞

アレ聞たかーそれとなく娘にいふ詞

ふ聞ましては、中様もござりませぬ。左様ならもふ歸りましよ。旦那様おさらば」と、云つゝ探つて十兵衛が、脇差抜取、腹へぐつと突立る。十「ヤア〳〵〳〵何とした〳〵。コリヤ自害か、何故に誰を恨で勿體なや」と、うろ〳〵涙驚く娘、聲に手當る池添が、泣音とゞむる轡虫、草に喰付泣計。平作苦しき目を開き、「おりや此方の手にかゝつて、死るのじやはいの〳〵。ハテ此方とおれとは敵同士。志津馬殿に緣の有此親仁を殺したれば、賴れた此方の男は立。コレ〳〵、此上の情には、平作が未來の土產に、敵の有所を聞して下されいの。外に聞者は誰もない。今死る者に遠慮は有まい。不思義に始めて逢ふた人、どふした緣やら、我子の樣に思ふ物。何の此方に、引氣取す樣な事此親が、サア此親仁が致しませうぞ。是が一生の別れ一生の賴み。聞ずに死では迷ひますはいの〳〵。コレ拜ます〳〵旦那殿」と、子故の闇も二道に、わけて命を塵芥、須彌大海にもまさつたる、誠の親に始て逢、名乘もならぬ浮世の義理、孝行の仕納め。十「何處に誰が聞て居まい物でもなけれど、十兵衛が口からいふは、死で行こな樣へ餞別、今際の耳に能ふ聞つしやれ。股五郎が落付先は九州相良、道中筋は參州の、吉田で逢たと人の噂」平「ヱヽ忝い〳〵。アレ聞たか、イヤ〳〵誰もない〳〵。聞たは此親仁一人。それで成佛仕ま

道分石―別れ道に立つる案内の石

掛籠―印籠の中蓋

錢で露命をつなぐ私が、死る迄安樂に暮される程の三拾兩、其金銀にかへてのお願ひ。七十に成て蜘蛛助が、こゝに叶はぬ重荷を持、それはまだ休みもする、子の可愛ひといふ重荷は、寐た間も休まぬ一生の、苦痛を助る藥の名。お前樣も親御が有ば、子故には愚痴に成物じや、と思し召やられて、願ひを叶へて下さりませ。コレ申旦那樣」と、血筋と義理と道分石、わけて血の緒の三界に、踏迷ふこそ 三五 道理なれ。親の心を察しやり、十「ムムそふ有ふ、心底至極、尤じやが、是計はどうも云れぬ。おれも頼れた男づく、其方の人が大切なら、こつちにも又大切。譬又有家を聞ても、命がなふては本望は遂られまい。そつちの内に落して置た、主のない印籠の、其妙藥で疵養生、達者に成た其上では、望の叶ふ時節も有ふ。親仁殿、サアそふじやないか」と心の掛籠、一重明けぬ十兵衛が情の詞。平「サヽそれ程お慈悲の有お方、迚ものことなら其藥の持主」十「イヤサ、コレ悪い合點、此藥の持主は、其病人とは大敵藥。三十兩の其金、敵の恩を受まい爲、戻したではないかいの。此持主の名をいへば、敵の藥で疵本復、恩を請てはまさかの時、切先が鈍らふぞや。やッぱり拾ふた藥にして、心置なふ養生さしたが、よさそふに思はるゝ」と、聞て平作感じ入、「アッそふじやあつた。エヽお前樣は、恐ろしい發明なお人じやの。そ

瀬川─も米の妓の時の名、川にかく

や死ふか翌の夜は、我身の瀬川に身を投てと、思ひし事は幾度か。死だ跡でもお前の歎きと、一日ぐらしに日を送る。どうぞお慈悲に御了簡」と、東育ちの張もぬけ、戀の意氣地に身を砕く、心ぞ思ひやられたり。歎きの端々つく〲と聞取十兵衛、「コレ姉御、そんならこなさんは、江戸の吉原で全盛の、松葉屋の瀬川殿じやの」米「ハイ、テモ能う御存じ」十「すりや瀬川殿の夫の爲に、ムウ〱」と心の目算思案を極め、十「イヤ太夫殿、夫の手疵を治す藥ほしいは尤。それ聞ては進ぜたい物なれど、是は人の預り物、此事は思ひ切つしやれ。今此方衆の咄しの通り、わしも又恩を受た、サ其恩を受た人の爲に、いづれの寺でも苦しうないが、石塔一つ寄進が仕たいが、何と世話して下さるまいか」平「それは御奇特、結構な寄進でござります。いつ成共お世話致しませふ。私も來年は嬶が年忌。勸むる功德倶に成佛とやら、是非お世話致しまするでござります」十「どうぞ今度の下り迄、違はぬ樣に頼ます。兼ての願ひに、書付も此内に委しふござる」と、金一包取出し、「コレ必頼んだぞや親子の衆。最早夜明に間もなし、隨分無事に親仁殿」と立出れば、平作も、「必お下り待まする」十「姉御さらば」とばかりにて、心に一物、荷物は先へ、道を早めて急ぎ行。跡に親子は顔見合せ、金取上て、「コレおよね、隨分大事にかけておき

もじきなか—一文半錢

知てから、あの病氣では思ひも寄ず、ム丶」と心で點頭胸をすへ、灯の消たるは天の與へ、夫の爲と拔足さし足探り寄、印籠取上立退足、躓く音に目覺す十兵衞、思はず高聲「何者」と、裾をとらへて引とむれば、「わつ」と泣入る娘の聲、平作も愕りし、起上ても眞暗がり、「お米〳〵」と云つゝ探す竈の埋火、付木にうつし顏見合せ、平「娘じやないか。旦那樣か。何故に此有樣。エヽ何の因果で此樣な、情ない氣に成たぞいやい。コリヤ此親は、其日暮しの物じやけれどな、人樣の物もじきなか、盜もと思ふ氣は出さぬはいやい。エヽ親の顏迄、穢しおつた」と、わつと計に泣居たる。十兵衞は氣の毒顏、「金銀を取たといふではなし。是には譯の有そふな事」と、問れて、お米は顏を上、「恥かしながら聞て下さりませ、樣子有て云替せし、夫の名は申されぬが、わたし故に騷動起り、其場へ立合手疵を負、一旦本復有たれど、此頃は連りに痛、いろ〳〵介病盡せ共印なく、立寄方も旅の空、此近所で御養生。長しい間に路銀も盡、其貢に身の廻り、櫛笄迄賣拂ひ、最前もお聞の通り、悲しい銀の才覺も、男の病が治したさ。先程のお咄しに、金銀づくではないとの噂。燈火の消しより、アノ妙藥をどうがな、と思ひ付しが身の因果。どうぞお慈悲にこれ申、今宵の事は此場切。お年寄しお前に迄、苦勞をかけし不幸の罪、今日

ずつぷり—とつぷり

どんざ—布子

し腹立顔、平「エヽ嗜め、よい女房と云れるが、何のそれ程腹の立事。我器量がよい故じやと、おりや嬉しい。イヤ申あなた様、能ふ御深切に惚さしやつて下さりました。ジヤガ此お米は女房といふてはやられぬ譯がござります」十「ムヽそんなら御亭主が有のか、是は〳〵。イヤ實は只今のはほんの座興、主の有人共存ぜず麁相申た、眞平御免に預りませう。コレ娘御、機嫌直して貰ひましよ」米「アノ痛入たお詞、ほんに思へば在所者を、おなぶりなさるを眞受にして、お恥かしや」とにつこりと、笑ひに心打解て、咄しに紛れてずつぷりと、平「日の暮て有に氣が付なんだ、三日月様が上つてござる。宵月夜で行燈は入ぬ。御明しを伽にして、辻堂の雨舍り、お客様も最ふお休。足延すと壁につかへる奥座敷、緩りとちゞかまつて御寐なりませ。私は此臺所。コリヤ娘は、其方に寐い。旦那様はお堅いけれど、時のはづみでは、主の有池へ踏込なさりよも知れぬ。用心には綱を張じや。今夜はおれが股引をはいて寐や。寒けれどあなたには、わしがどんざを裾になと」追風もてくる鐘の聲、いとしん〳〵と聞へける。お米は一人物思ひ、心にかよる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔られ、秋の螢の消殘る、佛檀の灯もほそ〴〵と、嵐にふつと氣の付娘、「奇妙に治つた父様のあの疵。今でも敵の手がかりが

かたし―一本
あたなめ―無禮にてあたは罵聲

遣たれば、捨たも同然。我子ながらも義理有物、今其躮が身上がよいとて、尋に往て、箸かたし貰ふては、人間の道が濟ませぬ。今出逢てもあかの他人、子といふは此娘一人」且「ム丶それも尤。其兄貴は今幾歳位じやの」「ハイ斯うつ丁度今年廿八。鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名はとよと書付、守り袋に入て遣ました。其後此お米を産で、母も相果、則今日が命日で、孝行な娘が水手向。花の立方御覧じやつて下さりませ」と、何心なき咄しの合紋、一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合せば覺有、扨は産の親父様、血を分た我妹が貧苦の有様。有合せた路用の金、なま中親子と名乘ては、受ぬ氣質を何とがな、金の遣たい屈詑に、胸を痛めて、十「コレ親仁殿、何と物は相談じやが、此娘をわしに下されぬか」平「ヱ丶奉公に上ますのか」十「イヤテヤ、まだ女房のない男、利發な娘御、商人の嚊には、極上々の羽二重地。得心して下さるなら、仕拵へはこつちから、旅商人の事なれば、呼迎へる日限は、未だいつ共定められぬ。嫁入の拵へ料、爰に少々持合す、是置て逝まする。得心かいの、どふでごんす。コレよい女房、面目ないが最前から、わしやこな様に惚たわいの」と、しなつきかければ、ついと退、米「父様、あのお方もふ逝なして下さんせ。いかに貧しう暮して居る迚、あたなめ過た、あほうらしい」と、打てかはり

ひよんな｜飛でもない

慢直し｜運なはし

んな物、家ぐち毀つても壹貫が物はない。というて手附の三百は飛で仕廻てもふ有まい」平「御推量の通りでござります」亭「せふ事がない、此疊まくつて往のふ。コレ若いの、そこ退て貰ひましよ」と、疊ばたく〳〵上かける。「中々御尤なれど、今夜の所を御了簡」と親子が詫る氣の毒より、ひよんな所へかゝり合、旦「コレ道具屋殿。わしは今夜泊つた客。是は難義な所に泊り合した。とんと煤拂に茶屋へ往た樣な。どうで埃はかづかにやならぬ、手附はわしが返しましよ。疊は此儘置て貰を」と、奇麗に捌く貳朱一つ。亭「是は結構な旦那殿、ちと多けれど、爰迄來た賃、次手に疊も引直し、慢直しに平作殿、貧乏神の居ぬ樣に、箒でお上、槌で庭、藁の出ぬ前お暇」と、躓き廻つて立歸る。親子一度に手を合せ、「忝い共面目ない共、嬉しいと術ない涙が、ごつちやに成て、お禮の詞も出ませぬ」と、破れ疊に喰付ば、旦「ハテ今のは今夜の宿錢。高で知た親子の世帯、家財を賣代なさふとは、よく〳〵差詰つた難義な事が有のでごんせう。いとしや苦勞さつしやるの。親仁殿、此娘御より外に、もふ子供衆はないかいの」平「ハイ此お米が上に、男の子が一人有たれど、二つの年養子に遣ましたが、又其親の手を離れ、今は鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人に成て居るとの噂、それ聞てとんと思ひ切ました」旦「ソリヤ又何故に」平「ハテ一旦人に

しなつこらしう—懇に
目の鞘拔けし—恰悧なる
物はかない—物しかない

丑「イヤ〳〵不自由は仕付て居ます。娘御があの様に、しなつこらしういはしやるので、何ふやら爰に根が生た。大事なくばいつそ泊て貰ふかい」と、目の鞘拔し商人も、上手な娘の饗應に、ころりと成ば「お枕」と、油氣はない眞身の馳走、是も一樹の笠舍り。尋る軒の目印當に内に入、安「旦那是にござりますか、サお立なされませんか」丑「ホ安兵衞か、早かつた〳〵。そなたは其荷物を持て、吉原の鍵屋で宿を取りや。日和が知ぬ、早ふ行や」雨具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行。お米は立て門の戸を、引立んとする所へ、「平作殿内にか」とぬつと這入は、原の町の古道具屋、「エイ市兵衞様、御苦勞によう御出」商「イヤ此方も商賣づく。昨日こなたの云しやるは、急な入用錢三貫、道具諸式を直にして取てくれといふことなれど、代物見てからの事、と手附に三百進ぜて、殘りの錢持て來た。駄賃出しては合ぬ仕事、直が出來たら、こな様が荷ふて來て下さるか。時にと、道具といふは、見へ渡つた此迦りか。こりや聞たとはきつい相違。マア、第一、放しにくいと云しやつた故、見込に思ふた佛檀が、こりや百が物はかない。テモマアちよつと置て見よ。二つ土竈、鍋釜かけて、百卄と入い。古疊八疊で三百よ。鼠入の膳棚百五十文。流盤は役に立ぬ、是十六文。破障子一枚十二文。緣の取た角行燈八文。有增こ

おかけ—笠をかけると腰かける

せゝなげ—下水

大切ない物—餘程大切な物

ほた／＼—愛想よく

る中の二人住、門の柱に印の笠。平「おかけなさるりや庭一ぱい。いつそ座敷へマアお上り」と、親仁が馳走娘の愛、前垂の藍薄く共、「マアお茶一つ」と差出す、こぼれかゝりし藁屋葺、「折悪ふ湯も沸かず、水で成とおみ足を」十「ヲヽイヤ／＼もふ行まする。扨娘御はよい器量、不躾ながら此内には、せゝなげに咲た杜若、よい床へ活たいのふ」平「ハイどなたも左様におつしやります。自慢で作つて置ましたれど、近頃は手入が悪さに、いかふ田地が荒ました。何が身に構はず賃仕業、貧乏は苦にもせず、それは／＼孝行にしてくれます。それで私が年寄ての蜘蛛助も、せめて三文なと肩休めと、余り彼女がいぢらしさでござります」米「コレ父様、始めてのお方に其様なさもしい咄しを」平「ホンニそふじや。ハヽヽヽ。イヤおよね、今日は大きな怪我を仕てな、コレ／＼是見よ、爪が起てある。ア薬もあれば有ものじや。あなた様の薬、きつい妙薬、ありや何と申薬でござりますへ」十「此薬は大切ない物。第一金瘡には、其場で治る妙薬。武家方には尋れ共、金銀づくでは手に入ぬ妙薬」と、語れば娘は猶ほた／＼、「父様の命の親、一日や二日で、お禮は云も盡されず、ならふ事なら、今宵は爰に御逗留遊ばして」平「アヽ、娘何いふぞい。こんな内に泊まして、肴は干鰯が一疋なし、虱より外あなたの身に付物はない」

蒟蒻の云々ー蒟蒻は腹中の砂を除く效あり

茶めいたーおつな

は小相撲の一番も取ました。ヤットまかせとな」と、いふ下道の爪先上り、木の根に躓きひよろ〳〵。旅人「ソレ見やしやれ、エヽきつい事をしたの。親指を蹴かいたか。ヨシ〳〵早速に直してやろ」と、用意の藥取出し、付ると其儘、「何とどふじや痛は止ろが」「コレハ結構なお藥でござります。痛はとんと直りました。サア〳〵お出なされませ」「イヤコレ〳〵、荷はおれが持てやる」「アヽ旦那樣滅相な」「イヤサ駄賃はやる、氣遣ひさしやんな。此方の足元、最前からあぶなふて〳〵、荷を持方がやつと氣樂な。咄しもつて行ませう。サア〳〵ござれ」と先に立。平作は千鳥足、しんどが利に成蒟蒻の、砂に成かと悲しさに、小腰屈めて、平「申旦那、一肩やりませうかい」旦「イヤ〳〵是で大分歩行よい。ア此方の足元、茶めいた物じやの。其足取を狂言師に見せたいわいの。亂れ拆と云て、傳授事に成そふな事」平「イヤ旦那のおつしやる通り、大概亂れかゝつておりますはい。ハヽヽヽ、ハヽヽヽ」と、道の伽する笑ひ草、踏分て來る道草に、菊の折枝持そへて、見合す顔は「父樣か」「お米じやないか。今日は結構な旦那の供したのでの、荷は持ずにお世話に成た。お禮申てたも」米「コレハ〳〵、有難い。もふ爰がわたしが內、暫くお休み遊ばしませ」と、昔の殘る風俗も、お藥打枯し松影に、伴ひ入や西日影、侘た

ゑい程—よいほど

ふ」と手に渡せば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引かへす。稲村蔭より、雲「旦那申、お泊り迄參りませうかい。申旦那様、どうぞ持して下さりませ。今朝から壹文も錢の顔を見ませぬ。どうぞお慈悲」と云かけられ、旅人「イヤ〳〵、わしは今夜は夜越に行」雲「サヽそこがお慈悲でござります」と頼かけられ是非なくも、旅人「サヽそんなら吉原迄何ほじや」雲「エヽお前様も、わたしが頼んで持のじや物、ゑい程に下さりませ」旅人「サそんならやらしやれ。年寄の止しにせいでの」雲「そんなら持して下さりますか、エヽ忝い。サアお出なされませ。ヤット任せ」は聲計、一肩往ては立留り、「ヤ今日は結構な天氣じやなア。ヤットまかせ」二肩往ては息を繼、「旦那申、向ふの立場に鮨の名物がござります。ヤットまかせ」と、杖する度に追從口、深田に下りし白鷺の、餌嘴みをするにことならず。見るに氣の毒、旅人「コレ親仁殿、ちつと持てやりませうか。アヽそれ〳〵あぶない〳〵」雲「イエ〳〵勿體ない〳〵」旅人「アヽ氣の毒な足元。最前から見て居るに、氣しんどでならぬ」雲「是はわたしが足の癖でござります。旦那のかげで、今日も内入がよござります」旅人「モウこなたも幾年じや」雲「七十に手がとゞいてござります」旅人「アヽソレ〳〵〳〵、合點の行ぬ足取」雲「お氣遣ひなされますな、若い時

稲村の云々—駕昇が立場に乗客を待つは蜘蛛が巣を張りて獲物を待つに同じ蜘蛛に雲助をかく

仕や」と、小性に持せし刀箱、打明申さぬ心の底、しろし召れし御恵み、「エヽ、相果し志津馬が母、今少し生延はり、此御諚意を聞ならば」と、とゞめ兼たる有がた涙。御簾中も御落涙、「父にも母にもおくれたる、其稚子は手廻りで、養ひ育る三世の緣、殊更姉は只ならぬ、お中に持し大事の身、假の親分五右衞門の屋敷で、介抱如在なふ、本望とげて立歸り、元の主從對面を待て居るぞ」と、つど〳〵に仰も重き亡骸は、宇佐美が屋敷で野送りの、供にひかへし若黨武介、此世の名殘、御殿の名殘、始の妻と後の妻、生れぬ子にも引るれど、返す〴〵も大恩の、御前を拜し立出る、世の有樣こそ 三重 ものうけれ。

第六　沼津の段

東路に、爰も 歌 名高き沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ〳〵駕籠にめせ、お駕籠やろかい參ふか、お駕籠〳〵と稻村の、蔭に巣を張待かける、蜘蛛の慣ひと知られたり。淨 世渡りは樣々に、草の種かや人目には、荷物もしやんと供廻り、詞 泊りを急ぐ二人連、立場と見かけ立どまり、旅人「コレハしたり、大事の用をとんと忘れた。太義ながらわしが寄た所迄、一走往て來てたも」と、急ぎの用事走り書、さら〳〵〳〵と書認め、「早ふ早

じたか。影で廣言は誰もいふ、まさか勝負にかゝつては、生兵法が役に立物ではない。此樣な拔作を、お取持なされた五右衛門殿、何と今御合點が參つたか。イヤハヤ天晴のお目利〳〵」と、嘲哢譏りも覺悟の前、御前に向謹で、五「不鍛錬の政右衛門を吹擧致せし不調法、恐れながら申譯」と、云もあへず肩衣反ね退、差添に手をかくる。大「ヤレ待て五右衛門。あれ留よ」「御意ぢや。切腹先待れよ」と近習の聲々、ハッと計、暫し扣へて平伏せば、大「櫻田林左衛門唐木政右衛門、兩人共是へ參れ」二人「ハアハッ」と一度の答さへ、肩で風切櫻田と、唐木は枯し萎れ枝、見すぼらしげに蹲る。大「ヤイ政右衛門、只今の勝負、大内記是にて逐一に見屆、其方が致し方、神妙に思ふぞよ」と、仰に、政「ハッハッ」と計夢見し心地、一座の不審。大「イヤサ其方共は、今の立合を何と見た。尤勝負には政右衛門負たれ共、始よりつく〴〵見るに、身構へ太刀捌き、よつく鍛し誠の達人、林左衛門が中々及ぶ所ならず。彼が心を察するに、新參の身を以て、古參の者に恥辱をあたゆるは、武士の情にあらず、とわざと勝を讓りしは、劍術計か心迄、奧床し頼もしゝ。併ながら、是迄遊藝を樂しみ、武藝に疎き大名と噂に云れし大内記、劍術の批判、覺束なし共云べきが、弓取の家に生れし身が、武藝を知らぬ樣有んや。然れ共、弓を袋

八つの袖―四人の兩袖

さぶり流―左分利の槍

ふて相果るは悔しけれど、貴殿が本望とげたれば、骸の上で身共が耻も、其時雪ぐ暫しの無念。誠有侍の爲に、皺腹一ッが役に立ば、身に取て大慶〳〵」と、死るを常の武士氣質。政「アレ聞たか、主人に預るお命を、我々に下さるゝ、有がたいとお禮申せ、女房共」とはいはれぬ表、「親子共又云ぬが孝行」「勝べき勝負を負るも義心」「耻辱を取て御最期も、侍同士のお情」と、互に禮儀の中々に、涙催す八つの袖、時計の七つせはしなく、五「アレ早勝負の刻限近し。身は先へ登城致す。用意有政右衛門。貴殿のお暇出るを相圖に、身共が切腹。御邊は直樣鎌倉へ出立。冥土の出立早參る」政「御苦勞。後刻」と式禮默禮、性急武士の短夜や、明る間を侍最期の門出、いさんで御前へ。三重 時過て早明六つの、知せの太鼓、朝日輝大廣間、大内記殿上段の御に著座、近習の武士、各見物晴勝負、政右衛門は大の竹刀、櫻田は兼てより、好む所のさぶり流、長柄を持て待かくる、双方呼吸の透間なく、先を取んと挑み合ふ。切先刃金はなけれ共、劍を削る心の眞劍、打合ふ數は帳面に、見る人々も息を詰、暫く時を移せしが、兼て期したる政右衛門、櫻田が鑓先を、あしらひ兼たる手の狂ひ、竹刀がらりと卷落され、鑓にひはらをウンと詰がはと倒れて俯伏に、面目なふこそ見へにけれ。「鎗ひ込で林左衛門、「ナント何れも御覽

立ずと—立ずとも

腹—切腹

と痛はり心付々に、乳母のお藏が抱かゝえ、寢所に伴ひ入ければ、政右衛門宇佐美が前に手を突、改めて五右衛門殿へ御頼、申上げたき樣子有」五「サア〳〵役には立ずと、身共も力に成度い。何なり共遠慮なふ承ふ。どうか〳〵」政「ハア御深切忝し。近頃申兼たれ共、其元樣には明日、切腹なされて下されい。其子細といつぱ、明六時、櫻田林左衛門と立合仰渡されし、此勝負に拙者負まする。サア知て有林左衛門が手の內、打つてぶち伏るは合點なれど、勝ば御前の御意に叶ひ、是より一家中の師範仰付られ、お暇が出ぬ時は、介太刀の望が叶わぬ。御前において政右衛門、物の見事に打負、それを落度に知行差上、浪人して思ふ儘、小舅の介太刀致す所存。時には拙者が劍術を、風聽なされた其元樣、負た我等が恥よりも、見損ふた御恥辱、よもや生てはござるまい、腹なされにや成ますまい。これ迄厚ふ御贔屓下され、樣々御恩に預りし、恩を仇と申さふか、腹切て下されと、申出すは五臟の血を、一時に吐よりも苦しけれ共、舅の敵が討たさ、志津馬に本望を遂げさしたい計に、斯樣の不屆を申上る、御赦されて下されと、鬼を欺く政右衛門、わつと泣たる眞實に、感じ入て、五「ム、尤々、命進上申。何よりも安い事、只殘念なは、林左衛門めに恥頰かゝせんと思ひしに、返つて此五右衛門、面目を失

あかゝち—酒の異名
さもしい—卑しい
市松人形—おもちやの人形
三國一—三國一といふより富士と續け郡(氷)といふより解けてといひたり

娘とした事が、嫁入早々往んでたまる物かいの。三々九献まだ濟ぬ、殿御の盃戴く物じや」後「イヤあかゝちはいや。乳母あれほしい」乳「あれとは、ムヽお饅かへ。さもしい奥樣では有ぞ」政「イヤ〳〵道理じや〳〵。かわいひ女房に何惜からん。併一は過る、半分は身が預る。是が夫婦のかためぞ」と、持せばほや〳〵饅頭窪。柴「ホンニ忘れた、嫁君の御持參のお道具」と、簞笥の引出し廣蓋に、盛竝べたる持遊びの、市松人形風車、歌「七つに成子に、殿を持せ濟した、しやん〳〵。謡濱松の、音はざゝんざ。柴「座はかはらねど我夫を、夫といはれぬお谷の心、思ひやつて居るはいの。そもじとはなさぬ中、ほんの娘の此お後と、見かへさした繼母が、聟殿に惡性根付たと、恨でばし下さんな」谷「ア勿體ない事ばつかり。わたしが緣の切るは、爺樣へ不孝の云譯、政右衞門殿何時迄も、あの子と添て下さるが、家の爲志津馬が爲。わしや死る迄、去れて居るが嬉しいわいの」と明し合、親子の貞心三國一、思ひは富士の郡山、とけて淚を汲かはす。酒も裏に入しめ〴〵と、夜も更渡れば、稚子が、「乳母もふ寐よふ」と乳さがす。乳「ヲヽ此お子はいの。七つに成迄乳啣る子が有物か。殿御の手前も恥なされ」政「イヤ大事ない〳〵、是からが新枕。媼共床を取、身も追付寐る。コレお乳母、女房共に尿やつて、寐さしてやりや」

どれ合—野合

たはひ—たはひなし

ず、承知致いて罷有。コリヤ新參の女もよく聞、身共には先妻が有たれ共な、親の赦さぬ密通、行家殿の勘當の娘。どれ合女夫の悲しさは、表立て聟舅といふ事はならぬぞよ。今郡山の扶持を戴く政右衞門が、よしみもない他人の介太刀が成べきか。コレ此お後は、世間晴た行家殿の忘れ筐、志津馬が妹に違ひない。此子と今祝言すれば、是こそ誠の聟舅、舅の敵小舅の介太刀仕る、と殿へ御願ひ申さんに、よも不屆とは思されまじ。かなたこなたを思ひはかつて、科もない女房、去た謂れは此通り。義理といふ色に迷ふて、五年の馴染に見替た心、汲わけて五右衞門殿、御立腹の段々は、まつぴら〳〵御免下され。我等もふ醉ました、何申やらたはい〳〵」と、酒にまぎらす本性の、云譯聞て手を合せ、谷「よふ去て下さんした。其誠をちつとの間も、恨だ女子の廻り氣を、堪忍して下さんせ」五「ヲヽサ身共もよい年をして、疑ひの惡口面目ない。天晴武士かな政右衞門殿。此祝言は敵討の門出、武士道も立家も立、よい嫁を迎へられた。扨々めでたい婚禮。我等もとも〴〵お取持」と、始の腹立打てかへ、一度に顏の色直し、政「お心が解たれば、彌替らぬ政右衞門が、後連のお後や、二世かけて其方の男、今夜から抱て寐るぞや。コレ女房共〳〵」と、いへどお後は欠交り、「乳母もふ往なふ」とやんちやの聲、柴「是は

角菱止て—四角ばらずに

いと樣—大阪にては女子の事をいふと俚言集覧にあり

罌粟の花嫁—小く美しい花嫁

次の間—一ツつげとかく

テ堅くろしい、何がな御馳走。ヤイコリヤ新參の女、何をうろ〳〵まい〳〵と、其不調法では、祝言の酌は得せまい。お客人の肝癪、ソレお背中でも揉であげい」と、いふ程腹の立波に、音を泣千鳥四海波、政「扨我等今晩の花聟、上下を著る筈なれど、あたまから打解る樣に、角菱止て此儘の見參。サア〳〵早ふ、女共の顔が見たい〳〵」介採「ヲヽ、お心安い聟樣で、嫁御樣のお仕合、恥かしがつてござらずと、サアお出なされませ」と、乘物明れば綿帽子に、腰より上は埋もれて、七つ計のいと樣御寮、尺にも合ぬ襠ほら〳〵、帶につられて座敷にとんと、「乳母是取て〳〵」乳「アヽ申、其帽子、お盃の濟迄召てござれ」政「アヽイヤイヤ鬱陶からふ、取てやりや。ドレ戀女房の御面像」と帽子取せば尺長も、締らぬ罌粟の花嫁御、直す三寶土器を、乳母が持添藏かせ、嫁「聟君樣へ上まする」政「忝い〳〵。女子共皆見てくれ、何とちよこりと、何處に置ても邪魔にならぬ、よい女房で有ふがな。ハア嬉い〳〵目出たう一つ」次の間より謠千秋萬歳の千箱の玉と謠聟、襠の袖に一通取乘せ立出る。「ヤアお前は母樣柴垣樣」と、驚くお谷に目もやらず、政右衛門に打向ひ、柴「頑是ない此娘を女房に持て下され、此上の本望なし。聟引出の此目錄は、主人上杉宇内樣より悴志津馬に下されし、敵討御免の御書

さつふりースッパリ

河豚の横飛ー醜婦の形容

むかつき顔ー佛頂面

門と、釼術の勝負を致す此政右衛門。是迄拙者を推擧なされ、明日も勝負見分の役目を仰付らるゝ其元が、此立合も致さぬ中に、拙者をさつふりと切てお仕舞なされて、殿へは何と言譯はなさるゝぞ。是非憤り晴ぬと有ば、何と致さう武士の因果、明日の御前を勤て、其跡でお手に懸りませう。暫く宥免下され」と、理に詰られてさしもの五右衛門、「コリヤ尤。遺恨は遺恨、御用は御用、明日迄は傍輩の役目、中よし〳〵」四「御得心下さるか、アヽ忝い〳〵。然らば今宵はこれに緩りと、御酒一獻お上り下され。追付新しい女房が参る。イヤ又其器量のよさ、雪と墨との替德。古女房のお谷めは、不器量の上に、因果と早ふ子を孕で、正眞の河豚の横飛。飽たを無理とは思し召な」と、愛想づかしを立聞の、障子に齒形も入計、登る痞を折しも有、「嫁御樣早是へ」四「ヲヽ待兼た早ふ通せ。女子共ソレ燭臺に火を燈せ。島臺銚子」と騒ぐ程、五右衛門がむかつき顔。玄關より奥座敷、直に手繰の鋲乗物、對の簞笥に染込の、覆ひも愛持介添女房、四「ヲヽ太義〳〵。イヤ申 宇佐美公、只今カノ妻が参つた、お悦び下され」五「アヽ御目出たい義でござる」四「御推量下され、貴公には御退屈。コリヤ〳〵彼方に御酒上いよ」五「イヤ拙者御酒たべると、胸が悪くござる」四「是は氣の毒、然ばお菓子」五「イヤサお構ひ御無用」四「ハ

果し狀―決鬪狀

今晩は其元に嫁入が有と承、御祝儀中に參つた。老人の寸志ぞと御覽下され」と一通を差置ば、政「是は〱、婚禮を祝しての御發句でがな。先以て忝し」と押開き見て驚顔、「フウこりや拙者への果し狀でござるな。ハテ存じ寄ぬ、先其意趣の次第はな」「知た事、科ない女房何故去た」政「ハア拙者が女房を、拙者が去に、お手前樣が何故の御立腹」五「イヤサいふまい。尤お谷は上杉の家中、和田行家が娘なれど、お身と密通して二人連、此郡山へかけ込だ勞浪の體不便に思ひ、且はお手前が器量を見込、殿へ申て有付せたは此五右衛門。其上勘當請て親の無いお谷、身共が娘分にして、改てお身に呉たれば、以前は行家が娘にもせよ今は身が娘、少しの見落し有とても、去られる義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ外の女房持かへて、五右衛門を踏付た仕方勘忍ならぬ。それ共お谷に據ない科でも有かそれ聞ふ。返答次第、座は立せぬ」と鍔打たゝいて詰かけたり。政「イヤモウ重々御尤千萬。お谷に微塵も科はなし。去た子細は別義ではない、飽ました。女房といふ物は、飽てからはもふ〱、片時も持て居られる物ではござらぬ。サヽヽヽお聞なされ〱、御立腹は御尤じやが、今拙者と討果されては五右衛門殿、殿への不忠に成ませう。なぜとおつしやれ、今日上より御意有て、明朝御前において、櫻田林左衛

侘の種ーお谷が侘に來たと猜する

鹽ー機會

聞かしー利かし

ひつしよなくーつゝけんどんに

彌左衞門裁ー當時池永彌左衞門といへる有名な仕立屋あり

イ」と返事もさし足に、角を隱せし塗枕、そつとかたへに奥樣を、嬶がはりの見へがくれ、袴は解ど胸解ぬ、鋭い常の侍肩衣、折てたゝんで取直す、侘の種とは見付た夫、「ヤイ武介、あの女子は何者じややい」谷「エイ〱。イヤあれは彼今日お目見へに參つた、新參の女中で」政「ナヽ」谷「ハイ旦那さまお目かけられて下さりませ」政「フウ奉公人じやな。見かけから愚鈍そふな、不束な女なれど、遣ふて見てくれふ。コリヤヤイ今夜は身共が女房を呼むかへる、祝言の給仕申付る」谷「アノ嫁御とお盃の、其お給仕をせいとは。そりや余り、イエサア余り急な御祝言。不調法な私が」政「給仕得せずば奉公叶はぬ。立て歸れ」谷「イヤ〱申、何でも御意は背きませぬ」と、下女に成ても夫の内、離れ兼だる心根を、察して武介が呑込涙、「そふだ〱、奉公は辛抱が大事。何おつしやらふと、アイ〱と、そこらを程よふ鹽梅加減。ドレお盃の用意せう」と、料理を鹽に立て行。折から「宇佐美五右衞門樣御出」と案内す。政「ハア又堅ぞふがわせられた。誰ぞ羽織持て來い」と云ぬ先から心得て、勝手覺へし女房の德、氣轉聞して後から、著せる羽織をひつしよなく、政「エヽ子供ではないわい。差出女め彼方へ行」と、叱付られて是非なくも、立間せはしく入來る五右衞門、彌左衞門裁の上下、こはばり切てむずと座し、「政右衞門殿、

人參子―大効ある子

蝶花形―婚禮の時に銚子の蓋に飾る折紙

もゝ尻―おちつかぬ形容

も、頼の種の人參子、產月に氣をもんで、過有ばどふなさるゝ。追付旦那お歸り有ば、悋氣がましい顏なされず、兎角此內を動ぬ樣になされませ。御合點が參りましたか。とはいへ義理の有女房去て、嫁入の祝言のとは旦那はどふしたお心じや。拙者も一切合點が行ぬ。ホンニ此蝶花形、私は折樣存ぜぬ、お前樣お賴申ます」と、いはれて手には取ながら、みすく夫を寐取るゝ、あた憎てらしい蝶花形、犬骨折て早ぶさの、鷹の餌に成春の雉子。外に夫の聲聞へ、武「アレ旦那のお歸り、暫く忍んでござりませ」と、家來が情を力草、逢たい夫に隱るゝも、疵持つ心唐紙を、押明忍び入にけり。心がけ有侍は、地を這ふ蟲も氣を赦さぬ、唐木政右衛門、伊達を好まぬ刀の柄前、人に勝れし袴の幅、上屋敷より歸り足、武介手を突、「申旦那、殊の外お隙入、御用の品は如何體の義でござりましたな」「サレバく、此間から辭退する、彼林左衛門と武藝の試、明朝正六つ時、御前において立合へ、と押付て御家老の云渡し。今晩妻を迎へまする婚禮の中、一兩日お延下され、と願ふてもいかな聞入ず、女房呼は私事、明日は延されぬと、去とは心ない家老殿。此方は內へ氣が急く、もゝ尻に成て、漸只今。祝言の拵へ用意は出來たか。ヤレく知行取にも飽果た。嫁の來る迄上下脫で休息せふ。枕おこせ女子共」と、坐

てつきりと―たしかに
お中―お腹

右衛門様のお内義様でござります。下地から譯の有事かして、今夜俄の御祝言、わたしらも隣屋敷からお給仕に雇はれました。お前様は先の奥様。てつきりとお妾に、見替られなされたに違ひはない。ぐつとお悋氣なされませ」と、身にもかゝらぬ下々の、法界悋氣に焚付られ、いとゞ重る口惜さ、包かぬれば見て取武介、「エヽコレ女中方、役に立ぬ事云ずと、お臺所に人がない、爐の炭もついで貰はふ」女「アイ〳〵合點じや。サア皆お出。」旦那のお歸り待女郎、こちらも嫁御の相伴で、よい夢見よふ」と打つれて、立て行間を待兼て、かつぱと伏て泣居たる。武「ヲヽ、お道理じや〳〵。したが奥様、必悋氣なされますなえ」「アノ云やる事はいの。悋氣とは一通りの事。非業の死をなされた爺様、弟志津馬が敵討の、力と頼むはたつた一人。其夫政右衛門殿、縁切たれば誰を頼に大敵の股五郎、いつ本望が遂られふ。力も綱も切果し、と思へば胸が張裂る」と、歎けば倶に泣じやくり。武「お氣遣ひなさるゝな。譬旦那がどふおつしやつても、拙者めが命に代へても此御縁は切しませぬ。悋氣なされなとはそこの事。お前様のお中には、政右衛門様の御世繼がござりますぞへ。去狀取ふが、後連が這入ふが、其お子さへ御平産なされたれば、切ても切ぬ血筋の緣、政右衛門様の奥様といふは、お中が證據のお谷様。敵討の助太刀

いかぬ物ー出來ぬもの
心置ー遠慮

げな。肝心の島臺を忘れて、正月のお古を組かへて間に合す。いかぬ物は銚子加への折形、知てなら折て貰ひ度い」甲「ハテ何の其樣に義式せいでも大事ない。仲人さへない嫁入、今迄何處ぞにこつそりと、圍て有た女中で有」乙「ホンニあの政右衞門樣も、お顏に似合ぬ色事師。先の奧樣はお腹が立ふ。馴染の女房暇取して、跡へ來る嫁づらは、どんなお頬じや見てやりたい」と、さがない女子の口々に、うたて浮名の高咄し。憂事の思ひの種を身に持て、我内ながら心置、夫の留主を窺ひ足、婢門早く、「ヲヽ奧樣能ふお出なされました」と、いふに武介も押下り、「幸 只今旦那のお留主、お歸りならばお知らせ申さふ。先お緩りと」とあしらふ程、いとゞ重ろ憂さ辛さ、「諸白髮迄といひかはした、人の心もかはれば替る、我内へよふ來た、といはれる樣に成たはいの。身に覺へはなけれ共、親分の五右衞門樣、どの樣な誤りしたぞ、暇の印の此一腰、譯が立ねば受取ぬ、とお屋敷にも置れねば、立寄方もない身の上。見ればいかふ賑やかなが、お振舞でも有のか」と、問はれてそれとは云かぬる、跡先見ずの下女婢、「今夜はお屋敷へ嫁御がお入なされます」谷「ヤア嫁とは誰嫁。コレ武介、よもやそふでは有まい、と思へど若旦那殿に、女房が來るのじやないかや」武「イヤ其義は」政「エヽ武介殿、隱してもどふで知れる事。政

直な唐木云々ー正直な唐木政右衛門にかく

しよぎ〱ーぞく〱

かつふつー一切

第五　郡山屋鋪の段

昔は山の跡なれや、今も名のみは郡山、家中屋敷もつくろはず、直な唐木の柾目ある、家の柱は退去に、奥様役の留主預り、石留武介は忠義者、常の奉公裏表、内證賄ひ閙しき、臺所より婢共ばら〱と立出、「コレ武介殿、今夜は内方へ嫁御様が見へるげな。お目出たい祝言振舞、わたしらもあやかる様に、お手傳ひに參りました」武「イヤ御苦勞御苦勞。小身の旦那政右衛門様、仲間一人下女一人。若黨の此武介が、料理人やら家老やら、人手が無さに、御家中の女中方を御無心。待女郎にも酌人にも各を頼みます」甲婢「イエ同じお給仕でも、祝言と聞ば氣がしよぎ〱。したが合點の行ぬ事は、お谷様といふ奥様、お里歸りなされてから、聞ば去られなさつたげな。まだぬくもりも凉ぬ中、新し女房を入るとは、餘りな手廻し」乙「サイノ、今度の奥様は何處からお出なさるのじや」武「イヤ我等もかつふつ存ぜぬ。何だか知らぬが旦那が一人呑込で、今夜嫁を呼程に、祝言の拵へせい、と云付て出られたから、何が俄に料理拵へ　少し計聞はつゝた、海老の舟盛置鯉置鳥などといふ、しちむつかしい事は取置、鮒の吸物腹合せは、新枕の心じや

どふど座を組居たりける。お谷も倶に泣くどき、「夫の心の直る様、比怯者といはれぬ様に、コレ思案を頼む五右衛門様」と、取付歎けば、「ヲヽそふ思ふも尤。最前も殿の御前で、林左衛門めが我に向ひ、彼等を相人に立合はおとなげなし、と人もなげなる雑言過言、聞ぬ顔は何ゆへぞ。お家のお為、二つには儕を出世させん物と、思ひし事も恩を仇。但し國元の騒動を聞、一家の縁を切所存か。儕ゆへには勘當請し此お谷、某が親となり女房に持せしに、科なき者に疵を付、追出しておこすのみか、親代にやつたる此刀の物打に、暇の状を巻付しは、我を欺く憎い奴。心肝にこたへ〳〵こたへて了簡ならず。年寄たれどもこの宇佐美、尖き刃金の切味見せん」と、一圖に凝たる國侍。お谷は取付、「マア〳〵お待下され」と、縋るを拂ひ、宇「ヤア愚か〳〵。一先此方は屋鋪へ歸り、何氣もなくもてなされよ。我も跡より押かけて、事によらば先手を取て切かけん。其時こなたも此刀で、尋常に自害せられよ。未練に心残されな」と詞立派に云放す。谷「夫の心の善悪を」と、小褄凜々しく帯引しめ、勇まぬ心取直し、勇みいさむや庭神樂、打連てこそ 三重 立歸る。

筬船—刀匠備前長船

頃の氣質。御前に逢て様子もいはふと、其儘立て來りしが、通りかゝりてお前を見請、殿様のお立をば忍んで今迄相待し」と、刀取出し差うつむき、暫く詞もなかりける。宇佐美はつく〴〵打ながめ、「ハテ心得ぬ。ヲヽそれよ〳〵、コリヤコレ我秘藏せし筬船の一腰。其方が親代と成たる印に遣はせしに、持せ越たは合點行ず」と、引ぬき見れば物打に、巻添し一通、「コハ〳〵いかに」と解ほどき、見るより悔り、「ムヽコリヤ此方へ暇の一札。様子が有ふ語られよ」と、詞にお谷は仰天し、「何わたしへの去狀とや。去るゝ覺へ微塵もなし。エヽ聞へぬぞや政右衛門殿、科もない身をむごたらしう、去といふこと誰が始めた。お腹に十月たゞもない身を、情なや」とかつぱと伏して泣居たる。五右衛門せき立、「エヽこなたも武士の娘でないか。魂の腐つた政右衛門、跡を慕ふ事はない。エヽ口惜い、我眼の見へぬが誤り、天晴器量の有奴、何とぞ出世をさせんと思ひ、今出頭する林左衛門と、一勝負立合させ、武藝の器量をあらはし、一家中の手本とせん。さすれば殿にも遊藝の事お捨なされ、武道の道にお心をよせ給はゞ、お家のお爲と思ひしゆゑ、林左衛門と立合をすゝむれ共、辭退するは臆病風に引された大腰ぬけめが。此儘に相止めに成し時は、一家中の物笑ひ、願ひを上し御前の手前も云譯なし。エヽ不甲斐なや」と計にて、

の奉納もとかく家老共不得心。そちは又未明より出て忠勤盡す其替り、係り好ぬ事ながら、始ての願ひ聞居んも道ならず、政右衛門事は辭退致すとな、兩人の事は、用人方へ云付てくれう。其代り近日若宮の八幡宮へ、春日龍神奉納仕たい。又家老共が何といはふと、其方が計ひせよ。ヤモとかく遊藝が樂しみが深い。願ひの通り聞届けた」と御上意の、詞に「ハッ」ト宇佐美が面目、忝涙に平伏せば、大内記殿仰には、「奉納の場所へ諸人の入込、神拜の恐れも有ば、其方は跡に殘り御神樂を上、社内の淸め仕れ」と、云捨御座を立給へば、横に漫る櫻田が、御跡に引添ば、さゞめき渡る御供先、駒の嘶き轡の音、本城さして歸らるゝ。御跡見跡り、五右衛門は一人言、「ハア道大家の殿樣、是程にお好なさるゝお能にかへ、林左衛門と政右衛門立合の勝負、御願ひ申たれば、早速に御聞居下さるゝも、日頃の願ひ本望」と、社内をさして行折から、「申々」と松影より、呼かけるは女の聲、「何者成」と見合す顔、宇「お谷殿ではないか。面體あれし人相氣遣はしや」と尋ぬれば、お谷は涙押拭ひ、谷「包むとすれど女の事、有樣にお咄し申さん。國元から歸りてより、政右衛門殿の心底替り、出るにも入にも不機嫌。此刀を差出し、是を持て五右衛門方へ行、といふた計に物をも云ず。どふいふ譯やら合點行ず、聞かへされぬ日

さへられな―かけられるな

ず、我々迄も恐悦至極に存じ奉る。恐れながら五右衛門が御願ひの筋有、先達て御取次仕る唐木政右衛門義、劍術を申立、お家へ御奉公に出し候處、名のみ計にて、其器量有なきを御上覧に入奉らず。何卒林左衛門殿と立合の義、御高免遊され候様に御願ひ上奉る」と、聞も敢へず林左衛門、「ア、是々々宇佐美殿、御上へ對し恐れ多い願ひ。尤政右衛門殿とやら、貴殿の御世話によつて劍術を申立、御奉公に出られた人。武士は相互、成程お望ならば相人に成て進ぜうが、そりやもふ蟷螂が斧とやら申事さ。いかぬ事じや〳〵、止しに仕めされ。お氣にはさへられな、此林左衛門相人には餘りおとなげなく、何の夫が一溜りも有物か、殿にもをかしく思し召、ハヽヽヽ」と嘲笑ふ。林左衛門には見向きもせず、「右政右衛門義、不鍛錬成者抔と、影口を申者も候よし、左様成者に御知行を給はり候ては、取次仕る此五右衛門、一家中へ相濟申さず。是によつて政右衛門に立合の義、御願ひ申上候様と申聞せ共、彼も新参者の義故辭退仕る。何卒此義、御上より仰付られ下さらば、拙者が面目此上なし」と、餘義なき願ひに内記殿、「武の道は尤なれ共、我共家に生れながら、劍術の事はとんと氣が乗らぬじや。政右衛門事は、家老共がきつい取持、兩人の立合何方が劍術善悪にもせよ、某が構はぬ事。家老共が得心せば、身が事は何時でも見物せん。今日

櫻田—櫻井甚左衛門

冥加ない—ないはなるの意

猩々—能の名

ぬるくて悪い」鼎「エそんなら止しにせろ〳〵」と、あだ口々を云廻す。「お立」と觸る聲々に、悄り驚きしり〳〵舞々かゞみ扣へ居る。威光輝く大内記殿、奉納首尾能納りて、早御下向の先拂ひ、お徒御近習前後を配、鳥居前迄出給へば、御供には宇佐美五右衛門、中扈從に召連られ、御前間近く引添へば、跡押へは櫻田林左衛門、指南の棒を振廻し、遙跡鼻高々と御供す。「暫く是にて御眺」と、宇佐美が詞に近習の武士、御腰掛を奉れば、遙跡より能太夫源之進、御傍近く手をつかへ、「今日殿様のお能、恐れながら驚き奉ります。いつ〳〵よりも出來させ給ひ、神も納受ましまさん。扨一家中、何方様もきついお上手。殿様の御機嫌の程御伺ひ奉る」と、申上れば打笑給ひ、大「ナニ源之進、是といふも其方が指南の德」と宣へば、源「ハアコハ冥加ない御詞、時の面目有がたし」と、退去て一禮のべければ、重て仰出さるゝは、大「ア、浦山しいは源之進が身の上。我望は外になし、能太夫に成て猩々の亂れ、一世一代が仕て見たいわい。取分け今日の奉納も、我一人の力にあらず、一家中の者迄も滿足せねば奉納とは云がたし。殊に天氣も宜しければ、我悦び限りなし。太義太義」と有ければ、皆一統に頭をさげ、「ハツ」ト計に平伏す。五右衛門御前に手をつかへ、「誠に殿様の御意の通り、今日は一入天氣宜敷御祈願の奉納、一家中の者は申上るに及ば

道明寺—河内道明寺より製出する糒有名なる故いふ

垢切—皸にて寒中手足の凍裂すること

らが親はきつい能が名人、名さへ軍陀羅夜叉右衛門といふて、道明寺の祈りの段、面白い事だ」杢「コリヤ〳〵能助、道明寺とはそりや干飯じやないか。必外でそんな事をいふなよ」熊「ハア、アノ謠の名は、ヲヽ何とやら、ヲヽ思ひ出した宗善寺」杢「コリヤおかしい、宗善寺とは津の國に有寺だはい」熊「そんなら我がのも違つた、道明寺は河内でないか。イヤイヤ宗善寺に違ひはない」杢「ハテ片意地なもの。コリヤ能助、お身は藝者の子なら、狂言の心が有。何と稽古してくれまいか」熊「狂言覺えて何にする」杢「ハテ殿様がお好だ故、毎日〳〵此通り、いかに下々じやといふて、其氣の無いは何と不忠では有まいか」熊「コリヤ尤じや、稽古してやろ。第一足取を稽古せい。サアおらが歩行くよふにせい」と、鳥居の馬場を能舞臺、子細らしげに身繕ひ、熊「ア、それ〳〵手を振事はない、兩手をかうして。そふだ〳〵、歩行様を覺へたか」杢「ヲヽ合點じや〳〵」熊「ハテ垢切を切した時の歩行様と覺へて居よ。おらがいふ様に跡からいへよ。かやうに候者は此邊りに住居致す者でござる。賴ふだお方が狂言を好せらるゝ故、我々も稽古致さふと存ずる。太郎冠者有か」杢「ナイ」熊「エヽ悪い覺へ」杢「イヤ〳〵、此返事に仕てくれい。奴を呼出すのは極つて有はい。身が前へ出あがらふ」熊「サアそれは芝居のせりふだはい」杢「ハアお前には

志津馬―沈むにかく

太刀頼むといはず共、彼が爲にも舅の敵、違背はあらじ、早さらば」―老母「此世のさらば未來の門出、丹右衞門樣」―丹「鳴海殿、思へば今日の云合せ、敵と敵が修羅の道連、とゞめは互に一太刀」と、落たる刀指添を、よろめきながら取上て、眼は眩めど胸と胸、差貫いたる義士貞女。歎き志津馬も深手の弱り、家來が肩に敵の圍み、齒をくひしばつて立歸る、心の内こそ　三重せつなけれ。

第四　郡山宮居の段

謡「君萬歳の祈とて、神に歩みを運ぶなり／＼。」國の初めの其昔、誰名付てや郡山、御城下の見付筋、武家町人のわかちなく、引もちぎらぬ弓八幡、奉納願主譽田大内記殿、諸の番組數々も、打納りし隅田川、あらお目出たや、と上を見習ふ下がかり、頓てお立を松影に、列を正して待居たる。杢助が聲高に、「何と能助どう思ふ。同じ樣にいふは勿體ない事だが、殿樣は遊藝がお好故、今日は何所の奉納、明日は爰じやのと毎日のお能、我我も其お家に奉公仕て居ながら、其氣のないは冥加ない事ではないか」と、いへば能助打笑ひ、「ハヽヽヽ何を杢助がいふやら。そりや我が鋭氣が無いによつて、そふ思ふ。お

此場を見遁しー股五郎の繩目を赦して放ちやること

いつの世にー下に報ずべきの四字を略せり

り預りし正眞の刀は、いつかな渡さぬ誠の正宗。志津馬が手より主人上杉に差上、上杉公より、武將へ獻上有時はお家の譽。是を功に敵討の、願ひを立さす我工夫。とは思へ共城五郎は、音に聞へし刀の目利、贋物を突付ては受取ぬ邪智佞人。先正眞を改めさせ、直樣取て鳴海が自害、乘物の中の疵口で摺替た贋正宗、誠は是に」と乘物より取出す切柄、正銘の極めは爰に今際の鳴海、早たへ〴〵の息の下、「股五郎が親の身で、丹右衞門樣と云合せ、城五郎を謀りしは、どうで非道な躮めが、命は所詮叶はね共、殿樣のお手に渡れば、竹鋸か磔の御成敗は知れた事、せめて武士らしう、志津馬殿と敵討の、勝負で死れば何ぼう嬉しい親心、此場を見遁し下され、とお頼申て今日の時宜」丹「ヲヽサ老母の頼みはなく共、志津馬に討さにやならぬ敵。わざと敵へ奪取せ、丹右衞門一人が過りに成て相果れば、月日を待て本望遂、敵の首を先生の、位牌の前と身が墓へも、手向てくりやれ頼ぞ」と、最期の際迄師弟の義理。志「我故命を捨らるゝ、此大恩は何時の世に、かへす〴〵も殘念は、大敵の股五郎、志津馬が助太刀後立と、頼む此方に今別るゝ、心の悲しさ推量有」丹「ヤア不甲斐ない志津馬殿、丹右衞門は死する共、無念の魂此世を去らず。郡山の政右衞門こそ、我に十倍勝りし達人、早々歸つてお谷殿、助

しどろ—亂れる

家來を胴切車　切斯伏せ〳〵一文字に、切てかゝるを丹右衞門、前後左右に渡り合。其間に澤井を引包み、何國共なく奪ひ行。丹「南無三寶」と駈け行を、荒手を入替たゝみかけ、既に危ふき其所へ、心ならずもかけくる志津馬、「スハ一大事」と拔刀、命限り根限り、火花を散す 三重 強勢勇氣。相人は大勢身は二人、金鐵ならねば丹右衞門、數箇所の手疵刀を杖、「志津馬殿か、エヽ口惜や股五郎を奪取れた。無念〳〵」と計かつぱと伏。「ハアはつ」と志津馬もどうと座し、弱るを付入家來共、後れ馳に池添孫八、片端撫切ばつ散し、志津馬をかこふ忠義の働き、お谷も斯と氣もそゞろ、足もしどろに走り付、「ヤア志津馬は手を負つたか」池「若旦那手は淺いぞ。コレ氣を慥に〳〵」と抱起せば、志「イヤ手疵には痛まねど、是が正氣を失なはずに居られふか。股五郎は手に入ず、正宗の刀は敵へ渡す、頼みに思ふ佐々木殿は此深手。いよ〳〵殿への云譯なし、運命も是限り」と、刀逆手に取直す。谷「アヽコレ待た、そなたが今死で爺樣の敵は誰が討」志「サア其敵が討れぬ故此切腹」谷「イヤ〳〵〳〵何ぼうでも放しはせじ」と爭ふ二人、倒れ伏たる丹右衞門、むつくと起て、「ヤレ志津馬早まるな。股五郎を奪取れたは最初より覺悟の前。正宗の刀は我手に有」志「ムヽすりや最前城五郎に渡されしは」丹「ヲヽサ、アレハ贋物。行家殿よ

悪びれず—臆せず

老母死骸—老母の死骸なり

立騷—立つにかく

田荒川前後を圍ひ、其身は丸腰惡びれず、優々と座に直り、股「なにお使者御大義。傍輩を討た意趣の元は外でない。老ぼれの和田行家、年に免じて立てやれば付上り、此股五郎を劍術の弟子などと、師匠顔が胸惡さ、何の苦もなく討放した。御身達に安々と搦捕るゝ股五郎ではなけれ共、身共故に一國の騷ぎと成が氣の毒さに、命惜まぬ武士の覺悟。城五郎殿イザ御政法に行はれよ」と、むずと座を組手を廻す。城「ヲヽ、適々、其方が命一つで、騷動納まる國家の爲、恨と思ふな股五郎」と、捕繩たぐつていましめは、緣につながる城五郎、「身共が潔白見屆けたか丹右衞門」丹「ハア是で主人が心も滿足。扨此老母死骸を進上申さふか」城「イヤサ死人は入ぬ持ていにやれ」丹「然らば科人」城「其刀」丹「只今取かへ」城「請取ませう」「いざ」と繩付棒鞘を、渡す目配り、請取氣配り、互に屹度立別れ、「是で双方意恨もさつぱり」「老母が死骸は乘物に、此儘屋敷へ早急げ」「おさらば」「さらば」と目禮も、龍の鰓を出て行、危かりける次第なり。影ほの暗き黃昏時、繩付引立て丹右衞門、前後を固めて行過る。思ひがけなき山門より、ぱつしと射かくる白羽の矢、膝にかつきと丹「コハ如何に」と、引拔く間も又一筋、弓手の腕に立騷ぎ、周章驚く同勢が、中へむら〱物影より、顯はれ出たる數多の武士、物をもいはず拔連て、

元の白地―元の通り
くたばれ―死ね
吃相―見幕

すは何故、老母を受取ふ爲計。親の命を子にかゆる大切の鳴海、なぜ殺した。元のごとく生て渡せ。左なくば澤井股五郎も、いつかな〳〵渡しはせぬ。サア老母を早く請取ふ。サア何と〳〵」と詰かくる。丹右衛門ちつ共騒がず、「鳴海が自害はいふて返らず。弟子として師匠を殺す極悪人の股五郎、目の前で親が死んだればとて、悲しむ樣な奴でなし。況して緣者の城五郎殿、鳴海が最期を夫程に、惜まつしやる樣がない。誠は老母が事は付たり、正宗の刀がお望でござらふがの。夫共刀は入ぬ、老母を生て返せとあらば、拙者とても詮方なし、約束變改元の白地、罷歸つて此趣、主人上杉に言上し、一家中是へ押寄、鑓先を以て股五郎を生擒にする分の事。人非人の澤井が母、死神の付たは是天罰、軍の血祭早くたばれ」と、手負の刀ぐつと引拔、「正宗の刀の切味、お望ならば御相伴なされよ」と、寄ば切んず吃相に、肝先挫がれ城五郎、「アヽ是さ〳〵丹右衛門、此方より事は好ぬ。ムヽいか樣能く思へば、自身覺悟の鳴海が最期、全くお身が業ではない。刀さへ渡し召るなれば、云出した武士の意地、さつぱりと立といふ物」丹「ムヽスリヤ股五郎をお渡し有か」城「渡さいで何とせう。元より彼も覺悟の上。ヤア〳〵股五郎最期の時刻近付たり、尋常に是へ出やれ」二「ハア昨より支度仕る」と、返答立派騒がぬ澤井、海

棒鞘—圓き鞘の刀
ふゑ—喉笛
了簡して—承知の上

未練共比怯共笑ふ人は笑ひもせよ、どふぞ助けてやりたい、と思ふが親の身の因果。御主人へ對しては、不忠者の躮なれ共、母が命を助ふ爲、繩かゝつて出よふといふは、此親には孝行者。老年寄た此母が詮ない命生延て、我子が刑罰に行はれるを、眺めて何の嬉しかろ。お情返つて恨めしい。ヤイ股五郎此母は、何の樣な憂目に逢ふが殺されふが、ちつ共構はぬ厭ひはせぬ、必爰へ出てくれるなよ。成らふ事なら此婆々を、替りに殺して股五郎が、命お助け下さりませ。惡人でも産だ子に違ひがなければいぢらしい。お慈悲〳〵」と恩愛の、子故に迷ふ憂淚、とゞめ兼て見へけるが、「アヽ思へば誰にも恨なし。此科の起りといふは、よしない刀に念をかけ、成敗に逢も名作の、劔は我子の敵ぞ」と、云つゝ這寄棒鞘を、ずはと拔手も見せばこそ、ふゑのくさりをかき切たり。「是は」とかけ寄る城五郎、佐々木も仰天乘物へ、手負を打込しつかと押へ、城五郎に目を放さず、底意をさぐる碇繩、又も大事と見へにけり。澤井わざと空とぼけ、城「コレサ丹右衞門、契約の通り鳴海を受取申さふかい」丹「いかにも科人股五郎を受取かはり、母が命は助くべしと契約は申たれど、御覽の通り、只今老母は自害致た。併此方の手で殺しはせず、我と我手に相果たは、某が存ぜぬ所」城「默れ丹右衞門、構ふた股五郎を了簡して渡

送られつらんず—送られたるべし

解死人—下手人

刀は云々—正宗の刀を渡す

身に老—身に負ふにかく鳴見になるをかく

是非も繩目—是非もなく繩目をとく

郎、望に任せ渡さんなれば、此方よりも望しごとく、正宗の刀、并びに老母鳴海が事、上杉殿より定て送られつらんずな」丹「ハア成程々々。主人上杉顯定。怒りの元は股五郎一人、逆磔の刑に行ひ、國の政道を正すべき存念。股五郎だにお渡し有ば、外に曾て子細なし。則是こそお望の正宗、并びに老母を誘引せり。イザ御改め下さるべし」と、箱に納めし持參の刀、取出せば手に取上、切先、物打、鎺元、とつくと改め鞘に納め、城「ヲヽ聞しに違はず天晴名作。慥に落手」と引さげて立上る。丹右衛門引とゞめ、「ア、麁忽なり城五郎殿、股五郎を是へ出し、老母と互に取替ざる中、むざと刀はお渡し申さぬ。サア解死人股五郎に、繩打てお出しなされ。ア、近頃我儘千萬」と、眼を配る勇氣の面色。城「ヲヽ實に尤、是は身共が麁相。然らば刀は暫くそれに。追付解死人渡し申さふが、先其方の囚人、老母鳴海が替らぬ體」丹「ヲヽ、母に科なければ、最早繩目にも及ばず」と、乘物の網取拂ひ、引出す姿縛り繩、子故に科を身に老の、恥と鳴海が憂思ひ、是非も繩目をほどき捨、丹右衛門老母に向ひ、「子息股五郎を此所にて請取上は、其元が命を助け、城五郎殿へ渡すべき旨、今朝殿より仰の通り。彌承知成べし」と、聞て鳴海は顏を上、「誠に躮が不所存故、彼方此方へ御苦勞かけ、憎い奴とは思へ共、天地の間に親一人、子一人の股五郎、

はやり雄—性急なる
我へ—我一か
琴を彈じて云々—孔明琴を彈じて仲達を退かしめし故事か

腕に請合けちりんも、掛直は申さぬ」吳服屋が、めつたに引ぬ太織地の男一疋賴もしゝ。股五郎片頰に笑、「扨々氣味のよい男。敵持の供すれば、肌刀は放されず。行家めを仕留た時、コレ見よ弓手に二箇所の疵、忽治したる此藥は、城五郎殿の家に傳はる、南蠻國傳來の妙藥、身共を同道の人々へは、いづれも是を懷中さする。お手前もまさかの用意、此印籠を預るが、股五郎が一命を賴印」と渡せば、十「是は〳〵結構なお藥でござります。怪我と病氣は何時知ず。道中の肝心」と取納めたる折こそ有、又もかけ來る遠見の者、「上杉の使者佐々木丹右衛門、網乘物一挺、供はわづか三人、只今門前迄」股「ヲヽよし〳〵。云付し如く門を開き、隨分神妙に取はからひ、此所へ使者を通せ。ソレいづれもは裏門より、先へ廻つて待伏の、用意〳〵」にはやり雄武士、我へ急ぐ裏門口、股五郎は十兵衛を引連、奥へ入にける。琴を彈じて敵を避、窈窕として檻穽の謀もや有らんと、心赦さぬ丹右衛門、使者の禮義の上下も、四角四面の方丈へ、網乘物を舁入させ、しづ〳〵と打通れば、城五郎威義繕ひ、「ホヲ聞及ぶ、御邊は佐々木丹右衛門とな。今日の使者大義〳〵。今朝も言送りし通り、武士の意地によつて爭論に及ぶといへ共、かく靜謐に納りし代に、私の意恨にて合戰を取結ぶは、武將への恐れ有。罪は罪なり股五

比怯―卑怯

竝居る中―此下に（を）字を入れて見るべし

臆病神が取付たか。比怯至極」と詰かくれば、股五郎押しづめ、「ア丶どなたにもおしづまり下されい。イヤ城五郎殿、拙者が命は惜はせねど、武士の意地を立ぬく貴殿が、今に成て腑甲斐なく、上杉へ渡さふとは、エ丶聞へた、行家をぶち放した計で、お頼みの正宗手に入ぬ御立腹、夫故でござるな」城「イヤサ左様の事でない。今合戦に取結ぶとも、只世上を騒す計、望の刀が手に入ねば無益の沙汰。一旦和睦に事を納め、母の鳴海と正宗を請取た上、お身に縄打て心よく相渡し、使者の歸りを思ひがけなく、多勢をもつて引包、奪返す我工夫。いづれも必隱密〳〵」と、聞て皆々勇立、「誠に智謀勝れし貴殿、左樣ならでは叶はぬ所。然らば各其用意」と、騒ぐを押へて、城「ア丶先待れよ。謀は密なるを以てよしとすれば、某が詞を出す迄、いづれもお抑へ下さるべし。股五郎が後の災免れさする究竟の、忍び所は九州相良、密に落す用意萬端。ナニ吳服屋十兵衛是へ参れ」「ハッ」と答へて次の間より、小腰屈めて竝居る中、怯ず臆せず畏り、十「股五郎樣のお身の上、委細とつくと承はりました。城五郎樣へは、數年來御出入の私、相良へは商ひに毎年下る道案内、見込で頼と大切のお供、畏つたは商人冥加。多年の御恩報じなれば、ちつともお心置れますな。町人でこそ有心は金鐵、二人や三人は苦には致さぬ。

思ふつぼ—思ふ通り

のめ〳〵と—おめ〳〵と

某が所縁有股五郎をおかばひ有何れもの御深切忝し。去ながら行家を討たる事の起りは、此城五郎が頼みし事。其子細は、此度武將の公達、御任官の御祝義に付、諸大名より名劒を獻ぜらる。然に行家が家に、持傳へし正宗の名作有、主從の事なれば、上杉是を取て獻上すべし。左有ば彌上杉が鼻高く、威をふるはん事心外至極、何とぞ此刀を奪取て、某が手より獻上すれば、我は勿論昵近衆の、手柄にも成と存じ、股五郎に云ふくめ、行家めをぶち殺さしたは、正宗の刀を取ふ爲計。思ひの外此刀、行家めが手にはなく、佐々木丹右衞門が預りおる由。股五郎を請取たくば、老母鳴海が命を助、竝びに正宗の刀を此方へ渡せよ、と難題の使者を立たれば、此返事の有迄は、暫くお扣へ有れよ」と、云間程なく馳來る門番の歩の者、「佐々木丹右衞門より今朝の御返翰」と、指出す文箱を城五郎、封押切て一通を、さら〳〵と讀終り、城「ホヽウ城五郎が思ふつぼ。股五郎をお渡し有ば、母鳴海が擒を赦し、正宗の刀を遣はすべし、追付二品共、丹右衞門持參致さん此文言。後刻御出を相待居る、と口上を以て返答せよ」と、蓋引しむる明文箱、取より早く走り行。甲「イヤサコレ城五郎殿、一旦かくまふた股五郎、今更のめ〳〵と上杉へ渡し、夫で武士が立ますか」乙「ヲヽ我々も其意得ぬ。貴殿は上杉が恐ろしいか、

郎一禮し、「物數ならぬ陪臣の拙者、城五郎殿は一家の好、其緣に連御歷々の昵近衆、御かくまひ下さる段、身に取ての面目此上なし。併ながら主人上杉憤り深く、拙者が母を人質に取へ置、股五郎を渡さずば、母を成敗するとの難題、我故に一人の母を殺すも不幸、且は好もなき昵近方、斯騷動に及ぶも氣の毒。やはり拙者を上杉へ御渡しなされ下さるべし」と、邪智を隱せし賢人顏。野守之助進み出、「何さ〱、其遠慮には及ばぬ事。此度我々が加擔するは、お手前の爲計でない。上杉には此方共年來の意恨有、武將の御先祖、尊氏公より譜代相傳の昵近武士、元弘建武の古へ、尊氏公に粉骨を盡し、忠義を勵みし我々が家筋。上杉を始、其外の諸大名は旗色のよきに從ふて、降參した腰拔の家筋、我は顏に高祿を取、昵近衆を蔑に輕しむる日頃の存外。ことがな有と思ふ折節、お手前をかくまふたは、上杉に恥を與へる爲さ。案の如く上杉此事を憤り、追付是へ押寄んと、軍評定最中の由。今太平に治つて、茶の湯遊興に日を送り、鎧兜の著樣も知らぬ國大名、何程の事有ん」甲「ヲヽサ野守殿の仰の如く、日頃箇樣な事を待受、武藝鍛練の我々、一まくりに蹴ちらして、昵近武士の意恨をはらすは今此時。敵方より寄ぬ先、此方から逆寄にして上杉に泡吹せん」乙「ヲヽ尤」と立騷ぐ。城五郎押止め、「ア、暫らく〱。

彼等が家一和田一家

振出す一鎗を振り出す

平等大會一平等大悲の誤にて衆生を平等に助ける佛の道

好みお頼申。一日にても生延ては、行家一家の奴原に、未練者と云れんは、家名の恥辱、一家の恥。我一人切腹致せば、跡の難義は氣遣ひなし。此世の名残おさらば」と、云捨てかけ出す。城五郎聲かけ、「イヤコレ〳〵先待れよ股五郎、身不肖なれ共澤井城五郎、おかくまい申たい。意氣地によつて討れしは、我々が頼みしより事起る。聞捨に致しては武士道の表が立ぬ。此上は我々が命にかけてかくまはん。先祖の意恨今此時。出かされたり股五郎。譬和田一家の奴原、君命を以て來る共、何程の事有ん。一時も早く屋敷へ歸り、評議を定めん。油斷は不覺の基なり。路次の用心氣遣はし、氣を付られよ近藤殿」近「其義はちつ共氣遣ひなし、歸宅濟迄御役目、指でもさゝば彼らが家の一大事」と、備へを亂さず振出す、威光輝く鎌倉山、連て我家へ 三重 立歸る。

第三　圓覺寺の段

されば澤井股五郎、行家を討つて立退より、直に駈け込圓覺寺、門戸を閉して關、近藤、海田、荒川、澤井を始、昵近の若殿原、若上杉より寄來る共、引はかへさじ弓鐵砲、佛の說し法の庭、平等大會に引かへて修羅の街の大評定、方丈狹しと詰かけたり。股五

欠烏帽子—欠は懸

なくて狀一通。こは心得ずと星明りに透し見て、澤「ナニ〳〵正宗の刀一腰、子細有て、私方へ預り申所實正也。和田行家殿、佐々木丹右衛門判。扨は刀は丹右衛門が預り居るよな。エヽ無益の骨折口惜し」と、手疵にしつかと鉢巻締め、表は人目飛石傳ひ、裏道さして落て行。「曲者が入たるぞ。明しを持」と奥方の聲に、追々〳〵腰元共、折から駈くる丹右衛門、伏たる死骸は、「ヤアコリヤ行家樣。先生を何者が手にかけしぞ。今曲者が此小柄。コリヤ澤井股五郎、遠くは行まい家來共、表をかこへ」と、高股立、聞とひとしく家内の騒動、上を下へと立騒ぐ。桐が谷の裏道づたい、御勅使見送り奉る。跡押へは澤井の一黨、其身は素袍欠烏帽子、皆一様の御裝束　君臣の禮義默止がたく、星をあざむく高挑燈、事嚴重に見へにけり。備の中を股五郎、疵持足の裏道を、押分て打通れば、それと見るより野守之助、「股五郎殿ではないか。心得ぬ面體氣遣はし」と、聲をかくれば傍に寄、股「兼て申談ぜし通り、今日行家が方へ參り、何角事を謀しに、こつちの底意を氣取し上、法外成申分、骨髓に徹したれど、強敵の行家なれば、計略をもつて只一討。併残念なは正宗の刀、持歸らんと存じた所、丹右衛門が預りをる事、慥な證據はコレ此一札。ナニ城五郎殿、我是へ來りしは、一人の母の事、何卒御世話頼に、爲計。一家の

荒涙—顯はすにかく
胸に疊越し云々—胸に疊みこむうち疊の下から突出す白刃に行家斬られしなり
袈裟にずつぱと—實內を袈裟切にずつぱと切放す

ばこいつが惡智惠の根本。かう打明て申上るは、今より心を改る證據。ア丶假にも惡い工みは致さぬ事。もふ〳〵、ふつ〳〵懲りはてました。是迄の不屆、最前よりの不禮の段々、先生眞平御免下され。コレ〳〵、かふ申た計では御得心有まい。彼正宗を望む物、拙者への頼みの書狀、御目にかけるが二心ない股五郎が申譯」と、取出す一通手に渡し、懺悔に誠を荒涙、誤り入たる有樣に、心に油斷はなけれ共、良病中の老眼に、燭臺引寄狀の宛名、澤井股五郎殿、同城五郎。「ム丶さも有ん」と長文を、つぶ〳〵胸に疊越し、突出す白刃と右釼の拔打、眞向へ切付る。行「シヤ國賊め」と付入て、澤井が肩先切付たり。此方もしれ者請流し、遉名を得し行家なれ共、初太刀の手疵に眼くらみ、請太刀に成てたぢ〳〵、引よと見へしが飛違へ、澤井が眉間丁ど切。下より付込すくい切、脾腹をかけて切込太刀先、急所にや當りけん、どつかと座する椽の下、股の付根を貫く切先、立も立せずたゝみかけ、非業の釼に和田行家、無慙の最期ぞ是非もなき。とゞめの刀引ぬいて、疊あぐれば奴の實內、「澤井樣お首尾は」澤「シイ主に見かへて身共へ加勢、適出かした褒美くれふ」「ア丶忝し」と立寄實內、袈裟にずつぱと邊りを見廻し、兼て工の股五郎、上段の床の間の刀箱取出し、蓋押開けば、こりやどふじや、刀は

そゝり上—上唆かし

鏌耶—唐山楚王の后の生みし鉄にて作りし名劍

しよげ鳥—悄然たる樣

親又左衛門は、身共より上座の家筋、其勢と思へばこそ、劒術の弟子ながら禮義を以てあしらへば、伸上る法外者。心得ぬやつと思へ共、何とぞして撓め直し、親の跡目を繼せてやりたさ、鑓の一手も教てくれた、師の恩を打忘れ、勢志津馬をそゝり上て遊所へ連行、正宗の刀を質に入させ、奪取て、それを落度に我家を滅亡させんと、よくも工んだ人非人め。こりや儕が智恵計でない。正宗の刀に望をかけ、頼んだやつが有ふがな。其頼人も合點たり。サア眞直に白狀致せ。鏌耶が劒も持人による、性根腐た股五郎、病勞れても儕らごときに、正宗を出すにも及ばず、身が指料の此刀、工の腸引出して、洗ふて見せふか、何と〳〵」と、胸に覺への一々を、見透されたる股五郎、頰眞赤にしよげ鳥の、返す詞もなかりしが、面目なげに顏を上「ハア左様ぢや、誤た。相果た親共が義を思召れ、折節の御異見が耳に當た、僻み根性、彌つのる色狂ひ、放埒の友を拵ふと、志津馬殿を廓の魔道へ引入たは成程拙者。さふ見顯されてからは一言もござらぬ。好色に魂奪はれ、大恩の師匠を仇に存じた非義非道、只今夢の覺たる心地。御推量の通り、正宗の刀、拙者が持て何に致さふ。有樣は色遣ひの金が欲しさ。そこへ付込、右の刀を奪取てくれるならば、金子千兩禮物に遣さふと、頼んだ者も外ならず、拙者めが一家[illegible]、思へ

三人云々ー行家お谷と澤井の三人

身でおりまするが、どうぞ姉御のお谷殿を、拙者が妻に下さるまいか。スリヤ聟は子なり。行家殿の御家督拙者が預り、其内には志津馬殿、お心も定なば、御渡し申に相違なし。是非お谷殿を申請たい。此御相談はどふでござるな」行「イヤ御深切忝いが、其お谷めが事は、唐木政右衛門と申浪人と密通致し、家出したは四年以前。箇様の不屈者なれば、勿論此奴は七生迄の勘當。貴公も此義は申さいでも、能く御存じで有ながら、何かこりや御座興でござるの」と、何をいふても請付ぬ、始めの恥辱に股五郎、何がな見出し付込んと、白眼廻せば立聞お谷、三人一度に見合す顔、立切る障子、驚く行家、「コリヤコリヤ悪いく\、今爰へ出ると身が武士が立ぬ。屋敷に叶はぬ出てうせいと、サ追出して置ました」と、云紛らせば高笑ひ、澤「ムヽハヽヽヽ、行家殿何いはつしやる、娘やることならぬならいやで濟事。ナニカコリヤ手前小身者と侮り、嘲呼召ろの。ヤ恥辱を與へるのか。股五郎は武士でござるぞや、侍でござる。娘は勘當致した、屋敷に居る物を追出したの、勘當のと、貴公、殿の名代に一家中を納むる役ではないか。サそれで御家老職といわれますか。志津馬を勘當仕たといふは僞り、是も屋敷に隱して置、正宗の刀、貴公が質に入たで有」と、悪口雜言出放題、こたへ兼て膝立直し、「慮外なり股五郎。併が

致すからは、何事によらず承りたい。サ、御遠慮なふお咄しなされ」与「イヤ別義でもござらぬが、正宗の刀、私に御譲り下さるまいかな」と、思ひがけなき一言に返答なければ、「サ、、、斯申た計では御合點參るまじ。斯うでござる。正宗の刀は質物に入てござる。箇樣申せば、志津馬殿の事訴人致す樣なれど、譯を申さぬと御合點が參るまじ。惡ふござる〳〵。吉原の瀬川と申遊女に迷ひ、正宗の刀を質に入、身請の相談極りしと承る。エ、とくにも拙者存じたならば、御異見でも仕らんと存じた所が跡の祭。スリヤ正宗の刀は他家の物に成まする。そこを存じて、拙者方へ申請れば、貴公なり手前なり、兩家に有も同然。御内談とは此義でござる」と、お爲ごかしに云廻す、心の内ぞ恐ろしゝ。行「コレハ〳〵日頃御懇意に致す間、躮めが不屆、御世話下さる段、コレ〳〵手を突てお禮申。千萬忝ふ存じます。扨々不屆な躮め。ヤモ此お世話御無用になさつて下され」与「ソリヤなぜでござる」行「右の刀は則私方へ請戻してござる」与「ムウスリヤ正宗の刀は請戻したとな、夫は重疊。シテ志津馬殿はな」行「勘當致した。若箇樣の義沙汰有て、萬一殿樣より御尋に預りし時、申譯ないと存るから、右の刀を請戻し、御沙汰なき中、躮めは勘當致した」与「ハテ氣の毒千萬。時に外にお頼申たいは、私未だ獨

後連ー後妻

心を云々ー心を置く（遠慮）にかく

り驚く奥方も、「お出」と計詞なく、入んとするを、澤「アヽコレ〳〵奥方、挨拶もなく御入なさるゝは、先生の御病氣、毎日お見舞も得申さぬ、其御立腹が有ての義か。拙者迚も病身故、お斷の願ひを立、御前勤もとくより引て罷有ば、御不沙汰の段は御免下され」柴「何の〳〵、親御又左衛門様から、御懇な間柄、其御挨拶に及ばぬ事」澤「成程成程、其懇意について、いつぞはお尋申さふと存じたが、其元様は先生の後連、先奥方の腹に出生の志津馬殿、今一人お谷殿と申姉御が有たが、何時比からやらとんと見請申さぬ。嫁入なされた沙汰もないが、やはりお屋敷にござるか」と、譯知ながら問かける、そこに心を奥方は、何と返答口籠る、一間の内より立出る和田行家、病氣ながらも尖き眼中、行「よくぞ〳〵澤井氏、心にかけられお見舞、過分々々」澤「イヤ先生、存じたよりは顔色も宜しく、珍重に存じます。扨今日參つたは、密々にお咄し申たき事有て。申奥方、ソレ冷るにお蒲團上られい」と、いふを立端に柴垣は、「娘共、燭臺持來いよ〳〵」と立て行。股五郎摺寄て、「お咄しと申は別義でござらぬ。兼て貴公の家と、手前とは一家同然、殊に拙者劒術のお世話に預りし先生、心腹を打割てお咄し合致す中、貴公様も御同然。そこを存じて、内分にて申上ふと存じ、參上致してござる」行「是は〳〵お互に、御懇意に

明暮—開けにかく
柴垣—行家の後妻
政右衛門—荒木又右衛門
殿—上杉顯定
願ひをさげ—辭職を願ふ
隔有—柴垣の縁語

たへの有のをば、土産に頼む」と打笑ふ。一間の襖明暮に、血を分し子と血を分ぬ、義理の葛にからまれて、柴垣一間を立出て、「何をざは〱婢共、掃除仕廻ば勝手へ行、お谷殿を是へ呼や。必々目立ぬ樣に」と有ければ、「ハイ」と、答へて婢共、皆々勝手へ入にけり。今日も又何と云寄方もなく、詫にお谷が綱切て、しほ〱として座に直る。柴「心からとは云ながら、我内ながら人目を忍び、夫に付添女の道、政右衛門事は、我夫のお氣にも入、天晴の達人なれば、今日や殿へ御目見へ願はん、翌や取次せん物と、思し召たも恩が仇、そなたが連て立退しは、不屆者と御勘當。自が身にも成てたも。世繼と定るあの志津馬、傾城狂ひに身を持崩し、萬一御沙汰有ては、と御前勤の願ひをさげしも、我子を思ふ夫のお情。世間の取沙汰口惜く、繼子繼母の隔有、柴垣とばし思やんな」と、夫に隨ふ貞女の道、云聞されて差うつむき、とかう詞もなかりしが、漸〱に顏を上、「何とぞ今一度、父上のお赦し有お詞を、お願ひなされて下さりませ」柴「ヲヽ、其事は氣遣ひ有な。一旦夫婦と成たれば、世間を守るが男の役。適の侍を、埋れ木となさん樣もなし、命にかへて願ふて見ん。先それ迄は自が部家へ行きや。早ふ〱」といふ折から、「澤井樣御出」と、知せと共に打通れば、隔たる柴垣お谷をば、ちらと見るより空嘯き、拘

夢にも云々ー夢にも知らずと白川夜船にかく

夫様を待して置て、あの様に寐てじやはいなア。こそぐりおこそ」と二人して、抱起してもとろ〳〵目。丹「コレ志津馬、正氣を付やれ勅使のお入じや」杢「イヤ猪口は嫌ひ、こつぶで致さふ」丹「エ、何いふても死人同然。一世の浮沈何とせん。家來共此女裏門から追かへせ」と、替上下の肩衣を、身に引かけて志津馬が代り、勅使を出迎ふ深切も、夢にも白川高鼾、松吹風も音添て、後の難義と和田の家、世の成行こそ 三重 定めなや。

第二 行家屋敷の段

春毎に、詠めは飽ぬ鎌倉山、仁義を守る武士も、旦に隠す桐が谷、和田行家が一構へ、書院先の遣水も、打手に靡く娌仲間、塵取役や掃除番、其役々を割付て、一つ所へ寄たかり、「何と玉木、どふ思やる。今鎌倉のお屋敷では、どの若旦那がよい男」玉「ア、コレおきや〳〵。迚も男を吟味しても、生物は入られぬ。乾物で仕廻ておきや。生物をたべ過すと、お谷様がよい手本、親の赦さぬ徒と、親殿様の御勘當、毎日々々、お詫言に御出なさるゝは、おいとしい事ではないか。追付お越なされたら、そなたの部屋に置まして置てたも。思はぬ咄しで隙入つた。必晩の宿下りに、假寐の床のふつてりと、握りご

澤井―さはにかけて多きことと
三月おどり―三ケ月毎に一ケ月多く利をとる
めれん―大醉をいふ
瀬川―せよにかく
掛作―かけるにかく
ぬけそ―逃げる
淵は瀬川―淵が瀬にかはるともの意
志津馬―沈むにかく
くだ枕―管をまくにかく

るな。身が一門は歴々。金銀澤井が呑込んだ」足「よござります。が申云ぬ事は聞へぬ。利銀は二割三月おどりでござります」と、欲の鷹股五郎に、詞番ふて立歸る。股「サアサア祝ふて是から祝言。天下晴ての志津馬が奥方。目出たい〳〵、打て置。しやん〳〵」調子に乗て最一つ大事か二つも三つもいつの間に、醉が廻つて役目の大事、忘れるめれんに「仕てやつた」と、笑壺に入たる股五郎、「仲人は醉の紛れ。積る咄しをゆるりと瀬川、暫く粋を通そふ」と、跡に難儀を掛作、廊下へぬけて行共しらず、志「股主々々どれへござつた。ぬけそとは手が惡い。人をころりと殺して置て、迯ふとは比怯者」瀬「エヽ、コレナ、此樣な嬉しい中に、殺すの死ぬのと氣にかゝる事計」志「そんならおれと祝言するが、そなたは眞實嬉しいか。と有ば我等も千萬祝著、此悦びに又一つ」瀬「アヽ申其樣に御酒上つたら、御用とやらの害になろ、もふ此盃は止にせふ」志「止にせふとは祝言がいやか。いやでなくばま一獻。たとへ知行召上られ、ふちは瀬川に成とても、二人手に手を引合ふて、どんな川へも志津馬は本望。もう主も親も入ぬ。殺せ〳〵」と醉狂も、物がいはするくだ枕、膝にたわいもなき折から、勅使のお入と、呼はる聲、聞とひとしく丹右衞門、志津馬はいかに、とかけ付れば、南無三寶、例の沈醉、「コレ志津馬殿〳〵」「コレイナ太

引當—抵當

きよじ—間違

白紙—知らずにかく

此瀬川と此通りに深ふ云替した中。所にさる大家から身請の相談。向ふは千兩二千兩惜まぬ家柄。欲に喰付親方が其方へやらふといふを、先約なれば志津馬が方へ、五百兩で身請さすると、此股五郎が突張て置たれど、今日翌日に迫つた日切。これ迄取かへも有上なれば、用立てくれまいか」定「ハイそりやはやあなた方のお賴、いかにもとサ申たけれど、部屋住の志津馬樣、慥な引當がなければ」股「ヲヽサ夫も思案仕て置た。和田の家の重寶、正宗の名作を質物に差入る。是程慥な抵當はない」志「イヤ〱コレ股五郎殿。其刀は先祖より傳はつて、常の差料には致さぬ重寶、質物に入る事は」股「ハテ扨悪い合點。其大切な刀じやによつて書入て、間に合すのさ。金さへ濟せばきよじはない。殊に此度武將の若君、御元服の御祝義、諸大名より名作の劒獻上有べき折から、正宗多き中にも、和田の正宗は勝れて無双の名作、殿より御所望有は必定。其時に無ければならぬ大事の刀。暫の用に立、其中には股五郎が工面して取返す。氣遣ひせずとサア志津馬、其趣一札書てお渡しなされ」と、色に付入正宗を、仕てやる心の劒とは、白紙取て認むる、若氣の思案ぞ是非もなき。定七證文懐中し、「そんなら金子調達致し、股樣方へ持參致さふ。質物は結構なれど、所詮此方の物にはならぬ。御返濟の違はぬ樣に」股「氣遣ひす

しげれ〳〵ー睦じく咄せ

合ふておる中。身共とは違ふて親持の身分、此間より御前勤に間がなふて、廓へ來ぬを女氣で、若や心替りかと案じるが可愛さに、手工合して今日の参會、よもや腹も立まいが。コレ太夫嬉しいか〳〵。遠慮なしに、しげれ〳〵」と、突やられてぴんとすね、「女中法度の此お假屋、追いなせとおつしやつたは、よく〳〵わたしがお嫌ひそふな」と、思はせぶりの雪の梅、解けぬしかけがそれしやなり。志「イヤサそふではなけれど、是は又きつい所へ連て來た。御門は誰が通したぞ」實「イヤ此實内奴でごはります」志「スリヤ御門を通したはおのれか、エヽ憎い奴。とはいふ物の、おれも顏が見たかつた」股「エヽとふから左樣碎ければよい。堅い顏が氣にくはぬ。家來共は散つて仕廻た。實内は志津馬の腰付、廓の供する粋奴。かふ寄た所は、とんと廓の座敷に成た。太夫主のお持せ是へ」「ナイ」と返事は奴の遣手、蒔繪の提重角樽は、股樣よりの御見舞、「吉彌煙草」「アイ」と跡引長烟管、包ほどいて取出す、襠姿立木の櫻、あたりまばゆく見へにける。「先一獻」と股五郎大盃引受て、「サア志津馬慮外申」志「イヤ今日は大禁酒じや」股「といふてあの君が顏見て、飲ずには居られまい。ちよつと一つは身の養生、呑ば甘露の菊の酒。其盃定七に差召され。大事ない一つ呑やれ。扨盃を差置て、お手前に頼事、別儀ではない。

如何樣―成程
つか／＼―刀のつかにかく
掛屋―金銀のかはせを取扱ふ者
政道―取締
段かづき―段染の被衣歟
しどもなく―だらしなく

て人を通すな。残らず往け」と追やれば、丹「ハア如何樣、金銀の事は內證、爰で中は不調法」志「アイヤ／＼契約の日が延引すれば、無理とは思はぬ。が此事は股五郎殿を賴で置た。一兩日猶豫を賴」と、咄し半へ大小も、金拵へのつか／＼と、入來る澤井股五郎、人を非に見るのさばり顏、股「ヤア定七、お手前が來た筋は、股五郎が呑込でおる。部屋住の志津馬殿、吉原通ひの內證金、今用立て置たれば、兼てお身が願ふておる、お國の掛屋に仕てやるさ。時に志津馬、賴が有。身が懇意にする町人の女房、今日勅使のお入を聞て、都人の裝束姿拜見させて下され、と據なく願ふに付、裏門からこつそりと、最前社內へ入て置た。爰は粹な貴殿なれば、大目に見てくれまいか、どうぢや／＼」志「ア、イヤ／＼、町人たる者殊に女。左樣の事を政道する志津馬が役目。外の者の見ぬ中に、一時も早く追歸されよ」股「ハテそふ堅ふいうた物じやないわい。コレ貴樣の好の女だわい。マアちよとよい女房見たがよい。器量はどてん天人姿、天降してお目にかけふ。爰じや／＼」と手招きに、下來る坂の段かづき、屋敷か町と三重の帶、堅ふ見せてもしどけなく、女「志津馬樣わしじやはいな」と、被を取ば松葉屋の、「ヤア瀨川じやないか」と志津馬が恟り、股「ナント股五郎は粹ではないか。何が一日逢ねば百日と、吸付

澤井股五郎—河合又五郎

な。貴殿の疵は御酒參ると、萬事を忘れさつしやる、色と酒をば敵とせよとは、賢者の禁しめ、常に此義をお忘れ有な」と、眞實あまる異見なり。志「ハア忝いおしめし。兼兼親共が申にも、劍術の高弟といひ、若けれ共實義有丹右衛門殿、兄弟同然に、萬端を相談致せ、と申付置れたれば、其元樣を兄と思ふて居まする」丹「イヤそふ請て下されば、拙者は何より甚祝著。弟子傍輩の事を申は如何なれども、氣の赦されぬ男は、澤井股五郎。彼が從弟城五郎は、鎌倉殿の昵近衆、直人を一家に持たと鼻にかけ、御前の勤も疎にして、晝夜遊所に入込由、必彼を友になされな。昨日は拙者が番、今日は非番なれ共、内證ながらも見廻りも致さふと存じて推參致した。勅使のお入に間も有まじ、別當へ參つて配膳の、勝手の案内見て參らふ。後刻〳〵」と別れ行。折柄うそ〳〵來かゝる町人、番人聲かけ、「ヤイ〳〵何處へ行。御假屋の前、すさりおらふ」と口々に、嚙付られて犬突這ひ、町「アヽイヤ、私は切通しの町人、本庄屋定七と申て、和田のお家へお出入の者、志津馬樣に用事有て」と、聞より志津馬、「苦しうない、是へ參れ」と傍近く、志「今日は勅使御入の社内故、一々人を改る。急用か、何事ぞ」庄「ハイ、イヤ別義でもござりませぬ、彼金子の義を」志「コリヤ〳〵。イヤサ家來共、其方共は南門へ參つ

伊賀越道中雙六

第壹　鶴が岡の段

大權聖者―聖德太子、此未來記の事太平記に詳なり

行家、志津馬―渡邊靱負と數馬

羽二重侍―物柔かなる武士

齒に絹著せず―憚らず心のありたけいふ

大權聖者の未來記に、書記したる四海の治亂、元弘の戰一統に、切鎭めたる足利氏、草も搖がぬ鎌倉山、頃は大永元年二月上旬、鶴が岡の奉幣に、勅使下著の知らせによつて、山内の執權上杉顯定、警衞の役目承、坂本に假屋をしつらい、一日がはりの家中の守護、和田行家が一子志津馬、威儀嚴重に守り居る。折節佐々木丹右衞門、非番の姿上取つて、下を憐む羽二重侍、假屋に來かゝり、「志津馬殿、當日のお役目御苦勞」と挨拶し、「別して今日は勅使御入の日なれば、取別て大切の御番、隨分麁末のない樣に。」と申も此丹右衞門、貴殿の親父行家殿に、劍術の門弟、是迄外の弟子よりも、格別に御差圖下されし師匠の御恩、山よりも高ければ、其御子息の志津馬殿、次第に立身も有樣と、神に心願を込奉り、祈る程の拙者が心底。日比から齒に絹著せず申を、必氣にはさへられ

惠得の姿―惠を得たる意なるべし

上の叡慮安らかに、猶奥深き玉だれや、中央の座には中臣の内大臣鎌足卿、同じく淡海義士の面々、玄上太郎利綱、一子三作諸共に、清凉殿に居並べば、鎌足の大臣は治國の褒祿沙汰有て、入鹿が妹橘姫、親兄にかへ忠義の貞節、豊代姫と名を改め、淡海が宿の妻と、我君の勅諚なり。又大判事清澄は、暫く敵の臣下となり、四海を治むる智謀の勞、詞にも述がたし。向後武官の司とし、三作を養子となし、志賀之助清次と名乘べし。かゝ其外に太宰の後室金輪五郎を始とし、各々大祿給はりて、主上を初め一座の勇み。かゝる所へ金輪五郎、殘黨を搦め取、凱歌を唱へ入來れば、故人となりし清舟雛鳥、兩人が追福に、妹脊の山とかはれ共、かはらぬ志賀の山櫻、供養絶せぬ花の塚、譽れを世々の香に匂ふ、折吉川波春の風、幣帛もて拂ふ國の富、市中屋敷と所せき、月の遠近松の半、二月の夕部暖かに、坂東南海穀、民は至善平かに、秋に米夏に麥、鱗迄も浮める形。千代の竝松洛陽に、文作青き若みどり、惠得の姿滿願の、神は伊勢又春日に八幡、三の惠みも鎭常、打ばはづさぬ陣太皷、久しき御代を祝しける。

重獸品—未詳

大内山—禁裡

て、岩石にあたらんとするより危き工。目に物見せてくれんづ」と、遥の樓より飛おりたり。玄上太郎、金輪五郎、双方より引包で切かくる。ちつ共怯まぬ勇猛力、弓手になぎ捨、馬手にかなぐり、追立々々追廻し、鎌足目がけ飛かゝる。騒ず神鏡手にさゝげ、入鹿が頭に指向給へば、鏡に寫る降魔の相、和光のきらめき眼も眩み、勢ひ絶へてたぢたぢ〱、透を窺ふ勇氣の兩人、腰の番をしつかと組。入「シヤ面倒な」と兩手に提げ、打付々々膝に引敷き動かせず。鎌足後につゝと寄、神通奇代の燒鎌に、水もたまらず搔き切たる、首は其儘虚空に上り、火焰をくわつと吐かけ〱、飛鳥の如く翔け廻る、一念の程ぞ恐ろしき。淡海きつと見、口に唱ふる重獸品、忽治る朝敵の、しけきが本を打拂ふ、鎌足の德釼の德、實譽有藤原氏、花の紐解橘姫、誠をてらす神鏡は、神のおかげの尊くも、謡 思へば伊勢とお三輪が菩提、賤の緒環繰言を、くり返したる言の葉を、末に傳へし物語り。

第五

逆徒凶賊直に退き、年盡新に春の空、都を江州志賀に移され、今ぞ長閑けき大内山、主

給へ」と心願し、ひらりと飛込む水煙、逆立浪に打立られ、遥に流れ〳〵くる、江戸枯枝に取付身は浮草、たゞよひながら間近く寄ば、金龍頭をふり返し、紅花の舌をひらひら〳〵、ひらめく背鱗を鳴らし、浪間を分れば續てわけ、潛ればくゞり沈めば沈み、命限りと追廻せば、又も虚空に立のぼる。此方も岸にかけ上れど、叶はぬ思ひ身をあせり、足も空なる雲行を、目充にこそは慕ひ行。次第に更る夜嵐に、つれて聞ゆる人馬の音、貝鐘太皷亂調に、打立〳〵鯨波の聲。官軍隨へ鎌足公、薄紫の狩衣に、肌は腹巻著込を著し、玄上太郎御供にて、優々然と入給へば、二人の敵を討とめて立出る淡海公、金輪五郎詞を揃へ、「我君御賢察の如く、入鹿が有様希代の此笛。併し十握の御劒の義は」鎌「ホヲ氣遣致すな、最早我手に入たるぞよ。其子細は兼てより、徒黨を集むるかたらい山、絕頂によぢ登れば、黒雲俄に覆ひかゝり、一つの金龍、我袖に落るやいなや、十握の御劒と顯はれます。今よりは彼山を龍岳と號くべし」と、仰も高き多武の峰、此大臣の靈嶺なり。玄上太郎すゝみ出、「ヤア〳〵入鹿、汝是迄朝恩厚く蒙りながら、王位を犯す天罰の、只今歸すると知らざるや。見參やつ」と呼はつたり。眠り臥たる兩眼を、くわつと見ひらきうなり聲、入「ヤア事々しや鎌足。我に刃向はんなんどとは、鶏卵をもつ

はる」と、彌藤次玄蕃、走かゝつて打かくる。淡「心得たり」と切結ぶ。姫は寶劒振袖に押隱す間も阿修羅の如く、樓門がけ懸來る入鹿、支隔つる官女共、はらり〳〵と投落し、飛かゝつて掻い掴む。遁れぬ所と橘姫、寶劒下へ投捨れば、取得る淡海支ゆる兩人、打合々々いどみ行。見るにハア〳〵、我が身も鷲に取れし雛鶴の、詮方涙震ひ聲、諸「ヲ、嘸お腹が立ませふ。其お怒をさせますも、皆自が徒から。赦して給はれ兄上」と、歎き詫るをはつたと蹴やり、入「ハ、、、鉛刀に等しきなまくら物。こと〴〵く敷籠置しは、劒を餌に天皇始、鎌足親子もおびき寄、皆殺にする此計略。誠の劒を安々と、きやつら如きに奪はれんや」橘「エ、スリヤ今の劒は僞りとな」入「ヲ、我滯せしこそ十握の劒」橘「扨は」と立寄肩先を、拔手も見せず丁ど切。折から吹出す笛の音に、聞入入鹿は醉るがごとく、勇氣碎けてかつぱと伏ば、不思議や劒は掌をはなれ、忽化したる龍の形、雲にうねり雨をそふて舞下り、松の梢をさら〳〵〳〵さつと飛入御溝の水、白浪さわぎどう〳〵と、ゆすりあふるゝ凄まじさ。橘姫は手疵も忘れ目戍り詰しが、「ヲ、夫よ、怪しと思ふ心より、龍共蛇共見ゆれ共、正しき十握の御劒ならずや。誠の悪龍成共、何か恐れん夫の爲、腮にかゝり死る共、厭はぬ〳〵。再びもとの寶劒と、顯はれ

追々―負ひにかく
荒しこ―雜兵
さすまた―さすまいにかく
折烏帽子―折を得るにかく

戀しく〳〵」といひ死に、思ひの玉の糸切し、緒環塚と今の世迄、鳴響たる横笛堂の、因縁かくと哀也。今國不便彌增に、せめて葬り得させんと、背にお三輪が亡骸を、追々馳來る荒しこ共、「曲者やらぬ」と取卷たり。見向もやらず悠々と、几帳の綾絹引ちぎり、死骸と倶に我五躰、くる〳〵しつかと引結び、「死人を取置我等こそ、先出來合の坊主役、十念授てこまそふにも、都度々々には邪魔らしや。一度にかためて授るが、うぬらが爲には百年め。いざ來いやつ」と力士立。アラシコ「ヤア廣言なる骨佛」と、前後双より十文字、鑓先揃へて突出す、ひらり早業、すつかり素鑓、ほぐれる片鎌踏落せば、後を把棒しつかと取、「しりへをねらふは不敵やつ、左樣に甘ふはさす」またも、引たくつて打折たり。「手取にせよ」と、咄と寄。當るを幸砂石の如くほり飛され、迯行く奴原余さじと、奥深くこそ 三重 行先の、御殿々々に銀燭を、挑ぐる戸張綾錦、紅葉の殿の御簾卷上、妹姫の今樣を、遊覽せんと入鹿大臣、「ヤア女原、そち達、姫が殿へ參、用意よくば始めよといひ來れよ。早ふ〳〵」といらだての、使重る樓に、橘姫は今宵こそ、よき折烏帽子水干の、衣紋もはでの 謡 舞の袖、檜垣の影より淡海公、弓矢つがふて忍び寄。目充は入鹿が胸先へ、羽響高く切て放す。苦もなく攔で大音聲、入「ヤア宿直はなきか早參れ」「承

薄くと—薄くと

を北の方とは」フカ「ホヽヲ其方が語らひ申せし方は、忝くも中臣の長男淡海公」みわ「ヱ
エ、シテ又私が死るのが、いとしいお方の手柄に成て、入鹿を亡す術とはへ」ソカ「ホヽヲ
其譯語らんよつく聞。彼が父たる蘇我の蝦夷、齢傾く比迄も、一子なきを憂へ、時の
博士に占はせ、白き牝鹿の生血を取母に與へし其驗、健成男子出生、鹿の生血胎内
に入を以て入鹿と號。去によつて、彼奴が心を鑠すには、爪黒の鹿の血汐と、疑著の相
有女の生血、是を混じて此笛に、注ぎかけて調る時は、實秋鹿の妻戀ごとく、自然と鹿
の性質顯れ、色音を感じて正體なし。其虚を計て寶劒を、過なく奪返さん、鎌足公の御
計略。物蔭より窺ひ見るに、疑著の相有汝なれば、不便ながら手にかけし」と、件の笛の
六穴に、たばしる血汐受注ぎ〳〵、「今こそ揃ふ此幻術。此笛こそは入鹿を挫ぐ火串なら
ん。ハヽヽ有難や」と押戴き、いさみ立たる其骨柄、げに藤原の御内にて、金輪五郎今
國と、鍛に鍛し忠臣也。みわ「なふ冥加なや勿躰なや。いか成縁で賤の女が、左樣したお
方と誓しでも、枕かはした身の果報。あなたのお爲に成事なら、死でも嬉しい忝い。と
はいふ者の今一度、どふぞお顔が拜たい。譬此世は緣薄くと、未來は添て給はれ」と、這
廻る手に緒環の、「此主樣には逢れぬか。どふぞ尋て求馬樣。もふ目が見へぬなつかしい。

ん〱、しやんと濟んだ」と打笑ひ、局々へ入跡は、前後正體泣倒れ、暫し消入居たりしが、みわ「ヱヽ胴欲じやわいの〱。男は取れ其上に、まだ此樣に恥かゝされ、何と堪へて居られふぞ。思へば〱難面男、憎いは此家の女めに、見かへられたが口惜い」と、袖も袂も喰裂々々、亂心の亂れ髮、口に喰しめ身を震はせ、「ヱヽ妬しや腹立や。儕おめ〱寐さそふか」と、姿心もあら〱しく、かけ行向ふに以前の使者、「ヲヽ其方も邪魔仕に出たのじやな。もふ斯う成たら誰出ても、構はぬ〱そこ退や」と、袖すり拔てかけ入裾、しつかと踏へ、フカ「コリヤ待女」みわ「イヤ待ぬ、爰放しや。放しや〱」と身をもがく。髻摑んで氷の刃、脇腹ぐつと差通せば、うんとのつけに倒れ伏す。刀突捨邊を窺ひ目を配る。奧は豊に音樂の、調子も秋の哀なる。お三輪はむつくと起返り、「扨は姫が云付じやな。ヱヽ慘たらしい。恨はこちから有物を、却てそちから殺さする、心は鬼か蛇かいやい。ヲヽ殺さば殺せ一念の、生かはり死かはり、付纒ふて此恨、晴さいで置こふか。思ひ知れや」と奧の方、睨詰たる眼尻も、叫ぶ聲音もうはがれて、さもいたはしき其有樣、じろりと見やり、フカ「女悦べ夫でこそ、天晴高家の北の方。命捨たる故により、汝が思ふ御方の手柄と成、入鹿を亡す術の一つ。ヲヽ出かしたなア」みわ「何と、賤しい此身

ほてつぱら迄云云―太つ腹迄よれるほど可笑しい

つしやりませ。山家育の藪鶯、ほう法華經も片言計、上り下りの仇口や、馬士の歌なら聞ても居よふ。もふ何事もお赦しなされ、サ早ふ其聟様に」官女「サア聟様が見たくば、早ふ謡や。馬士の歌なら面白からふ。次手に振も立て仕や。嫌ならこつちも成ませぬ。歸りや〱」と引出され、みわ「サア〱〱、何のいやと申ませふ」官女「サそんなら謡や」みわ「アイ〱謡ひまする」と泣く〱も、涙にしぼる振袖は、鞭よ手綱よ タヽヤ 立上り、歌「竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサ、とまらぬナ、色の道かいな。アアヨ。エヽ爰なほてつ腹め、と此様に申まする」と打伏せば、皆々一度に手を打て、官女「扨もきつい嗜事。よい慰で我々が、ほてつ腹迄よれました。馬士殿太義」と云捨て、行を驚き、みわ「コレ申、わたしも倶に」と取すがれど、ふり放されてはがはと轉け、寐ながら裾にしがみ付、引ずられて聲を上、「のふ皆様お情ない。どふぞ私も御一所に、連てござつて下さりませ。お慈悲〱」と手を合せ、拜み廻るを擲のけ、官女「ヲしつこ。辻も及ばぬ戀爭ひ、お姫様と張合ふとは、叶はぬ事じや置てたも。大膽女のしつけをせう」と、耳を引やら脇明より、手を指入てこそぐるやら、抓りつ叩いつ突倒し、「サア〱是で姫様の、悋氣の名代納まつた。彌めでたい御祝言、三國一じや。聟を取濟した。しや

紫のゆかり―紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る（伊勢物語）

はんなりと―手柔かに

參りました。何卒お前方のお心で、聟樣をちよつと拜まして貰ふたら、忝ふござりまする」といふ顏も、恨み色成紫の、ゆかりの女と早悟り、弄つてやろと、目引袖引、甲「マア〳〵其方は仕合な。斯ういふ折に參り合、お座敷拜むといふ事は、女の身では手柄者。したが此方等が呑込で、お座敷へは出す物の、何ぞさゝずば成まいに、何と皆樣、いつその事、此者に酌取そでは有まいか」乙「よからう〳〵」みわ「ア、申 其酌とやらは」申「ヲヲ何の又其方達が知てよい物か。今爰で敎てやろ。幸ひ爰に御酒宴の銚子島臺、有合の、聟君樣には紅葉の局、梅の局は嫁君役、殘りは介添待女郎」と、櫻の局が指圖して、いやがるお三輪に長柄の銚子、持せ持添、「マア 盃は三つ重、嫁君へ二度ついで、左へ二足。コレ立のじや。エヽ何じやいの、うか〳〵せずと能う覺や。三度目ついて聟君へ。コレ酒がこぼれるわいのふ、不調法な。是からが亂酒謠ひ物、是も嗜なければならぬ。サア四海浪なと謳やいの」みわ「エヽ」「エヽとは嫌か。そんなら聟樣拜ます事はマアならぬ。サ夫がいやなら早ふ謳や」とせつき立られ、みわ「是がマア何と、謠千秋萬歲の千箱の玉の」血の涙、聲詰らせてないじやくり、官女「ヲヽめでたう哀に出來ました。色直しにはんなりと、梅が枝でも蕗組でも、サア〳〵聞たい所望じや〳〵」みわ「エヽあられもない事お

けなり―羨ましい

いしこらしい―癪にさはる

あた滅相な―あたは罵聲

ぐつと押込、上から蒲團をかぶせかけ〳〵、アヽ〳〵背の中内證の御祝言が有筈と、暮ぬ内から騒でじや。エヽけなり、こちと迄、内太股がぶき〳〵と、卯月あたりの彈け豆、豆腐の御用が急ぐに」と、しやべり廻つて出て行。みわ「サア〳〵ひよんな事が出來て來た。ほんに〳〵、油斷も透も成こつちやない。大それた人の男を盜くさつて、何じやいしこらしい、内祝言じや。余りな踏付けやう。よい〳〵、其代り何處に居よふと尋出し、求馬樣と手を引て、是見よがしにいんで退るが腹いせじや」と、行んとせしが、「イヤ〳〵はしたない者じやと、ひよつと愛想を盡されたら。」と云て此儘に、見捨て是が如何往れふ。エヽ如何せうぞ」と心も空、登る階長廊下、行こふ女中見咎て、一人が留れば二人立、三人四人いつの間に、友呼千鳥むら〳〵と、爰かしこから寄たかり、女中「ついし見馴ぬ女子じやが、其方はマア誰じや、何者じや」みわ「ハイ〳〵、イヤ私は内方の、ヲヽ夫よ、さつきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから、久しう逢ぬなつかしさ、ちよつと見舞に寄ましたら、是はマア〳〵よう來た、上れ茶々呑、そふして烟草呑。アノお上にはあた滅相な、御祝言が有と、聞ば聞程涙がこぼれて、あたお目出度い事じやけな。ほんに内方の樣な能衆の御祝言は、どの樣な物じや。己やれ、拜んでなりと腹いよと、浮々爰迄

ぢん未來―盡未來にて永久

お淸所―貴人の膳部を取扱ひし所

奪ひお渡し申さん。笛や皷の音をしるべ、奥の亭迄お忍び有」送「然らば我は此所に、暮るをしばし待合さん、必首尾よふ」橘「合點でござんす。ガ若し見付られ殺されたら、是が此世のお顔の見納め、例へ死でも夫婦じやと、おつしやつて下さりませ」送「ヲ、運命拙く事顯はれ、其場で空しく成迚も、ぢん未來際かはらぬ夫婦」橘「エ、忝い嬉しや」と、抱きしめたる鴛鴦の、つがひし詞縁の綱、引わかれてぞ忍ばるゝ。迷ひはぐれしかた鶉、草の靡をしるべにて、いきせきお三輪は走入、みわ「エ、此緒環の糸めが、切くさつた計で、道からとんと見失なふた。さりながら、爰より外に家はなし、大方此内へはいつたに違ひはない。エ、誰ぞ來よかし問たや」と、見遣る先よりお下婢が、被眉深にしやな〳〵と、豆腐箱提げ歩來る。みわ「申々」と呼かくれば、チツト呑込早合點、下婢「ヲ、お清所尋るのなら、其處をこちらへ斯う廻つて、そつちやの方をあちらへ取、あちらの方をそちらへ取、右の方へ入つて、左の方を眞直に、脇目もふらず滅多やたらにずつと行きや」みわ「イヱ〳〵私が尋るのは、お清殿とやらではござんせぬ。年の頃は廿三四で、色白にくつきりとした、好い男は參りませなんだかへ」下婢「ヲ、〳〵來たげな〳〵。夫はお姫樣の戀男じやげなの。三輪の里から跡追て來た所を、何かお局達が引捕へ、有無をいはせず御寢所へ、

れ様。わたしらに御遠慮は、内々のお咄しなら、どりやお次へ」と立て行。姫はとかうの詞なく、差俯向いて思案の求馬、求「フン此御所の姫と有ば、聞に及ばず入鹿の妹橘殿」と、云れてはつと胸せまり、橘「入鹿が妹と知り給はゞ、よもお情は有まいと、隠し包し甲斐もなふ、御存有しお前こそ、藤原の淡海様」と、いふ口ちやくと袂に覆ひ、求「女なれど敵方に、我名を知れば一大事。不便なれ共助け難し」橘「成程お道理御尤。生て居る程思ひの種、お手にかゝるがせめての本望。かういふ内もお姿や、お顔を見れば輪廻が残る。サア／＼殺して下さんせ」と、刃を待たる覚悟の合掌。求「心底見えた。が誠夫婦と成たくば、一つの功を立られよ」橘「一つの功を立よとは」求「ヲヽ入鹿が盗み取たるこそ、三種の神器の其一つ、十握の御釼奪返して渡されなば、望の通二世の契約。得心なければ叶はぬ縁」橘「ナア是非もなや、悪人にもせよ兄上の、目を掠るは恩しらず。とあつてお望叶へねば、夫婦と思ふ義理立ず。恩にも戀はかへられず、戀にも恩は捨られぬ、二つの道にからまれし、此身はいか成報ひぞ」と、忍び歎ておはせしが、「ヲヽ左様じや、親にもせよ兄にもせよ、我戀人の爲といひ、第一は天子の爲。命に掛て仕課せませう」求「ヲヽ、出かされたり。シテ又知らせの相圖は何と」橘「今宵御遊の舞に事寄、寶釼

さはるかいな―觸るゝが最期
ぬた―肉を酢味噌であへる
矢襖―矢を射かくる用意と襖とかく
お拾ひ―おあるき
小打著―裝束の下に著る服
さゝがに―蜘蛛の枕言
滅多―むしやう

追取かこませ宮越玄蕃、「いかにしても心得ぬ頬魂。尋問べき子細の有ば、引立來よとの綸言成ぞ、早々參れ」フカ「ヲ呼にごんせいでも行のじや。假初にもびこ〳〵と、ちよつとでもさはるがいな、腰骨踏折り、疝氣の虫と生別れさすぞ。ヤコレ家來共さん、わり樣達も、其鳥威し放すが最期、取摑まへて首引拔、かたはしからぬたにするぞ。ヤどりやおれから先へ行やんしよ」と、事共思はぬ大膽者、胸の强弓矢襖を、引明てこそ入にける。半太夫されば戀する身ぞつらや、出るも入も忍ぶ草、露踏分て橘姬、すご〳〵歸る對の屋の、障子にばらり打礫。官女「ソリヤお歸りのしらせぞ」と、めい〳〵庭に集ひ下り、枝折開いて入參らせ、「おいとしや〳〵、御所のお庭の內さへも、ついにお拾ひなされぬに、戀なればこそ徒步跣、嘸朝露でお裾もぬれん。小打著に召せかへん」と立寄て、「ヤアお振袖に付て有、此紅の糸不審」と、手繰たぐればくる〳〵と、糸に寄身はさゝがにの、雲非の庭へ引れ來る、主は床しの、橘「ヤア求馬樣か。ハアはつ」と驚く姬よりも、騷ぎさゞめく局達、「扨も見事引寄た。七年物の戀人樣か、能うこそお入遊ばした。サア〳〵此方へ」と手を取ば、求「イヤ手前はつい道通り、此緒環を拾ひ上るやいな、滅多に引れ參つた者。何にも存ぜぬお赦し」と、出る向ふを立塞ぎ、官女「エヽ手の惡いなさ

て、「そふして下々は、皆其方の様な男かや。能男もたんと有であろ。地下の女子は羨しい、芝居は見次第、能男は持次第。ほんに又此御所女には何が成。見るも見るも冠裝束窮屈で、急な逢瀬の其場でも、衣紋の紐よ上帶よ、解かほどくか大抵では、下紐迄は手がとゞかず、つる其内には花に風、月に叢雲さはりが出來て、本意ない別れをするわいの」と、いふさへ顔に紅葉の局、「中將や少將あたりで戀すれば、あのおひかけが邪魔に成、尻目づかひは出來ぬ〳〵」櫻局「其上悋氣いさかひも、こつちからは檜扇で、擲けばあつちは笏でとめ、つゝぱりかへつていきつた計、いらふても見ぬ逆鉾の、雫情も受て見ず、しんき〳〵で暮そより、いつその事に玉の緒も、たえなばたえたがましであろ。もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」と鱶七に、ひしと二人は抱き付。悔りはいまう業にやし、フカ「エヽけたいなけん妻奴等、あつちへきり〳〵うせあがれ」と、權もほろゝに云ちらされ、官女「さつてもすげない戀しらず、玉の盃底ぬけ男、不骨者よ」と不興して、本意なく奥へ入にけり。四邊見廻し長柄の酒、庭の千草にざら〳〵と、灌ぎかくれば忽に、葉立變じて枯萎む。フカ「ハヽフヽフヽヽヽ、最前の鑓といひ、又候や此壽酒。ハレヤレきつい用心」と、猶打見やる庭先へ、弓と矢つがひ、はら〳〵〳〵、

紅葉の局―赤くするにかく
おひかけ―緌
玉の緒云々―玉の緒よ絶えなばたえね云々の歌をとる
誘ふ水云々―小野小町の誘ふ水あらばいなんとぞ思ふの歌をとる
はいまう―閉口
玉の盃云々―色好まざらん男はいとさう〴〵しく玉の巵當なき心地云々（徒然

ご達—婦人達

つく〴〵—衝きにかく

けふな—希有にて一種かはつた

文七八藏—役者の名

レおれを質に取しやると、著物や道具と違ふて、代物が飯喰ふぞや。併あの業腹では、大抵で喰しおるまい。ヲヽ空腹に今の酒でよつ程醉が來たわい。ドリヤ何處でなと、一寐入りやつてこまそ」と伸上り、「エヽ腰が重い筈よ此大小、らつしもない物さゝしておこして、あた面倒な」と椽板へ、ぐわたりと鳴は相圖かと、突出す鎗は篠薄、構はず轉り臂枕、不敵なりける男なり。御所より外へ咲出ぬ、若きご達が入かはり、男見に來る愛想には、お茶よお菓子よ烟草盆、銚子土器持て出、官女「コレそな人は何御用で、お召寄有しはしらねど、嘸待久しう氣もつきやう。九獻一つ」とさし置ば、體寐返り腹這に、頰杖つく〴〵打眺め、フカ「フン貴樣達は誰じや」官女「ヲヽ我々は上樣の、身近く召るゝ女共」フカ「何じや、短い女子じや、ドレ〳〵。成程どれも是も能煮込だ者じや。わいらは爰な食焚じやな、テモけふな前垂してゐるな」官女「エヽつがもないいざればみ事。わしらを問やる其方の名は」フカ「ヲヽ鱶」官女「何鱶とは」フカ「ハテ商質の夜網に出りや、沖でも磯でも行當りに、よふ寐る故に、鱶七といふ漁師々々」官女「ヤア料紙とは、何ぞ書てたもるのか。夫ならば、必繪や歌はいやじやぞや。今難波津で持囃す、歌舞伎芝居の其中でも、よう聞及んだ文七や八藏の紋ならば、書て欲い」としどもなき。櫻の局、摺り寄

手を入し―手に入しか

だゝけ―ふざけ

知た同士云々―諺にて互に心の合うた友は心地よしと也

つ。桃に百の縁をかたどり、百敷百官を手を入し入鹿を、盗人なりといわぬ計の底工。憎くい奴」と居尺高。フカ「イヤ〳〵、そりや無理じや〳〵」入「ヤア〳〵蛆虫め、何を知て小癪奴」フカ「イヤ何にも知らんけど、代りに成て來たおれじやによつて、一番いふのじや」入「ヲヽ鎌足が代りならば、是をも代りに試みよ」と、傍なる島臺追取て、眉間へはつしと打付る。臺は微塵に飛散れど、恂共動かず、フカ「アヽよい加減にだゝけさしやれ。其厄拂ひの代物、東方さつとやらに譬たといふて、業わかすのか。年にあやからんせとこそ書ておこさしやつたれ、盗人と書ちやないぞや。それに其方から、色々な講釋を付て盗人穿鑿。知た同士はすゞしいとやらで、盗人の覺へが有かして今の投打。アヽこなんは正直な人さんじや、と世間の噂。見ると聞とで大きな違ひ。マアそんな盗人と鎌どんを、懇にはおれがさすまいわいの。仁體にも似合ぬ事さんすの。よもや左様じや有まいかの。但覺へがごんすか。イヤ左様かいの」と、文盲だらけも理屈は理屈、「如何でごはる」と、やり込れば、邪智の入鹿苦笑ひ、「ハテ口がこしく言曲しな。ういやつ出かした。其褒美には、鎌足が實否を正す迄、己は人質、最早籠中の鳥同然、歸る事はならぬと思へ。ヤアヽ玄蕃、彌藤次、いざ萩殿にて天盃を廻らさん。來れやつ」と引連て、帳臺深く入にけり。フカ「アヽコレコ

ひよんな—とんでもない

東方朔—漢武帝に仕へて寵あり西王母の桃を盜みて食ひ長命せしといひ傳ふ

はないかへ。そんなら赦さんせ、直やりじや」と、云つゝ徳利の口から口、「ヲヽよい酒じやになあ。是を呑ぬといふ事が有かしらぬ」と、振つて見て、「ヤアヽ南無三、皆飲でしもた。エヽひよんな事してのけた。ヤコレひよつと鎌殿に逢んしよと儘、おれが呑だと云ずに、よふ届いたと禮いふて下んせや」と、我武者な樣でも正直者、眞面目に成て氣の毒顏。「アヽまだ何やら言傳つて來たが、落しはせぬか」と、懷探し、「ヲツト有は、サア是見やんせ」と一通を渡せば、彌藤次押披き、「ナニ〳〵我不肖たるによつて、暫く心を惑はすといへ共、今一天四海、御手の內に落入事、正しく天の讓り給ふ萬乘の御位。入鹿公に背くは、天に背くに同じと、先非を悔て、爰に降參を乞者なり。今より臣下に屬するの印、君の齡を東方朔にたとへ、此桃花酒を以て御壽を祝し奉る。內大臣藤原の鎌足、謹で申」と讀上る。入「ハヽヽヽなまくら者の鎌足め、臣下とならんなんどとは、イヤしら〴〵しき僞り奴」フカ「何じや、鎌殿を嘘つきとは、何ぞ慥な證據がごんすか」入「ヤア小ざかしき證據呼はり。彼が心腹いふて聞そふ」フカ「ドレ聞ませうか」入「先此入鹿を、東方朔に譬たるが野心の證跡」フカ「そりや又なじよに」入「ヲヽ昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度實を作る桃を、三度盜で喰ひし故、九千年の齡を有

鎌きり云々—鎌足の大臣のなまり
首陽山—伯夷叔齊の籠りし山
普天の云々—普天之下莫非王土率土之濱莫非王臣（詩經）
こなん—お前さん
くれてゝ—くれというて
きす—酒
まはすは—氣をまはすは

てごんしたお公家殿、鎌きりの大身から、雇はれて來た使でごんす」と、いふを遙に見おろす入鹿、「ハテ心得ぬ。其鎌足めは首陽山の昔を學び、跡を隱せしと聞しに、扨は難波の浦に有けるよな。普天の下、率土の濱、王地にあらざる所なければ、今日迄飢にも臨まず、健固におりしは我惠ならずや。夫を思はゞ疾にも參り、恩を謝すべきの所、使を立しは緩怠なり」フカ「エヽ夫、おれが知た事かいの。斯う見た所が、餘つ程短氣者じやわいの。併喧嘩はこなんの樣にこつきで行のが德じや。鎌殿も一旦は言かゝつて、てつぱつて見よふと思はれたそふなが叶はぬやら、どふぞおれに往て挨拶してくれてよ、夫は夫はきつい弱りいの。大概な事なら、最ふ了簡してやらんせ。懇な中は得て心安立て、間違が有物じやてのふ。コレ中直りの印じやてゝ、きす一升おこされた」と、刀の提緒にぶら〳〵と、結びし德利急度目を付、入「いまだ日本へ渡らぬ兵器、唐土に有と聞飛道具の類成か。何にもせよ、怪しき物を所持せしぞよ。旁々油斷致すな」と、眉を顰て身構へたり。「エヽとつけもない。とつくりと見やんせ。酒じや〳〵。コレ其處なお手代衆、早ふコレ、夫進ぜさんせ」玄「イヽヤ善惡しれざる鎌足より差上し酒ならば、毒藥仕込あらんもしれず。奉る事罷ならぬ」フカ「エヽまはすは〳〵。どれおれが毒味してやろ。茶碗

天上人—殿上人
入鹿—入るにかく
追蹤—追從
寛樂—歡樂
とつてう聲—とんきやう聲

せて見れば、一萬二千の齡を君に、讓り壽く蓬萊山。扨又次の島臺は、周の帝の妾、假の情の弟草、實寵愛の色菊や、葉每を染し其筆の、命毛長き八百歲、老せぬやく藥の名をも菊の酒、酌め共盡ぬ泉の壺、「天上人の方々より、御祝儀なり」と相述ぶる。一入興に入鹿が悦び、「ヲヽ、百司百官より、下萬民に至る迄、我在位長かれと願ふ事、名名が身の冥加なれば、猶萬歲を唱へよ」と、高慢我慢の詔。はつと兩人階下に平伏、玄「我は申に及ばず民百姓も、野に手を打て舞樂しむ」彌「誠に戸ざさぬ御代と申は、今此時に候」と、滅多に追蹤猩々の、人形に見惚れ官女達、甲「コレく此猩々が手に持た、酌盃も取はづし、壺には誠の造酒を湛へて、是で御酒宴始めふか」乙「いか樣それは能御慰み、サアく早ふ」と取々に、手まづ遮る盃の、廻れやく萬代も、盡きじ盡きせぬ寛樂の、興を催す三重其所へ、「物もふ賴みませう」と、とつてう聲、撥鬢頭の大男、御殿間近くほつかくくく、著たる木綿の長上下、糊しやきばつて立跨かり、「エヽ入鹿殿は爰じやな。内にならば逢して下んせ」と、木で鼻こくるむくつけ詞。宮越、荒卷、目に角立、「ヤア何奴なれば、君の御前共憚らぬ馬鹿者め。退去りおらふ」ときめ付る。「イヤおりや、灘波の浦のふか七といふ網引でごんすが、何時やらから此方の方へ、宿替し

くずな―ふるなの辯のもじり

烏甲―衆人の被る物、とるにかく

繧繝―疊のへりの模樣

「ホイ當卦本卦」「ヤ手の筋」「ヤ男女相性」「ヤ墨色の考」「コレ〳〵失物待人」「コレコレ〳〵書判の善惡」「アヽコレ〳〵、そりや山御殿ではなふて、山伏じやぞや」「サア王樣も此山でねやしやるによつて山伏じや」「エヽ人を嘲哢するかな」「イヤ長老とは坊主の事か」「イヽヤ女子の事じや」「そりや女郎じや」「イヤ如露とは花に水かける物じや」「エヽどふ云やこふいふと、なんぼ貴樣がくずなの辯でも、おれにや叶はぬ」「ヤイふるなの辯じや、くずなとは魚じやはやい」「イヤくずなじや」「イヤ〳〵ふるなじや」「くずなじや」「ふるなじや〳〵〳〵〳〵」玄「ヤイ〳〵騷しいそりや何事。清め仕廻はど早く下れ。皆行々」と追立てやり、「アレお聞有彌藤次殿。我君此殿へ御移りと見へ、物の音近く聞へ申」彌「いか樣左樣」と威儀つくろひ、嚴重にこそ扣へ居る。花にくらし月に明し、酒池の遊びに醉つかれ、御殿々々の通ひ路も、數多の官女が道樂に、君の機嫌を烏甲、調ぶる笛や、簫篳篥、太鼓の音も鷄德に、己が不德を押登る、繧繝の深緣、蜀錦の褥の上に、むんづと座せし有樣は、實類なき榮華の殿。玄蕃彌藤次頭をさげ、彌「先達て卿上雲客達より、君の壽を祝し申されし數の島臺、ソレ女中方、叡覽に備へられよ」女中「アツ」ト答て持出る、思ひ〳〵の餝物、何がな君が壽を、祝ふ鶴龜松竹の、影は千尋の深緣、松と鶴龜合

榮ゆる云〻―是より話が入鹿の御殿に移れり

若草山葛籠山―三笠山に同じ

うらやさん―賣卜者にかく

鐘の音に驚く姫、歸る所は何國ぞと、求馬が氣轉振袖の、はしにぬふて取かはす、緣の緒環いとしさの、あまりて三輪も悋氣の針、男の裾に付る共、しらず印の糸筋を、したひ慕ふて　三重　榮る花も時し有ば、すがり嵐の有ぞとは、いさ白雲の御座、新に造る玉殿は、彼唐國の阿房殿、爰に移して三笠山、月も入鹿が威光には、覆はれますぞ是非なけれ。腋門の方より宮越玄蕃、荒卷彌藤次、御前よき儘高ふ吹、帆かけ烏帽子も十分に、仰反り返り入來り、彌「ホウ仕丁共朝淸な。イヤなに玄蕃殿、此度新に築かれたる此山御殿、朝日にかゞやく所は、吉野龍田の花紅葉、一度に見る共及びますまい」玄「ナニサナニサ、イヤモ言語に述がたき御物好。瑪瑙の梁珊瑚の柱、水晶の御簾瑠璃の障子。コレ見られよ、飛石は琥珀、砂は金銀、又釣殿に登り見おろせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山、葛籠山は撒石同然、猿澤の池は、お庭の井戸に見へまする」と、咄の尾に付く仕丁共、「アヽ結構な御普請でござります。そふして何やらふつ〳〵と、能匂ひが致します」仕「ヲヽ其筈、椽板檻に至る迄、皆伽羅と沉」仕「シタリ抹香や鉋屑とは違ふた物じや。のふ又次」又「サイ、又お學問所は唐を寫して唐木じやげなの」仕「ハアン其唐木とは何〻ぞ」又「ヲヽ先花輪」「フン紫檀」「フン黑檀」「ホイ鐵刀木」「ホイうらやさん」

垂乳根―父母

色は似たり―似たりや〳〵杜若の諺を取る

御しゅでん―御殿女中

奈良坂や云々―奈良坂やこの手柏の二面とにもかくにもねぢけ人の友（萬葉集）

三笠―見ゆるにかく

霜と、消ても何の厭やせぬ。是程思ふに胴欲な、とけぬお前のお心は、あんまり結ぶの神様を、祈過した咎かや。つれなの君や」と恨わび、思ひ亂るゝ薄かげ。夫とお三輪は走り寄、中を隔てて立柳、立退袂引とゞめ、「エヽ聞へませぬ求馬様。ソリャ氣の多い悪性な。そもや二人が馴初は、始て三輪の過し夜に、葉越の月の俤は、お公家様やら、侍様やら、知れぬなりふりすつきりと、水際の立好い男、外の女子は禁制と、しめてかためし肌と肌。主有人をば大膽な、断なしに惚るとは、どんな本にもありやせまい。女庭訓躾方。よふ見やしやんせ。エたしなみなされ女中様」姫「イヤそもじとて垂乳根の、ゆるせし中でもないからは、戀は仕勝よ我殿御」みわ「イヽヤわたしが」姫「イヤわしが」と、倶にすがりつ手を取て、三人歌「園に色よく咲草時は、男女になぞらへ云はゞ、云れふ物か夕顔の、梅は武士、櫻は公家よ、山吹は傾城、杜若は女房よ。色は似たりや菖蒲か姿、牡丹は奥方よ、桐は御しゅでん、姫百合は娘盛と撫子の、ナルゾエ〳〵、なるとならずと奈良坂や、此手柏の二人の女、睨めば睨む荻と萩、中にもまるゝ男郎花、放ちはやらじと縋り付、こなたが引ば、あなたがとゞめ、戀の柵蔦蔓、付まとはれてくる〳〵〳〵、廻るや三つの小車の、花より白む横雲の、たなびき渡り有々と、三笠の山も程近く、鳴

連理―比翼連理と連理の枝

ほその―細しと細野

布留―降るにかく

塒―共寐

おもはゆ振―恥かしき素振

袖几帳―袖にて顏かくす

節成―切なる

恥かしのもり―羽師の森にかく

ば、ナコレのんやほんにさ、背門の柹の木の、枝こへて、連理をちぎる言の葉は、それも戀中爰はまた、箸中村よ一森の、長者が跡と名にひゞく、釜が口をも出離れて、歩むに暗き吳竹の、茂れる中を冷泉分行けば、葉毎の露がほろ〳〵と、ほろゝ打なる雉子の聲、思ひ比べていとゞ猶、心ほそのに立つくす、憎や、案山子に威さるゝ、われが姿に又怯ぢて、はつと立行羽風につれて、ちり〳〵ちるや柳本、流るゝ水に裾ぬれて、物思へとや帶とけの、里羨し自は、終に一度の情さへ、ないて身を知る涙雨、タヽキ布留の社の御燈の影か、松の木の間にちら〳〵と、見へつ隱れつ歸るさの、跡を求馬が慕ひ來て、互にはたと行合の、星の光に顏と顏。橘「ヤア戀人か何故に、爰迄跡を追鳥は、もしや塒の契をも、かなへてやろとのお心か」と、胸にはいへど詞には、おもはゆ振の袖几帳。求「成程節成心ざし、仇に思はじ去ながら、左程こがるゝ戀路にて、晝をば何と鳥羽玉の、夜計なる通ひ路は、いとふしんなり名所を、聞たる上はこなたより、二世の堅めは願ふ事、明させ給へ」と只管に、とはれて橘「實にも恥しの、もりてあまれる浮身の上、語るにつらき葛城の、峰の白雲有ぞ共、さだかならざる賤の女と、思ふて深い疑ひの、雲をはらして自が、思ひもはらして給はらば、どんな仰も背くまい。橘「草葉の露

と、手を引立立出れば、「イヤ放さじ」とお三輪もまた、あなたへ引ばこなたへ引、譯も渚に戯れる雁、翅振袖ふり分け姿、戀を諍ふ其折から、いきせき戻るこの家の母、「ヤア求馬殿、こな樣には用が有。何處へも遣る事ならぬ、動くまいぞ」と身構へに、何かは知らず白絹の、姫は外へと出行くを、とめる求馬に叉すがる、娘を押分け母親は、「求馬やらじ」と引とゞめ、繋ぐ手と手を柵の、風に揉るゝ爭ひに、子太郎立出見まはして、これ幸と母親の、帶に慥り括つたる、繩先を樋の呑口に、結付納戸へ迯て入。此方に互ひに戀慕ひ、姿亂るゝ姫百合の、手を振りきれば一時に、亂れて走るを母親が、遣らじと追ば繋ぎ繩、りきむ拍子に呑口拔け、洒は瀧津瀬淵りはいもう、三人門へ遅れじと、同じ思ひを跡や先、道をしたふて　三重

道行戀のおだまき

表具　岩戸隱れし神樣は、誰と寢して常闇の、夜々毎に通ひては、又歸るさの道もせ氣もせ、夫も何故戀故に、窶るゝ所體恥しと、俤隱す薄衣に、包めど香り橘姫、思はぬ人を思ひ佗、心のたけをくどけ共、つれなき松の下紅葉、焦れて絕ん玉の緒も、殿故ならば捨草も、暫しはいこふ芝村の、賤の男が歌道手拭で、忍び〳〵の出逢妻、晩にござら

うぢつく—躊躇する
ひつこなす—さげしむ
はしたない—不躾

がき願ひの糸、夫婦の約束星合に、鵲ならぬ小手巻を、千代の媒取かはし、肌に付合ふわりなきゐにし。求馬が内より以前の女、歩み出てこなたの門口、橘「隣の烏帽子折様は、こなたへ來てござるかな。赦さつしやれ」と内へ入、姿に求馬は手持不沙汰。お三輪は何の氣も付ず、三輪「アヽ彼方が今のお人かへ」求「チイノ、あれ〳〵神子様じや。それで薄衣著てござる。ナア申、お前様は、アノお連合様の、烏帽子を誂にお出なされましたのじやナア。そうでござりませふがな。サヽヽそふでござります」と紛らかす、包む詞の絹を漏る、月の笑顔をぴんとすね、橘「コレ申 求馬様、アノ女中はお下婢か何人でござります」求「アイヤ是は此酒屋の娘御」橘「ムヽ其マア隣の娘御と、最前から久しい間、何の用がござりました」と、問れて求馬は答へもなく、うぢつく素振見て取お三輪、「アヽ申、コレ神子様とやらいふ女中様。人をマアお下婢かの何のと、ひつこなした物の云様、求馬様にはアイ、わたしが用がたあんとござんす。お前のお世話には成まいし、構ふて下さんすな」橘「ヲヽ是ははしたない。其様に云はしやつても、そもじなどの用を聞、求馬様じやないわいのふ。サアお歸り」と手を取ば、お三輪が隔てて。「イエ〳〵、わたしがまだ用が有。往なす事は成ませぬ」橘「イヽヤ爰には置はせぬ。邪魔せずとそこ通しや」

和歌三神―住吉社、玉津島社、柿本人麿

乞巧針―女の手工の巧ならん事を七夕の星に願ふ、其儀式を乞巧奠といふ

が中、逢事さへもたま〱に、千年も萬年も、かはらぬ契りとおつしやつた、その約束は僞りか。浮世の譯も辨へぬ、在所育ちのわたしでも、いひかはした事忘れはせぬ。あんまりむごい」と取付て、涙先き立つ恨言。求「是は思ひも寄ぬ疑ひ。成程女中は來て居るが、あれはソレ春日の神子殿、其連合の禰宜殿の、烏帽子を誂へに見へたのじや。美女はおろか、いかな天女が影向有ても、外へ散る心はない。和歌三神を誓にかけ、いつはりは申さぬ」と、時の間に合落付せば、さすがおぼこの解やすく、みわ「神樣迄誓言に。夫でわたしも落付た。必變つて下さんすな」と、立上つて七夕に、供へ祭りし二つの小手卷、持出て前に置、「わたしが寺屋へ往た時に、お師匠樣に聞て置た。殿御の心の變らぬ樣に、星樣を祈るには、白い糸赤い糸、小手卷に針を付、結び合せて祭るとやら」求「ヲヽ夫が則、願ひの糸の乞巧針」みわ「ムヽ、お前も能ふ知てじやナア。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それでわたしも此願籠、寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌、アヽ何とやら、ヲヽそれよ。戀渡る思ひは千々に結ぼれて、幾夜願ひの糸の小手卷」求「ホヽ其男の返しには、逢見ての後も願ひの糸筋を、よそへ亂すな君が小手卷」みわ「アイ〱そふでござんした。いつ迄もかはらぬしるし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち」契りもな

つきほなく／＼手持無沙汰

夫からおれがじつとして聞て居たら、ソレこちへ雇ふ男共が、朝の間に酒桶洗ふ様に、シイ／＼といふ音がした。どふでもありや求馬様が、竹篰でこすると見へるわいな。ナントお三輪様、コリヤだまつて居られまいがナ」みわ「ム、そんなら何といやる。求馬様の所へ。美しい女中様が見へて、其女中様を連立て、はいらしやんしたと云やるのか」子「アイ」みわ「そりやマア合點のいかぬ事。幸かゝ様も留守なれば、其方往て求馬様を、爰へ連て戻つてたも」子「チツト合點、一呑込だ」と、走り出て隣の門、破る計に打たゝき、子「コレ求馬様、隣の酒屋から使に來た。今のが濟だら印判持てござんせ」と、口から出次第。求馬は恂り、「何やらん」と立出れば、物をもいわず、子「マア／＼此方へ」と無理やりに、手を引連て我家の内。夫と見るより娘のお三輪、口にいはねど赤らむ顔、「求馬様お歸りなされたか」求「ホ是は／＼お三輪様、寺屋へお出なさつたげな」と、互に味な鬮付を、子太郎がひつ取て、「サアおれが役はもふ是迄。そこへ何かの立引さんせ。爰らで我ら粋を通し、夜食の扶持に有つかふ。兩人共後に逢ふ」と、納戸へ走入にける。跡に二人はつきほなく、おぼ子育の娘氣に、思ひ詰たる一筋を、いわふとすれば胸せまり、みわ「今子太郎に聞たれば、美しい女中様が、宵からお前へ來てじやげな。定めてそれは隠し妻、是迄お前とわたし

げん妻—女房を罵つていふ詞

き、面を隠す絹かづき、誰白絹の優姿、窺ふ内に隣の軒、知らせのしはぶき主の求馬、「今宵はどふして早かりし。サア／＼此方へ」と其跡は、いはず語らず手を取て、戸口立寄入跡に、子太郎は不審顔、隣の門口耳をあて、聞済して立戻り、子「なんでも隣の烏帽子奴は、おれとは違ふて、よつ程えらい色事仕じやわい。彼奴が見事な烏帽子で、アノ代物占めおると聞へた。こちのお娘に聞せたら、大抵の事じや有まい。エヽはし早い奴では有」と、呟く所へ娘のお三輪、寺子屋戻り足早に、門口這入れば、子「ヤお三輪様戻らんしたか。サア／＼事じや／＼／＼大事じや／＼」みわ「ヲヽ彼人はいの、何じやいの、私に恂りさしやつたわいの」子「さしやつたわいの、さしやつたわいの所かいの。コレお前に忠義をいふて聞す」みわ「忠義とは何の事じやいの」子「エヽ忠義とは忠臣の事じやわいの」みわ「サ其忠臣は知て居るがの。夫がどふぞしたかや」子「サ其忠臣はの、アノ隣の烏帽子奴がな」みわ「隣の烏帽子とは、ム、求馬様の事かいの」子「ヲヽ求馬々々、其求馬の姿からおこつた事。こちの内儀様は、家主殿へ用が有て、いかしやつた其跡へ、何じやかしらぬが、眞白な絹をかつぎ、幽靈かと思ふたら美しいげん妻が、隣の門口こと／＼と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て、よう早う來たナア、と手に手を取て内へはいつた。

とほん―ぼんやり

酒買が云々―酒買と盜人と取違へていふ

ツトサ。是程いふても聞入にや、家明付るが合點か」土「チヽサテ合點じや。是を來て見よかしのへ、お家主渡した」と、踊拍子の醉機嫌、夢中に成て立歸る。家主跡にとほんと成、「アヽやくたいもないやつら、とう〳〵おれ迄夢中にした。婆樣内にか、逢たい」と、いふ聲聞て納戸より、「ヲヽ是はマアお家主樣か。ヤイ子太郎め、あなたがお出なされたら、何故おれに知らせおらぬ」子「ナアニ云わんすやら、あのお家主樣も、いんま迄同じ樣に踊つてど有た物」婆「又つけ〳〵と何云おる。サア〳〵申、なんぞ御用でござりますか」もぎ「チヽ用共〳〵大事の用。去お侍から賴れたが、入鹿樣の云付で、ソレ鎌足といふ和郎の息子の淡海、方々流浪して居るげな、夫を見付出したら大金。何でもマア此方へござれ、とつくりといふて聞そ。サアちやつと〳〵」婆「ハイ〳〵〳〵、そしたらお前へ參りましよ。ヤイ〳〵子太郎よ、サア闇がしう成て來た。もふ日が暮たそふな、火も消して見世明い。用心に氣を付い。又此娘は寺屋から戻りが遲い。ソレ酒買が來たら擲出せ、盜人が來たら酒はかつてやりおれ」と、氣の急く儘に間違ひだらけ、打連てこそ出て行。口と倶に營む樣も入相の、四方の市庫戸鎖し時、子太郎跡を打見やり、灯を上、表の戸、夜の構のそこ爰と、こなたの道より步よる、振の袖の香やごとな

いざこざ—苦情
柳さび—烏帽子の皺の名
いつきせき—慌てかへる
そでにして—のけものにして

ざこざはないわいの。此土左衛門が呑込だく」求「然らば貴下様がお執成で、个様に御教訓なされた上は、其いざこざとやら申、御遺恨はござりませぬか」土「サアもふよい、云んすな。扨おいらは余程酔て居る、是からは嘉例の騒じや。調子が合いで面白ない。此石できゆつとやらんせ」求「ハヽ、忝ふはござりますが、私一滴も給ませぬ」土「チットそしたら勝手次第。サア是からが騒の趣向。此土左衛門に烏帽子屋殿、五洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大踊、三味線太鼓は野平藤六、よいかく。求馬様も合點か」求「スリヤ 私にも其踊を」子「チイノこな様は此借屋での新面、猶踊らにやならぬわい。音頭もおれが二役じや。　音頭ヤア千代の始めの一踊、先は松坂こへたゑ、松坂こへたやつさ。踊はありやく ハツハヨイヤサ。烏帽子屋殿はもじくと、手持不沙汰に揉烏帽子。ヤットサ。爰の娘の柳さび、引立烏帽子と折かけた。ヤットサ。風折烏帽子見すまして、帆懸烏帽子と歸らるゝ。ヤットサ」家主もぎ兵衛いつきせき、「いかに嘉例の祝ひでも、あんまり騒ぎがかさ高な」と、門口から聲高に、音頭喚いてはいれど、いかな耶、耳へも入ず、ヤットサ、ソレヤットサ。もぎ兵衛叶はず、ともくに、呵る詞も拍子づき、「ヤットサ。此家主をそでにして、酒を呑共云わばこそ、ヤットサ。　儕等計 呑喰ひ、近所を構はぬ大騷ぎ。ヤ

なめた奴―無禮なやつ

とりなり―風姿

合ず、あんまりなめた奴じやないか。野平何と思やるぞ」野「ソレ〳〵なまじらけた顏付で、馬鹿慇懃な生れ付、平生ぬかす挨拶も、子細らしき切口上、毛唐人のやうな奴。大かたソレ今時花る、早學文といふ本を見て、唐の箝め句をしをるのじや。此井戸がへに出合ぬからは、急度物いひ付てやろ」と、借屋の内の神樣達、御詫宣も取々に、夫共しらずのつし〳〵、歸る隣の烏帽子折、辛き世渡り甘口に、羊羹色の黑小袖、一腰指したとりなりに、浪人とこそしられける。門口より腰かゞめ、「隣家におります其原求馬でござります。お屋敷方の用事に付、未明より罷出、只今歸宿仕る。後室樣には、彌々御機嫌うるはしうござりませふ。後刻緩りと御意得ませふ」と、我家へ入を惣々が、「アヽこれ〳〵、マア待んせ。けふはコレ爰の井戸がへ、相借屋が寄て居るのに、こな樣計來ずに居て、付合が濟のかえ。但はおいらを潰すのか」と、強請臺詞に求馬は悔り、上り口に兩手をつき、求「是は〳〵、お顏を見れば皆合壁のお旁、是の井戸がへお手傳ひ、曾以て私存ぜず。是と申も不案内から、先格の作法を存ぜず、段々の失禮、眞平御赦免下され」と、疊に額すり付る。土「アヽこれ〳〵、又仔細らしい事いはんすかいの。ハヽ勝手を知らにやしよことがない。了簡せいなら夫で濟。此方も一番いふた跡は、モウい

愛だてない—思慮がない
いつき呑—ひつかけ呑
氣味のよいとは云々—氣味よいとは上べの挨拶
鬼殺し—きつい酒の名

はつて貰ては術ない。是からはいつもの通、賑やかに遊びましよ。サア野平藤六、踊ごぞや〳〵。ホンニ夫はそふと、コレ内義さん、見れば爰にも寺屋の樣に、七夕樣が祭つて有な」主人「サイノ、マア見て下さんせ、愛だてないと思はんしよが、こちの娘のアノお三輪、何やら星樣に願が有迚、あの樣に、内で祭も色々の備へ物、ませた世界じやないかいな」五「ホヽそりやマア奇特なこつちや。そして此お娘は留主かへ」主人「アイ小さい時往た寺子屋へ、七夕に呼れました。サア〳〵一つ呑で下さんせ。ヤイ子太郎、酌をしおらぬか。どりや吸物に豆腐でも、焚て來ましよ」と母親は、納戸に入ば打くつろぎ、廻る盃底なし共、引受〳〵いつき呑、肴の鉢を引寄て、箸放さずの滅多喰。丁稚の子太郎靮顏、「アヽ拐々、氣味のよいとは挨拶じや。よつ程下作な飲樣じや。井戸の鮒が水呑樣に、口明てがつぷ〳〵。エヽ夫では味が知にくかろ。コレ此酒は内義樣が張り込で、こちの名酒の第一番、男山といふ酒じやが、こな樣達は本の無茶呑。此銚子のかはりめから、もふ鬼殺しにしてくれふ。そしてマアよい加減に酒呑んしたら、いつもの通騷ごかい。こちのお三輪樣の三味線と、太鼓も借て來て置た」「おつと合點」と、口利の土左衛門が肩に皺、「夫はそふじやが、此隣へ近比來た相借屋の烏帽子折、此井戸がへにも立

ものと高聲に、閻魔の廳を名乘て通れ。南無成佛得脫」と、唱ふる聲の聞へてや、物得いはねど合す手を、合せ兼たる此世の別れ、早日も暮て人顏も、見へず庵りの霧隱れ、埋む娘の亡骸は、此方の山にとゞまれど、首は脊山に檢使の役目、我子の介錯涙の雛、よしや世の中憂事は、何時か當麻の大和路や、跡に妹山、先だつ脊山、恩愛義理を堰下す、涙の川瀨三吉野の、花を見捨て出て行。

當麻―絕間

第四

引たり、ヲフ引たり、ヲツト文月七日例年の、水を新井に繰返す、釣瓶の綱も三輪の里、酒商賣の世杉屋が、身過の水の內井戶を、わけて祝ひの賑はしき。「サア〳〵濟だ」と取取に、御酒洗米備物、皆々汗を入にける。主の母は納戶より、運ぶ用意の酒肴、いつにないほや〳〵機嫌、母「近所の衆、どなたも大義でござんした。嘉例の通酒盛して、暮る迄ゆつくりと、遊んでいんで下さんせ。コレ土左衞門さん、年かさにお前から、酒始て下さんせ」土「アヽ又雜作な、止しにさんせいで。おいらが相借屋で手傳ふのも、年中爰の井戶の水をつかふ恩返し。のふ五洲兵衞そふじやないか」五「ヲヽそふ共〳〵、氣を

世杉屋―世渡とかく

人間最後の云々ー盂蘭盆經にある句

沉未來ー盡未來にて永久

も直られぬ、義理に成たが二人が不運。あれ程思ひ詰た嫁、何の入鹿に隨はふ、迚も死ねばならぬ子供、一時に殺したは、未來で早ふ添してやりたさ。いひ合さねど後室にも、是迄不和な大判事を、「姫」と思召ばこそ、躮に立て、一人の娘、ヲヽよくこそお手にかけられし。過分に存る定高殿」定「アヽ勿躰ない、其お禮はあちらこちら。不束な娘故、大事のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御、夫に持た果報者。とはいひながら、あれ程迄、手しほにかけて育てた子を、又手に掛けて切心」大「サヽ推量致しておる。武士の覺悟は常ながら、まさかの時は取亂し、介錯仕後れ面目ない」定「いえ〳〵、それで目出たい此祝言。是がほんの葬よ嫁入、一代一度の祝言に、聟殿の無紋の上下」大「首ばかりの嫁御寮に、對面せふとしはらなんだ」定「それも子供が遁れぬ壽命」大「兎にも角にも世の中の、子といふ文字に死の聲の」二人「有も定まる宿業」と、隔つる心親々の、積る思ひの山々は、とけて流れて吉野川、いとゞ漲るばかりなり。涙はらふて大判事、首かき上て聲高く、「躮清舟承はれ、人間最期の一念によつて、輪廻の生を引とかや。忠義に死する汝が魂魄、君父の影身に付添て、朝敵退治の勝軍を、草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥と改めて、親がゆるして沉未來、五百生迄かはらぬ夫婦。忠臣貞女の操を立、死たる

流れ灌頂―水邊に壇を構へて無縁の水死者を供養する事
行器―食物を入れて運ぶ器

子息の御命は、どふぞと思ふた甲斐もない、あへない有樣。お前樣のお心も推量致して居まする。添に添れぬ惡縁を、思ひ合たが互の因果。此方の娘も、添たい〳〵と思ひ死、余り不便に存ます。せめて久我之助殿の息有中に、此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入さす心」大「實尤。嫁は大和、聟は紀伊國、妹脊の山の中に落る、吉野の川の水盃、櫻のはやしの大島臺、日出たふ祝言さしませふわい」定「そんなら是迄の心もとけて」大「ハテ互に婭同士」定「エヽ忝い」と悦ぶも跡の祭り、「ほんに脊たけ延た者を、いつ迄も子供のやうに、思ふて暮すは親のならひ、あまやかした雛の道具、一人子を殺して何にせふ、跡に置程涙の種。婢共其一式、殘らず川へ」流れ灌頂、未來へ送る嫁入道具、行器長持犬張子、小袖簞笥の幾棹も、命ながらへ居るならば、一世一度の送り物、五丁七丁續く程、美々敷せんと樂しみに、思ふた事は引かへて、水に成たる水葬禮、大名の子の嫁入に、乘物さへも中々に、紀念も仇の爪琴に、首取乘る弘誓の船、あなたの岸より彼岸に、流るゝ血汐淸舟が、今般の容ばせ見る親の、口に祝言心の稱名、「千秋萬歲の千箱の玉の緒も切て、今はあへなき此死顏、生て居る中此樣に、聟よ嫁よと言ならば、いか計悅ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立通す、其上重る入鹿の疑ひ、中直るに

ハア嬉しやー是より又久我之助の話

サア〜ー是より又雛鳥の話切ていのー切て下され喃

す。千年も萬年も御無事で長生遊ばして、未來で添ふて下さんせ」と、心でいふが暇乞、「思ひ置事、云置事、もふ何にもごさんせぬ。片時も早ふ、サア母樣、切て〜」と、身を惜まぬ、我子の覺悟に勵され、胸を定めて取上れど、刀は鞘に錆付ごとく、離れ兼たる血脈の紲、今切殺す雛鳥を、無事としらする返事の櫻、同じく川に浮ぶれば、久「ハア、嬉しや。是ぞ雛鳥が入内の知らせ、久我之助が心の安堵。采女の方の御有家は、最前申上る通り。此世に心殘りなし。御苦勞ながら御介錯」雛「サア〜嚊樣切ていの。未練にござんす母樣」と、泣ぬ顏するいぢらしさ、刀持手も大磐石。思ひは同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命もちり〜、日もちり〜。定「ハアそふじや、早西に入日輪は、娘がお迎ひ、彌陀の來迎。西方淨土へ導き給へ、南無阿彌陀佛」と眼を閉て、思ひ切たる首諸共、わつと泣聲答る谺。肝に徹して大判事、刀からりと落たる障子。大「ヤア雛鳥が首討たか」定「久我殿は腹切てか」大「ハアしなしたり」と、どうど坐し、悔むも泣も一時に、呆れて詞もなかりしが、良有て定高聲を上、「入鹿大臣へ差上る雛鳥が首、御檢使受取下され」と、呼はる聲を吹送る、風の案内に大判事、歎の姿改めて、衣紋繕ひしづ〜と、おり立川邊の柳腰、娘の首をかき抱、定「大判事樣、わけては何にも申ませぬ。御

悪びれず―臆せぬ事
血脈―傳統
無量品―法華經の壽量品の誤か

心計は久我之助が、宿の妻と思ふて死にや。エヽ是程に思ふ中、一日半時添しもせず、賽の河原へやるかいの」と、引寄〳〵雛鳥も、膝に取付抱付、忝なさと嬉しさと、逢で別るゝ名殘の涙、一つに落る三つ瀬川。川を隔て淸舟が、最期の觀念惡びれず、燒刃直なる魂の、九寸五分取直し、腹にぐつと突立る。大「ヤレ暫く引廻すな、覺悟の切腹せく事はない。コリヤ冥土の血脈、讀さしの無量品、親が讀誦する間、一生の名殘、女が顏一目見てなぜ死ぬ」久「イヽヤ存も寄ず。此最期に及んで、左程狼狽た未練な性根はござりませぬ去ながら、今はの際の御願ひ、私相果しと聞ば、義理に繫れ雛鳥も、倶に生害と申べし。左有時は、太宰の家も斷絕、暫の間ながら、切腹の義はお隱しなされ、降參承知致せし體に、後室方へお知せ有ば、女も得心仕り、入內致せば渠儂爲。不義の汚名は受たれ共、是ぞ色に迷はぬ潔白」大「ヲヽ出かした、能氣が付た。年來立ぬく武士の意地、不和な中程義理深し。命を捨るは天下の爲、助るは又家の爲。氣づかひせずと最期を淸ふ、花は三吉野侍の、手本になれ」と潔く、いへど心の亂咲、あたら櫻の若者を、ちらす惜さと不便さと、小枝にそゝぐ血の涙、落て波間に流れ行。夫共知ず悅ぶ雛鳥、「アレ〳〵花が流るゝは。嬉しや久我樣のお身に恙のないしるし。私は冥土へ參じま

かき上髮―首を斬るに髮が邪魔になればかき上る

を切刀とは、五十年來知ざりし」と、老の悔に淸舟も、親の慈悲心有難淚、「命二つ有ならば、君には死て忠義を立、父には生て養育の、御恩を送り申さんに、今生の殘念是一つ」と、顏を見上見下して、わつと平伏親子の誠。こなたの亭には母后室、「サア〳〵目出たい、和女の名の雛鳥を、其儘の內裏雛。裝束の付樣も、此女雛と見合せて、サアサア早ふ」と有ければ、恨めしげに打守り、雛「女夫一對何時迄も、添遂るこそ雛の德。思ふお人に引離され、何樂みの女御后。茨の絹の十二一重、雛の姿も恨めし」と、取て打付椽板に、ころりと落し女雛の首、驚く母の胸板に、必死と極る娘の命、包めどせきくるはら〳〵淚、定「娘入內さすといふたは僞り。眞此樣に首切て渡すのじやはいのふ」雛「エヽそんならほん〳〵に貞女を立さして下さりますか。アヽ忝い、有難い」と、伏拜む手を取て、定「ナウ入內せずに死るのを、夫程に嬉しがる、娘の心しらいでならふか。あつと受ても自害して、死る覺悟は知ながら、そなたの死る事聞たら、思ひ合た久我之助、共に自害召れふも知ぬ。せめて一人は助けたさ、一旦得心したにして、母が手づから解た髮は、下髮じやない、成敗のかき上髮、介錯の支度じやはいの。尊いも卑いも娵御前の夫といふはたつた一人。穢らはしい玉の輿、何の母も嬉しかろ。祝言こそせね、

はかなさ—齒にかく
浮思—憂き思ひ
重き背山云々—是より久我之助の話に移る

裏上﨟の、髪も改めすべらかし、祝ふて母が結直してやりましよ」と、いそ〲立は立ながら、娘の心思ひやり、別れの櫛のはかなさも、解ほどかれぬ浮思ひ。重き脊山の庵の内、父が前に謹で、「久我之助が心底、聞し召分られ、切腹御赦免下さる事、身に取ていか計大慶至極」と、手をつけば、默然たる大判事、良打瞬む目を開き、「今朝入鹿大臣、此大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投死たりとは僞り、其方が悴久我之助、人知ぬ方へ落しやりしに極れば、必定、汝らが方に匿ひ有べしとの難題。元來知ぬ大判事、よく〲思へば、采女の御難をさけん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し參らせしは、中々久我之助が智惠でない、鎌足公の差圖を受ての計らひと、知たは身も今日が始め。親にも隱し包みしは、此大事を洩さぬ心の金打、若輩者には神妙の仕方、ハハア出かしたりと思ふに付、邪智深き入鹿、久我之助が降參せば、命を助ん連來と、情の詞は釣寄て、拷問にかけん謀。責殺さるゝ苦しみより、切腹さすれば采女の詮義の根を斷大功。天下の主の御爲には、何躮の一人など葎に生る草一本、引ぬくよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは武士の表、子の可愛ない者が、凡生有者に有ふか。余り健氣な子に恥て、親が介錯してくれる。侍の奇羅を餝、いかめしく横たへし大小、躮が首

立て行—小腹を立てと立て行くにかく

多い、一天の君を聟に取家の面目。日本國に、此上のない嫁入の隨一、果報な娘。此樣な目出たい事が有物か、ナア女子共」腰「ハイ〳〵お目出たいと申そふか、いつそ亂騒でござります」と、工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投首の、二人は小腹立て行。母の心も色々に、咲分の枝差出し、定「親の赦さぬ云かはし、徒は呵つて返らず。一旦思ひ初た男、いつ迄も立通すが女の操、破りやとは云ぬが、貞女の立樣が有そふな物。とつくりと能ふ思案しや。此花は八重一重、互に不和なる親々の、心揃はぬ二つの花、一つ枝に取結び、切放すに離されぬ悪縁の仇花。今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深山颪に吹散され、久我之助は腹切ねばならぬぞや。雛鳥と縁を切て、入鹿樣へ降參すれば、清舟も命を助る、知らせは川へ流す櫻。ちるか散ぬが身の納り。時に從ふ風に靡き、君が手生の花になれば、八重も一重も悪なふ。九重の内に傅るゝ互の幸。戀しと思ふ久我之助、助けふと殺さふと、今の返事のたつた一つ。貞女の立樣、サア〳〵見たい」と、戀も情も辨へて、義理の柵せきとめても、泪せき上〳〵ながら、雛「母樣段々聞譯ました。お詞は背きませぬ」定「そんなら得心して入内してたもるか」雛「アイ〳〵」定「ヲヽ嬉しや、出かしやつた出かしやつた、夫でこそ貞女なれ。馴ぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな。今日より内

訴訟云々―願を陳べるよい機會

御氣の通る―お氣が利く

眞紅―辛苦にかく

さし足に、雛「母樣よふぞ。今日はお目出たふ存じます」と、武家の行義の三つ指に、堅い程猶親子の親しみ、定「ヲヽよふ飾が出來ました。今日は其方の顏持も、よさそふで一入目出たい。母も祝ふて獻上の此花、備へてたも。幾年に成ても、雛祭は嬉しい物。女子共何なりと、娘が氣に合遊びをして、隨分と勇めてくれ」と、いつに勝れし後室の、機嫌は訴訟のよい出しほ。「今のをちやつと乘出して、御覽じませ」と婢に、腰押れても兎や角と、いひそゝくれのもつれ髮、定「イヤのふ雛鳥、脊たけ延た娘を、親の傍に引付て置は、結句病の種。夫で急に思案を極め、和女によい殿御を持す、嫁入さすが嬉しいか。エヽハテ氣遣ひ仕やんな。可愛娘の一生を任す夫、和女の氣に入ぬ男を、何の母が持さふぞ。ナア婢共」婢「ハイ〳〵左樣でござります、お氣の通つた後室樣。嫁入の先は大方今のナ、焦るゝ君でござりませふ」と、押推當ども得手勝手、誰にか緣を組紐に、胸は眞紅のふさがる箱、取出し、定「妹脊をならぶる雛の日は、嫁入の吉日、此箱の主は極まる殿御。雛の御膳で夫定め。コレ和女の夫と云ふは、誰有ふ入鹿大臣樣じやわいの」雛「エヽそんならわたしを嫁入さすとは」定「ヲヽ太宰の小貳が娘雛鳥、美人の聞へ叡聞に達し、入内させよと有難い勅諚」雛「エヽイはつ」と、悔りうろ〳〵と、詞は涙ぐむ計。定「ヲヽ肝が潰れる筈。夫と申も畏

山と大和路云々―大判事は山へ定高は大和路へ別れゆく

界に涌た虫、別に不便とは存じ申さぬ」定「ハテきつい思し切、私は又いかふ了簡が違ひます。女子の未練な心からは、我子が可愛て成ませぬ。其かはりに、お前のお子息様の事は、眞實何共存じませぬ。只太切なはこちの娘、忝い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸。譬どふ申さふ共、母が勸て入内させ、お后様と多くの人に、敬ひ傅かそふと、思へば此様な嬉しい事はござりませぬ。ホヽヽヽ」と空笑ひ。大「ムヽシテ又得心せぬ時は」定「ハテそりやもふ是非に及ばぬ、枝ぶり悪い櫻木は、切て繼木を致さねば、太宰の家が立ませぬ」大「ヲヽそふなくては叶ふまい。此方の躮迚も、得心すれば身の出世、榮華を咲す此一枝、川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流ろゝは吉左右。花を散して、枝計流るゝならば、躮が絶命と思はれよ」定「いかにも、此方も此一枝、娘の命生花を、散さぬ様に致しませふ」大「ヲヽサ今一時が互ひの瀬越し、此國境は生死の境。返答の善悪に依て、遺恨に遺恨を重るか」定「サア是迄の意趣を流して、中吉野川と落合ふか」大「先夫迄は双方の領分」定「お捌を待てをります」と、詞峙つ親と親。山と大和路分かれても、替らぬ紀の路恩愛の、胸は霞に埋れし、庵の内にわかれ入。立派に云ひは放しても、定かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の戸に、音なふ初音雛鳥も、母の機嫌を

[illegible]
難所—なきにかく
定高—隨にの意をかく
道分—見にかく
襠—うちかくるにかく
落去—落著
胸くしやつく—目がまじ／＼する

たる女氣も、今更弱る折こそ有、「大判事清澄樣御入なり」と、しらする聲。「はつ」と驚き久我之助、歸るを名殘、押とむるも、我身を我身の儘ならず、雛「コレのふ待て」の聲計、「後室樣御出」と、告る下部に詮方も、なく／＼庵の打霑れ、登る坂さへ別れ路は、力難所を行心地、空にしられぬ花曇り、花を歩めど武士の、心の嶮岨刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂、川邊傳に大判事清澄、こなたの岸より太宰の後室定高にそれと道分の、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てて、定「大判事樣、御役目御苦勞に存じます」と、聲襠をかい取の、夫の魂、放さぬ式禮、清澄も一揖し、「早かりし定高殿。御前を下るも一時、參る所も一つなれ共、此脊山は身が領分、妹山は其元の御支配、川向ひの喧嘩とやら、睨合て日を送る此年月、心解るか解ぬかは、今日の役目の落去次第。二つ一つの勅命、狼狽た捌めさるな」と、胸くしやつく茨道、脇へかはして、定「仰の通り、入鹿樣の御諚意は、お互に子供の身の上、受合ふては歸りながら、身腹は分ても、心は別別、若あつと申さぬ時は、マアお前にはどふせふと思し召」大「知れた事、御前で承はつた通り、首打放す分の事さ。不所存な躮は有て益なく、なふて事かけず。身の中の腐は、殺で捨るが跡の養生。畢竟親の子のと名を付るは人間の私、天地から見る時は、同じ世

雛男雛も、年に一度は七夕の、逢瀬は有に此樣に、お顔見ながら添事の、ならぬは何の報ひぞや。妹脊の山の中を隔つ、吉野の川に鵲の、橋はないか」と口說き言。聞淸舟も楫有ば、早渡りたき床しさを、胸に包みて、「道理〳〵。我も心は飛立ど、此川の法度嚴しきは、親々の不和計でない。今入鹿世を取て、君臣上下心々、隣國近邊といへ共、親しみ有ば徒黨の企有んかと、互に通路を禁しめて、船を留たる此川は、領分を分る關所も同然。命だに有ならば、又逢事も有べきぞ。今流したる水の柏波にもまれて浮しは、心の願ひ叶ふしらせ。入鹿が掟嚴しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隱住、心の儘に鶯の、聲は聞共籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を、思ひやられよ雛鳥」と、儘ならぬ世を恨泣。雛「ノウ又逢ふ事も有ふとは、別るゝ時の捨詞。譬未來の父樣に、御勘當受る共、わしやお前の女房じや。迚も叶はぬ浮世なら、法度を破つて此川の、早瀬の波も厭ふまじ、何國いか成方へなと、連て退て下さんせ。わたしはそこへ行まする」と、既に飛込川岸に、周章驚きとゞむる腰元。「イヤ〳〵放しや」と泣入娘。淸「ヤレ短慮なり雛鳥。山川の此早瀬、水練を得たる者だに渡り難き此難所。忽命を失ふのみか、母後室に歎きをかけ、我にも彌々憎しみかゝる。科に科を重る道理、必早まり召れな」と、制する詞一筋に、思ひ詰

奥山―置くにかく

折から―下りと折り

難所―なくにかく

よい」と、あせるお傍に氣の付々。ほんに夫よ、口でいはれぬ心のたけ、兼て認め奥山の、鹿の卷筆封じ文、戀し小石にくゝり添、女の念の通ぜよと、祈願をこめて打礫、からりと川に落瀧津、波にせかれて流れ行。「エヽどんな、心の念は屆ても、女力の屆かねば、思ふた計片便。返事を松浦佐用姫の、石に成共成たい」と、平伏山の甲斐もなき。久我之助川に目を付、何國よりか水中に、打たる石は重けれど、逆巻水の勢ひに、沈みもやらず流るゝは、重き君も、入鹿といふ逆臣の、水の勢ひには敵對がたき時代の習ひ。夫を知て暫しの中、敵に從ふ父大判事殿の心。善か惡かを三つ柏、水に沈めば願ひ叶はず、浮む時は願成就、吉野を假の御祓川、太神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取て。谷を傳ひに水の面、見やる女中が「申々、今の小石が屆いたか、久我樣が川へ下りなさるゝ。あの岩角のおり曲りか、川端がいつち狹い、幸のよい逢瀬」と、いふに嬉しき雛鳥の、飛立計振袖も、裾もほら〲坂道を、折から風に散る花の、櫻が中の立姿、しどけ難所も厭ひなく、雛「ナウ久我樣か、なつかしや」と、いふに思はず淸舟も、「雛鳥無事で」と顏と顏、見合す計遠間の、心計が抱き合、詮方淚先き立り。雛「申淸舟樣、わしやお前に逢たさに、病氣といひ立、爰迄は來て居れど、親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶はず。女

岩橋―いはぬにかく
念彼觀音―普門品の文句

は來れ共、山と山とが領分の、境の川に隔られ、物いひかはす事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ、今は中々思ひの種、いつそ隔て戀詫る、逢れぬ昔がましぞかし」と、切なる思ひかきくどき、歎けば倶に娍共、「お道理でござります。ほんにひよんな色事で、隣同士の紀伊國大和、御領分のせり合で、お二人の親御様はすれ〳〵。雛鳥樣と久我樣の、妹脊の中を引分る、妹山脊山。船も筏も御法度で、たつた此川一つ、つい渡られそふな物。小菊瀬踏して見やらぬか」小「ヲヽ滅相な。此谷川の逆落し、紀州浦へ一つてきに、流れて往たら鮫の餌食。したが申雛鳥樣、お前の病氣をお案じなされ、此假屋へ出養生さしなさつたは、餘所ながら久我樣に、お前を逢す後室樣の粹なお捌き。女夫にして下さりませ、と直にお願ひ遊ばしたら、よもや否とは」岩橋の、渡る事こそならず共、せめて遠目にお姿をと、障子ぐわらりと縁端に、覗きこぼるゝ娍共。久我之助はうつ〳〵と、父の行末身の上を、守らせ給へ、と心中に、念彼觀音の經机。案じ入たる顏形、手に取樣に、雛「ノウあれ〳〵、机にもたれて久我樣の、物思はしいお顏持。お積がなおこりつらん。エヽお傍へ行たい、コレ爰に居るはいな」と、いへど招けど谷川の、漲る音に紛れてや、聞へぬつらさ。「エヽしんき、こちらが思ふ樣にもない。コレこつちや向て見たが

經讀鳥—鶯
はし近く—箸と端
胸にあたり—胸にあたると傍りにかく
片糸—難しにかく

出陣の、駒を早めて 三重 駈り行。古への神代の昔、山跡の、國は都の始めにて、妹脊の始め山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、實世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、妹山は、太宰の小貳國人の領地にて、川へ見越の下館、脊山の方は、大判事清澄の領內子息清舟日外より、爰に勘氣の山住居、伴ふ物は巣立鳥、谺と我と只二つ、經讀鳥の音も澄て、心細くも哀なり。比は彌生の初めつかた、此方の亭には雛鳥の、氣を慰さめの雛祭、桃の節句の備物、萩の強飯娰の、小菊桔梗が配膳の、腰もすふはり春風に、柳の楊枝はし近く、「ノウ小菊、いつものお雛は御殿でお祭りなさるれど、姫樣のおしつらひで、此山峯の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽、雛樣も一入お氣が晴てよからふの。此方も追付好い殿御持たら、常住あの樣に引ついて居たら嬉しかろ」と「フウ桔梗の何云やるやら。何ぼ女夫並んで居ても、あの樣に行義に畏つて計居て、手を握る事さへならぬ、窮屈な契りは嫌や。肝心の寐る時は、離れ〴〵の箱の中、思ひの絕る間は有まい」と、仇口々も雛鳥の、胸にあたりの人目せく、「辛い戀路の其中に、親と〳〵は昔より、御中不和の關と成、逢ふ事さへも片糸の、結ぼれとけぬ我思ひ。戀し床しい清舟樣、此山のあなたに、と聞たを便り母樣へ、お願ひ申て此假屋、お顏が見たさの出養生、爰迄

秦の趙高云々—威勢に任せ鹿を馬といはしむる

欠入—駈入

穆王が龍馬—穆王に八匹の駿馬あり

いそふれ—急げ

れば榮へる花。背くに置ては忽に、丸が威勢の嵐に當、眞此通り」と欄に、はつしと打折落花微塵、はつと計に親々の、一心も共に散亂せり。猶もゆるまぬ大音上、入「ヤア〳〵彌藤次、早く參れ。汝は百里照の日鏡を以て、香具山の絕頂より、急度遠見を仕れ。コリヤ〳〵兩人よつく聞。若少でも用捨致さば、兩家は沒收、從類迄も絕するぞ、性根を定め、早行」と、せき立諚意に親々の、思ひは千々の胸の中、見せぬおもてに忠と義を、張詰し氣のたゆみなく、打連てこそ出て行。誠に秦の趙高が、馬と欺く小男鹿の、入鹿が威勢ぞ類ひなき。かゝる所へ中門より、追々欠入鎧武者、御注進と呼はつて、御白洲に頭を下げ、「河内の國に武智郡司安彥、先帝に味方をして大烏の城に籠りしを、官軍殘らず馳せ向ひ、敵を攻付一晝夜に落城、大和に安曇の文次宗秀、當麻の邊に陣を取、南都を攻る其結構。馳向ふて戰ひしに、味方の官軍利を失ひ、殘らず敗北仕る」と、息つぎ敢ず言上すれば、入「ハヽヽヽ物數ならぬ逆徒の奴原、朕馳向ふて微塵にせんぞよ。彼穆王が龍馬に勝れし希代の名馬、吉野の牧より狩出したる、其馬引」と、廣庭へ引出させ、欄より、ひらりと打乘、名馬の勇、手綱かいくり、しと〳〵〳〵。轡の音はりん〳〵りん、綸言誰か背くべき、大地狹しと馬上の勢ひ、刻む蹄も街の衢、「いそふれ、やつ」と

過行—死去

尾籠やつ—無禮者め

且て—曾て

金打—武士の誓にする仕業

大「何國へとは、親々が不和成中を存ながら、忍び逢ふ躮が不所存、引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸に、和睦せしと云れては、我家の恥辱となる」定「ヲそりや此方も同じ事。一旦武士の意地、今更中が直りたい計に、娘に態と不義させし、と世上の人に蔑せられては、過行給ふ夫へ立ぬ。わらはも倶に」と、裾引上、駈け出す二人をはつたと睨め、入「私の趣意に立騷ぐ尾籠やつ。儕らが躮の不義を吟味はせぬ、丸が尋るは采女が有家。サア何れからなりと早くいへ。何と〳〵」大「イヤ躮が性根はいさ知らず、采女殿の義は且て存ぜず。我詞に僞有ば、弓箭神の御罰を請ん」と、刀すらりと抜放し、丁々と金打し、「此上にも御疑ひ有ば、いか程の拷問なり共、サア遊ばせ」と、どつかと座す。定「ヲヲわらは迚も小貳が妻。家に換へて采女殿は匿はぬ。水責火責に逢迚も、知らぬ事は存じませぬ」と、詞するどにいひ放す。入「ム丶然らば采女が詮義は追て。先汝らが面晴なれば、匿はぬといふ潔白に、定高は雛鳥を入内させよ。又大判事も、覺なきに相違なくば、久我之助を今日より、朕が目通りへ出勤させよ。急度其旨心得よ」と、何がな探る當座の難題。二人は胸にぎつくりと、答へも暫しなかりしが、良有て詞を揃へ、「斯有難き勅諚を、互の子供が違背致さば」入「ヲ丶云にや及ぶ」と邉成、生置櫻の一枝追取、「得心す

陳ずる—いつはる

女が付人ならずや。其親たる其方なれば、よも知らぬとは云れまじ。サア眞直に白狀せよ。陳ずるに置ては計ふべき旨有」定「イヤのう大判事殿、お聞有しか、妾に仰付られし詮義とは此事。サア覺へが有ば申されよ」と、云せも立ず、大「イヤ默り召れ。女の差出る所でなし」定「イヽヤ勅諚を受ての詮義なれば、勅答の有無に寄て、其座はちつ共立しはせじ」と、膝立直し詰寄て、双方挑み爭ふたり。入鹿大臣大口明、「ハヽヽヽヽイヤ工だり拵へたり、定高が領分、大和の妹山、清澄が領地、紀の國脊山、隣國境目の論に寄、互に確執せしとは表の見せかけ、内々には申合せ、古主の帝へ心を通はす僻等と、我眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は、兩家の中に隱し置んも知ざる故、大判事が詮義を申付た定高、コリヤ其方にも此疑ひはかゝるぞよ」定「是は又君の勅諚共覺ませぬ。夫小貳より、中惡き大判事殿、何故申合さふ樣もなし。私に迄お疑ひは恐れながら」入「云な女め、左程音信不通の中なるに、大判事が躮久我之助、そちが娘雛鳥と、密通致し居は如何に。イヤ知るまじと思ふか。躮共が緣に繫がれたる汝等なれば、兩方共に吟味は遁れぬ。何と肝に答へふが」と、脈迄邪智の一言に、何思ひけん大判事、席を蹴立て行んとす。隙さず定高が、刀の鐺むんずと取、「コレ待給へ清澄殿、恠相かへてコリヤ何國へ。」

て見せふ」大「イヤ小癪な。其處退て早通せ」宮「罷ならぬ」と根に持遺恨、互に折ぬ老木の柳、松の間の襖押開かせ、「出御成」と警蹕の、聲に二人も飛しさり、恐れ入たる計なり。入鹿の大臣寛然と、上段の褥より遙に見下し、入「ヤア大判事、未明より參內せよ、と勅使を立るに甚の遲參。アレ見よ、今日は午の上刻、流星南に出て、北に拱するは、萬乘の位に卽丸が吉星。夫程の事知らぬ大判事でなし。但し、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退ん下心か、緩怠なり」ときめ付れば、大「コハ御諚共覺へず。今一天四海、君の御手に屬するとは云ながら、いまだ殘黨、先帝に心を寄る族有て、帝都を窺ふ折から、我等が領地紀伊國は、西國南海の咽首にて、大事の切所、弓を張、矢尻を磨に隙なければ、思はざる遲參。其上忠臣第一の大判事に、何事の御疑ひ」と、憚なくぞ申ける。入「ホヽ、其子細といつぱ、先帝の妾者、采女の局を、丸が后妃に定めん、と行衞を尋求める所、猿澤の池へ入水せし由、いかにしても合點行ず。察する所采女が在家は、大判事、其方がよく知らふがな」と、思ひがけなき疑ひに、清澄不審の眉を顰め、「コハ存寄ざる義。其采女の御事は、猿澤の池に捨身有しとは、誰知らぬ者ござなきに、我等が行衞存ぜしなどとは、何を目當の御仰なるぞや」入「ヤアとぼけな。汝が躮久我之助は、采

白書院―知らずにかく

おりない―ござらぬ

ふせり。猶「ヲヽ一興々々面白し。梅が枝は、諸木に先立咲花なれば、三右衛門も向後は、咲太夫と改むべし」と、仰に「はつ」と悦びて、お禮申せば「残りし受領、又明日」と云渡し、いづれも白洲を立出る。召に應じて大判事清澄、袴の襞積も角菱有、不和成中の定高が屋敷、互にそれと白書院、目禮もせず突つと通り、大「入鹿公の御座の間へ、誰そ案内仕れ」と、云捨て行んとす。定高聲かけ、「先暫く。珍らしや大判事殿、太宰の小貳が跡目を預る妾が屋敷、挨拶もなくお通りは、女と思ひ侮つてか。但し武家の禮義御存なくば、少と御傳授申そふか」と、詞の非太刀裃捌き、騒がぬ清澄空嘯き、大「小貳存生より、領地の遺恨に寄、此屋敷の内へは、今日迄足踏もせぬ大判事、入鹿公のお召に寄て参つたは、勅諚を重んずる故、皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ、挨拶する口は持ぬ」定「イヤ夫なれば猶もつて、今日入鹿様お成なれば、大内も同然、大判事に御疑ひの事有て、此定高に吟味致せとの勅諚。此詮義濟ぬ内は、一寸も御前へは叶はぬ。お扣へなされ清澄殿」大「ム、ハテ、珍らしき事を聞。君御詮義の筋有らば、検非違使に仰て、拷問有んに何の御遠慮、元來御疑ひ蒙るべき覺なし、生緩き女の吟味、受る様な清澄でおりない。お身、見事詮義して見るか」定「ヲヽ、太宰の後家此定高が、急度詮義し

しんどい—退屈

友禪—いふにかく

山吹—黃金の事

前垂を腹に巻、住吉踊、歌四社のお前で扇を拾ふた、扇めでたや末繁昌、サ吉住様の岸の姫松めでたさよ。白かんかねのべてのふ、襷にかけて、よね〳〵はかるせきのと、せんとのやさらば〳〵エ」踊仕廻ば彌藤次も、「是はしんどい宗旨じやな。向後は其方を、曉山西方寺と、寺號をお赦しなさるゝぞ」坊「ハア、有難し忝し」と、悦び勇む春駒は、歌めでたや〳〵、春の初めに、春駒なんど、夢に見てさへ好いとや申。ドウ〳〵ドウ〳〵、三吉乘つたか、右の袂に三七三夜、左の袂に三七三夜、兩方合せて六七六夜、ドウ〳〵〳〵〳〵勇み舞たる春駒が、轡の紋もきつぱりと、能男共友禪の歌伊達な下著を一つ前、横目つかふて白洲につくばい、「私は堺の素人淨瑠璃、三右衞門と申者、政太夫は播磨、若太夫は越前、筑前大和と受領致す、是は大阪の名人藝、私は太夫號を下さらば、有難ふござります」彈「ナニ淨瑠璃を語るとな。幸々、奥女中も聞たがる。無間の鐘を所望々々」三「是は迷惑、私はちやり聲で、歌ふ事は參りませぬ」いかぬを是非にと權威の所望、迷惑ながら聲張り上、「テヽテン〳〵、テン〳〵、石にもせよ、金にもせよ、心ざす所は無間の鐘。其金爰にと三百兩」深山おろしに山吹の、花吹ちらすわれ聲にて、語れば「扨も怖い聲。最前の藥罐屋と、一所に置たら能からふ」と、どつと笑ひを催

願人坊主―一種の乞食坊主

ろりんなころ〳〵共、こんころがしやりかの、しやなりんがちよろよ、けんれんばまたのいよほん、ほんほわか枝や、はんは葉も、イヨヱ榮へやはんは葉も、ろやんはいよ、イヨへさらへ。謳ひ納めし船歌に、彌藤次は聞入て、「チヽ出かした〳〵。此後は其方を、船の頭となすべし」と、云しより、名を船頭と名付し跡へ道心者、風呂敷肩にひよつかひよつか。彌「コリヤ〳〵汝、所化ならば上人和尚に成たい望か」坊「イヤ〳〵愚僧は願人坊主。寺號をお赦し下さりませ」彌「ムヽ願人とは何の宗旨」坊「されば八宗九宗をもれ、二季の彼岸は鉦太鼓で、町々を六齋念佛、お目にかけふ」と風呂敷より、取出しはじめる太鼓の拍子。歌やあんやうりうし〳〵、なつてんりうたん金銀花咲いた、銀杏金柑陽梅寒梅、瓢簞鳳仙花やあん鐵仙花〳〵、栴檀沈丁芙蓉林檎、長春半夏草、ヱヽスヱ〳〵りよ、ヱヽスヱスリヨこんりやう、ヱヽスヽリヨ、こんりやうこん、しんこんりやう、こんしん〳〵、こすへぶく〳〵いしせほろみとすと、打納め、扨盆前の施餓鬼には、鐃鉢なんど打鳴し、法界の施餓鬼〳〵と六字詰。七月二十四日には、地藏菩薩を脊たら負、一つや二つ、三つや四つ、十より内の緑子は、小石拾ふて塔を積、一重つんでは親の爲、二重積では鄕里兄弟、我身の爲と回向する。庚申にはとゝ打て、庚申の代待、扨傘に、赤

でつかちない—大なる
名にしあふ—名付るにかく
びんざさら—比丘尼の持つ板
岩楠—いはんにかく

り、でつかちない光り物が飛出、神の扉が八文字に披け、神馬の四足に大汗をかいてござる。禰宜、神主、是を歎き、御湯を捧て七座の齋。時にお鹿島の御託宣に、氏子共が下用櫃にしやりを切して、むらつぎをするで有と、人の物でも手廻り次第、打殺して其日を凌げ、むくりこくり、地の底より潤はして、米は下直に錢は高ふさしてやろとの御託宣でござる。無上禮法、新兵衞、嘉兵衞、拂ひ給へ、清めて給ふ」と、しやべりける。彌「扨は汝事觸よな。向後そちが受領には、口松の差出の頭佐平次」と、ゆるせし跡へぽつとしよ髮、云ねど手足黑々と、鍛冶屋の木梃の衆、てんからり、ころり、てん〱からりの相槌に、打や打物、元が燒刃の燒物なれば、備前の守とや名にしあふ、櫻に色香取交て、手品やさしきびんざさら、京の水色よい染上の、砥の茶小紋に見初て染て、醉てじやらくら笹の葉小紋。比「今夜必かならずやいの、松葉小紋の戸明て門に、ちつとやつて下ん」彌「シテ儕は伊勢か熊野か」比「イヤ私は伊勢比丘尼」彌「夫ならば比丘尼の司。お兩なんど」と岩楠の、慳作りのどつてう聲、「アイおらは攝刕西成の郡、上福島の船乘でござります」彌「夫ならば大名の船歌、上つ方には珍らしからん、謳へ〱」の聲につれ、歌「エヤつるつゝ共、いつきやのふ來てな、小側に立より見て有ば、おんめんもとはころり、こ

縣めしー地方官の叙任式
兩眉ー烏帽子の前の名稱

假御殿、木の丸殿に進へて、今日出陣の城廓に、惡魔追伏興福寺は、我藤原の氏の寺、いざや是より臨幸」と、先をはらつて鎌足の、威風凛々綸言の汗か涙の露にぬれ、草葉に置る芝六が、妻戀雉子や子故の闇、明てもくらき六つ七つ、十一、十二、十三鐘の、古跡を今に傳へける。

第三

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館、入鹿公のお成迚、喙き渡る奥女中。荒牧彌藤次一間を出、「コリヤ仕丁共、今日は入鹿公、御日出たの御悦びに、奈良の町へ入込の諸職人、商人、藝者に受領を下されんとの勅諚。相詰たる町人共、一人づつ呼出せ」「はつ」と答へて立出る、縣めしかや諸人に、司を給て夫々に、國名を付し烏帽子の、始めにかけし烏帽子屋が、身を立烏帽子兩眉は、三大臣のお召迚、高き位や懸烏帽子、十二の冠式法の、烏帽子屋なれば平七を、頭平と受領なされける。跡へ出たは烏帽子に白丁、彌藤次屹見、「フウ其方は神職な。神職ならば何故、吉田へ參つて受領を受ぬ」白「イヤ拙者めは鹿島の事觸、當年は辛の卯の年、祟り年とござつて、鹿島の御寶殿よ

出御ぞふ—ぞふは候ふ

祈誓をかけ、百日の行滿ずる今日、爭ひがたき神の力、刑罰の地に掘穿つ土中に、怪しき光り物。能々見れば、先年失させ給ひたる内侍所、神璽の御箱。入鹿が父蝦夷子大臣、疾くより謀叛の根ざしにて、埋隱せし二色の寶、顯れ出しは是正に、神明の助け給ふ三作が命。今改めて鎌足が三代の忠臣。さりながら鹿を殺せし春日の掟、同じ血脈の弟が、死骸を埋刑罰の、表を立て菩提の爲、印の石の其上に、突鐘一字は鎌足が、改て建立せん」と、仰は今に曉の、六つに死したる七つ子の、數を合はして十三鐘の、音にぞ哀殘りける。鎌足重て、「此八咫の御鏡は、天照す御神の、御影を寫せし御正體。勿體なくも蝦夷子大臣、穢れし土中に埋め置。其故にこそ一天の御影を曇せ、御目盲させ給ひしも、日月の鏡曇りし故、我行法の今日に當つて、御鏡出させ給ふ事、常闇の世の岩戸を開き、天照神と天皇の御對面の時至れり。出御ぞふ」と奏聞の、聲に應じて淡海公、御手を取て立出る。折から向ふ鏡の光り朝日の影に暉きて、忽御目も明らかに、釆「ナウなつかしの帝樣、釆女是に」と走り寄、互に床しき物語り、御戀中も恐れ有。鎌「ヤア〱太郎、汝が射たる爪黑の鹿は入鹿が調伏にて、頓て太平萬乘の御代しろし召、暫くも、民間に落給ひしは、天より地中に落給ふ、是ぞ稀なる天智帝。御目も將に秋の田の、刈穗の庵の

讒にて潰れた家、力に成て下され、と頼れての後連、義理の有子が枷に成て、鎌足公に根性を見下られたが口惜さに、指殺したは、二人が中に出生仕た此杉松。科はなけれど主人の面晴、鬼になつてと醉た顔、酒ではなふて劒を吞、侍の義理が敵じやと思ひ諦め、坊主がかはりに隨分兄を、可愛がつてやりやいの」と、どふど座して泣ければ、雉「フウコレ夫程に思ふて下さる、其兄の三作は、鹿殺しの科人になつて、縛られて行たはいな」芝「ヤア〳〵〳〵〳〵、すりやおれが科を身に引受て、名乘て往たか。エヽそれ殺しては」と、狂氣の如く駈け出す、弓手の岩壁に、「太郎暫し」と聲有て、内大臣鎌足公、神事の禮服に小忌衣、心葉の冠梅が香の、匂ひ殘れる采女の御方、手に捧たる内侍所、悠然と出給ひ、鎌「玄上太郎心底慥に見屆たり。我敵の亂を避け、餘所ながら守護する天子。一口にても其方が、御難をさけしは適忠義。入鹿が心をかけたる采女、久我之助に云含め、猿澤の池に入水として、此興福寺の山奥に、鎌足諸共隱れ住、今日計らず汝が躮、大垣の刑に行ふ所、不思議に命助つたり。三作參れ」と仰の下、上下改めしづ〳〵と、携へ持し寶の箱、明て我子の無事な顏、「ヤアまだ生て居てくれたか」と、思ひがけなき夫婦が悦び。鎌「ヲヽ不審尤、天皇御惱の祈の爲、天の岩戸の古例を引、天照太神に

いねつきまふ―寐
よう
むそく―無駄
廻し者―間諜

地。果報は寐て待、ちつとの間いねつまふ。坊主はおれが懐に」と、こつぽり被る蒲團より、早とろ〳〵の草臥寐入、何にも知らぬ悦び寐顔。夫といふたら三作が、心もむそくに夫の命。夫も悲しゝ、我子も可愛し、心は千々に鳴鐘を、早撞きいだす興福寺。雉「ハア南無三寶、アノ鐘の數に、縮まる子の壽命。一つの命を二つに分け、養親への孝行心。ほめてやつて下され」と、云もいはれぬ女房が、心の苦痛三つ四つ、重て響く胸先は、斧鉄に打るゝ心地、五體五つにいつの世の、報ひを爰に修羅の鐘、打切六つは、ヤア知死期か、とわつと叫ぶは一時に、蒲團の中も血の涙、寐入伏たる稚子の、咽ぶへ疊にぬふたる刃、雉「ヤア杉松をむごたらしい。酢狂ひか亂心か」と、涙もいつそ狼狽て、咽へ流るゝ輌れ泣。芝六居直つて聲を上げ、「中將淡海公へ申上る。玄上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ、最前の捕人は、拙者が心を引見給ふ鎌足公の廻し者と、氣は付ながら、情ない人質に心迷ひ、彌もつて御疑ひを重ねたれば、天子も爰には置給はじ。冥加に叶ひ、一天の君を匿申身の大慶も水の泡、勘當御免もなき時は、生ても死ても返らぬ心外。躬を切ても他言致さぬ魂を、今改めて御覧に入る。コリヤ女房、張詰た太郎が義心、大事の心底見せ損ふたは、三作といふ其方の連子、元は秦の益勝と云ふ樂官の女房、蝦夷子の

雨降て云々―物の治まる前に騒ぎのあるといふ諺

嬉しいも云々―嬉しいは夫悲しいは妻の心

た。雨降て地塊まると、是からは猶あなた様も、帯紐といておかくまひ中よいといふ物じや、ナそじやないか。ヤお天子様の御機嫌はどふじや。マア〳〵悦びや、今日の日天様か、がくれ様にならしやりましたらこそ、斯ふいふ内へお成なされて下さるといふは、有難いといはふか、忝いといはふか、目出たいといはふか、嬉しいといはふか。是が悦ばずに居られふか。ナそふじやないか。まだ嬉しい事が有は。明日の明六つがごんと鳴と、鎌足様が爰へござる、そこで勘當御赦される筈、淡海様の請合じや。日頃の願ひ叶ふは明日、余り嬉しさ身祝ひに、呑酒屋叩き起して、御神酒五台供へた。エヽ忝い〳〵。コリヤ坊主よ、あすから元の侍に成て、われにも大小さゝすぞよ。ヤ兒は何所に居る、三作よ作よ〳〵」は胸を裂妻の苦しみ、雉「イヽエイナ、作はお前の戻りが遅さ、一人猟に行といふて」芝「エヽ夜の内に何所へ滅相な、もふ猟師はさゝぬ。誠の弓取に仕立るは、あすの夜が明次第。イヤもふそろ〳〵白空かけるぞ、出世の雲が見へるぞ〳〵。有がたい〳〵、早ふ明六つが鳴て下され天道様、頼ます〳〵」と、祈る夫が空を見つ、覗く表も裏表、夜明は我子の最期時、どふぞ此夜が百年も、明ずに有てくれかしと、胸の阡陌の色々に、嬉しいも六、悲しいも、六つ無量の物思ひ、「アヽおりやもふ今夜は、てうど元日を待心

正體云々―正體なく腰もぬけて

ば畜生一生を、殺した科をそれ程の、御成敗にも及ぶまい。御出家のお慈悲には、どふぞ助けて下さりませ。叶はぬ事なら土の中、母も一所に埋んで」と、取付島も袂の岸、涙に漂ふうかれ船、縄目の綱は親子の別れ、見返る姿霧霞、飛が如くに引立行。母は正體腰もぬけ、「ヤレ三作よ待てくれ。思へば〳〵今日の日は、我身一人の悪日か。由緒正しい武士の子を、一生狩人山賤に、朽果さする計かは、所の法に行はれ、非業の死は殺生の、罰か報ひか悲しや」と、土邊に蹉跎と身を打付、聲をはかりの憧れ泣き。患を拂ふ王箒、いかな大事も好物に、醉てはころり芝六が、機嫌上戸のちろ〳〵戻り、「ヤア女性是におはするか。此冷るに地邊に轉りは、扨は貴樣も醉醒しか。久しぶりの色事、ドレ抱てやらふ」と手を取ば、雉「ヤア此方の人か。ハア悲しや」芝「南無三、きやつ泣上戸。我等は悲しふても笑ふ、貴樣は目出たい事にも泣。イヤ又此樣な嬉しい折から、祝うて一つ泣給へ」と、餘念他はいも泣顔を、見せじと妻も氣を取直し、泣々笑顔繕ひて、雉「ホンニ又何處でやらきつい機嫌で戻らしやんした。そふして、マア最前の捕人の侍、取卷れてござんした、其仕廻はどふ付たへ」芝「サレバ〳〵、そこをぬかつて能物か。此能ふ廻る舌をもつて、立板に水を流す如く、とんと匿ませぬにて、すつぱりと云抜て戻つ

ないじやくり―歔唏となしにかく
十三年―三作の年

にならふも知れぬ。夫が悲しさ、尋常に名乘て出ます。常々お前の咄しにも、今の爺樣は、義理の有親じや程に、猶太切に孝行にせいと、ソレ云しやつたを、わしや能ふ覺へて居ますわいの。わしが仕置に合た跡で、爺樣の泣しやれぬ樣に、京の町へ奉公にやつたといふて置て下され。是からは杉松を私と二人前可愛がつてや。鹿や兎の命を取ば、どふで末は斯ふなるもの、せめてあれ一人は、狩人さして下さるな。それはつかりを賴みます。さらばでござる母樣」と、親の代りに罪科を、引受る氣の立派さを、思ひ合せて、雉「ハアはつ」と今更未練なとめ樣も、あらがいやうもないじやくり、「扨も〳〵、健氣なといはふか、産だ子ながら恥かしい。義理有後の親夫、わしやまだ恩を得送らぬに、大人も及ぬ發明は、一生の智惠も壽命も、十三年につゞめたか。こんな子を持た親と、ひけらかしたい稀な子を、世にも稀成大垣の、土の中へ生ながら、石礫詰で殺すとは、なんぼ前世の約束でも、余り惨い約束事。イヤ〳〵、なんぼふでも殺さぬ〳〵」と、我子にしつかとしがみ付、涙の瀧にしめるにぞ、いとゞ喰入縛り繩、役人「ヤア成敗極る科人に、返らぬ譯言。今宵の中は寺中の法事、明六つの鐘つくを相圖に、山本の土中を掘て石礫詰の刑罰。最早七つ、もふ一時、刻限移る」と引立る。「なふ胴欲な。いは

大垣の刑―所謂石子詰
當推―あて推量
つゝともふ―とんともふ

大垣の刑に行ふ大法」雉「エヽイ其御詮義は聞へたが、狩人も多い中、外の吟味はなされいで、此子一人が知た様にあんまりな當推。但し證據でもござりますか」役人「ハテ證據なくて名を指そふか。其躮が所爲といふ事、慥な訴人有て明白」雉「ムヽ其訴人したは何所の奴じや。覺へもない無實を云ふやつ、切刻んでも飽足ぬ。其訴人め、サア爰へ出してお見せなされ」役人「ヲヽ訴人は此躮、現在の弟が注進、よもや相違は有まい」と、聞て悔り、雉「コレ〳〵ぼん、吾儕はさつきにから何所へ往て居やつた」杉「アイわしや此狀もつて、あの坊様の内へ往て、連立てもどつた」と、いふに怪しと引取て、讀度々に胸どきどき、「何じや、お尋の鹿を殺し候者は、私兄の三作に違ひござなく候。そんなら此書付を」杉「アヽわしが持て往た。サヽ兄様賃下され、饅頭欲い」と頑是なき。雉「エヽ何いふのじや。つゝともふ性もない子供のいふ事。取上て下さりますな。ノウ三作、何のそなたが其様な、法度を破つてたまる物か。サアちやつと云譯しやいの」と、つき出せば、顔ふり上、三「いかにも弟が訴人の通り、鹿殺しは私でござります」雉「コレ〳〵そなたは氣が上つたか。狼狽所じやないぞや」三「イヽエ狼狽はしませぬ。わしが手にした事覺へのない狩人の、中間の衆に吟味がかゝり、ひよつとどふした人違へで、爺様の難義

思ひしが、子に絆されて大事を誤る、今の行跡、拷問に及ばゝ、慥に白狀。どふも天皇長く爰には置まされず。今宵の中に山越に、お供して立退ん。皆々密に用意々々。我は猶も芝六が、歸りを待て一詮義」と、鍔元くつろげ立上る。「マア／＼お待なされて下さりませ」と、お雉は駈出手をつかへ、「お疑ひもさる事なれど、あれ程に迄思ひつめ、御勘氣を赦されふと、心を碎く夫芝六、中々白狀致す樣な、未練な心でない事は、私が存じております。一先歸りをお待なされ、其上胡亂な事が有ば、一天の君にはかへられぬ、夫とは云せず私から切かけます。其時にこそ心底の、明き暗さは今宵一夜、憚りながら私に、お預けなされて下さりませ」淡「ムヽ實一命をさし出し、頼るゝ程の玄上太郎。とはいひながら草も木も、我大君の國なれど、今は草木にも心置るゝ此時節、すはといはば用捨はならず。御前へ參つて返事を待」と、心ゆるさぬ關の戶は、破れ障子のつゞくりも、反古にせじと間に合紙、書あつめたる胸の中、母の心を三作も、倶に案ずる折からに、興福寺の衆徒鹿役人、先に立たる杉松が、しるしの門口指覗き、「ムヽ、科人はあの躮よな。捕た」といふや、否應云さず三作を、取て引立用意の早繩。お雉驚き、「コリヤ何事。大事の子をどふするのじや」役人「ヲヽ鹿は春日のつかはしめ、殺した者は古へより、

白地の神―知らぬ及び紙にかく

かくまい―貯蓄

差當―さし當てると當座

ほんまじや」杉「そんなら合點じや。往て來ふ」と、すかさるゝのも、僞寄のも、年より賢き杉松が、狀懐にちよか〳〵走り、見送る兄が書殘す、筆の命毛器用なが、仇と白地の神ならぬ、折もこそ有ひそ〳〵と、表に窺ふ捕手の侍、「ソレ」とかけ聲かけ入て、駈行奥より駈け出る芝六、「待た〳〵、こりや人の內へ、理不盡に狼藉千萬。ム、聞へた、お前方は鹿奉行のお手下じやな」捕手「イヽヤ此家の內に吟味有て、入鹿大王より詮義の役人。儕が內に匿ひ置た者有べし、眞直に白狀」と、かさにかゝれど悔共せず、芝「ハア何の事かと思ふたら、私じや迚、貧乏な狩人でも、相應のかくまいは致さいでは、それを御吟味とは、お役人に似合ませぬ。仰山なお侍樣」捕手「ヤアとぼけな。かくまひ置たはお尋の天皇、幷に鎌足が躮淡海。是非あらがへば此通と、傍に有合ふ三作を、取て引寄指付る、刃は胸に差當る人質取れて、芝「ハア〳〵〳〵」捕手「サア〳〵何と」と詰かけられ、芝「先々お待下されい。如何にも申譯致しませふが、爰ではどふも申されず、大庄屋の方迄參り、委細白狀致しませう」捕手「ム、然らば早く、サア歩め」芝「ハツ〳〵、コリヤ、三作、わりや戸をしめて、嚊に氣を付いと云へ。いざお役人」と打連て、毒蛇の口の一思案、心は跡に出て行。一間に樣子立聞淡海、「局々」と呼出し、「芝六が心底、忠臣無二と

ぎつくり—胸に釘
築山—盡きにかく
しんみ—深みと親身

よもやとは思へど、萬一箆相でお前やなど、そんな覺へはないかいな」と、空問ひかけるも夫思ふ、しかも牝鹿は覺へのぎつくり、三「ハヽヽハテ譯もない。奈良の傍は、赤子でも知て居る鹿の法度。石礫詰にあふ事を知つゝ殺す白癡が有物か。したが、鹿といふは質置事。一體しがないおれなれば、ぶち殺すは常住の事」と、云紛らしてもどこやらが、鹿子まだらの雪見酒。三「氣が築山で一抔せふ、噂燗つきや」と女夫中、醉た顔でも濟やらぬ、積を押へて入にけり。村の歩人が表から、「コレ〱興福寺の塔頭から、鹿殺しの科人、獵師中間に極つた、友吟味して訴人したら、御褒美を下さるゝ、とお觸が廻つた、庄屋殿迄早ござれ」と、云捨歸る高聲は、小耳にはつと三作が、若爺樣の身の上に、詮義かゝらばどふせふと、稚心のやさしくも、眞實案じ侘住の、手習文庫破れ双紙、筆くひしめし何やらん、七ついろはの清書文章、かき捜しやの椀白弟、「コレ兄樣さつきの箱下されや。くれぬとコリャかふじや」と、引たくる筆のしんみは憎からず。三「ヲヽ夫もやらふが、コレ杉松、兄が頼む事聞てたもるか、此狀を持ての、太義ながら興福寺の門を擲いて、寺中へ差上ますといふて渡して來てたも」杉「ムヽそしたら何ぞ賃下さるか」三「やる共〱、賃には春日野の火打燒買てやろ」杉「又嘘、欺すのじやないかや」三「イヤ〱

念なふ―思ひの外に
得―疾く
浮木の龜―云々法華經に佛難得、値如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木之孔とあり
水魚の中―君臣睦しき事

も夜の御殿に入ん。思へば我は斯の如く、錦繡羅綾の内に座し、民の艱苦を露しらず、德なふして榮華に耽る、神の照覽勿體なや」と、御身の事は知り給はず、民を憐む御詞。各顏を見合せて、額に涙の天が下、暫し入御なし奉る。芝六跡にさし寄て、「仰付られた彼爪黑の女鹿、近邊の山々尋ても、扨少い物、是迄ついに見當らず、漸昨日見付出し、念なふ射とめ、乳の下の血汐を絞り、壺に認め置ました」淡「ヲヽ、太義々々。正に天下の用に立る、得難き鹿の手に入事、偏におことが忠義の働。父内大臣鎌足、得より入鹿が亂を察し、罪なくして身退、興福寺の後なる山上に取籠、天皇御惱祈の祓百日の行ひ、則今日が滿願の終。帝此家にまします事、先達て知らせたれば、明曉、六つの鐘を限りに、密に是へ來らるべし。其時こそ其方が勘氣も赦免、改めて元の家來、玄上太郎利綱」芝「ハア、コハ有難し忝し。この年月の念願成就、浮木の龜共、優曇華共、此上ながら鎌足公へ、お執成仰ぎ奉る」淡「必氣づかひ致すな」と、主從水魚の中臣氏、土に生ても穢なき、藁屋の御殿へ入にけり。樣子立聞女房の、嬉しい中の心懸り、「草臥さんしよ」と立寄て、雉「イヤアノ此方の人、わしやお前に問たい事。今朝の噂に、マア聞しやんせ、きつい法度を知りながら、春日の牝鹿を射殺した者が有迚、嚴しい吟味がごさんすげな。

てこにおへぬ—力に叶はぬ

坊主—子供

かぐれ様—目盲様

左近云々—紫宸殿の前なる左近の櫻右近の橘

望、舊出來るにしてから、笛太鼓で騒立ば、忽ち人に御有家を知らるゝ難義。何と智恵は有まいか」芝「知恵というて、私らがてこにおへぬ樂とやら、舞とやら、一體お前がこんな内で、太平樂おつしやるからじや。ハア、何と是はどう有ふ、私悴く廣瀬に居た故、べれ〳〵萬歳を覺て居ます。坊主めに舞して私が小鼓、管絃の代りには成まいか。素袍烏帽子がないけれど、そこらは、かぐれ様の一徳、常の形でも大事ない〳〵」逆「ヲヽ、それ究竟」と、御前に出、「樂人延引仕る中、廣瀬村の萬歳、瀧口へ參り候。梅の早咲と申、春に先立參るも吉左右、庭上にて千秋萬歳、相勤させ候はん。ソレ御免なるぞ、始めませい」と、仰もあいに愛らしく、時の幸才若の、扇開いて萬歳萬歳と有難かりける我君の、御惱しづまり、御目も開き給ひけるは、誠に目出たふ侍ひける。昔の京は難波の京、中の京と申は、志賀辛崎の松の色、かはりし物は、我々が身の有様、君はかはらせ給ふなと、千年の齢奉る。忠臣の柱は月卿雲客、日本の柱は日天子、三本の柱は左近右近の花橘、四本の柱は紫宸殿、五本の柱は五畿内安全、八重九重の内迄も、治り靡く君が代の、千代に八千代を小石の、祝ひ壽き申にぞ、甚叡感おはしまし、帝「いしくも祝しつる物かな。誰か有、祿取らせよ。管絃糸竹も祝義は同じ、今日の舞樂も事終れば、百官百司も退出有。」獄

常寧殿—大內の御殿にて中宮女御の御住居

竹林の七賢—阮籍、向秀、王戎、山濤、阮咸、劉伶、嵆康の七人

綸言云々—綸言汗の如し一度出ては再び返らずの語による

ん」と、立んとするを、帝「ヤヨ淡海、さな心いためそよ。膳番の者の罪ならず、兩眼くらき病ふの上、采女が別れの歎に沈み、思へば詮なき心の迷ひ、不徳の君と蔑しまん恥しさよ。爰は常寧殿よな、夫に詰しは誰々ぞ」淡「ハア大納言兼秋、右大辨政常、其外參議、中將、少將、百官、百司、殘らず參內仕る。エヽ、御目だに明らかならば、遠方の御幸はならず共、此內裏の中にても、見所は樣々。其障子の繪衣には、桐に鳳凰、見事な彩色、上段の繪は、竹林の七賢、又清涼殿の廊下より、奧の間の四季、杉戸には蘆に鷹、雪に梅、種々色々の名畫名筆、毎日見ても飽ぬ御殿。夫よ初春にもならざるに、梅壺の梅今を盛り、君の御目も開かるべき瑞相にて候」と、誠しやかに奏聞有ば、帝「實さこそ。十善の位には卽ながら、此九重の內だにも、見る事叶はぬ常闇の、御裳川の流れを穢す、我誤りのなす所。誠にこの月の內侍所の御神樂、兼てしゆらいも有べし。病平癒の祈なれば、樂人共を召出し、壽の管絃を始めよ。早とく／＼」と、仰に恟り、淡「ハツハツ」と計俄に管絃の才覺も、出て返らぬ綸言の、冷汗ながら、淡「ハア／＼是はよき思し召。樂は何がよからうぞ、還城樂か、武德樂か、樂人只今追付是へ。エヽ何として遲參致す」と、立端のしほに芝六が、手を引て門に出、淡「扨迷惑な敕諚。俄に管絃のお

あかり障子―今の障子のこと

密夫の代、三百目の内で六十六匁引て、跡が二百三十四匁、こつちへ今請取ふ」米屋「ヤア夫は」芝「サア今渡せ、サア〱」と詰かけられ、ぎつちり詰つた入口ぴつしやり、門からしめて　米屋「留主じや。密夫代も米代も、逢さへせねば取やりなし。留主は五分五分、算用濟だ」と、お留主に成た腰の骨、ちが〱引ずり逃歸る。姿は地下に落ながら、心の官位右近衛の中將淡海公、する〱と立出、淡「兼秋卿、政常卿、君にも益叡慮めでたく御渡り。是といふも芝六夫婦が深切。虎の口の御難を遁れ、此家に匿れ奉れ共、計らざる入鹿が亂、帝の御耳に達しては、彌御惱も重らん、と何事も包隱し、只太平の容にもてなし、御目盲させ給ふを幸、此荒屋をやはり禁裏の御殿の中と、僞りすかし參らする我々が氣苦勞。此上ながら御悟りなき樣に」と、詞半の破れ疊、「出御なり」と警蹕の、聲諸共に押明る、あかり障子に御格子に、御棹はしや天皇は、此賤が家とは夢にだに、白平絹に緋の袴、褥に玉座なりければ、各々「シイ」と公卿達、威儀を正して拜謁有。配膳の典侍、阿茶の局、四方の御盤、平戸燒の茶碗、土器共儘に、下る御膳を、淡海押とめ、「朝餉、晝の御膳、少計召上られ、今夕の供御はお手も付ず、此儘下よと勅諚か。扨はお料理が御機嫌に叶はぬか。エヽ、不調法な、御膳番の大隅大炊頭、急度申付

手の筋見る人ー易者

薄いー貧しい　しやり迚ーさりとてにかく

ハァ手の筋見る人か。コレ茶一つ汲で下あれ」雛「アヽ、滅相な。あなた方は大事のお客」米屋「何じや、客じや、米代も拂はずにあんなけない人取込で、まだ米屋を街のじやの。コレ喰ひ潰し達、おれが喚くが無理か、此書出し、ソレ見やしやれ」公卿「ムヽ、此切紙は色紙の形。扨は歌か」と、つく〴〵眺め、「ハテ珍らしき五つ文字、書出し、一つ米代、六十六つ、去年の霜月、殘る銀。是は戀歌共思はれず」米屋「イヤ戀も戀、借錢乞じや」公卿「何にもせよ下々には、優しくも三十一字をつらねしな」米屋「エヽ、三十や四十の端た錢じやないわいの。貴樣もかゝり人なら、よふ聞かしやれ。爰の芝六は盜人じや。かふいふが無念なら、サア金拂へ。かふは云物の、コレ嗅衆、こなさんの心次第で、アヽ結構な了簡が有にナ。ヤア薄い芝六に、百目近ふ仕送つたは、しやりから付入て、貴樣の舍利塔、疾から念かけて居るに、しやり迚は胴欲な、留守が定なら、コレどふぞ」と、ひつたりと抱付ば、雛「アヽ、是何さしやんす。主が内に居やしやんすぞへ」米屋「ヤア〳〵内に居るなら銀受取ふわい」雛「イヽエ留守じやわいな」米屋「留守ならちよつと」と、又取付、首筋摑んで板間にどつさり、愕りしながら負ぬ顏、米屋「ヤア芝六、夫程内に居ながら、よふ留主つかふな、サア米代受取かい」芝「イヤ米代は渡して有」米屋「ソリヤ何時渡した」芝「ヲヽ

おおちや云々―官女の名の頭にお字を附く
小みづ―小言か
釣付―ひつぱる
ふづくられ―踏みつけられ
はしたなき―醜き

羅錦の平田帶、根から似合ぬ御裝束、矢脊のけらを見る樣な、名もかへて右大辨助樣、お前は大納言兵衞樣、こちら方が髮も町風に、島田とやらに結直し、「おおちや、おいちやに、お梅が香、在所の嗅の風俗は、憚ながら私が傳授。アヽこりや嗅、上樣の御膳はまだか。何れも樣も、嘸御空腹にござりませふ」公卿「イヤ〳〵心遣ひ無用々々、帝さへ御安體なれば、臣等が事は苦しからず」と、殿上人も世に連て、食客の身の氣の毒顏。若「イエ〳〵何ほ尋常におつしやても、內裏樣も喰にや立たぬ。思ひなしか昨日から、めつきりとお顏が細つた。嗅マアちやつと、握り飯なとして上い」と、亭主は如才內證の、しがをくろめて入所へ、腰に帳面ぶら〳〵、爰へ郡山の搗米屋、「內方にごんすか」嬶「ヲヽ新右衞門樣、能ふお出たれど、折惡ふ今日は」米屋「ヲツトお內義、又留守といふのか。喃日に來ると、いつでも朝から內に居ぬ故、今日は留守を云さぬ樣に氣をかへて、朔日に仕かけた。拂はぬ癖に、節季に書出し何故おこさぬ、と小みづがいやさに、コレ持て來た此書付。去年の尻殘りが六十六匁三分五厘、何時迄釣付るのじや。ふづくられては居ぬ男じや。サア〳〵今拂や、今受取ふ」と、傍響す聲高く、大納言押とゞめ、「ヤヨ下々の者、いとはしたなき爭ひかな。しづまれよや」と、有ければ、米屋「ヤ貴樣何じや、

緩怠—横著
しよげつばさ—しよげ鳥にて身窄らしきさま
初更—五ツ時にて午後八時
仕丁—禁中の小使
お后様—后を自分に王を夫によせたり
邌もの—祭禮の時の山車
流—質流れ
かます袖—彌賓に似た大袖
兜羅綿—兜沙といふ木に生ずる綿

方から遠慮すれば、けつかして、下馬緩怠、お叱りなさる」と、笑ひ綻ぶ障子の中、しほたれ公家のしよげつばさ、しよんぼりと立出、公「ノウ〳〵上臈達、夜も早初更に及びしに、夕御前の供御、何として遅なはる。膳番は何國に居る、怠りなり」と叱らるゝ。雉「ホヽヽヽお公家様方とした事が、やつぱり禁裏の格式で。何のマア猟師の内に、そんな仰山な膳番とやらが有物か。あなた方には御存ない、貧乏世帯といふ物は、何も角もたつた一人。むつくり起ると釜の前、庭の掃除は仕丁の役、お清所の飯焚役、鎰の出し入内侍役、とんと仕廻しまふて寐る所がお后様。百人前する事なら、手の廻らぬは御推量遊ばせ。此又此方の王様は、遅い事じや」と夕やみに、山を仕廻ふて親子連、息喘き背に大風呂敷、寒風に汗たら〳〵下りの我家の門、芝「嗅今戻つた」と内に入、「コレハコレハ大切なお方々、なぜ端近ふ出しますぞ。お前方もお前方、在所の邌もの見るやうな、其大層なお姿で、によろ〳〵出て御座つては、何ぼふ山家の一つ家でも、誰が見まい物じやない。お局方も年中、巫子殿の様に、其長い物を、此狭い内で引ずつたら、裾踏で轉さつしやろ。夫でコレ、奈良の町でよい流れ買てきた、サア〳〵是をお召替へ」と、風呂敷解て取出し、著せる褞袍の行尺も、哀昨日の長袖を、在所小紋のかます袖、似せ兜

恐ふ—恐ろしう

供御—帝の御膳

十善—前世にて十惡を犯さぬ者此世で帝王となる

て親と子が、道は二筋引別れ、山路をさしてぞ 三重 急ぎ行。谷山峯に暉かす、數の松明螺鉦の、響に連る青顧の聲、松の嵐も囂き。「スハよき時分」と芝六は、弓矢つがふて鏃の方、木影に隱れ待所へ、猪を狩出す山路の騒ぎ、倶に驚き馳來る鹿、件の爪黒 芝「得たりやつ」と、切て放す矢あやまたず、鹿の咽吭貫きて、其儘其處へ倒れ伏。三作はかけ付て、「爺樣射とめさつしやつたか」父「シイ聲が高い。ヲヽ首尾能ふ仕留た」三「エヽ爺樣、どふやら恐うなりました」と、身を震はして涙聲、父「ハテくど〳〵と氣遣すな。人の見ぬ中歸れば濟」と、傍見廻し心を配り、鹿引かたげ親子連、宿りをさしてぞ 三重 立歸る。三笠が本の雨舍り、烈しき嵐吹越して、君が御遊の御車は、此藁家にとゞまりし。獵師芝六が詫住居、妻のお雉も建やかに、仕へ參らす大君の、供御のしかけの米粒を、撰むも女中の手談に、紺の蔽膝、緋の袴、打交りても女子同士、つい馴安きならひなり。「ホンニいか樣、上々樣といふものは、此樣に一粒々々米を撰、是はちつと色が黑い、是は角が欠たの、と皆撰出して、上ます米は二粒か三粒。神樣より大切な十善の主樣、斯なふてはならぬ筈。是を思へば勿體ない、王樣に上る供御を踏碓、踏ば足が腫ふ」といへば、女中が、「何のいな、上樣でも肝心の時は、やつぱり臼がお好でな、勿體ないと、此

長柄―轅
いつきせき―息喘
青顧―列卒にて狩の時の人足
シタが―併し
わいら―汝等

れば、主上は安堵の御思ひ、御悦びは限りなし。淡海は官女を制し、「急いで還御」と先に立、長柄を取て舍人役、押て行衞はいづことも、空定めなき空勇み、露踏分て 三重 辿り行。山手の道より親子連、爰に名高き狩人芝六、弓矢手挾いつきせき、人絶の木影に立留り、聲を嚬め、「コリヤ三作、此間から夜の狩、是は渡世の表向。雇ひの青顧共、山手谷々、方々とかけ廻す、此物音の騷に紛れ、兼てそちに云付た、彼爪黑といふ女鹿は、千疋が中に一疋、夫取たいばつかりで、此樣に骨を折、其念力が通つたやら、アノ葛籠山の向ふの谷合、見付得た其爪黑。アノ猪狩の螺鉦で、ぼつ立たら驚いて、向ふの山を越は必定。そちは是から谷へ廻り、青顧に螺鉦打鳴させ、件の鹿を追出せ〳〵」三「ヲヽ心得ました。シタガ是父樣、追出すは安い事じやが、鹿を射は所の法度、お前の身に難義が出來ては、母樣やわしが身は、どふしませふ」と稚氣に、後を案じる賢しさは、孝行見へて不便なり。芝「ハテ扨氣の弱い事をいふ。それ知れてたまる物か。もししられたらば百年め、命がけな事するのも、此身の榮耀を望むではない、所詮此狩人商賣、人間のする業じやない、せめてわいらには狩人がさせともなく、侍にせふ計じや。爺が身に氣づかひはない程に、サア〳〵早ふ谷陰へ。おれは別つて麓の方。合點かぬかるな」三「心得た」と、牒し合せ

勅諚。淡海初め付々も、皆悦びを奏する所へ、禁庭の勤番使、御車の御跡慕ひ、息つぎあへず馳參じ、「主上是に渡御なる事、漸々相知れ御注進。今日蘇我の蝦夷子館へ、行主公勅使として大判事を召連られ、渠儂叛逆吟味の所、速に白狀有て、蝦夷子は其座に切腹有、清澄是を介錯す。然る所行法に取籠つたる入鹿大臣、寶藏へ忍び入、村雲の御劍を奪取り、誠は親蝦夷子に越、王位を望む大惡人。行主も忽手にかけ、禁庭へ馳込だり。是に支へる公卿の面々、或は蹴殺し切倒し、上を下へと迯さまよひ、さしもに廣き禁裏の內、人種も盡ん計。猶も追々注進」と、呼はり捨て立歸る。皆々はつと驚きに、わきて帝の御歎、「いか成天の咎めぞや、思ひ計らぬ入鹿の惡心。我四海の主として、臥所さへなき身となるは、淺間しき境界」と、歎かせ給ふを淡海は、「御心よわき御仰」と勇る中に思慮を廻らし、竊に官女の耳に口、申合せて車に向ひ、「思ひがけなき只今の注進、是より馳付遠見を致し、安否を言上申さん」と、出行振の僞りも、盲目の君の御心地を、休る術こなた成、木影に暫し佇む中、取々いさめ奉る。暫く有て淡海は、急ぎ歸りし足音して、御車近く息をつぎ、「只今遠見致せし所、諸國の軍勢蟻のごとく禁庭へ馳參り、さしもに猛き入鹿大臣、直に退け候へば、忽內裏は穩なり。早入御ならせ候へ」と、誠しやかに相述

我衣手は云々ー秋の田の假ほの庵の苫をあらみの歌

わきもこー我妹子にて親しき女にいふ

節會ー禁中の儀式

問申せし通り、采女樣入水の跡、猿澤の池にて候」と、申上れば今更に、御落淚をせきあへで、「思ひ出せば去年の秋、民の營み憐て、わが衣手は露に濡つゝ、と丸が詠ぜし傍に、筆を取し其采女、早此世には無き人とや。誠に我衣手は、淚に濡るはしならん。せめて今宵の手向ぞ」と、「わきもこが寢くたれ髮を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき」と詠じ捨、御淚こそ限りなし。かゝる折しも此方より、尾羽打からせし浪人姿、御車近く手をつかへ、「女中方へお賴み申。帝樣の御車と遙に見受申た故、押て御願ひ申事有。憚ながら奏問の御取次賴入」と、いふ聲夫と聞し召、帝「ナニ珍らしや淡海なるか」と、仰に猶も頭をさげ、「私過つる節會の時、神例の式を過、とくよりも勅勘蒙り、先非を悔て內裏を遠ざけ、市中に竄り有所、曾我の蝦夷子我意を振ひ、父鎌足も蟄居致させ、猶玉體も安からず、と聞より前後顧ず、何卒玉體守護の爲、勅勘の御赦免を願ひ上奉る」と、土に平伏詫にける。君叡感斜ならず、「朕が不德のなす所か、左右に奸佞の人絕ず、蝦夷子帝位の望有て、叛逆の企有事、嫡子入鹿大臣が忠臣に事顯はれ、安倍の行主を使に立、今日事を糺すに及ぶ。いまだ歸り來らねど、蝦夷子が自殺は目下、鎌足內裏をさげし事も、悔に甲斐なき有樣ぞ。今より元の淡海、再び忠勤勵むべし」と、さも有難き免許の

らひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨に勝れり」の歌をとる

らひ、柄長の御傘差かくれば、六つの花瓣ひら〳〵雪、威風邊を拂ふ雪、深き思慮有大判事、前後のそなへ嚴かに、御車はつと時めきて、内裏をさして出てゆく。

第二

山又山も都路は、心に連て奥深き、名も猿澤の池にさへ、波立世こそ憂かりける。此方の道よりたどり來る、山働きの狩人共、打連立て立留り、「コレ九右衛門、こちらが仲間の芝六が、此間から夜狩して、能代物付出した。夫でおいらを助けの雇ひ、葛籠山から、山城境へ入込で居るとの事。今夜はぐつと、働いてやらにやなるまい」九「ヲヽサもふ明ても暮てもおいらが相人は、猪武者五六疋射とめてやつて、ぐつと褒美を貰はふ。サア〳〵行ふ」と世渡りに、追るゝ獵師山も見ず、足を早めて急ぎ行。世の憂さは、尊き卑きも亡魂の、雲隱れせし思ひ人、采女の局の跡慕ひ、勿體なくも萬乘の、帝の歎淺からず、御所を忍びの夜の鶴、夫とは更に人知ず、舍人にも武官にも、只官女のみ道案内、池の邊りへ御車の、きしるさへ物淋し。殊に盲目の君なれば、哀も勝る御姿、宣ふ聲も打しほれ、帝「此邊りが猿澤の池なるか」と、仰に官女進寄、「此間久我之助淸舟、奏

違背申べし—申べきの誤か
三德—智仁勇

丸—自ら

烈—列
供奉の云々—古今集の「みさぶ

子に心を付、油断の間を行法の、築山より禁庭の寶藏へ隠れ道、土を掘石を穿、妙計違はず忍び入、疾より評定有りしに違はず、神璽御鏡失給へど、村雲の寶劒は、安々と手に入たり。父が命妻が命、芥の如く見捨しは、此時を待謀。あら心地よや潔し」と、御殿に響うなり聲。扨はと驚く大判事。玄蕃彌藤次、弓と矢番ひ取かこめば、大臣重ねて、「馬鹿者の舅行主、血祭りに手にかけた。其方は我所存有ば、味方に付ば其通り。否といはゞ行主同然。サア勝手次第に返事せよ」と、大惡不道の入鹿が行跡。爰ぞ大事の大判事、心を定め低頭平身、「時を得給ふ大臣に、いかでか違背申すべし。我君と仰ぎ奉る」と、申上ればにつこと笑ひ、入「ホヽ潔し〳〵。三徳備はる此入鹿、天地の間に挾まる物、誰か敵對ふ謂なし。今日より我こそは萬乘の主たり。アヽラいまはしの墨衣、いでや衣服を改めん」と、呼はる聲に數多の官女、てん手に著せる綾錦、立直つて大音上、「清澄は皇居の案内、玄蕃彌藤次殿せよ。是より禁裏へ馳せ向ひ、帝を始め月卿雲客、殘る寶の有所を責問、攄ひしいで心の儘。中門のほとりへ丸が車をすゝめ、官人共來れやつ」と、聲に隨ひ數多の武官、烈を正して先備へ、玄蕃足駄を奉れば、ひらりとおり立勇の姿、心も雲井に高足駄、門出の音樂璉然と、又も降來る雪の空、心得供奉のみさぶ

十方―途方

腹切刀、蝦夷子が前に指置ば、行主立寄、傍なる雪人形手に取上、「コレ見られよ。愚成譬なれど、此束帯の雪人形、其形をなすといへ共、火に當れば忽水、其人にあらざる逆心、消果るは天の御罰。せめて最期は此雪の如く、潔く生害有」と、諫の詞を耳にも入ず、無念に堅まる雪人形、傍なる火鉢の炎の上、つかみ砕は水烟、肌押くつろげ腹切刀、腹に突立怒の眼中、蝦「ヱヽ無念口惜や。仕込に仕込し我大望、現在の忰入鹿が手より洩たるは、我運命の盡る所。去ながら、此蝦夷子世を去ば、見よ〳〵忽天地は常闇。不具者の帝を始め、月卿雲客思ひ知」と、きり〳〵と引廻す、太刀取後に大判事、はつしと落す首諸共、矢一つ來つて行主の、胸板射抜あへなき最期。大「こはそもいかに」と恟り仰天、十方にくれて立まどへば、「ヤア清澄、必驚く事なかれ」と、聲かけて一間の襖、二人の武士に引拂はせ、築山の岩間陰、しづ〳〵出る入鹿大臣、髪はおどろに麻衣、さもすさまじき有髪の僧形、大判事ぎよつとして、「ヤア入定有し入鹿公、不思議の對面いぶかし」と立寄ば、「ホヽ實も〳〵さも有らん、不審の一條語つて聞せん。父蝦夷子年を重ね、反逆の企有ど、其器小さくして、中々大望成がたし。爰を以て此入鹿、表には仁をかざり、父の悪事をうとめる容、佛法歸依と引籠り、帝を始め數多の公卿、父蝦夷

一家の佳、今老臣の蝦夷子大臣、麁忽の計ひなすべからず、と進出て使を乞受、取あへず馳向ふ。包まず言上申されよ」と、聞て蝦夷子は居丈高、「ハヽ〳〵、何事かと存たれば、此老人に逆心有とや。最前より遠く聞ゆる鐘太鼓、スハ禁庭に大事有と、思ふ折から我家へ勅使。佞人讒者の詞を用ひ、叡慮暗き帝の疑ひ、勅答致すも馬鹿〳〵しい」と、詞尖に云放せば、大判事進寄、「ヤア血迷ひ給ふか蝦夷子公。其身の白状進給ふ、行主公は一家の佳。叡聞に達する大事、再三吟味有ての事、いか程にあらがはれても、抜さしならぬ證據有」と、懐中より取出し、投やる一巻おつ取て、見れば覺の連判状、序文の手跡誓書の名印、さしもの蝦夷子も證跡に、「ハッ」と計驚く面色。行「ナント見られしか蝦夷子殿。我聟の入鹿大臣、此一巻を帝へ捧げ、諫ても承引なき父は逆心、子として是を顯はす事、不孝の罪莫大なれ共、君恩にかへる道なければ、叡聞に達するなり、我は祖父馬子が意をつぎ、佛法に歸依しぬれば、遁世の外なしと、引籠りめさるれ共、我娘めどの方、謀に命を捨、最前燒捨し贋物の連判状は、誠に逆心有かなきか、知らせの狼煙、貴殿の口より謀反の次第、最前既に白状の上、最早陳ずる詞はあらじ。ナントナント」ときめ付られ、一句一答詞なく、只默然たる計なり。大判事さし心得、三方に

身體—進退か
不敵—大胆
はらく—内々

一大事を聞た女、殊に安倍の行主が娘、所詮生て置れぬ奴。いふても殺すいはひでも殺す。其一巻爰へ出せば、苦痛せずに一思ひ。あらがふとなぶり殺し。サア〳〵何と」と付廻す。遁れがたなに肩先すつぱり、付込蝦夷子が尖き切先、手負は大地にこけながら、蹴上る白砂雪烟、手に渡さじと懐中の、一巻火鉢に燃立つ炎、嵐に連て烈々と、折しも聞へる鐘太鼓、蝦「ヤアいぶかしき攻鼓。連判状を燒捨しは、我大望を塞たる、不孝の入鹿夫婦の奴原、大事を敵に洩せしな。憎くい女め思ひ知」と、足下に踏付肝前を、刳りくる〳〵流るゝ血汐、雪を染なす唐紅、眼血ばしる表の方、「勅使成」と呼はる聲。蝦「ム、貝鐘の音に引かへ、勅使の案内は我胸中、窺ひ探る謀。身躰今日の一擧に極まる。装束せん」と不敵の蝦夷子、帳臺深く入にけり。程も有せず、細殿傳ひ、入來る勅使は安部中納言行主、副使の武官大判事清澄、威義を正して座に付ば、出向ふ主も衣服改め、上座に招じ頭をさげ、蝦「お勅使として行主殿、雪中の路次、別して御苦勞に存ずる」と、挨拶終れば膝を寄、行「今日の勅使、尋常の沙汰にあらず。貴卿は、父馬子より代々の功、忠勤あつく、君の寵にほこりたるや、ほゞ逆心の徒を語らひ、帝位をかすめん企有、と叡聞に達せし故、諸國の勤番武官の面々、此館を圍所、此行主は

さかしら事―讒言

有磯海云々―有に白洲を知らずにかく

妬みそねんでのさかしら事、と世の人の讒は耳に入鹿様、夫が積つてあのお覺悟。一人の榮花を極めん迚、讒も返り見給はぬ、蝦夷子様のお心さへ改めて下されなば、入定も止り給はん。夫の生死は爺御様のお心次第、嫁子不便と思し召、お聞入下さりませ。夫婦が命は厭ねど、お心が直らねば、お前も遁れぬ危い命。君の御恩を受ながら、十善の位を奪ふ、御謀反の思し立でござりませふがな。天道様の御罰にて、お身に報ふが悲しさに、わらはが御異見。悪心を止つてたべ蝦夷子様」と、舅を思ひ夫思ひ、合す兩手にはらはらと、涙深山の瀧なせり。始終とつくと蝦夷子大臣、「モウよい、すりや我大望、殘らず入鹿に聞たよな。そふ有ふと思ふた、氣遣ひすな。そち達が望の通にしてくれふが、まだ尋る事が有。めどの方駒下駄直せ」と、刀提庭の面、若や得心有磯海、底は白洲に危ぶむ目遣ひ、蝦「嫁近ふよりや」めど「ハイ〱」と立寄目先へ氷の刃。ハツと飛退めど「舅御様、そんならどふでも、思ひ止るお心はござりませぬな」蝦「馬鹿盡すな女め。天下を取ば肉身の入鹿、讓りくれんと思ひの外、道立する忰には、もふ構はぬ。思ひ立た大望、一度萬乘の位に昇る此蝦夷子。ヱヽ腑甲斐なき性根と知らず、入鹿に渡した連判狀、倅が有所知て居よふ」めど「イヱ〱御謀反の譯は聞たれど、連判とやらは」蝦「イヤ吐すまい。

ふ打やつて、爰へ來て火に當りやれ」めど「アノ胴欲なおつしやり事。夫は定に入給ふに、そもやまあ妻の身で、褥の上に居られませふか。雪に凍て死るのが、せめてもの夫婦の誠」蝦「ハテ貞節な心底。其實心を聞てお身に問たい事が有。悴入鹿が入定は、佛法信仰計で有まい。樣子無うては叶はぬ筈。親子に增る夫婦の中、夫の心知て居よふ。イヤサ何ぞ密に聞た事があらふがな。サ其子細が聞たい。我强うはいふ物の、實は不便な子の命、樣子によつて入定を止る、思案有まい共いはれぬ。どふじや〳〵」と脇道から、猫撫聲も氣味惡き。めど「イヽヱ親御樣さへ御存知ない事、何のわたしが知つて居ませふ。去ながら、脇目から存じますは、夫入鹿樣のお覺悟は、お前樣のお心が知ぬ故かと存じます」蝦「ハ、〳〵〳〵蝦夷子が心は今降る白雪、一目に見へて有潔白。サア其雪に埋れては、上から見へぬ塵芥、心の底がどふも解ぬ、入鹿が性根聞たい〳〵」めど「イヤ申、常に夫が申さるゝは、内大臣鎌足と父蝦夷子は、國に二つの柱同然、一つかけても我君の、お爲にならず、と物語、其大事の鎌足樣を追退けなされたには、深い樣子の有そふな事」蝦「ハテ知れた事。此蝦夷子は忠臣、佞人の鎌足をぼつ下したは天下の爲、我君のお爲じやわい」めど「イエ〳〵、鎌足樣に罪ない事は、世上の人が能知ておりまする。威勢を

五輪—地水火風空の五重の墓

龍田—立つにかく

けさ—今朝と袈裟

ごくに云々—役に立たぬ

どの方、便すくなき身の上を、諦兼し胸の内。譬願ひが叶ふ共、心變ぜぬ夫の氣質、それと知りつゝ頼みしも、妹御の親切を、破らぬ誠とやかくと、思ひ續けて庭におり、木草の枯葉詠ても、猶いや增の無常心、夫の命も今日限り、涙は胸にふりつもる、雪かき集めかき寄て、氷る手先も後世の爲、束ね丸めて五輪の形、「此世の名は入鹿大臣、頓生菩提」と手を合せ、心の回向せぐりくる、聲も憚るしめ泣に、哀はかなき風情なり。夫に引かへ奥の間は、地下を寫しの三味線に、なまめく歌の聲冴へて、(歌)花はちつても春は咲く、消て返らぬ其雪にさへ、劣る憂身は消もせで、あんまりといはふか、心ないといはふか、現在子といひ、嫁といひ、けふを限りの命ぞと、悲しむ事を聞捨に、捨た浮世に斷ふして居れば、仇名龍田の流の錦。めど「エヽ、心ない此中で、雪見の酒宴所かい。アノ鉦の打納めが、入鹿様の御臨終。夫を先立何樂しみ。我も一所に此雪と、倶に未來の道連」と、上著を脫ば墨染の、けさよりつもる廣庭の、雪に座をしめ合掌し、此儘爰に埋もれて、死んと誓ふ貞心は、天に通じて降しきる、膝も袂も白妙に、色香盛の黑髮も、八十の姥と疑はる。恩愛血筋に屈託せぬ、蝦夷子大臣一間を出、「嫁めどの力、まだそこに泣てるか。ハテ扨々ごくにも立ぬ、馬鹿者の入鹿が事を苦に病、物好な雪なぶり、も

凪の梶―和ぐにかく

泣て―なしにかく

いふ栗―いふと夕映

だ不吉な泣聲。此酒宴を妨るか」めど「イエ〳〵申、何のマア御遊興を妨げませふ。モウ何にも申ませぬ、涙もこぼしは致しませぬ。御赦されて下され」と、袖に解行しほり雪、思ひは胸に氷るらん。橘姫引取て、「申父様、モウ兄上入鹿様の事、申者はござりませぬ。御機嫌を直されて、別殿で御酒宴を」蝦「ホヽ娘能いうた。是よりは居間を替へ、再宴を催さん。玄番彌藤次も奥へ來よ」と、怒の風も凪の梶、妼共が取々に、一間へ伴ひ入にけり。橘姫心せき、「父上のあのお氣質、何程お願ひ遊ばす共、お聞入は有まい。是よりは此橘、大内へ急ぎ参り、何卒兄上入鹿様、入定を止り給ひ、再び昇殿有様に、幾橋のお局へお願ひ申心ぞ」と、力付ればめどの方、「難面は入鹿様。今日を限りの入定と、生別れのわたしが身、同じ館に有ながら、暇乞にお顔をと、願ふ事だに中々に、築山の門を閉、物いひかはす事さへも、泣て暮しております」と、むせぶ涙を友千鳥、同じ翅に露時雨、しのぐ方なき思ひなり。姫は涙を打はらひ、「めど様氣遣ひ遊ばすな。暮を限りの事なれば、一刻も早ふ自は大内へ」めど「夫は一入御苦勞ながら」姫「是はマア改まつた、わらは迚も同じ事。ソレ妼共、大内へ上る用意せよ」畏つて附々が、「輿乘物」といふ栗の、日比中よき嫁小姑、互に力付合ふて、禁裏をさして急ぎける。跡見送つてめ

毛を吹て云々—謗を利かす

めどの方—入鹿の夫人

定に入—生ながら土中に入り彌勒菩薩の出世を待つ

テ六つかしい御用害」と、譽る一言ぎつくりと、術の試毛を吹て、疵をくろめるしたり顔、暇「太切の此用害、其方は身内同然、見せて置も幸」と、俄になつける詞の艶、清「ハヽ此淸舟も武士の端、只今如きの御手配り、決して他言は仕らぬ。御氣遣ひ御無用」と、暇申て久我之助、左右に目配り悠々と、表をさして立歸る。跡に蝦夷子は溜息の、一間の襖押明て、入鹿大臣の妹橘姫、跡に續てめどの方、舅に心奥の間は、今日の酒宴にかけ合ぬ、鉦の響も身にしみ〴〵、めど「御機嫌いかゞ」と兩手をつき、「御酒宴の半ながら、あなた樣へ御願ひ。夫入鹿大臣には、秋の比より一向に、佛の道に入給ひ、奥の亭へ引籠り、一つの棺を地中に納め、丁ど今日が百日目、入相の鐘を限りに、定に入給ふと聞。何に譬ん此身の悲しさ。何と便が有物ぞ。少は思ひやり給ひ、お諫なされて下され」と、涙先立吒言。同じ歎を橘姫「何卒再び兄上樣、遁世の思し立とゞまり給ふお願ひ」と、一つ思ひを二人して、いふを打消父大臣「ヤア聞度もない入鹿めが沙汰。今此蝦夷子が威勢に次、何不足なき榮花を捨、佛法といふ天竺外道の術に歸依し、奥庭へ引籠り、晝夜わかたず稱名讀誦。此世に有て益なき悴、土へ成と定へ成共、入次第にして置めせ。また最前から鉦が鳴、エヽ忌はしい不孝者。嫁も娘も重ていふまい」二人「ハイ」蝦「いやま

さしつたり—オイ合點
尾籠—無禮

し事、飜らぬ鐵石心。勘當も赦さず、元より二君に仕へぬ所存」蝦「ヲヽ、其口剛き大判事、蝦夷子が幕下に付て見せふ」清「ホヽ、お手柄に如何樣共。親清澄得心致さば、其上もなき仕合。所詮私一人の奉公が相叶はずば、とや角申て益なき事、先お暇」と禮義をなし、廣庭におり立て、しづ〳〵歩む向ふの方、兼て云付置たりけん、玄蕃彌藤次立出て、前後を圍み二王立、「ソレ」と蝦夷子が下知に連、兩人一度に切付るを、身を沈めば双方の、刃は合打、「さしつたり」と、開いて又も横備、車輪の劍付込切先、清舟心得、左右の柄元しつかと握り、「蝦夷公の仰成か。何故に尾籠の手向ひ」蝦「ホヽ、不審は尤。其方が武藝の試、兩人に云付置たが、天晴々々」清「コハいかめしき御尋。若輩の私なれば腕だめしの覺もなし。猶此上に手練を極め、重て御覽に入ませふ」と、双方を突放せば、跡へしさつて兩人が、又も切込む刃と刃、庭の飛石エイウント請れば、御殿の天井より、怪しく下る鐵網に、清舟吃度眼を配り、「コリヤ再三のお試。眞劍のお相手がお望ならば兎も角も」兩人「イヤモウ驚き入たお手際。見屆ました」と双方の、刀は鞘に飛石も、元へ直せば御殿の網、棟木邊に隱れける。久我之助さあらぬ體、清「蝦夷子公試の切先を、受留た今の飛石、地を放るゝと下る鐵網、元のごとく石を置ば、網も隱れて其體なし。八

「ムへ、〳〵」とやくたい坊。立蕃彌藤次追立て、門外さして出て行。折から表の廣間口、取次の青侍罷り出、「大判事の子息淸舟、召に應じて參上」と、呼はる聲に入來る久我之助淸舟、器量骨柄武氣備はる、中に優美の長上下、禮儀正しく座に付ば、蝦夷子大臣進寄、「珍敷久我之助、使を立しに早速の入來。尋度事別義でなし。帝愛憐をかけ給ふ釆女の局は鎌足が娘、此比内裏を拔出、入水せしと聞つるが、其方は釆女が付人、實否を聞たく呼寄たり。噂の通り違はないか」淸「仰の通り釆女殿には、世をはかなく思ひ取、猿澤の池へ入水有しが、我傅の役目なれば、野邊の送り營參らせ、いまだ三日を過さず」と詳に答ふれば、蝦「さこそ〳〵。親鎌足が蟄居を悲しみ、淺ましい釆女が成行。其方付人の越度と成、親大判事に勘當を受たと聞。さ有ば主も親もなき身。夫に何ぞや、いかめしく禮服を著餝て、我目通りへ出たるは、心得難き汝が心底」淸「ハヽ御不審の段御尤。親もなく主君もなく、獨立の私。若輩ながら蝦夷子公へ、奉公の義願ひ上度、君と敬ふ此禮服」と、心に探りの一思案、まことしやかに相述れば、蝦「ホヽ扨は此蝦夷子を賴、奉公の望とや。若輩者の神妙々々。我も望む所なれど、其方が父大判事に、汝が勘當赦させて、親子共臣下となさん」淸「コハ仰共存ぜず。親大判事が氣質として、一旦申出せ

から剃―水をつけずに剃る

掛ふか」八「アヽ申々々、コレサコレ文聖寺、命がはりじや、どふなとして貰ましや」彌「ヲヽよい合點。今玄蕃の云わるゝ通り、いやといふと直に成佛、御前様のお慈悲を以て、うぬらが好の佛國、天竺へ所がへ」伴「イヤモウ天竺へ行いでも、ほんの是が天竺浪人、手に覺た能はなし、困つた物じや」と呟く中、玄蕃彌藤次傳手に衣剝取、引すへて剃刀手合せ、ごつし〳〵剃りかゝれば、兩僧は首をすくめて、アイタヽヽ、文「ちつと待て下さりませ。から剃りとはあんまりむごい。コレ八乘寺、こなたも嘸いたかろ〳〵。申々、どふも堪へられませぬ」八「アヽコレ〳〵文聖寺、夫は悟道の居らぬからじや。首がはりの此月代、悟の道を極たら、痛いと思へばいたけれど、ハテいたうないと思へばやつぱり、アイタヽヽ」あいた〳〵を興にして、蝦夷子は酒宴こなたには、奴頭に剃立れば、撫廻し〳〵、殘つた鬢に顏見合せ、文「ホンニあんまりの事で、いたおかしいわい。のふ八乘寺」八「ヲヽサ、われがおれか、おれがわれかで、どふも濟ぬ頭に成た」文「ハテ是からは申合せ、何なとして渡世する」八「貴僧は是より文聖寺の一字を取、文七と名を改めよ。愚僧は又、八乘寺の八を取、八藏と付てこまそ。ハレかはつた事になつたナア文七殿」文「ホヽこりや、マア目出度うなつたわい。こなたもそんなら今から八藏殿」二人「ム

底はかと—何處ともなく、養老の瀧の水底にかく

づくにうめ—法體のものを罵る詞(俚言集覽)

束帶姿の此人形、奇麗な事じやないかいのふ」と、譽そやされて兩人は、おとなげなくも出かし顔。蝦夷子につこと打笑給ひ、「ホヲ玄蕃、彌藤次、出來たく。イザ酌取」と、余念なく、廻る盃養老の、盡ぬ泉の底はかと、案内もなく廣庭傳ひ入來る二人の僧。彌藤次見咎、「ヤアく兩僧、何用有て罷り通る。御前成ぞ」ときめ付れば、僧「イヤ我々は御領分に住職致す文聖寺、八乘寺。佛法歸依の入鹿樣、今日行法の滿願の日なれば、拜禮に伺公せり。罷通る」と奧庭へ、入んとするを蝦夷子は睨付、「ヤア入らざる入鹿が佛三昧。うぬらも其組下か。忝くも日の本の、神の守護有我館、奧の亭へ通らんなどとは、其身をしらぬ賣僧共。首をならぶる覺悟せよ」と、氣色變れば、文「ア丶申お前樣が佛嫌とは、夢三寶存ぜぬ事。命はお助け下さりませ」八「ア丶是も又お嫌ひか存じませねど、拜まする」と手を合せ、身をふるはして青ざめ顔。蝦「ホ丶首引拔てくれんずなれど、取に足ぬづくにうめら。コレ玄蕃彌藤次、兩僧が衣を剝ぎ、月代を奴に剃立、門前へほつ拂へ。夫を肴に又一獻。婬共用意々々」と詞の中、ざはめき立て女中達、櫛笥の剃刀持出て兩士へ渡せば、こはぐながら文聖寺、「ア丶そんなら此衣をはぎ、頭を奴にお剃なさると、還俗でござります。どふぞそれは御堪忍」玄「ホ丶還俗がいやならば、兩人が手に

浮身―憂身
隱れみの―身のと蓑、天か下に雨を中庭になしをかく
肉屛風―女小性にて取廻すを屛風と見立てたり

程、帝様のお身の仇。誠有入鹿の大臣、父蝦夷子を諫兼、引籠り給ふ由。夫故父の隱家を尋求め、身を隱し姿をかへる身の望、只見遁しに賴ぞ」と、跡は涙にくれ給ふ。遣「ハヽ此身は傅の役目なれど、後日の難義少しも厭はず。御身の爲又第一は天子の御爲、成程落し參らせんが、諸士共、方々手配致せば、村口を御供申、たばかつてお通し申さん。先々是をお召有」と、件の簑笠きせ參らせ、いたはり出る出口の方、又も大勢足音して、以前の武士共走付、宥闇紛れ透し見て、「久我之助殿いまだ是にか。出口々々吟味せしが、お局の行方知ず」清「ホヽ拙者は山路吟味の上、コレ是に居る百姓が、怪しき人見付し注進。未夫とは極めねど、大方に采女の局。我は是より此土民に、案内させて吟味を遂る。各は此趣急いで禁裏へ奏問有」武士「ホヽ畏り候」と、皆々勇み大內へ。こなたは浮身隱れみの、笠に涙の天が下、清き心の清舟も、倶にしぐれて三重行空は、九重の、禁に隣る一構、三條の御所と持はやす、蘇我の蝦夷子が廣館、雪見の亭を設の座、女小性を肉屛風、奢に透間中庭の、蔭を轉すつかね雪、冷たさこらえ、主命の重き役目と宮越玄蕃、跡に荒卷彌藤次が、臺に乗たる雪人形、各機嫌を窺ひける。女中達口々に、甲「是はく御兩所のいかい骨折、殊に此雪細工、兎の耳がきつい手際」乙「ヲヽ枝折殿の云しやる通、

しどろ—亂れる
やごとなき—貴き

狼狽へる、其間に雛鳥打連立、館へこそは逃歸る。玄蕃は吹矢拔取て、堪忍ならずと追かくるを、久我之助押留、清「アヽコレ高が女の戯事、彼是いふ程却て恥辱」と、なだむる此方の岨道より、數多の侍走り付、「清舟殿是にござるか、方々とお尋申た。先刻采女の局樣、禁庭の御殿を拔出、いづく共なく行方知ず。貴殿事は采女樣の傅役、早々お知らせ申する」と、聞て驚く久我之助、「何采女樣御行衞知ずとや。ムヽ何にもせよ程は有まじ。貴殿方は是より直に、所々の出口を吟味有、我は山手を詮義致さん」玄「ホヽ聞捨ならぬ采女の出奔。蝦夷子公へ注進せん」と、玄蕃諸共數多の侍、出口の方へ急ぎ行。跡に清舟只一人、「ハテ心得ず」と一思案、胸もしどろに入相の、山手をさして步行。向ふより來る人音に、身を除てやり過せば、さもやごとなき内裏上﨟、心も空に步行、袖を扣へて、「采女樣でござりますか」采「ヤア久我之助か」清「ハア、只今組下の注進有て、采女樣には御殿を拔出、御行衞知ずと申が、いか成御所存有ての事」と、問れて辛き物語り、采「其方も聞及ばれん。蘇我の蝦夷子威勢にほこり、わが娘橘姫を后に立んと巧ての望。わらは君に思はれ參らせ、夜の御殿晝の亭、暫しもお傍を離ぬ猜み、父鎌足樣をも讒言して、大内を遠ざけ、何方にお渡有共、此身さへ露しらず。わらはが傅き參らす

成佛眼—目を細くする

へ願ひ置。ハテ今迄の事は、譬如何様な事有ふと儘よさ、此後心に随へば、其處はぐつと了簡する」小「是はマアきつい粋様。私は雛鳥の召使小菊と申者でござんす。ほんにマア浮世じやナア。入鹿様の様な聖人といはるゝ、情深いお方の親御に、アノ意路悪の蝦夷子様、其御家家の小意路悪、此方の御寮人を嫁にせふとは、ヲヽ笑止」と打笑へば、玄蕃睨付、「ヤイ／＼／＼女め、其過言覺ておれ。是から直に御所へ馳せ行、二人の様子を觸廻り、何奴も此奴も身の上」と、駈出すを婀共、袖にすがつて、「アヽコレ申、今の様にいふたのは、お前様のお心を引て見る謀。ヲヽ正直なお方では有はい」玄「ム、スリヤ身がいふ様に取持か」婀「取持いでよい物かいな」玄「ヲヽ夫なれば了簡する。サアお娘が眞實に應といふか、ソレ最前ちらと見て置た、吹矢筒の咡竹で、聞たい／＼」婀「扨も目早いお方では有ぞ。お望の通り、咡竹で御返事を聞しませふ。サア／＼耳へおあてなされ」玄「ヲッ」ト心得吹矢筒、耳に押當居合腰、「サアどふか／＼」婀「コレ申雛鳥様、よいお返事を早ふおつしやれ。アヽコレ申玄蕃様、恥しがつてでござります。ちつとの間お目をふさいで」玄「ヲヽ／＼／＼ヲヽ成程々々、夫も合點」と眞赤な、顔に似合ぬ成佛眼。小菊は心得有合ふ吹矢、筒へ差込口押當、ふつと吹ば宮越が耳へくつさり、玄「アイタヽヽヽ、エヽこりやどふしをる」と

吽竹ー竹の本末にて兩人互に吽くに用ふ

こかすー倒す

ちへ〳〵くつたー乳繰つた

の御寮人様、申たい事が有ど、恥しうござりますけな。幸な此吹矢筒、咄しに聞た吽竹、どふぞ聞て上まして」と、耳と口とへあてがふて、「かう此中を私が持、取も直さず媒役」雛鳥は筒へ手を、思ひ有たけ一口に、いへばこなたは耳で受、打默いて返り言、可愛いらし事通じ合、互に嬉しさ恥紅葉。玄蕃主從夢現、娵共は氣を利し、二人を床几へ押やれば、扇を開き寄添て、口と口とを鴛鴦の、ひつたり抱付此方には、ぐはつたりどつさり挾箱、こけ落るやら鑓持は、鑓をこかして立さはぐ。淸舟も打驚、床几を退けば宮越玄蕃、起上つて砂打拂ひ、「ヤア久我之助殿、よつ程に味やらるゝ。イヤ其處な相手は、過つる比、相果し太宰の娘。コリヤ興がるは。コリヤ能所へ出くはした」と、聞て二人は又悔り、淸「ムヽ、扨は太宰殿の息女なるか」雛「お前は大判事様の御子息、久我之助様か」淸「ホヽ、過行れし其方の父、太宰の小貳と我父とは、故有て遺恨有家。其息女とは夢にも知らず、只今の體たらく」雛「そんならお前に添事は成ませぬか。ハアヽ、はつ」と計にはや涙。宮越は聞とがめ、「スリヤ兩人は早ちへ〳〵くつたよな」淸「アヽ、いやこれ、必麁相いはれな。遺恨有家共知らず、最前の時雨の内、同じ床几に雨舍り」玄「ムヽ、成程、今の雨舍り、夫なら夫にして置ふが、一體此雛鳥には某が大執心。夫故宿の妻に申受ん、と兼て主人

御寮人ー雛鳥をさす

下行く水のこぼれ口ー思ひが外面に顕はるゝ

し。小「ノウ申 御寮人、最前から見ますれば、アレ彼方の持てござる遠目鑑の様な物、不思議に思し召のであろ。不躾ながら私が往て、借ましてお目にかけふ。ノウ桔梗殿、合點か」と、點頭あふて隣の床几、小腰をかゞめ會釋して、「イヤ申あなた様に御無心がござります。此方の御寮人の申されますは、お前様の持てござる、其遠目鑑の様な物、暫しが間お借なされて下さりませ」と、云かけられて、清「コレハ〳〵安い事。是は小鳥狩を致す吹矢筒と申物」小「ムヽそしたら是が吹矢筒でござりますか。申〳〵御寮人様、是をマア御覧じませ、雛鳥でも大鳥でも、アレあなたの吹矢を持て、くつしやりと射なさるのじや。マア此筒をちよつと握つて御らうじませ。どの様な所へでも、心よう届きそふな、長アイ物でござります」と、滑稽交りの戀の橋、岩木にあらぬ清舟も、につこり笑顔相惚れに、下行く水のこぼれ口、掬ひ上て桔梗が氣轉、「コレ申 御寮人様、早ふ埒の明様に、思ひのたけをおつしやりませ」雛「何をマアいやるやら。ついに逢見ぬあのお方へ、どふマア直にいはれふぞ。わしや恥しい」と袖覆ふ。折から社の境内より、蝦夷子が家來宮越玄番、鑓挾箱いかめしく、代參の戻りがけ、此場の體を見るやいな、供に制して挾箱、腰打かけて窺ひ居る。斯とも知らず 婢小菊、「コレ申、前髪のお侍様、私が方

立か弓—立つにかく
利を云々—利は鎌の縁
みをじるし—澪標めじるしの意に用ひたり
ゆたのたゆた—ゆら〳〵と長き
腰と思云々—腰をかけ思をかけにかけまくをかく

レ〳〵玄蕃、彌藤治、門前へ送り出せ、早ふ〳〵」に釆女の局、「何故申分を遊ばさぬ。コレのふ申　父上」と、歎をいさめる中納言、耳にもかけず鎌足大臣、しづ〳〵歩出給へば、蝦夷子を始め數多の諸卿、早退散と立か弓、武勇たゆまぬ清澄も、覆へる雲に是非なくも、心の駒の扣へ綱、荒卷宮越、素袍の袖、肩臂はつて歸館の警固。利を隱せる鎌足は、心にはかる七重八重、馴し九重振り捨て、いづくの空やはかりなき、後の榮を松の色、操變らぬ君が代の、例久しき 三重 春日野の、社頭に近き小松原、時雨晴間の狩戻り、大判事が嫡子久我之助清舟、美男共美童共、さたに聞へし角前髪、それとは見せぬ蓑笠に、ふりかたげたる吹矢筒、詣で休の捨床几、是幸と腰打かけ、勞を休むる其折から、本社の方より下向の一群、派出を揃へる風俗の、中に際立武家育、年は二八か夫ぞ共、振の袖のみ、みをじるし、ゆたのたゆたの絹かづき、娰數多引連て、打過ながらふり返り、見合す顔も清舟と、互に月よ花の香の、こぼるゝ愛につゝくりと、思ひになやむ立姿、氣轉きかして娰共、小「コレ桔梗殿、今日はマア余程の道。お上にも嘸お草臥。こちらの床几で一休み」桔「ヲヽ小菊殿よう氣が付た」と、附々共にいざなはれ、腰と思ひをかけまくも、神の教のゑにしかと、心の内の嬉しさに、雛鳥は只清舟が、姿に見惚れ餘念な

水魚の交り―君臣の睦しき事

給へば、押直つて蝦夷子に向ひ、鎌「今日某を改めて召るゝ事、何事やらん」との給へば、釆女の局進寄、局「父上へ申ます。とくより病床にましくて、久しく参内なき事を、諸卿野心有との疑ひ、忠勤厚き大臣、何か曲れる心あらん、速に云開くべしと有難き勅諚」と、聞もあへず蘇我の大臣、「鎌足の大臣とは、主上の左右を助合、水魚の交り厚ければ、諚を正すに遠慮はならぬ。只今貴卿に見する物有。彌藤次参れ」と呼はれば、「あつ」と答て荒巻彌藤次、一つの筥を携へ出、御前に直し引さがる。蝦夷子件の筥打ひらき、「五日以前、春日の社壇へ、何者共知れず、奉納の此一筥。中には一つの鎌を入、男子誕生平天下と書付たり。其方の娘釆女は、斯の如く君に傅、誰及ばぬ寵愛、男子誕生有ば、鎌足殿は自然と外戚、平天下と書添たるは、四海を乗取心の祈願。鎌は鎌足の家の寶、外に類のない重寶。其影の鎌を新に打せ、奉納有しは余人でない。覺ないとはいはれまい。サア返答有鎌足殿」と、思ひも寄ぬ印の鎌。數多の公卿詰果、口を閉てぞ居たりける。鎌足大臣思慮を定め、「此身に取て曾以て覺なけれど、目下疑はしき影の鎌。反逆の者有て、我を罪に落さん結構、此悪黨を見出す迄は、申分ても詮なき事。我は暫く禁裏を避け、何れへ成と蟄居せん」蝦「ホヽウ其身の明り立迄は、何れへ成と蟄居有。ソ

兩手をつき、「恐れながら申上ます。過行し太宰小貳、五十日の忌明も相濟、何卒娘雛鳥に、似合しき聟をもふけ、太宰の家相續の御願ひが申上度、ついに上らぬ雲の上、慮外はお赦し下され」と、會釋の顔も紅葉せり。大判事打向ひ、「某取次を申上」御窺申べけれ共、小貳殿存生より、此淸澄とは遺恨有家。取次して叶はぬ時、私の意趣により依怙の沙汰、致したなどと疑はれては詮がない。ソレ玄蕃取つがれよ」玄「ヲヽ、是幸。何さだか殿、兼て主人蝦夷子公にお願ひ申、貴方の息女雛鳥殿、某が宿の妻に申受度いろ／＼と申せ共、今に何の沙汰もなし。只今のお詞で、拙者も安堵致した」と、思ひも寄ぬ聟がねに、とかうの返事いひ兼て、差俯伏いてゐたりける。行主耳にもかけ給はず、「ヤア／＼さだか、玄蕃が願ひは內意の事。何れの內奏問遂、家名相續の沙汰あらん」さだ「ア、有がたうござります。長居は恐れ」と、押付の、聟の評義を免がれて、御前をしづ／＼立歸る。君は御惱の奧深き、帳裡を出る釆女の局、蝦夷子大臣に打向ひ、「帝樣の勅諚有、行主樣にも聞し召せ、鎌足大臣に野心有の奏問、今日御殿へ招き寄、事明白に糺すべしとの綸言なり。父上を召まして、何事も聞給はれ」と、打しめりの給へば、蝦夷子大臣居丈高、「鎌足大臣遲參は不審。又も使を馳候へ」と、呼はる折から「參內」と、案內して入來る鎌足大臣、中納言座を讓り

奏問─奏聞

ゆつて─いつての訛

さだ過─年頃を過ぎて

子、悉く是をはからふ。悴入鹿の大臣は、病床に引籠り、又進出て力となるべき鎌足の大臣には、假初にも虚病を構、行事を捨て引込む了簡。疾より帝へ奏問遂、今日は鎌足を呼出し、事を糺すに一決。夫故使を立置たり」と、倅が邪智を押隱し、讒言ぞ是非もなき。中納言進寄、「蝦夷子公の仰もさる事ながら、忠勤直き鎌足大臣、何を以て野心あらん。再三思慮をめぐらされ、麁忽の計ひなき様に」と、仰も待ず宮越玄蕃、「コハ行主公の詞共覺へず。君の叡慮を安んぜんと、老身の疲も厭はず、忠勤一途の蝦夷子公、麁忽の奏問有べきか。歌蹴鞠に日を暮し、政務を知らぬ馬鹿公家と、一つ口には申されず」と、傍若無人のお主贔屓。大判事居直つて、「ヤア陪臣の玄蕃過言千萬。堂上の論談は君子の諍ひ、其方達が知る事ならず。下つて居やれ」ときめ付れば、玄「イヤ陪臣でも、陪臣でも、理非を正すに遠慮はない。今一言ゆつて見よ、手は見せぬ」と、詰かくれば、此方も鍔元くつろげて、既に斯うよと互の爭ひ、蝦夷子聲かけ、「ヤア〳〵清澄、玄蕃めも指扣へよ。不禮至極」と制する折から、取次の靑侍罷り出、「武官の旁へ御願ひの筋候とて、先達て相果し太宰小貳の後室、押て伺公仕る」と、呼はる程なく入來る、太宰の後室さだかとて、媚も粧もさだ過て、世を捨草の二つ髷、襠さばきしとやかに、階近く

三器云々—天叢雲劍は勇、八咫鏡は智、八尺瓊の曲玉は仁に象れりといふ傳なり

寛然云々—悠々と笏取り直し

十三鐘
絹懸柳

妹脊山婦女庭訓

第一

序詞 頭直位す敷津八洲の三器、智たり仁たり英勇の、利劒四夷を刑し、和らぎ治む和歌の道、八つの耳をふり立て、小男鹿の聲彌高く、曲を直に措、操久しき君子國、榮枯交々皇の、寶祚傳へて三十九代、天智天皇の宮居なす、奈良の都の冬木立、日の本の聖主たる、君萬乘の御身だに、闇き盲の御惱、天地に日をうしなふごとく、堂上堂下是を痛み、時々の評義も外ならず。玉座の左は蘇我の蝦夷子大臣、政務を預かる威に蔓り、我意憍慢たる其勢ひ、右の座には安部中納言行主、庭上の勤臣には、大判事清澄、守護の武功を立烏帽子、素袍の袖もたをやかに、同じく此方は蝦夷子が家臣、宮越玄蕃、其外百官百司の面々、威義を正して伺公ある。蝦夷子寛然と上笏し、「改めていふに及ばねど、帝盲とならせ給ひ、神例古實日々の政務、行はせ給ふ事能はず、老身の此蝦夷

郎吉吉兵衛、「世話甲斐有て重疊、何かに付て兩助樣のお影〳〵。猶此上は御本妻はお才樣、お妾は錦木樣」兩「成程〳〵。先囚人引立よ」と、兩助がさいばいにて、家に羽を伸鶴屋の禮三、池田の關取、天滿の關取、千兩〳〵二幟、其名を難波に上にけり。

浮世小路—陸子にかけて緣薄くと續けたり
あはれ—泡

なたは生て亡き跡を、賴む」と計り曇り聲、錦は涙の聲を上げ「生る共死る共、二人一所と云かはし、今の辛さをあの世にて、閨の咄しの樂しみと、思ふて居るに胴欲な。大事の大事の父樣に、かへて可愛いお前の事、忘れうとすれど猶更に、思ひ切にも切れぬは、如何した結ぶの神さんが、結ばしやんした緣じややら、いふにいはれぬ鴛鴦の、番離れぬ中じやもの、お前に別れてそもやそも、何とながらへ居られふぞ。共に殺して下さんせ」と、縋付たる恨泣、禮「道理々々」と撫さする、顔は涙の横しぶき、戀故に降る露時雨、爰や彼處に立止まる、浮世小路の緣薄く、水のあはれや大川を、越へて急ぐは後の世の、緣を祈りて寺町や、今ぞ誠の女夫池、人目つゝみのやう／＼と、濱の寺にぞ著にける。

第九

禮「サア錦、覺悟はよいか」と拔放し、既に最期と見へける折から、團右衛門九平太に繩をかけて、千羽川岩川諸共駈け來る跡より、津田兩助淨久お才を伴ひ來、「まだ生て居てくれたか」と、親の悦び兩助も、「團右衛門が白狀にて、彼奴等が惡事明白、鐵が嶽は九平太と馴合て、殿のお金を盜んだ盜賊、禮三に科なき御政道」と、聞て岩川千羽川、次

下がへ―衣の下前
藻鹽草―書置の文
堺筋―境にかく以下皆懸詞
順慶町―順にゆくにかく
米屋―籠め
煙共―燒かずに
安土町―土
備後―便宜
瓦町―かはらず
淡路町―逢ふ
伏見町―俯す

第八

道行闇路の町續

歌 夢にだに、見し夢さへも死出の夢、覺ては何時か此娑婆へ、歸らぬ道も夜嵐や、吹風寒く身にぞしむ。往來まばらの軒のつま、結びとめたる下がへの、主よ女房と只一夜、それが未來の晴れ小袖。綾も錦がうら若き、二世と契りし禮三郎、今宵限りの命ぞと、書殘したる藻鹽草、眞ほんに誓紙の數よりも、手を取かはし行先は、あの世この世の堺筋、あゆめど道も捗らぬ、跡には親の枯れ殘る、老木の老の逆さまに、順慶町も空ごとや、わしとお前が憂事の、あだな契を米屋町、本町筋の軒深く、思ひ初たる中なれば、煙共せず諸共に、埋まばなどか安土町、男も同じ二世三世、生れかはりて又爰へ、親の便を備後町、永き未來を瓦町、かく成果る我々は、いつの因果を身にうけて、共に憂目に淡路町、悔むは愚痴と平野町、とは思へ共棄つる身を、とがめてほゆる犬の聲、道修町筋過行ば、早眞夜半の月代の、空恐ろしく行惱む。しばしは爰に伏見町、高麗橋の果迄も、共にぞ連ん去ながら、所詮此身は人殺し、一所に死れば親々へ、不孝の罪も恐ろしよ。そ

正躰云々—正躰もなく立足もなく泣々

ぬと、それで案じて參りましたが、親方樣の健なとおつしやるので、アヽ嬉しやと落付てはおりますれど、ソレ今おつしやる老少不定、ひよつと姉が煩ふて、わたしより先へ死だら、此親は如何せうと思ひますれば、俄に悲しう成て來て、御赦されて下さりませ」と涙をぬぐふ塵紙の、薄き親子の契りかと、物いひたさと悲しさに、錦は胸も張裂く思ひ、蒲團に喰ひ付しがみ付、前後涙に伏しづむ、心ぞ思ひやられたり。早丑滿をつげの鐘、はつと禮三が氣もそゞろ、書置ひとつに手ばしかく、「申 親仁樣、私は晝約束がござります故、更けましたけれど、ちよつと近所迄往てさんじます程に、もし留守の中、京飛脚が來ましたら、此狀渡して下さりませ」と、いふ中錦を引立つれど、更に正躰立足も、なく〳〵禮三にいざなはれ、出る戸口は死出の門、是が親子の別れの涙、思へば胸にたもち兼、わつと計に泣く聲の、血筋の肝にこたへてや、親仁「今のは慥に姉が聲。コリヤ娘よ、何處に居るぞいやい。親方の詞といひ、先刻にからの樣子といひ、何で親に隱れるのじや。姉よ〳〵〳〵」と立上れど、方角もなき目なし鳥、壁にばつたり行燈はぐはらり、二人も探り大坂の、町は生死の堺筋、涙ながらに 三重 辿り行。

にんげな事―とんでもない事の意歟

て、其給銀を庄屋殿へ預ケ、月々の利足を取て、夫で私が楽々とくはれる様に成ました。ほんにあの様な孝行な娘は、世界中には有まいと、思ひ出す度には、旦那様涙がこぼれて嬉しうござります。夫で一日成と早ふ勤を引したいと存じましても、日は見へず、銭設の術は知らず、思ひ付て去年から、按摩取を致します。コリヤ私が身の冥加。是も娘が顔の汚れる事じやと思ふて、あれには隠しております。ヤほんにちつと、肩揉で上ましよかい」亀「ハイそりや忝ふござりますが、そんなりや御苦労ながら、肩よりは此手を、コレナ此手をお前のお手で、じつと握つて下さりませ」と、錦木が手を持添て、出せば此方も指寄て。親仁「アヽお手が痛ますか、お安い事、揉で上ませう共。ドレ〱お手を。テモ和らかな尋常な、丁ど女の様なお手ぢや程にの」亀「イヤナニ、親仁様、何とマア人といふ物は何時知ず、老少不定と申ますれば、かういふ私が、明日死のやら知ぬ命。若死だら、是が此世の暇乞にも成ませふ程に、手先をじつと」親仁「アヽ旦那様にんげな事いはしやりますはいの。其様におつしやりますと、心細ふて成こつちやござりませぬ。地體此間は、夢見が悪ふて案じております上、大坂の茶臼山で心中が有た、イヤ太左衛門橋では切たの、彼處では突たの、と聞度々に胸がひや〱。若姉めではないか知ら

おしやます―仰しやりますの略

親仁「イヤモウ何時でござりましよ」関「されば、もふ四つ半にも成ませうか。ヲ遠道を歩いて、定てお草臥、ドレ寐所をして進ぜませう」親仁「イエ〳〵申々、御勿躰ない構はしやつて下さりますな。遠い道を探りもふて參じますも、娘に逢ふと思ふ樂しみ、嬉しうて〳〵、寐た迚中中目も合ふこつちやござりませぬ。イヤ申、もふ何時でござりませうな、今夜はむしやうに夜が長い。アヽ早ふ夜が明てほしい。ちやつと逢たい〳〵」と、今宵限りの命共、知らず明るを待兼る、親の心ぞ哀なる。錦は正體なき内も、書殘したる硯箱、筆取上ればいとゞ猶、涙にむせぶ泣聲を、隱す禮三が咳拂ひ、「ナントマア親仁樣、袖の振合せも他生の緣とやらで、斯うした若い者の、お年寄を泊めますれば、わたしはもふ親と思ふております程に、お前も子の所へ來たと思ふて、心安ふなされて下さりませ」親仁「是はマア勿體ない事おしやまして下さります。お前樣方に其樣に、結構にいはれる親仁めじやござりませぬ。在所者なり目は見へず、したが今日を喰兼は致しませぬ。其喰兼ぬも娘が影。マア聞しやつて下さりませ。十年計跡迄は、長柄村でともかうもした百姓でござりましたが、ふつと目を煩ひまして、身上有切打込で、とう〳〵盲に成て、途方にくれて居ました所を、今北野屋にをります姉が、新町へ勤奉公に參つてくれまし

ります」甚「ムヽ、そりやマア何處から」禮「イヤ岩川殿から受取て、濟で有事は知らず、立夕部から見へぬ錦。夫でこれ、此年季證文をお前へ渡さふと思ふて持て參りました。立金が濟だからは、どふせふと、お前方の心の儘じや程にナア、死いでも濟事なら。といふて止めても鐵の、網の中へ入ても、死神といふ物が付ては、人間の力にや及ばぬ。わしも北野七兵衛といはれては、島の内で顔の賣た者、人の命を取とめる事なら、譬立金取いでも、奉公人に涙もかけぬ、恩にも著せぬが、あの親仁殿、爰へ連て來たの計は恩にきせねば。アレ目の見へぬ人が、うろつかしやるのを見ては、いかな氣の強い死神でも、思ひとまらにや成まい。ナ申、必々禮三樣、是いはふばつかりに、イヤもふお暇申ます。コレ／＼親仁殿、往にますぞや」親仁「ホ親方樣、お歸りなされますか。そんなら申、夜の内でも娘が歸りましたら、憚ながらお知らせなされて、一時なと早ふ顔が見たふござります」七「ヲヽそりや尤じや、戻り次第知らせませう。禮三樣、早ふお休なされませ」と、情を殘す情の商賣、切はなれよき親方に、別れて禮三も内に入。其間も待ず蒲團押退、飛で出るを禮三がとゞめ、逢ては惡いと仕形と身振、蒲團を口に押當々々、泣聲隱す心づかひ。此方は何の氣も付ず、親仁「申旦那樣」禮「エヽ何ぞ進ぜませうか」

驚きなされます事は―下にありませぬの語を略せり

重井筒云々―近松の重井筒に徳兵衛が房を巨燵に隠して兄を迎へしと同じき故いふ

すは、錦木が親父殿で。イヤ〳〵何も驚きなされます事は。此親父殿は目が見へませぬ、其見へぬ目をして、娘が顔が見たいといふて、日の暮に見へましたれど、錦木は揚で内には居ず、折悪う今夜は泊人が大勢有て、此親父殿を寝さす所がござりませぬ。夫で近比御無心様ながら、今夜一夜さ、どふぞ親父殿を、お前の内に寝さして貰ましよと存し、ハイそれで連て参じました」と、聞てはつとは思へ共、氣取られまいとそ知らぬ顔、「チヽ易い事、幾日成共」七「泊めて下さりますか、ヤレ〳〵嬉しや。サア〳〵親仁殿上らしやれ。チツト危ない、とば〳〵しよまい。ドレ〳〵手を引て進ぜう」親父「ハイ〳〵アヽ親方様、段々お慮外様でござります。アヽ何方様じや存じませぬが赦さしやつて。アイ今晩はおやかましうござりましよ」と、怖々するに禮三郎、「イヤ〳〵其樣に氣をはらずと、ゆるりとしてござりませ」親父「ハイ」七「いやコレ親仁殿、あなたはずつとお心安い程にゆるりと思ふて」親父「ハイ〳〵、アヽいかいお世話さまでござりまするな」禮「ナンノナンノ」七「いや申、然らば私は、モ帰りましよ。御面倒ながらお頼申上ます。長居したらどふやら、重井筒の巨燵の段が。イヤ禮三様ちよつと〳〵、あれ迄お目に掛りませう」と、伴ひ表へ立出る。禮「マアお前にお悦ばせます事が有。扨錦が立金は受取ましてござ

こい—濃いと來い
北野屋—來たにかく
押入—押入るゝと押入

立つ不孝者、其上碌な死も致しませぬ、憎い奴と思召、必泣て下さりますな。此上に歎をかけ、お身のいたみにもならふかと、夫が悲しうござります」と、夫が歎ば妻は猶、「わしも在所に一人の父さん、年寄といひ目は見へず、去年祭に見へた時も、練物に出るわたしが、髪切たと聞てさへ、あられぬ姿と泣しやんした其時、イエ〳〵無事で居りやこそ此様に、お健な顔を見ますると、諫めた私が先立て、刃にかゝり死だ事、在所へ知れたら嘸や嘸、歎きの程が思はれて、悲しいわいの」と伏まろぶ、心の内ぞ遣る瀬なき。せめて名残に一筆と、硯に向ひ磨る墨の、こいとや誰も招かねど、まだ盡果ぬ親子の縁、錦が親の手を引て、そろ〳〵北野屋七兵衛が、戸をほと〳〵と打たとき、「七兵衛でござります、ちよつと明さしやつて下さりませ」と、いふ聲聞て二人は恟り、「そりや親方じや、どふせうぞ。まあ爰へなと這入て居や」と、巨燵へ無理に押入の、蒲團打被せ禮三郎、俄に作る寐惚れ聲、禮「誰じや、モウ寐ました」七「イヤ七兵衛でござります。御無心ながらちよつとお明なされて下さりませ」と、いふに否共不承不承、戸口明れば、七「ハアヽ是はもふお休みなされましたか」禮「ホ誰ぞと思へば七兵衛殿。アヽ夜夜中見へたのは、定めて錦木が」七「アヽ中々、今夜は揚でござります。コレ爰に居られま

しらげ―知らず
にかく
はしり元―流し元

あた自墮落―馬鹿になまける

て、ほんの男じや女房じやと、飯焚眞似や水汲む眞似、世帶する眞似して死だら、未來の迷ひは有まい」と、さすが女のくど〳〵と、いふも涙に紅の、錦あやなす諸袖に、いとゞ色添ふ計なり。禮「ヲヽ尤々。そふ思やるなら、わしも倶々手傳ふ程に、飯しかけて焚てたも。幸ひ今日は親父樣の誕生日。アヽ是迄は不孝の仕續。せめて女夫が煮焚して、蔭の膳なと据るなら、夫が此世のお暇乞」と、涙隱して押入の、米取出しあてがへば、洗ふすべさへしらげの米、しほ〳〵下りるはしり元、とぎ流したる白水は、顔に艶どる白粉の、解けて涙の炊しき水、夫は燃す釜の下、錦「申旦那さん、飯盛る物が有かいな」禮「ヲヽ、あの人はせはしない、まだ出來もせぬ内から。ソレ押入に茶漬茶碗が一つ有」錦「アイ」といふまゝ取出す、錦模樣の染付も、「ヲヽ穢な、コリヤマア何時洗ふたまゝじやいな。ほんにやもめといふ者は、あた自墮落な」といふて見る、心がほんの女夫事、錦「ソレ飯が焦げ臭いぞへ」禮「ヲツト合點、燃え杭を消す此身も消る身」と、いへば錦も顔見合せ、又も涙にむせびしが、「アヽ我ながら愚痴な事。ソレあらいげのさめぬ内、釜から直に盛てたも」と、机の上に白紙を、敷いて備へる影の膳。禮「御誕生日の御祝義、目出度ふ上つて下さりませ。親父樣母人樣、是迄一日お心休める事もなく、親に先

おじやらず—來ず
知れてから—知れたにしても
わがみ—お前

部約束した通、二人一所に死る覺悟で、先へ戻つて待て居れど、わがみがおじやらず、内よりは二度三度、家探しに來る上は、欠落したに違ひはないが、今迄爰へ來ぬからは、どふで外に心が有て、おれをすつぽりやつたな、と腹が立て恨んで居たが、今のを聞て」錦「疑ひは晴たかへ」禮「ヲヽ、其心底を聞上は。サアマア上りや〳〵」と入口の、戸をひつしやりと差向ひ、禮「シテ今云やつた中、心にかゝるは其知るべの方から、若知れはしまいかの」錦「イヱ〳〵そりや、氣遣ひして下さんすな。よし又そこから知れてから、明日迄待ぬわたしが命、お前の覺悟はどふぞいな」と、凭れかゝりし女郎花、涙は膝に置露の、いづれはかなく見へにけり。禮「何の夫に念押事。岩川や千羽川殿が、様々と心を盡して下さるれど、夕部わがみにいふ通、鐵が嶽を殺したる此禮三、すりやどふで生て居られぬ身の上。ガ兎角心にかゝるは親父様の事計。夫で吉兵衛殿や、岩川へ賴の書置。爰で死んでは恥の上塗、大坂の町をはなれて、濱の寺迄行て死ふ。用意がよくばサアおじや」と、手を取ば抑留め、錦「マア〳〵待て下さんせ」禮「ム、待といやるは、心でも變つたか」錦「何の心が變りませふ。さら〳〵そふではなけれ共、お前と夫婦に成たいと、思ふを勤の樂しみに、暮した甲斐もなき命、せめて今宵の半時を、千年も添し心に

果し長堀ー果しなきにかく

鮫鞘ー醒にかく

を思へば錦木めも、夕べ内を出ながら、今において來ぬからは、外に心が。ヱヽそふいふ根性共知らず、親にも身にもかへたのが、口惜いわい無念なわい」歌「妬みの釼研ぎ立て、我と身を裂く鰻谷、堺筋より半町も、錦が尋夜の道、濱邊も果し長堀の、人目を包む頬冠り、しめる門の戸打叩き、「卒爾ながら、禮三樣の所は内方じやござりませぬか」と、尋る聲は錦木かと、出んとせしが、禮「誰じや〳〵、そんな人はこちらじやごんせぬ、何處ぞ脇を尋さつしやれ」錦「そふいはしやんすは禮三樣じやないかいな。コレわしじや、わしじやわいな、ちやつと明て下さんせ」禮「何じや、わしじや。ヲヽどふで鷲か鵰か、爪の長い猿松め、猫め、畜生め。ヱヽおのれは〳〵、憎やな」歌「今宵の内に、やつきり〳〵やつきり、切殺し、浮世の夢を鮫鞘の、鯉口寛げ落し指、早初夜の鐘指折て、「コレイナ、明てくれんのかいな、人が見付りや惡いわいな。コレ禮三樣、何が腹が立ぞいな〳〵、口舌所じやござんすまい。夕部の揚は足代屋の、出られぬ内を漸〳〵と、藤江樣の情にて、出事は出てもお前の内、爰共知らずうろ〳〵と、尋る内に夜は明る、どふも仕樣は中橋の、知るべの方に今日の日の、「暮るを逢瀬と待兼て、尋迷ふて來た物を、聞へぬわいな禮三樣、思ふに違ふお詞」と、言ふ間も疑ひぐはらりと開き、禮「ヲヽそんな事とは知らず、夕

しやなぐる—むしる
しほ—よいをり
こち〳〵—此方にかく
かねごと—豫言にて豫ての約定した詞
飛鳥川—變轉極りなきにいふ

りませぬ、道頓堀の北野屋の者じやといふて、三四人の聲がして、押入を明る音、其處邊内を、もんどり返して往なれましたが、ありやマア如何した事でござります」島「サア如何した事やら、あそこの奉公人が欠落した迚、今朝から夫で丁ど三度、わしがした事の様に迷惑な事でごんす。此奉公人めも何處にはいつてけつかるやら、いつそ宊へうせ上ると、是程わしも案じぬ」と、むしやくしや腹に上下も、引しやなぐるやら引切やら、見へぬ座頭が「イヤもふ日暮れそふな。内に又稽古人が待て居られふ。どれお暇申ましよ。用が有なら、何時成とお呼なされませ」と、我挨拶をしほにして、とほ〳〵隣へ立歸る。跡に禮三がつつくりと、今いふ通り、尋に來るからは、内は首尾能う出た物が、どふして今迄來ぬ事、と案じに暮れる胸の闇。いとゞ物憂き一つ鉦。無常は餘所か、こち〳〵と、石と金との相性が、あらば火の降る火燧箱。付木に付て行燈に、灯す火影の明り窓、入口の戸もしめ〳〵と、又も案じる隣には、稽古の音〆高々と 歌「浮名をながす堀江川、流れに淀む捨小舟、つながぬ縁は是非もなや、戀路の鬼か丹波屋の、妻に通ひのかねごとも、昨日も今日の飛鳥川」禮「アノ歌は古手屋八郎兵衛。友達の香具屋を戀の意趣で切たといふが、又腹も立ふかい、蝶よ花よと樂みに、思ふた色を盜まれては。是

三味線持ながら、「コレ錦さん、誰ぞ來るなら知らして上よ」と、座敷紛らす三味太鼓、錦「ヲヽやかましうて、一つも咄しがならぬわいな」おつと心得すぢかひ身、合す調子の糸調べ、「アイ〳〵、それ錦さん、呼ぶわいな」ちやつと吹消す燈火の、紛れに拔ける禮三郎、外からぴつしやり暇乞、はなれぬ思ひ胸の中、闇の錦も諸共に、拔けて出る氣を呑込藤江、二階から見る九平太が、鬼の目をぬく暗がりに、潛戸ぐはらり、「ハイお尋なさるゝは二三軒西でござります。能ふお出なさりました」

第七

町の名も、鰻谷とて長堀を、少し南へ入口も、間口も狹き裏貸屋、かつて鶴屋の禮三郎と、名前は有ど外を家、留主は隣の須賀市が、見る目は無ふて嗅ぐ鼻と、聞耳立る門の口、葬禮戻りの上下ため付、我家へ歸る禮三郎、「アヽ須賀市市、御苦勞〳〵」須「ホお歸りなされましたか。きつう遲ござりましたな」禮「さればいな、他宗の葬禮といふ物は、隙が入て惡い物。外なれば行ぬけれど、家主の葬禮に、さながら病氣も遣はれず、せう事なしに行ました。そりやそふと留主の内に誰も來はしませせなんだか」須「來た段ではござ

見る目云々―地獄の閻魔の廳に視目嗅鼻とて亡者の善惡を視察報告するもの盲目の須賀市にかく

しゆんで―酣になつて

なら此金で」浮「イヤ〳〵おれは何にも知らぬ田舎大盡。おれが事より彼奴等が、息才で居る樣に、朝夕祈る此珠數の力にも、叶はぬ物は國の掟。鐵が嶽が殺されたも、團右衛門が業とはいへど、喧嘩の相人はやつぱり悴。町人が人を殺しては、遲いか疾いか風の燈火。爰らにまい〳〵しておつたら、淺猿い死をしをらふと、夜の目も合ぬ因果な長生。古來希なる大盡客、どろぼが可愛ければこそ、厚かましい此厚鬢。何事も次郎吉殿、頭にめんじて頼ます」と、立上れば、岩「そんなならもふお歸りなされまするか」と、庭へ送りの駕の者、浮「次郎殿さらば」何事もいはぬ色なる山吹色に、誠残して立歸る、親の情は身にしめど、人を殺せし罪科は、遁れぬ禮三が身の覺悟。奥より中居が走り出、「わしや先刻にから出度ふても、咄しがしゆんでひかへて居た。禮三樣からお前へ此文、藤江樣から頼れた」岩「どれ〳〵」と開いて見るより、「是はしたり、何時の間に往なしやつた。エヽ悦ばす事が有に。イヤ少との間も斯して居られぬ、わしや北野屋へ居て來る間、錦樣に此樣子戻つてから咄しましよ。つい行て來ふ」と岩川は、悦び勇み出て行。錦は文を見るよりも、有にもあられず走出、忍ぶ禮三を見付しより、「エヽお前は聞へませぬ、何でわたしを振捨て、死る覺悟の此書置」と、いふ口おさへる折こそあれ、藤江は

勤をさすまい爲、おれに隱しておとはめが拵た金。そふさしては、此次郎が顏が立まいと思ふてか。お前方お二人を、首尾よふ親御の內へ入たら、ほんに嘘じやごんせぬ、商賣冥理、投殺されても大事ない。是程に思ふのに、お前も聞へぬ、禮三樣も胴欲な」と、太切にする眞實は、誠に關取一疋なり。錦は始終差眞、とかふの諾へもなかりしが、「其お心が嬉しさに、禮三樣と云合せ、親方樣に譯いふて、今日からの此勤、氣遣ひして下さんすな。此苦界も暫しが中」岩「サア其暫の中が猶氣遣ひ」と、せり合ふ中に奥よりも、お品が走て、「申 次郎樣、長崎のお客樣、お前に鳥渡逢たい迚」岩「イヤコレ今夜はおれも取込。よい樣にいふてたも」品「イヤもふ爰へ見へます」と、いふに錦は、「次郎吉樣、まだ咄したい事が有、後に〳〵」と行跡へ、程なく出來る田舍客、「是は〳〵珍らしい」と、立出る、顏見て悔り、岩「エヽお前は淨久樣」理「アヽこれ〳〵、常住急な所でお目にかゝつた故、見忘れも尤。變つた所で變つた形、よい年して傾城買に來た親父、其女郎は北野屋から出る新造。此方衆夫婦の志が、餘り忝なさに、外の客には買すまい、おれが身受する心で、今夜來て樣子を聞ば、勤て居るは錦木、買たい女郎は爰には居ず、此金もいらぬ物、勘當した忰めに金やらう筈もなし。コレ次郎殿、花に貰て下されぬか」岩「扨はそん

大前髪—岩川

どんざ羽織—粗末な羽織

ひやいな—危い所

れじやない」生「サア聲高におつしやるので、なんで彼處に人が居よ」二「ヲヽ居るか居らぬか此羽織」と、引たくり、屛風ぐはらりと引明れば、江戸夫にはあらで大前髪、江戸張の銀煙管、煙輪を吹空嘯き、くつ〳〵と吹出せば、さしもの九平太恂り仰天、俄に目をすへ千鳥足、「是は〳〵麁相千萬、酒を食べ過して、思はざる不調法、御免なれ〳〵」岩「いやもふ苦しうござりませぬ」二「イヤ〳〵お氣に障つたら眞平〳〵」岩「ハイ勘當も受ませず、元來人樣に虫といはれた事もなし。又虫で有ふ無屈もなし。マアそんな物じやござんせぬか」「左樣共〳〵、其元さへ其氣なら、拙者は安堵致したり」と、行んとするを、岩「申々、そりやあなたのお羽織でござりますか」いはれて恂り持たる羽織、二「ハアヽヽヽハヽ〳〵〳〵、是は重々不調法、是は貴公のお羽織な」岩「私がどんざ羽織てござります。是は〳〵、勿體ない其儘〳〵」二「イヤサ是を御縁にお近付、又來春はお出來しなさるゝであろ。其節は緩々と」醉ぬ所を醉さるゝ、科をば酒にぬり付て、頰押拭ひ入にける。錦はそつと走出、「次郎樣のお蔭にて、ひやいな所を遁れた」と悦べば、岩「コレ錦樣、此方樣に逢たい計に、先刻にから來て居やんす。お前を押へて腹立るではなけれ共、どふつぶして下んすのじや。わしが爲には太切な禮三樣、其お方に連添ふお前。其

無間の鐘—此鐘をつけば未來は地獄でも現世は富豪になる

相手は云々—以下相撲の縁語にして禮三錦木の床入を仄めかす

ならずめ—ごろつき

こざ酒—こざは婚舍と書く

テツン 歌「鐘に恨が數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、後夜の鐘をつく時は、寂滅爲樂と。コレ何じやぞいな」ニ「イヤ此衝立の内へ」黒「ア、滅相な。コリヤわしが商賣の影繪の樂屋、見せる事はならぬぞへ」ニ「ブウ衝立の影繪見たい。火をくはつと燈て見せい」黒「ハイ、お目にかけまする影繪の始り。余り近いと見へが惡い、必 樂屋を覗くまいぞ。斯う火を燈て致しまするが、梅が枝の無間の鐘」ニ「其歌おれが諷うてやろ。歌「二八十六で文付られて、二九の十八でつい其心」黒「人の心もしらいで、面白そふに諷ひくつさる」ニ「おれが諷ふが氣にいらぬか」黒「コレ間がぬけるわいな。ヲヽそれよ、奥へ行は錦様じやないか」ニ「どれ／＼何處に」と立上れば、火を吹消て、黒「もふ仕廻。サア是からわつさりと、お品殿おさか殿、呑直そふでは有まいか」「よかろ／＼」と、無理やりに、押立奥へ連て行。此間にちやつと小座敷へ、關取様に相應な、相手は手取の錦島、砂子屛風の土俵入、化粧紙迄氣を付る、行司役やら頭取やら、脊中の兀た古藝子、調子合ふたる三味線の、身に引かけるぞ頼母しき。ニ「中居共中居共、錦は何處へ。此九平太が目をぬいて、勘當受たならずめを取込で、うぬらが戀の中立か。此小座敷が物臭い」と、立んとするを、黒「ア、申、お前は醉てござるのか」ニ「彼の様なこざ酒で醉ふ様なお

左平次云々―口を出して

顔見世行―人皆芝居の顔見世へ行きて

と打笑ひ、打連座敷へ浮れ行。今宵初めて錦木が、縁と義理とに引されて、二度の勤も男故、座敷はづして勝手口、窺ひ出るも案じ顔、跡から藤江が走出、「コレ錦さん、如何じやいな。おさか殿の言傳物、渡す首尾がなかつた故、大事にかけて持て居た。サアにつこりと笑ひ顔」と差出す文に飛立思ひ、錦「コリヤまあ誰が持て來たへ」藤「やつぱり直に禮三樣、門口覗いて」錦「是はしたり」と尋る中に、小座敷より頭巾羽織で立出れば、はつと恟り立寄て、錦「ヤアお前は何時の間に」禮「コレ〳〵藤江主、若次郎が尋たら、此狀渡して先へ往んだといふて下んせ」藤「そりや禮三樣取て居る」錦「わしも奥から尋てなら」藤「そこらはわしが左平次で」くろめる中に奥よりも、「藤江〳〵」藤「アイ〳〵、何處へ隠さふ」所も幸蒲團にくる〳〵衝立の、障子ぐはらりと一原九平太、「藤江」藤「アイ」九「わりや其處に何して居る」藤「イエ爰に顔見世行で、臺所に人氣がない故、張番しております」九「ハテ實氣な者じやなあ。錦めがおらぬ故、夫を尋に爰へ來た。新町から南迄、付纏はつて惚ぬく九平太。夫と同じ樣に付纏ふ虫が有。でも叶はぬ物は、金銀といふ物におさへられ、虫めが動きも這も得せぬ。氣味のよい事じやないか、ナア藤江」藤「其金の有黄金虫より、金が無ふて泣虫が」九「そこらにおらふ」と立寄を、藤「チテント

南風も一來る氣にもならぬか

見ると云々一見ると聞くとは大違ひ　とられて一相撲の緣にて一ぱいくはさる

尤じや、あれもながふ勤さすでもない」岩「其魂膽が猶氣づかひ、是非今夜は連て往ぬ。お前もごんせ」と手を取ば、禮「イヤ其客といふは、日外の一原九平太。おれが往てはむづかしい、どうぞ隱れて行たいが」岩「夫ならわしが仕樣が有」と、行尺合ぬ長羽織、人目を包む黑縮緬、頭巾も顏へすつぽりと、さながら假著と見へにける。岩「サア／＼お出」と、門口へずつと入れば、座敷廻りの庄七、「やれ珍らしい關取樣。禮三樣お出ぬので、南風も吹ぬかへ」岩「吹けばこそ出て來やんした。客衆一人連て來た、何處ぞ座敷が明て有か」庄「アイ小座敷が明てござります。サア／＼是へ、まあお上り。お供はどこへじや」岩「イヤ／＼供は芝居へやつた」庄「ヘヱいや申、あなたは何方でござります」と、問れて早速の出ぬ岩川、「イヤあれは江戸方の關取衆じや」庄「ヱイわたしは法師樣かと思ふた。して彼方のお名は何と申ます」岩「フウ貴樣、此關取知らぬか、コリヤ氣疎い。あれが大關の里見山じやわいの」庄「ヱヽいつやら私が所のお客が、あなたの手の形を持てお出なされたが、ハテ見ると聞とじやな」岩「イヤ／＼惣別相撲取は著細りがする。あれでも裸に成てまはしかゝしやると土俵一ぱい。アヽ見せたいな」と、鼻動かさぬ相撲取、とられてどつこい庄七が、庄「前髮の有源太樣、我等は差詰百姓役。辻法印と里見山、能ふ似た事じや」

白い手拭云々—忍び男がある謎か
はんこ—長に對して半こといふか
行燈居眠る云々—夜更

はな、歌 長やれ〳〵、花のお江戸は兩國橋とや、白い手拭横長であろ」隼「長の因縁かくの通り」藤「とはしやれ〳〵」隼「問ましよ〳〵」藤「何なと問しやれ」隼「お客は〳〵」藤「はんこでござんす」隼「藝子は〳〵」藤「ばゝ樣〳〵」隼「中居は〳〵」藤「かしこの色事、よい此〳〵」賴政は、鵺を射留て御機嫌を、なほす藤江が口車、打連奥へぞ入にける。行燈居眠る時分より、忍ぶ禮三が戀の晝、錦が揚は足代屋の、潛戸半に窺ふ素振、内を覗て小手招き、目早く見付る中居のおさか、門口へ走出、「ヲヽ禮三樣、お前のお出は合點。錦さんもわたしが所へ今日出初め、御用が有ならわたしが呼。マアおはいり」と、取持ぶり。禮「ヲヽ其事でちよつと來た。今夜逢ねばならぬ事。爰の客は一原九平太で有ふがの、あれには逢れぬ。首尾を見て此文を、錦にそつと渡してたも」と、背中をぴつしやり、賴む者よりたのもしきは、さすが所に住ばなり。禮三は門を西東、忍ぶに目立大挑燈、北よりと書贔屓より、立子這子に譽られて、いなにはあらね岩川も、心いきせき足代屋の、門で見合す顔と顔、岩「ヤア禮三樣じやないか」禮「ヲヽ治郎か」岩「お前を尋て漸く爰迄。聞や錦さん來てじやげな」禮「アヽ其事は隱して居るに」岩「されば錦樣を斯うせまい爲、私が心を盡したも水の泡。あの人に勤さしては、おれが顔が立ませぬ」禮「サア〳〵尤じや

蛇の樣な―大酒家を蛇といふ

立つた腹には紅葉を流す―立つた腹に龍田川をかく

れしいしさし―間の「し」はハサミ言葉即ち「禮三」

おん共―俺等

いきせきと來る上り口、お品「そりや藤江さん遲かつた、座敷はさん〴〵。御機嫌直すお醫者はお前。マアお藥箱から上ませう」藤「アイ〳〵、今日は北の粟七平で、きよ野さゐだ荻野、蛇の樣な、藝子樣に引とめられて醉たわいな」客「フウ藤江といふは其元か。待ち兼た待ち兼た。影繪の名人と有、サア〳〵見度い。三味線が聞たい。尺八が所望。舞が見たい」藤「ヲヽせはしな、其樣に一時に如何なるものじやいな」お品「ヲヽなんぼ藤江さんじや迚、そりやもう八人藝の座頭でなけりや、いかぬ事」客「こな中居共は、身共がいふ事一つも用ひぬ。拙者が所望する事、何故邪魔する」藤「アヽこれ叱りないな。其樣にむしやくしやと、立た腹には紅葉をながす。ソレ〳〵、それ、ちよつとお間致しましよ」桂「アヽ嬉し、藤江さん能ふ來ておくれた」藤「ヘヱ桂さんの御挨拶、痛み入ります。錦さんは如何じやへ」桂「アイ是もいんまに。れしいしさしじやわいな」藤「そんなら又お客が、やしきしもしちしじやあろ」客「何の事じや、長崎でも聞ぬ唐音、こりやおん共が事誹るのじやな、いかふ心に障るわい」藤「何のさふではないわいな。とかく座敷で呷ば、餘所の可愛い色事咄し。錦主も長であろ」客「此奴、三味線は彈かず、影繪は見せず、踊はせず、長であろとは、身共が鼻毛でも笑ふのか。其長とは何の事」藤「サア夫

しやぎり—芝居の幕明などに行ふはやし
孫の出—孫庇
ぱち〳〵云々—山出男の怒るざまにかけ炭といふより燒ると怒るにかく

れ紛ひも大坂に、男の吉粋闘取の、天満をさしてぞ　三重

第六

庄「中居衆〳〵、中のしやぎり打やんで、今座付が始まつた。桟敷は西の二三の續、東の五の下、孫の出共に、五組のお客様方へそふ申しや。火鉢は好いか煙草盆」と、喚けば奥より中居のお品走り出、「ヲヽ、庄七殿やかましい。しやぎり打切たも知て居る。夫でお出といふけれど、此藤江は何故來ぬ。あれ程約束して置に、不参が有てはならぬといふて、最一度せきに」といふ中に、奥より出る長崎客、刀提、「コリヤ〳〵中居、顔見世見るとて一人は見られぬ。呼にやつた女郎は來るか」お品「サアお前の仰しやる新造様は、奥に來て居さんす錦さんと、是にござんす桂さん、跡の女郎様方は、皆前からの知れた顔。錦さんは曲輪からお出たが、若西でのお馴染かへ」客「いや西にも東にも近付はなけれ共、身共が望む女郎は、是迄勤した者ならず」お品「そんなら錦さんでもなし」客「エヽぐづ〳〵と隙がいる。藝子はまだか、何故急に呼にやらぬ」と、ぱち〳〵はぜる山出し炭、おこり散らせば、お品「御尤、もふ〳〵爰へ」と、いふ間もなく、里に名代の藝子の藤江、

ひばら―横腹

取出し、合す證據の一通、千「ホヽ墨色筆法紛ひもない同筆。御約束の通り備前長光の刀、追付指遣はし可申候、一原九平太殿、村岡團右衛門」伴「ヤア其狀は」と取付を、一當あてゝ尻引褰げ、又立かゝる伴龍が、腕首ちつ共働せず、千「刀の盗賊團右衛門、九平太方へ長光の刀賣てくれいと頼の狀。使に立た鐵が嶽、死骸の傍に落して有た儕が手跡。此手と比べて見たい計に、投られてやつたのを、誠と思ふが儕が天命。西國江戸方の關取と揉で來た此體、うぬらは小指にも足物かい。お才殿の戀の意趣、禮三を殺して仕廻たがる工の一々、引くゝつて屋敷へ連行、何もかも白狀さす、覺悟せい」と睨付れば、破かぶれと村岡が、差込腕、合點と擔いでどうど車投、朱鞘の一腰引たくれば、伴「それ遣ては」としがみ付、ひばらをはたと眞の當、うんと倒るゝ其隙に、月に晃めく刃の光り、千「鎺に噂の彫物は、お才殿の咄に違はず、正しく是が備前長光。ヘヱヽ忝し〱」と、押戴押戴く。所の大勢物音に、「喧嘩々々」と立騒ぐ。「ヤア棒の端ちつとでも當るが最期、爲にならぬ。千羽川の吉兵衛が喧嘩の立引見物せい。此奴は段々詮義の有奴、連て往んで活を入、しごいて存分いはせにやならぬ。天滿迄付て來て、立引の譯見て置」と、腰にほつ込長光の、刀の詮義伴龍が、帶の前がはわが帶に、しつかと握る證跡は、隱

わが命―汝が命

りやれさ。夫共に聞分なけりや、手並は今見る通り、此度は吉兵衛、わが命がないぞよ。もう是切で、サア〳〵歸れ〳〵」と、云捨立上れば、壬「イヤ〳〵〳〵天滿の吉兵衛が出入しかけて、病犬の棒に逢た樣に、逃吠にしては立ぬはい。殊に相手は劍術仕。ぶたれてすご〳〵戻つたといふて、どふ此頰が出されふぞい。もふ何もかも外の出入は取置て、こなたに打れた此顔を立にやならぬ。猶金輪際付纒ふて、此方を殺すか、おれが殺されるか、二つ一つじや。命は始から投出して有わいの。サア〳〵殺して下あれ、殺してもらを」と、胸打たゝき、赦さん氣色はなかりけり。作「ム、成程尤じや。お手前を殺せば、身も解死人、何の益に立ぬ事に、互に命を果す道理。併し身共に打れて、此儘に歸つては男が立まい。何と命を捨ず共、男の立仕樣はないかい」壬「一札が貰たい」作「ヤ」壬「イヤサ町人出入は、高が相手を誤らしてさへ戻れば、何處へ出ても男は立。命が惜くば作龍、誤り證文書て貰ふかい」作「ム、はて味いなせりふに成たな。投られて、誤り證文取とは、神代の昔から聞ぬ事じやが、それで腹のいる事なら、どふ成とせうわい」壬「そふなふては叶ふまい。サアちやつ〳〵と書れい」と、腰の矢立も磨き込、二十三夜の月明、心の曇墨黑に、「誤り證文件の如し。澤田作龍」と、書認め差出せば、懐より

彼奴—吉兵衛をいふ

手者—劍術の達者

い物が有て」伴「ムヽスリヤ脇差の價に、ソリヤまあ何を」千「是」と差出す帶の端、ハット恂り、千「伴龍殿、是計は此方が買にゃ成まいがの」伴「ムヽ如何にも買ふかい」千「ヲヽ價は千兩、こなたの胸に貯へた、惡事の算用受取かい」伴「イヽヤ何にも覺ない」と、振切て行朱鞘の鐺、しつかと取て、千「卑怯な伴龍、代物を見て返事もせず、こりや何處へ行」伴「イヤ其代物所望にない。持て歸れ」千「いつかな／＼、しかけた出入は互の命。そつちへ賣か、こつちへ買か、三寸俎板工のばれ口」伴「放せ」千「放さぬ」強氣と不敵、手練の當身にうんと計、下地の瘧に身はがち／＼、足踏しめる其隙に、迯ても千「どつこい迯さぬ／＼」伴「イヤサ伴龍は急の用事。退て通せ」とかけ出す、向ふへ廻つて又取付彼奴も一世の大事の奥の手、劍術達者の伴龍に、一寸ひかぬ男の魂、右へかはせば右に立、左へぬければ引戻す、互に大汗たら／＼おり、腰にすがつてぶら／＼／＼、投ても踏でも放さばこそ、さしもの手者も持余し、一度にどつかり地響に、一息ほつとあぐみし面色。伴「扨々丈夫な魂な男、凡劍術一道には、誰こはい者なけれ共、お手前が士性骨には伴龍も叶はぬ。畢竟が元は此方から、仕懸た出入の鸚鵡返し、是で五分々々といふ物。其方の脇指の事も、此方の帶の詮義も、口外へ出さねば濟事。もふ了簡して歸

あやなし—黑白分ちず

かは—親身の反對

千「明かぬは不思議」と表から、踏碎く戸の破口、互に探る暗紛れ、闇はあやなし擢ちがふ、手にさはつたる帶の端、すつぱと切て團右衛門、跡を暗まし迯失たり。お才「吉兵衛樣か」千「お才樣か。帶解ひろげて、コリヤ何じや。手に殘つたる男の帶。ム、エ、此方樣は〳〵。禮三殿に添そふと思ふ、吉兵衛をかはにして、こりや外に忍び男が出來たの。徒女郎、人でなし」お才「サア〳〵道理じや〳〵。此云譯はおよつ樣、出て下さんせ」に、ぐわたつく戸棚、錠捻切て引明れば、よつ「此方の人、遲かつたわいの。最前の浪人が、わしを縛てお才樣に、無體の戀慕」千「ヤア〳〵〳〵そんならあの浪人は、兼て噂しの」よつ「アイ村岡團右衛門」千「扨こそ知れた。程は行まい、此道筋、詮義の近道」逸參に、跡を慕うて三重追て行。

第五

天滿大川一飛に、南のはづれ寺町筋、直には行ぬ團右衛門、うねくる野道幾筋も、眞一文字に、千「ヲヽイ〳〵作龍殿」伴「と呼だは誰じや」千「イヤ吉兵衛でごんす」伴「是は〳〵、大方彼の脇差の返事。金子才覺出來ましたか」千「イヤ其約束の金子の代、其元に買て貰た

半蓋の二人―お
よつとお才

無事に落付身の行末、此上ながら頼入。萬事後刻」と諸事の譯、胸で納めた千石取、藏屋敷へと歸らるゝ。妻も立出、危い所漸〻遁れた、半蓋の二人が悦び。吉兵衛は兩助が、詞のはし〴〵、紙入の内より出る狀一通、繰返し見て驚面色。千「心得ぬは澤田伴龍、どうでも彼奴には子細が有。コリヤかふしては居られぬ」と、脇差ぼつ込門口へ、「女房内に氣を付い」と、いひ捨つゝと出て行。よつ「サア〳〵お才様悦ばしやんせ。今日といふ今日、此去狀が禮三樣と女夫の堅め。ほんに是も兩助樣のおかげ〳〵」と、足跡を戴く疊むつくりと、思ひがけなき以前の浪人、よつ「スワ盜賊」といはせも立ず、およつが小腕さげ緒の早繩、打込戸棚の錠前しつかり。浪人「お才怖い事はない。そなた故に浪人した團右衛門じや。エヽイ吉兵衛を出しぬき、竹垣破つて忍び込だも、そなたを連て往のふ計じや。おれはわれに惚て居る、われは禮三に惚て居る、定ていやで有ふけれど、かう鱶が見入てからは、迯ても迯さぬ。否でも應でも抱て寐る。爰へおじや」お才「アイ」團「ハテおじやいのふ」お才「アイ。エヽとつともふ惡い時に。あれへ〳〵」も女聲、團「なんぼ呼でも吉兵衛は、爰らには居ぬわい。叶はぬ事じや、枕直して抱れて寐い」と、根強う仕込蟒蛇眼、迯さぬ門口吉兵衛が、戻りかゝつて戸をたゝけば、内に物音吹消す行燈。

庭成敗―内々の刑罰

三行半―近き意をかく

去荷―去狀の意をかく

程迄に待申」平「ム、御浪人のお所は」浪人「天王寺樂人町澤田作龍とお尋なされ」千「澤田作龍殿。今宵中に屹度參らふ」浪人「然らば」千「おさらば」浪人「お侍是に」とばかり默禮に、邪智を隱して立歸る。平「兩助もお暇申さふ。段々子細の有そふな事、身共が用事は人殺しの詮義計。武士が頼に參つた詞、反古にも成まい。お身此詮義しておくりやれ」千「イヤ人殺しは私。此奴只今は盜賊なれ共、元は善九郎と申て鶴屋の手代」平「ム丶夫なれば猶以て、其奴は殺しても大事ない。此兩助樣子具に存て居る。鶴屋大恩の下人として、主人の金を横取した奴。凡引負の科人は、主人の家にて庭成敗に行ふが大法。天罰は逝れず、自然と主の刃にかゝる、其脇差の出所は、いはぬが祕傳の折紙道具。必々何時迄も、身を大切に、麁事のない樣。お手前はまだ知るまい、お才が親三島彌太夫事、預りの長光の刀紛失の誤り、此刀が出ぬ時は、彌太夫の身の大事、夫に付て、鐵が嶽が死骸の傍に落して有つた、此紙入こそ一ツの手がかり、是をお身の手に渡さば、其中に其方の入用の物も有ふ。詮義の筋が見へたらば、大義ながら身が旅宿迄」千「委細畏り入ました。シテ貴公樣はいづ方に」平「イヤ旅宿の所書、則認め參つた」と、差出せば押披き、千「ヤアこりやお才殿への去狀」平「ヲヽ道程僅か三行半。怪我の無い樣去荷の注文、

いか程なりと―いか程なり共

すつぱ云々―スツパと善九郎を切つた血刀を差出す

ぴつしやり。武士「ナント其心を見ては、外の手へは遣られまいがの。イヤハヤ替つた所に有た脇差」千「コレ〳〵出所は兎もかくも、氣に入た買ませう」兩「イヤ其脇差、兩助が買中そふ」千「いつかな事成ませぬ。吉兵衛が買ました。シテ代物はな」武士「千兩の折紙。サア金がなくば質取ましよ。其質物は是爰に」と、小屛風くわらりと引退れば、千「コリヤ何とする」武士「サレバサ、刃物のかはりに、女中道具の小袖櫃。此場に有ては、事の破れに成そふな物。中改めずに此儘で質に取たい」千「イヽヤあの半蓋は」武士「いやなら千兩」兩「ヲヽ、サ價はいか程なりと、先其心を、兩助が改めん」と立寄を、取て突退蹴上る疊。下からぬつと以前の善九郎、見合す浪人、善「ヤアお頭」と、いふ間稲妻吉兵衛が、袈裟にすつぱと紅の、脇差目先へ差出し、吉「お望みの心とつくりと御覧なされ」と居合腰、兩「ヲヽ見事々々。鎺元より切先迄、微塵曇らぬ男の魂。ハヽア天晴驚入。眼前に人を殺した吉兵衛と、人の科迄身に引受る心で有ふが、夫はそれ、是は是。況んや其奴夜盗と見へた、どふで首の無い奴。併し不思議なは最期の一句。變つた所に近付の有盗賊め。詮義の種にも成べき物、ハテ殘念」と兩助が、尻目に彼奴も底氣味惡く、浪人「吉兵衛殿金子調達、只今急にも成憎くからふ。其脇指は預て歸る。有無の返事を拙者が宅へ、後

包—著物に包むと事情を匿すとかく
居士衣—白衣
そとした—ちよとした
尾羮—尾羽
鎺—刃のつけもとを回したる金

ふと契約した兩助。然る所お才には、不義の男有て勘當せし由。今にも顏を見合すれば侍の意路、眞二つに打放さねばならぬ時宜。彼不義の男は、鶴屋の禮三と聞た計、ついに顏を見知らず。こりやお手前存じて居ぬか」壬「ハヽ〳〵、樣々の事をお尋。相撲取と申者は、大坂中の町人衆、皆彼方からは御存知なれど、此方に一々覺ませぬ。山伏の内へ來た樣に、ちとおなぶりでござりますか」と、猶押強ふ押かこふ、屛風に女房が胸ひや〳〵。力めばいとゞ身の震ひ、吉兵衛もはつと計、「お侍樣御赦されませ。例の瘧で俄の寒け。女房共羽織々々」と身に引かけて、何處も彼も包廻せし氣扱ひ。顏も一曲朱鞘の一腰、居士衣の裾のざん切髮、「吉兵衛殿お宿にござるな。男氣な此方と見受、ちと御無心に參つた者。拙者元は由緒の武士、浪人の世渡り、そと致した劍術指南、面目ないが尾羮を枯し、差替の一腰賣に參つた。何と求て下されまいか」と、脇差前に指置ば、壬「是はまあ余義ない仰やり樣。御浪人のお嗜、定て天晴お道具でござりまうが、町人の篋には、猫に小判。人切衛存ぜねば、刃物買ふ樣がない」武士「イヤ其脇差計は、此方が買つしやれにや成まい。拵は何にもせよ、心を篤と目利して、お買なされて下されい」「ム、心の目利は私も不得手なれど、左樣ならばドレ、ちよと拜見」と拔かくる。鎺の血汐に鯉口

ふためく—慌てる、窃にかく

か」「アイ〳〵何方でござります」武士「イヤ苦しうない者。在宿ならば御意得たし。手前が事は津田兩助と申者」千「エヽイあの兩助樣。そりや丹波の御家中」兩「いかにも左樣」千「エヽ是はまあ時も時。兩助樣じやといなア」と、知らす聲より驚くお才、心半亂半がいの、ふためき隱す小屏風に、押かこふ間も有やなし、兩「御免ならふ」と打通れば、素知ぬ顏に手をついて、千「吉兵衞と申は私。津田兩助樣と申は、ついに承はりませぬが、何用有てか、能ふこそお出。私も瘧を病まして、見苦しい病家、無禮は御免。お茶上ませい」と落付て、腰をすへたる心の配り、兩「成程存じ召れぬ筈。手前初て參つたは、ちとお身に尋たい事有て。其子細は、身共が屋敷丹波の抱鐵が嶽といふ者、一昨夜難波裏にて切殺され、何者の業共知れ申さぬ。此儘に差置ては國の恥辱。若は相撲の意趣切か、御身の商賣體なれば、知まい物でもないと存じて」千「ハア夫でお出なされたか。そりやもふ憚ながら、きつい御了簡違ひ。マア第一負ても勝ても、相撲に意趣といふ事はない事でござります。殊に此仲間で、喧嘩事が嚴い法度。又思召ても御覽じませ、相撲取が我儘に、喧嘩を好いて致そふなら、世界に人種はござりませぬ」兩「ムヽ、尤。然らば今一つ尋たいは、お手前は近江の屋敷三島彌太夫に出入するとな、其娘お才を女房に申受

夕間暮―うちあけていはれぬにかく

ぎごつ―つつけんどん

下さりますな、御合點かへ。早ふお歸りなされませ」と、明て夫とは夕間暮、口にいはねど過分さを、拜むが諸事の禮三郎、心殘して出て行。お才「申お早ふへ」も口の中、まだ夫とは云兼る、おぼこ娘の案じ顏。千「是は扨、追付戻らしやる人を、もふ一生も逢れぬ樣に、何でござりますぞいの。尤錦木といふ色が有ど、禮三殿故に欠落迄してござつたお前。氣遣ひせまい、吉兵衛が添します。とはいふ物の、お前には云号のお侍、丹波の御家中津田兩助樣、まだ緣は切ませぬぞへ。萬一先から大坂迄、詮義すまい物でもない。嚊余り外へ出しますな」よつ「ナニそりやお才樣よりお前の事。今とつくりと養生して、秋の相撲から出にやならぬ大事の體を、ちつと能いと、月代剃て氣丈立が惡いわいな。今日は又發口じや。寒けの來ぬ内蒲團でも著て居やしやんせ」千「何ぬかすやら、夕立のせぬ先に、下駄はいて歩れる物かい。なんぼ煩ふてゐても、地取などすりや氣合がよふなる。おいらが内に寐て居ると、鳥籠に鶴入た樣で、氣が詰つて一倍惡い」よつ「そんならどふなと勝手にさんせ。何でもわしがいふ事は聞んせぬ」千「ヲヽ、相撲取は、女房のいふ事、聞ぬのが好いのじやわい」と、ぎごつな詞も關取の、中のよさとぞしられける。日も暮れ過て藏屋敷の、奴が挑燈目印を、尋來る立派の武士、「千羽川の吉兵衛殿は此方

納戸から―何と
せうにかく
あなかしこ―穴
にかく
次郎―岩川

ひろいで邪魔に成。ちつとの間何處へなと、ぶち込んで置たいが。ハテどうせうぞ」納戸から、「幸 爰に明半蓋」千「イヤ〳〵、のら猫の爪研ぐ樣に、ばた付ては面倒な。寧そ爰へ」と疊の下、幸寶櫃のあなかしこ、迯さぬ思案の極樂落し、跡踏しめて立直り、千「マア是で片付た。あゝして置たら此方の儘。禮三樣も何やかや、定て意趣も有けれど、晝は目に立、まあ晩の事」禮「成程〳〵、とつと是で胸が晴れた。今夜中に岩川にちよつと逢ねばならぬ譯。行て來ませう」と立出る。千「申〳〵、お前の脇指はどうなされた」禮「ヤ、アノそれは」千「ござりませぬか。御勘當のお身の上は、猶以て世間へ外聞。何故丸腰でござります」と、いふに返事も差詰り、行當る顔尻目にじろり、「大方誰ぞを頼で、質物にお入なされたで有。あの脇指は、親御からの御祕藏じやげな。すりや見知の有一腰。何處から何う廻つて、ひよつとひよんな所の手に入たら、お前計か親御のお名の出る事。寶は身の指合せ。金さへ有ば買れる道具でさへ大切。まして親御の血を分て讓受た、お前の身は猶大切。何處へお出なされう共、必命を大事にして聊爾な事なされますな。斯いや艶らしけれど、前方はしみ〴〵と、物いうても下されなんだが、お才樣の縁に連て、今では次郎同然に、念比にして下さるお前じやによつて此御異見、悪ふ聞て

びつくびく―びくびく慄ふ

わがみは―わがみをば

腮云々―口たゝかせぬ

取風。見るより悔と剥れ顔、千「わしに逢たいとは此方様か」かたり「アノ爰の亭主といふは」千「アイ私でごんす」かたり「イヤアこりや叶はぬ」と迯出す。千「コレ〳〵待んせ。様子聞てから其跡で、きつと馳走もせにやらぬ」かたり「其御馳走が痛入ます」千「イヤ〳〵遠慮のない事。わしやもふ嗅が知て居る通、土俵の上の勝負より外、腕立する事が嫌ひ。久しいの煩ひ余り氣が重い故、昨日月代はして見たれど、まだ瘧が落ぬ故、いつからやら、ふつゝりと力業をして見ぬが、腕がためにナア嗅、どこぞ入ぬ體が有なら、ほきほき摑み砕て見たい」かたり「エヽイ」千「ハテこれ、何を其様に震ふのじや」かたり「ハイこりやお前様の瘧の身代りでござります」千「烏渡爰へごんせ」かたり「イヤもふ夫へは憚多い」よっ「ハテ行んせ」と女房に、突やられてもびつくびく、蛇に追れし蟇、「頰見てやらふ」と禮三も立出、「ヤア儕は善九郎め。團右衛門と一所に成て、よふ勘當さしたな」と、胸ぐら取手をしつかと取、善「コレ禮三殿。此善九郎は此方故に、斯ういふ風體。わがみは恨まず逆ねだり。それ計じやない、一昨日の晩、難波裏で鐵が嶽が殺された、其殺人も大方違はぬ詮義が有。サアわせい」と引立て行善九郎が、肩骨摑んでぐつと押付、千「嗅、手拭ひ」と手ばしかく、腮立させぬ猿轡、五尺の體ぐる〳〵巻。「詮義の有盗人め、身動き

下あれ―下されの訛
すべない人云々―不當なに少しでも貸しては
あじやら事―冗談
なめ上る―無禮極まる
げんさい―衒妻、妻を罵りていふ詞

しい勝負でごんすの。ドレ一望姓して來ふか。内義樣四五十兩貸して下あれ。貸ても借る、貸にやねだ切引たくるのじや」と、呑共いはぬ烟草盆、煙管どぶとういやがらす。お四は騷ぐ色もなく、「ム、金が借たい。安い事やの。五十兩なと五百兩なと、何ぼなと貸ふが、こな樣誰じや。ついに見た事もない、すべない人にもじきなかでも、貸しては此方の人に立ぬ。此女中樣と合せ骨牌のあじやら事、勝負事の何のと、人聞の惡い。こつきの威嚇喰ふのじやない、出直さんせ」と取あへず。かたり「ヤイなめ上るな。御法度の勝負事を商賣にする證據には、今おれが影を見て、隱れおつた男め。ちらりと見てもさす物じやないわい。げんさい相手にするのじやない。爰の亭主は何といふ。亭主に逢ふ〳〵」よつ「イヤ此方の人は瘧を病で久しう寐て居らるゝ。殊に今日は瘧日で、そんな事聞すと忽大熱、そりや止しにして下さんせ」かたり「だまれやい、病氣ならてこのぼんや、せいといふ赦しが有か。出さらにや爰へ引ずり出す」よつ「アヽこれ〳〵、夫ばつかりは堪忍して。コレ拜ます」と詫る程、かたり「何じや有ふと亭主めを、代官所へ引ずつて行のじや、出され〳〵」と猶聲高、病家の一間洩聞へ、千「およつ〳〵、おれに逢ふといふのは誰じや。ドレ出て逢ふ」といふ聲も、病に屈せぬ大男、大坂一番千羽川と、一目にしるゝ關

すいほう—粋の意か

まだいな—まだ其樣な事をいふ

手合—戯

疵持足—諺の疵持足の笹原

疫病云々—疫病神の惡人

お才様の勝」お才「アノどふして是が勝じやぞいな」よつ「エヽ不器用なお才様。まだ覺さんせぬか」お才「サイナ歌骨牌取と違ふて、むつかしい物じやわいな」よつ「ナンノ是がむつかしい。禮三様に末永ふ合せの勝負、跡は女夫の一番相撲と、世間廣ふ出ぬけるかため。園は小野川お才様、よいや〳〵」と譽られて、赤らむ顏は朝日山、解けぬ心の禮三郎、「イヤ合せにおいては、我等きついすいほうなれど、斯う札が來てはいかぬ。その筈でも有、此間から段々と詰らぬ身の上、どう思案しても叶はぬ〳〵」お才「叶はぬ戀と思ふたに、わたしが樣な阿房に縁の惡縁でござんせう」禮「又斯惡うも來る物か。いつそ此方から身を捨て。南無三寶命を取れた」お才「ア是なア氣にかゝる事云はしやんすな」禮「イヤもふきつい目にあはされ、とんと禮三が絶體絶命」よつ「アレまだいな。お才様の業じやない。其科はお前じやはいな」禮「そりや何故に」よつ「ハテお前が切しやんしたじやないかいな」禮「エヽい何をわしが何時切て」よつ「はて今の程お前の出に切た札、科人は矢張お前。身を恨だがよいわいな」と、つい手合にいふ事も、疵持足の裏背戸に、心置るゝ折も折、破編笠人相は、見ねど見す〳〵惡者作り、うそ〳〵覗く姿素振。小氣味惡さに禮三郎、「アレ誰やら人が」と納戸口、はづす弱みへ疫病の、神様株が伸上り、「こりや花々

根津―念珠の關
礒に見る―波の
枕詞
大阪の關―相撲
の關にかく
なみ〳〵―浪、
普通
類ひ名取―類ひ
なき名取
四つにも組ん―
相撲の手と妻の
名よつにかく
一萬二千云々―
骨牌にて勝ち得
たる數

來る道筋、落たは何と手に取上、侍「明を持」と挑燈の、灯影に見付る邊の血汐。切倒されし大男、「ヤアこりや身が屋敷の抱の相撲鐵が嶽。何にもせよ心得ず」と内改、紙入より取出す一通、詮義の種と開く間讀む間稻妻の、挑燈ばつたり曲者は、跡をくらまし三重落て行。

第四

昔は西に根津が關、今は東に白川の、關も物かは礒に見る、なみ〳〵にては大坂の、關はゆるさぬ場所に、類ひ名取の千羽川。其川風にもまれては、四つにも組ん柳腰、如在内義の世話に成、お才はさいつ比よりも、爰に假住假初の、緣を鶴屋の禮三郎、合せ骨牌のかゝる島、有なし知らぬさま育ち。丁稚でもない相撲取の、ひよこと見へるうそそ前髪門口から、「藤繩半右衛門申ます、吉兵衛樣の御病氣、ちつと能ごんすか。今日晝網に取ました此鯔お裾分申ます」よつ「ヲヽお心にかけられて、殊に鯔は吉兵衛殿の相角力、追付是にあやかつて、力付しやる吉相。能ふ禮いふて。御大義じや」と、溜紙に百、口先でころりといはす手取かゝ。合せの勝負讀む骨牌、「一萬二千二萬五千、三萬八千が

あやなき―黒白知れぬ
だんびら―大刀

れん」と踏付〳〵、引廻されてもか弱き禮三、手向ひならぬ無念泣。禮「いかに手に合ふ物じや迚、余りむごい胴欲じや」鐵「ヤイ胴欲とは僻が事。九平太樣へ極る身受、岩川めが邪魔するも、皆僻から起つた事。地體此生白けたしやつ頬、見る度ごとに虫唾が出る。泥ぼに似合た是喰へ」と、摑んだ泥を口の内。禮「もふ是迄」と拔かくる、柄元しつかと、鐵「ハハアやるは〳〵。こりや僻、毒もるのじやな。小い形して相撲取を殺さふとは、どぜうの地團駄叶はぬこつちや。サア切れ〳〵」と引拔て、互に爭ふ其中に、又も降りくる雨の足。禮三は引足放さぬ我武者、あなたこなたと引廻されて、稻村の内より出る刀の光、鐵が嶽が肩先ぐつすり、「うん」と一聲、禮「南無三寶、手が廻りしか何とせん」と、心おづ〳〵一刀、鐵「うぬゑらい事ひろいだな」と、拔て切り込む白刃と白刃、稻村陰に窺ふ曲者、あやなき闇の黒裝束、だんびら提げ後より、助くる加勢の滅多切。禮三が所爲と思ひ込、切込深田の泥まぶれ、猶ふりかゝる雨曇り、足もしどろに胸の闇、憎しと思ふ一念力、剜りくる〳〵曲者が、威す足音禮三郎、又も怖氣の身もわな〳〵、心そゞろに千鳥足、こけつ轉びつ逃歸る。とつくと見濟し探寄、留めの刀一剜り、觸る足元落たる鞘、納めた思案の向ふへ挑灯、暫く忍ぶ身の廻り、雨具にかこふ立派の侍、家來を先に

毛二才云々—青二才め何しをる
ばらす—殺す
けたい—懈怠か
ひばり骨—雲雀骨、やせたる形容

くと鐵が嶽、「ヤアよい所で錦木太夫。岩川奴に負た意趣晴し、うぬを是から連ていて、九平太樣へ手渡しすりや、一廉金に成仕事。サア〳〵失せい」と引立る。禮「ヤイ鐵が嶽、錦木は禮三が身受して、今ではおれが女房。其女房を連て往て、金にせうとは盜人同然。われを代官所へ連て行。サア失せおれ」と、引ぱつても、ちつ共動かず。「エヽ、毛二才め何ひろぐ。うぬに引ぱられて行間、此手はどふして居よふと思ふ。馬鹿つくさずと太夫を渡せ。いやといふが最期、幸ひ邊に人もなし、手短ふばらすぞよ」禮「ヲヽ、譬此身はどの樣に成ても、太夫を遣ては岩川へ云譯立ぬ」鐵「ヤア其岩川が猶けたいじや。疫病神で敵の儕。渡さにや斯うじや」と踏飛せば、「のふコレ待て」と錦木が、立寄腰際引つかみ、「もふ了簡が」と武者振り付、禮三が首筋引とらへ、「ひばり骨見る樣な態をして、猪口才すな」と引寄て、握拳のめつた打。かよはき錦が手に當る、小石摑んでばら〳〵礫に眼くらまぎれ、油斷大敵禮三郎、小股取れて鐵が嶽、體の重みにうごめく背中、すかさず禮三が取て伏、「爰構はずと早ふ〳〵」錦「必怪我して下さんすな」と、心は跡に島の內、北野屋さして別れ行。反ね返して髻髮、摑んでぐつとのつかゝり、鐵「サア太夫を何處へやりおつた。埋んだ所をサア吐かせ。此鐵が嶽を盜人とぬかした其腮、蹴裂いてく

んなら今の二百兩は」七「コレ關取、お内義の勤奉公、志の二百兩」岩「女房共、何にも云ぬ、忝い」七「サ駕の衆やつて」と北野屋が、氣轉利かして駕の垂、内は歎きに暮近く、入相つぐる鐘諸共、別れ〳〵に 三重 行末は。

第三

昔の京と難波浦、春雨しげき夜の道、錦木諸共禮三郎、相合傘の濡事も、ひつたり濡る横しぶき。「コレ太夫、道々もいふ通り、わがみの身受の跡金故、岩川の女房が勤奉公すると聞。代に其方を北野屋へやらふとは思ふてゐるが、廓と違て、いかふ勤悧いといふ事じやぞや」錦「ヲヽ禮三樣とした事が、義理より辛い勤は有まい。お前やわしが身の上迄、段々世話に成ながら、おとは樣につとめさしては、どふまあ義理が立物ぞ。是非共代る此身の上、受出されぬ先じやと思や、わしやひつとつも厭はぬ」と、いふも涙に聲くもる。禮「ヲヽ道理じや〳〵。何をいふも皆わし故。日外園右衞門めに衒られた金の事、詮義をせうにも肝心の、園右衞門が行衛は知れず、何もかも身にかゝる難義の果は、一足づゝに消て行ずば成まい」と、我身は暗き闇の夜に、光る眼も蛇の目傘。向ふにすつ

しよげ鳥—しをれて居る

ほぐし—ふり放す

もやくや—煩悶

垂—簾のすだれ

鐵が嶽、此方は猶もしよげ鳥の、しを〳〵上る土俵の上、「すは千番に一番の、相撲」と力む幾萬人、しづまり返つて見物す。「片屋岩川々々、片屋鐵が嶽〳〵。せくまい〳〵、せかずと顔を見合せて、やつ」と引いたる行司の團扇、直に付入鐵が嶽、ずつと兩腕指込す、元來覺悟の岩川が、既に危く見へたる所へ、「進上金子二百兩、岩川樣贔屓より」と、聞よりぐつと岩川が、始の氣色何處へやら、鐵が嶽が諸ざしを、ほぐして土俵へ引くり返し、力士のごとくつつ立ば、「よいや〳〵〳〵」と數萬人、一度に立て手をたゝき、どよみを作る鬨作る、櫓太鼓も打出の、表は人の三重山なせり。次第々々に散る人の、中に紛れていきせきと、駕を舁せて北野屋七兵衞。來かゝる向ふへ岩川が、胸のもやくやさつぱりと、我家へ歸る戻り足、「ヨウ〳〵關取樣出來ました」と、跡から付て來る人に、見付られじと駕片寄、七兵衞が素知らぬ顔、七「ハア關取さて〳〵今日はきついお手柄」岩「ホ七兵衞殿、見てじや有たか」七「見た段か。何うやら取口は惡かつたが、引くり返した其强さ」岩「イヤモ今日の相撲は譯が有て、きつう取にくかつたが、味な事が張合に成て」七「味な事とは二百兩の花か。コレ其花やつた旦那殿が幸爰にじや。逢て禮をいはしやりませ」と、垂を上れば、岩「ヤアわりや女房」とは「岩川殿、隨分健で居て下さんせ」岩「そ

夕日―いふにか

事でさへなくば、工面の仕様もあらふに、わづか二百兩の金故に、大事の相撲をふつてやらざ成まいと思へば、腑甲斐ないやら口惜いやらで、おりや胸が裂る様な」とは「ヲヽ道理じや〳〵〳〵。さりながら、それ程の大事の事、連添女房に隠してゐる、お前の心が聞へぬ」と、怨み涙に時移り、早追々の呼使、「中土俵入でござります。早ふお出なされませ。ちやつと〳〵」に岩川が、しほ〳〵として立上れば、とは「もふお前は行しやんすか」岩「ホ鐵が嶽を抱込で、工面の通りいきや格別。若も行ねば絶體絶命、これが暇乞にならふも知れぬ。さらば」と計一聲を、跡に残して出て行。とは「コレまあ待て岩川殿、たつた一言いひたい事」と、見れ共跡は雲霞、とは「コリヤ斯ふしては居られぬ所。夫の命にかゝはる勝負、わしも是から相撲場へ」と帶引しめて夫の跡、慕ふてこそは五四行空に、響櫓のとうからと、打仕廻ふたる太鼓より、鳴渡つたる岩川と鐵が嶽との相撲割、表にべつたり貼り紙も、はりさく木戸口押合へし合、早土俵入事終り、相撲の數々取盡し、中入前ぞ勇ましき。「東西〳〵、道頓堀宗右衛門町、北野屋七兵衛様急用でござります、一寸木戸迄お出なされませ」と、又も呼出す相撲の名乘、入かへ〳〵勝負も、今一番と夕日に連れて、「西は岩川〳〵、東は鐵が嶽〳〵」と、名乘上られ、しこ踏ならす

いはしやんせ—言ふと結ふにかく
おくれ—怯れと後れ髮とかく
親父樣—浮久
水の出端—一時榮えてもすぐ衰ふ諺
千日に苅た萱—諺にて千日に苅た萱を一日に亡ぼすの略

ふて聞して下さんせぬか」岩「ヤ、いへとは何を」とは「サイナお前の心のナ、それもつれ髮、撫付ておこうより、寧そさつぱりいはしやんせぬかといふ事いな」岩「イヤいふまいいふまい。何ぼわしにいへといやつても、高が女の手業、いふたら大方おくれが出よふ。つい撫付ておいてたも」と、傍に直れば女房も、押てはいはぬもつれ髮、鬢のほつれを撫付る、櫛の背より夫の胸、寫して見たき鏡立。「サアよいか見さしやんせ」と、向ふ鏡の蓋取て、寫せば寫る顏と顏。とは「申し岩川殿、色も青ざめ、そして目の内もうるんで、どふやら氣色の惡そふな顏付。もふ今日の相撲へは、斷いふて行しやんすな」岩「何をあんだらつくすぞい。いつはとも有今日の相撲は、鐵が嶽と此岩川、初日の出ぬ先から町中が、待て居る公の出合。何でも鐵が嶽を、土俵の砂へ埋にや置ぬ」とは「イヤそりや噓じや。今日の相撲は鐵が嶽に、ふつてやるお前の心」と、云ふ口押へて、岩「聲が高い。スリャ先刻にからの樣子殘らず」とは「アイ一間で聞ておりました。僅な金に手詰つて、難義さしやんすがわしや悲しい。寧そ此譯親父樣に」岩「たはけ奴、それいふ程なりや、此樣に人に擲れ踏れはせぬ。昔氣質の親父樣、打明て物いふと、禮三樣に異見の何のとやかましい。若いお人の水の出端、若命生害に成た時は、千日に苅た萱じや。アヽ急な

ふつて—負けて
摩利支天—武勇の神

手を組、思案にくれて居たりしが、「段々日切の切た跡金、親方が催促するも、九平太が皆所爲、とかく鐵が嶽を抱込んで、あつちの身受を延して貰はふより外はない。と云うても一筋繩では往かぬ奴、抱込む仕樣は、ムヽ太夫が身請はおれ次第、魚心有ば水心有、ヲヽこりや今日の相撲を、ふつてやらざ成まいわいの。ソレ〳〵、彼とおれとが立合ふこそ幸、美しう振てやり、彼奴に勝を讓て置て、其上で退引させず、頼か近道上分別。とはいへ名取の鐵が嶽、何ふ魂膽して成共、投殺さにやならぬ相撲、いはゞ一生懸命の、大事の相撲を金故に、ふつてやる岩川が、心の内のせつなさ穢さ、摩利支天にも見放され、相撲冥加につきたのか」と思ひ廻せば廻す程、空恐ろしさ口惜さ、思はず拳を握り詰、身を顫はして男泣。始終立聞女房が、涙隱して、とは「ヲヽ此方の人としたことが、先刻にから飯拵へて待て居るのに、爰で上るか奥へすよふか」と、何氣なければそ知らぬ顏、岩「イヤモ飯なら喰たふない。ホンニ角力から呼に來た。ドレ行て來う」と立上れば、とは「そんならもふ行しやんすか。コレ岩川殿、ソレ髮がきつう亂けて有ぞへ。人中へ見苦しい。結て上ふ」と取出す櫛箱、岩「イヤ結て居たら隙が入。つい撫付ておいてたも」とは「ヲヽお前もこんな髮して、行しやんした事はないが、いつその事何もかも、云

水心有は云々ー諺にて魚心あれば水心ともいふ

九平太樣を、かうくらはしたか。イヤ斯う踏だか」と、弱みを付込厄病の、髮も頭も引しやなぐり、さいなむ折から、表へいきせき、「ハイ今日の相撲割でござります。もふ追付土俵入じや程に、早ふお出なされませ」と、書付ほり込立歸れば、陀多右衞門押披き、「何じや、鐵が嶽に岩川」岩「ム丶すりや今日は岩川と鐵が嶽」陀「コリヤ見い　おれと汝とが相撲じやとやい」岩「ム丶時も時、折も折、わがみと我が立合とは、ハテ氣味合な事じやの」と、いふも心に一思案。陀「コリヤわれも池田の岩川といはれては、國々へ名の通つた者。又おれも大名のお抱へ、殊に大坂は初てなれば、此相撲しくじるが最後、扶持離れじや。すりや是二人ながら大事の相撲。九平太樣の名代に、惠海庵の仕返ししたれば、此算用は濟で有。又錦木が身受の事はおれ次第、ヲ丶此鐵が嶽心次第じや。水心有ば魚心有、賴事も賴まれる事も、まあ今日の相撲仕廻ふてから、其上の事にせうわい。われも隨分神佛でも叩き廻して、おれに勝樣にせい。したが可愛や、おれと取たら骨身が碎て、重て土俵踏む事はならぬぞよ。どふぞ頭取衆を賴んで、振換へて貰ふて成と、取ぬ方が勝じやあろ。夫共に取て見よふと思ふなら、魚心有ば水心有、ナ岩川、土俵で逢ふ」と、強い詞の何處やらに、味な鐵棒引づる雪踏、ぐわらつかせてぞ出て行。跡に岩川諸

わがみ—お前

事じや。何と斯うしてたもらぬか。おれを九平太様へ連て往て、貴方の胸の晴る様に、撲し成と踏し成とさして、身受は此方へさしてたも。わがみの云やる通、金づくの事なれば、今日中に跡金さへ出來れば、頼事も何にもなけれど、サちつと急に出來にくい。尤在所へ云ふてやつたら、工面の出來る事もあらふが、親共の耳へ入とむない。夫でわがみを頼のじや。又身請仕やつてからが、迚も太夫が九平太様の女房にやならぬ。すりや畢竟が、費といふ物じや」陀「默れやい。太夫が隨ふが隨ふまいが、夫にや構はぬ。九平太様には金がたんと有によつて、其金でわいらが頬をはり廻すのじや」岩「サイノ、金で頬をはらず共、此岩川をどふなりと、腹の癒る様にして、身受は此方へさしてたも。コレ一生の頼じや、恩にも著よ。コレ手を下る、鐵が嶽」と、頭を疊にすり付て、頼心ぞせつなけれ。陀「ム、そんなら何か、踏れても撲れても、云分ないといふのか」岩「イヤモ聞分てさへたもれば、譬此身は如何成ても」陀「コリヤ相談が面白いはい。九平太様の名代に、マアちよつと斯うせうかい」と、立蹴にどふど踏飛し、陀「何じや、何びこ〳〵するのじや。わりやたつた今、云分ないと云うたぞよ。但云分が有のか」岩「イヤ〳〵何の云分が有物で。サア〳〵何成と心任せに」陀「ヲヽ、其筈じや。惠海庵での意趣返し、わりや

こつき—口氣
腰—腰巾著
じやみる—事の成らんとして止む事(俚言集覽)
あんだらくさい—馬鹿くさい
根葉—根にもつこと
がらりに—ざらりと

アそふ思ふて居いやい」と、俄にこつきも節くれ立、頬髭撫てのさばり頰、岩「ム丶聞へた、こりや九平太が腰じやな。尤われが爲には、大事にかけにやならぬ人じやが、爰を能ふ聞分てくれ。あの錦木太夫は、おれが親方の禮三殿とは、きつう深い中じや。其錦木故、親の勘當迄受られた事、こりや云はいでも知てゐる事。其處らはまあ取てほつて、五百兩といふ金迄渡し、跡金の二百兩、才覺する其内に、太夫殿を外の手へ渡しては、何ふも岩川が顔が立ぬ。わがみが中へ入つたこそ幸、どふぞそつちの身受を、じやみる樣に云廻してたもるまいか。鐵が嶽、コレ頼む〳〵」と詞を下げ、事を分たる一言を、鼻であしらふ惡者作り、陀「ヲヽ此身受はどふせうと斯うせふと、おれが儘じや。われが頼樣にしてやろといふたら、勝手はよからふが否じや。わりや恵海庵で、九平太樣をひどい目に合したけな。ヲヽ強いこつちや。其仕返しを頼れてゐる此鐵が嶽、あんだらくさい事いふない」岩「ム丶すりや、其時の事が根葉に成て、夫故身請の邪魔するのか」陀「イヤ邪魔するとは何のこつちや。コリヤ錦木が身受は金づくじやぞよ。僅二百兩計の跡金を、團子の咽に詰つた樣に、ぎつちかはと吹へ頰かくとは違ふ、七百兩といふ金を、がらりに出して身受するのじや」岩「成程尤じや。兎角めい〳〵親方を、大事に思ふから起る

端香—お茶の出ばな

木綿襷—いふにかくかけまくは口にかけんも恐と襷をかけとかく

ゐじむぢ—小言

す端香より、心の花香ぞ愛想有。岩「コリヤ女房共、留守の内へ今日の角力割は持てこなんだか」とは岩「イヱ〳〵まだ何にも持ては」岩「ハテ埒の明ぬ。今迄知れぬは、何ぞもめでも有かいの陀多右衛門」陀「サアおれも、初日に鈍な角力取たによつて、何でも今日はと思ふてゐるが、誰と合すぞ。相人によつては魂膽も工夫もして見にやならぬ。いつそ行て聞て來ふかい」とは岩「ハテまあ能ござんすはいな。其内には持て來ふ。幸貰た肴も有、主と一所に飯上つて行しやんせ。ドレ拵ふ」と木綿襷、かけまく神にあらね共、菩薩廻りの女房は、勝手へ立て入にけり。「岩川樣お宿にござりますか。新町の大坂屋から參りました。左右衛門申ます。錦木太夫が身受の跡金、今日中に遣はされませぬと、こちらに身受の客衆がござります故、其方へ相談致します、お前のお顏を立まして、今日中は待ます、明日に成たら、此方へ太夫をやります程に、其時ゐじむぢの無い樣に、念を入いと申されました」と、云捨使は立歸れば、岩「ヤア其身受、外へさしては岩川が立物か」と、馳け出すを、陀「コリヤ〳〵岩川、其身受の譯も其客も、此鐵が揪が知てゐる程に、マア行ず共よいわいやい」岩「ム、すりや、其身受の相談を、われが能う知てゐるか。其身受の客といふは」陀「イヤ外でもないおれじや。ヲ、此鐵が揪陀多右衛門じや程に、マ

練物―祭禮の行列

肩も岩川―肩も怒るにかく

に、どふ有ふと思ふたが近年の大入。今日は大方爰の關取が、取しやるで有うと思ふて、見物に來た序ながらちよつと悅びに參りましたが、關取はもふ往てゞ御座りましたか」とは「イエ／＼今日は叶はぬ用事に付、つい近所迄參られましたが、もふ戻つてゞござんせう。マアほんにいつぞやは、いかゐお世話で、練物を緩と見物致しまして、忝ふござります。いつでも島の內の祭は、俄が多ふて賑やかな事。私等は在所者故、物見だけいと、えてはこちのに叱られます」七「イヤモこちらの方も門がざはつくばつかりで、奉公人が動かねば、肝心の商が少ない。イヤ斯ういふ中に遲なつたら入られまい。關取へ好い樣に賴ます」と、座を立上れば、とは「ヲヽせはしない、まあ御緩りとお茶なりと」七「イヤ遲いとよい場がござりませぬ」と、挨拶そこ／＼歸りける。町中の最屓に肩も岩川が、鐵が嶽陀多右衞門と、打連歸る我家の內。とは「ヲヽ此方の人、戻らしやんしたか。陀多右衞門樣も能ふお出。初日から未だお目にかゝりませぬが、きつい大入でお目出度ふござります」陀「アイそりや樂でごんす。見物の足が早さに、そろ／＼行ふと出かけた道で、岩川に逢たによつて、夫でちよつと寄ました」とは「夫はマア／＼能ふこそお出。したが、まだ漸／＼と今の先、櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶成共」と、會釋に汲出

池田—岩川
難波—千羽川
杉ばへ—酒屋の前に吊せる杉ばやし
假初—借るにかく
羽織脇指云々—岩川贔屓客より纏頭に貰ひし品を竝べる
夫の噂云々—夫の噂を女房が見物人と出合頭に聞く

た禮三が證人」西はお才、東は錦木、「御無事でやいの」と、本妻妾、池田の關取、難波の名取、勝負は秋の相撲迄、「おさらば」「さらば」と 三五 別れ行。

第二

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江〳〵と國々へ、鳴響きたる岩川が、角力の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、見世は初口の錺物、半紙毛氈煙草盆、羽織脇指取まはし、江戶酒は杉ばへ米俵、よその軒端を假初も、賑々敷ぞ見へにける。甲「扨積だの、見事、何じや、羽織脇指米も有、ゑらい張り込じやの」乙「いや又二三年こつちの角力に、めつたに負た事のない岩川」甲「したが今度の角力には、千羽川が病氣故、はづむまいと思ふたが、思ひの外きついはづみ」乙「ソリヤ其筈、勸進元の顏のよいのに、江戶方、九州方殘らず登り。岩川といふ贔屓の強い力の強い、あんな男を持者の顏が見たい」と表から内を覗て高々と、夫の噂女房おとは、出合頭に聞く嬉しさ。顏に少は紅桔梗の、前垂の紐縄暖簾、上てにょつこり、「北野屋の七兵衛でござります」とは「是は〳〵島の内の七兵衛樣、能ふお出、サア〳〵爰へ」に打通り、七「扨まあきついはづみ樣。千羽川が出ぬ故

つがもない—途方もない

解死人—下手人

此吉兵衞—およこが名代になればしかいふ

タ〳〵、うぬ何喰ふてうせおつたやら、つがもない力に成た」「ヲ、こたへたか」と又どつさり。とんぼう返り、山雀投、命から〴〵體の煤掃、箒のむね打ぴつしやく〳〵、打伏せられて興覺め顏、九「うぬ武士をひどいめに合したぞよ。此返報は仕樣が有、待ておらふ」と炬燵の傍、尻目にかけて逃歸る。岩「出來た〳〵」禮「イヤもふ炬燵の櫓が能ふ利いた。したが、待ておれ、と吐かした詞が氣味が惡い」岩「ハテ何としませう。大方道に待伏せ、彼方からしかける喧嘩。せふ事がない、何十人でも撫切にする分。私に付てござりませ」と、鯉口寛ろげ立出るを、およつが呼留、「岩川樣御無心が有。お才樣をお供するは此方の人、吉兵衞殿に成かはつて預る私。女でも男の名代。お前の其魂を、わたしに借て下さんせ」岩「イヤ是は」よつ「サアお前の方に入脇指、若夫が用に立た時は、お前は解死人。錦木樣や禮三樣の跡のお世話は誰がするへ。殊にお前ばつかり日充に、早ふ達者に成たい、と養生する吉兵衞殿。お前に若もの事が有たら、此方の人も病が重る。大事の命爰で捨る所じや有まい。末々お二人見屆る心の堅めに、其魂此吉兵衞が預りましよ」岩「ム、誤りやんした。吉兵衞殿に岩川が魂、しつかりと預ます」よつ「エ、忝い、よふ聞屆て下さんした」禮「いよ〳〵かはらぬ二人が魂、見屆

お前—禮三をさす
櫓—炬燵の櫓と相撲の櫓とかく
しこ踏しめ—胴を据る
二才—青二才
しやらな—生意氣な
推參—無禮
十九文—何でもかまはぬ
了簡が—下にならぬの三字を入れて見るべし
足首取て—岩川の助力なり

分憎いは九平太め。岩川頼む、最前の仕返し、ぶつて〳〵ぶち殺してたも」岩「サア〳〵よごんす。コレくつわや殿、此方様往にしなに、隣座敷の九平太様を、爰へ呼で貰ひましよ。したがわしが顔は出し憎い。此仕返しはお前にさす。怖い事は何にもない、岩川が控へてゐる」と、炬燵の櫓取てのけ、蒲團すつぽり挾取の、體を直に櫓なり。岩「何でも危ふ成た時は、炬燵の傍へ連てお出」と、いへば呑込む禮三郎、「皆邪魔になる隠れた隠れた。是からおれが荒事を、お目にかけん」と、しこ踏しめ、待間程なく出來る九平太、「身に逢たいといふは誰じや」禮「イヤおれでごんす」九「何じや二才めが何の用じや」禮「ぐつと用の有のじや。大義ながら一寸炬燵際迄出て貰ましよ」九「へ、しやらな蚊蜻蛉め。何なと早くいふて仕廻」と、炬燵にどつかり、禮「サアしてやつた。別の用でもない、最前わりやどふして打た。其仕返しに打すへるのじや」九「ハ、〳〵〳〵、うぬがざまで身共を。素町人め。推參至極」禮「イヤ推參呼はりせまい。今迄こそなれ、勘當受たら破かぶれ、屋敷でも侍でも、何でも十九文じやぞ」九「イヤ慮外な」と拔かくる、鐺をぐつと後から、九「拔ぬはどうじや」とうろ付中、胸ぐら摑む禮三郎、九「ちよこざいすな」と突放せば、鐺返しに眞倒。九「もふ了簡が」と摑み付、足首取て締め上れば、九「アイ

片屋—西方東方

二人—岩川と千羽川

いづこかは—何處からか

ぐる—共謀

力には岩川と取たいと、力で計居られます」と、片屋かはれどかはらぬ付合。岩川贔屓の禮三郎、「エヽおれが嫌の千羽川に、世話頼のは口惜い」澤「コリヤヤイ、勘當の身に成て、相撲取の贔屓所か、併が人の贔屓を受ねば立ぬ樣に成たはい。頼にやならぬ二人の衆。今迄の樣に、岩川々々と澤山にいふ事ならぬぞ。アヽ是もいらぬ世話、何事も皆後生菩提、なんまみだ〳〵」珠數に涙を繰交て、しを〳〵歸る爺親に、二人は嫁共舅共、心計の暇乞、只伏拜む親子の別れ。引違へていづこかは、くつわや左右衛門、岩「ヲヽ幸ひ好い所。錦木太夫が身受金、ソレ五百兩」と投出せば、左「コリヤ忝い」受取の一札、さら〳〵と書認め、差出せば岩川が、押開き見て不審顏、「五百兩受取、殘つて二百兩とは何のこつちや」左「ハイ太夫が身の代は七百兩。まだ二百兩足ませぬ」岩「イヤそりや手附に二百兩、善九郎が持て往た筈」左「けもない事〳〵。慥な鶴屋の禮三樣、其お顏が手附じやと思ふて、二百兩が一百兩も取た覺へござりませぬ。今聞きや御勘當とやら。跡金の濟迄は、錦木は連て歸ります」と、手を取ば引はなし、岩「今日一日は揚の女郎、指もさゝす事ならぬ。明日の朝迎におこした。跡金は此岩川が吞込でゐる。若旦那、スリヤ是も善九郎めが仕事。思ひ廻せば何奴も此奴も、皆ぐると見へる」禮「サア取

書消す—掻消す
千羽川—岩川と同じくよい力士
救ひ投云々—救ひ投、手取は相撲の縁
内義—ないにかく
よごんすか—よろしうござるか

て失せおらふ」ときめ付る。白藏主の正眞に、尾の出た大和の善九郎狐、書消すごとく迯失せける。傍の財布に岩川が、「金子しつかり受取ました。禮三樣錦木樣、お二人の身の上は、次郎吉が命にかけて。じやがお才樣とやらも、禮三樣に女夫の約束。男は一人、女中は二人、一つに束ねて世話も成まい。ハテどふせう」と行當る、次の座敷の中から取て、「其女中預りましよ」岩「ムヽそふいふは何處から。女中の聲じやが此子と近付のお人か」女「イヽエ近付ではないけれど、岩川樣の預り憎い女中樣、千羽川の吉兵衞が女房、よつが預つて歸りたい。誠に三島彌太夫樣、大阪の藏座敷お勤の時、お口かけられた吉兵衞殿、其彌太夫樣の娘御、御世話せねばならぬお方。氏神樣へ參つた次手、立寄た此惠海庵。幸の所へ來合せたも、明神樣のお引合せ。お才樣の身の上、どうぞ私に世話さして下さんせ。頼まする」と差當る、難義を救ひ投かけて、頼むは天滿千羽川。隱れ内義の手取なり。岩「ヤレ嬉しや。よい買人が出來たぞ。吉兵衞殿に預れば慥々。そしてまあ病氣はよごんすか」よつ「此間は大分よござんす」岩「ヲヽそりや嬉しい。あの人が出やしやれぬと、私やもう片腕もがれた樣で、ほんに誓文、早ふ本復しられます樣と、神々を祈て居やんす」よつ「イヤもふ此方の人もお前の深切、影ながら悦んで、どふぞ秋の角

新町—大阪の遊廓

久離切—緣切る

十德—被布の如きもの隱居又は醫者など著用したり

引負—遣込

屋敷の物頭、三島彌太夫殿の息女、丹波の家中津田兩助殿へ嫁入する筈の人と、結び合た禮三が惡緣。斯う欠落して來たれば、國へ往せば直に手打、といふてお出入の屋敷の娘御、不義合點で、おれが子の禮三に添しては、御家中へどうも顔が出されぬ。かういふ事は知らいで、息子が夜泊日泊は、新町の太夫故、いつぞ身請してやつたら、結句しまりが出來るであろ。聞た樣子が、此お山も、眞實禮三を可愛がつてくれるげな、高が千兩迄の事、給銀の高い乳母置たと思ふて、身受の充に持て來た隱居金の千兩。まだ五百兩殘つて有。是で濟なら金立て、女房になと妾になと、他人の事はおりやかまはねど、棺桶へ片足踏込で、究竟な躮を、久離切ねばならぬとは、思へば惡い入前」と、十德の袖顔にあて、泣倒れたる親心。禮三も不孝の悔泣、女郎も倶に有難涙。善九郎がけら〳〵笑ひ、「結構な親旦那の御了簡。そんなら其金、錦木が身の代、たつた今親方へ私持て參じましよ」浮「イヤ〳〵、こりや其方は賴ぬ。此使は岩川」善「デモ最初から手附打た使も私」浮「サア夫じやによつて猶やられぬ。善九郎隙やつたぞ」善「エヽイ」浮「イヤ悔りすな、覺の有事。よう禮三をたわけ者に仕上たな。末々は番頭脇にもしてやらうと、思ひの外の不忠者。引負萬事書立て、お上へ願へば首の無い奴。隙出すを有難いと、出

貰かけ―嫁に貰ひかけ

角前髮―池田炭にかく

土地の者云々―私は此土地の者でもないにあなたけ大層私を御贔屓にして下さるとなり

あどない―あどけない

追蹤―へつらひ

才「エヽイ申其團右衛門は私に狀を付て、父樣へ貰かけ、聞入ないを意趣に持、闇討にせうとの工が顯はれ、則私が勘當受た其日、一所に團右衛門もお國を追放」彌「ヤアそんなら彼奴はお拂者か」才「サイナ、其跡で殿樣の備前長光のお刀紛失。是も大方團右衛門が所爲」彌「スリヤ今の金も衒られたか。儕此儘で置ふか」と、駈け出す禮三が向ふより、「若旦那お待なされ」と、名乘は高き岩川次郎吉、池田の名物角前髮、「私は角力の寄初で、浮瀨からたつた今。聞た所が常體の衒と違ふて、根の有仕事、つい詮義は成ますまいが、差當つてお前の身の上。御隱居樣聞へませぬ。天にも地にも、たつた一人のお子じやないか。世界に金遣ふ者がなけりや、金設る者もない。金銀は廻り物、色狂ひした迚、勘當とは余り胴欲でござります。といふたらお氣にさはらふけれど、土地の者でもないに、どうした事かきつい御贔屓、お前の御恩忘れぬから、大事の若旦那、此位の事で勘當とは、ちつとお前老耄かと思ひます。わしを贔屓して下さる氣なら、一番此詫言は聞て下んせ、御隱居樣」と、大きな形で物云の、あどない所が關取なり。淨久手を打、「次郎能ういふてたもつた。常は追蹤しても、かういふ場所に成と、踏込で詫言する者は、手代にもない。過分なが、此勘當はどふも赦されぬ。といふ子細は此女中、御用承る近江の

子供云々ー子供しかせぬいたづら

めんよふー不思議

がかりに窺ふ錦木、お才も歸る小庭先、聞共知らず親淨久、「ヤイ禮三、此親が年々拵ぎ溜た身上、金銀は親の身の膏。其膏を始末する事を知らねば、終には金銀の冥加に盡る。金は町人の寶物、芝居の狂言でも、三種の神器とやらいふ寶物の事ばつかりで、一日座中があたふたする。其大切な寶物を、色狂ひに遣ひ果すたわけ者。今日も町の參會に、西照庵へ往たれば、東座敷の襖に書て有た落書、コレ是見い」と取出す、襖のまくり相合傘に、大坂屋錦木、鶴屋の禮三。「是見た時の町の衆の手前、あんまり腹が立て、引まくつて戻つた。まだ其傍に、誰や彼や書て有た。ハア何とやら、ヲヽ岸本屋おゑんとして、其傍に、相人は醫者殿かして、慶子と書て有たわい。コリヤ子供はかせぬ手合、子供の口の端に迄かゝる樣な事をして、鶴屋の名跡が立られふか。勘當じや、立て行」と、父の腹立身にこたへ、思はず知らず錦木も、「科人は私」と、お才も倶に轉び出、泣て詫する計なり。きよろ〱眼に善九郎、「禮三樣〱、只今くつわへ持て往て、今の小判を明て見たれば、コレ此通りの戎樣。こりやマアどふでござります」淨「ヤア何じや贋金じや。ハテめんよふな。近江の屋敷で、村岡團右衛門といふ知行取が、贋金を遣はふ樣はない」と、親子の不審、お才が不審、才「アノ村岡團右衛門が爰へ來たかへ」淨「チイノ」

背中に腹—諺、他人より自分が大事の意
御無體—御無理
垢を拔く—あかりを立てる
盜ひろぐ—盜をする
そなお侍—そこなお侍

狀」と差出す。封押切て讀終り、九平「氣の毒な事が有。ナニ禮三、今の金子返してくりやれ」禮三「エヽたつた今お貸しなされた其金を、返せとは」九平「イヤありや、殿の御用金。只今の難義を見て、暫くの間に合せた武士の情。今相役より金子急入用と申越たれば、延引すると身共は切腹。背中に腹、サア返してたもれさ」禮三「じやと申て、くつわの方へ遣はした金、今戻せとは余り御無體」九平「イヤ身は無體は云はぬぞよ。此證文に、何時成共返辨と書たは僞りか。ハアヽこりや聞へた、借證文を反古にして、殿の金子を横取じやな」禮三「アヽ申々、何の左樣な」九平「ヤアぬかすな。もふ此上は織屋敷へ引立て、相役の手前、垢をぬく。憎くい奴」と、扇で丁々九平太も、「盜ひろいだ其金で、受出し自慢置上れ」と、二人が足下に蹴飛し〳〵、「サアうせう」と、引立行。「申々暫」と、聲をかけて立出るは、禮三が親淨久禪門。禮三「ヤア親父樣、何時の間に」と、いへど見向ず、團右衛門が前に手をつき、淨久「悴が不調法、此頭に免ぜられ、何事も御了簡」と、久三に持す千兩箱、蓋追取て「五百兩、御返進」と差置ば、九平「ヲヽ叮寧の仕方。斯うなうて叶はぬ筈。淨久にも堅固で重疊。金子相違ない上は、急の御用、罷歸る」と、挾箱に取納、「そなお侍、おさらば」と、互に默禮目遣ひに、樣子有顏九平太も、隣座敷へ立て行。心

くつわ―忘八とかく女郎屋の亭主
兼て―金とかく
ひけらかし―見せびらかす
さへられな―かけられな
當返す―あてこすりのしかへし

から、手代の善九郎、「コレお侍樣、此方も二百兩といふ手附、くつわへ渡した使は拙者。若旦那、彼云はれては立ませぬ。エヽ今日中に身受して見せたいな」九「成らぬ事〳〵、七百兩の金がなくては、太夫が身受はならぬはい。吹きや飛ぶ樣な身上で、何として何として」と、當こすられて若氣の禮三、無念ながらも有合さぬ、兼て始終を一間の中、「金子御用に立申そふ、禮三殿」と、呼かけて、しづ〳〵出る其物體、禮「エヽお前は江州の村岡團右衛門樣」村「ヲヽ御用に付て登り申た。樣子あれで承はつたが、お手前こりや立まい。只今太夫を身受めされ。今其方に有合さぬ金子、團右衛門が貸し申」と、家來に持せし挾箱、取出す五百兩、禮「エヽイそんなら其金お貸し下さるか」村「ヲヽサ念の爲假證文」禮「ハア忝い。サア〳〵太夫主は此方の物」深き惠の硯箱、墨黑々と書判に、證文認め差出せば、善「コレ九平太樣。コレ此方の旦那は五百兩や七百兩は、嘘をする度に、ぶつ〳〵と吹き出る。ドリヤ太夫主の身請金、親方へ渡して來ふか」と、金を財布にひけらかし、廓をさして行跡は、九平太はぐつ共いはず。禮三は氣味よく、「ナント部屋住の勢ひ御覽じたか。お氣にはさへられな、算用の知て有御知行で、太夫などは受出されぬ。ナアお侍」と當返す。折から中間かつつくばい、「團右衛門樣へ、お屋敷より急の御

修羅云々—阿修羅の如き立腹する顔
伯母貴—伯母御に同じ
あど—相手
げんき張る—力瘤を入れる

心、と申て云号の兩助樣へは立ず、母御樣御合點で國を欠落、再び屋敷へ歸らつしやると、手打に逢娘御。否でも應でもお前の奥樣。お手渡し致したら、拙者は早國へ歸りたい」と、樣子段々聞度に、禮三が悔り太夫が修羅、腹立顔をお才がながめ、「申あなたは何方樣」禮「イヤ是はおれが伯母貴じや」才「ヘヱても扨も、お若い叔母樣でござんす。イヤ彼の樣に見へれど、年は四十六、元服した子が二人有」才「是はしたり。申叔母御樣、お聞遊ばす通りなれば、今から諸事をお引廻し」と、いひかけられて錦木も、不承〴〵に、「アイ能ふこそ禮三を可愛がつてやりなはます。私は婆々の事なれば、増花のお前樣、お樂なはませ」と、ぴんとするのを鎭める禮三、綾操り廻す狂言師も、あどにこまりし最中へ、「禮三〳〵、ちと逢ふ」と立出るは、藏屋敷一原九平太。禮三はちやく〳〵と、「コレ瀬平殿、お才は少の間、隣の西照庵の庭見せて來て下され。太夫もあちらへ」九「イヤ錦木は爰に置け」禮「イヤ申、今日は禮三が揚た太夫。廓の借貸は格別。お前の慰には成ませぬ。構はずと往きや〳〵」と、追やる跡にむつと顔、九「町人と武士とが買論しても濟ぬ事。先達て錦木は、親方左衛門方へ、手附金渡し置たれば、今日明日には身受して、身共が女房。何程げんき張ても部屋住の禮三、楯づき立は叶はぬ事」と、悪口明て次の間

らり—亂離か
我折—あきれた
こんくはい—吼噦と後悔との口合
勝手に—勝手にやるにかく
ぽつとり—おぼこ娘

うがな」禮「ム、有でもなし無いでもなし。彦根は親共から御用を聞家。去年お國へ往た時に、三島彌太夫といふ人の娘、お才といふのにツイちよつと」禮「其ちよつとが癖の悪い」と、口舌の半、狂言半、善「若旦那く、どうでござります。肝心の所間が抜てらりに成た。太夫様こりやマア何事」「コレ善九郎様かうじやわいな」と呟く引舟、善「イヤア我折。扨は旦那が釣狐じやない、釣娘」太「サイナ女子を化す男狐」禮「おれも狐の面目ない。嘸こんくはいでござりませう」太「ヱ、口合所かいな。妾は悋氣仕はせぬが、マアどふせうと思召」禮「ハテどふといふて、往なして仕廻ふ分の事。したが、おれに逢ずば往ぬまい。ちよつと逢て能い加減に欺して往なそふ。善九郎爰へ呼んで來い。コリヤく太夫が事は隱すのじやぞ」善「ヲツトそこらはすなさせん。どうなと勝手」に走入。ついに來なれぬ難波潟、田舍育のぽつとりも、堅いは武家の育柄、若黨らしいが付添て、しとやかに座につけば、禮「ヲ、是はくお才殿」才「アイ禮三樣、お久しうござります」禮「何として爰へは」才「ハイ私は父樣に勘當受て參じました。お前と不圖云かはした、樣子は知らず彌太夫樣、丹波の家中津田兩助樣とやらへ、嫁入さす約束した、と聞てはつと痞が上り、母樣に打明て。ノウ瀬平」瀬「成程左樣。兎角あなたはお前に添ねば死る

比興者―卑怯者
中入云々―是より狐釣の狂言を見物せる太夫の話にうつる
引舟―太夫につく圍女郎
泉派―泉の如くにかく
後の出端―中入後の打扮
さしてもない―さ程にもない

かゝつたこそ道理なれ、上々の若鼠の油上。是が食ずにおかれうか、飛かゝつて一口にくはふ。喰たいなア〳〵。ア誠に、眼前若者共がかゝつたを知りつゝ、身共が罠にかゝつては成まい。道をかへて歸らふ。ム、よい匂ひかな。此匂ひを嗅いでは中々歸られぬ。そうじや餌計むしつてくふに、食はれぬといふ事有ふか。飛かゝつて一口に食ひたいなア〳〵。何をいふても此、身重い形で、罠にかゝつては成まい。よい〳〵、たつた今此化た衣裳を脱いで來て、一口にする程に、其處をのいたら比興者で有ふぞゑい。くはい〳〵〳〵」中入待兼樂屋には、大阪屋の全盛、錦木太夫、禿共、煽ぐ引舟押ぬぐふ、汗は流れて泉派の、後の出端の衣裝をちやつと、錦「ア、おきや〳〵。もう狂言所じやない」と、禮三が胸倉引据て、「お前樣は〳〵、能ふも〳〵、あんな惡性なされますな」禮「コ、コレ、何いふのじやぞいの。エ、新住の京が事か。さしてもない事を、悋氣はゆるりと仕やいの」錦「イエ〳〵なんのそんな事云や致しませぬ。京大阪での色事なら未だしも、遠い近江の彦根とやら、しかも屋敷の女中樣が、お前に逢してくれい迚、あちら座敷に待て居る。私は知らぬふりで、袖之丞に問したれば、禮三樣に國で深ふ云かはした、とあつかましい云樣。ノウ百合」百「アイ〳〵あの通り。お前の惡性に違ひはない。何と覺がござりませ

しやなら〳〵―しなり〳〵

かゝつたしらぬ―かゝつたかもしらぬ

た。ハアヽ、能ふお捨ちやつたのふ。異見を申にお聞やらずば、腹が立ふに、得心めされて満足致した。奥へ通り、子供にも逢ふなれ共、清められてから参らう」狐鉤「兎も角もなされませい」白「そなたも又些寺へお出やれ。何も馳走はなけれ共、昆布に山椒、能い茶を申そふ」狐鉤「其お茶が何よりでござる」白「アヽお出やれとは申たれ共、何も馳走は申さぬ、昆布に山椒をまいて」狐鉤「ハア」白「茶計申さう」狐鉤「よふお出なされました」白「アお出やれと申たれ共、何も馳走は申さぬ。昆布に山椒茶計申そふ〳〵、茶計〳〵茶計〳〵、ワイ。ノウ嬉しや〳〵、まんまと異見を致して、罠を捨さしてござる。是から何方へ行ふ共、身共が心の儘じや。此様な心面白い時は、小唄節で歸らふ」狂言歌「所に住めばこそ浮名も立のふ、往のやれ、我古塚へ、しやなら〳〵とワイ」「罠を捨たかと思ふたれば、身共が歸る道の眞中に、はりすまして置おつた。アノ善九郎は聞ぬ者じやナア。誠に人間の狐をば野狐の心と申て、物疑ひをすると申と聞たが、彼奴は狐には劣つた奴じやナア。いや、又どの様な事がして有ば、若者共が罠にかゝつたしらぬ。罠の様體を見て置度い物じやが。ム、何やら小さい眞黒な物が有が。ヤイ儕め、其小さい形で、能ふ身共が眷族を釣取たなア。夫がよいか是がよいか、覺へたか〳〵。ム、可い匂ひかな〳〵。罠に

こくない―國内か
いやといへば―いやとよ

くない通化の者なれば、疎にしては叶はじ、と三浦之助、上總之助に仰付らる。兩介承はつて下野の國那須野の原に下著して、百日の犬追物とぞ聞へける。百日の犬滿じければ、大き成三ツ尾の古狐顯れ出るを、一の矢は三浦之助、二の矢は上總之介、ひやう、どつきと射る。得たりやおうと飛で下り、劒を以て彼を害し、帝へ此由奏聞申ければ、君の御惱も忽御平癒有、國も納り、太平の御代と成。猶も其執心大石と成て人を取事數しらず。地を走る獸、空をかける翅迄、地に落かゝる殺生を致す石なれば迚、殺生石とは名付たり。爰に玄翁といへる僧、彼石に向つて喝す。汝元來殺生石とうせきれいしやう、何れの所よりか來り、何れの所にか去」と、拂子を以て三ツ打。打れて此石割れしより、猶も人を取ぞかし。かゝる執心の恐ろしき者なれば、此後釣ふつつとお止り有かしと思ひすよ」狐釣「恐ろしい物語を承はりました。此物語を聞ては、狐を釣ふ物ではござらぬ。此後ふつつりと釣止ませう」白「夫は嬉しい。夫なら其狐を釣輪罠とやらが有ふ、夫をお捨ちやれ」狐釣「お歸りなされたら捨ませう」白「いやといへば、其道具を見たら、釣たい心も出ふ。身共が見る前でとつとゝお捨ちやれ」狐釣「畏りました。是でござる」白「ム、穢しやく。とつとゝおすちやれ」狐釣「捨ましてござる」白「何じや捨

おくりや―呉よ

ゑいその如く―ゑいかやうなと形容していふ

班足太子―仁王經に印度の班足太子王位に登らんとて外道の教を信じ千王の頭を取つて塚の神を祭りし事あり

しなされませい」白「夫なら其床几をおくりや」狐釣「畏りました。お床几」白「此物語を聞て後、釣ふつつりとお止りやれや」狐釣「畏りました」白「抑々狐は、神にてぞおはします。天竺にては八汐の宮、唐土にては更衣の宮、我朝にては、稲荷五社の大明神と申も、狐なり」狐釣「ハア」白「又鳥羽院の御時、玉藻前と申て、容顔美麗の美しき上童の有しが、彼を玉藻前と申子細は、四角八方より其姿を見るに、裏表なき美しき女なり。惣じて玉には裏表なき物なれば迚、玉藻前とぞ召れける」狐釣「ハア」白「有時清涼殿にて御歌合せ有し時、ゑいそのごとくなる大風吹来り、禁中の灯火一燈も残らず消ぬ。其時玉藻前が身より光りを出し、玉殿は申に及ばず、御庭の眞砂の數迄限なく見え候間、帝此光りに當り給ふと、忽御惱とならせ給ふ。貴僧高僧を請じ申され、いろ〳〵御祈禱候へ共、更に其驗なし。爰に安倍の泰成と申博士を召れ、占はせて御覧ずれば、泰成参り、念比に考申様、是は偏に玉藻前が所爲なり、根本此女は狐なり、天竺にては班足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒似と成て七帝迄取殺し、今又日本の帝王を取奉らんと、玉體に近付、かゝる執心の恐ろしき者なれば、急ぎ調伏有て然るべしと、頓て呪壇を築て護壇を餝、藥師の法を行ひ給へば、大内にもたまり兼、下野國、那須野の原に落て行。こ

おりやる—ござる

先奥へ云々—申さう迄一本になし

なかくさし云々—隠すな、以下かゝらぬかと迄一本になし

此間狐を云々—一本「成程此間狐釣を致します夫は心なき事でおじやる」とあり

案内もう」狐釣「表に物もうと有。案内誰、どなたでござる。エイ白藏主様」白「マ愚僧でおりやる」狐釣「こなたなら案内なしに通りはなされいで　夜中に何と思ふてお出なされました」白「只今參つたは、別の事でもない。ちと其方に異見のしたい事有て參つた」狐釣「御異見とござるなら、いか樣の事成共承はりませふ。先奥へお通りなされませい」白「イヤ／＼思ふ子細が有所で、奥へは通るまい是にて申さう　聞ばそなたは狐を釣るとの」狐釣「イヽヤ左樣の事は存じませぬ」白「なかくさしましそ。寺へ來る人每に　アレあの奴の殿こそ、狐を釣れ、人にさへ異見をいふ者が、あれが目にかゝらぬか　と人ごとに云せらるゝ。よもや僞ではおりやるまい」狐釣「御存の上は、隱しませふ樣はござらぬ。此間狐を一つ釣ましたが、面白ふ存じて、釣程に／＼、七八疋も釣たでござらふ」白「ムヽシテ狐を釣て何におしやる」狐釣「皮は引ぱいで引敷に致します、肉は料理して食べまする、骨は膏藥錬に賣りまする」白「ムヽ聞てさへ身が顫はる。彼狐と云ふ者は、執心の醜しい物じや。此後はふつつり止らしませ」狐釣「何が扨此方の御異見でござる程に、此後斷然釣止りまするでござらふ」白「何じや止らふ。夫なら爰に、狐の執心の恐しい物語が有、語て聞そふか。ア迚も釣止るまいならいらぬ物かい」狐釣「イヤふつつり止りませふ。お聞

そつ共—ちつとも

あまさか樣なる事—無理な事

犬聲云々—つぶした迄一本になし

闕取千兩幟　勝負附貳枚續

第一

次第 別れの跡の振狐〳〵、こんくはいの涙なるらん。狂言「是は此邊に住居致す古狐でござる。爰に有者の候が、何時の頃よりか狐を釣初め、面白いと思ふてか釣程に〳〵、我等が眷屬を釣取て、某をも覘へ共、そつ共油斷致さぬ所で、聊爾に餌を食みに出ふ樣もござらぬ。爰に彼が伯父坊主に、白藏主と申がござる。此白藏主の申さるゝ事は、あまさか樣なる事をも、彼者が承引致す所で、今日は白藏主に化、異見を致し、釣止らせふと思ふて、化たかと存る。先彼獵師の許へ行ばやと思ひ候」仕馴し我古穴を立出て、立出て、足に任せて行程に、獵師の許に著にけり。「急ぐ間、獵師の元に著てござる。誠に彼者が、犬を飼ぬが一つの屑でござる。犬を好て飼ならば、中々我等ごときの寄付事も叶ふまいくはい」犬聲。「遠鳴で有たもの。ゐいきもをつぶした。先案内こふ。物もう

光明寺―鎌倉に在り泉岳寺の作替へ

竹の葉―暗に作者竹田出雲を仄めかす

助が一生の誤り、不便な最後を遂さしたと、片時忘れず肌放さず、今宵夜討も財布と同道。平右衛門そちが爲には妹聟。燒香させよ」と投遣れば、平「ハ、、、はつ」と押戴押戴、「草葉の陰より嘸有がたう存ましよ。冥加に余る仕合」と、財布を香爐の上に著、「二番の燒香早の勘平重氏」と、高らかに呼はりし、聲も涙に震はすれば、列座の人も殘念の、胸も張裂計なり。思ひがけなや人馬の音、山谷に響く攻太鼓、閧などつとぞ上にける。由良助ちつ共騒がず、「扨は師直が一家の武士取懸けしと覺たり。罪作に何かせん」と、覺悟の所へ、桃井若狹助後馳に馳付給ひ、「ヤア〳〵大星、今表門より攻懸けたは、師直が弟師安。此所で腹切ては、敵に恐れしと後代迄の譏。鹽冶の御菩提所光明寺へ立退べし」と、仰にはつと由良助、「いか樣最期を遂る共、亡君の墓の前、仰に從ひ立退申さん。御殿賴上る」と、いふ間もあらせず、何處に忍び居たりけん、藥師寺次郎鷺坂伴内、「おのれ大星遁さじ」と、右往左往に討てかゝる。力彌すかさず請流し請流し、暫が内は討合しが、はづみを打て討太刀に、袈裟にかけられ、藥師寺最期。交す二の太刀足切れ、尾にも繼がれず鷺坂伴内、其儘息は絕へにける。由「ヲ、手柄〳〵」と稱美の詞。末世末代傳ふる義臣、是も偏に君が代の、久しき例竹の葉の、榮を爰に書殘す。

良助は懐中より亡君の位牌を出し、床の間の卓に載奉り、師直が首血汐を清め手向申、兜に入し香を炷、退つて三拜九拜し、「恐ながら亡君尊靈、蓮性院見利大居士へ申上奉る。去御切腹の其折から、跡弔へと下されし九寸五分にて、師直が首かき落し、御位牌に手向奉る。草葉の陰にて御請取下さるべし」と、涙と倶に禮拜し、「いざ〳〵御一人づつ御燒香」皆「先惣大將なれば御自分樣より」由「イヤ拙者より先さきへ、矢間十太郎殿、御燒香なされ」矢「イヤ〳〵夫は存も寄ず。いづれもの手前と申、御贔屓は却て迷惑」由「イヤ贔屓でござらぬ、四十人余の衆中が、師直が首取んと一身を抛中に、貴殿一人、柴部屋より見付出し、生捕になされたは、よく〳〵主君鹽冶尊靈の、お心に叶ひし矢間殿、お羨しう存る。何といづれも」皆「御尤に存まする」矢「夫は何共」由「ハテ扨刻限が延ます」矢「然らば御免」と一の燒香、皆「二番目は由良殿、いざ御立」と勸むれば、由「イヤまだ外に燒香の致し人有」皆「そりや何者誰人」と、問へば大星懷中より、碁盤縞の財布取出し、「是が忠臣二番目の燒香、早の勘平がなれの果。其身は不義の誤りから一味同心も叶はず、せめては石牌の連中に、と女房賣て金調へ、其金故に舅は討れ金は戻され、詮方なく腹切て相果し、其時の勘平が心、嘸無念に有ふ口惜からふ。金戻したは由良

ゑせ者―くせものといふに同じ

わろびれもせず―臆せず

浮木にあへる云云―逢ひ難き折を得る法華經に佛難ㇾ得ㇾ値如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木之孔とあり

大將師直と覺しき者もなき所に、足輕寺岡平右衛門、館の内を飛廻り、平「部屋〳〵は勿論、上は天井下は簀子、井の内迄鎗を入て捜せ共、師直が行衛知ず。寐間と覺しき所を見れば、夜著蒲團の溫り、此寒夜にさめざるは、迯て間なしと覺へたり。表の方が氣づかはし」と駈行を、「ヤレ平右衛門待〳〵」と、矢間十太郎重行、師直を宙に引立、「コレ〳〵いづれも、柴部屋に隱れしを、見付出して生捕し」と、聞より大勢花に露、いきいき勇で由良助、「ヤレでかされた手柄々々。去ながら迂かつに殺すな。假にも天下の執事職、殺すにも禮義有」と、請取て上座に据へ、由「我々倍臣の身として、御館へふん込狼藉仕るも主君の怨を報じたさ、慮外の程御赦し下されい。御尋常に御首を給はるべし」と相述れば、師直も遉のゑせ者、わろびれもせず、「ヲヽ尤々、覺悟は兼てサア首取」と、油斷さして抜打にはつしと切。引外して腕捻上、「ハアヽしほらしき御手向ひ。サアいづれも日比の欝憤此時」と、由良助が初太刀にて、四十余人が聲々に、「浮木にあへる盲龜は是。三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しや」と、踊上り飛上り、筐の刀で首かき落し、悦び勇んで舞も有、「妻を捨子に別れ、老たる親を失ひしも、此首一つ見ん爲よ。今日はいか成吉日ぞ」と、首を擲つ喰付つ、一同に「わつ」と嬉し泣、理り過て哀なり。由

たく〳〵。「そりや乘込」と天河の、聲響かして亂入。「スハ夜討ぞ」と松明挑燈、裏門よりも込入て、一方は鄕右衛門、一方は由良助、床几に掛つて下知をなす。小勢なれ共寄手は今宵、必死の勇者祕術を盡せば、由良助、「余の者に目な懸けそ、只師直を討取」と、鄕右衛門諸共に、八方に下知すれば、はやりをの若者共、揉立〳〵三重切結ぶ。北隣は仁木播磨守、南隣は石堂右馬之丞、兩隣より何事か、と家の棟に武者を上、挑燈星のごとくにて、「ヤア〳〵御屋敷騷動の聲、太刀音矢叫事騷がしく、狼藉者か盜賊か、但非常の沙汰なるか、承はり屆けよ、と主人申付られし」と、高らかに呼はつたり。由良助取敢ず、「是は鹽冶判官が家來の者共、主君の怨を報はん爲四十余人の者共が、千變萬化の戰ひ。斯中は大星由良助原鄕右衛門、尊氏御兄弟へお恨なし。元來兩隣仁木石堂殿へ、何の遺恨も候はねば、卒爾致さん樣もなし。火の用心は堅く申付たれば、是以て御用心に及ばぬ事。只穩便に捨置れよ。夫迄も隣家の事聞捨ならず、加勢あらば力なく一矢仕らん」と高聲に答へたり。兩家の人々聞屆け「御神妙〳〵。我人主人持たる身は、尤斯こそ有べけれ。御用あらば承はらん。挑燈引」と一時に、靜返つて扣へける。一時計の戰ひに、寄手は僅二三人、薄手を負たる計にて、敵の手負は數しれず。されば共

千崎小寺の面々、勢力彌を始とし、表門より入れ〳〵。郷右衛門と某は裏門より込入て、相圖の笛を吹ならば、時分はよしと乘込よ。取べき首は只一つ」と、由良助に下知せられ、怒の眼一時に、館を遙に睨付裏と表へ三重別れ行。斯とはしらず高武藏守師直は、由良助が放埒に、心も緩む油斷酒、藝子遊女に舞謳はせ、藥師寺を上客にて、身の程しらぬ大騷、果は雜魚寐の不行義に、前後もしらぬ寐入ばな、非常を守る番人の、柝のみぞ殘りけり。表裏一度に手筈を極め、矢間千崎不敵の二人、表門に忍び寄内の樣子を窺へば、夜廻りと思しき柝遠音をさせば能折と、例の嗜む繼梯子、高塀に打懸け〳〵、雲井迄もと蜘蛛の、登課せた塀の屋根、早柝の近付音、ひらりと下りるを見付し番人、「スハ何者」と駈寄を取て引伏せ高手小手、能い案内と息を留め、繩先腰に引懸けて、柝奪ひかつちかち、役所々々を打廻り、窺ひ廻るぞ不敵なる。早裏門に呼子の笛、時分はよしと兩人は、柝合せて天河と、貫の木外して大門をくはらりと開けば、力彌を始め杉野木村三村の一黨、我も〳〵と込入て、見れば一面雨戸の固め。父が敎へし雪折は、爰ぞと下知して丸竹に、弦を懸けたる雨戸の鴨居、敷居に挾んで一時に、一二三つの拍子にて、かけたる弦をてうど切ば、鴨居はあがり敷居は下り、雨戸外れてば

をわか手—若手にかく
上る—河の縁
輝く—星の縁

假名實名—假名は通稱實名は名乘

柔能剛を制し、弱能強を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高定の家臣、大星由良助是れを守つて、既に一味の勇士四十余騎、獵船に取乘て、苫深々と稲村が崎の油斷を賴にて、岸の岩根に漕寄て、先一番に打上るは大星由良助義金、二番目は原鄕右衛門、第三番目は大星力彌、跡に續て竹森喜多八片山源太、先手跡舟段々に、列を亂さず立出る。奥山孫七須田五郎、著たる羽織の合印、いろはにほへとと立並ぶ。勝田早見遠の森、音に聞へし片山源吾、大鷲源吾かけやの大槌引提〳〵、吉田岡崎ちりぬるを、わか手は小寺立川甚兵衛、不破前原深川彌次郎、得たる半弓手挾で、にるは川瀬忠太夫、空に輝く大星瀨平、よたれそつねならむうゐの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀、やまけふこえて朝霧の、立並びたる芦野や菅野、千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の繼梯子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ、由良助が智略にて、八尺許の大竹に弦を懸けてぞ持たりける。後陣は矢間十太郎、遙跡より身を卑下し、出るは寺岡平右衛門、假名實名袖印、其數四十六人なり。鎖袴に黒羽織、忠義の胸當打揃ふ、實に忠臣のかな手本、忠義心の手本義平が家名、天と河との合詞、忘るな兼ての云台、矢間

天を山といふ―天河の合詞を誤りてと山河と言傳ふ

れた髮、ヤア〳〵〳〵此一包は去狀、ホイ扨は最前切たのは」由「ホウ此由良助が、大鷲文吾を裏道より廻らせ、根よりふつつと切した心は、いかな親でも尼法師を、嫁らそふ共いふまいし、嫁に取者は猶有まい。其髮の延る間も凡百日、我々本望遂るも百日は過さじ。討課せた後目出度祝言。其時には櫛笄、其切髮を添に入、笄髷の三國一。先夫迄は尼の乳母、一季半季の奉公人。其肝煎は大鷲文吾同矢間十太郎、此兩人が連中へ大事は洩ぬといふ請判。由良助は冥途から、仲人致さん義平殿」義「ハア丶重々のお志お禮申せ女房」その「わたしが爲には命の親」由「イヤお禮に及ばず。返禮と申スも九牛が一毛。義平殿にも町人ならずば、倶に出達とのお望幸かな、兼て夜討と存れば、敵中へ入込時、貴殿の家名の天河屋を、直に夜討の合詞、天と懸けなば河と答へ、四十人余の者共が、天よ河よと申なら、貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字、平はたいらか輙く本望。早お暇」と立出る。末世に天を山といふ、由良助が孫呉の術、忠臣藏共いひはやす、婆娑の言葉の定めなき、わかれ別れて三重いでてゆく。

第十一

無息―無茶

左少―些少

あた忌々し―あたは罵聲

て島田髷、根よりふつゝと切取て、懐迄を引さらへ、いづく共なく逃行し、無法無息ぞ是非もなき。其「ノウ憎や腹立や、何者かむごたらしう髪切て、書た物迄取て往んだ。櫛笄の盗人なら、いつそ殺して〳〵」と、泣叫ぶ聲に驚き、義平は思はず駈出しが、「ハア爰が男の魂の、亂口よ」と喰しばり、猶豫ふ中に奥よりも、「御亭主〳〵、義平殿」と立出る由良助、「段々御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申越ん。猶跡荷物の義、早飛脚を以てお頼申。夜の明ぬ内早お暇」義「いか樣今暫しとも申されぬ刻限。道中御堅勝で、御吉左右を相待まする」由「著致さば早速書翰を以てお知らせ申そふ。返す〴〵も此度のお世話、詞でお禮は云盡されませぬ。ソレ矢間大鷲御亭主へ置土産」「はつ」と文吾十太郎、扇を時の白臺と、乘て出たる一包、「是は貴公へ是は又、御内實おその殿へ、左少ながら」と指出す。義平はむつと顔色替り、「詞でいはれぬ禮と有ば、イヤコレ禮物受ふと存じ、命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り、小判の耳で面張るのか」由「イヤ我々は娑婆の暇、貴殿は残る此世の宿縁。御臺かほよ御前の義もお頼申さん爲、寸志計」と云残し、表へ出れば猶むつと。「性根魂を見違へたか。踏付た仕方あた忌々し、穢し」と包し進物蹴飛せば、包ほどけて内よりばらり、女房駈寄、其「コレ是はわしが櫛笄切

何ぼでも—どうあつても

へ往ぬると嫁らにやならず、悲しい者はわたし一人。是が別れにならふも知れぬ。よし松を起してちよつと逢して下さんせ」義「イヤそれならぬ。今逢て今別るゝ其身、跡の思ひが猶不便な。分けて今宵はお客も有、くど〳〵いはずと早くお往きやれ」その「それでもちよつとよし松に」義「ハテ扨未練な。跡の難義を思はずや」と、無理に引立去状も、倶に渡して門先へ、心強くも突出し、義「子が可愛くば了竹へ、詫言立て春迄も、かくまひ貰はゞ思案もあらん。それ叶はずば是限り」と、門の戸閉めて内に入。その「ノウ夫が叶ふ程なれば、此思ひはござんせぬ。つれないぞや我夫、科もない身を去のみか、我子に迄逢さぬは、あんまり酷い胴欲な。顔見る迄は何ぼでも、往なぬ〳〵」と門打叩き、「情じや慈悲じや爰明て、寐顔成共見せて給べ。コレ手を合せ拝ます、むごいわいの」とどふど伏し、前後不覚に泣けるが、その「ハア恨むまい歎くまい。なま中に顔見たら、かゝ様かと取付て、離しもせまいし離も成まい。今宵往ぬれば今宵の嫁入、あす迄待れぬわしが命。さらばでござるさらばや」と、いふては戸口へ耳を寄、若や我子が聲するか、顔でも見せてくれるかと、窺ひ聞ど音もせず。「ハア是非もなや是迄」と、思ひ切て駈け出す向ふへ、目計出した大男、道を塞いで引捉へ、是はといふ間も情なや、すらりと抜

さんばら髪—亂れ髮

湛納—滿足

氣かいの胴欲な」と、縋り歎けば、義「ヤァ其恨は逆ねぢ。此内を往なす折、云含たを何と聞た。樣子有て其方に隙遣でなし、暫の內親里へ歸つて居よ、舅了竹は元九太夫が扶持人、心解けねば子細はいはぬ、病氣の躰にもてなし起臥も自由にすな、櫛も取なと云付遣つたをなぜ忘れた。さんばら髪で居者を、嫁にとろとは云ぬはやい。何の儕がよし松が可愛かろ。晝は一日あほうめが、欺し賺せど夜に成と、喚樣〳〵と尋居る。かゝは追付もふ爰へと、だまして寐させど能う寐入ず、呵て寐さそと搟付、怖顏すりや聲上ず、しく〳〵泣て居るを見ては、身節が碎て堪へらるゝ物じやない。是を思へば親の恩、子を持て知るといふ、不孝の罸と我身をば、悔んで夜と倶泣明す。夕部も三度抱上て、もふ連て往こ抱ていこ、と門口迄出たれ共、一夜で湛納するでもなし、五十日隙どろやら、百日隔て置こふやら、知ぬ事に馴染しては、跡の難義と五町三町、ゆぶり行いて搟付、寐さしてはそつと轉し、我肌付れば現にも、乳をさがしてしがみ付、僅な間の別れでさへ、戀焦るゝ物、一生を引分ふとは思はね共、是非に及ばず暇の狀、了竹へ渡せしを、內證にて受取ては、親の赦さぬ不義の科、心よからず持て歸れ。是迄の緣約束事、死だと思へば事濟」と、切離よき男氣は、常を知る程猶悲しく、その「此家に居るとお前が立ず、內

ざゝんざ—陽氣に騒ぐ

給仕ひろげ—給仕せよ

持て戻ると云々—親が去狀を持て歸ると即ち嫁入さすとて

涕紙袋—四角に縫うて紐つけたる紙入

おれは蒲團被つたればつる寐入た。今其和郎達と奥で酒盛、ざゞんざやつてどござんす」その「ハテ合點のいかぬ。そふしてぼんは寐たか」伊「アイ是はよう寐てどござんす」その「旦那殿と寐たか」伊「イヽエ」その「われと寐たか」伊「イヽエ、つる一人轉りと」その「なぜ伽して寐さしてくれぬ」伊「夫でもわしにも旦那樣にも、乳がないといふて泣てばつかり」その「ヘエヽ可愛やそふであろ〳〵。夫ばつかりが實の事」と、「わつ」と泣出す門の口、空にしられぬ雨の足、乾く袂もなかりける。「ヤイ〳〵伊五め、どこに居る」と、呼立出る主の義平。伊「アイ〳〵爰に」と駈入跡、尻目に懸けて義「たはけめが、奥へ往て給仕ひろげ」と、呵追遣り門の戸を、さすを押へて、その「コレ旦那殿、いふ事が有爰明て」義「イヤ聞事もなしいふ事も、内證一つの畜生め、穢はしい其處退こふ」「イヤ親と一所でない證據、それ見て疑ひ晴てたべ」と、戸の透よりも投込一通、拾ひ取間に付込女房。夫は書物一目見て、「コリヤ最前遣つた暇の狀。是戻してどふするのじや」その「どふするとは聞へませぬ。親了竹の悪工は、常からよう知ての事。譬どの様な事有迚、何故隙狀を下んした。持て戻ると嫁らすと、思ひも寄ぬ拵、嬉しい顔で油斷させ、涕紙袋の去狀を、盗でわしは迯て來ました。お前はよし松可愛ないか。去てあの子を繼母に、かける

御内證—御内儀
手打—義平が手製の蕎麥敵を討つの縁
二人—大鷲矢間の兩人
化生—ばけもの
どんな—鈍な、馬鹿な

公。お序に義平めが、志もお執成」と、厚き詞に人々も、思はず涙催して、奥歯嚙割計なり。由良助取敢へず、「今晩鎌倉へ出立、本望遂るも百日とは過すまじ。承はれば御内證迄、省給ふ由重々のお志。追付夫も呼返させ申さん、御不自由も今暫く。早お暇」と立上る。義「ヤレ申さば目出度旅立。いづれも様へも御酒一つ」由「否夫は」義「ハテ扨祝ふて手打の蕎麥切」由「ヤ手打とは吉相。然らば大鷲矢間御兩人は跡に殘、先手組の人々は、郷右衛門力彌を誘ひ、佐田の森迄お先へ」「いざ此方へ」と亭主が案内、「お辭義は無禮」と由良助二人を伴ひ入月と、又出る月と二つ輪の、親と夫との中に立、おそのは一人小挑燈、闇き思ひも子故の闇、あやなき門を打叩き、「伊五よ〱」と呼聲が、寐耳にふつと阿房は駈出、「おれ呼だは誰じや、化生の者か迷ひの者か」その「イヤそのじや。爰明てくれ」伊「そふいふても氣味が惡い。必ばあといふまいぞ」と云つゝ門の戸押開き、伊「エ、おゑさんかようごんしたの。一人歩行をするとナ、病犬が嚙むぞへ」その「ヲヽ犬に成共嚙まれて死だら、今の思ひは有まいに、おりや去れたはいやい」伊「どんな事に成らんしたなア」その「旦那殿は寐てか」伊「イヽエ」その「留主か」伊「イヽエ」その「何の事じややい」伊「何の事やらわしも知らぬが、宵のくちに猫が鼠を取たかして、捕つた〱と大勢來たが、ちやつと

人と馬に云々ー諺にて馬には乘つて見よ人には添うて見よ

秦龜の云々ー身の程知らず他人の眞似したがる諺

ならば、譬へ巖石の中に籠り、鐵洞の内に隱るゝ共、やはか仕損じ申べき。人有中にも人なしと申せ共、町家の中に有ば有物。一味徒黨の者共の爲には、生土共氏神共尊奉らずんば、御恩の冥加に盡果ませう。靜謐の代には賢者も顯はれず、ヘエヽ惜いかな悔いかな。亡君御存生の折ならば、一方の籏大將、一國の政道お預け申た迚、惜からぬ御器量。是に竝ぶ大鷲文吾矢間重太郎を始め、小寺高松堀尾板倉片山等、潰れし眼を開かする、妙藥名醫の心魂、有がたし〳〵」とすさつて三拜、人々も「無骨の段眞平」と、疊に頭を擂付る。義「ヤレ夫は迷惑、お手上られて下さりませ。惣體人と馬には、乘て見よ添て見よと申せば、お馴染ない御傍は、氣遣ひに思召すも尤。私元は輕い者、お國の御用承はつてより、經上つた此身代、判官樣の樣子承はつて倶に無念、何卒此恥辱雪やうはないかと、りきんで見ても秦龜のじたんだ、及ばぬ事と存た所へ、由良助樣のお賴こそ心得たと向ふ見ず、倶にお力付る計、情ないは町人の身の上。手一合でも御扶持を戴きましたらば、此度の思し立、袖褄に取付て成共お供申、いづれも樣へ息つぎの、茶水でも汲ませうに、夫も叶はぬはよく〳〵町人は淺ましい物。是を思へばお主の御恩、刀の威光は有がたい物、それ故にこそお命捨らるゝ、御羨しう存まする。猶も冥途で御奉

異議—威儀
さもぞふづ—いかにもさうあらう

分刻に刻むが何と」義「ヲヽ面白い刻まれう。武具は勿論公家武家の、冠烏帽子下女小者が藁沓迄、買調へて賣が商人。それ不思議迚御詮義あらば、日本に人種は有まい。一寸試も三寸繩も、商賣故に取るゝ命、惜いと思はぬサア殺せ。躮も目の前突々々。一寸試は腕から切か胸から裂か、肩骨背骨も望次第」と、指付突付我子をもぎ取、「子に隔れぬ性根を見よ」と、絞殺すべき共吃相。「ヤレ聊爾せまい義平殿、暫し〳〵」と長持より、大星由良助良金、立出る體見て恟り、捕手の人々一時に、十手捕繩打捨て、遙下つて座を占むる。異義を正して由良助、義平に向ひ手をつかへ、「扨々驚入たる御心底、泥中の蓮砂の中の金とは貴公の御事、さもあらんさもそふづ、と見込で頼んだ一大事、此由良助は微塵聊、お疑がひ申さね共、馴染近付でなき此人々、四十人余の中にも、天河屋の義平は生れながらの町人、今にも捕られ詮義に逢はゞ、如何あらん何とかいはん、殊に寵愛の子も有ば、子に迷ふは親心と、評義區々案じに胸も休まらず、所詮一心の定めし所を見せ、古傍輩の者共へ安堵させん爲、爲まじき事とは存ながら、右の仕合麁忽の段は眞平々々。花は櫻木人は武士と申せ共、いつかな〳〵武士も及ばぬ御所存、百萬騎の強敵は防共、左程に性根は据らぬ物、貴公の一心を借受我々が手本とし、敵師直を討

笑本―春畫を具
足櫃に入るゝ事
當時の習はし

覺聊なし。定て夫は人違へ」と、いはせも立ず、捕「ヤアぬかすまい。爭はれぬ證據有、ソレ家來共」家「はつ」と心得持來るは、宵に積んだる莞筵荷の長持、見るより義平は心も空、「ソレ動かすな」と四方の十手、其間に荷物を切解き、長持明んとする所を、飛懸つて下部を蹴退け、蓋の上にどつかと座り、義「ヤア麁忽千萬。此長持の內に入置たは、去大名の奥方より、お誂のお手道具、お具足櫃の笑本、笑ひ道具の注文迄、其名を記置たれば、明しては歴々のお家のお名の出る事。御覽有てはいづれもの、お身の上にも懸りませうぞ」捕「ヤア彌胡亂者。中々大抵では白狀致すまい。ソレ申合せた通」「合點でござる」と一間へ駈入、一子よし松を引立出、「サア義平、長持の內は兎も有、鹽冶浪人一統に堅まり、師直を討密事の段々、儕能知つらん。有やうにいへばよし、云はぬと忽躮が身の上。コリヤ是を見よ」と拔刀、稚き咽に指付られ、はつとは思へど色も變ぜず、義「ハヽヽ女童を責る樣に、人質取ての御詮義。天河屋の義平は男でござるぞ。子に羈れ存ぜぬ事を存たとは得申さぬ。曾て何にも存ぜぬ知らぬ、知ぬといふから金輪ならく。憎しと思はゞ其躮、我見る前で殺したく」捕「テモ胴性骨の太い奴。管鑓鐵砲鎖襷四十六本の印迄、調へ遣つたる儕が、知ぬといふて云はして置こふか。白狀せぬと一寸樣、一

一杯參つて—だまされて
こうけ—寡家とかく威光

れ、去狀取と直に嫁入さする相談、一杯參つて重疊々々」義「ホウ賢去狀なき迚も、子までなしたる夫を捨、外へ嫁入する性根なら、心は殘らぬ勝手〳〵」工「ヲヽ勝手にするは親のこうけ。今宵の内に嫁らする」義「ヤア細言吐かずと早歸れ」と、鷗摑で門口より、外へ蹴出して跡ぴつしやり。這々起て、工「コリヤ義平、なんぼ摑でほり出しても、嫁らす先々仕拵へ金、溫まつて蹴られたりや、どふやら疝氣が直つた」と、口は達者に足腰を、撫つ擦りつ逃ぼえに、呟き〳〵立歸る。月の曇に影隱す、隣家も寢入亥の刻過、此家を目懸けて捕手の人數、十手早繩腰挑燈、灯影を隱して窺ひ〳〵、犬と思しき家來を招き、耳打すれば指心得、門の戸せはしく打叩く。義「誰じや〳〵」も及腰、「イヤ宵に來た大舟の船頭でござる。舟賃の算用が違ふた、ちよつと明て下され」義「ハテ仰山な。僅な事であろ。明日來たく〳〵」船頭「イヤ今夜受ける舟、仕切て貰はにや出されませぬ」と、いふも聲高近所の聞へと、義平は立出何心なく、門の戸を明ると其儘、「捕たく〳〵、動くな上意」と追取卷。義「コハ何故」と四方八方、眼を配れば捕手の兩人、「ヤア何故とは橫道者、僧鹽冶判官が家來大星由良助に賴れ、武具馬具を買調へ、大廻にて鎌倉へ遣はす條、急召捕拷問せよとの御上意、遁れぬ所じや腕廻せ」義「是は思ひも寄ぬお咎。左樣の

さしてもない―左程にもない

出。扨此間は女房そのを養生がてら遣はし置、嘸お世話。お薬でも給まするかな」工「ア薬も呑まする食も喰ます」義「夫は重畳」工「イヤ重畳でござらぬ。手前も國元に居た時は、斧九太夫殿から扶持も貰ひ相應の身代。今は一僕さへ召使はぬ所へ、さしてもない病氣を、養生さしてくれよ、と指越れたは子細こそあらん。ガ夫はとも有、生若い女、不埒が有ては貴殿も立ず、身共も皺腹でも切ねばならぬ。所で一つの相談。先世間は隙やり分、暇の狀をおこして置て、ハテ何時でも爰の勝手に呼戻す迄の事、たつた一筆つい書て下されと、輕ういふのも物工、一物有と知ながら、いやといはゞ女房を直に戻さん、戻りては頼まれた人々へ詞も立ず、と取置つ思案する程、工「いやかどふじや。不得心なら此方にも、片時置れず戻すからは、此了竹もにじり込へたばつて倶に厄介。いやか應かの返答」と、込付られて遉の義平、工に乗が口惜や、と思へどこちらの一大事、見出されてはと懸硯、取て引寄さら〳〵と書認め、義「是やるからは了竹殿、親でなし子でなし、重て足踏お仕やんな。底工有暇の狀、弱身を喰ふてやるが殘念。持て往きやれ」と投付れば、手早く取て懷中し、工「ヲヽよい推量。聞ば此間より浪人共が入込ひそめくより、そのめに問へ共しらぬとぬかす。何仕出そふも知ぬ聟、娘を添して置が氣遣。幸 去歴々から貰掛けら

垂邪─雜錄

以上七竿、今晩出船を幸船頭へ渡し、残るは鞘挑燈鎖鉢巻、是は陸荷で跡より遣はす積りでござります」カ「郷右衞門様お聞なされましたか。いかゐお世話でござりまする」郷「いか様主人鹽冶公の御恩を受た町人も多くござれ共、天河屋の義平は、武士も及ばぬ男氣な者、と由良殿が見込、大事をお頼申されたも尤。併鎗長刀は格別、鎖帷子の繼梯子のと申物は常ならぬ道具、お買なさるゝに不思議は立ませなんだかな」義「イヤ其義は細工人へ手前の所は申さず、手附を渡し金と引替に仕る故、何處の誰と先樣には存ませぬ」カ「成程尤。次手に力彌もお尋申ましよ。内へ道具を取込、荷物の拵へ御家來中の見る目は、どふしてお忍びなされましたな」義「ホウ夫も御尤のお尋。此義を頼まれますると、女房は親里へ歸し、召使は垂邪を付て、段々に隙遣はし、残るはあほうと四つに成躮、洩る筋はござりませぬ」カ「扨々驚入ましてござりまする。其旨を親共へも申聞して安堵させませう。郷右衞門殿お立なされませぬか」郷「いか様出立に心急きまする。義平殿お暇申ませう」義「然らば由良助様へも」二人「宜しう申聞しませう」義「おさらば」二人「さらば」と引別れ、二人は旅宿へ立歸る。表閉めんとする所へ、此家の舅太田了竹、「ヲツトしめまい宿にか」と、ずつと通つてきよろ〳〵眼、義「是は親仁様ようこそお

相聟同士―男同士で間に合はぬ

つこど―けんどんに

しやなり聲―わめき聲

一まき―一類

レもふおれ迄を喫す程にの、宜ござるはおれが抱て寐てやろ」由「いやじや」伊「何故に」由「われには乳がない物おりやいやじや」伊「アレ又無理いはしやる。こなたが女の子なら、乳よりよい物が有けれど、何をいふても相聟同士」是も涙の種ぞかし。折節表へ侍一二人、「誰頼ふ義平殿はお宿にか」と、いふも潜く内からつこど、伊「旦那様は内に。我等人形廻しでいそがしい、用があらば這入つた〳〵」客「イヤ案内致さぬも無禮。原郷右衛門大星力彌、密に御意得たいと申ておくりやれ」伊「何じや腹へり右衛門大食喰や、こりや堪らぬ。アレ旦那様大きなけないどが見へました」と、叫ぶよし松引連て奥へ入ば、亭主義平、「又阿房めがしやなり聲」と、云つゝ出て、「ヱ、郷右衛門様力彌様、サアまあ是へ」「御免有」と座を占めて、郷右衛門、「段々貴公のお世話故萬事相調ひ、由良助もお禮に參る筈なれ共、鎌倉へ出立も今明日、何角と取込、悴力彌を名代として失禮のお斷」義「是は〳〵御念の入た義。急に御發足とござりますれば、何角お取込でござりませうに」力「なるほど郷右衛門殿の仰の通、明早々出立の取込、自由ながら私に參りお禮も申、又お頼申た跡荷物も、彌今晩で積仕廻か、お尋申せと申渡しましてござります」義「成程お誂の彼道具一まき、段々大廻しで遣し、小手臑當小道具の類は、長持に仕込

跡の月云々―先月から主人の樣躰が惡くなりて

拔そけ―逃亡

第十

津の國と、和泉河内を引受て、余所の國迄舟寄る、三國一の大湊、堺といふて人の氣も、賢き町に疵もなき、天河屋の義平迚、金から金を設溜、見かけは輕く内證は、重い暮に重荷をば、手づから見世で締括り、大船の船頭、「是で丁度七竿、請取ました」と指荷ひ、行も黄昏亭主はほつと、「日和もよしよい出船」と、いひつゝ煙草烟管筒、吸付にこそ入にけれ。家の世繼は今年四つ、傅は十九の丸額、親方よりも我遊び、「サア始りじや〳〵。面白い事〳〵、泣き辨慶の信太妻。東西々々、文弥 爰に哀を止めしは、此よし松に止めたり。元來其身は父計、母は去れて往なれたで、泣辨慶と申なり」由松「コリヤ伊五よ、もふ人形廻しいや〳〵。嚊樣を呼でくれいやい」伊五「ソレ其樣に無理云しやると、旦那樣にいふて此方はんも、追出さすぞ。跡の月からお釜が割れて、手代は手代で鼠の子か何ぞの樣に、目が明ぬといふて追出し、飯焚は大きな欠したといふて隙遣り、今ではこなはんと、わしと旦那はんと計、どふで此内を拔そけするのかして、ちよこ〳〵舟へ荷物が行。欠落するなら人形箱持て往こふぞや」由「イヤ人形廻しよりおりやもふ寐たい」伊五「ア

歌口—尺八の吹く穴
しめし—ぬらし
知死期時—臨終
尺八煩惱—百八煩惱にかく
一夜切—一節切の尺八にかく

聞に御主人の御短慮成御仕業、今の忠義を戰場の、お馬先にて盡さば、と思へば無念に閉塞がる、胸は七重の門の戸を、洩るは涙計なり。力彌は徐々下立ちて、父が前に手をつかへ、「本藏殿の寸志により、敵地の案内知たる上は、泉州堺の天河屋義平方へも通達し、荷物の工面仕らん」と、聞もあへず、「何さ〳〵、山科に有事隱れなき由良助、人數集めは人目有。一先堺へ下つて後、あれから直に發足せん。其方は母嫁となせ殿諸共に、跡の片付諸事萬事、何もかも心殘りのなき樣に、ナ、ナ、コリヤあすの夜舟に下るべし。我は幸本藏殿の忍姿を我姿」と、袈裟打掛けて編笠に、恩を戴く報謝がへし、未來の迷晴さん爲、今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の戀慕流し、歌口しめして立出れば、兼て覺悟のお石が歎、「御本望を」と計にて、名殘惜さの山々を、いはぬ心のいぢらしさ。手負は今を知死期時、小浪「爺樣申しと〻樣」と、呼べど答へぬだんまつま、親子の緣も玉の緒も、切て一世の憂別れ。「わつ」と泣母泣娘、俱に死骸に向ひ地の、回向念佛は戀無常、出行足も立留り、六字の御名を笛の音に、南無阿彌陀佛なむあみだ、是や尺八煩惱の、枕並ぶる追善供養、閨の契りは一夜限、心殘して 三重 立出づる。

孫呉—兵法家の孫子呉子

凝ては云々—物事に一心になれば思慮を失ふ

折しも—下るにかく

り取出すを、力彌取て押戴き、披き見ればコハいかに、目録ならぬ師直が屋敷の案内一一に、立關長屋侍部屋、水門物置柴部屋迄、繪圖に委しく書付けたり。由良助はつと押戴き、「ヘツヱ有難し〳〵。徒黨の人數は揃へども、敵地の案内知れざる故、發足も延引せり。此繪圖こそは孫呉が祕書、我爲の六韜三略。兼て夜討と定めたれば、繼梯子にて塀を越、忍び入には椽側の、雨戸外せば直に居間、爰を仕切て斯攻て」と、親子が悦び、手負ながらもぬからぬ本藏、「イヤ〳〵夫は僻言ならん。用心嚴しき高師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸に合栓合樞、こぢては外れず大槌にて、毀たば音して用意せんか、それいかが」由「ヲヽ夫にこそ術あれ。凝ては思案に能はずと、遊所よりの歸るさ、思ひ寄たる前栽の雪持竹。雨戸をはづす我工夫、仕樣を爰にて見せ申さん」と、庭に折しも雪深く、さしもに強き大竹も、雪の重さにひいはりと、しはりし竹を引廻して鴨居に嵌め、「雪に撓むは弓同然。此如く弓を拵へ弦を張、鴨居と敷居にはめ置て、一度に切て放つ時は、まつ此樣に」と積つたる枝打拂へば雪散つて、伸びるは直成竹の力、鴨居撓んで溝はづれ、障子殘らずばた〳〵〳〵。本藏苦しさ打忘れ、「ハヽアしたり〳〵。計略といひ義心といひ、斯程の家來を持ながら、了簡も有べきに、淺き工の鍛冶殿、口惜き行跡や」と、悔を

吳子胥—吳王を諫め眼を東門にかけし忠臣
豫讓—晉の忠臣

君子は其罪を悪んで其人を悪まずといへば、縁は縁恨は恨と、格別の沙汰も有べきにと、嘸恨に思はれんが、所詮此世を去人、底意を明て見せ申さん」と、未前を察して奥庭の、障子さらりと引明れば、雪を束て石塔の、五輪の形を二つ迄、造立しは大星が成行果を顯はせり。となせは賢しく、「ム、御主人の怨を討て後、二君に仕へず消るといふお心のあの雪。力彌殿も其心で、娘を去たの胴欲は、御不便余つてお石樣、恨だがわしや悲しい」お石「となせ樣のおつしやる事。玉椿の八千代迄共祝はれず、後家に成嫁取た、此樣な目出度悲しい事はない。斯いふ事がいやさに、むごうつらういふたのが、嘸憎かつたでござんしよなふ」となせ「イヽエイナ、私こそ腹立まゝ、町人の聟に成て、義理も法も忘れたか、といふたのが恥しいやら悲しいやら、どふも顔が上られぬ、お石樣」お石「となせ樣、氏も器量も勝れた子、何として此樣に果報拙い生れや」と、聟も涙にせき上る。本藏熱き涙を押へ、「ハツアヽ嬉しや本望や。吳王を諫めて誅せられ、辱を笑ひし吳子胥が忠義は取に足らず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓、日本の大星、昔より今に至る迄、唐と日本にたつた二人。其一人を親に持、力彌が妻に成たるは、女御更衣に備はるより、百倍勝つてそちが身は、武士の娘の手柄者。手柄な娘が聟殿へ、お引の目錄進上」と、懷中よ

しらが―知らずにかく

若い折の遊藝―の尺八が役に立つたと僅か四日とかく

筈。當春鶴が岡造營の砌、主人桃井若狹助、高師直に恥しめられ、以の外憤り、某を密に召れ、まづかう／＼の物語、明日御殿にて出くはせ、一刀に討留ると、思詰めたる御顔色、留ても留らぬ若氣の短慮。小身故に師直に、賄賂薄きを根に持て、恥しめたると知たる故、主人に知らせず不相應の、金銀衣服臺の物、師直へ持参して心に染ぬ諂ひも、主人を大事と存るから、賄賂課せ彼方から、誤つて出た故に、切に切れぬ拍子拔、主人が恨もさらりと晴、相手代つて鹽冶殿の、難義と成たは則其日。相手死ずば切腹にも及ぶまじと、抱留めたは思ひ過した、本藏が一生の誤りは、娘が難義としらがの此首、聟殿に進ぜたさ、女房娘を先へ登し、媚諂ひしを身の科に、お暇を願ふてな、道を替へてそち達より二日前に京著、若い折の遊藝が益に立た四日の内、こなたの所存を見拔た本藏、手に懸れば恨を晴、約束の通此娘、力彌に添せて下さらば、未來永劫御恩は忘れぬ。コレ手を合して頼入。忠義にならでは捨ぬ命、子故に捨る親心、推量有由良殿」と、いふも涙に咽返れば、妻や娘は有にもあられず、「本に斯とは露しらず、死おくれた計にお命捨るはあまんりな、冥加の程が恐ろしい。赦して下され父上」と、かつぱと伏して泣叫ぶ親子が心想ひやり、大星親子三人も、倶にしほれて居たりしが、由「ヤア／＼本藏殿、

なまくら鋼—なまくら武士と鈍刀とかく
ふち放れ—緣と扶持

け、狼狽武士のなまくら鋼、此本藏が首は切ぬ。馬鹿盡すな」と踏碎く、「破三方のふち放れ、此方から聟に取ぬ。ちよこざいな女め」と、云せも果ず、お石「ヤア過言なぞ本藏殿。浪人の錆刀、切るか切ぬか鹽梅見せう。不祥ながら由良助が女房。望む相手じや、サア勝負〳〵」と、裾引上、長押に懸けたる鑓追取、突かゝらんず其氣色、「是は短氣なマア待て」と、止隔る女房娘。本「邪魔ひろぐな」とあらけなく、右と左へ引退る、間もあらせず突かくる、鑓のしほ首引掴み、捩つて拂へば身を背け、諸足縫はんと閃かす、刃棟を蹴つて蹴上れば、拳放れて取落す、鑓奪はれじ、と走寄、腰際帶際引掴、どふど打付動かせず、膝に引敷強氣の本藏、敷れてお石が無念の齒がみ。親子ははあ〳〵危む中へ、駈出る大星力彌、捨たる鑓を取手も見せず、本藏が馬手の肪、弓手へ通れと突通す。うんと計にかつぱと伏す。「コハ情なや」と母娘、取付歎くに目も懸けず、止め刺さんと取直す。「ヤア待力彌早まるな」と、鑓引留て由良助、手負に向ひ、由「一別以來珍らしゝ本藏殿。御計略の念願屆き、聟力彌が手にかゝつて、嘸本望でござらふの」と、星を指いたる大星が、詞に本藏目を見開き、本「主人の欝憤を晴さんと此程の心遣、遊所の出合に氣を緩ませ、徒黨の人數は揃ひつらん。思へば貴殿の身の上は、本藏が身に有べき

そりや又なぜな」お石「御主人鹽冶判官樣、高師直にお恨有て、鎌倉殿で一刀に切懸給ふ。其時こなたの夫加古川本藏、其座に有て抱留、殿を支た計に、御本望も遂られず、敵は漸〳〵薄手計、殿はやみ〳〵御切腹。口へこそ出し給はね、其時の御無念は本藏殿に憎しみが懸るまいか、有まいか。家來の身として其加古川が娘、あんかんと女房に持樣な力彌じやと、思ふての祝言ならば、此三方へ本藏殿の白髮首。いやとあればどなたでも、首を竝べる尉と姥。それ見た上で、盃させう。サヽサアいやか、應かの返答を」と、尖き詞の理屈詰。親子ははつと指俯、途方に暮れし折柄に、「加古川本藏が首進上申。お受取なされよ」と表に扣へし薦僧の、笠脱捨て徐々と、内へ這入は、小浪「ヤアお前は爺樣」となせ「本藏樣、爰へどふして此形は、合點がいかぬこりやどふしや」と、咎る女房、本「ヤアざは〳〵と見苦しい、始終の子細皆聞た。そち達にしらさず、爰へ來た樣子は追て。先默れ。其元が由良助殿御内證お石殿よな。今日の時宜斯あらんと思ひ、妻子にも知らせず、樣子を窺ふ加古川本藏、案に違はず拙者が首、聟引出に欲しいとな、ハヽヽヽヽ、いやはやそりや侍のいふ事。主人の怨を報はんといふ所存もなく、遊興に耽り、大酒に性根を亂し、放埒成身持日本一の阿房の鏡、蛙の子は蛙に成、親に劣ぬ力彌めが大だは

目八分―息のかからぬ迄の高さ

浪の平行安―有名なる薩摩の刀鍛冶の名

常に座を占め手を合せ、「南無阿彌陀佛」と、唱る中より「御無用」と聲懸けられて思はずも、たるみし拳尺八も、倶にひつそと靜まりしが、となせ「ヲヽ、そふじや。今御無用と止めたは、虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で、無用といふに氣おくれし、未練なと笑はれな。娘覺悟はよいかや」と、又振上る又吹出す、とたんの拍子に又「御無用」となせ「ムヽ又御無用と止めたは、修行者の手の内か、振上た手の中か」お石「イヤお刀の手の中御無用。躮力彌に祝言させう」となせ「エヽそふいふ聲はお石樣、そりや眞實か誠か」と、尋る襖の内よりも、ウタイ あひに相生の、松こそ目出度かりけれと、祝儀の小謠白木の小四方、目八分に携出、お石「義理ある中の一人娘、殺さふと迄思ひ詰たとなせ樣の心底、小浪殿の貞女。志がいとをしさ、させにくい祝言さす其かはり、世の常ならぬ嫁の盃、請取は此三方、御用意あらば」と指置ば、少は心休りて、拔たる刀鞘に納め、となせ「世の常ならぬ盃とは、引出物の御所望ならん。此二腰は夫が重代、刀は正宗、指添は浪の平行安、家にも身にも替へぬ重寶。是を引出」と皆迄云さず、お石「浪人と侮つて價の高い二腰、まさかの時に賣拂へと、いはぬ計の聟引出。御所望申は是ではない」となせ「ムヽそんなら何が御所望ぞ」お石「此三方へは加古川本藏殿の、お首を乘せて貰たい」となせ「エヽ

てどふいふて、どふ云譯が有ふ共、力彌様より外に餘の殿御、わしやいや〳〵」と一筋に、戀を立ぬく心根を、聞に堪兼母親の、涙一途に突詰し、覺悟の刀拔放せば、小「母様是は何事」と、押留められて顔を上、母「何事とは曲がない。今もそなたがいふ通り、一時も早う祝言させ、初孫の顔見たい、と娘に甘いは爺の習ひ、悦んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去れて戻りました迚、どふ連て往なれふぞ。といふて先に合點せにや、仕様もやうもないわいの。殊にそなたは先妻の子、わしとはなさぬ中じや故、およそにしたかと思はれては、どふも生ては居られぬ義理。此通を死だ跡で、爺御へ云譯してたもや」小「アノ勿躰ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死べき筈。生てお世話に成上に、苦を見せまする不孝者、母様の手にかけて、わたしを殺して下さりませ。去れても殿御の内、爰で死れば本望じや。早う殺して下さりませ」となせ「ヲヽ、よう云やつた出かしやつた。そなた計殺しはせぬ、此母も三途の友、そなたをおれが手に懸けて、母も追付跡から行。覺悟はよいか」と立派にも、涙留めて立かゝり、「コレ小浪、アレあれを聞きや、表に虚無僧の尺八、鶴の巣籠。鳥類でさへ子を思ふに、科もない子を手に掛るは、因果と因果の寄合」と、思へば足も立兼て、慄ふ拳を漸に、振上る刃の下、尋

およそ―おろそか

鶴の巣籠―尺八の曲名にて鶴の子をいとしがる意をのぶ

筋目を云々ー音の千五百石をいひ立て力彌を金満家の町人の聟にするかと也

あじやらにもー戯れも

て、云號した力彌様に、逢せて遣ろとのお詞を、便に思ふて來た物を、姑御のどう慾に、去られる覺は私やない。母様どふぞ詫言して、祝言させて下さりませ」と、縋り歎けば母親は、娘の顔をつく〴〵と、打眺め〳〵、「親の慾目かしらね共、ほんにそなたの器量なら、十人並にも勝つた娘。よい聟をがなと詮義して、云號した力彌殿、尋て來た甲斐もなう、聟にしらさず去つたとは、義理にもいはれぬお石殿、姑去は心得ぬ。ムヽムム扨は浪人の身のよるべなう、筋目を云立、有徳な町人の聟に成て、義理も法も忘れたな。ナフ小浪、今いふ通の男の性根、去つたといふを面當、欲しがる所は山々、外へ嫁入りする氣はないか。コレ大事の所、泣ず共しつかりと返事仕や。コレどふじや〳〵」と、尋る親の氣は張弓、小浪「アノ母様の胴慾な事おつしやります。國を出る折父様のおつしやつたは、浪人しても大星力彌、行義といひ器量といひ、仕合な聟を取た、貞女兩夫に見えず、譬夫に別れても、又の夫を設なよ、主有女の不義同然、必々寐覺にも、殿御大事を忘るゝな、由良助夫婦の衆へ孝行盡し、夫婦中、睦じい迚あじやらにも、悋氣ばしして去らるゝな、案ぜうか迚隱さずと、懐妊に成たら早速に、しらして呉れと、おつしやつたを、わたしや能う覺て居る。去れて往んで父様に、苦に苦を懸け

外々へ、御遠慮なう遣はされませ、と申さるゝでござりませう」と、聞てはつとは思ひながら、となせ「アノまあお石樣のおつしやる事。いかに卑下なされう迚、本藏と由良助樣、身上が釣合ぬとな。そんならば申ませう、手前の主人は小身故、家老を勤る本藏は五百石、鹽冶殿は大名、御家老の由良助樣は千五百石。すりや本藏が知行とは、千石違ふを合點で云號はなされぬか。只今は御浪人、本藏が知行とは、皆違ふてから五百石」お石「イヤ其お詞違ひまする。五百石は扨置、一萬石違ふても、心と心が釣合へば、大身の娘でも、嫁に取まい物でもない」となせ「ムヽ、こりや聞所お石樣。心と心が釣合ぬとおつしやるは、どの心じやサア聞ふ」お石「主人鹽冶判官樣の御生害、御短慮とは云ながら、正直を元とするお心より發し事。それに引替へ師直に金銀を以て媚諂ふ、追蹤武士の祿を取本藏殿と、二君に仕へぬ由良助が大事の子に、釣合ぬ女房は持されぬ」と、聞もあへず膝立直し、となせ「諂ひ武士とは誰が事、樣子によつては聞捨られぬ。そこを赦すが娘の可愛さ。夫に負るは女房の常、祝言有ふが有まいが、云號有からは、天下晴ての力彌が女房」お石「ムヽ、面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つて此母が、去つた〱」と云放し、心隔の唐紙を、はたと引立入にける。娘はわつと泣出し、「折角思ひ思はれ

時分―年頃

の奥方、寒空といひ思ひがけない御上京。となせ樣は兎もあれ、小浪御寮嘸都珍らしかららふ。祇園淸水智恩院、大佛樣御覽じたか。金閣寺拜見あらば好い傳が有ぞへ」と、心置なき挨拶に、只「あい〳〵」も口の內、帽子まばゆき風情なり。となせは行義改めて、「今日參る事余の義にあらず。是なる娘小浪云號致して後、御主人鹽冶殿不慮の義につき、由良助樣力彌殿、御在所も定かならず。移り變るは世の慣ひ、變らぬは親心。兎や角と聞合せ、此山科にござる由承はりました故、此方にも時分の娘、早うお渡し申たさ。近比押付がましいが、夫も參る筈なれど、出仕に隙のない身の上、此二腰は夫が魂、是を指せば則夫本藏が名代と、私が役の二人前、由良助樣にも御意得まし、祝言させて落付たい。幸今日は日柄もよし、御用意成され下さりませ」と相述る。石「是は思ひも寄ぬ仰。折惡う夫由良助は他行。去ながら若宿に居りまして、お目に掛り申さふならば、御深切の段千萬忝う存まする、云號致した時は、故殿樣の御恩に預り、御知行頂戴致し罷在故、本藏樣の娘御を貰ませう、然らば吳れふと云約束は申たれ共、只今は浪人、人遣迚もござらぬ內へ、如何に約束なればとて、大身な加古川殿の御息女、世話に申提灯に釣鐘、釣合ぬは不緣の基、ハテ結納を遣はしたと申ではなし、どれへ成と

間—アイにかく
りん—婢の名
つかふど—けんどん
娌—嫁聟兩方の舅姑にいふ

間の切戸の内、雪轉し込戸をたつる、襖引立入にける。人の心の奥深き、山科の隠れ家を、尋て爰に來る人は、加古川本藏行國が女房となせ、道の案内の乗物を傍に待せ、只一人、刀脇指さすがげに行義亂さず庵の戸口、「頼ませう〳〵」といふ聲に、襷はづして飛で出る、昔の奏者今のりん、「どうれ」といふもつかふど成。となせ「ハツ大星由良助様お宅は是かな。左様ならば、加古川本藏が女房となせでござります、誠に其後は打絶ました、ちとお目にかゝりたい様子に付、遥々參りました、と傳られて下され」と、云入させて表の方、「乗物是へ」と舁寄させ、「娘爰へ」と呼出せば、谷の戸明て鶯の、梅見付たる微笑顔、目深に被たる帽子の内、小浪「アノ力彌様のお屋敷はもふ爰かへ。わしや恥しい」と媚かし。取散らす物片付て、「先お通りなされませ」と、下女が傳へる口上に、となせ「駕の者皆歸れ。御案内頼ます」と、いふもいそ〳〵娘の小浪、母に付添座に直れば、お石しとやかに出向ひ、「是は〳〵、お二方共ようぞや御出。疾よりお目に掛る筈、お聞及びの今の身の上。お尋に預りお恥しい」となせ「あの改まつたお詞。お目に掛るは今日初めなれど、先達て御子息力彌殿に、娘小浪を言號致したからは、お前なりわたしなり、娌同士、御遠慮に及ばぬ事」お石「是は〳〵、悼入御挨拶。殊に御用繁い本藏様

ほたへ―ふざける

海老と盃、穴の稲荷の玉垣は、朱ふなければ信がさめると云様な物かい。チイこれ〳〵これ、こぶら反りじや、足の大指折たく〳〵。おつとよし〳〵。次手にかうじや」と、足先で。お石「アヽこれ、ほたへさしやんすな、嗜しやんせ。酒が過るとたはゐがない。ほんに世話でござらふの」と、物和かにあひしらふ。力彌心得奥より立出、「申々母人、親父様は御寝なつたか。是上られい」と指出す。親子が所作を塗分けても、下地は同じ桐枕。由「チヽチヽ應」は夢現、「イヤもふ皆往にやれ」中居「ハイ〳〵〳〵、そんならば旦那へ宜う」若旦那ちと御出、を目遣て、往に際悪う歸りける。聲聞へぬ迄行過させ、由良助枕を上、「ヤア力彌、遊興に事寄丸めた此雪、所存有ての事じやが、何と心得たぞ」力「ハッ雪と申物は、降時には少の風にも散り、輕い身でござりませう共、彼の如く一致して丸まつた時は、嶺の雪吹に岩をも砕く、大石同然。重いは忠義、其重い忠義を思ひ、丸めた雪も余り日數を延過してはと思召ての」由「イヤ〳〵由良助親子、原郷右衛門など四十七人連判の人數は、皆主なしの日陰者、日陰にさへ置ば解ぬ雪、せく事はないといふ事。爰は日當り奥の小庭へ入て置。螢を集め雪を積むも、學者の心長き例。女共切戸内から明てやりやれ。堺への狀認めん、飛脚が來たらばしらせいよ」力「アイ〳〵」

仁體—身柄
けうとい—すばらしい
朝夕に云々—朝夕に見ればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島山(新後拾遺集)
通らぬやつ—不粋な奴
端香—茶の出ばな
鹽茶—酒の酔を醒すもの愛想よしの意をかく
降たる雪かな云云—謡曲鉢の木の雪は鵞毛に似て飛で散亂し人は鶴氅を著て立て徘徊すの句をもぢる

第九

風雅でもなく洒落でなく、しやうことなしの山科に、由良助が侘住居、祇園の茶屋に昨日から、雪の夜明し朝戻り、牽頭中居に送られて、酒がほたへる雪轉し、雪はこけいで雪こかされ、仁體捨し遊びなり。中居「旦那、中旦那、お座敷の景ようござります。お庭の藪に雪持てトなつた所、とんと繪に畫いた通、けうといじやないかのふお品」品「サア此景を見て外へは、何方へも往きたうござりますまいがな」由「ヘツ朝夕に見ればこそ有住吉の岸の向の淡路島山、といふ事しらぬか。自慢の庭でも、内の酒は呑ぬ／＼。エヽ通らぬやつ／＼。サア／＼奥へ／＼。奥はどこにぞお客が有」と、先に立て飛石の、詞もしどろ足取も、しどろに見ゆる酒機嫌。お戻りそふなと女房の、お石が輕う汲で出る、茶屋の茶よりも氣の端香、お寒からふと悋氣せぬ、詞の鹽茶酔醒し。一口呑で跡打明、由「エエ奥、無粋なぞや／＼、折角面白ふ酔た酒、醒せとは。アヽア、降つたる雪かな。文字いかに余所の和郎達が、嘸悋氣とや見給ふらん。それ雪は、打綿に似て飛で中入と成、奥はかゝ様といへば、とつと世帯染といへり。加賀の二布へお見舞の遅いは御用捨。伊勢

せとの染飯云々—染飯のこはいと怖い
大井川—澀ふにかく
日陰に花云々—內證女が出來たかと也
島田—しまはう
吉田—よし
蟋蟀云々—百人一首なる良經公の歌
せきとむる—關の地名と掛く

閨の睦言私言、親知らず子しらずと、蔦の細道もつれ合、嬉しからふと手を引ば、アノ母様の差合を、脇へこかして鞠子川、うつの山邊の現にも、殿御初の新枕、せとの染飯強ゐやら、恥かしいやら嬉しいやら、案じて胸も大井川、水の流と人心、若しや心は替らぬか、日陰に花は咲ぬかと、いふて島田の憂晴し、我身の上を斯とだに、人しらすかの橋越へて、行ば吉田や赤坂の、招く女の聲揃へ、歌縁を結ばゝ、清水寺へ參らんせ、音羽の瀧にざんぶりざ、毎日そふいふて拜まんせ、そうじやいな、しょきがんかうがかいれいにうきう、神樂太鼓に、ヨイコノエイこちの晝寐を覺された、都殿御に逢ふてつらさが語りたや、ソウトモ〳〵若も女夫とかゝ様ならば、伊勢さんの引合、鄙びた歌も身に取て、よい吉左右になる海瀉、熱田の社あれかとよ、七里の渡帆を上て、艪拍子揃へてヤッシッシ梶取音は鈴虫か、いや蟋蟀鳴くや霜夜と詠たるは、小夜更けてこそくれ迄と、限り有舟急がんと、母が走れば娘も走り、空の霰に笠覆ひ、舟路の友の跡や先、庄野龜山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越へ、間の土山雨が降る、水口の葉に言囃す、石部石場で大石や、小石拾ふて我夫と、撫つ擦りつ手に据へて、頓て大津や三井寺の、麓を越て山科へ、程なき里へ 三重 急ぎゆく。

隱れ聞—疵の口を隱すと外に隱れ聞くとかく
水慘—加茂川に沈める事の洒落
ふち—扶持と淵
浪の下人云々—浪人の大石をさす浪になし鹽冶に緣をかく
山科—思ひが山山あるにかく
富士の煙云々—風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我思ひかな（西行法師）
嫁入の門火—嫁入の門出に門口にて火をたくは再び歸らぬ祝なりといふ
三保—見にかく
行烈—行列

さば云譯むづかし。喰醉た躰にして、館へ連よ」と羽織打著せ疵の口、隱れ聞たる矢間千崎竹森が、障子ぐはらりと引明、「由良助殿、段々誤り入ましてござります」由「それ平右衛門、喰醉た其客に、加茂川で水慘を喰はせい」平「ハア」由「往け」

第八

道行旅路の嫁入

浮世とは、誰が言初めて飛鳥川、ふちも知行も瀨と變り、寄邊も浪の下人に、結ぶ鹽冶の誤は、戀の枷抗加古川の、娘小浪が云號、結納もとらず其儘に、振捨られし物思ひ、母の思ひは山科の、聟の力彌をちからにて、住家へ押て嫁入も、世に有なしの義理遠慮、妼つれず乘物も、やめて親子の二人連、都の空に心ざす、雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添て、手先覺へず凍え坂、薩埵峠にさしかゝり、見返れば不二の煙の空に消、行衛もしれぬ思ひをば、晴す嫁入の門火ぞと、いはふて三保の松原に、つゞく並松街道を、狹しと打たる行烈は、誰としらねど浦山し。アヽ世が世ならあのごとく、一度の晴と花かざり、伊達をするがの府中過、城下過れば氣散じに、母の心もいそ〳〵と、二世の盃濟で後、

獅子身中の虫—二王經の語にて身中より出でて身を蝕す奴

三代相恩—祖父より自分迄三代主君より受けた恩

のた打廻—もがきまはる

夫肩先縫はれて七顚八倒。「それ引出せ」の下知より早く、椽先飛おり平右衛門、朱に染だ體をば、無二無三に引ずり出し、平「ヒヤア九太夫め。ハテよい氣味」と引立て、目通へ投付れば、起立せもせず由良助、髻を摑んでぐつと引寄、「獅子身中の虫とは儕が事。我君より高知を戴莫大の御恩を著ながら、敵師直が犬と成て、有事ない事よう内通ひろいだな。四十余人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連添女房を、君傾城の勤をさするも、亡君の怨を報じたさ。寐覺にも現にも、御切腹の折柄を、思ひ出して無念の涙、五臟六腑を絞りしぞや。取分今宵は殿の逮夜、口に諸々の不淨をいふても、愼に愼を重る由良助に、よう魚肉をつき付たなア。いやといはれず應といはれぬ胸の苦しさ、三代相恩のお主の逮夜に、咽を通した其時の心、どの樣に有ふと思ふ。五體も一度に惱亂し、四十四の骨々も碎る樣に有たはやい。ヘヱ丶獄卒め魔王め」と、土に摺付捻付て、無念の涙にくれけるが、由「コリヤ平右衛門、最前錆刀を忘置たは、こいつをばなぶり殺といふしらせ。命取ずと苦痛させよ」平「畏た」と拔より早く、踊上り飛上り、切共僅二三寸、明所もなしに疵だらけ、のた打廻つて、九「平右衛門殿、おかる殿、詫してたべ」と手を合せ、以前は足輕づれなりと、目にもかけざる寺岡に、三拜するぞ見苦しき。由「此場で殺

東の供―師直の敵討の供

ても壁に耳、外より洩ても其方が科、密書を覗見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手にかきよより我手に掛け、大事を知たる女、妹とて赦されずと、夫を功に連判の數に入てお供に立ん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば數には入られぬ、聞分て命をくれ。死でくれ妹」と、事を分たる兄の詞、おかるは始終せき上〳〵、「便のないは。身の代を、役に立ての旅立か、暇乞にも見へそな物と、恨でばかりおりました。勿體ないが父樣は、非業の死でもお年の上、勘平殿は三十に、成やならずに死るのは、嘸悲しかろ口惜かろ。逢たかつたで有ふのに、なぜ逢せては下さんせぬ。親夫の精進さへ、しらぬはわたしが身の因果、何の生ておりませう。お手にかゝらば嘸樣が、お前をお恨なされましよ、自害した其跡で、首なりと死骸なりと、功に立なら功にさんせ。さらばでござる兄樣」と、いひつゝ刀取上る。「やれまてしばし」と、止むる人は由良助。「はつ」と驚く平右衛門、おかるは「放して殺して」と、あせるを押へて、由「ホウ兄弟共見上た。疑ひはれた。兄は東の供を許す。妹はながらへて未來への追善」―かる「サア其追善は冥途の供」と、もぎ取刀をしつかと持添、由夫勘平連判には加へしかど、敵一人も討とらず、未來で主君に云譯有まじ。其云譯はコリヤ爰に」と、ぐつと突込む疊の透間。下には九太

レかふ〳〵」と叫けば、平「ムウすりや其文を慥に見たな」かる「殘らず讀だ其跡で、互に見合す顏と顏、それからじやらつき出して、つゐ身請の相談」平「アノ其文殘らず讀だ跡で」かる「アイナ」平「ムウそれで聞へた。妹とても遁れぬ命、身共に呉れよ」と拔打に、はつしと切ば、ちやつと飛退き、かる「コレ兄樣、私には何誤り。勘平といふ夫も有、急度二親有からは、こな樣の儘にも成まい。請出されて親夫に、逢と思ふがわしや樂み。どんな事でも誤らふ、赦して下んせ赦して」と、手を合すれば平右衛門、拔身を捨てどうど伏し、悲歎の涙にくれけるが、平「可愛や妹何にもしらぬな。親與市兵衛殿は、六月二十九日の夜、人に切れてお果なされた」かる「ヤアそれはまあ」平「コリヤまだ悔りすな。請出され添ふと思ふ勘平も、腹切て死だはやい」かる「ヤア〳〵〳〵それはまあほんかいの。コレのふ〳〵」と取付て、わつと計に泣沈む。平「ヲヽ道理々〳〵。樣子咄せばながい事。お痛はしいは母者人、云出しては泣思ひ出しては泣、娘かるに聞したら、泣死にするであろ、必いうてくれなとのお頼、いふまいと思へ共、迚も遁れぬそちが命。其譯は、忠義一途に凝固つた由良助殿、勘平が女房と知らねば、請出す義理もなし、元來色には猶耽らず、見られた狀が一大事、請出し差殺す、思案の底と慥に見へた。よしそふなう

わらをでの―笑ふのであらう

勝手次第」かる「ハア丶嬉しうござんす、といはして置いてわらをでの」由「いや直に亭主に金渡し、今の間に埒さそふ。氣遣せずと待てゐや」かる「そんなら必待て居るぞへ」由「金渡して來る間、何方へも往きやるな。女房じやぞ」かる「夫もたつた三日」由「それ合點」かる「忝ふござんす」歌「世にも因果な者ならわしが身じや、可愛男にいくせの思ひ、エ丶なんじやいなおかしやんせ、忍び音に鳴く小夜千鳥。奥で謡ふも身の上と、おかるは思案取々の、折に出合平右衛門、「妹でないか」かる「ヤア兄様か。恥しい所で逢ました」と顔を隱せば、平「苦しうない。關東より戻りがけ、母人に逢てくはしく聞た。夫の爲お主の爲、よく賣れた。出かしたく〵」かる「そふ思ふて下さんすりやわしや嬉しい。したがまあ悦んで下さんせ、思ひがけなう、今宵受出さるゝ筈」平「夫は重疊、何人のお世話で」かる「お前も御存の大星由良助様のお世話で」平「何じや由良助殿に受出される。夫は下地から馴染か」かる「何のいな、此中より二三度酒の相手。夫が有ば添してやろ、隙がほしくば隙やろ、と結構過た身請」平「扨は其方を、早の勘平が女房と」かる「イヱしらずじやぞへ。親夫の恥なれば、明して何の云ませう」平「ムウすりや本心放埒者。お主の怨を報ずる所存はないに極つたな」かる「イエく〵これ兄様、有ぞえく〵。高うは云はれぬ、コ

舟玉樣—舟を守る神
洞庭の云々—洞庭は支那の瀟湘八景の一にて月によろし

見付て酒にせう。アヽどふせうな。アヽコレ〳〵幸爰に九つ梯子、是を踏へておりてたも」と、小屋根に掛ければ、かる「此梯子は勝手が違ふて、ヲヽ怖。どふやら是は危い物」由「大事ない〳〵。あぶないこはいは昔の事。三間づつ跨げても、赤がうやくも入らぬ年ばい」かる「阿呆いはんすな。舟に乘つた樣で怖いわいな」由「道理で舟玉樣が見へる」かる「ヲヽのぞかんすないな」「洞庭の秋の月樣をおがみ奉るじや」かる「イヤモウそんなら下りやせぬぞ」由「下りざおろしてやろ」かる「アレ又惡い事を」由「喧しい生娘かなんぞの樣に、逆緣ながら」と後より、じつと抱締め抱おろし、「なんとそもじは御覽じたか」かる「アイいゝゑ」由「見たであろ〳〵」かる「アイなんじややら、面白そふな文」由「あの上から皆讀だか」かる「ヲヽくど」由「ア身の上の大事とこそはなりにけり」かる「何の事じやぞいな」由「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房に成てたもらぬか」かる「おかんせ嘘じや」由「サ嘘から出た眞でなければ根が遂げぬ。おふと云や〳〵」かる「イヤ云ふまい」由「なぜ」かる「お前のは嘘から出た眞じやない。實から出た嘘じや」由「おかる受出そふ」かる「エヽ」由「うそでない證據に、今宵の内に身受せう」かる「ムウいやわしには」由「間夫が有なら添してやろ」かる「そりやマア眞かへ」由「侍冥利、三日成共圍ふたら、夫からは

はどけ—佛にかく

盛潰され—酒に酔はされ

が、妻のおかるは酔さまし、はや里馴れて吹風に、憂を晴して居る所へ、由「ちよと往て來る。由良助共有ふ侍が、大事の刀を忘れて置た。つる取て來る其間に、掛物もかけ直し、爐の炭もついでおきや。ア、それ〳〵、こちの三味線踏折るまいぞ。是はしたり、九太は往なれたそふな」歌「父よ母よと泣聲聞ば、妻に鸚鵡のうつせし言の葉、エヽ何じやいな、おかしやんせ。邊り見廻し由良助、釣燈籠の明りを照し、讀長文は御臺より、敵の樣子細々と、女の文の後や先、ら〳〵ではかどらず。餘所の戀よと羨しく、おかるは上より見おろせど、夜目遠目なり字性もおぼろ、思ひ付たる延鏡、出して寫して讀取文章、下家よりは九太夫が、繰下す文月影に、透し讀とは神ならず、ほどけかゝりしおかるが玉簪、ばつたり落れば、下にははつと見上て後へ隱す文。椽の下には猶ゑつぼ、上には鏡の影隱し、かる「由良さんか」由「おかるか。そもじは其處に何してぞ」かる「わたしやおまへに盛潰され、あんまりつらさに酔ざまし、風に吹かれて居るはいな」由「ムウハテなふ、よう風にふかれてじやの。イヤかる、ちと咄したい事が有、屋根越の天の川で、爰からは云れぬ。ちよつとおりて給もらぬか」かる「咄したいとは賴たい事かへ」由「まあそんな物」かる「廻つて來やんしよ」由「いや〳〵。段梯子へおりたらば、中居が

しどろもどろ—亂れる
末社—幇間
魂—刀の事刀は武士の魂といふ故
赤鰯—錆て赤くなりし刀を嘲けつていふ
松浦佐用姫—夫狹手彥を慕うて石に化せし故事

ぬく。鷄しめさせ鍋燒させん。其元も奧へお出。女郎共謠へ〳〵」と、足元もしどろもどろの浮拍子、テレツク〳〵ツヽテン〳〵 由「おのれ末社ども、めれんになさで置べきか」と、騷にまぎれ入にける。始終を見屆鷺坂伴内、二階より下り立、「九太夫殿、子細とつくと見屆申た。主の命日に、精進さへせぬ根性で、敵討存も寄ず。此通主人師直へ申聞、用心の門を開かせませう」九「成程最早御用心に及ばぬ事」伴「コレサまだ爰に刀を忘れて置ました」九「ほんに誠に大馬鹿者の證據。嗜の魂見ましよ。扨錆びたりな赤鰯」伴「ハヽヽヽ」九「彌本心顯はれ御安堵〳〵。ソレ九太夫が家來迎の駕籠」家來「はつ」と答へて持出る。九「サア伴内殿お召なされ」伴「先御自分は老體ひらに〳〵」九「然らば御免」と乘移る。伴「イヤ九太殿、承はれば此所に、勘平が女房が勤て居ると聞ました。貴殿には御存ないか。九太夫どの〳〵」といへど答へず。コハ不思議と、駕の簾を引明れば、内には手ごろの庭の飛石、伴「コリヤどふじや、九太夫は松浦さよ姬をやられた」と、見廻すこなたの椽の下より、九「コレ〳〵伴内殿、九太夫が駕籠拔の計略は、最前力彌が持參せし書翰が心元なし。樣子見屆跡より知らさん。矢張我等が歸る體にて、貴殿は其駕に引添て」伴「合點々々」と點頭合、駕には人の有體に、見せてしづ〳〵立歸る。折に二階へ勘平

けもない事—少しもない

逮夜—命日の前夜

て色狂ひ、馬鹿者よ狂氣よと、笑はれふかと思ふたに、敵を討術とは九太夫殿、ホヽウ嬉しい／＼」九「スリヤ其元は、主人鹽冶の仇を報ずる所存はないか」由「けもない事／＼。家國を渡す折から、城を枕に討死といふたのは、御臺樣への追從。時に貴樣が、上へ對して朝敵同然と、其場をついと立た。我等は跡にとしやちばつて居た。いかゐたわけの。所で仕廻は付ず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそ／＼。今此安樂な樂するも貴殿のおかげ、昔の好は忘れぬ／＼。堅みをやめて碎おれ／＼」九「いか樣此九太夫も、昔思へば信太の狐、化顯はして一獻酌もふか。サア由良殿、久しぶりだお盃」由「又頂戴と會所めくのか」九「指しおれ呑は」由「呑おれ指すは」九「てうど受おれ肴をするは」と、傍に有合鮹肴、挾んでずつと指出せば、由「手を出して、足を戴く鮹肴。忝い」と戴て喰んとする手をじつととらへ、九「コレ由良助殿、明日は主君鹽冶判官の御命日。取分逮夜が大切と申が、見事其肴貴殿は喰ふか」由「たべる／＼。但主君鹽冶殿が、鮹になられたといふ便宜が有たか。エ愚痴な人では有。こなたやおれが浪人したは、判官殿が無分別から。スリヤ恨こそ有、精進する氣微塵もごあらぬ。お志の肴賞翫致す」と、何氣もなく只一口に味ふ風情。邪智深き九太夫も、呆れて詞もなかりける。由「扨此肴では呑

善悪の云々―障子の向ひに悪黨九太夫様子を覗ふ故いふ

寄たぞや―年寄た事

大功は細瑾を云云―大功をなすものは些細な義理を拾てる史記に大行不顧細瑾大禮不辭小讓とあり

さりとては云々―アヽおいて貰はふ

おんでもない事―いふ迄もない事

譏無念をば、じつとこたへてござるからは、酒でも無理に参らずば、是迄命も續ますまい。醒ての上の御分別」と、無理に押へて三人を、伴ふ一間は善悪の、明りを照す障子の内、影を隠すや 三重 月の入山科よりは一里半、息を切たる嫡子力彌、内を透して正體なき父が寝姿、起すも人の耳近し、と枕元に立寄て、轡に代る刀の鍔音、鯉口ちやんと打鳴せば、むつくと起て 由「ヤア力彌か。こい口の音響せしは、急用有てか、密に〳〵」力「只今御臺かほよ様より、急のお飛脚密事の御状」由「外に御口上はなかつたか」力「敵高師直歸國の願ひ叶ひ、近々本國へ罷歸る、委細の義は、御文との御口上」由「よし〳〵、其方は宿へ歸り、夜の内に迎の駕。往け〳〵」力「はつ」と猶豫ふ隙もなく、山科指して引返す。由「先様子氣遣」と、狀の封じを切所へ、九「大星殿、由良殿、斧九太夫でござる、御意得ませふ」と、聲懸けられ、由「是は久しや〳〵。一年も逢ぬ内、寄たぞや寄たぞや。額に其皺のばしにお出か。アノ爰な莚破めが」九「イヤ由良殿、大功は細瑾を顧ずと申が、人の譏も構はず遊里の遊び、大功を立る基、適の大丈夫末頼もしう存る」由「ホヲ、是は堅いは〳〵、石火矢と出掛けた。去とてはおかれい」九「イヤア由良助殿とぼけまい。誠貴殿の放埓は」由「敵を討つ術と見へるか」九「おんでもない事」由「忝い。四十に餘つ

堪らぬ―辛抱てたまらん
押れぬ―押はれぬ

といふは、人參飲で首縊る樣な物。殊に其元は、五兩に三人扶持の足輕、お腹は立られな、はつち坊主の報謝米程取て居て、命を捨て敵討せうとは、そりや青海苔貰ふた禮に、太々神樂を打樣な物。我等知行千五百石、貴樣と比べると、敵の首は斗升で量る程、取ても釣合ぬ〱。所で止めた。ナ聞へたか、兎角浮世は斯うした物じや。つゝてん〱〱、なぞと引かけた所は、堪らぬ〱」平「是は由良助樣のお詞とも覺へませぬ。僅三人扶持取拙者めでも、千五百石の御自分樣でも、繋ぎました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押に押れぬは御家の筋目、殿の御名代もなされまする、歷歷樣方の中へ、見る影もない私めが、指加へてとお願ひ申は、憚り共慮外共、ほんの猿が人眞似。お草履を摑んで成共、お荷物を擔いで成共參じませう。お供に召連られて。ナ申、コレ申々。是はしたり寐てござるそふな」喜「コレサ平右衛門、あつたら口に風ひかすまひ。由良助は死人も同然。矢間殿、千崎殿、モウ本心は見へましたか。申合せた通り計ひませうか」三人「いか樣、一味連判の者共への見せしめ、いざいづれも」と立寄るを、平「ヤレ暫く」と平右衛門、おしなだめ傍に寄、「つく〲思ひ廻しますれば、主君にお別れなされてより、怨を報はんと種々の艱難、木にも萱にも心を置、人の

ういやつ—殊勝者
みたくし—わたくしの訛か
あぢな事の—面白い事だが

ござります。暫く御扣下されませう。由良助様、寺岡平右衛門めでござります、御機嫌の體を拜しまして、いか計大悦に存奉ります」由「フウ寺岡平右とは、エヽ何でゐすか、前かど北國へお飛脚に往かれた、足のかるい足輕殿か」平「左様でござります。殿様の御切腹を、北國にて承はりまして、南無三寶と宙を飛で歸りまする道にて、お家も召上られ、一家中ちり〴〵と、承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ、御恩は替らぬお主の仇、師直めを一討と鎌倉へ立越、三ケ月が間非人と成て、付狙ひましたけれ共、敵は用心嚴しく、近寄事も叶ませず、所詮腹かつさばかんと存じましたが、國元の親事を思ひ出しまして、すご〳〵歸りました。所に、天道様のお知らせにや、いづれも様方の一味連判の様子承はりますると、ヤレ嬉しや有がたや、と取物も取敢へず、あなた方の旅宿を尋、一向お頼申上ましたれば、出かした、ういやつじや、お頭へ願ふてやろとお詞に縋り、是迄推參仕りました。師直屋敷の」由「アこれ〳〵、ア其元は足輕では無ふて、大きな口がるじやの。何と牽頭持なされぬか。尤みたくしも、蚤の頭を斧で割た程、無念な共存じて、四五十人一味を拵へて見たが、アあぢな事の、よう思ふて見れば、仕損じたら此方の首が轉り、仕負せたら跡で切腹、何方でも死ねばならぬ

江戸三界へ云々—近松の丹波與作の中に此歌出でたり其下にいつ戻らんす事じややら殺して置て行かんせの云々とあり

れたか」彌「承はつて驚入ました。初の程は敵へ聞する計略と存じましたが、いかふ遊に實が入過まして、合點が參らぬ」喜「何と此喜多八が申た通、魂が入代つてござらふがの。いつそ一間へ踏込」十「イヤ／＼とくと面談致した上」彌「成程。然らば是に待ませふ」仲「手の鳴方へ／＼」由「捕まよ／＼」仲「由良鬼やまたい／＼」由「捕まへて酒呑そ酒呑そ。コリヤとらまへたは、サア酒々、銚子持／＼」十「イヤコレ由良助殿。矢間十太郎でござる。こりや何と成さるゝ」由「南無三寶仕舞た」仲「オヽ氣の毒。何と棠さん、ふしくた様なお侍様方、お連様かいな」衆「さあれば、お三人共怖い顔して」十「イヤコレ女郎達、我々は大星殿に用事有て參つた、暫く座を立て貰たい」仲「其様な事で有そな物。由良様奧へ行ぞへ。お前も早うお出、皆様是にへ」十「由良助殿、矢間十太郎でござる」喜「竹森喜多八でござる」彌「千崎彌五郎御意得に參つた。お目覺されませう」由「是は打揃ふてよふお出なされた。何と思うて」十「鎌倉へ打立時候はいつ比でござるな」由「さればこそ、大事の事をお尋なれ、丹波與作が歌に、歌江戸三界へいかんして。ハヽヽ、御免候へ、たはい／＼」三人「ヤア酒の醉本性違はず。性根が付ずば三人が、酒の醉を醒さしませうかな」平「ヤレ聊爾なされまするな。憚ながら平右衛門めが、一言申上たい義が

指合くらぬ―親子一つに出くはさぬ

いかゐつや―大きな口前

良助が體御覽じたか」伴「九太夫殿、ありやいつそ氣違でござる。段々貴樣より御內通有ても、あれ程に有ふとは、主人師直も存ぜず、拙者に罷登て見屆、心得ぬ事あらば、早速にしらせよと申付ましたが、扨々我もへんしも折ましてござる。躮力彌めは何と致したな」九「此奴も折節此所へ參り倶に放埓、指合くらぬが不思議の一つ。今晩は底の底を捜見んと、心工を致して參つた。密々にお咄し申そふ。いざ二階へ」伴「先々」九「然らば斯うお出で」歌「實は心に思ひはせいで、あだな惚れた〳〵の口先は、いかゐつやでは有はいな。十「彌五郎殿、喜多八殿、是が由良助殿の遊び茶屋、一力と申のでござる。コレサ平右衞門、よい時分に呼出そふ。勝手に扣へてお居やれ」平「畏りました。宜しう賴上ます」十「誰ぞちよと賴たい」仲居「アイ〳〵どな樣じやへ」十「イヤ我々は由良殿に、用事有て參つた。奧へ往て云ふには、矢間十太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八でござる、此間より節々迎の人を遣はしますれ共、お歸りのない故、三人連で參りました。ちと御相談申さねばならぬ義がござる程に、お逢なされて下され、と急度申てくれ」仲「夫は何とも氣の毒でござんす。由良樣は三日以來呑續、お逢なされてからたはゐは有まい。本性はないぞへ」十「ハテ扨まあそふ云ふておくりやれ」仲「アイ〳〵」喜「彌五郎殿お聞なさ

西方云々―極楽は西にあるといふより彌陀に續けたり
はく―白人
けうとい―すばらしい
下に置れぬ―大切に饗す時にいふ

此金は、聟と舅の七七日、四十九日や五十両、合て百両百ヶ日の追善供養、跡懇に弔はれよ。さらば〱」母「おさらば」と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立返る、人もはかなき 三重

第七

歌 花に遊ばゞ祇園邊の色揃へ、東方南方北方西方、彌陀の浄土がぬりに塗立、ぴつかりぴか〱、光り輝くはくや藝子に、いかな粋奴も現ぬかして、愚鈍どろつくどろつくや、ワイワイノワイトサ 九「誰頼ふ、亭主は居ぬか。亭主々々」亭「是はいそがしいは、何奴様じや。何方様じや。エ斧九太様、御案内とはけうといけうとい」九「イヤ初てのお方を同道申た。きつう取込そふに見へるが、一つ上ます座敷が有か」亭「御座ります共。今晩は彼由良大盡の御趣向で、名有色達を攌込み、下座敷は塞がつてござりますれど、亭座敷が明てござります」九「そりや又蜘の巣だらけで有ふ」亭「又悪口を」九「イヤサよい年をして、女郎の蜘の巣にかゝらまい用心」亭「コリヤきつい。下に置れぬ二階座敷、ソレ灯を點せ中居共、お盃お烟草盆」と、高い調子に枷かけて、奥は騒の太鼓三味、九「ナント伴内殿、由

紫摩黄金—黄金の紫色を帯びたるもの、黄金中の最上とせられたり

聲をはかり—聲の出る限り

の入た此財布、聟殿じやと思ふて、敵討の御供に、連てござつて下さりませ」原「ヲヽ成程尤なり」と、郷右衛門金取納め、「思へば〳〵此金は島の財布の紫摩黄金、佛果を得よ」といひければ、勘「アヽ佛果とは穢はし、死ぬ〳〵。魂魄此土に留つて、敵討の御供する」と、いふ聲も早四苦八苦、母は涙に搔暮れながら、「ナフ勘平殿、此事を娘にしらし、せめて死目に逢してやりたい」勘「イヤ〳〵〳〵親の最期は格別、勘平が死だ事必知らして下さるな。お主の爲に賣たる女房、此事聞て不奉公せば、お主に不忠するも同然。只其儘に指置れよ。サア思ひ置事なし」と、刀の鋒咽にぐつと指貫き、かつぱと伏して息絶たり。母「ヤアもふ聟殿は死しやつたか。扨も〳〵世の中に、おれが樣な因果な者が、又と一人有ふか、親仁殿は死しやる、頼に思ふ聟を先立、いとしかはいの娘には生別れ、年寄た此母が一人殘つて是がマア、何と生て居られうぞ。コレ親仁殿與市兵衛殿、おれも一所に連て往て下され」と、取付ては泣叫び、又立上つて「コレ聟殿、母も倶に」と縋付ては伏沈み、あちらでは泣、こちらでは泣、わつと計にどふど伏、聲をはかりに歎しは、目も當られぬ次第なり。郷右衛門突立上り、「ヤアこれ〳〵老母、歎るゝは理りなれ共、勘平が最期の樣子、大星殿に委語り、入用金手渡しせば滿足あらん。首に掛けたる

悪黨者、身の彳なき故に、山賊すると聞たるが、疑もなく勘平が、舅を討たは彼奴が業」と母「エヽ、そんなりや、あの親仁殿を殺したは、外の者でござりますかへ。ハアはつ」と母は手負に縋り、「コレ手を合して拝みます。年寄の愚痴な心から恨いうたも皆誤り。こらへて下され勘平殿。必死で下さるな」と泣詫れば顔ふり上、勘「只今母の疑も、我悪名も晴たれば、是を冥途の思出とし、跡より追付舅殿、死出三途を伴はん」と、突込刀引廻せば、原「ア、暫く〳〵。思はずも其方が舅の敵討たるは、いまだ武運に盡ざる所。弓矢神の御恵にて、一劫立てたる勘平。息ある中に郷右衛門が密に見する物有」と、懐中より一巻を取出し、さら〳〵と押ひらき、「此度亡君の敵、高師直を討取んと神文を取かはし、一味徒黨の連判かくの如し」と、讀も終らず苦痛の勘平、「其姓名は誰々成ぞや」原「ヲヽ徒黨の人數は四十五人。汝が心底見屆たれば、其方を指加へ一味の義士四十六人。是を冥途の土産にせよ」と、懐中の矢立取出し姓名を書記し、「勘平血判」勘「心得たり」と、腹十文字に掻切、臓腑を摑でしつかと押、「サア血判仕つた。ア、忝や、有がたや、我望達したり、母人歎いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬ此金、一味徒黨の御用金」と、いふに母も涙ながら、財布と倶に二包、二人が前に指出し、母「勘平殿の魂

亡君の御恥辱と知らざるか駝者。左程の事の辨なき汝にてはなかりしが、如何なる天魔が見入し」と、銳眼に涙を浮め、事をわけ理をせむれば、たまり兼て勘平、諸肌押脱ぎ脇指を、抜くより早く腹にぐつと突立、「ア、いづれもの手前面目もなき仕合。拙者が望叶はぬ時は、切腹と兼ての覺悟、我舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあれば、一通り申ひらかん。兩人共に聞て給べ。夜前彌五郎殿の御目に懸り、別れて歸る闇紛れ、山越猪に出合、二つ玉にて打留、駈寄て探見れば、猪にはあらで旅人。南無三寶過たり、藥はなきかと懷中を搜し見れば、財布に入たる此金。道ならぬ事なれ共、天より我に與ふる金と、直に馳行彌五郎殿に彼金を渡し、立歸つて樣子を聞ば、打留たるは我舅、金は女房を賣た金。斯程迄する事なす事、鶍の嘴ほど違ふといふも、武運に盡たる勘平が、身の成行推量有」と、血走眼に無念の涙。子細を聞より、彌五郎ずんど立上り、死骸引上打返し、彌「ムウ〱」と疵口改め、「鄉右衛門是見られよ。鐵砲疵に似たれども、是は刀で抉つた疵。ヱ、勘平早まりし」と、いふに手負も見て悔り、母も驚く計なり。鄉右衛門心付、「イヤコレ千崎殿、ア、是にて思ひ當つたり。御自分も見られし通、是へ來る道端に、鐵砲受たる旅人の死骸、立寄見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘當したる

渇しても云々―渇不飲盜泉之水、熱不息惡木之蔭（文選）

金子を以て、御石牌料に用ひられんは、御尊靈の御心にも叶ふまじと有て、金子は封の儘相戻さる」と、詞の中より彌五郎懷中より金取出し、勘平が前に指置ば、はつと計に氣も轉動、母は涙と諸共に、「コリヤ爰な惡人づら。今といふ今親の罰、思ひしつたか。皆樣も聞て下され、親仁殿が年寄て後生の事は思はず、聟の爲に娘を賣、金調へて戻らしやるを、待伏せして、あの樣に殺して取た金じや物、天道樣がなくばしらず、何で御用に立物ぞ。親殺しのいき盜人に、罰を當て下されぬは、神や佛も聞へぬ。あの不孝者、お前方の手に懸けて、なぶり殺しにして下され、わしや腹が立はいの」と、身を投ふして泣居たる。聞に驚き兩人刀追取り、弓手馬手に詰懸け〳〵、彌五郎聲をあらゝげ、「ヤイ勘平、非義非道の金取て、身の科の詫せよとは云ぬぞよ。わがやうな人非人、武士の道は耳に入まい。親同然の舅を殺し、金を盜んだ重罪人は、大身槍の田樂刺。拙者が手料理振舞はん」と、はつたと睨めば郷右衛門、「渇しても盜泉の水を呑ずとは義者の誡。舅を殺し取たる金、亡君の御用金に成べきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察有て、突戻されたる由良助の眼力、天晴々々。さりながら、ハア情なきは此事世上に流布有て、鹽冶判官の家來早の勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝計が恥ならず、

事じや迄―迄は強辭にて意なし

五體―頭と兩手兩足

腰ふさぎ―間にあはせの刀

歩き、珍財を投打て、世話さしやつたも却てこなたの身の怨と成たるか。飼かふ犬に手をくはるゝと、ようも／＼此様に酷たらしう殺された事じや迄。コりや爰な鬼よ蛇よ、父様を返せ、親父殿を生て戻せやい」と、遠慮會釋や荒男の、髻を摑んで引寄／＼擲付、「づた／＼に切さいなんだ迚、是で何の腹がゐよ」と、恨の數々口說き立、かつぱと伏して泣居たる。身の誤りに勘平も、五體に熱湯の汗を流し、疊に喰付天罰と思ひ知たる折こそあれ、深編笠の侍二人、「早の勘平在宿を仕召るか。原郷右衛門千崎彌五郎、御意得たし」と音なへば、折悪けれ共勘平は、腰ふさぎ脇挾んで出迎ひ、「コレハ／＼御兩所共に、見苦しき埴屋へ御出忝し」と、頭を下れば郷右衛門、「見れば家内に取込も有そうな」勘「イヤもう瑣細な内證事。お構なく共いざ先あれへ」原「然らば左様に致さん」と、ずつと通り座に著けば、二人が前に兩手をつき、勘「此度殿の御大事にはづれたるは、拙者が重々の誤り、申開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勸る様に、御兩所の御執成、偏に賴奉る」と、身をへり下り述ければ、郷右衛門取あへず、「先以其方貯なき浪人の身として、多くの金子、御石牌料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入れしが、石牌を營むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせし其方の

笑止―氣の毒

わごりよ―和御寮にて手前といふに同じ

くすね―密に掠め取る

りはつと驚く母、「何者の所爲。コレ聟殿、殺した奴は何者じや。敵を取て下されのふ。コレ親仁殿〱」と呼べど叫べど其甲斐も、泣より外の事ぞなき。狩人共口々に、「ヲヽお袋悲しかろ。代官所へ願ふて詮義して貰はしやれ。笑止〱」と打連て、皆々我家へ立歸る。母は涙の隙よりも、勘平が傍へ指寄て、「コレ聟殿、よもや〱〱〱とは思へ共合點がいかぬ。なんぼ以前が武士じや迚、舅の死目見やしやつたら、悔りも仕やる筈。こなた道で逢た時、金受取はさつしやれぬか。親父殿が何といはれた。サアいはつしやれ、サア何と。どふも返事は有まいがの。無い證據はコレ爰に」と、勘平が懐へ手を指入て引出すは、「さつきにちらりと見て置た此財布。コレ血の付て有からは、こなたが親仁を殺したの」勘「イヤ夫は」母「夫はとは。エヽわごりよはなふ、隱しても隱されぬ、天道樣が明らかな。親仁殿を殺して取た、其金にや誰遣る金じや。ムウ聞へた、身貧な舅、娘を賣た其金を、中で半分くすねて置て、皆遣るまいかと思ふて、コリヤ殺して取たのじやな。今といふ今迄も、律義な人じやと思ふて、欺されたが腹が立はいやい。エヱ爰な人でなし、あんまり呆て涙さへ出ぬはいやい。なふいとしや與市兵衛殿、畜生の樣な聟とは知らず、どふぞ元の侍にして遣りたいと、年寄て夜も寐ずに、京三界を駈

こなた人—勘平をさす

こたへ居る。母「ヲヽ聟殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な氣も出よか、と思ふての事であろ」かる「イエ〳〵なんぼ別れても、主の爲に身を賣ば、悲しうも何共ない。わしや勇んで行母樣、したが父樣に逢ずに行のが」母「ヲヽ夫も戻らしやつたら、つゐ逢に往かしやろぞいの。煩はぬ樣に灸すへて、息災な顔見せに來てたも。鼻紙扇もなけりや不自由な。何にもよいか、とばついて怪我仕やんな」と、駕に乘迄心を付、かる「さらばや」母「さらば、何の因果で人並な娘を持、此悲しいめを見る事じや」と、齒を喰しばり泣ければ、娘は駕にしがみ付、泣をしらさじ聞さじと、聲をも立ず咽せかへる。情なくも駕舁上、道をはやめて急行。母は跡を見送り〳〵、「アヽ由ない事いふて、娘も嘸悲しかろ。ヲヽこな人わいの、親の身でさへ思ひ切がよいに、女房の事ぐづ〳〵思ふて、煩うて下さんな。此親仁殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふ。こなた逢たといはしやつたの」勘「アヽ成程」母「そりやマアどこらで逢しやつて、何處へ別れて往かしやつた」勘「されば別れた其所は、鳥羽か伏見か淀竹田」と、口から出次第滅法彌八、種が島の六狸の角兵衞、所の狩人三人連、親仁の死骸に蓑打著せて、戸板に乘どや〳〵と内に入「夜山仕舞て戻りがけ、是の親仁が殺されて居られた故、狩人仲間が連て來た」と、聞よ

てやーさやう

七度尋ねて云々—諺、妄りに人を疑ふ勿れの意

てんど沙汰—お上沙汰

にかけて戻られう」勘「ヤア何と、こなたが著て居る、此島の切の金財布か」文字「ヲヽ、てや」勘「あの此島でや」文字「何と慥な證據で有ふが」聞よりはつと勘平が、肝先にひしとこたへ、傍邊に目を配、袂の財布見合せば、寸分違はぬ糸入島、「南無三寶、扨は夕部鐵砲で、打殺したは舅で有たか。ハアはつ」と我胸板を二つ玉で、打抜かるゝより切なき思ひ、とはしらずして女房、「コレこちの人そは〱せずと、遣る物かやらぬ物か、分別して下さんせ」勘「ヲヽ成程、ハテもふあの様に慥にいはるゝからは、往きやらずば成まいか」かる「アノとつ様に逢いでもかへ」勘「イヤ〱親仁殿にも今朝一寸逢たが、戻は知れまい」かる「フウそんなりや、父様に逢てかへ。夫ならそふと云もせで、母様にも私にも案じさしてばつかり」と、いふに文字も圖に乘て、「七度尋て人疑へじや。親仁の有所の知れたので、そつちもこつちも心がよい。まだ此上にも四の五の有ば、いや共にでんど沙汰。マア〱さらりと濟でめでたい。お袋も御亭も六條參りして少寄しやれ。サアサア駕に早う乘りや」かる「アイ〱これ勘平殿もふ今彼地へ行ぞへ。年寄た二人の親達、どふでこな樣の皆世話。取別て父樣はきつい持病、氣を付て下さんせ」と、親の死目を露しらず、賴む不便さいぢらしさ。勘「いつそ打明有の儘、咄さんにも他人有」と、心を痛め

宛—當

切取—強盗

へて進ぜたい、といふた計で一錢の宛もなし。そこで親仁殿のいはしやるには、ひよつと此方の氣に、女房賣て金調よう、とよもや思ふてでは有まいけれど、若兩親の手前を遠慮して、居やしやるまい物でもない、いつそ此與市兵衛が、聟殿にしらさず娘を賣ふ、まさかの時は切取するも侍のならひ、女房賣ても恥にはならぬ、お主の益に立る金、調へておましたら、まんざら腹も立まいと、昨日から祇園町へ折極に往て、今に戻らしやれぬ故、親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、夕部親仁殿に半金渡し、跡金の五拾兩と引替に、娘を連て往のふといふてなれど、親仁殿に逢ての上と、譯をいふても聞入ず、今連て往なしやる所、どふせうぞ勘平殿」勘「是は／＼先以て舅殿の心遣ひ忝い。したがこちにもちつと能い事があれ共、夫は追て。親父殿も戻られぬに、女房共は渡されまい」文字「とはなぜに」勘「ハテいはゞ親なり判がかり。尤夕部半金の五拾兩渡されたでも有ふけれど」文字「イヤこれ京大阪を倶に懸け、女護島程奉公人を抱る一文字屋。渡さぬ金を渡したと、いふて濟物かいの。まだ其上に慥な事が有てや。是の親仁が彼五拾兩といふ金を、手拭にぐる／＼と卷て懐に入らるゝ、そりやあぶない、是に入て首に懸けさつしやれと、おれが著て居る此一重物の、島の切で拵へた金財布借たれば、やんがて首

れこ―これ丈

號―許嫁

と留ても聞ず、戻られたが、但は道に」かゐ「イエ〱寄しやる所は。なふかゝさん」母「無い共〱。殊に一時も早うそなたや私に金見せて、悦ばさふ迚いきせきと、戻らしやる筈じやに合點がいかぬ」文字「イヤこれ合點のいくいかぬは其方の穿鑿、こちはさがりの金渡して、奉公人連て往の」と、懐より金取出し、「跡金の五拾兩。是で都合百兩、サア渡す受取しやれ」母「お前夫でも親仁殿の戻らぬ中は、なふかる、わが身は遣られぬ」文字「ハテぐず〱と埒の明ぬ。コレぐつ共すつ共、云はれぬ與市兵衞の印形。證文が物いふ。今日から金で買切た體、一日違へばれこ宛違ふ。どふでかふせざ濟まい」と、手を取て引立る。「マア〱待て」と取付母親突退刎退、無體に駕へ押込〱舁上る門の口、鐵砲に蓑笠打かけ、戻りかゝつて見る勘平、つか〱と内に入、母「駕籠の内なは女房共。こりやマアどこへ」「ヲヽ勘平殿よい所へよう戻つて下さつた」と、母の悦び其意を得ず、「どふでも深い譯があろ。母者人女房共、樣子聞ふ」と、おいゐの眞中、どつかと座れば文字の亭主、「ヲウ扨はこなたが奉公人の御亭じやの。譬夫でも何でも、號の夫などと、脇より違亂妨中者無之候、と親仁の印形有からは、此方には構はぬ。早う奉公人を受取ふ」母「ヲヽ、聟殿合點が行まい。兼てこなたに金の入樣子、娘の咄で聞た故、どふぞ調

覺があろ」と、指合くらぬぐはら娘、氣もわさ〳〵と見へにける。母「何ぼ其樣に面白可笑う云やつても、心の中はの」かる「イエ〳〵濟でござんす。主の爲に祇園町へ、勤奉公に行は、兼て覺悟の前なれど、年寄て爺樣の世話やかしやんすが」母「そりや云やんな。少身者なれど、兄も鹽冶樣の御家來なれば、外の世話する樣にもない」と、親子咄しの中道傳ひ、駕を舁かせて急來るは、祇園町の一文字屋、「爰じや〳〵」と門口から、「與市兵衞殿内にか」と、言つゝ這入れば、母「是はマア〳〵遠い所を。ソレ娘煙草盆、お茶上ましや」と親子して、槌でおいへを娟人屋の亭主、「扨夕部は是の親仁殿もいかゐ太義。別條無う戻られましたか」母「エヽ扨は親仁殿と連立て來はなされませぬか」文字「是はしたり」母「お前へ往てから今においてゞ」文字「ヤア戻られぬか、ハテめんよふな。ハア若稻荷前をぶら付て、彼玉殿につまゝりやせぬかの。コレ此中爰へ見に來て極た通、お娘の年も丸五年切、給銀は金百兩、さらりと手を打た。是の親仁がいはるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金有ば、今晩證文を認め、百兩の金子お借なされて下され、と涙をこぼしての頼故、證文の上で半金渡し、殘りは奉公人と引替の契約。何が其五拾兩渡すと悅んで藏き、ほた〳〵いふて戻られたは、もふ四つでも有ふかい。夜道を一人金持ていらぬ物、

指合くらぬ云々—親の前も憚らぬがち〳〵した娘

兄—寺岡平右衞門

槌ておいへ云々—おいへは圍爐裏のある廣間娟人は藝なき妓にて掃くにかく

めんよふ—不思議

玉殿—狐

借—貸の意

いらぬ物—よからぬ

みさき踊―しゆんだるは最中の意ばゞんは婆
埴生―見苦しき
あかつき―垢付にかく
ゆふ―結ふと云ふ
おとましい―いやらしい
と樣云々―夫出て見よ聟連れて

歌みさき踊がしゆんだる程に、親仁出て見やばゞんつ、ばゞんつれて親仁出て見やばゞんつ。麥かつ音の在郷歌、所も名に負ふ山崎の小百姓、與市兵衛が埴生の住家、今は早の勘平が、浪々の身の隱里。女房おかるは寐亂れし、髮取上んと櫛箱の、あかつき掛けて戻らぬ夫、待間も解けし投島田、ゆふにいはれぬ身の上を、誰にかつけの水櫛に、髮の色艶梳きかへし、品好くしやんと結立しは、在所に惜き姿なり。母の齡も杖つきの、野道とぼ〳〵立歸り、母「ヲヽ娘髮結やつたか。美しう能う出來た。イヤもう在所はどこもかも、麥秋時分でいそがしい。今も藪際で若い衆が麥かつ歌に、親仁出て見やばゞんつれてと歌ふを聞、親仁殿の遲いが氣にかゝり、在口迄往たれどようなふ影も形も見へぬ」かる「サイナこりやまあどふして遲い事じや。わし一走見て來やんしよ」母「イヤなふ若い女の一人あるくはいらぬ事。殊に其方は小い時から、在所をあるく事さへ嫌ひで、鹽冶樣へ御奉公に遣つたれど、どふでも草深い所に緣が有やら戻りやつたが、勘平殿と二人居やればおとましい顏も出ぬ」かる「ヲヽ母樣のそりや知た事。好いた男と添のじや物、在所はおろか貧しい暮でも苦にならぬ。やんがて盆に成て、と樣出て見やかゝんつ、かかんつれてといふ歌の通り、勘平殿とたつた二人、踊見に往きやんしよ。お前も若い時

六十四云々一年にかく

いの。金が敵じやいとしぼや。南無阿彌陀、南無妙法蓮花經、何方へ成とうせおろ」と、刀も拔かぬ芋ざし扶り、草葉も朱に置露や、年も六十四苦八苦、あへなく息は絕にけり。仕濟したりと件の財布、暗がり耳の摑讀、定「ヒヤ五拾兩。ヱ、久しぶりの御對面、忝し」と首に引かけ、死骸を直に谷底へ、刎込蹴込泥まぶれ、反は我身にかゝる共、しらず立たる後より、逸散に來る手負猪。「是はならぬ」と身をよぎる。驅來る猪は一文字、木の根岩角踏立蹴立、鼻いからして泥も草木も一捲に飛行ば、あはやと見送る定九郎が、背骨へ掛けてどつさりと、肋へ拔ける二つ玉、うん共ぎやつ共いふ間なく、ふすぼり返りて死たるは、心地よくこそ見へにけれ。猪打留めしと勘平は、鐵砲提 爰彼處、探り廻りて扨こそと、引立れば猪にはあらず。勘「ヤア〳〵こりや人じや。南無三寶、仕損じたり」と思へど闇き眞の闇、誰人なるぞと問れもせず、まだ息あらんと抱起せば、手に當る金財布、摑んで見れば四五拾兩。天の與と押戴き〳〵、猪より先へ逸散に、飛がごとくに、三重急ぎける。

第六

しがく―才覚

まつとゝこぼへ―もつと泣け

て居まする。娘が申まするは、あのお人の浪人も元はわし故、何とぞして元の武士にして進ぜたい〳〵、と嚊とわしとへ毎夜さ頼。ア身貧にはござりまする、どうもしがくの仕様もなく、婆といろ〳〵談合して、娘にも呑込ませ、聟へは必沙汰なしと謀合せ、本に〳〵親子三人が血の涙の流れる金。夫をお前に取れて、娘は何と成ませう。コレ拜ます助て下されませ。お前もお侍の果そふなが、武士は相身互。此金がなければ、娘も聟も人様に顔が出されぬ。たつた一人の娘に連添聟じや物、不便にござる、かはいござる。了簡してお助なされて下さりませ。エヽお前はお若いによつてまだお子もござるまいが、やんがてお子を持て御覧じませ、親仁が云居つたは尤じやと思召て、此場を助さしやつて下さりませ。マア一里行ば私在所。金を聟に渡してから殺されましよ。申〳〵娘が悦ぶ顔見てから死たうござります。コレ申、アヽあれ〳〵〳〵」と呼はれど、跡先遠く山彦の、谺に哀催せり。定「ヲヽ悲しいこつちやは、まつとゝこぼへ。ヤイ耄め、其金でおれが出世すりや、其恵でうぬが躮も出世するはやい。人に慈悲すりや悪うは報はぬ。アヽかはいや」とぐつと突く。「うん」と手足の七顛八倒、のたくり廻るを脚にて蹴返し、「ヲヽいとしや、痛かろけれどおれに恨はないぞや。金がありやこそ殺せ、金が無けりや何の

有格—普通にある事

跡の在所—前の村

とくと聞しやれや、マア、斯じやは。こなたの懐に金なら四五拾兩の嵩、島の財布に有のを、とつくりと見付て來たのじや。借して下され、男が手を合す。定て貴樣も何ぞ詰らぬ事か、子が難義に及ぶによつてといふ樣な、有格な事じやあろけれど、おれが見込だら、ハテしよ事がないと諦て、借して下され〳〵」と、懐へ手を指入、引ずり出す島の財布。與「アア申し夫は」定「夫はとは。是程爰に有物」と、引たくる手に縋り付、「イエ〳〵此財布は跡の在所で草鞋買ふ迚、端錢を出しましたが、跡に殘るは晝食の握飯、霍亂せん樣にと娘がくれた和中散、反魂丹でござります。お赦しなされて下さりませ」とひつたくり、迯行先へ立廻り、定「エヽ聞分のない。むごい料理をするがいやさに、手ぬるういへば付上る。サア其金爰へ蒔出せ。遲いとたつた一討」と、二尺八寸拜打、與「なふ悲しや」といふ間もなく、から竹割と切付る、刀の廻りか手の廻りか、はづれる拔身を兩手にしつかと摑付、「どふでもこなた殺さしやるの」定「ヲヽ知た事。金の有のを見てする仕事、小言吐かずとくたばれ」と、肝先へ指付れば、與「マヽヽヽマア待て下さりませ。ハア是非に及ばぬ、成程〳〵、是は金でござります。けれども此金は、私がたつた一人の娘がござる、其娘が命にも替へぬ、大事の男がござりまする、其男の爲に入金。ちと譯有事故浪人し

良殿へ願ふて見ん。明々日は必急度御返事。則郷右衛門殿の旅宿の所書」と、渡せば取て押戴、與「重々の御世話忝し。何とぞ急に御用金を拵へ、明々日お目にかゝらん。某が有家お尋あらば、此山崎の渉場を左へ取、與市兵衛とお尋有ば、早速相知れ申べし。夜更けぬ内に早くも御出。コレ此行先は猶物騒、随分ぬかるな」千「合點々々。石牌成就する迄は、蚤にもくはさぬ此體。御遊も堅固で、御用金の便を待ぞ。さらば」與「さらば」と兩方へ、立別れてぞ急ぎ行。又も降來る雨の足、人の足音とほ〳〵と、道は闇路に迷はねど、子故の闇につく杖も、直成心堅親仁。一筋道の後から、「ヲヽイ〳〵親仁殿、よい道連」と呼はつて、斧九太夫が躮定九郎、身の置所白浪や、此街道の夜働、だん平物を落指、定「さつきにから呼聲が、貴様の耳へは這入らぬか。此物騒な街道を、能い年をして大膽〳〵、連に成ふ」と向ふへ廻り、きよろ付目玉ぞつとせしが、迫は老人、「是は〳〵お若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして、一人旅はいやなれど。サアいづくの浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰り、此中から一家中の在所へ無心にいたれば、是もぴたひらなか才覺ならず、埒の明ぬ所に長居はならず、すご〳〵一人戻る道」と、半分いはさず、定「ヤイ喧ましい。有樣が年貢の納らぬ其相談を聞には來ぬ。コレ親仁殿、おれがいふ事

道は闇路—人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかなの歌をとる
白浪—強盗
知らずにかく
だん平物—大刀
ひたひらなか—鐚錢半文

石牌—石碑

手をつき、先非を悔し男泣、理せめて不便なる。彌五郎も傍輩の悔道理と思へ共、大事をむざと明さじと、「コレサ〳〵勘平。はて扨、お手前は身の云譯に取雜せて、御企の、イヤ連判などとは何の譫言。左樣の噂かつてなし。某は由良殿より鄕右衞門殿へ急の使、先君の御廟所へ、御石牌を建立せんとの催し。併我々迚も浪人の身の上、是こそ鹽冶判官殿の御石塔と、末の世迄も人の口の端にかゝる物故、御用金を集る其御使。先君の御恩を思ふ人を撰出す爲、態と大事を明されず。先君の御恩を思はゞナ、、合點か〳〵」と、石牌に擬へ大星の、工を餘所に知らせしは、實に傍輩の好なり。勘「ハア、忝い彌五郎殿。成程石牌といひ立、御用金の御拵ある事とつくに承はり及び、某も何とぞして用金を調へ、それを力に御詫と、心は千々に碎け共、彌五郎殿、恥しや主人の御罰で今此ざま、誰に斯との便もなし。され共かるが親、與市兵衞と申は頼母しい百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔歎き、何とぞして元の武士に立返れ、と翁嫗共に歎悲しむ。是幸御邊に逢し物語、段々の子細を語り、元の武士に立返ると云聞さば、纔の田地も我子の爲、何しにいなはゑもいはじ。御用金を手がかりに、鄕右衞門殿迄お取次、一入賴存る」と、余義なき詞に、千「ム、成程、然らば是より、鄕右衞門殿迄、右の譯をも咄し、由

優曇花—千載一遇の意

此街道は無用心と、知て合點の一人旅。見れば飛道具の一口商、得こそは貸さじ出直せ」と、びくと動けば一討と、眼を配れば、勘「イヤア成程、盗賊とのお目違ひ御尤千萬。我等は此邊の獵人なるが、先程の大雨にほくちも濕り難義至極。サア鐵砲夫へお渡し申、自身に火を付御借」と、他事なき詞顏付を急度眺て、「和殿は早の勘平ならずや」勘「さいふ貴殿は千崎彌五郎」「是は堅固で」「御無事で」と、絕て久敷對面に、主人のお家沒落の、胸に忘れぬ無念の思ひ、互に拳を握合。勘平は指俯向き暫し詞もなかりしが、「エ丶面目もなき我身の上。古朋輩の貴殿にも、顏も得上ぬ此仕合、武士の冥加に盡たるか。殿判官公の御供先、お家の大事發りしは是非に及ばぬ我不運。其場にも有合せず、御屋敷へは歸られず、所詮時節を待て御詫と、思の外の御切腹。南無三寶、皆師直めがなす業、せめて冥途の御供と、刀に手は懸けたれど、何を手柄に御供と、どの頰さげて云譯せんと、心を碎く折から、密に樣子を承はれば、由良殿御親子鄕右衞門殿を始めとして、故殿の鬱憤散ぜん爲、寄々の思召立有との噂。我等迚も御勘當の身といふでもなし、手がかり求め由良殿に對面遂げ、御企の連判に御加へ下さらば、生々世々の面目、貴殿に逢も優曇花の、花を咲せて侍の、一分立て給はれかし。古傍輩の好武士の情、お賴申」と兩

あやし―流し

鷹は死て云々―毛吹草に鷹は死すれど穗をつまずとあり

細道―細きにかく

種が島―鐵砲種にするにかく

鐵砲雨云々―しだらでん震動雷電

を引受討死せん」と、はやり立ば由良助、「イヤ〳〵今死べき所にあらず。是を見よ旁」と、亡君の御筐を拔放し、「此切先には、我君の御血をあやし、御無念の魂を殘されし九寸五分。此刀にて師直が、首搔切て本意を遂げん」「實尤」と諸武士の勇。屋敷の内には藥師寺次郎、門の貫の木はつしと立させ、「師直公の罰が當り、扨よいざま〳〵」と、家來一度に手を叩き、咄と笑ふ鬨の聲、「アレ聞れよ」と若侍、取て返すを由良助、「先君の御憤晴さんと思ふ所存はないか」はつと一度に立出しが、思へば無念と館の内を、振返り〳〵、はつたと睨んで 三重 立出る。

第五

鷹は死ても穗は摘まずと、譬に洩ず入月や、日數も積る山崎の、邊に近き侘住居、早の勘平若氣の誤り、世渡る望姓細道傳ひ、此山中の鹿猿を、打て商ふ種が島も、用意に持つや袂迄、鐵砲雨のしだらでん、誰水無月と白雨の、晴間を爰にまつの陰。向ふより來る小挑灯、是も昔は弓張の、灯火消さじ濡さじと、合羽の裾に大雨を、凌ぎて急ぐ夜の道。「イヤ申〳〵、率爾ながら火を一つ、御無心」と立寄ば、旅人もちやく〳〵と身構し、「ム、

顛死―殉死

しめん―定めん

所存と、我胸中一致せり。いはゞ亡君の御爲に、我々顛死すべき筈。むざ〳〵と腹切ふより、足利の討手を待受、討死と一決せり」九「ヤア何と言はるゝ。能い評定かと思へば、浪人の痩顏はり、足利殿に弓引ふ、アヽ夫は無分別。マア此九太夫合點がいかぬ」定「ヲヽ親父殿そふじや〳〵。此定九郎も其意を得ぬ。此談合には省いて貰はふ。長居は無益お歸りなされ」九「夫よかろいづれも緩りと居召され」と、親子召連立歸る。千「ヤア欲頬の斧親子、討死を聞怖して、迯歸つたる臆病者。彼奴構はずと大星殿、討手を待御用意御用意」由「アヽ騒れな彌五郎。足利殿に何恨有て弓引べき。彼等親子が心底を、探らん爲の計略。藥師寺に屋敷を渡し、思ひ〳〵に當所を立退、都山科にて再會し、胸中殘さず打明て、評義をしめん」といふ間もあらせず、次郎左衛門一間を立出、「ハテべん〳〵と長詮義。死骸片付たら、早く屋敷を明渡せ」と、いがみかゝれば郷右衛門、「アヽ成程お待兼。亡君所持の御道具、其外の武具馬具迄、よく〳〵改め請取られよ。サア由良助殿退散あれ」由「ヲヽ心得たり」と、しづ〳〵と立上り、御先祖代々、我々も代々、晝夜詰めたる館の内、今日を限りと思ふにぞ、名殘惜氣に見返り〳〵、御門外へ立出れば、御骸送り奉り、力彌矢間堀小寺追々に馳歸り、「扨は屋敷をお渡し有たか。此上は直義の討手

まげられ―窮まれ

り出せ。判官が所持の道具、俄浪人にまげられな」と、館の四方を睨廻し、一間の内へ入にける。御臺は「わつ」と聲を上、「扨も〳〵武士の身の上程悲しい物の有べきか。今夫の御最期に、云たい事は山々なれど、未練なと御上使のさげしみが恥しさに、今迄堪へて居たわいの。いとをしの有樣や」と、亡骸に抱付、前後も分かず泣給ふ。由「力彌參れ。御臺所諸共亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良助も跡より追付、葬々の規式取行はん。堀矢間小寺間其外の一家中、道の警固致されよ」と、詞の下より御乘物、手舁に舁きすへ戸を開き、皆立寄て御死骸、涙と倶に載奉り、しづ〳〵と舁上れば、御臺所は正躰なく、歎給ふを慰めて、諸士の面々我一と、御乘物に引添〳〵、御菩提所へと急行。人々御骸見送りて、座に著けば斧九太夫、「何大星殿、其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職。拙者迚も其右には座せ共、今日より浪人となり、妻子を養育む術なし、殿の貯置給ふ御用金を配分し、早く屋敷を渡さずば、藥師寺殿へ無禮ならん」千「イヤ千崎が存るには、指す敵の高師直、存命なるが我々が鬱憤。討手を引受此館を枕として」定「アヽこれ〳〵討死とは惡い了簡。親九太夫の申さるゝ通屋敷を渡し、金銀を分て取が上分別」と、評義の中に由良助、默然として居たりしが、由「只今の評定に、彌五郎の

何程か―下に本望に存じまするの句を略す

莽々―寂莫

計にどふど伏す。跡に續いて千崎矢間、其外の一家中、ばら〳〵と駈入たり。判「由良助待兼たはやい」由「ハア御存生の御尊顔を拜し、身に取て何程か」判「ヲヽ我も滿足〳〵。定めて子細聞たであろ。エヽ、無念口惜いはやい」由「委細承知仕る。此期に及び申上る詞もなし。只御最期の尋常を願はしう存まする」判「ヲヽいふにや及ぶ」と諸手を懸け、ぐつ〳〵と引廻し、苦しき息をほつとつき、「由良助此九寸五分は汝へ筐。我鬱憤を晴させよ」と、切先にて氣管刎切、血刀投出し俯伏に、どうど轉び息絶れば、御臺を始並居る家中、眼を閉ぢ息を詰、歯を喰しばり扣ゆれば、由良助にじり寄、刀取上押戴き、血に染る切先を打守り〳〵拳を握り、無念の涙はら〳〵〳〵、判官の末期の一句、五臟六腑にしみ渡り、扨こそ末世に大星が、忠臣義心の名を上し、根ざしは斯としられけり。薬師寺は突立上り、「判官がくたばるからは早々屋敷を明渡せ」石「イヤさはいはれな薬師寺。いはゞ一國一城の主。ヤ旁、莽々の規式取賄ひ、心靜に立退れよ。此石堂は檢使の役目、切腹を見屆たれば、此旨を言上せん。ナニ由良助殿、御愁傷察し入。用事あらば承はらん、必心置れな」と、並居る諸士に目禮し、悠々として立歸る。薬「此薬師寺も。死骸片付る其間、奥の間で休息せう。家來參れ」と呼出し、「家中共、がらくた道具、門前へほう

最後の一念云々
─盂蘭盆經の句

小袖、無紋の上下死裝束。皆々是はと驚けば、藥師寺は言句も出ず、顔膨らして閉口す。右馬之丞指寄て、「御心底察し入。則拙者檢視の役、心靜に御覺悟」判「ア、御深切忝し。刃傷に及びしより、斯あらんとは兼ての覺悟。恨むらくは館にて、加古川本藏に抱留られ、師直を討洩し、無念骨髓に通つて忘がたし。湊川にて楠正成、最期の一念に依つて生を引といひしごとく、生替り死替り、欝憤を晴さん」と、怒の聲と諸共に、お次の襖打叩き、一家中の者共、殿の御存生に御尊顔を拜したき願ひ、御前へ推參致さんや、鄕右衛門殿お取次」と、家中の聲々聞ゆれば、鄕右衛門御前に向ひ、「いかゞ計ひ候はん」判「フウ尤成願ひなれ共、由良助が參る迄無用〳〵」原「はつ」と計一間に向ひ、「聞るゝ通の御意なれば、一人も叶はぬ〳〵」諸士は返す詞もなく、一間もひつそと靜まりける。力彌御意を承はり、兼て用意の腹切刀、御前に直すれば、心靜に肩衣取退座を寛げ、判「コレ〳〵御檢使、御見屆下さるべし」と、三方引寄九寸五分押戴き、「力彌々々」「ハア」「由良助は」力「いまだ參上仕りませぬ」判「フウ、エ、存生に對面せで殘念。ハテ殘り多やな。是非に及ばぬ是迄」と、刀逆手に取直し、弓手に突立引廻す。御臺二目と見も遣らず、口に稱名目に涙、廊下の襖踏開き、駈込む大星由良助、主君の有樣見るよりも、「はつ」と

したが―併し

ぞべら〳〵―ぞろ〳〵

「役目なれば罷通る」と、會釋もなく上座に著ば、一間の内より鹽冶判官、徐々と立出、「是は〳〵御上使と有て石堂殿御苦勞千萬。先御盃の用意せよ。御上使の趣承はり、いづれもと一獻酌、積鬱をはらし申さん」藥「ヲヽ夫ようござろ、藥師寺もお間致さふ。したが上意を聞れたら、酒も咽へ通るまい」と、嘲笑へば右馬之丞、「我々今日、上使に立たる其趣、具に承知せられよ」と、懷中より御書取出し、押開けば判官も席を改め、承はる其文言、「此度鹽冶判官高定、私の宿意を以て、執事高師直を刃傷に及び、館を騷せし科によつて、國郡を沒收し、切腹申付る者也」聞よりはつと驚く御臺、並居る諸士も顔見合せ、呆果たる計なり。判官動ずる氣色もなく、「御上意の趣委細承知仕る。扨是からは各々の御苦勞休に、打寛いで御酒一つ」藥「コレ〳〵判官、默り召れ。其方が今度の科は、綱り首にも及ぶべき所、お上の慈悲を以て、切腹仰付らるゝを有がたう思ひ、早速用意もすべき筈。殊に以て切腹には定つた法の有物。夫に何ぞや、當世樣の長羽織、ぞべらぞべらとしらるゝは、酒興か但血迷ふたか。上使に立たる石堂殿、此藥師寺へぶ作法」と、きめつくればにつこと笑ひ、「此判官酒興もせず血迷ひもせぬ。今日上使と聞よりも、斯あらんと期したる故、兼ての覺悟見すべし」と、大小羽織を脱捨れば、下には用意の白

跡から兀る云々—上べのみの諂はすぐれ顯はれる

悋惜—吝嗇

似合ぬ、ぬらりくらりと跡から兀る正月詞。なぜとおいやれ。此度殿の御越度は、饗應の御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ、館を騒せし科、輕うて流罪、重うて切腹。自體又師直公に敵對は、殿の御不覺」と聞も敢へず鄕右衛門、「扨は其方、殿の流罪切腹を願はるゝか」九「イヤ願ひは致さねど、詞を飾らず眞實を申のじや。元をいへば鄕右衛門殿、こなたの悋惜しはざから發た事。金銀を以て頰をはりめさるれば、箇樣な事は出來申さぬ」と、己が心に引當て、欲面打消す鄕右衛門、「人に媚諂ふは侍でない、武士でない。なふ力彌殿、何とそふでは有まいか」と、詞の角を宥むる御臺、「二人共に爭ひ無用。今度夫の御難義なさる、元の發は此かほよ。日外鶴が岡で饗應の折柄、道しらずの師直、主の有自に無體な戀を云掛け、樣々と口說きしが、恥を與へ懲させんと、判官樣にも知らさず、歌の點に事寄、さよ衣の歌を書、恥ぢしめて遣つたれば、戀の叶はぬ意趣ばらしに判官樣に惡口。元來短氣なお生れ付、え堪忍なされぬは、お道理でないかいの」と、語り給へば鄕右衛門、力彌も倶に御主君の、御憤を察し入、心外面に顯はせり。「早御上使の御出」と、玄關廣間ひしめけば、奥へ斯くと通じさせ、御臺所も座をさがり、三人出向ふ間もなく、入來る上使は石堂右馬之丞、師直が昵近藥師寺次郎左衛門

おしつらひ—おわづらひの誤なるべし

鹽冶判官閑居によつて、扇が谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉、家中の外は出入を止め、事嚴重に見へにけり。かゝる折にも、花やかに奥は媚く女中の遊、御臺所かほよ御前御傍には大星力彌、殿のお氣を慰めんと、鎌倉山の八重九重、色々櫻花籠に、生らるゝ花よりも、生る人こそ花紅葉。柳の間の廊下を傳ひ、諸士頭原郷右衛門、跡に續いて斧九太夫、「是は〳〵力彌殿早い御出仕」力「イヤ某も國元より親共が参る迄、晝夜相詰罷在」原「それは御奇特千萬」と、郷右衛門兩手をつき、「今日殿の御機嫌は、如何お渡り遊ばさるゝ」と、申上ればかほよ御前、「ヲヽ二人共太義〳〵。此度は判官様お氣詰に思召し、おしつらひでも出よふかと、案じたとは格別、明暮築山の花盛御覽じて、御機嫌の能いお顔ばせ。それ故に自もお慰に指上ふと、名有櫻を取寄て見遣る通の花拵へ」原「アヽいか様にも仰の通、花は開く物なれば御門も開き、閉門を御赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何がなと存ずれど、斯様な事の思ひ付は、不重寶なる郷右衛門。ヤア肝心の事申上ん。今日御上使のお出と承はりしが、定て殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん。何と九太夫殿、そふは思召れぬか」九「ハヽヽヽ、コレ郷右衛門殿。此花といふ物も、當分人の目を悦ばす計、風が吹けば散失る。こなたの詞もまづ其ごとく、人の心を悦ばさふ迚、武士に

一羽—伴内を鳥と見立ていふ
ねぶか—葱
まつかせ—ヨシキタ
もんどり—トンボカヘリ
ばらさば—斬殺さば

知た事。サア腕廻せ連歸つてなぶり切。覺悟ひろげ」とひしめけば、「ヤアよい所へ鷺坂伴内。己一羽で喰足ねど、勘平が腕の細ねぶか、料理鹽梅喰ふて見よ」伴「イヤ物ないはすな家來共」「畏つた」と兩方より、「捕た」とかゝるを、勘「まつかせ」と搔潛り、兩手に兩腕捻上、はつし〳〵と蹴返せば、替つて切込切先を、刀の鞘にて丁ど受、廻つて來るを鐺と柄にて仰向に反し、四人一所に切かゝるを、右と左へ一時に、でんがく返しにばた〳〵と打据へられ、皆散々に行跡へ伴内いらつて切かくる。引外しそつ首握り、大地へどうどもんどり打せ、しつかと踏付、勘「サアどふせうとこつちの儘。突ふか切ふかなぶり殺し」と、振上る刀に縋て、カル「コレ〳〵其奴殺すとお詫の邪魔、もふよいわいな」と留る間に、足の下をばこそ〳〵と、尻に尾のない鷺坂は、命から〴〵迯て行。勘「エヱ殘念〳〵。去ながら、彼奴をばらさば不忠の不忠、一先夫婦が身を隱し、時節を待て願ふて見ん」最早明六つ東がしらむ横雲に、塒を離れ飛烏、かはい〳〵の女夫連、道は急げど跡へ引、主人の御身いかゞぞ、と案じ行こそ 三重 浮世なれ。

第四

在所―田舍

三寶、お屋敷へと走かゝつて、イヤ〳〵〳〵閉門ならば館へは猶歸られじ、と行つ戻りつ思案最中、腰元おかる道にてはぐれ、「ヤア勘平殿、樣子は殘らず聞ました。こりや何とせうどふせう」と、取付歎くを取て突退、勘「エヽめろ〳〵と吠頬、コリヤ勘平が武士は捨つたはやい。もふ是迄」と刀の柄、かる「コレ待て下されし。こりや狼狽へてか勘平殿」勘「ヲヲうろたへた。是が狼狽ずに居られふか。主人一生懸命の場にも有合さず、剰へ囚人同然の網乘物お屋敷は閉門、其家來は色に耽り御供に外れしと人中へ、兩腰指して出られふか。爰を放せ」かる「マヽヽ待て下さんせ。尤じや道理じやが、其狼狽武士には誰がした、皆わしが心から。死る道ならお前より、私が先へ死ねばならぬ。今お前が死だらば、誰が侍じやと譽まする。爰をとつくりと聞分て、私が親里へ一先來て下さんせ。父樣も母樣も在所でこそ有賴もしい人。もふかうなつた因果じや、と思ふて女房のいふ事も、聞て下され勘平殿」と、わつと計に泣沈む。勘「そふじや尤。そちは新參なれば委細の事は得知るまい。御家の執權大星由良助殿、未だ本國より歸られず。歸國を待てお詫せん。サア一時成共急がん」と、身拵へする所へ、鷺坂伴内家來引連駈出、伴「ヤア勘平汝が主人判官、師直樣へ慮外を働、かすり疵負し科によつて屋敷は閉門。追付首が飛は

網乗物－罪人の乗物

橋杭で鼻を打て、即座にびり〱〱〱と死ます。貴様も丁度鮒と同じ事。ハヽ〱ハヽ」と出放題。判官腹にすへ兼、「こりやこなた狂氣召さつたか。イヤ氣が違ふたか師直」師「シャ此奴武士を執へて氣違とは、出頭第一の高師直」判「ムヽすりや今の悪言は本性よな」師「くどい〱。又本性なりや如何する」判「ヲヽ斯様する」と拔討に、眞向へ切付る眉間の大疵。是はと沈む身のかはし、烏帽子の頭二つに切、又切かゝるを脱けつ潜りつ、迯廻る折もあれ、お次に扣へし本藏、走出て押留め、「コレ判官様御短慮」と、抱留る其隙に師直は、館をさしてこけつ轉びつ迯行ば、「己師直眞二つ。放せ本藏放しやれ」とせり合内、館も俄に騷出し、家中の諸武士大名小名、押へて刀もぎ取やら、師直を介抱やら、上を下へと 三重 立騷ぐ。表御門裏御門兩方打たる館の騷動、挑燈閃く大噪ぎ。早野勘平狼狽眼、走歸つて裏御門、砕けよ破よ、と打叩き大聲上、「鹽冶判官の御内早野勘平。主人の安否心元なし、爰明て給へ早く〱」と呼はつたり。門内よりも聲高々、「御用あらば表へ廻れ。爰は裏門」勘「成程裏門合點。表御門は家中の大勢、早馬にて寄付れず。喧嘩の樣子は何と〱」「喧嘩の次第相濟だ。出頭の師直樣へ慮外致せし科によつて、鹽冶判官は閉門仰付られ、網乗物にてたつた今歸られし」と聞より、ハア南無

あやかり物—仕合物

あちらの喧嘩—若狭助と師直との諍

打明し、と思ふ怒をさあらぬ顔、「判官殿、此歌御覧じたで御座らふ」判「イヤ只今見ました」師「ムヽ手前が讀のを。アヽ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるよ歌が是じや。つまならぬつまな重ねそ、アヽ貞女〱。ア其元はあやかり物、登城も遅なはる筈の事、内に計へばり付て御座るによつて、御前の方はお構ないじや」と、當こする雜言過言、あちらの喧嘩の門違とは、判官更に合點行ず、むつとせしが押鎭め、「ハヽハヽ〱是は〱、師直殿には御酒機嫌か。御酒參つたの」師「何時盛らしやつた、イヤ何時飲みました。御酒下されても呑いでも、勤る所は急度勤る。貴公は何故遅かつたの、御酒參つたか。イヤ内にへばり付てござつたか。貴殿より若狹助殿、アヽ格別勤られます。イヤ又其許の奥方は貞女といひ、御器量と申、手跡は見事、御自慢なされ。むつとなされな虚言はないはさ。今日御前にはお取込、手前迚も同然、其中へ鼻毛らしい、イヤ是は手前が奥が歌でござる。夫程内が大切なら御出御無用。總躰貴樣の樣な、内に計居る者を、井戸の鮒じやといふ譬が有、聞て置かしやれ。彼鮒めが僅三尺か四尺の井の内を、天にも地にも無い樣に思ふて、不斷外を見る事がない。所に彼井戸がへに釣瓶に付て上ります。夫を川へ放し遣ると、何が内に計居る奴じやによつて、悦んで途を失ひ、

御內寶―御內室

さなきだに云々―新古今不邪淫戒の歌にて同書にはさらぬだにとあり衣の褄と夫とかけたり

者、今において頰出しせぬ。主が主なれば家老で候とて、諸事に細心のつく奴が獨もない。いざ〳〵若狹助殿御前へ御供致そ、サア御立なされ。サアササア師直め誤つて居るぞ。コリヤ爰な粋め〳〵、粋樣め」若「イヤ若狹助最前から、ちと心惡うござる。マア先へ」師「何とした〳〵腹痛か。コレサ件內御背〳〵。御藥進じよかな」若「イヤ〳〵夫程にも御座らぬ」師「然らば少の內おくつろぎ。御前の首尾は我等がよい樣に申上る。件內一間へ御供申せ」と、主從寄てお輦に、迷惑ながら若狹助、是はと思へど是非なくも、奥の一間へ入ければ、「アヽもふ樂じや」と本藏は、天を拜し地を拜し。お次の間にぞ扣居る。程もあらさず鹽冶判官、御前へ通る長廊下、師直呼かけ、「遲し〳〵。何と心得て御座る。今日は正七つ時と、先刻から申渡したでないか」判「成程遲なはりしは不調法。去ながら、御前へ出るはまだ間もあらん」と、袂より文箱取出し、「最前手前の家來が、貴公へお渡し申くれよ、則奥かほよ方より參りし」と、渡せば受取、師「成程〳〵、イヤ其元の御內寶は扨々心懸が御座るは。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を賴と有、定て其事ならん」と押披き、「さなきだにおもきが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ねそ。ハア是は新古今の歌。此古歌に添削とは、ム、〳〵」と思案の內、我戀の叶はぬ驗、扨は夫に

旬にて朗詠集に倚松根而摩腰千年翠満手より出でたり

假令—幸

やくたい—たはいもない

付た、イザ腰掛で」と手を引合打連て行。脇能過て御樂屋に、鼓の調太鼓の音、天下泰平繁昌の、壽祝ふ直義公、御機嫌斜ならざりける。若狹助は兼て待師直遲しと御殿の内、奥を窺ふ長袴の、紐締括り氣配し、己師直眞二つと、刀のこゐ口息を詰、待共知らぬ師直主從遠目に見付、「是は〱若狹助殿、扨々お早い御登城。イヤハヤ我折ました。我等閉口〱。イヤ閉口序に貴殿に云譯致し、御詫申事が有」と、兩腰ぐはらりと投出し、「若狹助殿改めて申さねばならぬ一通。日外鶴が岡で、拙者が申た過言、ヲヽ御腹が立たで有ふ尤じやが、そこを御詫。其時はどふやらして詞の間違でつい申た。我等一生の麁忽、武士がコレ手を下る眞平〱。假令其元が物馴たお人なりやこそ、外々の狼狽者で見さつしやれ、此師直眞二つ怖や〱。有やうが其節貴殿の後影、手を合して拜ました。アハヽヽ、アヽ年寄とやくたい〱。年に免じて御免〱。是さ〱、武士が刀を投出し手を合す。是程に申のを聞入ぬ貴公でもないはさ。兎角幾重にも誤り〱。」作内倶々に御詫々々」と、金がいはする追從とは、夢にもしらぬ若狹助、力身し腕も拍子拔、今更拔にぬかれもせず、ねた刃合せし刀の手前、さし俯し思案顏、小柴の陰には本藏がまたゝきもせず守居る。師「ナニ作内、此鹽冶はなぜ遲い。若狹助殿とはきつい違ひ、扨々不行義

鯱踏云々―よき都合と忍び寄る形容鷺が鯱ふむわにかく

あた―罵聲

おけ古い―いつもいふ冗戲はおけとなり
はづんだ―せき込んだ

松根に倚つて云云―謠曲高砂の

エセはしない」と袖振切て行跡へ、鯱踏む足付鷺坂伴内、「何とおかる、戀の智恵は又格別。勘平めとせゝくつて居る所を、勘平々々旦那がお召と呼だは、きついかく〳〵。師直樣がそもじに頼たい事が有と仰しやる。我等はそさまにたつた一度。君よ〳〵」とだきつくを突飛し、かる「コレみだらな事遊ばすな。式作法のお家にゐながら狼藉千萬。あた不作法な、あた不行義」と突退れば、伴「夫は難面。暗がり紛につゐちよこ〳〵」と、手を取爭ふ其中に、「伴内樣〳〵師直樣の急御用。伴内樣〳〵」と、奴二人がうろ〳〵眼玉で、「是はしたり伴内樣、最前から師直樣が御尋。式作法のお家にゐながら、女を捕へてあた不行義な、あた不作法」と下部が口々、伴「エヽ同じ樣に何ぬかす」と、頬膨らして連立行。勘平跡へ入替り、「何と今の働見たか。伴内めが一ぱい喰ふてうせおつた。おれが來て旦那が呼しやるといふと、おけ古いとぬかすが面倒さに、奴共に酒呑せ、古いと云さぬ此術。ハヽ〳〵まんまと首尾は仕課せた」かる「サア其首尾序にな、ちよつと〳〵」と手を執ば、勘「ハテ扨はづんだ。マア待ちやいの」かる「何いはんすやら、何の待事が有ぞいなア。もふ頓て夜が明るわいな。是非に〳〵」に是非なくも、下地は好なり御意はよし、「夫でも爰は人出入」奥は謠の聲高砂、謠松根に倚つて腰を摩れば、「アノ謠で思ひ

播磨潟—謠曲高砂の句に張り上るをかく
所躰—身装
奇特帽子—奇特頭巾

しんどや—辛い

よいじや迄—迄は強辭にて意なし

の御殿は御馳走の、連謠の聲播磨がた、謠「高砂の浦に著にけり〳〵。謠ふ聲々門外へ、風が持來る柳蔭、其柳より風俗は、負けぬ所躰の十八九。松の緑の細眉も、堅い屋敷に物馴し、奇特帽子の後帶、供の奴が提灯は、鹽冶が家の紋所、御門前に立休らひ、女「コレ奴殿、頓てもふ夜も明る。此方衆は門内へは叶はぬ、爰から往んで休んでや」と、詞に隨ひ、奴「ナイ〳〵」と、供の下部は歸りける。内を覗いて「勘平殿は何してぞ、どふぞ逢たい用が有」と見廻す折から後影ちらと見付、勘「おかるじやないか」かる「勘平樣、逢たかつたにようこそ〳〵」勘「ムヽ合點の行ぬ夜中といひ、供をも連ず只一人」かる「さいなお、爰迄送りし供の奴は先へ歸した。わたし獨殘りしは、奥樣からのお使、どふぞ勘平に逢て此文箱、判官樣のお手に渡し、お慮外ながら此返歌を、御前のお手から直に師直樣へ、お渡しなされ下さりませと傳へよ、併しお取込の中、間違ふまい物でなし、マア今宵はよしにせう、とのお詞。わたしはお前に逢たい望、何の此歌の一首や二首、御届なさるる程の間の無い事は有まい、とつる一走に走て來た。アヽしんどや」と吐息つく。「然らば此文箱、旦那の手から師直樣へ渡せば宜いじや迄。どりや渡して來ふ待て居い」と、いふ中に門内より、「勘平〳〵判官樣が召まする。勘平〳〵」勘「ハイ〳〵只今それへ、

倍臣—陪臣

金で頬張る云々—本藏は金で若狹助の命をとりとめる

白鼠—忠臣

無禮。エヽ式作法を教ふるも、こんな折にはとんと困る。ナニ物じやは、イヤハヤ本藏殿、何の師範致す程の事もないが、兎角マア若狹助殿は器用者、師範の拙者及ばぬ〳〵。コリヤ伴内進物共皆取納め。エヽ不行儀な、途中で御茶さへ得進ぜぬ」と、手の裏返す挨拶に本藏が胸算用、仕て遣つたりと猶も手をつき、「最早七つの刻限早お暇。殊に今日は猶公の御座敷。彌主人の義御引廻し頼存る」と、立んとする袂を控へ、師「ハテ忝いわいの。貴殿も今日の御座敷の座次の拜見なされぬか」本「イヤ倍臣の某御前の恐」師「大事ない〳〵、此師直が同道するに、誰がくつといふ者無い。殊に又若狹助殿も、何ぞれかぞれ小用の有物、平に〳〵」と、勸められ、「然らば御供仕らん。御意を背は却つて無禮。先お先へ」と跡に付、金で頬張る算用に、主人の命も買て取る、二一天作算盤の桁を違ぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の、道は一筋眞直に、打連御門に入にける。程もあらさず入來るは、鹽冶判官高定。是も家來を殘し置、乘物道に立させ、譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の新袴、ざは〳〵ざはつく御門前、「鹽冶判官高定登城成」と音なひける。門番罷出、「先程桃井樣御登城遊ばされ御尋。只今又師直樣御越にて御尋。早御入」と相述る。判「ナニ勘平最早皆々御入とや。遲なはりし殘念」と、勘平一人御供にて、御前へこそは急ぎ行。奥

手ぐすね引て―待ちかまへて

左少―些少

悼入―痛入

ぬかるな。七ッにはまだ間もあらん、是へ呼出せ仕廻てくれん」隼「成程〳〵家來共氣を配れ」と、主從刀の目釘を濕し、手ぐすね引て待掛居る。詞に隨ひ加古川本藏、衣紋繕ひ悠々と打通り、下部に持せし進物共、師直が目通に並べさせ、遙下つて蹲る。本「ハア憚りながら師直樣へ申上奉る。此度主人若狹助、尊氏將軍より御大役仰付られ下さる段、武士の面目、身に餘る仕合。若輩の若狹助、何の作法も覺束なく、いかゞあらんと存る所に、師直樣萬事御師範を遊ばされ、諸事を御引廻し下され候故、首尾能御用相勤るも全主人が手柄にあらず、皆師直樣の御執成と、主人を始奧方一家中我々迄も、大慶此上や候べき。さるによつて近比左少の至に候へ共、右御禮の爲一家中よりの送り物、お受遊ばされ下さらば、生前の面目一入願ひ奉る。則目錄御取次」と、伴内に指出せば、不思議そふに密と取押開き、伴「目錄一ッ卷物卅本黃金三十枚若狹助奧方、一ッ黃金二十枚家老加古川本藏、同十枚番頭、同十枚侍中。右の通」と讀上ぐれば、師直明た口閉がれもせずうつとりと、主從顏を見合せて氣拔の樣にきよろりつと、祭の延た六月の晦日見るが如くにて、手持不沙汰に見へにける。俄に詞改て、師「是は〳〵悼入たる仕合。伴内こりやどふした物。ハテ扨々、ハア御辭宜申さばお志背くといひ、第一は大きな

花色云々ー縹色にて家の紋を大きくしたる布製の直垂
召おろしーお古頂戴
とつぱさつぱ云云ー大さうに振舞へど
狗を云々ー謎方なき謎
腹の皮ー笑ふ事
こまつけー手なづけ

模様の大紋に、胸に我慢の立烏帽子、家來共を役所々々に殘し置、下部僅に先を拂はせ、主の威光の召おろし、鶴の眞似する鷺坂伴内、肩臂いからし、伴「申お旦那、今日の御前表も上首尾〱。鹽冶で候の、イヤ桃井で候のと、日比はとつぱさつぱとどしめけど、行儀作法は狗を、家根へ上げた樣で、さりとは〱腹の皮。イヤ夫に付兼々鹽冶が妻かほよ御前、いまだ殿へ御返事致さぬ由、お氣にはさへられな、器量はよけれど氣が叶はぬ。何の鹽冶輩と、當時出頭の師直樣と」師「ヤイ〱聲高に口利な。主有かほよ、度々歌の師範に事寄、口說け共今に叶ぬ。則彼が召使、かるといふ婉新參と聞、彼奴をこま付て賴で見ん。扨まだ肩が有。かほよが誠にいやならば、夫鹽冶に子細をぐはらり打明る所を云ぬは樂」と、四足門の片陰に、主從點頭咄し合ふ折もあれ、見附に扣へし侍遽しく走出、「我々見附のお腰掛に控へし所へ、桃井若狹助家來加古川本藏、師直樣へ直にお目にかゝらん爲、早馬にてお屋敷へ參つたれ共早御登城、是非御意得奉らん、と家來も大勢召連たる躰、如何計ひ申さんや」と、聞より伴内騷出し、「今日御用の有師直樣へ、直に對面とは推參なり。某直談」と走行を「待々伴内子細は知た。一昨日鶴が岡にての意趣晴し、我手を出さず本藏めに云付け、此師直が威光の鼻を挫がん爲ハヽヽ伴内

んとりゝし氣に、一御庭に引出せば、椽よりひらりと打乘て、「師直の館迄續けや續け」と乘出す、轡に縋つてとなせ小浪、「コレ〳〵何處へ。始終の樣子は聞ました。年にこそよれ本藏殿、主人に御異見も申さず、合點行ぬ留ます」と、母と娘がぶら〳〵、轡に縋り留むれば、本「ヤア小差出た。主人のお命御家の爲思ふ故に此時宜。必此事殿へ御沙汰致すな。お耳へ入たら娘は勘當、となせは夫婦の緣を切。家來共道にて諸事を云付ん。其處退け兩人」二人「イヤ〳〵」本「シヤ面倒な」と鐙の端、一當はつしと當られて、うんと計に仰向に反を見向もせず、「家來續け」と馬煙、追立打立力足踏立てこそ 三重 駈り行。

第三

足利左兵衛督直義公、關八州の官領と新に建し御殿の結構、大名小名美麗を餝る公裝束、鎌倉山の星月夜と、袖を列ぬる御馳走に、お能役者は裏門口、表御門はお客人御饗應の役人衆、正七つ時の御登城、武家の威光ぞ耀きける。西の御門の見付の方、「ハイハイ〳〵」といかめしく、挑燈照し入來るは、武藏守高師直、權威を顯はす鼻高く、花色

さみする―輕蔑する

除けて通す―人に一歩を讓る

かたし片手云々―草履片一方にて小刀の切味の鈍りしを硏ぎ直す

さつぱりと遊ばせ―師直を此松ケ枝の如くスッパリと斷り給へ

股立云々―家來が股立取て勇ましく

目弓矢神への恐れ。戰場にて討死はせず共、師直一人討て捨れば天下の爲、家の恥辱には替へられぬ。必々短氣故に身を果す若狹助、猪武者よ狼狽者と、世の人口を思ふ故、汝にとつくと打明す」と、思込だる無念の涙、五臟を貫く思ひなる。横手を拍つて本「したりしたり、ムヽ能う譯を仰しやつた、能う御了簡なされた。此本藏なら今迄了簡はならぬ所」若「ヤイ本藏、ナヽ何と云た。今迄はよう了簡した堪忍したとは、わりや此若狹助をさみするか」「是はお詞とも覺へず。冬は日陰夏は日面、除けて通れば門中にて、行違の喧嘩口論ないと申は町人の譬、武士の家では杓子定規。除けて通せばはうづがない、と申のが本藏めが誤りか。御詞さみ致さぬ心底、御覽に入ん」と御傍の、小刀抜より早く書院成、召替草履かたし片手の早ねた刃、とつくと合せ椽先の松の片枝、すつぱと切て手ばしかく鞘に納め、「サア殿、先此通にさつぱりと遊ばせ〳〵」若「言ふにや及ぶ。人や聞」と邊に氣を付、本「今夜はまだ九つ、くつたりと一休。枕時計の目覺本藏めが仕掛置。早く〳〵」若「ヲヽ聞入有て滿足せり。奥にも逢て余所ながらの暇乞。モウ逢ぬぞよ本藏。さらば〳〵」と云捨てゝ奥の一間に入給ふ、武士の意氣地は是非もなし。御後影見送り〳〵、勝手口へ走出、本「本藏が家來共、馬引早く」といふ間もなく、股立しや

金打—武士の互に誓ふ時に刀と刀を合す

官領—管領

勝に乗て—つけ上つて

思はん—思はぬ

ば、にじり寄、若「本藏、今此若狹助が云出す一言、何に寄ず畏り奉ると、二言を返さぬ誓言聞ふ」本「ハア是は〳〵改まつた御詞、畏り入奉るでは御座れ共」若「武士の誓言はならぬといふのか」本「イヤ左にあらず。先委細とつくと承はり」若「子細を云はせ跡で異見か」本「イヤ夫は」若「詞を背くか。サア何と」本「ハッはつ」と計指うつむき暫く詞なかりしが、胸を極めて指添拔、片手に刀拔出し、てう〳〵と金打し、本「本藏が心底斯の通り、留めも致さず他言もせぬ、先思召の一通、お急きなされずと、本藏めが胃の腑に落付様に、とつくりと承はらん」と相述る。若「ム、一通り語つて聞せん。此度官領足利左兵衛督直義公、鶴が岡造營故、此鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽冶判官、某兩人承はる所に、尊氏將軍よりの仰にて、高師直を御添人、萬事彼が下知に任せ御馳走申上よ、年配といひ諸事物馴れたる侍、と御意に隨ひ勝に乘て、日比の我儘十倍增、都の諸武士並居る中、若年の某を見込雜言過言。眞二つにと思へ共、お上の仰を憚り、堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早了簡ならず、御前にて恥面かゝせる武士の意路。其上にて討て捨る。必留るな。日比某を短慮成と、奧を始其方が異見、幾度か胸にとつくと合點なれ共、無念重る武士の性根、家の斷絕奧が歎、思はんにては無けれ共、刀の役

つて下さりませ」と、摺寄ば身を控へ、力「ハア是は〳〵不作法千萬。惣じて口上受取渡しは、行義作法第一」と、疊を下り手をつかへ、「主人鹽冶判官より若狹助樣への御口上。明日は管領直義公へ、未明より相詰申筈の所、定めて御客人も早々にお出あらん、然れば判官若狹助兩人は、正七つ時に急度御前へ相詰よ、と師直樣より御仰。萬事間違のなき樣に、今一應御使者に參れ、と主人判官申付候故右の仕合。此通若狹助樣へ御申上下さるべし」と、水を流せる口上に、小浪はうつかり顏見とれ、とかふ諾もなかりけり。

「ヲヽ聞たく〳〵、使太義」と若狹助、一間より立出、「昨日お別れ申てより、判官殿間違て御目にかゝらず。成程正七つ時に貴意得奉らん、委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千萬と、宜しく申傳へてくれられよ。御使者太義」力「然らば御暇申上ん。ナニ御取次の女中御苦勞」と、徐々立て見向もせず、衣紋繕ひ立歸る。本藏一間より立代り、「ハア殿是に御入。彌明朝は、正七つ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九つ、暫御間睡遊ばされよ」若「成程〳〵。イヤ何本藏、其方に少用事有密々の事、小浪を奥へ〳〵」本「ハアコリヤ〳〵娘、用事あらば手を打う。奥へ〳〵」と娘を追遣り、合點の行ぬ主人の顏色と、御傍へ立寄、「先程よりお伺ひ申さんと存ぜし所、委細具に御仰下さるべし」と指寄

アイタ―逢たいにかく
逢ひたかろう―家老にかく

にと有そな所を、となせにとは、母が心とはきつい違ひ。其許も又力彌殿の顔も見たかろ、逢たかろ。母に代つて出向かやや。いやか〳〵」と問返せば、あい共いや共返答は、赤らむ顔のおほこさよ。母は娘の心を汲、「アイタ丶、娘背を押てたも」小浪「是は何と遊ばせし」と、狼狽へ騒げば、母「イヤなふ、今朝からの心遣ひ、又持病の積が指込だ。是ではどふも御使者に逢れぬ。アイタ丶、娘太義ながら御口上も受取、御馳走も申てたも。したが御主と持病には勝れぬ〳〵」と、そろ〳〵と立上り、「娘や隨分御馳走申しやや。したが餘り馳走過、大事の口上忘れまいぞ。私も聟殿にアイタ丶」逢ひたからうの奥樣は、氣を通してぞ奥へ行。小浪は御跡伏拜み〳〵忝い母樣、日比戀し床しい力彌樣、逢はどふいを、かういをと、娘心のどき〳〵と、胸に小浪を打寄る、疊ざはりも故實を糺し、入來る大星力彌、まだ十七の角髮や、二つ巴の定紋に、大小立派爽に、道大星由良助が子息と見へし其器量、徐々と座に直り、力「誰お取次頼奉る」と、慇懃に相述る。小浪ははつと手をつかへ、じつと見交す顔と顔、互の胸に戀人と、物も得云はぬ赤面は、梅と櫻の花相撲に、枕の行司なかりけり。小浪漸々胸押鎭め、「是は〳〵御苦勞千萬に能ふこそお出。只今の御口上受取役は私。御口上の趣を、御前の口から私が口へ、直に仰しや

口癖—下に取上るに足らずの語を入れて見るべし

べしてもない—格別の事でもない

本藏殿、先程御前の御物語、昨日小浪が鶴が岡へ御代參の歸るさ、殿若狹助樣高師直殿、詞爭ひ遊ばせしとの御噂、誰が言ふとなくお耳に入、それは〳〵きつい御案じ。夫本藏子細委しく知ながら、自に隱すのかやと御尋遊ばす故、小浪に樣子を尋ぬれば、是も私と同じ事、何にも樣子は存ませぬとのお返事。御病氣の障お家の恥に成事なら」本「アヽこれ〳〵となせ、夫程のお返事なぜ取繕うて申上ぬ。主人は生得御短慮なるお生れ付。何の詞諍ひなどとは、女わらべの口癖。一言半句にても、舌三寸の誤りより身を果すが刀の役目。武士の妻でないか、それ程の事に氣が付ぬか、嗜めさ〳〵。ナニ娘、そちは又御代參の道すがら、左樣の噂はなかりしか、但有たか。ナニ無い。チヽ其筈々々、ハヽヽヽなんのべしてもない事を。よし〳〵奥方の御心休め、直に御目にかからん」と、立上る折こそあれ、當番の役人罷出、「大星由良助樣の御子息、大星力彌樣御出なり」と申上る。本「ムヽ御客御馳走の申合せ、判官殿よりのお使ならん。此方へ通せ。コレとなせ其方は御口上受取、殿へ其通り申上られよ。御使者は力彌、娘小浪と云號の聟殿、御馳走申しやれ。先奥方へ御對面」と云捨、一間に入にける。となせは娘を傍近く、「なふ小浪、父樣の堅くろしいは常なれど、今仰しやつた御口上、請取役は其方

ため付—身装を繕ふ
でつかちない—大きい
胴を取—博奕打の元方をする
さがなき—祥をきれてよくない
ほんさう—奔走子にて大切な一人娘
御前—若狹助の奥方

空も彌生の黄昏時、桃井若狹助安近の、館の行義はき掃除、御庭の松も幾千代を、守る館の執權職、加古川本藏行國、年も五十の分別盛、上下ため付書院先、歩行來るとも白洲の下人、可「ナント關内、此間は御上には、でつかちないお拵。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社參、おびたゞしいお物入。アヽ其銀の入目が欲い。其銀が有たら此可介、名を改めて樂しむになア」關「何じや、名を改めて樂しむとは珍らしい。そりや又何と替る」可「ハテ角助と改めて、胴を取て見る氣」關「ナニばかつ面な。わりや知らないか。昨日鶴が岡で、是の旦那若狹助樣、いかふ不首尾で有たげな。子細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定て又無理をぬかして、御旦那をやりこめおつたであろ」と、さがなき口々、本「ヤイ〳〵、何をざは〳〵と喧しいお上の取沙汰。殊に御前の御病氣、お家の恥辱に成こと有ば、此本藏聞流し置べきや。禍は下部の嗜、掃除の役目仕廻たら、皆往け〳〵」と和らかに、女小性が持出る、煙草輪をふく雲をふく、廊下音なふ衣の香や、本藏がほんさうの一人娘の小浪御寮、母のとなせ諸共に、しとやかに立出れば、本「是は〳〵兩人とも、御前の御伽は申さいで、自身の遊か不行義千萬」「イエ〳〵今日は、御前樣殊の外の御機嫌。今すや〳〵と御休。夫でナア母樣」となせ「イヤ申

涙ーなしにかく

いはれぬ出過ーいらぬ出過ぎた詞

五器提ふー椀提るにて乞食になるをいふ

詞の先手ー詞の先に先手のもの

た一つ、何とそふでは有まいか」と、聞にかほよが返答も、涙ぐみたる計なり。折から來合す若狹助、例の非道と見て取氣轉。若「かほよ殿まだ退出なされぬか。御暇出て隙取るは、却て上への恐れ。早お歸り」と追立れば、彼奴扨はけどりし、と弱味を喰はぬ高師直、「ヤア又してもいはれぬ出過、立て能ければ身が立す。此度の御役目、首尾能う勤させくれよと、鹽冶が内證かほよの頼。そふなくて叶はぬ筈。大名でさへあの通。小身者に捨知行誰が影で取する。師直が口一つで、五器提ふも知れぬあぶない身代。夫でも武士と思ふじや迄」と、邪魔の返報憎體口。くはつとせき立若狹助、刀の鯉口碎る程、握り詰は詰たれ共、神前なり御前なりと一旦の堪忍も、今一言が生死の、詞の先手還御ぞと御先を拂ふ聲々に、詮方なくも期を延す、無念は胸に忘られず、惡事悖て運強く、切れぬ高師直を、翌の我身の敵共、知らぬ鹽冶が跡押へ。直義公は悠々と、歩御成給ふ御威勢、人の兜の龍頭、御藏に入る數々も、四十七字のいろは分、假名の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ、國の掟ぞ 三重 久方の。

第二

五枚兜―錣五枚つきの龍頭ある兜

段かづら―石段路

つきはなく―極惡く

吉田の兼好云々―兼好師直の爲に艶書を書きし事太平記に見ゆ

武藏鐙―武藏守を仄めかす伊勢物語の訪へばいふ訪はねば恨む武藏鐙かゝる折にや人は死ぬらんの歌による

はしたなう―不遠慮に

手に觸れ―戀人の手にふれ

にも、五枚兜の龍頭、是ぞと云はぬ其内に、ぱつと薫りし名香は、「かほよが馴し義貞の兜にて御座候」と指出せば、左樣ならめ、と一決し、直「鹽冶桃井兩人は、寶藏に納むべし、此方へ來れ」と御座を立、かほよに御暇給はりて、段かづらを過給へば、鹽冶桃井兩人も、打連れてこそ入にける。跡にかほよはつきはなく、「師直樣は今暫し、御苦勞ながら御役目を、御仕舞有て御靜に。御暇の出た此かほよ、長居は恐れおさらば」と、立上る袖摺寄てじつと扣へ、師「コレまあお待待給へ。今日の御用仕舞次第、其元へ推參して、御目にかける物が有。幸の能い所、召出された直義公は我爲の結の神。御存の如く我等歌道に心を寄、吉田の兼好を師範と賴日々の狀通、其元へ屆くれよと問合の此書狀。いかにもとのお返事は、口上でも苦しうない」と、袂から袂へ入るゝ結び文、顔に似合ぬ參る、武藏鐙と書たるを、見るよりはつと思へ共、はしたなう恥しめては、かへつて夫の名の出る事、持歸つて夫に見せふか、いや〳〵夫では鹽冶殿、憎しと思ふ心から、怪我過にもならふか、と物をもいはず投返す。人に見せじと手に取上、師「戻すさへ手に觸れたりと思ふにぞ、我文ながら捨も置れず。くどうは云ぬよい返事聞迄は、口說いて口說いて口說き拔、天下を立ふと伏ふ共儘な師直、鹽冶を生ふと殺そふ共、かほよの心たつ

本阿彌—目利役、本阿彌は刀劍鑑定の名家

蘭奢待—奈良正倉院にありといふ名香

海老鎖—海老の如く屈むと海老型の錠

とつぱい頭—兜の鉢

指物—鎧の背部にさす目標の小旗

の御內室かほよ殿、最前より嘸待遠。御太義〳〵。御前の御召近ふ〳〵」と取持顏。直義御覽じ「召出す事外ならず。往元弘の亂に、後醍醐帝都にて召れし兜を、義貞に給はつたれば、最期の時に著つらん事、疑ひはなけれ共、其兜を誰有て、見しる人外になし。其比は鹽冶が妻、十二の內侍の其內にて、兵庫司の女官なりと聞及ぶ。嘸見知あらんず。覺あらば兜の本阿彌、目利々々」と女には、嚴命さへも和らかに、お受申も又婦か、「冥加に余る君の仰。夫こそは私が明暮手馴し御著の兜。義貞殿拜領にて、蘭奢待といふ名香を添て給はる 御取次は則かほよ。其時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、此蘭奢待を思ふ儘、內兜に炷しめ著ならば、鬢の髮に香を留て、名香かほる首取しといふ者あらば 義貞が最期と思召れよとの、詞はよもや違ふまじ」と、申上たる口元に、下心有師直は、小鼻いからし聞居たる。直義くはしく聞し召し、「ヲヽ詳成かほよが返答。さあらんと思ひし故、落散たる兜四十七、此唐櫃に入置たり。見分させよ」と御上意の下侍、屈むる腰の海老鎖を、明る間遲しと取出すを、おめず臆せず立寄て、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜、とつぱい頭獅子頭、扨指物は家々の、流義流義に寄るぞかし。或は直平筋兜、錣のなきは弓の爲、其主々の好迚、數々多き其中

新田に云々—新田に一味せるものの討漏されしもの

杭共云々—人を人とも思はぬ

襠云々—婦人の禮服にて帯したる上に著る長き衣服なれば引摺る故庭掃くといひ掃くの縁語に玉箒と續けたり

にも打置れず、當社の御藏に納る條、其心得有べしとの嚴命なり」と宣へば、武藏守承り、「是は思ひも寄ざる御事。新田が清和の末なり迚、著せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらも有。奉納の義然るべからず候」と、遠慮なく言上す。若「イヤ左樣にては候まじ。此若狹助が存るは、是は全く尊氏公の御計略、新田に徒黨の討洩され、御仁德を感心し、攻ずして降參さする御方便と存奉れば、無用との御評義卒爾なり」と、云はせも果ず、師「イヤア師直に向つて、卒爾とは出過たり。義貞討死したる時は大わらは、死骸の傍に落散たる兜の數は四十七、どれがどふ共見しらぬ兜、そふで有ふと思ふのを、奉納した其跡で、そふでなければ大きな恥。生若輩な形をして、御尋もなき評義、すつこんで御居やれ」と、御前能きまゝ出る儘に、杭共思はぬ詞の大槌、打込れて迫立色目、鹽冶引取て、「コハ御尤成御評義ながら、桃井殿の申さるゝも治る代の軍法、是以て捨られず。双方全き直義公の御賢慮仰奉る」と、申上れば御機嫌有、直「ホヽさ言はんと思ひし故、所存有て鹽冶が婦妻を召連よと云付し。是へ招け」と有ければ、はつと答て程もなく、馬場の白砂素足にて、裾で庭掃く襠は、神の御前の玉箒、玉も欺く薄化粧、鹽冶が妻のかほよ御前、遙下つて畏る。女好の師直其儘聲かけ、「鹽冶殿

假名手本忠臣藏

第一

嘉肴ありと云々—雖レ有二嘉肴一弗レ食不レ知二其旨一、雖レ有二至道一不レ學不レ知二其善一と禮記にあつて太平の世には穿鑿せざれば忠臣顯はれずとなり
譬—たとへ、たとへばと兩方にかけたり
羽をのす—羽は鶴の縁語威を振ふこと

嘉肴有といへども食せざれば其味をしらずとは、國治てよき武士の、忠も武勇も隱るゝに、譬ば星の晝見へず、夜は亂れて顯はるゝ、例を爰に假名書の、太平の代の政、比は曆應元年二月下旬、足利將軍尊氏公、新田義貞を討亡し、京都に御所を構、德風四方に普く、萬民草の如くにて靡從ふ御威勢、國に羽をのす鶴が岡、八幡宮御造營成就し、御代參として御舍弟足利左兵衞督直義公、鎌倉に下著なりければ、在鎌倉の執事高武藏守師直、御膝元に人を見下す權柄眼。御馳走の役人は、桃井播磨守が弟若狹助安近、伯州の城主鹽冶判官高定、馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰むる。直義仰出さるゝは、「いかに師直、此唐櫃に入置しは、兄尊氏に亡されし新田義貞、後醍醐の天皇より給はつて著せし兜。敵ながらも義貞は淸和源氏の嫡流、著捨の兜といひながら、其儘

り、「ホウ平家追討の院宣も、朝方が所爲と聞。彼奴を殺すが一門への云譯」と、云より早く首打落し、「サア〳〵義經、教經が首取」と、云せも果ず、「ヤア能登守教經は、八島の沖にて入水せり。横川の覺範が首は忠信に」と、仰の中に振り上て、兄の敵を討納め、打治つたる君が代に、奥州へ行、小原へ行。平家の一類討亡ぼし、四海太平民安全、五穀豐饒の時を得て、穗に穗榮ゆる秋津國、繁昌ならびなかりけり。

高紐―鎧の綿がみに著くる紐
鞦韆―ブランコ
ずつかり―すつぱり

はや高紐總角が、枝にかゝつてぶら〳〵〳〵、稚遊に鞦韆の、戯れなんど見るごとく、身動きならぬを忠信が、切付るを身を背け、くるりと廻れば枝ずつかり、切放されしは天命に、盡ぬ所と大手をひろげ、かゝる相手も太刀投捨て、互にゑいやと引組だり。こりや〳〵〳〵と忠信が、毘沙門腰にて押かくれば、ひらりと外してどつこいと、踏とまつたる魔利支天、雪踏ちらして爭ひしが、何とか仕けん忠信が、組だる小手先もぎ放され、又組寄らんとする所を、ぐつと摑かつぱと投、膝に引敷折こそ有、不思議や又も駈けくる忠信、のつかゝつたる覺範が、具足の隙間をてうど切。きられて怯まず振返り、見るより悔り、「コリヤ忠信、こいつ何じや」と引しいたる、高紐摑んで引上れば、忠信ならぬ義經の御著長の鎧計。「是は」と呆るゝ虚を窺ひ、切付〳〵切付る、深手にさしもの能登守、「サア寄て首取」と、云より早く義經公、駈付給ひ、「いかに教經、安德帝は小原の里にて御出家遂、御母君の御弟子とせん。適名高き教經なれ共、通力自在の源九郎狐、忠信に力を添たる鎧、軍術にも裏かゝず」と、仰もあへぬ出合頭、河越太郎重賴、左大將朝方を高手に縛しめ、「久しう候義經公。給はる鼓に事を寄、賴朝追討の院宣と號しは、朝方が業と事顯はれ、義經に計はせよと、綸命を請て參つたり」と、聞より教經座を立上

ていからーー打合ふ太刀音

長刀の薙手、打手に事共せず、右にかゝれば左へ踊り、左りに乗んと取直す、白刃鎗ていから〱、唐紅の緋縅や、互に勝色分ざりしに、覺範頻に打かくれば、ひらりと飛で大木の、櫻の梢に身をたもつ。追取直して櫻の木、はすにすつかと切かけて、足に任せて踏放せば、木はめり〱〱と中絶し、向ふの岸に忠信が、木におくられて渡り越、跡は架橋丸木橋、是究竟と踏しめ〱、渡る不敵の勇猛將、過つて踏止めし、足場すべつて谷底へ、落れど落ちず諸足に、枝をまとふて眞逆樣、只一刀と討かくる、四郎兵衛が太刀先を、拂ふ長刀水車、草摺の音鍔の音、ちりゝんはた〱、しつてう〱、寶目覺しき働なり。追散らされし鎌倉勢、忠信遣らぬと取てかへし、又ばら〱と討かゝるを、南無三寳邪魔と渡りあひ、打合ふ隙に覺範が、櫻にかけし諸足を、切んとかゝれば木を放れ、落るを見捨て鎌倉勢、鏖にと追て行。谷には教經手練の早足、ひるまず巖に長刀を、突立々々駈上れど、雪に凍たる土砕け、氷柱に岩石滑らかに、上れば滑りすべつても、岨の梅が枝足代に、半上りし岩の上、鎌倉勢を追ちらし、弓手の方へかけ來る佐藤忠信、覺範爰へと招かれて、上るに隙のあらし遲し、忠信それへと云捨て、さしもに高き頂上より、ふはと飛だは飛鳥より、遙に輕き其勢ひ、我もと覺範つゞいて飛び、あ

横川―よくにかく

けしとまず―躓かず

はつたり。右往左往に取巻たる、讒者一味の鎌倉勢、聲々に、「ヤア主従とは事をかし。主か主で有ざるか、討取て見せ付ん。かゝれやかゝれ」と、一面に打てかゝるを事共せず、右へ薙立左へ拂ひ、切立々々切立れば、「一先引」と鎌倉勢、迯るをやらじと岨道を、足に任せて追かくる。平家の大將能登守、忠信に出合んと、約束違へぬ衆徒頭巾、形も横川の覺範を、人はそれともしら雪を、踏ならしてぞ歩くる。山端岩角けしとまず、追ちらして立歸る佐藤忠信、兼て期したる約束の、敵は向ふに待かけたり。鎌倉勢のかへさぬ中に、名乘合して勝負せんと、立寄る相手をにつこりと、笑ふて待たる勇將義士、互に招かれ招き合、忠「去年三月八島の磯にて、大將軍の御馬の先に立塞り、忠心に矢を請とめたる佐藤三郎兵衛次信が弟、四郎兵衛忠信、兄の敵平家の大將能登守教經、恨の刃參らする」とぞ名乘ける。教「ヲヽしほらしや忠信、兄の敵と名のるからは、討れてやるが本意なれ共、安徳帝を守奉り、再び天下を覆す教經。不便ながら返り打、冥途で兄に云譯せよ。横川の禪師覺範が、引導してくれんず」と、長刀杖につき反し、かんらからとぞ打笑ふ。詞たゝかひ終つて後、眞向かざしに忠信が、討てかゝる大太刀を、かはしてはた〳〵はつしとあふ。ひつぱづして忠信が、切身に入たる太刀先を、もどいて拂ふ

君々たれど云々—君雖レ不レ君、臣不レ可三以不二レ臣

布衣—大衣の衣物、本意にかく

義といふ字云々—源九郎義經と源九郎きつね

思ひしづむるとは、目にこそ見へね君の守護。「さらばよ義經。去にても、帝のお命助たる情の禮には、教經共能登守共、名乘ては敵對ぬが我返報。再會の名は横川の覺範、吉野山にて忠信に出くはして勝負せん。互の命は其時々々」謡行幸成ぞ雜人原、路次の警固と呼はつて、又抱上る安德帝、君々たれど君たらず、臣々たれど臣たらぬ、横川の覺範供奉の役、敵々ながら義經が、警蹕の聲高々と威義有意趣有情有、河連法眼先驅の役、駿河の仕丁、龜井の六位、官人ならぬ堪忍の、二字を守つてひかゆれど、布衣なさ余つて鯉口の、くつろぐ光り銀魚袋、供奉は門前人目有、赦させ給へと敬つて、頭はさげても顏と顏、睨んで別るゝ兩大將、源九郎義經の、義といふ字を訓と音、源九郎義經附添し　大和言葉の物語其名は高く聞へける。

第五

謡山々は皆白妙に白雪の、梢するどき氣色かな。佐藤忠信大音上、「淸和天皇の後胤檢非違使五位の尉　源の義經なり。兄賴朝が家來の汝等、現在我に敵するは主に刃向ふ無道人。天狗に習ひし妙術にて、一々に蹴殺して、谷の水屑としてくれん。觀念せよ」と呼

ぐの手―ぐ字なりに

いとはぬかさいで、迯るなどとは案外千萬。供奉の穢れ思はずば、睨殺してくれんず奴原、飛しさつて三拜せよ」三人「ヤア人もなげなる廣言。組留て鼻明さん」と、三人ぐの手に追取巻、砂踏ちらして詰寄ば、上には教經韋駄天立、見下す眼角立て、睨合たる其中に、帝は怖さ玉の緒も、消る計の御風情。「ヤア待汝ら麁忽すな」と、聲をかけて義經公、烏帽子狩衣引繕ひ、物の具ならぬ御出立、「行幸の道を支へ、君臣の禮を亂す、其憚少からず。しづまれ旁。イザ義經も天皇を御見送り奉らん。用意の裝束斯のごとし。教經一人歸せし迚、天に入徳もなく、地に入術も有ばこそ。何條遁なき命、汝等が手にかけず、此所に有合さぬ忠信に討すれば、兄次信が敵を討、修羅の妄執散ずる道理。教經は世狹き身、義經も世を憚る身、互に城も楯もなき、戰場吉野の花矢倉に、勝負々々を決すべし。天皇入水と披露して、内裏表濟たれば、鬪勝共負る共、君に過致されな」教「ホ神妙の詞滿足せり。瑣細の事にかゝはらぬ教經、義經計を狙ひはせじ。天下に倍とる頼朝が素頭取て、君が代に飜へさん。其時は義經には、莊園を申下して得さすべし」義「ヤア言ぐどし教經。義經をねらはゞ其儘、兄頼朝に敵對とは、聞捨ならず」と御大將、御帶刀に手をかけて、すはやと見ゆる腹心に、分入宥る源九郎狐、名をかりの恩、忠信が本意なき

牛の車―憂しにかく牛車は公卿の乘車

工みし計略智謀、義經に見さがされしは、よつく武運に盡たるな。ヘツヱ是非もなや口惜や」と、無念の奥齒に血をそゝぎ、握り詰たる掌裏に、爪も通らん其氣色、數百斤の眦の重り、懲へ兼て居たりしが、萎れし眼くはつと見ひらき、「ハア我ながら誤つたり。八島の戰ひ義經を組とめんとせし所、船八艘を飛こへ、味方の船へ引たるは、計略の底を探らん爲、卑怯ではなかりしか。今又奥へ迯込しも、我計畧を知たる故、龍顏に逢せ奉るは、武士の情で有たよな。ウム今は助くる。勝負は重ねて、いで歸らん。それ迄は敎經が隱家へ遷幸あれ。再び廣き世となして、御母君にも逢せません。いざや御幸の御供」と、かき抱き奉る、馬手は長柄の大長刀、「浮世を牛の車とも、しろしめされ」と奏しつつ、立出んとする所に、ゑいと切聲三振の太刀音、すはやと長刀引そばめ、見返る間もなくかけ出る、龜井駿河河連法眼、面々血刀首引かゝへ、「卑怯に候能登殿。一味の衆徒等一々に此ごとく討取たり。天皇をおとりにして、後ろ穢き迯足、門打たれば遁れなし。サア勝負有か、降參有か、二つに一つの返答」と、詞を揃へて云せも果ず、ぐつと睨付、「頤のあがく儘、降參とは儕等が性根にくらべてぬかしたりな。汝等が首一々提げて往なん事、なにの手間隙入べきや。帝を我に渡したる、義經が寸志を思ひ助け遣を、有難

臈たけ―奇麗なる

しなしたり―しくじつたり

玉座を設け安德帝、臈たけなる御姿。敎「コハ〳〵勿體なや淺間しや、何とて爰にまします」と、胸打さはぎ奏問す。君は氣高き御聲にて、「尼上を始め一門殘らず、海に沈と聞つるに、敎經はさはなかりしな」敎「はつ」と勅答黑髮を、隱せし頭巾かなぐり捨、鎧の袖かき合せ、「臣が乳母子讃岐の六郞といふ者、能登守敎經と名乘、安藝の太郞兄弟を左右に挾み、海へ飛入空しくなり、又此敎經は人しらぬ磯邊に上り　祈禱坊主の山科法橋、賴んでやつす姿は覺範、義經に仇を報はんと、駈入此間に玉體のまします事。擒れさせ給ひしか、恐れながら勅諚に明させ給へ」と奏すれば、まだ幼天皇も、御淚にくれさせ給ひ、「敎經も知ごとく、八島の內裏を遁れ出、賴なき世を待つるに、義經に廻り逢、源氏の武士の情有、心に恥て知盛は、我事をくれ〴〵と、賴で海へ入たるぞ。夫より丸も爰に來て、今敎經に逢事も、皆義經が計ひ、日の本の主とは生るれ共、天照神に背きしか、我治めしる我國の、我國人に惱され、我國狹き身の上にも、只母君が戀しいぞ。都に有し其時は、富士の白雪吉野の春、見まくほしさと慕へども、小原の里におはします母上戀しと慕ふ身は、花も吉野も何かせん。あぢきなの身の上を、思ひやれ」と計にて、伏轉びてぞ泣給ふ、御いたはしさ勿體なさ。「エヽしなしたり〳〵、知盛も敎經も、適

行、後の障子の内よりも、「平家の大將、能登守敎經待」と聲かけられ、思はずきつと見かへりしが、覺「ムヽ聲有て形なきは、我を呼には有ざりし。覺へなき名に驚きて、思はぬ氣おくれ。ハヽヽヽ、人なくて恥かゝざりし」と、獨言して行所を、「ヤア卑怯な敎經能登の守。九郎判官義經が、とくより是に待かけたり」と、障子をさつと押開く。見るより覺範望む所、長刀柄ながくかい込んで、飛びかゝらんず顏色に、ちつ共臆せず莞爾と笑ひ、義「げに紅の籏印は、衆徒にやつせど隱れなし。水練に名高き敎經、八島の沖にて入水と見せ、底を潜つて浮み出、此世に有とは、疾より知てまがひなき面體、あらがはれな」と優美の詞、「ホさかしくも云たりな。敎經にもせよ誰にもせよ、汝に敵對覺範に、物の具もせず出合は、此場を助けて貰ひたさの追從。命惜さに骨折は、苦勞九郎」とあざ笑へば、義「ヤア我は顏なる云事かな。弓勢には及ばず共、太刀打手練は負べきや。天命に盡たる平家の刃、義經が身に立ば、サア立て見られよ能登守」と、いはせもあへず上段に、薙でかゝるを小太刀にて、からりてう〳〵はつしと請、もどく長刀いしづきにて、胴腹ぬかんと突かゝるを、はつたと蹴させて付入にぞ、あしらひ兼て義經は、飼にも似ず逃て入。「遁さじやらじ」と、奥の間の、隔の障子蹴放し〳〵、かけ行向にこは何如に、

白衣—知らぬにかく

長廊下—長うするにかく

くる〳〵—くる〳〵坊主に來るをかく

それながら—其儘

み行。義經ならぬ源九郎が、計略とこそしられたり。次へ來るは梅本の鬼佐渡、何でもつかみ喰はん面付、眼に見へぬ源九郎に、つまゝれ來るとは白衣の、袖押まくつて屋敷の隈々睨廻し、「イヤ法眼殿、只今は早々の仕合せ。まだ歸られじと思ふたに、何もかも手ばしかい。シテ囚人は」と、出かし顔なる鼻の下、長廊下をやり過し、蹴かへす板間蹈すべり、する〳〵駿河に蹈みのめされ、無念々々の手間隙いらず、同じく奥へ引立行。扨三番めは返り坂の藥醫坊、くる〳〵道も佛頂面、「ヤレせはし、ハテせはし。行わいやい、マヽ待やい。こりや其樣に引ずるな、衣や著物が破れるはい。扨々無禮な使じや」と、源九郎に化されて、何をいふやら譯もなき、中にしはざはこもりける。法「ヲヽ待兼し藥醫坊、サア〳〵こちへ」と寄顔で、小腕ぐつと捻上れば、藥「アイタヽヽ、こりや何とする」法「ヲヽ斯する」と、それながら大の法師を引かづき、「貴殿計は法眼が手料理の馳走ぶり。義經公の獻立を、待て切かた致さん」と、笑ふて奥に入にける。勇氣の程ぞたぐひなき。斯としら刃の大長刀、鐓土に突き鳴し、衣の下は海老胴鎖、頭は袈裟にひんまとひ、ゆらり〳〵と入たるは、只者ならぬ横川の覺範、大庭に二王立、「河連殿はいづくに有。客僧是へ參入せり。奥へ推參申さんか。とく〳〵對面々々」と、呼はりながら歩み

怪力亂神云々ー論語の句

計略ごさんなれー計略こそあるなれ

平更ー平に

只今は直の御出ー狐が法眼に化けて法橋の許に行きしなり

出、「生類の誠有辯舌にて、大將の御疑ひも、某が心も晴て、此世の大慶上なし」と、申詞も終らぬ所へ、河連法眼罷出、「怪力亂神を語らずといへ共、彼源九郎が申せしは、一山の衆徒、今宵夜討に來る條、先達て忍びを入候所、恰も符節を合するごとし。敵を引受戰はんか、討て出で申べきや。賢慮如何」と伺へば、四郎兵衛忠信「よき計略ごさんなれ。狐に讓り給ひしも、元は拙者に給はる姓名。君にかはつて討死せば、一旦事はしづまらん。平更御免を蒙り度存奉り候」と、余義なき願ひに御大將、「我思ふ子細有ば、暫く此場は立退れず。我名を名乘衆徒等を謀れ。汝死すれば我も死、必討死すべからず」と、御帶刀を給てげる。仁徳厚き御詞に、出行跡を見送つて、「靜來れ」と打つれ奥にぞ入給ふ。時も移さず入來るは、山科の荒法橋、我慢の大太刀指こはらし、案内に及ばずずつと通り、「コレ〱法眼殿、只今は直の御出、近頃祝著。義經搦めおかれしとや、お手柄といひお使がら、早速ながら參つた」と、詞に人々目を見合せ、扨は鼓の返禮に、きやつを謀り寄せたるよと、心に點頭き、法「いかにも〱、奥の殿に搦置。さあいざ〱」と先に立、龜井に目はじき間もあらせず、得たりと利腕取手も早く、床も砕けとずでんどう、起しも立ず踏付〱、早繩たぐつてくゝより上、宙に引立大將の、見參に入んと勇

蜘手かくなは十文字―縦横十文字
けいしやう―輕捷か

られし義經が、名を讓つたる源九郎は、前世の業我も業。そも何時の世の宿酬にて、かかる業因なりけるぞ」と、身につまさるゝ御涙に、靜はわつと泣出せば、目にこそ見へね庭の面、我身の上と大將の、御身の上を一口には、勿體涙に源九郎、たもち兼ねたる大聲に、わつと叫べは我と我、姿を包む春霞、晴て形を顯はせり。義經御座を立給ひ、手づから鼓を取上て、「ヤイ源九郎、靜を預り長々の介抱、詞には述がたし。禁裏より給はり大切の物なれ共、是を汝に得さする」と差出し給へば、狐「何共鼓を下されんとや。ハア〱〱、有がたや忝や、焦れ慕ふた親鼓、御辭退申さず頂戴せん。重々深き御恩のお禮、今より君の影身に添、御身の危き其時は、一方を防奉らん。返す〲も嬉しやな。ヲヽ、夫よそれ、身の上に取紛れ、申事怠つたり。一山の惡僧ばら、今夜此館を夜討にせんと企たり。押寄さする迄もなし、我轉變の通力にて、衆徒を殘らず誑かつて、此館へ引入〱、眞向立割車切、又一時にかゝつし時、蜘手かくなは十文字、或は右袈裟左袈裟、上を拂へば沈んで請、裾を拂はゞひらりと飛、けいしやう祕術は得たりや得たり、御手に入て亡ぼすべし。必ぬからせ給ふな」と、鼓を取て禮をなし、飛がごとくに行末の、跡をくらまし失にける。始終の樣子詳に、聞て驚く四郎兵衛龜井駿河諸共に、御前に進

申て往なれましよかいの〳〵。お詞背かば不孝と成、盡した心も水の泡、せつなさが餘つて歸る、此身は何たる業、まだせめてもの思ひ出に、大將の給はつたる、源九郎を我名にして、末世末代呼はる共、此悲しさは何とせん。心を推量し給へ」と、泣つ口說いつ身もだへし、どうど伏て泣叫ぶは、大和の國の源九郎狐と、云傳へしも哀なり。靜は遊女子氣の渠儂誠に目もうるみ、一間の方に打向ひ、「我君夫にましますか」と、申內より障子を開き、義「ヲヽ委しく聞屆けし。扨は人にてなかりしな。今迄は義經も、狐とは知ざりし。不便の心」と有ければ、頭をうなだれ禮をなし、御大將を伏拜〳〵、座を立は立ながら、鼓の方をなつかしげに、見返り〳〵行となく、消る共なき春霞、人目朧に見へざれば、大將哀と思し召、「アレ呼かへせ、鼓打っ、音に連またも歸りこん。鼓々」と有けるにぞ、靜は又も取上て、打ば不思議や音は出ず、「是は〳〵」と取直し、打共〳〵「こは如何に、上共平共音せぬは。ハア扨は魂殘す此鼓、親子の別れを悲しんで、音を止たよな。人ならぬ身も夫程に、子故に物を思ふか」と、打しほるれば義經公、「ヲヽ我迚も生類の、恩愛の節義身にせまる、一日の孝もなき父義朝を長田に討れ、日かげ鞍馬に成長、せめては兄の賴朝にと、身を西海の浮沈、忠勤仇成御憎しみ、親とも思ふ兄親に、見捨

大切、片時も離れず付添鼓、靜樣は又我君を戀慕ふ調の音、かはらぬ音色と聞ゆれ共、此耳へは二親が、物いふ聲と聞ゆる故、呼びかへされて幾度か、戻つた事もござりました。只今の鼓の音は、私故に忠信殿、君の御不審蒙つて、暫くも忠臣を苦ますは汝が科、早く歸れと父母が、敎の詞に力なく、元の古栖へ歸りまする。今迄は大將の御目を掠し段、お情には靜樣、お詫なされて下さりませ」と、椽の下より延上り、我親鼓に打向ひ、かはす詞のしり聲も涙ながらの暇乞、人間よりは睦じく、「親父樣母樣、お詞を背きませず、私はもうお暇申まする。とは云ながら御名殘、惜かるまいか二親に、別れた折は何にも知らず、一日々々立につけ、暫くもお傍に居たい産の恩が送りたいと、思ひくらし泣明し、焦れた月日は四百年、雨乞故に殺されしと、思へば照日が恨めしく、曇ぬ雨は我涙。願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴れし妻狐、中に設けし我子狐、不便さ餘つて幾度か、引るゝ心を胴欲に、荒野に捨て出ながら、飢はせぬか凍へはせぬか、若獵人に取れはせぬか、我親を慕ふ程、我子もてうど此樣に、我を慕はふがと、案じ過しがせらるるは、切ても切ぬ輪廻のきづな、愛著の鎖に繫ぎ留られて、肉も骨身も碎る程、悲しい妻子をふり捨て、去年の春から付添て、丸一年立や立ず、往ねと有迚何とまあ、あつと

鳩の子云々―鳩に三枝の禮烏に反哺の孝あり

親に不孝な子が有ば、畜生よ野良狐と、人間ではおつしやれども、鳩の子は、親鳥より枝を下つて禮義を述べ、烏は親の養を、育返すもみな孝行。鳥でさへ其通り、況て人の詞に通じ、人の情も知る狐、何ぼ愚痴無智の畜生でも、孝行といふ事を、知らいで何と致しませふ。とはいふ物の親はなし、まだも頼みは其鼓、千年功ふる威徳には、皮に魂とどまつて、性根入たは則親。付添て守護するは、まだ此上の孝行と、思へ共淺間しや、禁中に留置給へば、八百萬神宿直の御番、恐れ有ば寄付れず、頼も綱も切果しは、前世に誰を罪せしぞ。人の爲に怨する者、狐と生れ來るといふ、因果の經文恨めしく、日に三度夜に三度、五臓を絞る血の涙、火焔と見ゆる狐火は、胸を焦する炎ぞや。かほど業因深き身も、天道樣の御惠で、不思議にも初音の鼓、義經公の御手に入、内裏を出れば恐れもなし、ハツア嬉しや悦ばしやと、其日より付添は、義經公の御蔭。稻荷の森にて忠信が、有合さばとの御悔み、せめて御恩を送らんと、其忠信に成かはり、靜樣の御難義を救ひました御褒美と有て、勿體なや畜生に、清和天皇の後胤源九郎義經といふ御姓名を給はりしは、空恐ろしき身の冥加。是といふも我親に、孝行が盡したい、親大事親大事と思ひ込だ心が屆き、大將の御名を下されしは、人間の果を請たる同然、彌親が猶

女のかよはき腕先に、打立られてハアはつと、誤り入たる忠信に、鼓打付、「サア白狀、サア〳〵〳〵さあ」と詰寄られ、一句一答詞なく、たゞ平伏て居たりしが、漸〳〵に頭を擡げ、初音の鼓手に取上、さも恭しく押戴き〳〵、靜の前に直し置、しづ〳〵立て廣庭へ、下りる姿もしほ〳〵と、みすぼらしげに手をつかへ、忠「今日が日迄隱しおゝせ、人にしられぬ身の上なれ共、今日國より歸つたる、誠の忠信に御不審かゝり、難義と成故據なく、身の上を申上る始りは、夫なる初音の鼓。桓武天皇の御宇、内裏に雨乞有し時、此大和國に、千年功經牝狐牡狐、二疋の狐を狩出し、其狐の生皮を以て拵へたる其鼓、雨の神をいさめの神樂、日に向ふて是を打ば、鼓は元來波の音、狐は陰の獸故、水を起して降雨に、民百姓は悅びの、聲を初て上しより、初音の鼓と號け給ふ。其鼓は私が親、私めは其鼓の子でござります」と、語るにぞつと怖氣立、騷ぐ心を押しづめ、靜「ムヽそなたの親は此鼓。鼓の子じやといやるからは、扨は其方は狐じやの」忠「ハツアなる程、雨の祈に二親の狐を取れ、殺された其時は、親子の差別も悲しい事も、辨へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け、鳥居の數も重なれど、一日親をも養はず、産の恩を送らねば、豕狼にも劣りし故、六萬四千の狐の下座に著、只野狐と輕蔑まれ、官上の願も叶はず、

いさめ—慰める

藻をかつぐ程—狐なみに化けるほど

鳥居の數云々—狐は稻荷の鳥居を數多く越すほど出世するといふ俗傳による

深紅—辛苦にかく

獻酬ん、早々鼓打〳〵」と、云捨て奥に入給へば、龜井駿河も忠信に、引添てこそ入にけれ。靜は君の仰を請、手に取上て引結ぶ、辛氣深紅をないまぜの、調結んで胴かけて手の中しめて肩に上、手品もゆらに打鳴す、聲清々と澄渡り、心耳を澄す妙音は、世に類なき初音の鼓。彼洛陽に聞へたる、會稽城門の越の鼓、斯やと思ふ春風に、誘はれ來る佐藤忠信、靜が前に兩手をつき、音に聞とれし其風情、すはやと見れど打止ず、猶も様子を謠調の音色、聞入聞居る餘念の體、怪しき者とは見て取靜、折よしと鼓を止め、靜「遅かつた忠信殿。我君様のお待兼、サア〳〵奥へ」と何氣なき、詞にはつとは云ながら、座を立おくれ指俯く、油斷を見すまし切付るを、ひらりと飛退飛しさり、「コハ何となさるゝぞ」と、咎められて氣轉の笑、靜「ホヽヽヽヲヽあの人の氣疎い顔、久振の靜が舞、見よふと御意遊ばす故、八島の軍物語を、舞の稽古」と鼓を早め、舞かくて源平入亂れ、船は陸路へ、陸は磯へ、漕寄打出打ならす、鼓に又も聞入りて、餘念たはいもなき所を、靜「忠信やらぬ」と又切かくる、太刀筋かはしてかいくゞるを、付入柄元しつかと取、忠「何科有て欺し打に。切るゝ覺へ曾てなし」と、刀たぐつて投捨れは、「贋忠信のサア白状。仰を請た靜が詮議。云ずば斯していはする」と、鼓押取りはた〳〵、

二人有中―二人居つた中
つれ〴〵―つく〴〵

ず候」と申に、心迷はせ給ひ、義「コレ靜、爰に居るは其方を預たる忠信ならず。只今國より歸りしと物語りする中、忠信靜を同道との案内、二人有中にも見へざるは不審者。面體似たる贋者ならずや。靜心は付ざるか」と、仰の中に忠信を、つれ〴〵と打ながめ、靜「ハアどふやらそふおつしやれば、小袖も形も違ふて有。アヽお待遊ばせや、ハッアそれか。ヲヽ左樣ぢや、思ひ當る事が有。君が筐と別れし時、給はりし初音の鼓、御覽遊ばせ此樣に、肌身も放さず手にふれて、忠信の介抱請、八幡山崎小倉の里、所々に躬を忍び居たりしに、折々の留守の中、君戀しさの此鼓、打て慰む度々、忠信歸らぬ事もなく、其音を感に絕る事、ほんに酒の過た人同前。打止めばきよろりつと何氣ない顏付は、よく〳〵鼓が好そふなと、初手は思ひ二度三度、四度目にはテモかはつた事、又五度めは不思議立、六度めには怖氣立、夫よりは打ざりしが、君爰にと聞付て、心せく道忠信にはぐれた時、鼓の事思ひ出し、打ば不思議や目の前に、來る共なく見へたるは、女心の迷ひ目かと、思ふて連立來りしに、又此時宜はどうぞいの」と、申上れば義經公、「ムウ鼓を打ば歸り來るとは、それぞ能詮義の近道。靜其方に云付る。其鼓を以て同道した忠信を詮義せよ。怪しい事有ば、此刀で」と投出し、「我手で討れぬ鼓の妙音。夫を肴に一

とけしなく—氣が氣でなく
輪廻きたなき—情に迷うた未練のふるまひ
早ふ爰へ云々—靜が眞の忠信を見ての話
まんがち—自分勝手
てんがう—いたづら

と駈行を、「ヤアならぬ〳〵、詮義の濟迄動さぬ」と、龜井が向ふをさゝへたり。忠「ヤアさなせそ六郎。忠信是に有上に、又忠信が靜を同道。何にもせよ、子細ぞ有ん、片時も早く是へ通せ」「あつ」と龜井は次の間へ。我身あやぶむ忠信は、默して樣子を窺へば、別れ程經し君が顏、見たさ逢たさとつかはと河連が奥の亭、歩み來る間もとけしなく、靜「ナウ我君か、懷かしや」と、人目厭はず縋り付、戀し床しの溜々を、涙の色にしらせけり。義「ヲ、女心に歎くは尤。別れし時云聞せし如く、人の情に預かる義經、輪廻穢き擧動ならねば、つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや、何處に有」と尋給へば、靜「只つた今次の間迄連て參りしが、爰へはまだか」と見廻し〳〵、「それ〳〵、ても早ふ爰へ來てじや。一所にお目にかゝる物を、ちつとの間に先へ拔けがけ、まだ軍場かと思ふてか、まんがちな人では有」と、恨み口なる詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信、「我君も其如く覺なき御尋。拙者めは今の先、出羽の國から戻りがけ。去年お暇申てから、お目にかかるは只今始めて」靜「エ、あの人のじやら〳〵とてんがうな事計」忠「轉業でなし大眞實」靜「アレまだ眞顏で欺すのか」と、何氣もなまめく詞の中、立戻る龜井六郎、「靜樣同道の忠信、引立來らんと存ぜし所、次の間にも有合さず、玄關長屋所々方々、尋ても知れ

うつけぬーとぼけぬ

せん刀ーせん方なくにかく

は主君の御容顔、今一度拝し奉らんと、念願叶ひて本復遂げ、初立の長旅忍の道中恙なく、此館に御入と承はり、只今參つた忠信に、姓名を給はりし、靜御前を預けしなんど、御諚の趣、且以て身に覺へ候はず」といはせもあへず、氣早の大將、「ヤアとぼけな忠信。堀川の館を立退し時、折よく汝國より歸り、靜が難義を救ひし故、我著長を汝にあたへ、九郎義經といふ姓名を讓り、靜を預け別れし其方、世になき我を見限つて、靜を鎌倉へ渡せしな。義經が所在捜に來たか。只今國より歸りしとは、まざ〳〵敷僞表裏。漂泊してもうつけぬ義經。たばからんとは推參なり。不忠二心の人外。アレ引つくゝつて面縛させよ、龜井駿河」と腹立の、聲にかけくる二人の勇士、裾はせ折つて忠信が、弓手馬手に反打かけ、「委細あれにて皆聞た。サア腕廻せ四郎兵衞。靜御前の御行衞、サア明白に白狀せよ。踏付て繩かけふか、拷門して云せふか。サアどふじや、サアどふじや」と、せりかけられてせん刀、指添共に投出し、「兩人待た麁忽すな」兩人「待てとは、但云譯有か。サア聞かふ、サアなんと」なんと〳〵に難義の最中、「靜御前の御供申、四郎兵衞忠信殿御出なり」と奏者が聲に、人々仰天、「何忠信が又來たとは、合點行ず」と聞もあへず、以前の忠信立上り、「我名をかたるは何でも曲者。引くゝつて大將への面晴せん」

ふこづき—病の起らんとする時いふ(俚言集覧)

にはつと頭を下げ、法師の坊の命と云、只ならぬ御方。疎略なき心底、御存の上は身に余る悦び、此上や候べき。武藏坊は、奥州秀衡方へ遣はされ、御家臣辻少ければ、亀井駿河なんどが如く、思し召し下されよ」と申詞の内、使者罷出、「佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行衛を尋御出なり。通し申さんや」と、窺ふにぞ、義經「扨は無事にて有つるな。此方へ通せ對面せん」と、仰傳ふる次の間へ、法眼夫婦は立て行。案内に連て入來る四郎兵衛忠信、御座の間の此方に出、絶えて久しき主君の顔、見るも無念のあら涙、指衛伏いて詞なし。大將御機嫌斜ならず、義經「汝に別れ爰かしこ、鎌倉殿の御詮義つよく、身の置所なかりしに、東光坊の弟子河連法眼に匿はれ、心ならざる春を迎へ、暫くの命をつぐ。我姓名を譲りし其方、命全く有事、我運のまだ盡ざる所、頼もしし、悦ばし。其砌預けたる靜は如何成しぞ」と、御尋有ければ、忠信未審げに承はり、「コハ存がけなき御仰、八島の平家一時に亡び、天下一統の凱歌を上給ふ折から、告來る母が病氣、聞し召及ばれ、御暇給はつて、本國出羽へ歸りしは去年三月、程なく別れし母が中陰、忌中に合戰の疵口おこづき、破傷風といふ病と成、既に命も危き半、御兄弟の御中さけ、堀川の御所没落と承はる口惜さ。胸を煎る程重る病氣、無念さ余つて、腹切んと存ぜしかど、せめて

まだ〳〵たーぐ
づ〳〵

はしむる。告知せた者なくて、小舅の茨左衛門、斯いふて越すべきや。内通せられて知たる上は、遁れなき判官殿、人に手柄させんより、我手にかけて討所存」妻「ヤア夫は眞實か」河「應」妻「イヤほん〳〵に此方様は、義經公を切心か」河「くどい〳〵」妻「ハアはつ」と吐胸も突詰し、夫が刀拔より早く、自害と見ゆる女房が、持たる刃物引たくり、河「こりや何とする何で死ぬ」と、いふ顔きつと打守り、妻「エヽ聞へぬぞや法眼殿、なぜ隔ては下さるぞ。恩賞の御下文、千通萬通來た迚も、一旦の契約變ずる此方の氣質じやない。鎌倉殿の忠臣、茨左衛門が妹の飛鳥、義經公の御隱れ家、兄の方へ知らせたかと此狀が來た故に、疑ふての心じやの。覺ない云譯を、まだ〳〵として居られぬ。疑ふよりは一ト思ひに殺して下され法眼殿」と、恨涙ぞ誠なる。法眼始終を聞すまし、以前の一通取より早く、ずん〳〵に引裂き〳〵、「僞に命は捨まじ。女房を疑ふは未練には似たれ共、義經公へぬけめなき我忠節、衆徒等の胸中探りし次手、心引見るこの贋狀、引裂捨れば安堵して、自害を止まれ女房」と、解る詞は春の雪、恨も消てなかりけり。「ヤア法眼歸られしな、面談」と義經公、奥の間より出させ給ひ、「鞍馬山の好を忘れず、一々の御厚志祝著詞に述がたし。兼て申談ぜし通り、今日の衆徒の評定、委細あれにて承知せり」と、御諚

七足、左右合して十四足、はた〳〵はつしと踏治め、「サア行進」と逸散に、勇み足して立歸る、横川の禪師覺範が、勇氣稀なる 三重 歌 鶯の、聲なかりせば雪消ぬ、山里いかで春をしらまし。春は來ながら春ならぬ、九郎判官義經を、御慰みの琴三味や、河連法眼が奥座敷、音じめも世上忍駒、柱に立る雁がねも、春を見捨ぬ志、實頼もしきもてなしなり。今朝より他出の法眼、心に一物有顔に、悠々と立歸れば、妻の飛鳥は出向ひ、「ヲヲ異ない早いお歸り。今日の御評定、一山のお仕置か。但しは又奥のお客、義經樣の御事かは」と尋れば、河「ヲヽサ〳〵、義經の事共々々」妻「ムヽウ扨は吉野一山殘らず、お味方といふ樣な品にもや」河「成程〳〵衆徒の中にも、返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、梅本の鬼佐渡等、別して横川の覺範、一チはな立て義經の味方といふは、我心を捜見ると知たる故、此法眼は鎌倉方と云放つて歸つたり」妻「ムウ鎌倉方とおつしやるは、衆徒の心をこちからも、捜て見る御了簡」河「イヤ〳〵、法眼今日より心を改め、義經とは敵味方」妻「エヽイあのお前は義經樣を」河「ヲ鎌倉殿へ討て出す氣。合點行ずは是見よ」と、懐中の書翰投出せば、手に取上、文言殘らず讀終り、妻「ムウ義經公此山に御忍びまします事、鎌倉へ知たやうな文體」河「ヲヽいかにも汝が云ふごとく、天に口なし、人を以てい

釋門のより〳〵―佛法修行のひま
孫吳―孫子吳子
喚鐘―呼寄せる合圖の鐘
亂調―亂打
いそふれ―急げ
天武の軍―壬申の亂

方。覺範が夜討の懸引催促を聞や〳〵」と、大木の朽根にどつかと腰打かけ、「我釋門のより〳〵に、孫吳が兵書諳じたり。我詞をあやまたず、荒法橋は下兜十騎余、燈籠が辻より一文字に、彼が館にひた〳〵と押寄て、喚鐘三つ四つ亂調せよ。鬼佐渡は又如意輪寺の裏の手を、眞直に六地藏の橋を引、敵迯くる時を待、さん〴〵に射て留よ。此覺範は新坊谷の坊に火をかけ、火を上て聖天山より、無二無三にかけちらして勝利を得ん。今夜の勝事手裏に有。いさめ〳〵」と云ければ、藥醫坊頭を打掉り、「それは味方の思ふ儘敵強ふして荒法橋が、手勢を投退駈散らし、驀直に討て出、勝手の宮を陣所として、門をひつしと打ばいかに」「ホヽウ理にも咎めたり。其時は八王子、金剛藏王の袖振る山、峯に上つて眞下りに、引詰指詰射るならば、其處もたまらず迯失ん」「ヲヽ其時は、まだ咲ぬ櫻の木隱れ枝隱れ、木の間〳〵の細道を、迯行先は天皇橋、大將軍の多寶塔、時に取ての角櫓、追くる衆徒を待かけて、射かくる矢先は扱いかに」「小ざかしゝ荒法橋。何條射共落人が、持たる矢種は數知れたり、引ては寄寄ては引、矢種盡させ討取に、何の手間隙入べきぞ。恐れな音すな用意せよ。いそふれ旁其昔、天武の軍有し時、少女下つて舞奏づ、是反閇の始めなり。いざ勝軍の義を取て」踏々登路踏ならす、左に七足右

あんごり―あんぐり
すまた―當はづれ

山の印の木、根深にゆつて立たりけり。法眼きつと見、頼朝に准へたる兄の山に弓引れしは、頼朝に敵對て義經の味方よな。ムウ〳〵」と計以前の狀、ぐる〳〵卷て懐中し、「山科法橋梅本坊、藥醫坊も其通りや」皆一同に「義經の味方〳〵」と呼はれば、河「ムウそれならば法眼が所存も是にて明さん」と、同じく弓矢手に取上、引堅めたはいづれを的、どちらに付ぞと見る中に、かつきと放すは義經に、名ざす妹山弟の山、衆「ヤア扨は法眼頼朝方。義經に弓引るゝよな」河「いかにも落人に組せんより、世に連て一山の破滅にせぬが仕置の役目」覺「しかとそふや」河「イヤ覺範、味な所に念が入。義經此山を頼みなば、引かけて匿はれよ。金輪際此法眼、搜出して討つて見せう。其時は敵味方。無分別成衆徒原に、談合せし隙惜や。今日の參會是迄〳〵。さらば〳〵と」云捨に、我を待ずして立歸る、所存の程ぞ訝しき。跡に鬼佐渡口あんごり、「アリヤ何の事、どふいふ事。云合せたは皆すまた。覺範はどふ思ふぞ」と、山科諸共尋れば、覺範ふつと吹出し、「其淺い了簡故、法眼が底意を知らぬ。今の詞でとつくりと、義經をかくまひ居る底の底迄皆知れた。法眼も我所存、義經の味方とは、噓と睨んで歸つた眼中。事延々に計はゞ、落しやらんも計られず、今宵八つの手筈を定め、夜討に入て討て取、鎌倉殿の恩賞に預れ方

御身に覺へなき條々、申開いて讒者原、一々に切ならべ、夫も叶はぬ物ならば、理非辨へぬ頼朝を討取て。判官殿の天下とせん。我々が所存此通り。法眼殿の御了簡承はらん」と申ける。河「イヤ〳〵まだ申されぬ。法橋殿の御懇意有近頃の客僧、横川の禪師覺範、此場へ參り合さず、此了簡も聞ねば云れず。などや遲きぞ待久し」と、いふ間程なく山道を、しづ〳〵歩み來る法師は、名にし合たる横川の覺範。衣の緇高く取、三尺五寸の太刀帶反らし、末座にすはれど丈高く、僧柄勇々敷見へにける。「ヤア待兼し覺範殿、近ふ〳〵」と招き寄、法眼ずんど立上り、「コレ〳〵覺範、アレ見られよ。霞の中に朧なる、二つの山は妹兄山、是合體の歌名所。川を隔て西は妹山東は兄山、山は二つに別れたり。妹は妹弟の義、兄山は元より兄頼朝、頼朝義經兄弟の、中吉野川引わかれし、姿は山に異ならず。されば歌にも流ては妹兄の山の中に落る吉野の川のよしや世の中と詠みたれば、世を捨人の我々でも、頼に引ぬか但し又、浪の白刃で討取氣か。手短き返答聞ん。申されやつ」と云ければ、思案に及ばずずつと立、打點いて、藏王堂に掛け奉る、奉納の弓と矢取て弦引し、「河連殿御覽有、手短き我返答。山と山との目通りに、立たる二木は勝負の目當、返答御覽」と弦打つがひ、かたむる迄なく發矢と放す、白矢は兄

仕置頭—取締長の法眼となり

どかと—一度に澤山

とは此事。元來科なき判官殿、大和路に徘徊と有ば、一山の衆徒を頼み來られんは必定なり。其時は旁頼まれ申て、匿ふ氣か、又は討て出す所存か。心々で濟ぬ事。銘々に遠慮なく評議有」と、聞もあへず荒法橋、「實尤、去ながら我々が評定お尋迄なく、一山の仕置頭、法眼殿から了簡を定め申さるれば、誰有て詞を背かず一黨せん。先御所存は」と問かへす。河「ホヽウ了簡は胸に有。まづ斯々と云聞さば、縦心に合ず共、よもやいやとは申されまじ。さ有ば却つて不覺の基、我所存は跡で云ん、先各の思ふ所、眞直に申されよ」と、いへ共互に心置、暫し返答怠りしが、返り坂の藥醫坊、遠慮なくぬつと出、「先愚僧が存るは、義經を匿ふは、一年三年乃至十年、二十年其間立養ひ、獨計は僅でも、辨慶といふ喰拔の候へば、いか程喰ひ込んも知れず。と有つて匿ふまいといはゞ、彼辨慶滅相者、七つ道具の鋸で、家尻切んも知申さず。どかと盗まれ申さんより、一山の出し前にて、茶粥をくはせ養ふが、勘定ならん」と申にぞ、法眼おかしく思ひながら、「ムウそれも肝要。扨兩人は」といはせもあへず、「されば〱、此事において勘定も何にも入ず。人を救ふが沙門の役。科なき義經かくまふ迚、鎌倉より討手來らば、忍辱の袈裟引かへ、降魔の鎧に身をかため、逆寄に押寄討取、直に鎌倉へ追上り、

のふず—不作法

のらかはく—なまける

歩路—褐地

指貫云々—指貫袴の裾に括りある故心の締括あるにかく

定眞先がけ、ない智恵ふるはん頬付なり。今迄のふずな百姓共、逆様に這かゞめば、鬼佐渡傍を睨み廻し、「まだ掃除仕廻はぬな。先達て云渡すに、のらかはいて隙入る。年貢時分に待ておろ」と呵付られ、「ハイ〳〵」當り眼に、手ん手に箒どつさくさ、風上から掃廻せば、袈裟も衣も土ほこり、鬼「ごくだうめら、こりや何仕おる」と呵る程猶遠慮なふ、「掃除します」と無二無三、埃かづけて迯歸る。爰に河連法眼とて、一山の檢校職、華美を好まぬ萠黄の法服、歩地を著たる指貫も、しめくゝり有仁體、「ホウいづれも早かりつ」と、互に前後の挨拶有、各圓座に列れり。やゝ有て河連法眼、「先達て回狀を以て申せし所、早々の參會近頃祝着。今日の談合余の義に有ず」と、懷中より一通を取出し、「鎌倉殿の家臣我小舅、茨左衛門より斯の如き書狀到來。文言を讀聞さば、申さず共樣子は明白。先聞れよ」と押ひろげ、文面「飛札を以て申達す九郎判官義經の事。弟の身として、舍兄賴朝追討の院宣を蒙り、剰へ土佐坊正尊を討取都を立退、大和路に徘徊の由、其聞有によつて、鎌倉殿御憤り大方ならず、早く討て出すべきの旨、國國へ配符を廻らし畢んぬ。討取て恩賞申請け奉るべく候。隱し置においては、一山の滅亡此時に候なり。正月十三日。河連法眼殿。茨左衛門判」河「聞れたかいづれも、談合

込だ〳〵―呑込んだ
日高―日が高い
とつかは―忽遽
大口―大口袴

信が介抱にて、義經の御跡を、漸々爰にしたひ來て、彌生なかばと云ながら、見渡す景も吉野山百姓共口々に、「何と美しい京女﨟、花見にはまだ早いなァ」「何の花見で有ぞい。男と女と二人連。腹がはらみでせふ事なふ、ついとしてござつたか」と問ひかけられて、靜「アヽいやそんな者でなし。河連法眼殿へ用事有て參る者。是からどふいきます」と、皆迄聞ず早合點。百「エヽ込だ〳〵。妾奉公にやらしやるの。ヲ往かしやれば好い仕合せ。河連法眼樣といふは、此一山の衆徒頭、芳野中は立ふと伏ふと儘な上に、女房持て魚や鳥は喰次第。しだらく坊主の樣なれど、妻帶といへば格が重い。どふぞ首尾して仕合せさしやれ」靜「アこな樣は日高じやの。が其法眼樣には、大切なお客でもござりますか」「イヤそんな事は知ませぬ。毎日琴三味線で賑やかなとは聞ました。コレ此道を斯往て、こつちやの方が子守明神、女の參らにやをらぬ所。夫より手前の一筋道、左の方につゐ見へる、大きな門の有所」と教に靜が、「あい〳〵、忝ふござんす」と、氣のせく道をとつかはと、打連てこそ急ぎ行。早參會と喚鐘に、山科の法橋坊、無道不敵の一字を蒙り、荒法橋と名を呼ばれ、のつか〳〵と來る跡に、鬼と名乘は違はぬ惡者、梅本の鬼佐渡坊、返り坂の藥醫坊、清僧ながら大太刀帶、大口の裾踏みちらし、今日の評

姓名添へて云々—源義經の名を添へて賜はりし御鎧
沖の石—置くにかく、讃岐の歌をとる
丈六云々—一丈六尺の御像

畔道ゆらり〳〵、輕い取なりいそ〳〵と、目立ぬやうに道隔、忠「女中の足と侮つて、嘸お待兼。爰幸の人目なし」と、姓名添へて給はりし、御著長を取出し、君と敬ひ奉る。靜は鼓を御顏と、よそへて上に沖の石、靜「人こそしらね西國へ、御下向の御海上、波風あらく御船を、表具住吉浦に吹上られ、それより芳野にましますよし、頓てぞ參り候はん」と、互に筐を取納め、忠「げに此鎧を給はりしも、兄繼信が忠勤なり。八島の戰ひ我君の、御馬の矢面に、駒をかけすへ立塞がる。チヽ聞及ぶ其時に、平家の方には名高き强弓、能登守敎經と、名乘もあへずよつぴいて、放つ矢先はうらめしや、兄繼信が胸板に、たまりもあへず眞逆樣、あへなき最期は忠臣義死の名を殘す、思ひ出るも涙にて、袖はかはかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽しかるべき」と、互に諫めいさめられ、急ぐとすれど捗らぬ、あし原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹拂ひ、雲と見まがふ三芳野の、麓の里にぞ 三重 著きにける。

丈六忿怒の御像も、花に和らぐ吉野山、軒は霞にうづもれて、殊勝さ勝る藏王堂、櫻はまだし枝々の、梢淋しき初春の空、一山の衆徒評定始と、知行下の百姓等、お髭の塵取はき掃除、靈驗あらたな佛より、衆徒の罰をや恐れけん。名計は靜といへど急ぐ道、忠

靜に—都御前をよす

義經—よしにかく

ほろゝけん〳〵—雉子の羽叩きと啼聲

みかの原—見ゆ、にかく

おかし烏—をかしがらせるにかく

徳若—解くにかく

昔を今に云々—賤や賤賤の緒環くり返し昔を今になすよしもがな(靜)

せたらおうて—背負ひて

られ、靜に忍ぶ都をば、跡に見捨て旅立て、作らぬ形も義經の、御行末は難波津の、波にゆられて漂ひて、今は芳野と人傳の、噂を道の栞にて、大和路さしてしたひ行、野路も馴れぬ繁のまがひ道、弓手も馬手も若草を分つゝ行ば、あさる雉子のぱつと立ては、ほろゝけん〳〵ほろゝうつ。汝は子ゆへに身を焦す、我は戀路に迷ふ身の、アヽうらやまし、ねたましや、初鴈がねの女夫連、夫持顔の羽ばかま、人よりましの眞柴さす、宇賀御魂の御社は、いと尊くも神々と、霞の中にみかの原、わきて形見の鼓のかはい、〳〵かはいの睦言を、人にはつゝむ袱紗物、それを便りにつく杖も、心細野を打過て、見渡せば、四方の梢もほころびて、梅が枝うたふ歌姫の、里の男が聲々に、歌 我つまが、天井ぬけてすへる膳、晝の枕はつがもなや、天井ぬけてすへる膳、ひるの枕はつがもなや。ヲヽつがもなや、おかし烏の一節に、人も藁屋の育にも、春は羽子つく、手鞠一二つくつくと聞ば、東風風音添へて、去年の氷を徳若に、御萬歳と君も榮へまします、あいけう有や頼もしや。さぞな大和の人ならば、御隱家をいざとはん。我も初音の此鼓、君の榮へを壽て、昔を今になすよしもがな。歌 谷の鶯ナ、初音の鼓〳〵、調べあやなす音に連て、つれてまねくさ、遲ばせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしかとせたらおうて、野道

阿耨多羅云々―無上正等正覺と譯す
大和路―山にかく
忠と信―佐藤忠信をよす

ふつつと切給へば、内侍若君お里は縋り、倶に尼共姿をかへ、宮仕へを赦して」と、願へど叶はず打拂ひ〳〵、「内侍は高雄の文覺へ、六代が事頼まれよ。お里は兄に成かはり、親へ孝行肝要」と、立出給へば彌左衛門、「女中の供は年寄の役」と、諸共旅用意、手負をいたはる母親が、「ノウこれ難面親父殿、權太郎が最後も近し、死目に逢て下され」と、留るにせき上彌左衛門、現在血を分た躮を手にかけ、どふ死目に逢れふぞ。死だを見ては一足も、歩かるゝ物かいの。息有内は叶はぬ迄も、助かる事も有ふかと、思ふがせめての力種。留る和女が胴欲」と、云て泣出す爺親に、母は取分娘は猶、不便〳〵と維盛の、首には輪袈裟手に衣、手向の文も阿耨多羅、三藐三菩提の門出、高雄高野へ引わくる、夫婦の別に親子の名殘、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に殘る名物に、維盛彌助といふ鮓屋、今に榮ふる花の里、其名も高くあらはせり。

第四

道行初音旅

歌　戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや。忠と信の武士に、君が情と預け

晉豫讓—仇の趙襄子が賜りし衣を豫讓三たび刺しし話

左もそふず—さもあらん

伊東へ流人—伊豆の伊東へ流す

鸚鵡返—人よりいはれたる詞を其儘眞似て返事すること

御手向、サア遊ばせ」と指出す。維「何頼朝が著替とや。晉の豫讓が例を引、衣を刺て一門の、恨を晴さん思ひ知れ」と、御佩刀に手をかけて、羽織を取て引上給へば、裏に模樣か歌の下の句、「内や床しき、内ぞ床しき」と、二つならべて書たるは「アラ心得ず。此歌は小町が詠歌、雲の上は有し昔にかはらねど見し玉簾の内や床しきと有けるを、その返しとて人も知たる此歌を、物々敷書たは不思議。殊に梶原は和歌に心を寄し武士、内や床しきは、此羽織の縫目の内ぞ床しき」と、襟際附際切ほどき、見れば内には袈裟衣、珠數まで添て入置いたは、「コリヤどふじや。コハいかに」と呆れる人々。維盛卿、「ホウ左もさうず、さもあらん。保元平治の其昔、我父小松の重盛、池の禪尼と言合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流人、其恩報じに維盛を、助けて出家させよとの、鸚鵡返か恩がへしか。ハア、敵ながらも頼朝はあつぱれの大將。見し玉だれの内よりも、心の内の床しや」と、衣を取つて。「是迚も、父重盛の御かげ」と、戴き給ふぞ道理なる。人々はつと悦び涙、手負の權太は這出搊寄、「及ばぬ智恵で梶原を、謀つたと思ふたが、あつちが何にも皆合點。思へば是迄衒つたも、後は命を衒るゝ種としらざる淺まし」と、悔みに近き終り際、維盛卿も、「是迄は、佛を衒つて輪廻を離れず。離れる時は今此時」と、髷

いふにや及ぶ―いふ迄もなし
無得心―無情

へぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時、血を吐程の悲しさを、常に持てはなぜくれぬ。廣い世界に嫁一人、孫といふのも彼奴一人、子供大勢遊んで居れば、親の顏を目印に、苦味のはしつた子が有かと、尋て見ては、コレ〳〵子供衆、權太が息子は居ませぬかと、問へど子供はどの權太、家名は何とと尋られ、おれが口からまんざらに、いがみの權とは得云ず、惡者の子じや故に、はね出されておるであろと、思ふ程猶そちが憎さ。今直る根性が、半年前に直つたら、ノウ婆々」母「親父殿、嫁女や孫の顏見覺へて置かふのに」父「ヲヽ〳〵、おれもそればつかりが」と咽せ返り、わつと計伏沈む心ぞ思ひやられたり。内侍は始終御涙、維盛卿は身にせまる、いとゞ思ひにかきくれ給ひ、「彌左衛門が歎き、さる事なれ共、逢て別れ逢で死るも皆因緣。汝が討て歸りたる首は、主馬の小金吾迚、内侍が供せし譜代の家來。生て盡せし忠義は薄く、死て身がはる忠勤厚し。是も不思議の因緣」と語り給へば、彌「テモ扨も、そんなら是も鎌倉の、追手の奴等が皆所爲」維「ヲヽ、いふにや及ぶ、右大將賴朝が、威勢にはびこる無得心。一太刀恨ぬ殘念」と、怒りに交る御涙、「實お道理」と彌左衛門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、「是は賴朝が著替迚、褒美の合紋に殘し置し、寸斗々々に引裂ても、御一門の數には足ねど、一裂づつ

禍も三年―諺、禍も三年立てば幸となる

しやらほどけ―すぐほどける

性根にて、人に疎まれ譏らるゝ、身持はなぜにしてくれた。常が常なら連合が、むざと手疵も負せまい。むごい事を」とせき上て悔み歎けば權太郎、「ヤレ其お悔無用〳〵。常が常なら梶原が、身がはり喰ふては歸りませぬ。まだ夫さへも疑ふて、親の命を褒美にくれふ、忝いといふと早、詮義に詮義をかける所存、いがみと見た故油斷して、一ぱい喰ふて歸りしは、禍も三年と、惡い性根の年の明時。生れ付て諸勝負に魂奪はれ、今日もあなたを二十兩、衒取たる荷物の内に、恭敷高位の繪姿、彌助が顏に生寫し。合點がいかぬと母人へ、銀の無心を囮に入込、忍んで聞ば維盛卿、御身に迫る難義の段々、此度性根改めずば、何時親人の御機嫌に、預る時節も有まいと、打てかへたる惡事の裏、維盛樣の首は有ても、内侍若君のかはりに立る人もなく、途方にくれし折からに、女房小仙が躮を連れ、親御の勘當古主へ忠義、何狼狽る事が有、私と善太をコレ斯うと、手を廻すれば躮めも、嚊樣と一所にと、倶に廻して縛り繩、かけても〳〵手がはづれ、結んだ繩もしやらほどけ、悋んだおれが直な子を、持たは何の因果じやと、思ふては泣しめては泣、後手にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不便や女房も、わつと一聲其時に、血を吐ましたと語るにぞ、りきみ返つて彌左衛門、「聞

前髪―小金吾の首なればいふ
惣髪―維盛の髻ある以前の姿にして
それといはぬは―梶原が髪の事いはぬは彌左衛門の裏をかゝらん巧み

は涙。いがみにいがみし權太郎、刃物おさへて、「コレ親父殿、何じやれ、こなたの力で維盛を助る事は叶はぬ〳〵」父「コリヤいふな、今日幸と別れ道の傍に、手負の死人、好い身代りと首討て戻り、此中に隱し置。コリヤ是を見おれ」と、鮓桶取て打明れば、ぐはらりと出たる三貫目、父「ヒヤアこりや銀じや。こりやどふじや」と、呆果たる計なり。手負は顏を打ながめ、權「おいとしや親父樣、私が性根が惡さに、御相談の相手もなく、前髪の首を、惣髪にして渡さふとは、了簡違ひのあぶない所。梶原程の侍が、彌助といふて青二才の男に仕立有事を、知らいで討手に來ませふか。それといはぬは彼方も工み。維盛樣御夫婦の、路銀にせんと盜んだ銀、重いを證據に取違へた鮓桶、明て見たれば中には首。はつと思へど是幸、月代剃つて突付たは、やつぱりお前の仕込の首」父「ムウ其又根生で、御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡したぞ」權「ホ其お二人と見へたのは、此權太郎が女房躮」父「ヤアして〳〵維盛樣御夫婦、若君は何國に」權「ヲヽ逢せませふ」と袖より出す一文笛、吹立つれば折よしと、維盛卿内侍は茶汲の姿となり、若君連てかけつけ給ひ、維「彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を。ヤア手を負たか」と驚くも、彌「おかはりないか」と悄りも、一度に與をぞさましける。母は悲しさ手負に取付、「斯程正しき

梶原、「ハテ小氣味のよい奴、褒美くれん」と著せし羽織脱いで渡せば佛頂顔、「コリヤコリヤ、其羽織頼朝公のお召換。何時でも鎌倉へ持來たらば、金銀と釣がへ、囑託の合紋」と、聞より戴き、權「出來た〱。當世衒が流行に依て、二重取をさせぬ分別。能ふした物」と引がへに、縄付渡せば請取つて、首を器に納めさせ、梶「コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等、暫く汝に預る」權「お氣づかひなされますな、貧乏ゆるぎもさせませぬ」梶「ハテ扨健氣な男め」と、譽そやして梶原平藏、縄付引立て立歸る。權「ア、これ〱、其次手に褒美の銀、忘れまいぞ」と見送る透間、油斷見合せ彌左衛門、憎さも憎しと引だかへ、ぐつと突込恨の刃、うんとのつけに反りかへる。見るに親子は「ハツはつ」と、憎いながらも悲しさの、母は思はず駈け寄て、「天命しれや不孝の罪、思ひしれや」と云ながら、先立物は涙にて、伏沈みてぞ泣居たる。彌左衛門齒噛をなし、「泣な女房、何吠へる。不便なの、可愛のといふて、こんな奴を生て置は、世界の人の大きな難義、門端も踏ますなと云付置たに、内へ引入、大事の大事の維盛樣を殺し、内侍樣や若君を、能ふ鎌倉へ渡したな。腹が立て〱、涙がこぼれて胸が裂る。三千世界に子を殺す、親といふのはおれ計。適手柄な因果者に、能ふ仕おつた」と抜身の柄、碎る計に握り詰、剜かけるも心

ほてくろしき—かたはちいたき

天窓を剃云々—維盛の髻の總髪を剃りて月代を殘す

夢野の鹿—鳴く鹿も夢の合せのまゝになる

あの和郎—親を罵る詞

は、最前維盛卿のお首を討て入置た」女房「イヤ〳〵、此桶には此方に見せぬ物が有」と、引寄れば引戻し、彌「儕が何にも知らぬ故」女房「イヤ此方が知らぬ故」と、妻は銀と心得て、爭ひ果ねば梶原平藏、「扨は此奴等言ひ合せ。縛れくゝれ」と下知の下、「捕た〳〵」と取まく所に、「維盛夫婦餓鬼奴迄、唯の權太が生捕たり討取たり」と呼はる聲、「はつ」と計に彌左衞門、女房娘も氣は狂亂、唯の權太は嚴めしく、若君内侍を猿縛り、宙に引立目通りにどつかと引すゐ、「親父の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連歸り、道にて天窓を剃りこぼち、青二才にして彌助と名を變へ、此間はほてくろしき聟穿鑿、生捕て頬恥と存じたに思ひの外手強い奴、村の者の手をかつて、漸くと討取首に、致して持參、御實檢」と指出す。梶「ヲヽ成程、剃りこぼち彌助といふとは存じながら、先達て云ぬは彌左衞門めに、思ひ違ひを爲そふ爲。聞及んだ唯の權太、惡者と聞たが、お上へ對しては忠義の者、出來いた〳〵。内侍六代生捕つたな。ハテよい器量、夢野の鹿で思はずも、女鹿子鹿の手に入は、適の働き。褒美には親の彌左衞門めが命赦してくれふ」權「イヤ〳〵申、親の命ぐらゐを赦して貰をと思ふて、此働きは致しませぬ」梶「スリヤ親の命はとられても褒美が欲しいか」權「ハテあの和郎の命は彼の和郎と相對。私には兎角お銀」と願へば

矢筈—梶原の紋所

ひお出有り、積る咄しの其中へ、詮議に來ると知らせを聞、三人連て上市へ落しましたを、情ない、兄様が聞て居て、討取か生捕て、褒美にするとたつた今、追つかけて」といふよりびつくり彌左衛門、「ソレ一大事」と嗜の朱鞘の脇差、腰にぼつこみ駈け出す向ふへ、ハイ〳〵〳〵と矢筈の挑燈、梶原平藏景時、家來數多に十手持たせ、道をふさいで、「ヤア老悖め何處へ行。逃る迚逃さふか」と、追取まかれてはつと吐胸、先も氣づかひ、爰も遁れず、七轉八倒心は早鐘、時に時撞くごとくなり。梶「ヤア此奴横道者、倅に今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと云ぬける、其儘にして歸せしは、思ひ寄ず踏込ふ爲。此家に維盛かくまひ有事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、取物も取あへず、來れ共、油斷の體は、おのれを取逃すまい爲。サア首討て渡すか、但違背に及ぶか、返答せい」と責付られ、叶はぬ所と胸をすへ、彌「成程一旦は匿ひないとは申たれども、余り御詮議強き故隱しても隱されず、早先達て首討たり、御覧に入んお通」と、仲ひ入ば母娘、どふ成事と氣遣ふ中、鮓桶提彌左衛門、しづ〳〵出て向ふに直し、「三位維盛の首、御受取下されよ」と蓋を取んとする所を、女房駈寄りちやつと押へ、「コレ親父殿、此桶の内には妾が少と大事の物を入て置た。此方さん明て如何するぞ」彌「ホ汝は知るまい。此桶に

氣の毒の―下に涙の字を略す

せしめてくれん―捕へてやらう

近き御方に、鮓屋の娘が惚られふか。一生連添殿御じやと、思ひ込で居るものを、二世の堅は叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預りました」とどうど伏、身をふるはして泣ければ、維盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫涙、かはく間もなき折柄に、村の役人駈來り、戸をたゝいて、「コレ〳〵、爰へ梶原樣が見へまする。内掃除しておかれい」と、云捨て立歸る。人々はつと泣目も晴、如何はせんと俄の仰天。お里はさそくに心付、先々親の隱居屋敷、上市村へと氣をあせる。維「實其事は彌左衛門、我にも敎へ置しかど、最早開かぬ平家の運命、檢使を引請潔ふ腹かき切ん」と身拵、内侍は悲しく、「コレ此若の幼氣盛を思し召、一先爰を」と無理やりに、引立給へば維盛も、子に引さるる後髮、是非なく其場を落給ふ、御運の程ぞ危けれ。樣子を聞いたか嘘の權太、勝手口より踊出、「お觸の有た内侍六代、維盛彌助めせしめてくれん」と、尻引褰げ駈出すを、「コレ待て」とお里は取付き、「兄樣是は一生のわたしが願ひ、見赦して下され」と、頼めど聞ず跳ね飛し、「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」と縋るを蹴倒しはり飛し、最前置し銀の鮓桶、「是忘れては」と引提げて、跡を慕ふて追て行。「ノウ父樣母樣」と、お里が呼聲彌左衛門、母も駈出で、「何事」と問へば娘は、「コレ〳〵〳〵都から維盛樣の御臺若君、尋漂

ゆるかしき―ゆつくりした

此お姿は何事ぞ。袖の無い此羽織に、此お頭は」と取付て、咽び絶え入給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を當袖を當、伏沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏たる娘に目を付給ひ、「若い女中の寐入ばな、殊に枕も二つ有、定めてお伽の人ならん。斯ゆるかしきお暮しなら、都の事も思し召、風の便も有べきに、打捨給ふは胴慾」と恨み給へば、維「ホヲヽ、夫も心にかゝりしかど、文の落ちる恐れ有。わけて此家の彌左衞門、父重盛への恩報じと、我を助けて是迄に、重々厚き夫婦が情。何がな一禮返禮と、思ふ折から娘の戀路、つれなくいはゞ過あらん、却つて恩が仇なりと、假の契は結ぶ共、女は嫉妬に大事も洩すと、彌左衞門にも口留して、我身の上を明さず、仇な枕も親共へ、義理に是迄契りし」と、語り給へば伏たる娘、堪へ兼しか聲上てわつと計に泣出す。「コハ何ゆへ」と驚く内侍、若君引連迯のかんとし給へば、「ノウこれお待下され」と、涙と共にお里はかけ寄、「先々是へ」と内侍若君上座へ直し、「私はお里と申て、此家の娘、徒者憎いやつと、思し召れん申譯。過つる春の頃、色めづらしき草中へ、繪に有やうな殿御のお出。維盛樣とは露しらず、女の淺い心から、可愛らしいいとしらしいと思ひ初たが戀のもと。父も聞へず母樣も、夢にも知らして下さつたら、譬焦れて死れば迚、雲井に

早くも結ぶ夢―お里は早寐入りたり

に預け置、手負の事も頼んと、思ひ寄身も緣のはし、此家を見かけ戸を打ちたゝき、「一夜の宿」と乞給へば、維盛はよい退しほと表の方、叩く扃に聲を寄、「此内は鮓商賣、宿屋ではござらぬ」と、愛相のないが愛相と成、内「イヤ是申、稚を連た旅の女。是非に一夜」と宣ふにぞ、斷いふて歸さんと、戸を押ひらき月かげに、見れば内侍と六代君、はつと戸をさし内の樣子、娘の手前もいぶかしく、そろ／＼立寄見給へば、早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ、今のはどふやら我夫に、似たと思へど形容、頭も青き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押ひらいて維盛卿、「若葉の内侍か六代か」と宣ふ聲に、内「ヒヤア扨は我夫」六「父樣か」二人「ナウなつかしや」と取縋り、詞はなくて三人は、泣より外の事ぞなき。「先々内へ」と密に伴ひ、維「今宵は取わけ都の事、思ひ暮して居たりしが、親子共に息災で不思議の對面。去ながら、某此家に居る事を誰しらせしぞ。殊に又はるばるの旅の空、供連ぬも心得ず」と、尋給へば若葉の君、「都でお別れ申てより、須磨や八島の軍を案じ、一門殘らず討死と、聞悲しさも嵯峨の奥、泣てばつかり暮せしに、高野とやらんにおはするといふ者の有故に、小金吾召連お行衛を心ざす道、追人に出合、可愛や金吾は深手の別れ、頼も力もない中に、廻り逢たは嬉しいが、三位中將維盛樣が

殿もふけ—夫を持つ事

しんきーじれつたい

貞女兩夫云々—王蠋の言

躮權太郎めが盜衒、殺生の報ひぞと、思ひ知つたる身の懺悔、お恥しうござります」と、語るにつけて維盛も、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に、落る涙ぞいたはしき。娘お里は今宵待、月の桂の殿もふけ、寐道具抱へ立出れば、主ははつと泣目を隱し、父「コリャ彌助、今云聞かした通り、上市村へ行事を必々忘れまいぞ。今宵はお里と爰にゆるり。嬶とおれとは離座敷。遠いが花の香がなふて、氣樂に有ふ」と打笑ひ、奥へ行くのも娘は嬉しく、「テモ粹な父さん。離座敷は鄰しらず、餅つきせうと。ヲおかし。こちらは爰に天井拔、寢て花やろ」と蒲團敷く。維盛卿はつく〴〵と、身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心も濟ず氣も浮ず、打しほれ給ひしを、思はせぶりとお里は立寄、「コレナこれなア、ヲしんき。何初心な案じてぞ。二世も三世も堅の枕、二つ竝べた。此方や寐よ」と、先へころりと轉寐は、戀の罠とぞ見へにけり。維盛枕に寄添給ひ、「是迄こそ假の情、夫婦となれば二世の緣。結ぶにつらき一つの云譯。何を隱さふ某は、國に殘せし妻子有。貞女兩夫にま見へずの掟は夫も同し事、二世のかためは赦して」と、流石小松の嫡子迚、解けたやうでも何處やらに、親御の氣風殘りける。神ならず佛ならねばそれぞ共、しらぬ道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を、宿有方

はつたく〵。「コリヤ思ふ程仕業ができぬ。女房共やお里めは何しておるぞ」「イヤ只今奥へ。呼ましよ」と行彌助をば引とゞめ、内外見廻し表をしめ、上座へ直し手をつかへ、「君の親御小松の内府重盛公の御恩を請たる某。何卒御子維盛卿の御行衛をと、思ふ折から熊野浦にて出合、御月代をすゝめ、此家へお供申たれ共、人目を憚り下部の奉公。餘りと申せば勿體なさ、女房計に子細を語り、今宵祝言と申も、心は娘を御宮仕へ。彌助彌助と賤しき我名をお讓り申たも、彌助くるといふ文字の緣義。人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より梶原平藏景時來つて、維盛卿をかくまひ有と、退引させぬ詮義。烏を鷺と云拔ては歸れども、邪智深い梶原、若や吟味に參ろもしれずと、心工は致して置共、油斷は怪我の基、明日からでも我隱居、上市村へお越あれ」と、申上れば維盛卿、「父重盛の厚恩を請たる者は幾萬人、數限りなき其中に、お事が樣な者あらふか。昔はいか成者なるぞ」と、尋給へば彌「私めは平家御代盛りの折柄、唐土硫黃山へ祠堂金お渡しなさるゝ時、おんどの瀨戸にて三千兩の金盜取れ、役目の難義、切腹にも及ばん所、有難いは重盛樣、日本の金唐土へ渡す我こそは、日の本の盜賊と、御身の上を悔み給ひ、重て何の祟もなく御暇を下され、親里へ立歸つて由緒ある鮓商賣、今日を安樂にくらせ共、

鬼神に云々—諺、神は正直
まだ出かした—まだよかつた
ほつとり—スツカリ
地獄の種—未來は地獄に墮つる種になる三貫目の盗金
あたふたと—驚き慌てる

分けて母親、實と思ひ共に日をすり、鬼神に横道なしと、年貢の銀を盗れ死ふと、覺悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰。能ふ思ひ知れよ」與「アイ〳〵、思ひ知つてはおりますけれど、どうで死ねば成ますまい」母「コリヤやい」與「あい〳〵」母「常の倅が性根故、是も衒かしらね共、しやうぶ分にと思うた銀、親父殿に隱してやろ。是でほつとり根性直せ」と、そろ〳〵戸棚へ子の影で、親も盗をする母の、甘い錠さへ明け兼る。與「つい雁首でこち〳〵が、よござりまする」と仕馴れたる、おのが手わざを教ゆる不孝。親は我子が可愛さに、地獄の種の三貫目、跡をくろめて持て出、「何ぞに包んで遣りたいが」と、限りない程甘い親。「味いわろじや」と倅の權太、鮓の明桶よい入物、是へ〳〵と親子して、銀を漬けたる黄金鮓、蓋しめ栓しめ、「サアよいは。是で目立ぬ、提けて往ね」と、親子が工合の最中へ、苦い爺親彌左衛門、是も疵持足の裏、あたふたとして門口を、「戻つた明い」と打ちたゝく。「南無三親父」と、内には轉倒狼狽廻り、「其桶を爰へ〳〵」と明桶と、俱に竝べて親子はひそ〳〵、奥と口とへ引別れ、息を詰てぞ入にける。父「なぜ明けぬ〳〵」と頻にたゝけば奥より彌助、走りて戸を明る。内入悪く悧りを見廻し、父「コリヤ又何奴も寢ておるか。云付た鮓共は仕込で有か」と、鮓桶を提たり明たりぐ

よつて、少母者人にいふ事が有て來た。二人ながら奥へ失せふ」と睨廻され、うじ〳〵と、「是に」といふて立彌助、娘も跡に引添て、一間へこそは入にけれ。跡に母親溜息つき、「コリヤ又留守を考へ無心に來たか。性懲もない椀白者。其儕が心から、嫁御有ても、足ぶみ一つさす事ならぬ。聞きや此村へ來て居るげなが、互に知らねば摺合ても、嫁姑の明盲目、眼つぶれと人々にいはれるが面目ない。ヘヱ、不孝者め」と目に角を、立かはつたる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬと唖の權太、思案しかへて、「申母者人、今晩參つたは無心ではござりませぬ。お暇乞に參りました」母「ソリヤ何で」權「私は遠い所へ參ります程に、親父樣もお前にも、隨分お健でお健で」と、しほれかければ母は驚き、「遠い所とはそりや何所へ。如何した譯で何しに行」と、根問は親のだまされ小口。サアしてやつたと目をしばたゝき、「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、終に人の物箸片端、曲んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前わたしは大盜人に合ました」母「ヒヤア」權「其中に代官所へ上る年貢銀、三貫目といふもの盜取れ、云譯もなく仕樣もなく、お仕置に合ふよりはと、覺悟極めておりまする。情ない目に合ました」と、かます袖をば顔に當、しやくり上ても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の緣へ、とゞかぬ舌ぞうらめしき。甘い中にも

親の孫云々―瓜の蔓に茄子が出來ぬ如く娘も親の血統を受けて悋氣深しとなり

へ寄てかと、氣が廻つた案じた」と、女房顔して言うて見る。流石鮓屋の娘迚、早い馴とぞ見へにける。母はにこ〳〵笑を含み、「彌助殿氣にかけて下さんな。此吉野郷は、辨才天の数へによつて、夫を神共佛共、戴いて居よと有天女の掟。其かはり程悋氣も深い。段々又有様は親の孫、瓜の蔓にではござらぬ」と云くろむれば、彌「是はまあ却つて迷惑。兎角お世話の上、大切なお娘御迄下され、お禮の申やうもござりませぬ。さりながら、兎角お前には、彌助殿々々々と殿付をなされて、さり迚は氣の毒。やつぱり彌助どふ爲い斯う爲いと、お心安ふ、ナ申」母「イヤ〳〵それは赦して下され」彌「そりや又何故でござりますへ」母「さればいの、彌助といふ名は、是迄連合の呼名。殿付せずに、どふ爲い斯う爲いとは、勿體なふて云憎い。云馴れた通り、殿付さして下され」と、實に夫をば大切に、思ふ掟を幸に、娘へ是を聞けがしの、母の慈悲とぞ聞へける。お里彌助は明桶を、板間へ竝べて居る所へ、此家の惣領悴の權太、門口より乙聲で、「母者人々々々」と云つゝ入ば、お里は恟り、「又兄様か、よふお出」と揉手する。權「きよと〳〵しい其顔何じや。能う來たが恟りか。わりや彌助と味い事して居るそふなが、コリヤ彌助もよふ聞。今追出されて居ても、釜の下の灰迄おれが物。今日は親父の毛虫が、役所へ往たと聞たに

吉野―よしにかく
内義―ないにかく
嚊樣―母樣
知ると―知るとて
取なり―風つき
色も香も云々―古今集君ならで誰にか見せん云云の歌をとる

燈吹消し首引提げ、「忝い」と彌左衛門、直成る道も横飛に、我家をさして　三重立歸る。
歌 春は來ね共花咲かす、娘が漬た鮓ならば、なれがよかろと、買ひにくる、風味も吉野下市に、賣弘めたる釣瓶鮓、御鮓所の彌左衛門、留主の内にも商賣に拔目もない義が早漬に、娘お里が片綿襷、裾に前垂ほや〳〵と、愛に愛持鮎の鮓、押へてしめてなれさする、味い盛の振袖が、釣瓶鮓とは物らしよ。しめ木に栓を打込で、桶片付けて、「申嚊樣、昨日父樣の云しやるには、明日の晩には、内の彌助と祝言さす程に、世間晴て女夫になれとおつしやつたが、日が暮ても、お歸りないは嘘かいな」母「ヲあの言やる事はいの。何の嘘であろぞ。器量のよいを見込に、熊野參から連て戻つて、氣も心も知ると、彌助といふ我名を讓り、主は彌左衛門と改めて、内の事任せて置しやるは、和女と娶あはす兼ての心。今日は俄に役所から、親父殿を呼に來て、思はぬ隙入、迎に遣ろにも人はなし」里「サイナ折惡う彌助殿も、方々から鮓の誂。仕込の桶がたるまいと、明桶取にいかれました。もふ戻らるゝでござんしよ」と、噂半へ明桶荷ひ、戻る男の取なりも、利口で伊達で色も香も、知る人ぞしる優男、娘が好た厚鬢に、冠著せても憎からず。内へ入間も待兼ねて、お里は嬉しく、「アレ彌助樣の戻らんした。待兼た遲かつた。若や何處ぞ

もつけ―幸

つた〳〵と、滅多無性に請合たが、何と覺の有事かや」與「ハテ知た事。此方衆も常からおれが性根を知らぬか、血を分た躮でも、見限つたら門端も踏さぬ彌左衛門、膝ぶしが碎けても、畏つたら痺も切らさぬ。したが跡からのいひつけがもつけ。嵯峨の奥から逃げて來た、子を連た女と大前髮、此村へ入込だと追手からの知らせ、所で蜘殿が甜りかけて、捕へたら褒美と有」庄「こりや又格別よい仕事。皆も油斷をせまいぞや。ヲそれそれ、こんな時こなたの息子の、啀の權太を頼んで置ふ」と五人組、山道行ば彌左衛門、坂へおりしも行先の、手負にばつたり行當り、はつと飛退氣味惡ながら、挑燈振上そろ〳〵立寄、「テモむごたらしう切たは〳〵。旅人そふなが、追剝の所爲ならば、丸裸にしそふな物。路銀を當に惡者の所爲か」と、惡い子を持親の身は、案じ過して、「コレ〳〵手負殿々々々〳〵」と、呼も答もなき骸に、「扨は最早息絶たか。いとしや何國の人なるぞ。見ればふけた角前髮、袖振合も他生の緣。なむあみだぶつなむあみだなむあみだぶつ」と回向して、兎角浮世は老少不定、哀れを見るも佛の異見、人は啀まず眞直に、後生の種が大事ぞと、思ひつゞけて行過しが、何思ひけん立どまり、取つ置つの俄の思案、そろりそろりと立戻り、邊り見廻し〳〵て、拔身を拾ひ取るより早く、死首ぱつしと打落し、挑

知死期―息を引取る時
念押上云々―念押す上に間ひかける、押すは鮓の縁
蚰―蠱虫にて甜れは兀るといふ俗説を利用せり

界を敵に持、何時迄存へ居られふぞ。倶に殺してたもいの」と歎き給へば、理と、手負はいとゞ涙にくれ、「先君小松の重盛様は日本の聖人、若君は其孫君。諸神諸菩薩の恵のない事もござりますまい。末頼を思し召て、必短氣をお出しなされな。あれ〳〵向ふへ挑燈の火影。又も追手の來るも知れず。若君伴ひ此場を早々」御臺「イヤ〳〵深手の其方を見捨置て、いづくを當に行物ぞ、死ば倶に」と座し給へば、小金「エヽ腑甲斐ない、六代様は大事にないか、此手で死る金吾めではござりませぬ。聞入なければ直に切腹」御臺「コレ待てたも、夫程に迄思やるなら、成程先へ落ませう。必死んでたもるなや」小金「お氣づかひ遊ばすな。運に叶ひ跡より參ろ」御臺「必待て居るぞや」と、云ふ間も近付く挑燈の、火かげに恐れ是非なくも、若君連れて落給ふ、御心根の悼はしさ。手負は御跡見送り見送り、死ぬと申せしは僞り、三千世界の運借ても、何の此手で生られませぬ、内侍様六代様、是が此世のお別でござりますと、思ふ心も斷末魔、知死期も六つの暮過て、朝の露と消にける。程なく來る挑燈は、此村の五人組、何やらざは〳〵咄し合、山坂の別れ途に、庄屋作が立留り、「コレ彌助の彌左衛門殿、貴様は鮓商賣故、念押上におしかける。今云付た鎌倉の侍は、聞及んだ蚰。何やらこなたの耳を甜つて兀る程いひつけたら、畏

ぞ危けれ。忠義の天成小金吾が、難なく相手を取て押へ、ぐつと突込とゞめの刀、サア仕負せし嬉しやと、思ふ心のたるみにや、うんと其身も倒れ伏。ノウ悲しやと内侍若君勞り抱抱起し、「コレなう金吾々々、氣をはつきりと持てたも。其方が死で自や、此子は何と成物ぞ。情なや悲しや」と、泣入給ふ御聲の、耳に通つて手負は顔を上、「コレ内侍樣六代樣、諦めて下さりませ。心はやたけにはやれ共、もふ叶はぬ。我君維盛樣は、兼て御出家のお望、熊野浦にて逢奉りしといふ者有故、高野山へと心ざし、お二方をお倶したれど、中々此手では一足も行れず。コレ若君樣、能ふお聞遊ばせや。御臺樣を伴ひ、紙屋の宿といふ所に、内侍樣を殘し、お前は人を賴んで山へ登り、父樣のお名は云れぬ、今道心の御出家と尋てお逢遊ばせ。西も東も敵の中、平家の公達と悟られぬ樣、お命目出度う御成人の後、憚りながら金吾めが事、思し召出されなば、一滴の水、一枚の花、それが則冥途へ御知行。御成長待ております、お名殘惜しいお別れ」と、いふもせつなき息づかひ、六代君は取縋り、「死でくれな小金吾。其方が死ると、父樣に逢事がならぬは」と、泣入給へば内侍はせき上、「アレ聞てたも、子心でも其方一人を力にする。維盛樣に逢迄は、死まいぞ／＼と何故思ふてはたもらぬ。御一門は殘らず亡び、廣い世

ほて―手といふに同じ

木の葉―散る

と、鬼でも子には引さるゝ。權「テモ冷いほでじや」と手を引て、女房諸共立歸る。夕陽西へ入折から、主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が、追手の人數に取まかれ、數ケ所の疵を負ながら、内侍若君御供申し、一先都へ立歸るを、跡につゞいて數百人、遁さぬやらぬと追かけたり。手疵は負共氣は鐵石の、武里が死物狂と思ひの刃、爰に三人彼處に七人、はらり／＼と 三重 薙倒し、其身は秋の花紅葉、敵は木の葉の其跡へ、追手の大將猪熊大之進、おくればせにかけ來り、「ヤア死損め何處へ行。先頃嵯峨の奥にて取迯し、主人朝方公の御機嫌以の外、すご／＼館へ歸られず、庵坊主めに白狀させ、付廻したる此海道。サア維盛の御臺若君を渡し、腹かつさばけ」と呼はつたり。手負は流る血汐をぐつと一飲息をつぎ、「主馬の判官が躮小金吾武里、息有中はいつかな／＼」猪「ヲ其一言が絶命」と踊上つて討太刀を、てうど請とめ、はつしと反ね、ひらりと見せてはくるりと外し、手練を盡せど遉は手負。内侍若君、あぶ／＼ひや／＼、小石を拾ひ砂打付、及び越なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が、眼に入て目當は暗闇、透間に切込太刀に、眉間をわられて頭轉倒。乘かゝるを下よりも、突く鋒は豁骨、金吾ものつけに反り返る。あなたが起きれば石礫、猪熊切れ小金吾も、倶に深手の四苦八苦、修羅の街

引きさかれ—女を罵る詞
得居—得意
身體—身代
濟そて—濟さうといふので
まん—運
鼻毛をゆする—だましかける
寝おんな—寝ること勿れ
きびた—意味

つた」と、取付き歎けば突飛し、(權)「ヤア引きさかれめが、又してはよまい言。おれが盗術の根元は、皆うぬから發つた事」小仙「ホこりや大それた事。聞ねばならぬ。そりや又どふして」(權)「どふしてとは覺へが有ふ。おりや十五の年元服して、親父の云付で御所の町へ鮓商、隱し女の中に俤が振袖、見込だが鯱。鱶程猿人佛師達の、臍くりを盗出し、店の溜徳居先、身體半分仕廻ふて遣つたナ聞へたか。所で親父がほり出した。無理な和郎の。其時因果と此餓鬼が腹に有て、親方はねだる年貢米を盗んで立銀、其尻が來て首が飛のを、庄屋の阿呆が年賦にして、毎日の催促。其金濟そで博奕にかゝり、出世して小強請術。此中も親父の所の家尻を切て見たれど、妹のお里めと内の男めが、夜通しの鼻聲で、とんとまんが損ねた。又今日のまんのよさ。此勢に母の鼻毛をゆすりかけ、二三貫目ゑじめてくる。酒買て待ておれ。善太よ、日の暮から寝おんな。ヲ、夜通しせねばおれが商賣は讓られぬ」と、云つゝ立ば女房取付、「まだ此上に親御の物迄喰し取とは勿體ない。マア内へ戻つて下され」と、縋れど聞ず刎飛すを、「コリヤやい善太よ、留てくれ」と、母の教に利口者、「父樣内へ、サアござれ」と、手に纏ひ付蔦葛、子が跡追ば悪者は、小手縛ひうたてがる。しかも血筋の糸縄で、きびたが悪い出なをそ

ひじり取―かたり取、聖は邪智の儀にていふ

わつぱさつぱ―わや〳〵

きぬきせて―一層恐くして

にすつての事、ひじり取らりよと致した」と滅ず口、「其顋を」と立寄金吾を、內侍は押へ、「事ない中」と若君引連れ、立出給へば是非もなく、跡に引添小金吾も、無念をこたへ上市の、宿有方へと急ぎ行。「譬百度覗まれても、一度が一歩にや付きやせまい。うまい仕事」と喱の權太、金懷に押入て、盆屋へ急ぐ向ふへずつと、茶屋の女房が立ふさがり、「コレ權太殿、こりや何處へ」權「ホ小せんか。わりや店明て何處へいた」小仙「わしや旅人のお賴で坂本へ藥を買いに」權「ヲそりやよい手筈。われが居たら又邪魔しやうに、外して居たでまし〳〵」と、いふ胸ぐらを取て引すゑ、小仙「コレこなたに衒さす氣で外しては居ぬぞや。最前戾りかゝつた所に、わつぱさつぱ。指出たら衒の正銘顯はれ、どんな事にならふも知れぬと、あの松影から聞て居た。へヱ、こなさんは恐しい工みする人じや。姿は產め共心は生まぬと、親御は鈞瓶鮓屋の彌助の彌左衞門樣といふて、此村で口も利お方。見限られ勘當同前、御所の町に居た時こそ道も隔たれ、跡の月から同じ此下市に住でも、嫁か孫かとお近付にもならぬはの、皆此方樣の心から。喱の權にきぬきせて、衒の權といはうぞや。此善太郎は可愛ないか。博奕の資本が入ならば、此子やわしを賣て成と、重て止て下さんせ。何の因果で其樣な、恐ろしい氣にならしや

あり樣―お前さん

あたゝまる―儲ける

ふけらす―他人へ渡す

た二十兩」小「スリヤどふしても身が盜んだとな」男「ハテしれた事」小「ムウして其盜んだ證據は」男「コレ此皮籠の中紐何故解いた。あり樣の荷物に紛失が有と赦さぬといふたではないか。理詰じやぞや、出しやいの〳〵」と、せり詰られて小金吾も、「もふ是迄」と拔放す。内侍はあはて抱きとめ、「尤じや道理ぢや。短氣な事を仕やつては、わしも此子も倶に難義。無念に有ふと堪忍して、あの者のいふ樣に、了簡付てやつてたも。足弱連たを災難と思ひ、胸をしづめてたもいの」と、涙にくれての給ふにぞ、血氣にはやる小金吾も、見るに忍びず、「世が代の時でござらふなら、ずた〳〵に試しても、厭き足らぬ奴なれ共、何をいふても茅花の穗にも怯る身の上、御意の通りに致しましよ。ヘエヽ口惜ふござりまする」と、こなたは大事の二方を、お供の身なれば無念を堪へ、奥齒嚙む程つきあがり、「廿兩といふ金、あたゝまつて置て、其頰何じや。ホウ怖いは〳〵、此赤鰯で切か、此目で嚇すか。前髮を一筋づつ拔くぞよ。但しもふ金はふけらしたか、連の女郎から穿鑿」と、弱みへかゝるを、首筋つかんで引戻し、用意の路金いふ程出して貺付、小「大切なお方をお供した故、衒取るゝ廿兩。持てうせい」と、打付れば、衒のならひ金見ると、目に佛なく手ばしかく、拾ひ集めて耳讀み揃へ、「テモ恐ろしい此金を、那智若衆め

笥—行李
祠堂金—社寺建築の寄附金
くすねた—窃に掠取る
赤鰯—鈍刀
春永に—日が永くなつて暇な時にせよ、嘲弄の詞

包、渡せば請取不思議顏、「此中括の解けたは」「イヤそれは最前變つた樣には思へども、もしやとちよつと見た計」と、いふ間に開く張皮籠、引ちらけて袷の袖、浴衣の間を探し見て、悄り仰天。笥打ふるひ、「こりやどふじや。コリヤ無いは、無いは〳〵」と、きよろきよろ目玉、小「何がない、何見へぬ」と傍も氣の毒目をくばれば、兼て工みのいがみ男、腕まくりして、「コレ前髪殿。此皮籠の中に、人に頼れて高野へ上る祠堂金、廿兩入置た。コリヤくすねたな〳〵、サア出した〳〵、サ出しやいの」と、取てもつかぬ難題に、小金吾むつと反打かけ、「此奴下郎め、武士に向つて何がなんと。今一言云て見よ」と、きつさうかはれどびく共せず、「盗人たけ〴〵しいと、其高ゆすりくはぬ〳〵。赤鰯をひねりかけ、威嚇して此場をぬけるのか。ほろうまい、そんな事春永になされ。わづか廿兩で首綱のかゝらぬ中、四の五のいはずに出した出した」と、もがりいがみの強請者、小「モウ堪忍が」と拔かけしが、お二方の姿を見て、じつとこたへて胸撫おろし、「コレサ若い人、そりや其元の覺へ違ひ。見らるゝ通り足弱をお供したれば、縦何萬兩落散つて有ても、目をかける所存はなし。とくと其方を吟味召れ」と、いはせも果ず、男「コレ其足弱連たが盗する付目じや。よもやと思はせ、仕てあるが當世の流行物。何萬兩は入ぬ、たつ

あたふた―慌てて

手すりたいぼう―慇懃者

おりないー―ござらぬ

臺座の別―頭を斬られる

若君悦び悩みも忘れ、「小金吾ひらへ」の御機嫌に、内侍も嬉しく、「ヲヽ好い事してもらやつた。過分々々」と一禮も冥加に余ると知らざりし、旅の男は自慢顔、「何と手の内御覧じたか。まそつと打て進ぜたいが、遠道かゝへお伽申ても居られず。我等は參る」と、包を脊負、「御縁有ば重て」と、いふて其場を行過る。小金吾木の實を拾ひ仕廻、「サア是で堪忍なされ。扨々今の男は氣轉者」と、見やる床几の風呂敷包、同じ色でもどこやらが、違ふた様なと走り寄、内改むれば覺なき、しかも是は張皮篭、こちは衣類の藤行李。「扨は木の實に氣を奪はせ、取かへ失せたか、但しは麁相か。何にもせよ、追かけて取かへさん」とかけ出す所へ、向ふよりあたふた戻る以前の男、「麁相いたした、御免々々」といひつゝ包指出し、「日暮もちかし、心はせく。同じ色の風呂敷故、重い輕いに氣も付ず、取ちがへた麁相、道にてふつと心付、取てかへしてお詫言。眞平御免下され」と、顔に似合ぬ手すりたいぼう。小金吾は胸落付、「麁相と有れば云分もおりないが、萬一紛失の物有と赦さぬが合點か」男「何が扨、相違有らば臺座の別れ。御存分になされませ」小「ムウ其一言なら疑ふに及ばね共、中改めて請取ん」と包をひらき、改め見れば相違もなし。「實に麁相に極まつた、申分なし。其方の荷物も持ておいきやれ」と、床几に殘る風呂敷

わやく半分ー冗戯半分
榧ーとるかやにかく
道草ー道で手間とる
ほがらー中のうつろ

案内、太義ながら其方調へてくれまいか」女房「ヲヽそれもお安い事。わたしが調へて來て上ませう。善太留主仕や、但は行か」「おれも」と慕ふ子を連て、器量よければ心迄尊い寺の門前へ、藥を買に急行。「ハテ心よい女中や」と内侍は見やり、「コレ六代、爰に大分木の實が有が、拾ふて遊ぶ氣はないか。金吾が拾ふが大事ないか」と、いさめの詞に引立られ、「おれも拾を」と若君の、病もわやく半分の、起立給へば内侍も俱々、「サアサア拾を」「イヤ拙者めが」と小金吾が、廿に近い大前髮、大人氣ないも若君の、機嫌取る榧栃の實を、拾ひ集むる折柄に、若き男の草臥足、是も旅立風呂敷包、脊負てぶらぶら茶店を見付、「どりや休んで一服」と、包をどつかり床几におろし、「御免なりませ火を一つ」と、烟草吸付、「コリヤ皆樣方は開帳參でござりますか。和子樣は道草か。わしらが在所の子供と違ひ、御奇麗な生れ付や」と、譽めても咄しかけても、心置身はそこ〳〵に、詞數なく拾ひ居る。暫く休んで彼の男、「コレ〳〵、其落た木の實は虫入で、見かけがよふても皆ほがら、木に有をお取なされ」といふに、金吾は、「こな男、何をいふ二丈余りの高木、かけ上る蹴爪は持たぬ」男「サそれを心安ふ取やうがござります」小「そりやどうして」男「さらば鍛錬お目にかけふ」と、小石拾ふて打礫、枝に當つてばら〳〵〳〵。

出端—茶の入れたて

端香云々—五六歳の子持と思へば興がさめる

枝おりや—若葉の序にをけり

忍海—負ふにかく

陀羅輔—野老にて製したる腹痛の薬

第三

歌三芳野は丹後武藏に大和路や、わけて名高き金峯山、藏王彌勒の御寶物、御開帳辻野も山も、賑ふ道の傍に、茶店構へて出端汲む、青前垂の入端は、女房盛の器量よし、五ツか六ツの男の子、傍に付添嗅樣と、いふで端香もさめにけれ。枯れ殘る身はいとゞ猶枝をりや、若葉の内侍若君は、主馬の小金吾武里が、嵯峨を逃れて維盛の、若や高野と志ざし、旅の用意の小風呂敷、脊に忍海吉野なる下市村に著けるが、若君六代疳疾になやみ給へば、小「幸の茶店、暫く床几へお休み」と、内侍を誘ひ、其身も脊負し包をおろし、小「お茶」と指圖に 女房「あい／＼」と、愛相こぼれて指出す。内侍はつく／＼見給ひ、「こりや此方も子持よの。自も連合の忘れ筐を伴ひしに、道よりなやみて貯し、藥を殘らず飲きらし俄の難義。子持つた者は相身互、嗜あらば所望したし」と仰に女房、「夫はまあいかゐ御難義。私が子は生れてより、腹痛一つおこしませねば、何の用意もござりませぬ。ハテそれは氣の毒や。イヤ申ほんにそれ／＼、幸此村の寺の門前に、洞ケ川の陀羅輔を請賣人がござりますれば、お供の前髪樣、つい一走り」小「イヤ／＼身共は當所不

よろぼひ｜ヒヨロ〳〵して

吹上られ、今も命を失はんかと、多くの官女が泣さけぶは、阿鼻叫喚、陸に源平戰ふは取もなほさず修羅道の苦しみ、又は源氏の陣所々々に、數多駒の嘶くは畜生道、今いやしき御身となり、人間の憂艱難、目前に六道の苦しみを請たまふ。是といふも父清盛、外戚の望有によつて、姫宮を御男宮といひふらし、權威をもつて御位に即け、天道をあざむき、天照大神に僞はり申せし其惡逆、積り〳〵て一門我子の身にむくふたか、是非もなや。我かく深手を負たれば、存へ果ぬ此知盛、只今此海に沈んで、末代に名を殘さん。大物の沖にて判官に怨をなせしは、知盛が怨靈なりと傳へよや。サア〳〵息ある其中に、片時も早く帝の供奉を、賴む〳〵」とよろぼひ立てば、義「ヲヽ我は是より九州の尾形方へ赴くなり。帝の御身は義經が、何國迄も供奉せん」と、御手を取て出給へば、龜井駿河武藏坊、御跡に引添たり。知盛莞爾と打笑て、「昨日の怨は今日の味方、あら心安や嬉しやな。是ぞ此世の暇乞」と、ふり返つて龍顏を、見奉るも目に涙、今はの名殘に天皇も、見返り給ふ別れの門出、留る此方は冥途の出船、三途の海の瀬踏せんと、碇を取て頭にかづき、さらば〳〵も聲計、渦卷波に飛入て、あへなく消たる忠臣義心、其亡骸は大物の、千尋の底に朽果て、名は引汐にゆられ流れ〳〵て、跡しら波とぞ成にける。

いらたか―粒の平たく四角なる數珠
四姓―源、平、藤、橘

西海の波云々―此六道物語は平家物語の最後の文を取れり

持つたるいらたか知盛の、首にひらりと投げかくれば、知「ム、扨は此珠數をかけたのは、知盛に出家とな。エヽ汚らはし〳〵。抑四姓始つて、討ては討れ、討れて討は源平のならひ。生かはり死かはり、恨をなさで置べきか」と、思ひ込だる無念の顔色、眼血ばしり髪逆立、此世から悪靈の相を顯はす計なり。かくと聞より亀井駿河、「主君の身の上氣遣し」と、追々かけ付取廻せば、御幼稚なれども天皇は、始終の分ちを聞し召、知盛に向はせ給ひ、「朕を供奉し、永々の介抱は其方が情、今日又丸を助けしは、義經が情なれば、仇に思ふな知盛」と、勿體なくも御涙を、浮め給へば典侍の局、倶に涙にくれながら、「ヲヲ能ふおつしやつた。何時迄も義經の志、必忘れ給ふなや。源氏は平家の仇敵と、後後迄も此お乳が、帝樣にあだし心も付ふかと、人々に疑はれん。さあれば生てお爲にならぬ。君の御事くれ〴〵も、頼み置は義經殿」と、用意の懐劒咽に突立、名殘惜げに御顔を、打守り〳〵、「さらば」と計を此世の暇、あへなく息はたへにける。思ひ設けぬ局の最期、君は猶更知盛も、重なる憂目に勇氣も碎け、暫し詞もなかりしが、天皇の御座近く、涙をはら〳〵と流し、知「果報はいみじく、一天の主と産れ給へ共、西海の波に漂ひ、海にのぞめ共、汐にて水に渇せしは是餓鬼道、ある時は風波に遭ひ、お召の船を荒磯に

氣つかはれそ—
氣遣し給ふな

はんとは適々。我此家に逗留せしより、竝〱ならぬ人相骨柄、察する所平家の落人。辨慶に云含め、帝を探る計略、過つて踏越へしに、果して武藏が五躰のしびれ。其上我に方人の躰を見せ、心をゆるさせ討取術。我其事を量知り、艀の船頭を海へ切込、裏海へ船を廻し、疾より是へ入込で、始終委しく見屆け、帝も我手に入たれ共、日の本をしろしめす萬乘の君、何條義經が擒にするいはれあらん。一旦の御艱難は、平家に血を引給ふ故。今某が助け奉つたり迚、不和なる兄賴朝も、我誤りとはよも云ふまじ。必〱帝の事は氣づかはれそ知盛」と、聞嬉しさは典侍の局、「ヲヽ、あの詞に違ひなく、先程より義經殿、段〱の情にて、天皇の御身の上は、知邊の方へ渡そふと、武士の堅い誓言。悅んでたべ知盛卿」と、聞に凝つたる氣も逆立、局を取て突退、知「エヽ、無念口惜や。我一門の仇を報はんと、心魂を碎きしに、今夜暫時に術顯はれ、身の上迄知られしは天命〱。まつた義經、帝を助奉るは、天恩を思ふ故。是以て知盛が、恩にきるべきいはれなし。サア只今こそ汝を一太刀亡魂へ手向ん」と、痛手によろめく足踏しめ、長刀押取立向ふ。辨慶押隔、打物わざにて叶ふまじと、珠數さら〱と押揉んで、「いかに知盛、斯有んと期したる故、我も今朝より船手に廻り、計略の裏をかいたれば、最早惡念發起せよ」と、

恒河の鱗―無數の魚類

大童―髮をぼうぼうにする

くどくぞ道理なる。局は涙の隙よりも、御髪掻き上掻き撫て、「今は早、平家極樂への御門出を急がん」と、帝をしつかと抱上て、磯打波に裳を浸し、海の面を見渡し〳〵、「いかに八大龍王、恒河の鱗、安徳帝の御幸なるぞや、守護仕給へ」と、うづまく波に飛入んとする所に、何時の間にかは九郎義經、駈寄て抱留給へば、典「なう悲しや。見赦して死せてたべ」と振返つて、典「ヤア此方は」義「聲立な」と帝を小脇に引抱へ、局の小腕ぐつと捻上、無理無躰に引立〳〵、一間の内に入給ふ。かゝる所へ知盛は、大童に戰ひなし、鎧に立矢は蓑毛のごとく、威も朱に染なして、我家の内に立歸れば、跡を慕うて武藏坊、表の方に立聞共、しらず知盛聲を上、「天皇はいづくにまします。お乳の人典侍の局」と、呼はり〳〵どうと伏、「エヽ無念口惜や。是程の手に弱りはせじ」と、長刀杖に立上り、「お乳の人我君」と、よろぼひ〳〵かけ廻れば、一間を踏明九郎判官、帝を弓手の小脇にひん抱、局を引付突立給へば、知「あら珍らしや、いかに義經、思ひぞ出る浦浪に、知盛が沈みし其有樣に、又義經も微塵になさん」と、長刀取直し、「サア〳〵勝負」と詰寄ば、義經少しも騷ぎ給はず、「ヤア知盛さなせかれそ。義經がいふ事有」と、帝を典侍の局に渡し、しづ〳〵と歩み出、義「其方西海にて入水と僞り、帝を供奉し此所に忍び、一門の仇を報

なん〳〵たる—漫々たるなどの意なるべし

な、源氏の武士はびこりて、恐ろしい國。此波の下にこそ、極樂淨土といふて、結構な都がござります。其都には祖母君二位の尼御を始め、平家の一門知盛もおはすれば、君も其處へ御幸有て、物憂世界の苦しみを、まのがれさせ給へや」と、宥め申せば打しほれ給ひ、帝「あの恐ろしい波の下へ、只一人行のかや」典「ア、勿體ない。此お乳が美しう育上たる玉體を、あのなん〳〵たる千尋の底へ遣りまして、何と身も世も有れふぞ。此お乳もお供する。いとし可愛の育ひ君、何とお一人やられふぞ」帝「夫なら嬉しい。そなたさへ往きやるならば、何國へなり共往くわいの」典「ヲヽ能ういうて給はつた」と、引よせ引よせ抱しめ、「火に入水に弱るゝも、前の世の約束なれば、未來の誓まし〳〵て、天照大神へ御暇乞」と、東に向はせ參らすれば、美しき御手を合せ、伏拜み給ふ御有樣、見奉れば氣も消々、「ヲヽ能ふお暇乞なされたのふ、佛の御國は此方ぞ」と、指さす方に向はせ給ひ、帝「今ぞ知る御裳川の流には波の底にも都有とは」と、詠じ給へば、典「ヲヽお出かしなされた。能ふお詠遊ばした。其昔月花の御遊の折から、斯樣に歌を詠給はゞ、父帝は申に及ばず、祖父淸盛公、二位の尼君、取わけて母門院樣、なんぼう悦び給はんに、今はの際に是がまあ、いふに甲斐なき御製や」と、かきくどき〳〵、涙の限り聲限り、歎き

かいくれに—一向に

さもしい—まずい

主従手いたく働き、味方殘らず討死、まつた主君知盛も、大勢に取まかれ、既に危く見へけるが、かいくれに御行方知れず、必定海に飛込で、御最期と存れば、冥途の御供仕らん」と、云もあへず諸肌くつろげ、持たる刀腹に突立、汐の深みへ飛込ば、典「ヤア扨は知盛もあへなく討れ給ひしか。はつ」と計にどうど伏し、前後も知らず泣ければ、君も見る事聞事の、悲しさ怖さ取まぜて、倶に涙にくれ給ふ。局は歎の中よりも、君を膝に抱き上、御顔つく〴〵と打守り、典「二歳餘りは此見苦しき荒屋を、玉の臺と思し召ての御住居。朝夕の供御迄も、下々と同じ様にさもしい物。夫さへ君の心では、殿上にての榮花共思ふてお暮しなされしに、知盛お果なされては、賤が伏屋に御身一つ、置奉る事さへも、ならぬ様に成果て、終には此浦の土と成給ふかや。上もなき御身の上に、悲しい事の數々が續けば續く物かいの」と、くどき立〳〵身も浮く計歎きしが、「アヽよしなき悔みごと。御覺悟急がん」と、涙ながら御手を取、泣く〳〵濱邊に出けれど、いと尋常なる御姿、此海に沈めんかと、思へば目もくれ心もくれ、身もわな〳〵とぞ顫ひける。君はさかしくましませど、死る事とは露知り給はず、「コレなう乳母、覺悟々々といふて、何國へ連て行のじやや」典「ヲヽ、そふ思し召は理り。コレ能ふお聞遊ばせや。此日本には

知盛の郎等相摸五郎、息つきあへず馳付ば、「樣子は如何に、早う聞かせよ〳〵」と、局もせきにせき立たり。相「されば豫の術の通り、暮過より味方の小船を乘出し〳〵、義經が乘たる元船間近く漕ぎ寄しに、折しも烈敷武庫山颪に、連て降くる雨雷、時こそ來れと水練得たる味方の勢、皆海中に飛込々々、西國にて亡びし平家の一門、義經に恨をなさんと、聲々に呼はれば、敵に用意やしたりけん、挑燈松明ばら〳〵と、味方の船に乘移り、爰を先途と戰へば、味方の駈武者大半討れ、事危く見へ候。某は取てかへし、主君知盛の御先途を見屆けん」と、申スもあへずかけり行。典「サア〳〵大事が發つて來た。さるにても、知盛の御身の上氣遣はし。沖の樣子は如何ならん」と、一間の戸障子押明れば挑燈松明星のごとく、天を焦せば漫々たる、海も一目に見へ渡り、數多の小船遣り違へ遣り違へ、船矢倉を小楯に取、敵も味方も入亂れ、舟を飛越刎こへて、追つ捲つ、えい〳〵聲にて切結ぶ、人影迄もあり〳〵と、戰ふ聲々風に連、手に取やうに聞ゆるにぞ、「あれ〳〵御覽ぜ。あの中に知盛のおはすらん」帝「やよいづくに」と伸上り、見給ふ中に挑燈松明、次第々々に消失て、沖もひつそとしづまれば、是こそ知盛の討死の相圖かと、余り軻れて泣かれもせず、途方にくれて立たる所に、入江の丹藏朱に成て立歸り、「義經

奏―左右
八つ―帝の御年と時大鼓とかく
ねび―大人び
山鳩色の御衣―天子所用の黄櫨染の袍

燈松明一度に消なば、知盛が計死と心得、君にも御覺悟させまし、御骸見苦しなき樣に」帝「ヲ、跡氣づかはずと、好き奏を知らせてたべ。知盛早ふ」と勅、知「こは有がたし」と龍顏を拜し申せばおとなしき、八つの太鼓も御年の、數を象る相圖のしらせ、知「早お暇」と謡ゆふ浪に、長刀取直し、巴波の紋あたりを拂ひ、砂を蹴立て、早風につれて、眼をくらまし、飛がごとくに 三重 かけり行。跡見送つて典侍の局、御傍に差寄つて、「今知盛のおつしやつたを、能ふお聞なされたか。稚けれども十善の君、此さもしき御姿にては、軍神への恐れ有、御裝束」と立上り、まさかの時は諸共に、冥途の旅の死裝束と、心に籠めし納戸口、涙隱して入りにける。夜も早次第に更渡り、雨風はげ敷聞ゆれば、「今頃は知盛の難義仕やらん。いとほしや」と、ねびさせ給へば只管に、案じ詫びたる御氣色。程なく局は、山鳩色の御衣冠、恭しく臺に載せ、其身も倶に衣服を改め一間を出、「片時も早く御裝束」と御傍に立寄、曉の上着を脱かへて、下の衣上の衣、御衣冠に至る迄、召さしかゆればあてやかに、始の御姿引きかへて、神の御末の御粧ひ、いと尊くも見へ給ふ。典「サア是からは知盛の吉左右を待つ計」と、そよとの音も知らせかと、胸とゞろかす太鼓鐘。すはや軍眞最中と、君のお傍に引添て、知らせを今やと待折から、

すゞどき―鋭き

海屋銀平とは假の名、新中納言知盛と、實名を顯はす上は、恐れあり」と娘の手を取、上座に移し奉り、「君は正しく八十一代の帝、安德天皇にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ、所詮勝べき軍ならねば、玉體は二位の尼抱奉り、知盛諸共海底に沈みしと欺き、某供奉して此年月、お乳の人を女房といひ、一天の君を我子と呼、時節を待し甲斐有て、九郎大夫義經を今宵の中に討取、年來の本望を達せんは、ハアア悅ばしや嬉しやな。典侍の局も悅ばれよ」と勇める顏色、威有て猛く、平家の大將知盛とは、其骨柄に顯はれし。典「扨は常々の御願ひ、今夜と思し立給ふな。わきて九郎はすゞどき男子。仕損じばしし給ふな」知「ヲヽ、夫にこそ術有り。北條が家來相摸五郎といひしは、我手下の船頭共。討手と僞り狼籍させ、某義經に方人の體を見せ、心をゆるさせ、今夜の難風を日和と僞り。船中にて討取術なれ共、知盛こそ生殘つて、義經を討たんなりと沙汰有ては、末々君を御養育もならず、重ねて賴朝に仇も報はれず。さるによつて、某人數を手配り、艀にて跡より追付き、義經と海上にて戰はゞ、西海にて亡びたる平家の惡靈、知盛が怨靈なりと雨風を幸に、彼等が眼を眩ません爲、我形も此ごとく、怪しく見する白糸威。此白柄の長刀にて、九郎が首取立歸らん。勝負の合圖は、大物の沖に當つて、挑

もやひ―繋いだ舟のともづな
入相時―夕方にて入るにかく
おうへ―入口を入りて階盤裏のある居間

の御供仕らん」と、申上れば義經公、「船中の事は銀平が宜しく計ひ得させよ」と、仰にはつと頭をさげ、「只今も申通り、幼少より船の事はよく鍛錬仕れば、御見送の爲拙者も手船で、須磨明石の邊迄參らん。元船の有所は五町余り沖の方、舟は則ち日吉丸。思ひ立日が吉日吉祥、我も雨具の用意を致し、跡より追付奉らん。女房君を御見立申せ」と、云捨納戸に入ければ、妻は心得御身をば、隱れ蓑笠參らする。「ヲヽ、心遣忘れじ」と、龜井駿河諸共に、蓑笠取て被せ參らせ、二人も手早く紐引しめ、「いざせ給へ」と主從三人、打連立て濱邊に出、兼て用意の艀に召給へば、兩人も飛乘り〳〵、「サア〳〵船頭仕れ」と、もやひ解けば女房、門送して舟場に下り、「御武運目出度まし〳〵て、御緣も有ば重ねて御目にかゝるべし。さらば〳〵」に艪を押立て、沖へ出船女房は、いきせき内へ入相時、「ア、心せかれや」と、火燧ならして油さし、神棚おうへに灯をてらし、「娘々お安〳〵」と呼出し、「暮方に手習もおきやらいで。今夜は父樣、侍衆を元船迄送つてなれば、和女も寐る迄爰に居や。ほんに主とした事が、千里萬里も行樣に身拵へ、もふ日も暮た、用意がよくばいかしやんせ」と、呼べどぐつ共答なし。若晝の草臥で、轉寐では有まいか、「銀平殿〳〵」と呼立れば、銀「謡抑 是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。渡

かいわい―界隈附近
竈將軍―家で威張るだけのもの

に似ぬうい働き。我一の谷を責し時、鷲の尾といへる木樵の童に、山道の案内させしに、山樵には剛なる者故、武士となして召つかひしが、それに勝つた汝が働き。あつぱれ昔の義經ならば、武士に引上召つかはんに、有に甲斐なき漂泊の身」と、武勇烈しき大將の、身を悔みたる御詞。駿河龜井も諸共に、無念の拳を握りける。銀「是は〳〵有難い御仰。私も此かいわいでは、眞綱の銀平迚、人に知られて居ますれど、高が町人、今日の働きも畢竟、申さば竈將軍。些細な事がお目にとまつて、我々連に御褒美の御詞、冥加に余る仕合せ。殊に君を見覺へ奉るは、八島へ赴き給ふ時、渡邊福島より兵船の役にさされ、拙者が手船も御用に達し、一度ならず此度も、不思議のお宿を仕るも深き御縁。去によつて、お爲を存申上たきは、北條が家來取てかへさば御大事、一刻も早く御乘船然るべし」と、いひもあへぬに駿河次郎、「我々も其心。此天氣にて御出船は如何有ん」銀「アア夫をぬかつてよござりましよか。弓矢打物はお前方の業、船と日和を見る事は舟問屋の商賣。昨日今日は辰巳、夜半には雨も上り、曉方には朝嵐にかはつて、御出船には引抜の上々日和。數年の功にて見置た」と、見透す樣にいひけるは、其道々としられける。龜井六郎ずんど立、「ヲヽ、銀平出かしたり。其方が詞に付て雨の晴間に片時も早く、主君

はしちかしー飛ばし
もんどりーとんぼかへり
もやくやーゴタゴタ

め、嘲る頬げた切裂かん」と、拔打に切付る。引外して相撲が利腕むずと取、鬼「コリヤもふ了簡がならぬはい。町人の家は武士の城郭。敷居の内へ泥脛を切込さへ有に、此刀で誰を切。其上に平家の余類の、イヤ義經の所縁なんどと、旅人を威嚇のか。よし又判官殿にもせよ、大物に隱なき、眞綱の銀平がおかくまひ申たら何とする。サア眞綱がひかへたならば、びく共動いて見よ。素頭微塵にはしらかし、命を取樹此世の出船」と、刀もぎ取宙に引提持て出、門の敷居にもんどり打たせば、死入計の痛をこらへ、頬をしかめて起上り、相「亭主め、能く覺へて居よ。此返報には、うぬが首さらへ落す。覺悟せよ」鬼「また顋げた叩くか」と、庭なる碇をぐつと指上、微塵になさんと投付れば、暴風に遭ふたる小船のごとく、尻に帆かけて主從は、跡を見ずして迯げ失ける。鬼「ホヽウ好いざま〳〵」と、烟草盆引寄せ、「何と女房、奥のお客人も今のもやくや、お聞なさつたで有ふな」と、女夫が私語く咄し聲、漏れ聞へてや、一間の襖押開き義經公、旅の艱苦に窶れ果たる御容顏、駿河紀井も跡にしたがひ立出る。「こは存よりなや」と、夫も俄に膝立直し、夫婦諸共手を下れば、義「隱すより顯はるゝはなし、と兄頼朝の不興を請、世を忍ぶ義經、尾形を頼み下らんと、此所に一宿せしに、其方よくも量知て、時政が家來を追退け、今の難義を救ふたるは、業

わが女房—汝が女房

反—刀の反にて振かけるさま

武—戈と止の合字

此家の亭主渡海屋銀平。御立腹の樣子、我等に仰下さるべし」と、膝を折手をつけば、相「ムウ儕亭主なら、云て聞さん。身は北條の家來なるが、義經の討手を蒙り、奧の武士が借たる船、此方へ借らん爲、奧へ踏込、身が直に其武士に逢ふといへば、わが女房がさへぎつて、留むる故に今此時宜」銀「ヘエ憚りながら、そりやお前が御無理な樣に存られます。何故と仰しやりませ。人の借て置た船を、無理に借らふとおつしやりますは、ナア御無理じやござりませぬか。其上にまだ、宿かりの座敷へ踏込ふとなされたを、やらんとおつしやつて女房共を、踏だり蹴たりなさるゝは、お侍樣には似合ませぬ樣に存じます。此家に一夜でも宿致しますれば商旦那樣。座敷の中へ踏込しましては、如何も私がお客人へ立ませぬ。何うぞ御了簡なされて、お歸りなされて下さりませ」相「イヤ素町人め、鎌倉武士に向つて、歸れとは推參。是非奧へ踏ん込」と、反打ちかへしてひしめけば、銀「アヽお侍樣、それはお前の御短氣でござりましよ。私も船問屋はして居ますれど、聞はつゝておりますが、惣別刀脇指では、人切物じやないげにござります。お侍樣方の二腰は身の要害、人の麁忽狼藉を防ぐ道具じやとやら承はりました。去によつて、武士の武の字は戈を止むるとやら、書きますげにござります」相「ヤア小癪な奴

權付に—權柄を以て

時政の名代として、討手に只今下れ共、打つゞく雨風にて、船一艘も調はず。幸此家に借置たる船、日和次第出船と聞、願ふ所なれば其船、身共が借請、艪を押切て下らんず。旅人あらばほいまくり、座敷を明て休息させい。早ふ〳〵」と權威を見せて延し上れば、女房ははつと返答に、當惑しながら傍に寄、「御大切な御用に、船がなうて嘸御難義。手前のお客も二三日以前より、日和待して御逗留。今更船を斷いふて、お前の御用にも立がたし。殊に先樣も武士方なれば、御同船共申されず。何とぞ御了簡有て、今夜の所をお待なされて下さらば、其中には日和も直り、何艘も〳〵、入船の中を借調へて上ませう」相「默れ女。逗留がなれば儕等には云付ぬ。所の守護へ權付に云付る。奥の侍が怖ふて、おのらが口から云憎くば、身共が直に云べい」と、ずんど立袂にすがり、りう「おせきなさるは御尤なれ共、お前を奥へやりまして、直に御相對さしましては、船宿の難義。何分夫の歸らるゝ迄、お待なされて下され」と、手を擦り詫れど、相「ヤアしちくどい女郎奴。奥の武士に逢さぬは、察する所平家の余類か、義經の所縁の者。家來ぬかるな、油斷すな」と、留むる女房を刎退突退、又取つくをあらけなく、踏倒し蹴倒すを、戻りかゝつて見る夫、走り入て彼侍が手を取て、「眞平御免下さるべし。則私

分だつて—特別に

しよ事がない—致方なし

すくばる—足がすくみて動かぬ次のしやきばるも同じ、此娘は後にある安德帝なれば辨慶天罰を受けたるなり

ばつてう笠—菅笠

へ往て、買物をして來ませう」りう「是は〳〵殘り多い。外のお客へは烏貝鱠、御出家には精進料理、分だつて拵へたに、終あがつてござらぬか」「イヤ〳〵愚僧は、山伏成ば精進せぬ。烏貝鱠よかろぞや」りう「夫でもお前、今日は二十八日で不動樣の御緣日」僧「ほんにそふぢや、大事の精進。ハテなんとしよ、しよ事がない、往てきませう」とふいと立、「あいた〳〵〳〵」りう「ハアお客僧樣何となされた」僧「イヤ別のことでもないが、寐て居るは爰のお娘か、此子の上を踏越へたれば、俄に足がすくばつて。エヽ聞へた、小さうても女子なれば、虫が知らしてしやきばつた物で有。ヤア大降のせぬ中に、往て來ませう」と武藏坊、ばつてう笠引冠り、何處ともなく急ぎ行。母は娘の傍に寄、「コレお安、其樣に轉寐して、風ひいてたもるなや」と、抱き起せば目を擦り〳〵、安「ヲヽ母樣、お前のなさるゝ事見て居て、ついとろ〳〵と一寐入」母「ヲヽ夫ならば目を覺して、今朝習ふた淸書を、とつくりと能ふ書いて、父樣のお目にかきや」と、子には目のなき親心、手を引納戸に入にける。かゝる所へ誰共しらぬ鎌倉武士、家來引具し、「亭主に逢ふ」と内に入ば、女房驚き走り出、「夫は他行、何の御用」と尋れば、「身は北條が家來相摸五郎といふ者、此度義經尾形を賴、九州へ迯下るとの風聞によつて、鎌倉殿の仰を請、主人

世をゆるかせに—世を氣樂に
裾に物云々—裾に着物を置くと
奥の襖にかく

音信れん。さらば〳〵」と立給へば、「今が誠の別か」と、立寄る靜を武藏坊龜井駿河立隔て、押隔つれば忠信も、我君に暇乞、互に無事を默き合、歎く靜を押退々々、心強くも主從四人、山崎越に尼が崎、大物差して出給ふ。詞「コレなふ暫し待てたべ」と 行を制し留むれば、御行方を打守り、「御顏ばせを見るやうで、戀しいはいの」と、地に平伏、正躰もなく泣ければ、詞「ヲヽ道理〳〵。去ながら、別も暫し此鼓、君の筐と有からは、君と思ふて肌身に添、憂さを晴させ給へや」と、下し給はる御著長、ゆらりと肩に引かたげ、宥め〳〵て手を取ば、靜はなく〳〵筐の鼓、肌身に添、盡ぬ名殘に咽かへり、涙と倶に道筋を、たどり〳〵て 三重 行空の、夜毎日毎の入船に、濱邊賑ふ尼が崎、大物の浦に隱なき渡海屋銀平、海をかゝへて船商賣、店は碇帆木綿、上下りの積荷物、運ぶ船頭水主の者、人絕のなき船問屋、世をゆるかせに暮しける。夫は積荷の問屋廻り、内をまかなふ女房おりう、宿かり客の料理拵、所柄迚網の物、鹽辛な鹽梅も、甘ふ育ちし一人娘、お安がついの轉寐に、風ひかさじと裾に物。奥の襖をぐはらりと明、風呂敷わいがけ旅の僧、によき〳〵と立出れば、りう「是はマア〳〵お客僧樣、今御膳を出しますに、何處へお出なさるゝぞ」僧「されば〳〵、西國への出日和待て、連共もほつと退屈。只居よよりは西町

矢面に立て—矢の來る方の掩護となりて

著長—大將の鎧をいふ

罷下り、永々の介抱、程なく母も本復致し、罷登らんと存る中、君腰越より追返され、鎌倉殿御兄弟、御中不和と承はるより、取物も取敢へず、都へ歸る道すがら、土佐坊君の討手と聞、夜を日に次いで堀川の、御所へ今晩駈付しに、早都を開かせ給ふと、聞より是迄御跡慕ひ、思ひがけなき靜樣の御難義を救ひしは、我存念の屆きし所」と、申上れば御悦喜有、義「我も當社へ參詣して、今の働委しくも見屆けたり。鎌倉武士に刃向ふな、と堅く申付たれど、土佐坊討れし上からは、其家來を忠信が討たる迚構ひなし。今に始めぬ汝が手柄、適々。取分て兄次信も、我矢面に立て討死したるは、稀代の忠臣、其弟の忠信なれば、我腹心をわけしも同前。今より我姓名を讓り、淸和天皇の後胤、源の九郎義經と名乘、まさかの時は判官に成かはつて敵を欺き、後代に名をとゞめよ。是は當座の褒美」迚、家來に持たせし御著長、忠信にたびければ、はつと計に押戴き、頭を土にすり付く〱、忠「土佐坊づれが家來を追ちらせしと有て、御著長を下し賜はる其上に、御姓名迄賜はるは、生々世々の面目、武士の冥加に叶ひし」と、天を禮し地を拜し、悦び涙にくれければ、判官重て、「我は是より九州へ立越、豐前の尾形に心を寄ん。汝は靜を同道して都にとゞまり、萬事宜しく計へ」と、君は靜に別れを惜み、「便もあらば

ふんぢかつて—踏みはだかりて
しほらしい云々—感心な二才め
茅花の穗先—多くの刃先を淺茅の叢出するに譬ふ

太手早く繩切ほどき、鼓を奪取引立行んとする所へ、四郎兵衛忠信、君の御跡したひ來て、斯と見るより飛かゝり、藤太が肩骨ひつ攫み、初音の鼓を奪返し、宙に提げ二三間、取て投退け靜を圍ひ、ふんぢかつて立たるは、心地よくこそ見へにけれ。靜「ヤア忠信殿、好い所へ能ふ見へた」と、悦べば逸見の藤太、「扨は忠信好き敵、搦捕つて高名せん」と、ばら〱と追取まく。忠「ヤアしほらしいうんざいめら、ならば手柄に搦て見よ」と、云せも立ず双方より、「捕た」とかゝるを引外し、首筋攫んでゐいやつと、右と左へ筋斗打せ、隙間もなく後より、大勢拔き連切てかゝれば、「心得たり」と拔合せ、茅花の穗先と閃めく刀を、飛鳥のごとく飛越踏ね越へ馳け廻り、眉間髃薙廻れば、わつと計に逃退たり。おくれて迯る逸見の藤太が、素首つかんでどうど投、足下に蹈へ、忠「汝等が分際で、此鼓を取んとは、胴より厚きつらの皮、打破つてくれんず」と、ぽん〱と踏みのめせば、ぎやつと計を最後にて、其儘息は絶果たり。鳥居の木の木陰より、義經主従かけ出〱、「珍らしや忠信」と、仰を聞よりはつと計、「こは存じ寄らぬ見參」と、飛しさつて手をつけば、龜井駿河武藏坊、互に無事を語りあふ。忠信かさねて頭を下げ、「先は變らぬ君の尊顏、拜し申て拙者も安堵、某も母が病氣見舞の爲、お暇給はり生國出羽に

さりともと―それでも若しやと

駿河―するにかく

聲をはかり―聲を限り

上、今迄はさりともと、思ふ願ひの綱も切、鼓をひしと身に添へて、かつぱと伏して泣居たる。龜井六郎進み出、「長詮義に時移り、土佐坊が殘黨原、討て來らば御大事」と、重淸に諫められ、涙と共に立給へば、靜は其儘我君の、御袖にすがりつき、「わし一人振捨られ、焦死に死んより、淵川へも身を投て、死ぬる〳〵」と泣きさけべば、人々も持余し、過ち有ては我君の御名の疵、何とせん方駿河次郎、立寄りて會釋もなく、取て引退け、「幸の縛り繩」と、鼓の調引ほどき、靜の小腕手ばしかく、過させぬ小手縛り、道の枯木に鼓と倶に、雁字絡に括りつけ、「サア邪魔は拂ふたり。いざさせ給へ」と諸共に、道をはやめて急ぎ行。跡に靜は身をもがき、我君の後影、見ては泣泣いては見、「エヽ胴慾な駿河殿。情にてかけられた縛繩が恨めしい。引ば悲しやお筐の、鼓が損ねう何とせう。ほどいて死せて下され」と、聲をはかりに泣さけぶは、目も當られぬ次第なり。「落行義經遁さじ」と、土佐が郎等逸見の藤太、數多の雜兵、めい〳〵松明腰挑燈、道を照して追かけしが、枯木の影に女の泣聲、何者ならんと立寄て、逸「ヤア此奴こそ音に聞、義經が妾靜といふ白拍子。繩迄かけてあてがふたは、うまし〳〵。此鼓も義經が重寶せし、初音といふ鼓ならん。此道筋に判官も隱れ居るに疑なし。福德の三年目」と、藤

當り眼云ぺーすぐ目の前に頼みの返し

尾形―緒方維義

だ迚、當り眼な返報。義理でもあつと申たけれど、此辨慶共意を得ぬ。御家來さへ跡先に、引別れて行忍の旅、落付所は兼て聞置多武の峯、是以て女は叶はず。夕にかはる人心なれば、十字坊の所存も量がたし。是より道を引ちがへ、山崎越に津の國尼が崎、大物の浦よりお船に召し、豐前の尾形を御頼有ふもしれず。夫なれば長の船路、猶以てお供は成まい。ふつゝりと思ひ切て都にとゞまり、君の御左右を待給へ」と、言ふにわつと泣出し、靜「今迄お傍に居た時さへ、片時お目にかゝらねば、身も世もあられぬ此靜、いつ又逢れる事じややら、行先知れぬ長の旅、跡に殘つて一日も、何と待て居られうぞ。いか成憂目に逢ふ迚も、ちつとも厭はぬ武藏殿、連て往て下さんせ」と、涙ながら我君に、ひし〳〵と抱付、離れがたなき風情なり。靜が別に判官も、目をしばたゝきおはせしが、「只今武藏が云通、行先知れぬ旅なれば、都に殘り義經が、迎の船を待べし」と、龜井に持せし錦の袋、「夫此方へ」と取出し、「是こそ年來義經が望をかけし初音の鼓。此度法皇より下し賜はり、我手には入ながら、一手も打事ならがたきは、兄頼朝を討と有院宣の此鼓、打ねば違勅の科遁れず、打ば正しく鎌倉殿に敵對も同然、二つの是非を分け兼たる此鼓、身をも離さず持たれ共、又逢迄の筐共、思ふて朝夕慰め」と、渡し給へば手に取

無下—陳略

足ない—少い

是に懲よ武藏坊—是に懲よ道才坊の謬をもぢる

和を取結ばんと、川越が實義、卿の君が最期を無下にして、義經が討手に登りし鎌倉勢をなぜ切た。是でも汝が誤りで有まいか。サア返答せよ坊主め」と、はつたと睨んで宣へば、武藏は返す詞もなく、頭も上ず居たりしが、「憚ながら其事を、存ぜぬにてはあらね共、正しく御所の討手として登つたる土佐坊、いかに御意が重い迚、主君をねらふをまじ〳〵と、見て居る者の有べきか。さある時は、日本の忠義の武士は絶果なん。誤りならば幾重にも、お詫言仕らん。いかに御家來なれば迚、餘り慘い呵りやう。是といふも我君の、漂泊より起つた事。無念々々」と拳を握り、終に泣ぬ辨慶が、足ない涙をこほせしは、忠義故とぞ知られける。靜も武藏が心を察し、「あれ程にいうてじやのに、どうぞまあ御了簡」と、柔かな詫言の、其尾に付て龜井駿河、「御免々々」と詫ければ、義經面を和らげ給ひ、「母が病氣で古鄕へ歸りし、四郎兵衛忠信を、我が供に召連なば、武藏が詫は聞ね共、行先が敵となつて、一人でもよき郎等を、力にする時節なれば、此度は赦し置」と、仰に辨慶はつと計に頭を下げ、坊主天窓を撫廻し、「是に懲よ武藏坊。アア靜樣、重々の詫言、いかゐお世話」と悦べば、辨「マアお詫がすんでめでたい。是からは此靜が君のお供をする樣に、取なし賴む武藏殿」と、思ひ詰たる其風情、「今詫言賴ん

荒法師—あらずにかく
ぬくもり—暖まり

人も腕撫さすり、拳を握つて扣ゆる折から、義經の御跡を慕ひこがれて靜御前、轉つ轉びつ來りしが、それと見るより縋りつき、「胴慾な我君」と暫し涙に咽びしが、「武藏殿を制せよと、わしをやつた其跡で、早御所をお退と聞、二里三里おくれふ共、追付は女の念力。能ふも〳〵慘たらしう、此靜を捨置て。二人の衆も聞へませぬ、私も一所に行やうに、執成いふて下さんせ」と、歎けば俱に義經も、情によはる御心、見て取て駿河次郎、「ヲヽ、主君も途次、噂なきには有ね共、行道筋も敵の中、取分て落行先は多武の峯の十字坊、女義を同道なされては、寺中の思はくいかゞなり」と、賺し宥むる時しも有、武藏坊辨慶息を切て馳著、「土佐坊海野を仕舞て除けんと都に殘り、思はず遲參仕る」と、言ひもあへぬに御大將、扇を以ててう〳〵と、なぐり情も荒法師を、目鼻も分かず叩き立、義「坊主びくとも動いて見よ。義經が手討にする」と、御怒の顏色に、思ひがけなき武藏坊、はつと恐れ入けるが、「此間大内にて、朝方殿に惡口せし迹御勘當、永々出仕もせざりしが、靜樣の詫言で、御免有たは昨日今日。其勘當のぬくもりが、手の中にほの〴〵と、まださめ切ぬ其中に、又候や御機嫌を損ふたそふなれど、辨慶が身に取て不調法せし覺へなし」義「ヤア覺なしとはいはれまい。鎌倉殿と義經が、兄弟の不

其表裏を見て吉凶を定む（俚言集覧）
直牛頭を云々—土佐坊の平たい頭を頭巾越しに引抜く
巳午—見ぬ間
戌亥—居ぬ
伏見町—臥にかく

「菟原小原の方でも有まい。元は牛若丑の方、巳午もよしや吉野も氣づかひ、爰に戌亥や酉ならで、程は有まい追付ん」と、忠義と思ひ爲し事も、今に成ては未申、思ひ違の荒者が、あら砂蹴立る響きはどう／＼、どろ／＼／＼、踏しめ／＼踏ならし、義經の跡を寅の刻、風を起して追て行。

第二

吹風に連て聞ゆる鬨聲、物すさまじき氣色かな。昨日は北闕の守護、今日は都を落人の、身と成給ふ九郎義經、數多の武士もちり／＼に成、龜井六郎、駿河次郎、主從三人大和路へ、夜深に急ぐ旅の空、跡振返れば堀川の、御所も一時の雲煙、浮世は夢の伏見道、稲荷の宮居にさしかゝれば、龜井の六郎後馳せに驅付、「正しくあの鯨波は鎌倉勢。後を見するも無念なり。御赦を蒙つて一合戰仕らん」と、申上れば、義「いやとよ重清、都にて舅川越太郎が云し鎌倉殿の憤り、明白に云開き、卿の君のあへなき最期も、義經が身の云譯なるに、早まつて辨慶が、海野の太郎を討たる故、止む事を得ず都をひらくは、親兄の禮を思ふ故。此後は猶以て、鎌倉勢に刃向はゞ、主從の縁もそれ限り」と、仰に二

料理の喰殘し―討漏の敵兵
味をやる―小癪な事しをる
ぶり／＼云々―ゆさぶりつゝドツサりと尻餅つく
投算―錢を擲ち

佐坊めを生捕たり。龜井駿河は何國に居る。武藏が料理の喰殘し、賞翫せぬか」と呼はつても、館はひつそとしづまつて、答へる人もなきふしぎ、不思議不思議と見廻す内、坂東一の土佐坊が、腰の上帶引切て、馬より飛下り大聲上、「者共來れ」と下知の内、兵具の兵數百人、「ソレ討とれ」と追取まく。武藏も馬より一足飛、太刀も刀も鷲づかみ、鵰づかみの首の骨、握るときれる數萬力、雨か霰か人礫、透間を見て土佐坊が、武藏が弱腰しつかと抱。弁「シヤ小僧めが味をやる。腰の療治で捻るか揉むか、擦つておけろ」のぶり／＼どさり、尻餅ついても怯まぬ曲者、四尺に餘る大刀物、討てかゝれば閃りとはづし、てうど切ば柄先で、しやんと請とめ、弁「ホヽ、出かす／＼、腰をさすつた其かはり、首筋ひねつてくれんず」と、ぱつしと反ねて身をかはし、大太刀蹴落し素首摑、ぐつと引よせ腰にひつ付、「我君樣御臺樣、龜井やい駿河やい」と、引ずり廻り呼廻り、尋廻れど人々の、御行方も見へざれば、「扨は此家を落給ふか。コハ何ゆへ」と身の科と、思ひよらねば言ふ人も、答ふる人も梢の烏、泣て詫する土佐坊を、右を左りへ持直し、「地體此奴が迯廻り、隙取た故お供におくれた。おのれが首の飛方が、我君樣の御行方。よい投算」と引つかみ、直平天窓を頭巾越し、すぼりと拔て空へ投、蹴けたる力は巽の間。

しなしたり—しくじつたり
ひろいたり—つまらぬ事をしたり
ぐはい—中よくすることとなるべし
是非なく〳〵—泣くにかく

飽れ、川越太郎ははつと計、「ヘヱしなしたり、ひろいたり。討手の大將討取つては、御連枝和睦の願ひも叶はず、不便や娘も詮なき犬死。是非もなき世の有樣」と、悔み涙に義經公、「古人は人を恨ず。傾く運のなすわざ、と思へば恨みも悔もなし。武藏が不骨を幸に、都をひらかば綸命も背かず、兄頼朝の怒も休まる。是を思へば卿の君が最期、殘り多や」と御涙、「皆夢の世の有爲轉變、我も浮世に捨られて、驛路の鈴の音きかん、龜井駿河供せよ」と、立出給へば川越太郎、しほれながら暫しと留め、床に飾りし鼓携へ、「君多年御懇望ありし重寶、殘し置かれては、取落されしと申すも殘念。院勅に打てといふ聲ありとは、皮より穢れし讒者の詞、打つを拙者が調べ換へ、再び御連枝ぐはいの取持長路の旅の御物忘」と、心をこめて差出す。義經御手にふれ給ひ、「親しき兄弟の因をば、打切らるゝも運の盡き。結びかへせよ川越」と、駿河龜井を御供にて、すご〳〵館を出給ふ御心根のいたはしさ、見送る人も鎌倉へ、是非なく〳〵も立歸る、世の成行ぞ是非もなき。跡は貝鉦鯨波、震動するも理りや、武藏坊辨慶が、海野の太郎を討取て、次手に土佐坊せしめてくれんと、追かけ廻つて正尊が、乘たる馬の尻邊に乘、ぽつ立蹴立白洲の庭、館もゆるぐ撞鐘聲、「ヤア〳〵我君やおはする。討手に向ひし海野は粉にして、土

川越―三途の川を越えるにかく
さないと―左様しないと
みしやぎ―打ち潰す
てつぺい―天邊頭の頂

討首よりも、骸は先へ川越が、どうと坐してぞしほれ居る、心ぞ思ひやられたり。靜御前も義經も、歎きに沈み給ふ折から、耳を突ぬく鐘太鼓、閧をどつとぞ上にける。「コハ如何に」と靜は仰天、君も驚き、辨「扨は海野土佐坊めが、責かけしと覺へたり。龜井駿河」と仰の内より、押取刀で兩人が、表をさしてかけ出るを、「ヤレ待れよ」と太郎は呼留め、川「仰分を聞迄はと留置しを責かけたは、彼等も讒者と一味の族。とはいへ、兩人鎌倉殿の名代。過有ては敵對するも同前。只速に追かへすか、威の遠矢で防がれよ。義經公も川越が、詞至極と猶も氣を付、「無分別の辨慶が心元なし。武藏々々」と呼給へば、腰元立出、「武藏殿は最前より打しほれ居られしが、鯨波を聞と早、悦び勇んで行れし」と聞より「此奴事仕出さん。靜參つて急ぎ制せよ。矢先危しソレ鎧」「はつ」と腰元持出づる、其間に投押の長刀かい込、表へ走る女武者。堀川夜討に靜が働き、末世にいふも是ならん。如何と案じ給ふ所へ、龜井駿河かけ戻り、「我々味方を制して的矢を射させ、追歸さんと存ぜし所、武藏坊の無法者、玄翁大槌を以て敵をみしやぎ、大鉞にて人を引切、討手の大將海野の太郎を、てつぺいから爪先迄、摑き碎いて候」と申上れば、大將

死後に貞女と云せたく、わざと自滅と見せかけし。よふ拔身を奪取た。適健氣な女中や」と、餘所に譽むるも心は涙。義經間近く立寄給ひ、「斯あらんと思ひし故、わざと川越が血脈を顯はし、平家の緣を除かんと、思ひし甲斐もなき最期。淺ましの身の果、よしなき契をかはせし」と、御目に余る涙の色　靜御前も諸共に、彼方此方を思ひやり、泣しづみ給ふにぞ、手負は君を戀しげに、打ながめ〳〵、「一つならず二つ迄、大切な云譯立、殘る一つは平家と緣組、其科わたしが皆なす業。戀慕ふ身をお見捨なう、是迄はいかるお情、世に難面とはかないは、明日を定めぬ人の命。短ふお別れ申ます。靜殿、我君樣を大切に賴むぞやいの」とせき上て、わつと計に泣けるが、「サア川越殿、平大納言時忠が娘の首、賴朝樣へお目にかけ、御兄弟の御和睦。それが冥途へ好い土產」と、首指のばす心根を、思ひやる程川越太郎、胸に滿くる涙をば、呑こみ〳〵傍に立より、「似合ざる喩なれ共、玄宗の后楊貴妃は、馬嵬が原にて哥舒翰に討れ、天下の煩ひを拂ふ。御兄弟確執とならば、萬民の歎き。淸き最期も天下の爲。出かされた適々。あかの他人の某が、介錯して進ぜう」と、刀するりと拔はなす。姫「ノウ其あかの他人のお手を藉るも深き御緣。迚もの事にたつた一言」川「親子の名乘は未來でせう」姫「さらば〳〵」川「さらば〳〵」と

秩父ー畠山重忠

な尋。兄頼朝の御臺政子は北條が娘。時政氏は平家に有ずや」川「イヤそれは主君頼朝、伊豆の伊東に御座有時、北條一家を味方に付ん計略の御縁組」畠「ヤア言ふな〳〵。元卿の君は汝が娘、平大納言へ貰はれ、育てたは時忠、肉身血を分けた親は其方。なぜ夫程の事、鎌倉にて云譯せざるや。但義經と縁有と思はれては、身の瑕瑾と思ひ隱し包んだか。卑怯至極」と仰を聞より川越太郎、居たる所をどつかと居直り、川「ヤアお情ない義經公。清和天皇の末流、九郎義經を聟に持たは、恐らく日本の舅頭。五十に餘る川越が、名を惜んで祿を貪らふや。今肉縁をあかせば、此方のいひ譯するも暗く、縁者の證據と成故に、ヲ鎌倉では隱した包んだ。影になり日南になり、云くろむれ共御前には、讒者の舌強くなり、智者といはれし秩父さへ、力に及ばぬ平家と縁組、今に成て川越が娘といふて、得心有ふか。卑怯至極と思し召、御心根も面目なし。皺腹一つが御土產」と、差添手早に拔放す。「ノウ是待て」と、卿の君、駈出て手に縋り、「其云譯は自」と、刃物もぎ取我咽へ、ぐつと突立どうど伏。是はと驚く義經公、靜も駈出抱起し、藥よ水よと狼狽へて、涙より外詞なし。川越は見向もせず、「出かされた時忠の娘。左樣なうては御兄弟、御和睦の願ひも叶はず。とくに呼出し、我手にかけんと思ひしが、我と最期を遂さして

上覽ー照覽

分け遣はし、忍び〳〵に討取手筈。斯く都に安座すれ共、心は今に戰場の苦しみ、兄頼朝は鎌倉山の星月夜と、諸大名に傅かれ、月雪花の翫び、同じ清和の胤ながら、晨には禁庭に膝を屈し、夕部には御代長久の基を量る。何時か枕を安んぜん、浅間しの身の上」と、打悄れ給ふにぞ、實に理と重頼も、思ひながらも役目の説破、「ムウ扨は其御述懐有故、御謀叛思し立れしか」と、いはせも立ずくはつとせき上、義「ヤア穢らはし。謀叛とは何を以て、何を目當」と御氣色かはれど、ちつ共恐れず、川「君鎌倉を亡ぼさんと院宣を乞給ひしに、初音の鼓を以て、裏皮は義經、表皮は頼朝、打といふ聲有迚、頂戴有しとは左大臣朝方公より急の知らせ」と聞て義經、「扨は朝方が讒言せしな。其鼓の事は、某兼ての懇望。下し置るゝ場になつて、反逆によせたる詞の品。是朝方のはからひとは思へ共、院中より下さるゝ恩物、請納めずば綸命に背く、受ては兄頼朝へ孝心立ず、と望に望みし一挺なれ共、打てば鼓に聲有と、アレあのごとく、床にかざりて眺むる計、神明佛陀も上覽あれ、打もせず手にもふれず」と仰に川越、ハヽヽ、はつと三拜し、「其御誓言の上、何疑ひ奉らん。二つの仰分られ、さつぱり明白。去ながら、情なきは今一つ、御簾中卿の君は、平大納言時忠の娘。平家に御縁組れし心はいかに」義「ヤアおろか

ゑせ者―似而非なる者なれど茲は卽の者

尋て見よ。申開かん遠慮無用」と、仰に猶も平伏し、「冥加に余る仕合せ。迚もの事に御座改め下されよ」と、席を立ば大將も末座へさがつて川越を、上座へこそは請ぜらる。席改つて川越太郎、「いかに義經、平家の大敵を亡ぼし、軍功を立ながら、腰越より追かへされ、無念に有ん、但しさもなかりしか」はつと義經袖かき合せ、「親兄の禮を重んずれば、無念なとも存ぜず」川「ヤア其詞虛言々々。親兄の禮を重んずる者が、平家の首の内、新中納言知盛、三位中將惟盛、能登守敎經、此三人の首は贋物、何故僞つて渡したぞ。先此通りの御立腹、サア御返答は」と尋れば、義「ホヲヽ其云譯いと安し。贋首を以て眞とし、實を以て贋とするは軍慮の奥義。平家は廿四年の榮華、亡び失ても舊臣倍臣、國々へ分散し、赤旗の翩翻する時を待。一門の中にも三位中將惟盛は、小松の嫡子で平家の嫡流、殊に親重盛仁を以て人を愛求、厚恩の者其數知らず。惟盛存へ有と知らば、殘黨再び取立るは治定。又新中納言知盛、能登守敎經は、古今獨歩のゑせ者、大將の器量有と、招きに從ひ馳集る者多からん。さすれば天下穩ならず、何れも入水討死と世上の風聞、幸に一門殘らず討取しと、贋首を以て欺きしは、一旦天下を靜謐させん義經が計略。と有て捨置れぬ大敵故、熊井鷲尾、伊勢片岡、究竟の輩を休息と僞り、國々へ

おとまし―疎まし

へ罷有、如何計ひ申さんや」と、尋申せば卿の君、「心得ぬ事どもや。其川越太郎は、自とは故有人、土佐坊海野が討手の樣子、知らさん爲に來りしか。何にもせよ、緣あれば苦しうなし、通し申せ。其旨君へも申上げん。次手に武藏もお目見へ」と、座を立給へば武藏坊、「討手とはうまし〳〵。我等が世盛忝い。土佐坊でも海野でも、たつた一呑一摑首引拔いて參らん」と、駈出すを靜は押とめ、「ソレそれがモウ惡い。お上の御意も待ず、おとましの坊樣や」と無理に引立、御臺と倶に、義經公のおはします、奥の殿へぞ急ぎ行。程なく入來る武士は、鎌倉評定の役人川越太郎重頼、大紋烏帽子爽に、年も五十路の分別盛り、廣疵に入來れば、御主九郎判官御裝束を改められ、しづ〳〵と立出給ひ、「ヤア珍らしや重頼、兄頼朝にも御變なく、百侯百司も恙なしや」と、仰にはつと頭をさげ、川「先は御堅躰を拜し恐悅至極。右大將にも安全に渡らせられ、諸大名も每日の出勤、賢慮安んじ下さるべし」と、申上れば義經公、「シテ其方は海野土佐坊同役にて登りつらん。但は外に用事有や」と尋に重頼、「さればの義、君に御不審三ケ條、一々お尋申上、御返答によつて海野、土佐坊と同役、恐れながら過言は御赦免なされ、尋る子細御返答」と申上れば、義「ホ面白し。此義經に不審あらば、兄頼朝に成かはり、過言は赦す、

體も—三尺八九寸—體も縮まる
跡ぢより—後退り
君は船なり云々—荀子にある語
順見—巡見

龜井と引連て、一間へこそは入給ふ。靜は嬉しく「サア急いで武藏殿を呼まして」と、女中を走らせ、靜「御前のお詞添た故、有難ふ存ジます」と挨拶すれば、御臺「イヤそもじのお願ひ故」と、互の辭義も戀の義理、悋氣嫉妬の角もなく、丸い天窓の武藏坊、腰元に引立てられ、こはい〱で七尺の、體も三尺八九寸、四尺に餘る大太刀を、引ずらしてぞ這出る。腰元共口々に、「去とては片意地な坊樣。アレ御覽じませ、跡ぢよりばかり致されます」と、告口いへば、辨「是さ〱、其樣に惡くいはぬ物。弱身へ付込で憎い和郎達。人には報が有ぞよ」と見廻す目玉に、「アレ又睨まれます」「コレサ細目だ〱」と、目顏しかめて身を縮む。靜は手を取御前へ連出、靜「モウ堪忍しておやりなされて下さりませ」と、半分笑ひの執成に、卿の君はしとやかに、「君は船なり臣は水、浪立時はおのづから、君のお船を覆す。家來の業迚云譯ないぞ、重て急度荒氣をやめ、おとなしう成たらよかろ」と、子供異見に、辨慶はたゞ、「アイ〱」と揉手して、誤り入し風情なり。然る所へ遠見の役人、篠原藤内あはたゞ敷罷出、「今日大津坂本の邊りを順見致せしに、忍び〱に鎌倉武士、都へ入込候。中にも土佐坊正尊、海野の太郎行永、熊野詣と僞り、我君の討手に向ふと專の風聞、殊に只今、鎌倉の大老川越太郎重賴、我君へ直談迚、お次に控

馬のあふた—氣の合うた

笑止と—氣の毒と思うて

とそふであろ〳〵。彼めと馬のあふた伊勢片岡、熊井鷲尾、軍治つてより、休息のお暇で國々へ歸る、賴みに思ふ佐藤忠信は、母の病氣と有て出羽の國へ往ぬる、貴殿と某は相手にならず、どこ打て舞ふで舞から取入て詫言、まそつと懲していつその事、坊主天窓を奴にせふと、いふて見たらば猶よかろ」と、內證評議も猶おかしく、御臺は笑の內よりも、「如何成仕損じせし事ぞ、笑止おかしい執成」と、仰有ば義經公、「過つる參內の折から、禁庭にての我儘、左大臣朝方公への惡口、御家來を踏打擲。其場で急度呵付、我目通へ叶はぬ、と申付けたが、夫故ならん。手綱赦すと人喰馬、公家でも武家でもたまらさぬ、持あぐんだ鯱坊主め。まそつと懲せ」と御上意に、駿河の次郎圖に乘て、「地體彼の七つ道具が大きな邪魔。源氏には坊主の大工が有、とお家の名折。此義も急度止る樣、仰付けられ然るべし」と、申上れば龜井の六郎、「イヤまだ七つ道具は御普請の役にも立が、難義な物は彼の大長刀、柄も四尺刃も四尺、八尺の物を振廻すによつて、傍邊りの鼻がたまらぬ。太平の代には役に立ぬ人間、兎角當分押込て置がよかろ」と評議區區、御臺は笑止と、「ヤレ其樣に譏るを聞たら又怒ろ。倶々お詫」と執成あれば義經公、「性懲もなき坊主め、急度異見し重て荒氣を出さぬ樣、靜も倶に」と座を立給ひ、駿河

おはもじ—お恥かし

大づけない—おとなげない

る龜井の六郎、倍臣外様に至る迄、舞の様子はしらね共、やつちや名人お上手と、靜譽るも君譽る、色めきてこそ見へにけれ。御殿から御殿への女中の使、此方より龜井が使者の御口上、互にめでたい面白い、お氣はつきぬか好い慰と、御夫婦中でも禮儀式。事終れば樂屋より、裝束改め靜御前、廣庇に立出、駿河龜井に會釋して、御臺所の御前に向ひ、「御望と有故、拙き舞ぶり御目にかけ、おはもじさよ」と述ければ、北「イヤナウ始めて見ましたが、面白い事。此間より醫の助を請ても、心惡しく暮せしに、我君樣のお勸で、今日は思はぬ好い慰。そもじには御太義」と、仰にはつと辭義に余り、靜「其御機嫌に甘へ、申上たいお願ひ有。お取上下されふか」と、物〳〵しげに云上る。「ナウ其尋に及ばぬ事、願とは餘所々々しい。近う寄つて物語」と、仰に猶も恐れ入、靜「お願ひと申は外でもなし。氣の毒は武藏坊辨慶殿。何か大きな仕損ひした迚、樂屋へ來て大づけない、ほろ〳〵泣いて私を頼み、つき詰つた氣の細いお人そふで、餘りと申せばいぢらしし。何とぞお詞添へられ、我君樣の御機嫌も直る樣、此事ひたすらお願ひ」と申上ぐれば御臺はおかしく、君にも笑ひ、駿河の次郎佛頂顏、「いやはや、かゝつた事ではない。六郎お聞やつたか。武藏坊辨慶共いはるゝ者が、女中を頼んでお詫言、樂屋へ往て泣といの。ホウちつ

笠のいたゞき―笠の裏の頭にあたる所につくる小き蒲圓の如きもの
朸―天秤棒
靜―義經の妾靜にかく
卿の君―京の君にて義經の北の方、久我大臣の女
功ある龜井―甲ある龜にかく

ア如何樣、夫ならば此庵の裏傳ひを、氣高い女が子を連て、迯たのはたつた今」と聞より、猪熊目をひからし、「ヲヽ夫に極つた。高が女の足なれば、ほつかけて搦めとらん。家來二人は是に殘り、奥の尼めを取迯すな」と、跡を慕ふて追蒐行。「してやつたり」と小金吾は、心も空に荷を打かたげ、行んとするを二人の家來、兩方より小金吾が棒端取て、どつかと引すへ動かさねば、小「コリヤどふなさる」家來「ヤアどふするとは胡亂者。此荷箱に挾まれたは女の著物」小「イヤ是は誂の笠のいたゞき」家來「ヤアぬけ〳〵と吐かすまい、御臺親子に極つた、ぶち明て詮義せん」と、立かゝる、兩人が肩骨つかんで引退る。「詮義させぬは曲者」と、すらりと拔て切かくる。引ぱづし〳〵、朸を振上げ、弓手馬手へ叩き伏せ、急所々々を力に任せ、叩きのめせば二人の家來、目鼻より血を出し、のた打廻つて死てけり。敵の歸らぬ其中に、と荷を打擔げ聲張上、「菅笠加賀笠、笠編笠」網を遁れて三重出て行。花の姿も引かへて、主從七騎駒のはな、營の岡で返咲、再び御運開かれし、彼賴義の奥州攻、君は八島の勝軍、國も靜が舞扇、いや〳〵どつと譽むる聲、鯨波とは打かはり、賑はふ御所は二條堀川、九郎義經の奥方勇の御催し、中座の御殿は卿の君、新殿は九郎義經、一方女中が取まけば、かたへに竝ぶは駿河の次郎、次は功有

かなぐり—はふり棄て
ふけらした—逃がした

親子御押入つきやる其間もなく、朝方の諸大夫猪熊大之進、家來引具し柴の戸踏のけ、どやく〳〵と亂れ入、「此庵室に維盛の御臺、若葉の内侍忰六代、諸共にかくまひ置由、注進によつて召捕に向ふたり。何國に隱せし、有やうに白狀せよ」と、星をさゝれて主の尼、はつと思へど素知らぬ顏、「是は又御難題。維盛の御臺とは、所緣かゝりもなければ、かくまふ筈もなし」と、いふに傍から小金吾武里、夫は定て庵室違、外を御詮議遊ばせ」と、聞もあへず、猪「ヤア前髪めが小指出た指圖、先うぬは何奴」小「イヤ私菅笠賣」猪「ヤア商人ならばとつとと歸れ」と、家來に持せし絹緒の草履取出し、「コリヤ詐はすまい爲に、家來を所の歩行にして入込せ、證據の爲に取たる草履。年寄尼めが赤たれた履物穿きはせまい。サア是でもあらがふか。奥へ連行責さいなみ、白狀させん」と主の尼が、小肘取てぐつと捻上、「ソレ家來共拷問せよ」とあらけなく、引立々々一間の中に入にける。小金吾は氣も氣ならず、何とせんかとせんと、奥口窺ひ透間を見て、御臺親子を出し參らせ、幸の菅笠荷と、細引かなぐり蓋押明、荷底に二人を入參らせ、旅の用意の風呂敷包、重盛公の繪像迄、取ては押込さらへ込、あたふたしつらふ其中に、尼を一間に縛り上、立出る大之進、「察する所、風を食ふてふけらした物で有、菅笠屋め存ぜぬか」猪「ア

寸善尺魔―よき事少くよからぬ事多し

ア爰へ」と有ければ、小金吾も手をさげて、「先は御臺所にも御堅勝、ホウ若君も、御機嫌よき御顏ばせを拜し、拙者も大悅仕る。いか樣にも今日は、先君重盛公の御祥月、御命日なれば、御裝束を改め、御回向をなされしよな」と、佛間に向ひ手を合せ、尼「此君お一人ましまさぬ故、御一門はいふに及ばず、我々迄も憂艱苦」と、暫し涙にくれけるが、「拙者めも御貢の爲、思ひ付たる笠商賣。前髮立の此小金吾、何が仕付ぬ商賣なれば、御推量下さるべし。扨先申上たきは、主君維盛卿の御身の上。未だ御存命にて、高野山に御入、と慥成都の噂。何とぞ拙者も若君のお供をして、高野に登り、御親子の御對面、一つには小金吾も再び主君の御顏を拜し申度願ひ、夫故旅の用意を致し、只今參り候」と、聞より御臺も夢見しごとく、「なに我夫の高野とやらんに生存へてござるとや。夫は嬉しや有がたや。六代計と言はず共、女子の上らぬ山ならば、麓迄自も同道せよや武里」と、悅び涙にくれ給へば、尼ヲヽお嬉しいはお道理〳〵。わしもお供したけれど、足手まとひな年寄尼。それならば日のたけぬ内、一時も早いのが」小「ヲヽ成程寸善尺魔のなき中に、御親子倶に御用意早ふ。笠は私が手の物、早速ながら御用に立ん」と、倶に用意の折こそあれ、表の方に人音足音、尼は心得、いつもの通り、佛壇の下戸棚へ、御臺

髮長—尼をいふ
線香を立て云々—時間を定めて淫賣する
祇王云々—此三人淸盛の寵を受け後尼になつて嵯峨に隱れし事平家物語に見ゆ
ひつた—ひたすら
ちよろり云々—チヨイト一足とられた
ゆさ〳〵—ゆさ〳〵

取入と小みめの美い髪長を出しかけて、御所出尼出圍者、大海小海と名を付、一屛風を何ほ宛と、佛前の線香を立て、暗商をするといの。是といふも祇王祇女、佛などといふ白拍子のしやの果が、尼になつて此嵯峨に居る故に、それで所がみだらに成つた迚、人別の判形。此庵にも其樣な、じだらくはござらぬかや」主「ヲヽあの云しやる事はいの。佛樣は見通し、そんなじだらくな事何でせう。聞も汚れる、往んで下され」男「ハテ往にます。早ふ印判おこさつしやれ」と、家内を見廻し立歸る。お氣が詰まろと主の尼、枕屛風を押のけて、「今のをお聞なされたか。覺へもない事いふて來て、そしてマア氣味の悪い。家内をひつた見廻して。ヲヽ是はしたり、今の奴めにお前のお草履、ちよろり一足せしめられた。エヽ小盗人であつた物、氣が付いで取れた」と、いへば御臺も涙ぐみ、「世を忍ぶ身の上は、何角に付て案じが絶ぬ。扨も〳〵情なき、親子の身では有ぞいの」と、内は歎きに曇れども、外は春めく物賣聲、菅笠加賀笠、ゆす〳〵一荷打擔げ、「笠をお召なされぬか」と、門口より差覗けば、主「ヲヽとでもない。尼の内に菅笠が何で入ろ。胡散な和郎じや」と呵られて、商「イヤお氣づかひな者でなし、私でござる」と、笠取て、はいるを見れば小金吾武里。御臺所は飛立計、「此間は便も聞す、どふかかうかと案ぜしに、サアサ

阿伽─佛に奉る水

狭布の云々─陸奥の狭布の里にて出す布は幅狭し

十二單─女官の裝束にて憂き事多きを寄せたり最下に白小袖を著する故卯の花色といへり

思ひ─火をかくいでそよ─オ、それよ

御命日なれば、心計の香花取て、阿伽の水も供へん爲、手づから水を汲ました。取分此月はお祥月、昔の形で回向せば、せめて佛へ追善」と、狭布の細布身せばなる、さもしき小袖ぬぎ捨て、卯の花色の二つ襟、うきに憂身の數々は、十二單の薄紅梅、冷泉思の色や緋の袴、いでそよ元は大内に、宮仕へせし曠の絹引繕ひ、蒔繪すつたる手箱より、重盛公の繪像を取出し、さら〱と佛間にかけて手を合せ、「小松の內府淨蓮大居士、佛果菩提」と回向して、「コレ六代、そなたの爲には祖父君。稚けれ共平家の嫡流、能ふ手を合して拜みやいの。取わけて此繪像、親子御迚、維盛樣に生うつし。ほんに扨重盛樣が今迄生てござらふなら、平家はよもや亡びはせじ。孫子の爲にもよからふに、あなたがござらぬばつかりで、此憂目を見るわいの」と、繪像に向ひ在すがごとく、くどき立〱、かつぱと伏て泣給ふ。折節表へ來る足音、ちやつと心得主の尼、枕屏風を引廻し、お姿隱す間もなく、扉引明けずつと這入、男「コレ〱庄屋殿へ判持てごんせ」主「ハア、夫は合點がいかぬ。今迄は一年に一度、宗旨の改めより外に、判の入ぬ獨尼。殊に此方も、月別取に來る歩行殿とは違ふた。マア何事じや聞さつしやれ」男「イヤされば、爰らの事では有そもないが、此嵯峨の庵室に、珠數の實で過るは付たり、表向には佛を見せかけ、內證へ

悪事を調べの云云ー義經朝方の悪事を調査す、調べ、締括は鼓の縁

蘭省の花云々ー朝廷に居て時めきたるをいふ白樂天の蘭省花時錦帳下、盧山雨夜草菴中の詩に由る

たが〱ーせが〱

いとしぼやーいとはしの轉

鼓、申請ねば君に背く、申受れば兄に敵對。二の命を背かぬ了簡。打と右院宣の鼓、たとひ拜領申ても、打さへせねば義經が、身の誤りにもならぬ鼓、拜領申奉る」と、鼓を取て退出す。御手の中に朝方が、惡事を調のしめくゝり、實も名高き大將と、末世に仰ぐ篤實の、强優なる其姿、一度に開く千本櫻、榮へ久しき三重君が代や、蘭省の花の時、錦帳の中にかしづかれし、小松の三位維盛の御臺若葉の內侍、若君六代御前、平家都を落しより、今は盧山の隱れ里、北嵯峨の草庵に、親子諸共身を忍び、仕馴ぬ業も佛の行と、谷の流を水桶に、主の尼と指荷ひ、庵の內に立歸り、主「コレ申御臺樣、わしが一日、たが〱するを笑止がつて、荷の片端お手傳ひなされ、それ〱お肩が痛さふな。下々のする業は、夢に見もなされまい。時世迚おいとしぼや。アレ何聞てやら、六代樣のにこ〱と笑ふてじや。能ふお留守なされたなふ」と、ほた〱いふてあしらへば、御臺所も打しほれ、「知りやる通り、夫の維盛樣、御一門と諸共、安德天皇を供奉し、都を開き給ひしより、此庵に親子諸共、永々の世話になるも、そなたが昔お館に、奉公仕やつた少の所緣。維盛樣も西海の軍に、海へ沈みお果なされた共、又生てござる共、樣々の噂なれ共、都をお立なされた日を、御命日と思ふて居る。殊に今日は、舅君重盛樣の

猪熊—入るにかく
ほくそづく—ほほゑむ

らば、頼朝義經打和ぎ、睦じく禁庭の守護致せとの勅候や」朝「イヤそふでない〳〵。君に忠勤を抽ずる義經を、科有と追かへせし頼朝は、法皇へ敵對ふ所存。兄頼朝を打とある追討の院宣」と、理を押枉て兄弟中、同士討させて仕廻ん工み。義經はつと當惑し、指俯伏いて居給ひしが、「コハ日比に異成法皇の勅命。假令叡慮に背く共、兄を討事存じも寄ず。頼朝に科有ば、義經も御刑罰に罰せらるゝが弟の道。所詮此初音の鼓、申請ねば院宣も承はらず」と指戻せば、朝方彌したり顔、「綸言は汗のごとし。勅命を背けば義經、朝敵なるが合點か」と、無理と非道に云枉る、工みと知ても勅命と、いふに返答恐れ有、只「ハッ〳〵」と計りなり。堪り兼て武藏坊ずつと出、「コレサ左大將殿とやら、王樣は天下の鑑、無理云しやれば天下中が、皆無理いふが合點か。無理が有なら傍に居る公家の役で、何故鎭めぬ。大敵にも怯まぬ大將、能ふ一言でやりこめたな。云負させては此腹の虫が堪忍せぬ。サア出直して誤りや」と、腹立つ儘の傍若無人。義經はつたと睨ませ給ひ、「やをれ辨慶、高位高官に對しての惡口、最前より無禮の段々言語道斷其處立ちされ。我目通へは叶はず」と、以ての外の御機嫌に、詮方もなく立端なく、誤り猪熊好い氣味と、ほくそづくを目もかけず、朝方に打向ひ、義「日比の懇望返つて仇となる

しやらくさい―生意氣
ちゑ〳〵くつた―チヨイ〳〵啄む

御執心」と、皆迄云せず武藏坊、「ヤアならぬ〳〵。鎌倉殿のお指圖で、緣組は兎も角も、平家方の女房を、私に引入るは味方も同然。ならぬ事」と云ほぐせば 入「ヤアしやらくさいおけ〳〵。左いふ義經、平大納言時忠の聟ならずや。言はいでも夫で知れた、若輩の內侍もちゑ〳〵くつたな」弁「ヤアちゑ〳〵くつたとは我君を雀の樣にぬかしたりな。コリヤ此方が鳥なら儕は蠅、ぶう〳〵吐さずすつこめ」と、引摑んでちよいと投る、音はどつさり。大「アイタヽヽ」義「ヤレ荒立つるな武藏坊、しされ〳〵」と制する折から、御座の間の御簾卷上、左大將朝方、怪しの箱引抱、くわん〳〵たる其風情、朝「ヤア〳〵義經、敬て承はれ。桓武天皇雨乞の時より、禁庭に留め置初音と名付たる鼓、義經兼て望む由聞し召及ばれ、此度の御恩賞に、院宣に添給はるぞ。拜見せよ」と指出す。義經はつと頭を下げ、「數ならぬ身に及びなき願、雨乞に用る鼓、軍の爲にと存ずる所、有がたし〳〵」と箱押戴き〳〵、「相添られし院宣とは、如何なる勅命、いで拜見」と箱の蓋開けば、內には鼓計。朝「ホヽウ院宣迚外になし。其鼓が則院宣。惣じて二つ有物を、陰陽に取、兄弟に像る。鼓の裏皮表皮、同じ育の乳ぶくらにかけ合されしは是兄弟。裏は義經表は賴朝、准へて其鼓を打と有が院宣なり」と聞もあへず、義「ハア、其鼓が院宣な

しなづ—言分

尾籠—失禮
誡の詞—此下に「有て又」の三字を入れて見るべし
ぬつぺり—しちびらしく
小部—清涼殿の北にあり
簾中—公卿の妻を呼ぶ

つたる輩は、先達て一紙に認め、叡覧に備へ奉れば、申上るに及ばず」と、事細かに述らるゝ。其辯舌を其儘に、日次に記し留めける。朝方苦つたる氣色にて、「それ程の功有義經、頼朝に對面叶はず、腰越より追返された、其科を言へ、聞ん」と、聞より辨慶進み出、「我君の御爲には御兄なれ共、蒲冠者範頼卿緩いお生れ、手柄が無さに義經公にしなずを付、彼方の手柄にせふ爲に、附從ふ佞人ばらが讒言と、氣の付ぬは鎌倉殿の無詮義」と、いはせも果ず、義「ヤアだまれ辨慶、假令讒者の業にもせよ、一旦の兄の命、申開かず、腰越よりすご〳〵と歸りしは、弟の義經さへあの通りと世上の見懲。理非辨へぬ麁忽の雜言、尾籠至極」と誡の詞。「ホヽウ神妙なり義經。軍の次第を奏問して、御前宜しく計はん」と、表面はぬつぺり取持顔、寐とりさょんと底工み、大内記引連れて、御殿間深に入にける。小部の蔭より左大將朝方の諸大夫、主に劣らぬ人畜の、苗字も猪熊大之進、「コレ〳〵義經殿、御油斷々々々。治つたとはいひながら、平家の殘黨、小松の三位維盛の簾中若葉の內侍、其儘に置ず共、何故かたづけて仕廻れぬ」義「ホヽウ何事と存ぜしに、女童の事よな。何萬人有迚も、天下のかいにならぬ事、其儘で事は濟」大「ムウ事濟とはどふ成と成次第なら、こつちも勝手。身が主人朝方公、若葉の內侍に

豁—膺

門脇—かといてにかく
やはか—いかで過ちあはさんとなり
二位の尼上—清盛の妻
女院—清盛の娘建禮門院

しく見へにける。大内記取次にて、「源氏の武士參上」と申上れば左大將、「いかに義經、此度八島の合戰の樣子、法皇委しく聞召ず。天皇の入水一門の最期、御日次に記されん。申上よ」と有。義經はつと承はり、「さん候、今度の戰ひ、平家は千騎計と見へ、八島の磯に陣を張。義經が勢は四百余騎、只事にては勝事なしと、不時に寄たる關聲に、あはてふためき平家の勢、船に取乘沖中へ、天皇を具し奉る。其時城に火を放ち、明りに眼覺せしやらん、能登守教經小船に乘移り、稀代の弓力引詰差詰、射たる矢先は、義經が馬の先に立塞がる、佐藤繼信豁に受、馬より下にどうど落る。其首取んと菊王丸、船より磯邊に上る所、弟佐藤忠信が射返へす矢先に敵味方、互に不便の武士を、討たせし供養と相引に、其日の軍はさつと退く。明れば敵より出す扇、與市宗高射て落す。箕尾谷景清錣引、敵が感ずる味方が譽る。され共源氏は勝軍、平家は軍兵討なされ、能登守教經、安藝の太郎、同じく次郎、二人を左右に引挾み、海へかつぱと飛入たり。是を冥途の門脇教盛、同じく經盛資盛、有盛行盛なんど、我も〳〵と續ひて入。新中納言知盛は御所の御船の御供と、進んで海にざんぶと入。天皇の御事は、やはかと存ぜし油斷の間に、二位の尼上御供し、海へ入しと聞たる計、御骸をも求得ず、女院計助り給ふ。生捕

勾踐の云々―陶朱公は范蠡の事にて勾踐を助け呉を亡し身退きて五湖に優遊せし事(國語)

西施―越の美人

舌を巻筆―舌を巻くにかけて口を噤む

大内記―中務省の被官にて詔勅御記錄等を司る

瀧口―御所警固の武士

日次―日記

大物船矢倉
吉野花矢倉
義經千本櫻

第一

序詞 忠なる哉忠、信成かな信。勾踐の本意を達す陶朱公、功成名遂て身退く、五湖の一葉の浪枕、西施の美女を伴ひし、例を爰に唐倭、四海漸穩に、壽永年號も、短く立ちて元曆と、命も革、戸ざゝぬ垣根卯の花も、皆白旗と時めきて、武威はます〳〵盛なり。寶祚八十一代の天子安德帝、八島の波に沈給へば、後白河の法皇、政を執行はせ給ふ。昵近の公卿は、左大臣の左大將藤原の朝方、君の御覺よき儘に、おのれに諂ふ者には、官位昇進申下し、依估贔屓の沙汰大方ならず、群臣是を如何共いはゞ叡慮に背んかと、各舌を卷筆や、大内記御日次に、硯取添へ座列する。瀧口に案内して、源氏の大將源九郎判官義經、院參の其粧ひ、五位の雜袍善盡し、端手を盡せし太刀飾、供の餝は三國一、西塔の武藏坊辨慶、大紋の袖立烏帽子、僧衣を憚る扮裝は、實にも勇々

きくに北野―きくに來たとかく

闇路に伴はん」と、櫻の枝の笞杖を振上、追立〳〵追廻し、笞を持つてちやう〳〵打れて現空蟬の蛻の體、「扨こそ恨晴れたり」と、死靈は時平を庭上に、どふど蹴落し嬉しげに、形は花の散ごとく、消て見へねば丞相の、靈も鎮り空晴れて、日輪光り輝けり。斯と見るより菅秀才、苅屋姫庭上に走り出、「父上の敵遁さじ」と、用意の懐劍拔放し、「恨の刀思ひしれ」と指通し〳〵、悦び給ふ折こそ有、宮御夫婦、若君の安否如何と松王丸、輝國伴ひ參内すれば、白大夫梅王も、宰府より立歸り、御階の下に伺公して、櫻丸夫婦が怨念、時平が惡事を顯はせし子細を聞より人々喜悦、倶に悦ぶ法性坊、親王を伴ひ立出給ひ、人々の願ひのごとく、菅秀才には菅原の遺跡を立させ、菅丞相に正一位の贈官あり、右近の馬場に社を築き、南無天滿大自在天神と崇め、皇居の守護神たるべしとの宣旨なりと述給へば、皆一同に悦を、きくに北野の千本松、榮へ榮ふる御社は、千年萬年朽せぬ宮殿、錦の帳玻璃の柱、瑪瑙の梁瑠璃の垂木、廻廊拜殿有々と、拜まれさせ給ひける。京に北野難波に天滿、神徳奇瑞並びなく、榮へ在す此御神、緣起をあら〳〵書殘す、筆の冥加や御傳授の、傳はる和國に炳然、威德を崇め奉る。

千手の陀羅尼―眞言の祕密經

弘徽殿―後宮の殿舍の名

清凉殿―帝の常の御所

梨壺梅壺―いづれも後宮の殿舍の名

姿あり〱、有明櫻。祈加持して退けんずもの、と珠數さらさらと押もんで、千手の陀羅尼くりかけ〱、祈いのれば、時平は夢共現共、思はずしらず立上れば、櫻夫婦が妄執の雲霧に隔られ、形は見へて手に取れず、迯んとするを迯さじと、向にたちまち八重一重、刃にかゝり此世をさり、骸は終に呵責の火櫻、此身を焦す鹽竈櫻、いかに僧正折る共、此怨念は何時迄も、つきまとはつて糸櫻、退かじ放れじ幻は、うて共さらぬ犬櫻、「死靈を去らさで置べきか」と、揉みかけ〱祈給へば、夫婦が靈魂、「イヤ〱〱イヤ〱、如何程祈る共、我々諸共、冥途の苦患見すべし」と寄ばいのり、祈れば形は、見へつ隱れつ九重の、彼岸櫻とちり〲に、僧正の珠數先へ、恐れて寄ぬぞ不思議なる。紫宸殿に僧正あれば、弘徽殿に夫婦の姿、弘徽殿に移り給へば、清凉殿に死靈の形、清凉殿に移り給へば、梨壺梅壺夜の御殿晝の御座、行違ひ行廻り、祈るは僧正去らぬは怨靈、揉合ひ〱、祈伏せられ櫻丸、「ヤア〱僧正、菅丞相を讒言し、帝位を奪ふ時平を助け玉ふは心得ず。扨は貴僧も朝敵に力を添へ給ふか」と、聞より僧正大きに驚き、「ヤアかゝる天下の仇共しらで、珠數をけがせし勿體なや」と、法座を立去り入給へば、時平も恐れ諸共に、御座の間さして迯入を、髻を取て引戻し、櫻「今こそは思の儘に冥路の

三善ー見る間にとかく

ち〳〵〳〵ぐはら〳〵〳〵。二人はがち〳〵胴震ひ、色靑さめて迯まどふ。時平の大臣はびく共せず、「ヤア臆病な腰拔共。鳴ば鳴れ落ば落よ。雷神雷火も足下にかけ、踏消してくれんず物」と、菅秀才を小脇にかい込、虛空を睨んでつつ立たり。猶もはためく震動雷電、希世は生たる心地なく、御階の下にかゞみ居る。頭の上に車輪の火の玉、落ると見へしが左中辨、五體炎に燃爛れ、天罰目の前師匠の罰、心地よかりし最後なり。是にも屈せぬ強氣の時平、「三善の淸貫いづくに有。丸に敵する雷神なし。怖くば爰に來れよ」と、呼を力に立寄淸貫、あはやと三善も雷火に打れ、卽時に息は絕果たり。二人が最後にさしもの時平、心臆して膝わな〳〵、擒にしたる菅秀才、迯て行衞もしらばこそ。「此上賴は法力」と、壇上にかけ上り、兩手を覆ふて踞る、左右の耳より尺餘の小蛇、顯はれ出れば悶絕し、うんとのつけに反りかへれば、二疋の小蛇は拔出て、壇に立つたる幣帛に、入よと見へしが忽に、此世を去し櫻丸、夫婦が姿と顯れ出、影のごとく壇上にすつくと立、歌「腹立や恨めしや、汝故に菅丞相、無實の罪にうきしづみ、心筑紫に果給ふ、其怨念は晴やらぬ、空に轟き鳴神の、炎變じて紅櫻と、倶に散らさん來れや來れ」と、頭を摑んで引立る。音に驚き法性坊、紫宸殿にかけ出て見給へば、物の怪の

寢殿—母屋

うつそり—まぬけ

ば、阿「仰のごとく菅丞相、恨は晴れぬ天變不順。愚僧元來菅丞相とは師弟の中、靈魂の怒を休むる菅原の家相續、宜しく奏し奉らん。法皇御所へも此通、輝國申上げらるべし。各〳〵は此方へ」と打連奥に入給へば、判官代大きに悦び、「僧正の御請合法皇に申上、追付参上仕らん」と、心いそ〳〵立歸る。齋世親王、菅家の兄弟、密に参内致せし、と春藤玄蕃が知らせによつて、時平の大臣大きに驚き、希世清行前後に随へ、逸散にかけ來り、寢殿遙に窺ひ見れば、實も玄蕃が申に違はず。時「時平が怨と成奴原、片端打殺し、天皇法皇遠島させ、我萬乘の位に卽かん。清行希世ぬかるな」と、八方へ眼を配り、事を窺ひ待共しらず、「判官代は歸りしか」と、奥より出る菅秀才、「ソレ」と時平が掛聲に、左中辨つゝと寄、小腕取て捻伏せたり。時平の大臣から〳〵と打笑ひ、「蠅同然の小躮なれ共、生置ては後日の仇。首討たると思ひしに、小ざかしくも我を謀り、今日迄存命せしは、松王めが計ひよな。贋首喰ふたうつそりめ」と、春藤玄蕃が肩骨つかみ、「不忠油斷の見せしめ」と、首引抜てかしこへ投捨、「ヤア〳〵兩人、此小躮は丸に任せ、齋世親王苅屋姫引立參れ」と下知するにぞ、清行希世「心得し」と、奥をさして行所に、俄に晴天かき曇り、風雨發つて絕間なく、電光虚空に閃めき渡り、天地も崩るゝ大雷、ぱ

鳥邊野―火葬地

雲井云々―禁裡

獨鈷三鈷―眞言宗の僧の修法の用具

紫宸殿―禁中の表御殿

使ぞふ―使に候

逆鱗―天子の御怒り

て、跡は門火に忍ひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

第五

雲井長閑き大内山、早立かはる水無月下旬、日毎〱に時違へず、電光雷火霹靂、打續いての天變只事ならず、玉躰安全雷除の加持有んと、勅使三度の召に應じ、法性坊の阿闍梨參内有、紫宸殿に壇を構へ、幣帛押立、獨鈷三鈷鈴錫杖、ふり立〱祈らるゝ、擁護も嘸と知られける。寛平法皇の御使として、判官代輝國、齋世親王、刈屋姫、菅秀才を作ひ、御階のもとに伺公する。僧正壇より下り給ひ、「能こそ參内ましませし」と、親王の御手を取、上座に移し參らすれば、輝國階下に頭をさけ、「兼て法皇貴僧に談じ給ひし通り、菅秀才に菅原の家相續、天機宜しき次手を以て、御沙汰有て給はりしか、承つて參れとの使ぞふ」と述ければ、親王も僧正に向はせ給ひ、「此度の天變祭する所、無實の罪に沈んだる、菅丞相の所爲なるべし。此靈魂を鎭めんには、法皇の仰のごとく、菅秀才が勅勘を赦され、菅家再び取立給はゞ、亡魂も恨を晴し、天下萬民の悦是にしかじ。偏に貴僧に賴み入。次には麿が虛命の逆鱗、申晴して給はれ」と、事叮嚀に述給へ

門火—喪出之日門前燃火（顔氏家訓）

六道能化—六道に迷ふものを化導する地藏菩薩

愛の者や」と御袖をしぼり給へば、夫婦ははつと倶に浸する有がた涙。「次手ながら若君樣へ御土産」と松王つゝ立、「申付た用意の乘物、早く〳〵」と呼はるにぞ、「ハッ」ト答へて家來共、御目通に舁居る。「早御出」と戸を開けば、菅丞相の御臺所、秀「ナウ母樣か」御臺「我子か」と、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打、「方々と御行衛尋しに、何處にか御座なされし」松「サレバ〳〵北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞、某山伏の姿と成、危い所奪取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入、野邊の送り營まん」千代「アイ」と返事の其中に、戸浪が心得抱て來る、死骸を籧條の乘物へ、乘て夫婦が上著を取ば、哀や内より覺悟の用意、下に白無垢麻上下。心を察して源藏夫婦、「野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦がかはらん」と、立寄ば松王丸、「イヤ〳〵是は我子に有ず。菅秀才の亡骸を御供申。いづれもは門火々々〳〵」と、門火を賴み賴まるゝ、御臺若君諸共にしやくり上たる御涙。冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ憂目見る親心、劒と死出の山けこへ、あさき夢見し心地し

死る子は云云―死ぬる子はよく見ゆ、此諺土佐日記にあり

八つ―奴にかく

迄、持て寺入さすといふ、悲しい事が世に有ふか。育も生も賤しくば、殺す心も有まいに、死る子は媚よし、と美しう生れたが、可愛や其身の不仕合。何の因果に疱瘡迄、仕廻た事じや」とせき上て、かつぱと伏て泣ければ、共に悲しむ戸浪は立寄、「最前にナ、連合の身がはりと思ひ付た傍へ往て、お師匠様今から頼み上ます、といふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が砕ける。親御の身ではお道理」と涙添れば、松「イヤ是御内證。コリヤ女房も何でほへる。覺悟した御身がはり、内で存分ほへたでないか。御夫婦の手前も有。イヤ何源藏殿、申付てはおこしたれ共、定めて最期の節、未練な死を致したで御座らふ」源「イヤ若君菅秀才の御身がはりと云聞したれば、潔ふ首指のべ」松「アノ逃隠れも致さずにナ」源「につこりと笑ふて」松「ムヽヽヽヽ、出かしおりました、利口な奴立派な奴。健氣な八つや九つで、親にかはつて恩おくり、お役に立は孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先達し、嘸や草葉の蔭よりも、羨しかろけなりかろ、躮が事を思ふに付、思ひ出さるゝ」と、流石同腹同性を、忘れ兼たる悲歎の涙。千代「なふ其伯父御に、小太郎が逢ますわいの」と、取付てわつと計に泣沈む。歎も洩て菅秀才、一間の内より立出給ひ、「我にかはると知ならば、此悲しみさすまいに、可

心の箸―箸は占に用ふるもの、物のめあて（瑠璃天狗）

威儀を正し、「一禮は先跡の事、是迄敵と思ひし松王、打てかはつた所存は如何に。不審さよ」と、尋れば、松「ヲヽ御不審尤、存じの通我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公、情なや此松王は、時平公に隨ひ、親兄弟共肉緣切、御恩請た丞相樣へ敵對。主命とはいひながら、皆是此身の因果。何とぞ主從の緣切んと、作病構へ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討はせまい、なれども身がはりに立べき一子なくば如何せん、爰ぞ御恩報ずる時、と女房千代と云合せ、二人の中の躮をば、先へ廻して此身がはり、机の數を改めしも、我子は來たかと心の箸。菅丞相には我性根を見込給ひ、何とて松の難面からふぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ、推量有源藏殿。躮がなくば何日迄も、人でなしといはれんに、持べきものは子なるぞや」といふに女房猶せき上、「草葉の蔭で小太郎が、聞て嬉しう思ひましよ。持べき物は子なるとは、彼子が爲に好い手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追たを呵つた時の其悲しさ。冥途の旅へ寺入と早虫が知らせたか。隣村へ行といふて、道迄いんで見たれ共、子を殺さしにおこして置て、どふマア家へいなるゝ物ぞ。死顔成共今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝義はあの子が香奠、四十九日の蒸物

しれもの—しぬかちぬもの

と、妻が騷げど夫は胴すへ、源「コリヤ最前いふたは爰の事。若君には替へられぬ、狼狽者」と戸浪を引退け、門の戸ぐはらりと引明れば、女は會釋し、「コレハまあ〳〵お師匠樣でござりますか。惡さをお賴申ます。何處に居やるぞ、お邪魔であろに」といふを幸、源「イヤ奧に子供と遊んで居ます。連立て歸られよ」と眞顏でいへば、女ヲヽ、そんなら連て歸りましよ」と、ずつと通るを後ろより、只一討と切付る。女もしれ者ひつぱづし、迯げても迯がさぬ源藏が、刃するどく切付るを、我子の文庫ではつしと請とめ、「コレ待た、待んせ、こりやどふじや」と、刎る刃も用捨なく、又切付る文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出しはコハいかに、と不思議の思に劒もなまり、進み兼てぞ見へにける。小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり、お役に立て下さつたか。まだか樣子が聞たい」といふに恟り、源「シテ〳〵それは得心か」女「得心なりやこそ此經帷子六字の幡」源「ムウして其元は、何人の御內證」と、尋る內に門口より、「梅は飛櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悅べ、躮はお役に立たぞ」と、聞よりわつとせき上て、前後不覺に取亂す。「ヤア未練者め」と呵付、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度恟り、「夢か現か夫婦か」と、鞆れて詞もなかりしが、武部源藏

いきせき—息喘にてあへぐこと

給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「ムウこりや菅秀才の首討たは、まがひなし相違なし」と、いふにも悄り源藏夫婦、傍きよろ〳〵見合せり。檢使の玄蕃は見分の詞證據に、「出かした出かした、よく討た。褒美にはかくまふた科赦してくれる。トサ松王丸、片時も早く、時平公へお目にかけん」松「いか樣隙取つてはお咎もいかゞ。拙者は是よりお暇給はり、病氣保養致たし」玄「ヲヽ役目は濟だ勝手にせよ」と首請取、玄蕃は館へ、松王は駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸ひつしやりしめ、物も得いはず青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出す計なり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、「アヽ有がたや忝や、凡人ならぬ我君の、御聖徳が顯はれて、松王めが眼が眊み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所。御壽命は萬々年、悦べ女房」戸「イヤもふ〳〵大抵の事じやござんせぬ。あの松王めが眼の玉へ、菅丞相樣がはいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか、似たといふても瓦と金、寶の花の御運開、と餘り嬉しうて涙がこぼれる。ハアヽ有がたや尊や」と、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひと見へて門の戸たゝき、「寺入の子の母でござんす。今漸歸りました」と、いふ聲聞より又悄り、「一つ遁れて又一つ、こりやマア何と、どふせふ」

木地を隱した―素性を隱すにかく
けしとむ―膽を消し飛ぶ
大事ない―大事なる
淨玻璃の鏡―罪人の善惡を映す鏡(十王經)
鐵札云々―善を金簡に記し惡を鐵札に記す即ち善と惡をいふ(瑠璃天狗)

大事と心も空、検使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し、「ヤア合點の行ぬ、先達て往んだ小悴等は以上八人、机の數が一脚多い。其紛は何所におるぞ」と、見咎められて戸浪ははつと、戸「イヤこりや今日初めて寺、イヤ寺參した子がござんす」松「何馬鹿な」戸「ヲヽそれ〳〵、是が則菅秀才のお机文庫」と、木地を隱した塗机、ざつとさばいて言拔る。松「何にもせよ隙どらすが油斷の元」と玄蕃諸共つつ立上る。こなたは手詰命の瀬戸際、奥にはばつたり首討音、はつと女房胸を抱き、踏ん込足もけしとむ内、武部源藏白臺に、首桶乘てしづ〳〵出、目通りに指置、源「是非に及ばず、菅秀才の御首討奉る。いはゞ大事ない御首、性根をすへてサア松王丸、しつかりと見分せよ」と、忍の鍔元くつろげて、虚といはゞ切付ん、實といはゞ助けんと、堅唾を呑で扣へ居る。松「ハヽヽ何の是しきに、性根所か。今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境。家來衆、源藏夫婦を取卷めされ」「畏つた」と捕手の人數、十手振て立かゝる。女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命。「サア實檢せよ見分」と、いふ一言も命がけ。後は捕手向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶躰絶命と思ふ内、早首桶引寄、蓋引明けた首は小太郎、贋といふたら一討と早拔かける。戸浪は祈願、天道樣佛神樣、憐み

たべぬ—其儀にのらぬ

り、丙「ほんよく〳〵」と親父が手招き、涎「父よ、おれはもふ爰から抱れて往の」と、あまへる顔は馬顔で、聲蕎、丙「ヲ泣な、抱てやらふ」と干鮭を、猫なで親がくはへ行く。丁「私が躮は器量よし、お見違へ下さるな」と、斷いふて呼出すは、色白じろと瓜實顔、「こいつ胡亂」と引捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か黶かはしらね共、「こいつでない」と突放す。其外山家奥在所の、子供殘らず呼出して、見せても〳〵似ぬこそ道理、土が産した計芋、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胴を居、待間程なく入來る兩人、玄「ヤア源藏、此玄番が目の前で、討て渡そと請合た菅秀才が首、サア請取ふ。早く渡せ」と手詰の催促、ちつ共臆せず、源「假初ならぬ右大臣の若君、掻首捻首にも致されず。暫くは御用捨」と、立上るを松王丸、「ヤア其手はくはぬ。暫しの用捨と隙どらせ、迯支度しても、裏道へは數百人を付置、蟻の這出る所もない。生顔と死顔は相顔がかはるなどと、身替の贋首、夫もたべぬ。古手な事して後悔すな」と、いはれてぐつとせき上、源「ヤアいらざる馬鹿念。病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆様眼で見やうはしらず、紛もなき菅秀才の首、追付見せう」松「ヲヽ其舌の根の乾かぬ内に早く討、とく切」と玄番が權柄、ハッと計に源藏は、胸を居てぞ入にける。傍に聞居る女房は、爰ぞ

ぐる—共謀

きみしり茄子—秋茄子嫁に食はすなの諺をとる

には大勢村の者、附隨ふて、「申上ます。皆是にをる者の子供が、手習に參つてをります。若取違へ首討れては、取返が成ませぬ。何卒お戻し下され」と願へば玄蕃、「ヤアかしましい蠅虫奴等、うぬらが小忰の事迄、身共がしつた事か。勝手次第に連失せふ」と、呵りつくれば松王丸、「ヤレお待なされ暫く」と、駕より出るも刀を杖、「憚りながら、彼等迚も油斷はならぬ。病中ながら拙者めが見分の役勤るも、外に菅秀才の顔見しりし者なき故。今日の役目仕課すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、有難き御意の趣、疎には致されず。菅丞相の所縁の者、此村に置からは、百姓共もぐるになつて、銘々が躮に仕立、助けて歸る手も有事。コリヤやい百姓めら、ざは〳〵とぬかさず共、一人づつ呼出せ。面改めて戻してくりよ」と、退引させぬ釘鎹、打ばひゞけの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸轟かす計なり。表は夫共白髮の親仁、門口より聲高に、甲「長松よ〳〵」と呼出せば、「ヲッ」ト答へて出てくるは、椀白顔に墨べつたり、似ても似付ぬ雪と墨、「是ではない」と赦しやる。乙「岩松は居ぬか」と呼聲に、丙「祖父樣何じや」と行域て、出くる子供の頑是なき、顔は丸顔きみしり茄子、「詮義に及ばぬ連れうせふ」と、睨付けられ、「ヲ怖や、嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落遁れし」と、祖父が抱へて走り行。次は十五の涎く

相顔—人相形ちと瑠璃天狗にあり

しが、天道のひかへ強きにや、あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷺共云れぬ器量。一旦身がはりで欺き、此場さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案。今暫くが大事の場所」と、語れば女房、「待んせや。其松王といふ奴は、三つ子の内の悪者、若君の顔はよふ見知て居るぞへ」源「サアそこが一かばちか、生顔と死顔は相顔のかはる物、面ざし似たる小太郎が首、よもや贋とは思ふまじ。よし又夫と顯はれたらば、松王めを眞二つ、殘る奴原切て捨、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供、と胸を居たが一つの難義、今にも小太郎が母親、迎ひに來たらば何とせん、此義に當惑。指當つたは此難義」戸「イヤ其事は氣づかひ有な。女子同士の口先で、ちよつぽくさ欺して見よ」源「イヤ其手では行まい。大事は小事より顯はるゝ、事に寄たら母諸共」戸「エヽイ」源「こりややい、若君には替られぬ。お主の爲を辧へよ」といふに胸すへ、戸「左樣でござんす、氣弱ふては仕損ぜん。鬼に成て」と夫婦は突立、互に顔を見合せて、「弟子子といへば我子も同然。サ今日に限つて寺入したは、あの子が業か、母御の因果か。報は此方が火の車、追付廻つて來ませふ」と、妻が歎けば夫も目をすり、源「せまじき物は宮づかへ」と、共に涙にくれ居たる。かゝる所へ春藤玄番、顔見る役は松王丸、病苦を助る駕乘物、門口に舁居れば、跡

子供と—子供と一緒に

病ほうけ—病衰へ

て氣高い生付。公家高家の御子息といふても、おそらく恥しからず。ハテ扨、そなたはよい子じやなふ」と、機嫌直れば女房も、「何とよい子、よい弟子でござんしよが」〔源〕「好い共〳〵上々吉。シテ其連て來たお袋は何國に」〔戸〕「サお前の留守なら、其間に隣村迄往て來といふて」〔源〕「テヽ夫もよし〳〵大極上。先子供と奥へやり、機嫌よふ遊ばし召れ」〔戸〕「それ皆お暇が出た。小太郎共に奥へ〳〵」と、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ、「最前の顏色は常ならぬ吃相、合點の行ぬと思ふた所に、今又あの子を見て、打てかへての機嫌顏、猶以て合點行ず。どふやら樣子が有そふな。氣づかひな聞して」と問ば、源藏「ホホウ氣づかひな筈。今日村の饗應と僞り、某を庄屋の方へ呼付、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅丞相の御恩を被ながら、時平に隨ふ松王丸。此奴病ほうけながら、見分の役と見へ、數百人にて追取卷、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふよし、訴人有て明白、急ぎ首討て出すや否や、但し踏ん込請取ふや、返答如何にと退引ならぬ手詰。是非に及ばず首討て渡そふと請合た心は、數多有寺子の内、いづれ成共身がはりと、思ふて歸る道すがら、あれか是かと指折ても、玉簾の中の誕生と、菰垂の中で育つたとは似ても似付ず。所詮御運の末成か、いたはしや淺ましや、と屠所の步で歸り

御内證―お内儀

つい戻つて―直歸つてやつて下さい

いふに及ばず―いふに思はず歟

へて御念の入た事。戻られたら見せませう」女「イヤモほんの心計。宜しうお頼申上ます。コレ小太郎、ちよつと隣村迄往て來る程に、おとなしうして待つて居や。惡あがきせまいぞ。御内證樣、往て參じましよ」と、表へ出れば、小「母樣わしも行きたい」と、縋り付を振放し、女「嗜めよ、大きな形して跡追のか。御覧じませ、まだ頑是がござりませぬ」戸「ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましよ。つい戻つてやらんせ」と目でしらすれば、女「アイ〳〵、つゐちよつと一走」と、跡追子にも引さるゝ、振りかへり見返りて、下部引連れ急ぎ行。戸「どりやこちの子と近付に」と、若君の傍へ寄、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはつて色青ざめ、內入惡く子供を見廻し、「エヽ氏より育といふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立たず」と思有けに見へければ、心ならず女房立寄、「いつにない顔色も惡し、振廻の酒機嫌かはしらぬが、山家育は知て有子供、憎躰口は聞へも惡い。殊に今日は、約束の子が寺入りして居まする、惡い人と思ふも氣の毒。機嫌直して、逢てやつて下され」と、小太郎連て引合せど、差俯いて思案の躰、幼氣に手をつかへ、「お師匠樣、今から頼み上ます」と、いふに及ばず振り仰向、急度見るより暫くは、打守り居たりしが、忽面色柔らぎ、「扨々、器量勝れ

寺入—入學者
振舞—馳走に呼ばれて行きたり
いはれぬ—せずともよい
奔走子—愛子

方へおはいり遊ばせ」と、いふもしとやか「アイ〳〵」と、愛に愛持つ女子同士。來た女房は猶笑面、「私事は此村はづれに、輕う暮しておる者でござりまする。此椀白者をお世話なされて下さりよか、とお尋申におこしましたれば、おこせ、世話してやろ、と結構なお詞にあまへ、早速連れて參じました。内方にも御子息様がござりますげなが、どのお子でござりますぞ」戸「アイ是が源藏殿の跡とりでござります」女「コレハ〳〵よいお子様や。外にも大勢の子達、いかいお世話でござりましよ」戸「アイ御推量なされて下さりませ。シテ寺入は此お子でござりますか。名は何と申ます」女「アイ小太郎と申まして、椀白者でござります」戸「イヽヤイヤ氣高いよいお子や。折惡ふ、今日は連合源藏も、振舞に參られました」女「是はマアお留主かいな。お待遠なら私が呼に參りましよ」戸「いへいへ」女「幸い私も參つて來る所が有ば、其内にはお歸りでござりませう。コレ三助、其持つて來た物、あなたの傍へ上ませ」三「アッ」ト答へて堺重、櫃に乗せたる一包、内義の傍へ差出す。戸「是はマア〳〵いはれぬ事を」女「イヤおはもじながら此子が參つたしるし。此堺重は子達への土產、取弘めて下さりませ」と、いはねどしれし蒸物煮染、我子に世話を燒豆腐、粒椎茸の入たるは、奔走子とこそ見へにけれ。戸「是はマア何から何迄、取揃

世話をかく—世話やく、此邊近松の釋迦如來誕生會の句をとる

ませよ—子供の大人しきを嘲る詞

誂戲—からかふ

壓尺—書物の押へにする文鎭

一筆啓上候べく—子供の讀書と一寸申上ますとかけたり

堺重—和泉の堺にて製り出す重箱

に三重進み行。一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはり傅き我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集て讀書の、器用不器用清書を、顔に書子と手に書と、人形書子は天窓搔、教ゆる人は取分けて、世話をかくとぞ見へにける。中に年かさ五作が息子、「コレ皆是見や。お師匠樣の留主の間に、手習するは大きな損。おりや坊主天窓の清書した」と、見せるは十五の涎くり、若君はおとなしく、「一日に一字學べば、三百六十字の教。そんな事書ず共、本の清書したがよい」と、八つに成子に呵られて、涎「ませよ〳〵」と、指ざして、誂戲かゝるを殘の子供、「兄弟子に口過す、涎くりめをいがめてやろ」と、手ん手に壓尺振廻はす、自然天然肩持も、傳ふる筆の威德かや。主の女房奥より立出、「又こりや例の鬪諍か、おとましや〳〵。今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなれば戻も知れぬ。ほんに〳〵こなた衆で、一時の間も待兼る。今日は取分寺入も有筈、晝からは休ます程に皆精出して習た〳〵」子供「ツリヤ又嬉しや休みじや」と、筆より先に讀聲高く、甲「いろはに」乙「此中は御人被下」丙「一筆啓上候べく」の、男が肩に堺重、文庫机を擔はせて、利發らしき女房の、七つ計な子を連れて、「頼みませふ」と云いるゝ。内にもそれと早悟、戸「此

兎角は—何分にも
抱—抱帶にて今のしごき
つばな云々—茅花にて鎗先に喩ふ
多勢云々—大勢に叶はぬ譬
齋料—御飯もらふ代り

往て來やんしよ。八重樣萬に心を付、油斷して下さんすな」八「ヲヽ、春樣の能ふ氣が付た。太義ながらいて下さんせ。跡は氣づかひさしやんすな」と、男勝のかひ〴〵しさ。御臺もことなふ御悦び、「コレ春、僧正樣に逢つたら、夢の事もお咄し申、善惡の譯聞てたも」春「アイ〳〵、何も角も心得ておりまする。兎角は緩りとして居られぬ」と、抱するやら笠取やら、追付吉左右お知らせ」と、こつ〳〵してこそ急ぎ行、程も有せず時平が家來星坂源吾、「あれこそ丞相の御臺よ」と、手の者連て駈け入を、手早く八重は長押の長刀、御臺を「奥へ」と目でしらせ、「何者なれば、踏込で狼藉。目に物見せん」と振廻す。星「ヤア小ざかしい女め。時平公の仰を請、御臺を迎ひに來つたり。邪魔ひろがば討取」と、下知に隨ひつばなの穂先、切立〳〵三重追まくれど、多勢に無勢數ヶ所の疵、長刀杖に立歸り、「ナウ御臺樣、もふ叶はぬ、早ふ退て下さりませ。春樣はまだ歸らずか。エヽ口惜い口惜い、無念〳〵」と云死に、はかなき八重が最後の有樣。御臺は前後も辨へず、死骸に取付御歎、星坂透さず走り寄、引立行んとせし所に、以前の山伏のつさ〳〵と顯はれ出、「イデ其御臺を齋料」と、飛かゝつて源吾が首筋掴んで、目より高く指上、「冥途の旅へうせおれ」と、泥田の中へ頭轉倒。直に御臺を引だかへ、石原砂道嫌ひなく、飛がごとく

犬―間諜

夢を見て、動氣が今に納まらぬ。其夢の物語、春も八重も聞てたも。所は宰府安樂寺、連合の御祕藏が筑紫へ飛梅、梅王丸も一時に下り合せた御悦。梅は飛び櫻はかるゝ世の中に何とて松のつれなかるらん、と卽座の御詠歌、一字も忘れず覺しは、物のしらせの正夢か。まだ其上に時平の家來、丞相樣を殺す工み、事顯れて都の樣子、王位を奪ふ敵の企、白狀するをお聞なされ、以の外なお腹立、赦免なければ歸洛も叶はず、危いは天皇のお身の上、帝釋天へ祈誓をかけ、鳴雷の神と成て、時平に組せし同類共蹴殺し捨んとお憤り、其すさましさ醜しさ、夢とはさらに思はれず」と語り給へば、二人の女房、八「お案じなさるは御尤、さりながら、逆夢と申ますれば、却てめでたい御吉左右。なふ春樣左樣でないか」春「成程そふじや、追付御歸洛なされませふ。したが今來た山伏づら、編笠で顏も見せず、物もいはず、うそ〳〵覗いて去におつたが、いかにしても氣にかゝる。夫梅王殿の指圖にて、此嵯峨に入しれず、御臺樣のござりまするを、嗅出しに來た敵の犬。白大夫樣梅王殿も、筑紫へ下つて我々ばかり、もう爰にも置れませね。幸頃日承はれば、法性坊の阿闍梨樣、下嵯峨へ來てじやげな。丞相樣とは師弟の約束、右の樣子を申上、御臺樣の御事を、お賴み申て今日中に、早ふ所が替へましたい。私や一走り

帝へ祈誓有、御本意は逹する共、御臺姫君若君の、御歎はいか計、とゞまり給へ」と御袖に、取付梅王白大夫、弓手馬手へ刎飛し、菅「住僧いたくなとめ給ひそ。早天帝の恵によつて、形は此儘鳴神の、ふしぎを見せん」と散残る、梅花を取て口に含、天に向つて白梅花、渦く花瓣火焔と成て、雲井遙に行末は、怪し恐ろし。三重夢破る門山伏が螺の貝、吹立々々北嵯峨の、在も山家もぬけめなく、役の行者の跡を追、朝夕してやる五器膳器、五器の實修行と知られたり。春「ア、やかまし御奉禮殿、貝吹て下さんな。頼ふだ方のお氣結ほれ、夜は碌に御寝ならず、今とろ〳〵とお睡眠、アレまだいの、断云ても聞入ぬ、無法禮殿、止めやらぬか。そしてから不遠慮な笠も脱ずに内へ這入、うそ〳〵と何見やる。女子計と思やつたら、當の槌が違ひましよ。サア出やらぬか、いにやらぬか」と、呵り轉され御奉禮、門へは出れど日は跡に、心残して立歸る。春「エ、どんな奴がうせおつて、御機嫌は如何ぞ」と、障子の此方に手をつかへ、「思ひがけない螺の貝。お目も覺ふ、お痞はのぼらぬか。「八重様いかゞ」と尋れば、八「サレバイナ、いつにない御臺様、すや〳〵と寐入ばな、貝に驚きなされたか、總身に冷汗。思へば憎い山伏づら」春「サア私も腹が立て、入る手の中もやらなんだ」と、二人が咄しに御臺所、「イヤなふ山伏の業ではない。恐ろしい

白梅花—吐くにかく

朝夕してやる云云—朝夕使ふ膳椀と役行者が常に使ふ後鬼前鬼とかけたり

五器の實云々—飯食ふ爲の修行と洒落たり

頼ふだ方—主人

ついど―ついぞ
虚名―無實の名
目の前云々―目の前に知らせんにかく
亂燒―刀の
急ふれやつ―急げや
庫裏方丈―臺所と住持の居間

狂はしく立給へり。白大夫悔りし、「しれて有時平が工み、今聞たか何ぞの様に、ついど覺へぬ怖いお顏、爰から睨しやましても、都へは屆きませぬ。御持病の痞が發れば、セヘン悲しうござります」と、老のぐど〳〵物案じ、菅「やおれ梅王白大夫、時平の大臣が謀叛の企、聞捨られぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず、王位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉體危し。臣が忠義徒に此所に朽果る、骸は虛命蒙る共、死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立歸り、帝を守護し奉らん。天に誓ひの我願ひ、驗は目の前」白梅の、氣條ほつきと折取給ひ、「朝敵一味の佞人原、退治の手始め是見よ」と、枝にて丁ど打給へば、平馬が首は飛梅の、氣條も花の亂燒、誠の劒も及びなき、梅の名作御手の中、親子は恐るゝ計なり。菅「ヤア汝等、かゝる大事を聞からは、片時も早く都に登、時平が工み奏問せよ。我は見上る此高山絶頂に、三日三夜立行荒行、根氣を碎き梵天帝釋、焔羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲井に鳴雷、十六萬八千の首領となつて、眷屬引列都に登り、謀叛の奴原引裂捨ん。現世の對面是迄なり。急ふれやつ」と御聲も、倶に烈しきはやち風、吹立々々本堂の、甍破れて庫裏方丈、蔀遣戸は木の葉のごとく、庭の立木も飛梅も、花も砂も吹しきる。親子も住寺も大きに驚き、期も來らざる御身を捨、天

梅は飛び云々―梅王は此處に飛び櫻丸は死したるに松王は何故つれないか此歌桐鳴既筆の梅はとび櫻は枯るゝ世の中に松計りこそつれなかりけれの作りかへ

心地よくこそ見へにける。丞相御悦喜淺からず、懲しき都の樣子を知す、忠義の花は有情の梅王、示現によつて飛來る花は、非情の此梅の木。有情非情も隔なく、菅丞相を慕ひくる、梅に褒美の御言の葉、菅「梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何迚松の難面かるらん」つれなかるらん松王は時平が舍人、枯し櫻は宮の舍人、梅王は我舍人、花の榮へは安樂寺、其名も高き飛梅の、不思議は今に隱れなし。「ヤイ梅王、有がたい今の御歌、此梅に准へ、其方をお譽遊ばし、櫻は枯るゝ世の中とは、死んだ躬を御悔、つれなかるらんと有松王めは、時平に追從してをろな」菅「ホヽ親人の推量違はず、兄弟といふも穢らはしい、畜生めはさて置て、さす敵は此鷲塚。サア時平が工み白狀せい。いやといへば刀の引導、如何じや〳〵」と立かゝる。鷲「アヽこれ聊爾有な。主從の義を立ぬき、命にかへて云ぬは古風、いはして置て殺すも古風。新しう助る樣に殘らず申ス。時平殿は王位の望み、邪魔になる菅丞相、首取て立歸れ、軍陣の血祭して、大望の旗を上、天皇親王院の御所、片端仕廻ふて天下を一呑、身共も公家に成樂。空悦の裏が來て、恥をさらす縛り繩、早ふ解いてくださりませ」と時平が叛逆、一々殘らず、聞し召れし菅丞相、柔和の形相忽ちかはり、御眦に血をそゝぎ、眉毛逆立御憤、都の方を睨付、物

ふり物―突然におこるもの
ひあい―危い、此句平家物語にあり
筋斗―ひつくり返す
ごさます―お出になる
一刎―一跳
筑紫―著くにかく
ふづくりかけ―だましかけて（色道大鑑）

門打」と、いふ間あらせず踏込々々、打合戰ふ侍二人。寺僧は驚き白大夫、御座を圍ふて、白「ア、これ〳〵見れば双方旅裝束。喧嘩はふり者と有てから、爰で仕廻は付させぬ。出やれ出やれ」といふをも聞ず、打合ふ一人は我子の梅王、「コリヤまあ其方は何として、ハア〳〵ひあいな切られな」と、氣をもみあせる親心、聲の助太刀相人の刀、梅王に打落され、迯るを透さず飛かゝり、片手つかみに筋斗打せ、膝にかためし健氣の擧動。白「ヤレ〳〵出かした、手がら〳〵。ヤ手柄はしたが喧嘩の次第、次には其方が下つた樣子、都の事を案じてござます、幸是に丞相樣、樣子一々申上い」梅「ハッハア恐れながら、梅王が念願達し、變らせ給はぬ御尊體、見奉るは生涯の本望。都に御座有るお二人樣、世を忍ぶお身なれば、一所には置きまされず、若君樣は武部源藏に預置、私が妻、櫻丸が女房、八重と春とは、御臺樣の御介抱。お身の上は指置れ、配所の樣子見て參れ、と仰に幸出船の手番、天運に叶ひ日和まん、千里一刎日數も込ず、夜前此地へ筑紫船。乘合の中に時平が家來、鷲塚平馬、此梅王を見しらぬ馬鹿者、ふづくりかけて樣子を問へば、菅丞相を殺しに來た、と傍が口から最後を急ぐ。寺にござるを能ふ知て、直に仕かける不敵者、梅王が御土產」と、早繩かけてぐつとしめ上、緣柱に猿繋、

留木—袖に焚しめる奇南香
こつてこて—丁寧に
水一杯—木に水一杯やらぬ
氣云々—若枝の直に延びたる形
うさる—腐る
天目—大茶碗

議の靈夢の告、御慈愛の梅一樹、配所の主に見せよと有、示現にかはらぬ觀音堂の左の方、一夜に生出る不思議さよ」と、語るも聞も正夢の、割符を合せしごとくなり。「是より寺へは程近し」と、住侶伴ひ御歩路、安樂寺に入給へば、それぞとしるき梅花の薫、袖に留木の心地せり。白大夫はこつてこて、梅の土際覗き廻り、「こりや不思議、イヤ希代じや。申丞相様途次お住寺の夢咄し、へゝ何をやらるゝやら、そんな事が能ふ有ふ、と誠しない事、疑ふておりましたが、來て見て悔り。此木の枝ぶり花の匂、佐太のお下屋敷に植つて居りました、夫じや〳〵、其梅でござりまする。アヽ神佛の告は爭はれぬ。おらが爰へ來た跡では、水一杯飲まし人も有まいに、ぶき〳〵とした木の色艶、芽立の氣條つういつい。花はうさる程付たれば、梅漬の時分二三斗は慥に生らう。四五升は地を借た年貢代、お寺へも進ぜます。跡は此方の實入〳〵。今は先腹の實入、御馳走酒下さりましよ。アヽこれお酌、白大夫が盃は、いつつでも此天目、立酒は氣にかゝる」と、床几の傍にちよつつくばひ、口も心も有の儘、見へた通りの律義者、花の眺に一入の、興を催しおはする所に、「そりや喧嘩よ。アリヤ拔いた、切合てそりや來るは。寺内へ入な、

ほうつて—捨てて
うそ淋しい—うそは發語

延て—述てなり

住侶—御坊
祝著—悦び入る

の躮共、一人は死る、跡二人は氣も揃はず、面倒な奴等打ほうつて、此太宰府へ參つたは、去年の三月。うそ淋しい不自由なお住居、一年の日數は立ど、月見花見に出もなされず。今日は何と思し召す、牛引けと有御意が出て、私が皺も腰も、アヽ延やかな春の野面。安樂寺へお參詣は、御歸洛の御立願でがなござりませふ」菅「否やとよ、我に科なければ、佛に苦勞かけ奉り、身の上祈る心はなし。讒者の業としろし召ば、罪なき事も世に顯はれ、歸洛の勅諚下るべし。夫迄は菅丞相、月にも花にも目はふれず、私なき臣が心、帝はしろし召れず共、天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは、此曉不思議の靈夢、菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛、都の住居思寐の、枕の硯引寄て、筆に任せて斯く計。東風吹かば匂おこせよ梅の花主なし迚春な忘れそ、と心を延て睡眠みしに、妙なる天童、我枕に立せ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木迄情を受し主を慕ひ、花物いはねど其驗、安樂寺へ詣見よと示現に依て」と宣ふ所へ、安樂寺の住僧杖を便に老の足、夫ぞと見奉りしより、小腰を屈め立寄ば、丞相鞍よりおりさせ給ひ、「住侶の歩行は何國へぞ。我は貴院へ行く折から、是にて對面祝著々々」僧「ハア愚僧義も外ならず。公の御目にかゝりたく、參る子細餘の義にあらず。夜前不思

さつてもしたり―是はしたり

さかい―故

おね〳〵―云々―牛は反芻獣なれば折々胃より食を戻して噛む

あんたる―何たるの訛

艶、天角地眼、一黒直頭、耳小歯違、天晴御牛候よ、ちよ〳〵のちよせい」と褒めにける。菅丞相はめづらかに、聞馴給はぬ褒詞、菅「ヤイ白大夫。春は耕し、秋は刈穂の稲を負せ、耕作の助と成牛の善悪能知筈。天角地眼と申せしは、角と眼の備への事。一石六斗二升とは、牛を價取其價ひ、升目に積る物やらん、語れ聞ん」と仰ける。白「さつてもしたり。天下に有とあらゆる事共、余さず洩さず知てござる丞相様、牛の事は御存知なく、お尋に預るは、百姓に生れた一徳、お慮外ながら、牛の講釈聞かしやりませ。一黒と申は、俵物の石目ではござりませぬ、毛色を吟味する時は、黒いが極上、それで一黒。次に直頭とは、天窓の見所、頭とは頭、どつちへも傾かず、まんろくなが能さかいで、直頭と申ます。耳小の耳は耳、小はちいさし、随分耳はちいさいを好みます。扨歯違とは、きやつがおね〳〵にれを嚙む、上下の歯先揃ふは悪し、五一に生たが歯違の歯の見所。次第を上から云立れば、一石六斗二升八合。牛の講釈もふ仕廻でござまする」菅「誠に性は道によつて賢し。白大夫が咄しを聞、一つの德を得たるは」と、仰にひよこ〳〵小跡して、白「こりやマアあんたる仰ぞい。親の代から御領分の百姓、三つ子の事迄お世話になされ、御恩に御恩有がたふて、寐た間も忘れぬ此親と違ふて、三人

涙―なしにかく

つど〳〵―一々

西へ行云々―從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂（阿彌陀經）

君を思へば云々―當時の流行唄よやヨホイホ、ハリナは拍子詞

野飼―牧に放ちて飼ひし牛

しはらくさい云云―不詳一說にしはらは備馬樂

渡り繻子―舶來の繻子

涙に「南無阿彌陀佛」と鉦打納め、撞木とかはる杖と笠、白「白大夫は片時も早く、菅丞相の御跡慕ひ、島へ赴く現世の旅立、櫻丸が魂魄は未來へ旅立。此亡骸梅王夫婦を頼むぞ」と、八重が事迄つど〳〵に、頼む詞の置土產、冥途のみやげに只念佛、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛〳〵〳〵」南無阿彌陀笠打かぶり、西へ行足、十萬億土、亡骸送る親送る、生ての忠義死たる義臣、一樹は枯し無常の櫻、殘る二樹は松王梅王、三つ子の親が住所、末世に夫と白大夫、佐太の社の舊跡も、神の惠と知られける。

第四

歌君を思へばよやヨホイホ、結ぼれ糸のハリナ、とけぬ心がつろござる、いよつろござる。つらき筑紫に立年月、御いたはしや菅丞相、讒者の業に罪せられ埴生の小家の起臥も、きのふと暮れて今日は早、延喜三年如月半、空も春めく野山の眺め、野飼に召させ奉り、我樂しみは在鄉歌、歌君を思へばよやヨホイホ。白「ハヽヽヽハア何をがなお氣晴、しはらくさい、どつてう聲、牛殿の手前も面目ない。ヱヽ見れば見る程見事な毛並、角の構眼の備、頭持の樣子、骨組肉合惣毛一色、眞黑黑牛、渡繻子も及ばぬ色

利釼即是—念佛すれば罪障の消滅すること利劍の物を斷つが如し(般舟讃)

枳殼—からたち

ながら恥を知り、義の爲に相果る」と、三方取て戴くにぞ、「もふコレ今が別れか」と、泣に泣れぬ夫の覺悟。白大夫目をしばたゝき、「潔い躮が切腹、介錯は親がする。其刀コレ見やれ」と、懐から取出すは、願ひ込だる鉦撞木。「コレ此刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利釼即是彌陀號」と、撞木を取て打鳴す、鉦もしどろに「南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀〳〵〳〵、南無阿彌陀〳〵〳〵」念佛の聲と諸共に、襟押寛げ九寸五分、弓手の脇へ突立つれば、八重が泣聲打鉦も、拍子亂れて、「南無あみだ〳〵〳〵〳〵」右の腸引廻し、櫻「憚りながら御介錯」白「ヲヽ介錯」と、後へ廻り撞木振り上、「南無阿彌陀佛」と、打や此世の別の念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切て、かつぱと伏て息絶たり。八重が覺悟も此場をさらず、夫の血刀取上る、枳殼のかげより梅王夫婦走り寄て、「こりや何事」と九寸五分もぎとり捨、親の前に畏り、梅「コレ〳〵先程歸れと有し時、表へは出たれど、櫻丸がこぬ不思議、と丞相樣の御祕藏有し、櫻の折たを詮議もなされぬ、彼是不審に存ずるから、裏より忍び立戻り、始終の樣子は承はつた。ヘヱ是非に及ばぬあの樹と共に、枯し命の櫻丸。兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合せ、女夫の者が忍の念佛。あつたら若者殺せし」と、悔む夫婦も聞親も、八重も死なれぬ身の繰言、是非も

三方、腹切刀は何事ぞ」と恨つ頼つ身を投伏、悶へこがるゝ有様は、物ぐるはしき風情なり。白大夫顔ふり上「子に死といふ腹切刀、むごい親と思ふ、云わけではなけれどな、此曉は我身の悦び、いつもより早く起、門の戸明くれば櫻丸、ヤレ早ふ來てくれた、陸ならば夜通し、但しは船か、サアまあ此方へと呼入て、樣子を聞ば右の次第。白大夫づれが躮には、驚き入た健氣者。とゞめても聞入ず、今日の祝義仕廻迄、女房が來ても逢しはせぬぞ、おれが出いといふ迄は、納戸の内に隱れて居い、と一寸延しに命をかばひ、助けてよいか惡いかは、おらが了簡に及ばず、神明の加護に任さん、と最前祝義にくれた扇三本、幸 繪には梅松櫻、子供の行末祈る顏で、氏神の祠へ直し置き 信を取つて御鬮の立願、櫻丸が命乞、中の繪は上から見へぬ三本の此扇、初手に櫻をとらしてたべ、ヱヽ上らせたまへと再拜祈念、取上た扇ひらけば梅の花。南無三、是は叶はぬ告か、神の心を疑ふ御鬮の、取直しせぬ物なれ共、助けたいが一ぱいで、取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪。頼も力も落果て、下向すりや折た櫻。定業と諦めて、腹切刀渡す親思ひ切ておりや泣ぬ。そなたも泣きやんな」櫻「ヤヽヤヽヽヽアレ聞いたか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ、御恩も送らず先達不孝、御赦されて下されい。下郎

竹の園—親王の事、梁の孝王の故事
わりなき—隔てなきよい中
これ俯伏て云々—是より親仁に向つて口說く詞

さず云聞さん。某が主人と申もお恐れ多き齋世の君樣、百姓の躬なれ共、菅丞相の御不便を加られ、親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り、松王梅王櫻丸、憚り有や冥加なや、烏帽子子に成下され、御恩は上なき築地の勤、三人の其中に、櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々の下々たる牛飼舍人、勿躰なくも身近く召れ、菅丞相の姫君と、わりなき中の御文使、仕課せたが仇と成て、讒者の舌に御身の浮名、終には謀叛と云立られ、菅原の御家沒落、是非もなき次第なれば、宮姫君の御安堵を見屆け、義心を顯はす我生害。今朝早々爰迄來て、右の段々、生きて居られぬ最期の願ひ、聞屆けて切腹刀、親の手づから下されたはい女房。我にかはつてお禮も申、死後の孝行頼むぞ」と、義を立守る夫の詞。女房わつと聲を上、「仇成戀路のお媒介、親王樣の御惡名、丞相樣の流され給ふ、其云譯に切腹なら、此八重も生きては居られぬ。私は殘つて孝行せい、と胴欲にもよふいはれた。夫よりはまだむごい腹切、禮を申せとは、それが何の禮所。無理な事いふ手間で、いつしよに死とコレ申、女房の願ひ立てたべ。親父樣の思案はないか。コレ俯伏いて計ござらず共、よい智恵出して下さりませ。夫の命生死は、親父樣の御詞次第。御前は悲しうござりませぬか、親の手づから此

狹出し鍔—短刀に用ゐる楕圓形の鍔

さぎや仕ませぬ—持ちはせぬ

弟、名殘も惜き相嫁の、顔を見る目もあかれぬ涙、袂絞つて出て行。白「ハレヤレ嬉しや面倒なやつ片付た。ヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衛、尋にいかぬかうせぬか」と、是も手づよふきめ付られ、梅「そんなら島へは」白「サア行所へはおれが行わい。出て行出て行」をこはがるおはる、「八重樣跡で能やうに、お詫言を」と云捨て、夫婦は門へ、白大夫は唾を呑込んで奥へ行。兄弟夫婦に引わかれ、取殘されし八重が身の、仕廻もつかぬ物思ひ、門へ立そに待夫、思ひがけなき納戸口、刀片手に莞爾笑ひ、櫻「女房共嘸待つらん」と、聲にびつくり走りより、八「ヤアいつの間にやら、來たともいはず、案じる女房を思はぬ仕方。兄弟衆の事について、親父樣のお腹立、其場へは出もせいで、マア何で此方樣は納戸の内に。ヱヽこれナア譯を聞して〳〵」と、聞たがるこそ道理なれ。暫く有て白大夫、狹出し鍔の小脇指、三方に乘しほ〳〵と、出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置、「用意能ばとく〳〵」と、いふに女房又恂り、八「ヤアこりや何じや親父樣。櫻丸殿どふぞいなア。何で死のじや腹切のじや。切らねばならぬ譯ならば、未練な根性さぎや仕ませぬ。こなさんが云れずば、親父樣の只一言、案じる胸を休めてたべ。お慈悲〳〵」と手を合せ、泣より外の事ぞなき。櫻「ヤア親人に何御苦勞。是迄馴染む夫婦の中、所存殘

臍がくねる―嘲笑の意

甲に似せて云々―諺にておのれの本分を守ること

い、尤御不自由な配所のお住居、お傍へ參つて御用を聞、膝行役の奉公は、此白大夫がよい役じやはい。血氣盛奉公盛、菅丞相の所緣と有ば、根掘葉掘絶さん迚、鵜の目鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲、すはといふ時身を惜まず、御用に立所存はなふて、膝行役を願ふは命が惜いか、敵が怖いか。旅立の願ひ叶はぬ〳〵取上ぬ」と、願書顏へ打付て、はつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入たる風情なり。白「ヤイ松王、そちが此願ひを見れば、勘當を請たいとな。ハアハヽヽ、神武天皇樣以來、珍らしい願ひじやな。エヽ不孝といはゞ譬のないやつ、余り珍しい願ひなれば、聞届けてくれるぞ」と親の了簡、「ハヽハア忝し」と悦ぶ松王勇み立、「親子兄弟の緣を切る、所存も問ず赦されしは、此松王が主人へ忠義、推量有ての事なるべし」白「ハヽヽヽ、如何樣、口は調法な物じやな。主人への道立、臍がくねるはい。道も道に寄てな、横に取て行道を、蟹忠義といふはいやい。甲に似せて穴を掘る、と勘當請れば兄弟の緣も離れ、時平殿へ敵對ば、切ても捨ん所存よな。尤善惡差別なく、主へ義は立にもせい、親の心に背くをな、天道に背くといふわい。望叶へてとらする上は人外め早歸れ。隙取らば親子の別、竹箒くらはさふ」と筋骨立て怒聲、松王は思ひの儘、「女房來い」と引立行。千代は遉に親兄

又格別―若君と一つにはいはれぬ

讀も口の中、願ひは何やら聞へねど、春と千代とは、夫の心知つて居る筈、跡先を知らねば案じるは八重一人、八「三人の兄弟鬪諍、親父樣お頼み申シ、今日中直と云合した。千代樣春樣こりや何ぞい。何をいふてもこちの人、櫻丸殿ござらぬ故、心當が皆違ふた。道で眩暈が發つたか」と、見へぬ男を案じるやら、二人の願ひも氣にかゝり、小首傾け案じ居る。親父は二通讀仕廻ひ、「コリヤ梅王、其方が願ひに、旅へ立隙くれとは、ム、推量するに外でも有まい、菅丞相のござる島か」梅「成程々々、結構な御殿に引かへ、埴生の小屋の御住居、御用聞人なければ、梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇」と申ける。白「ム、恩を知らねば、人面獸心といふてな、顔は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリヤやい、御臺樣や若君樣、お變も遊ばされず、御座る所も知れた上、旅立の願ひじやな」梅「イヤ御臺樣は、其以來お目にもかゝらず、御座所も存ませぬ。併女儀の御事なれば、若君樣とは又格別。菅秀才の御事は慥に」といはんとせしが、松王を尻目にかけ、「慥に所は存ぜねども、息災に御座有噂」白「ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才、御息災なを聞た計、お目にもかゝらず有家も知らず、夫でおのれ忠義が濟か。女儀の身と吐かしおる御臺樣は、主じやないか。コリヤや

がつくり―打傾く状をいふ（俚言集覧）

塵をひねる―手持不沙汰の躰

煮くちた―煮え過ぎた

ぎつとした―儼然と

肩先ひねつてがつくりさせ、横に抱へる松の木腕、劣ぬ肘骨梅の木腕、絡みもぢつて押合力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸残る木の、上はほつきりぐはつさりと、折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力、倶に靭れて手を打拂ひ、うろつく中へ早下向、「アレ親父様のお歸りじや」「白大夫様の」といふ聲に、二人は肩入裾おろし、腰刀指間も有ず戻られし、年は寄ても怖いは親、上へも上らず犬蹲踞、「今日の御祝義お目出たい」と、祝義は述ても赤面し、塵をひねらぬ計なり。親はほや〳〵機嫌顔、「嬶達が先へ來て、七十の賀を祝ふてくれたで、今日の祝はさらりと仕廻た。しれてある刻限、遅いは何ぞ障が有て來ぬに極めた。梅王松王能ふこそ〳〵來てくれた。コレ二嫁女、煮くちたで有ふが、雜煮祝はしてたもつたか」と、折た櫻は見ながらも、誰仕業ぞと咎もせず、呵る所を呵らぬ親、一物有としられたり。梅王丸懐中より用意の一通取出し、「祝義濟で候へば、私の所存の願ひ、是に書付候」と、親の前に指出せば、松王も又一通、「身の上の願ひ是に有」と、同じ所へ直せしは、言ひ合せたるごとくなり。白大夫打笑ひ、「心安いは親子兄弟夫婦斯並んだ中、願ひ有ば口では言はいで、ぎつとした此書付。さらばおらもぎつとして、代官所の格で捌こ」と、願ひ書手に取上け、つぶ〳〵

後れたー臆した
頬げたー口

ちの人梅王殿」と、刀の柄にしがみ付、女房春を取て突退、梅「七十の賀でも祝日でも、堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな。コリヤ松王後れたな、女房が留るを幸に、頬げたに似ぬ腕なしめ」松「ヲヽ留らるゝを幸とは、我心に引くらべて、松王には慮外の雑言、身が女房が留たより、其方が女房が、親にもまだとの一言、肝先へきつと當り、怺へ〳〵こらへたが、もふ堪らぬ。眞劒の勝負は親人に逢ての後、夫迄の腹癒に砂かぶらせねば堪忍ならぬ。千代に是を預ける」と、兩腰抜てほうり出し、裾引褰げて身拵へ、梅「ホヽ畜生めが、こりやよい了簡。櫻丸が來る迄は松王が命、松王に預ける」と、同じく兩腰ほうり捨、「刃物を渡せば血はあやさぬ。女房共邪魔するな」とつゝと寄つて、緣より下へ踏落せば、早足の松王、落さまに諸足かけば梅王丸、眞逆樣に落かさなり、摑合擲合、組では放れ離れては又組合、捻付引伏蹴つ踏づ、双方力も同年血氣盛の根くらべ、千代と春とは二人の兩腰、取れもせうかと氣づかひ半分、傍へも寄れずハア〳〵ハアと、心をあせり氣をもみ上、どちらが勝も負もせず、擲き合たが二人の存分。春「梅王殿もふよいはいな」千「松王殿もふ置しやんせ」二人「やめて〳〵」といふのも聞ず、勝負つかではむだ働、投てくれんと松王丸、嵩にかゝつて押力、ひろまぬ梅王つゝかくる、

女共―春をさす
あたぶの悪い―胸の悪い
腹の皮―可笑しい事
おとましい―とんでもない事

お春殿そじやないか」と、詞の端にも殘る意趣、梅王も日脚はたける、喘いて來かより突蒐り、松王には顔ふり背け、梅「お千代殿今日は太義。コリヤ女共、親人と櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ」春「イヤ今も松王様のお尋、櫻丸様はまだ見へぬ。お二人は宮參」梅「ム丶櫻丸は何ふして來ぬな。ア待兼る者は來いで、胸のわるい見ともない頰がまへ」と、梅王に當こすられ、松王丸逸徹短慮、「あたぶの悪いねすり言。言ひ分有ば直に言やれさ」梅「何のわれに遠慮せう。わが頰がまへを見る度々、ゲイ／＼と虫唾が出る」松「ハハ丶丶、ハレ申したり腹の皮、此松王は生れ付て涙脆い。櫻丸や其方が様に、扶持放されの痩頤、肚饑からふと思ふて遣るが、兄弟のよしみだけ」梅「ホ丶扶持放されと笑ふやつが、喰ふ扶持がろくな扶持か。鐵丸を食すといへ共、心穢れたる人の物を請ずとは、八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時平が扶持、有難ふ思ふはな、人でなしの猫畜生」松「ヤア畜生とは舌長な梅王。今一言いふて見よ」梅「ホ丶望みなら安い事。畜生々々どふ畜生」「最赦されぬ」と松王丸、刀の柄に手をかくれば、梅王も反打かへし、詰寄詰めよる二人の女房、「是はマアおとましい、氣が違うたか松王殿」と、千代が夫を抱とむれば、春「七十の賀を祝ひに來て、親父様に逢もせず、反打つてどふさしやる。祝日に抜てよいか、こ

十二銅ー賽錢十二文

立そに云々ーせきたてる

上てたも、子供等が膳は盛た儘、冷たで有ふ盛直して、コレ嬶達、二人前づつ喰てたもや」「イヱ〳〵私等はまそつと待て、主達が見へてから、打竝んで祝ひましよ」白「そんならそれよ。おれは村の氏神樣へ參つて來ませう」「そんならお參りなされませ」白「ヲヲ〳〵往きましよ。拵へて置た十二銅、そこに有取てたも。三本の此扇、末廣ふに子供の生先、氏神へ頼んだり見せたりせう。ヤア八重はまだ參るまい、次手ながら連立ふ。サア〳〵此方へ」と機嫌よふ、表をさして出て行。春「コレちよ樣、年寄しやつても物覺へのよい事。こな樣や此春は、氏神樣知つて居る、八重樣は今が始め」千「言はしやんすりや其通り。物覺へのよい親御に違ひ、物忘れする子供達、松王殿何故遲いぞ」春「此方の夫もなぜ見へぬ。但しは來ぬ氣か」千「今日見へいで好い物かいな」春「それこそ其處へ松王殿」千「ヱヽ、是女房を立そに立して、刻限過たをしらずかい」松「ヤアべり〳〵とかしましい。時平樣の御用有て、夫れ仕廻ねば動かれぬ。先へ參つて其譯言へ、と云付たを忘れたか。梅王も櫻丸もまだ來ぬそふな、親仁殿も内にござらぬ」千「サア其親父樣は八重樣を同道で、も些と先に氏神參り、兄弟衆は未見へぬ」松「ソレ見いな。遲いといふおれは主持、梅王も櫻丸も、主なしの扶持放され。用もない和郎達が、遲いのが眞のおそいの。

替やいの―替へやいの

片いき―片マハリ

手づつ頭巾―拙き頭巾

王殿で、子達も揃ふ。サア親父様、目出たふお箸なされませ」白「ホ、なされふ共〳〵、親甲斐に座が高い。子供共へドレ挨拶」春「ハテなふそれには及びませぬ。お加減のさめぬ内」白「イヤ〳〵お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つた辭宜作法」と、庭に下りるもまめやかに、樹の前に畏り、「イヤ是子供衆、何にも御座らず共、かふまいつて下されい。親が折角おりての辭宜、辭宜返が仕たふても、動かれぬは知れて有、爰で〳〵。ハヽヽハヽ嫜達、餅を替やいの」と、尻もちついて悦び笑ひ、我膳に押直り、箸を取るより、「ムウ〳〵拶鹽梅じや、味いは〳〵。三人の嫁女達、給仕も片いきせぬ様に、三杯は喰合點で、歌おじやらしまするじやなんよゑ、ハヽヽヽこりや新しい三方。土器、誰が持て來ましたぞ」春「イヤ夫は八重様の」白「ハテ氣が付て忝い。春も何ぞくれるかい」春「眞に忘れてをりました」と、扇三本袖土産、「中の給は梅、松、櫻、お子達の數を祝ふて、三本ながら末廣がり、目出たふ祝ふて上まする」白「こりやめでたい忝い。中の給も咄しで知れた、明て見るに及ばぬ、此儘々々。コレ戴きます〳〵」と、機嫌に千代が袂から、「是は切の有合で、私が縫た手づつ頭巾、頭に合はずは縫直さふ、お召しなされて下さんせ」白「ヲヽどれも〳〵不足もない心付な、おくりやり物。サア盃も濟だは、おれが膳か。っ

おりやる—ござる
見せいで—下に「殘念」を畧せり
申—午後四時
いはしやました—いはしやれました
鱓—ひしこの干物、健全の意を寄す
吉野—よしにかく

根性の悪そふな松王が面がまへ。ヤ千代が傍で麁相いふた、氣にかけてたもんな。マア怪我がなうて嬉しうおりやる。怪我の次手に、孫めは健なか、連て來て顔見せいで。ヤア兎斯ふいふ中、もふ七ツじや。おれが生れたは申の刻限、料理も大かた出來たであろ。嫁達膳を出さぬかい」春「アイ〳〵、刻限の過る迄、連合衆はなぜ見へぬ。千代様八重樣道迄往て見て來まいか。爰で待より三人ながら」「ござんせ」「往かう」白「ヤア嚊達何云ふぞい。子供共は來て居るはい」「アノ來てじやとは、どこに〳〵」白「エヽ、鈍な嫁共、其處に居るを得しらぬかい。コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は殘らず揃ふて有。勿體ない菅丞相樣、くゝめる樣にいはしやました。生日の刻限が違や悪い。祝義には陰の膳も居るならひ、サア〳〵早ふ」と白大夫が、いふに猶豫も成がたく、俄に盛やら箸打やら、椀の向ふの小皿に鱓、「先一番に親父樣、是でお居りなされませ」と、給仕は元よりならはねど、見馴れ聞馴れ舉動ひ、八重が配膳御所めけり。白「イヤおれも彼處へいこ」「イヤ土間では冷が上ります。やつぱり爰で」と押供へ、是から面々夫の給仕、膳を捧げて庭に下り、八「此梅の木が梅王殿、枝ぶりずんと日頃の氣質、八重が連添ふ男振、木ぶりも吉野の櫻丸、是は千代迄添遂げる、女夫が中の若緑、色も艶々勢ひよい松

くちやくちやー
ぶつくさ

賑はしよ。白大夫目を覺し、「こりや躮共はまだ來ぬか。正月から知れて有おらが祝ひ日、油斷せふ筈はないが。アヽ此中誰やら、ヲヽそれ〳〵、今いんだ十作が咄しには、時平殿の車先で、三人の子供が大喧嘩、聞てかと知らしてくれた。喧嘩の様子嗅達はしつて居よ。車先での事と有ば、時平殿に奉公する松王が女房、爰へ來て様子を言や」と、名ざしに合たは千代が迷惑、「お祝事の濟迄は、お前の耳へ入ぬがよいと、三人ながら其心、いらぬこと喋られて、隱されねば申ます。梅王様櫻丸様、二人の相手にこちの人、日頃の短氣云上つて、兄弟喧嘩。したが氣づかひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場は夫で濟だれ共、もちやくちやいふて居られます。春様八重様、お前方もそふであろ。氣の毒な男の不機嫌」「成程〳〵、千代様のいはんす通り、今日の祝ひを云立て、兄弟御の中直し、親御のお詞がよらいでは」と、男思の壁訴訟、白「エヽ、和御寮達に問たらば、知れふと思ふな喧嘩の筋、知て居ても言はぬか。同じ胤腹一時に生れた躮でも、心は別別、よふ似た顔を二子といへど、夫もそれには極まらぬ。女夫子も有、又顔の似ぬ子も有。マア大概顔が似れば心もよふ似て、兄弟の中も能物じやが、おらが躮共、誰が見ても一つ作とは思はぬ。生ぬるい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るから如何やら

浸―ひたしもの
日脚の云々―時間が過ぎて氣がせく
ヤアゐい／＼―ヤツコリヤシヨ
根來椀―紀州根來寺より出でし椀
かんまへて―注意して

すがら、千代樣に行合て、連立てくる道轉業。今日の祝の浸にと、薺蒿蒲公英二人の仕業」八「夫はよふ氣が付た。春樣誘ふ約束も、日脚の長たに氣せきして、寄る事も忘れたに、お千代樣とはよいお出合」千「サイナお春樣に逢たはわしが仕合せ、賑やかな道連。夫はそれじやが親父樣、料理の拵へ出來て有かへ」白「イヤ出來てない。和御女達に爲す合點。こて／＼とむづかしい事は入ぬ。今朝搗た餅で雜煮仕や。上置はしれた昆布、隙の入ぬ樣に茹て置た。大根も芋もそこに有。勝手は知まい、ヤアゐい／＼」と立上れば、嫁「イヤ申、今日の祝ひはお前が目當、料理方の出來る迄、何にも構はず一寢入なされませ」勝手しらねば三人寄て、何も角も取出す。白「左樣じやてゝ、立た次手、棚な物下してやろ。コレ／＼是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや。折敷も拾枚、おらが息災なもこの椀折敷、堅地な迚かんまへて手荒ふ當るな嫁女達。これマア躮共はなぜ遲い。來る迄に一鼾」と、體を横に差枕、堅地作の親仁なり。春「コレ皆樣、何ぼう彼樣におつしやつても、雜煮計では置れぬ。飯も焚ざなるまいし、何はせいでも鰹鱠、道草の薺蒿お汁によかろ。八重樣千代樣頼ます。此春は飯仕かけふ」と、手々に俎板摺粉盆、米炊桶にはかり込、水いらずの相嫁同士、菜刀取て切刻、ちよき／＼／＼と手品能、味噌摺音も

わちよ—汝

仕やろと—仕やらうとも

寢酒一ぱい—下に「振舞へ」を略せり

手目—仕方

道草—手間取る意を寄せたり

枸杞—枝に針ある灌木

ござんする—お出でなさる

郎九殿、お客そふな。もふ往にましよ」白「エ、是四郎九とは、物覺がない十作。白大夫早忘りやつたかいの」十「イヤ忘れはせぬはいの。餅の祝とは格別、名酒呑ねば何時迄も四郎九郎」白「バレヤレ盛た酒を飲ぬとは、但しはまだ呑足ぬか」十「エ、ぬけ〳〵と嘘いふわちよ。おらに酒いつ盛た」白「チ、さつきに盛た。コレ樽や徳利は目に立故、餅の上へ茶筅の先で、酒鹽打てやつたので、一度の祝濟だじやないか」十「エ、夫で聞へた、嗅が酒くさい餅じやといふた。外へは遠慮でそふ仕やろと、おらは日來懇だけ、晩に來て寢酒一ぱい。お客是に」と出て行。白「嫁女アレ聞やつたか。今の世の人は、きめごまかで、おらが始末の手目見付て、晩にきて寢酒給ふ、ハヽヽヽアヽせち賢い懇ぶり」八「イヤ又お前も餘りな。聞も及ばぬ茶筅酒、ホヽヽヽ」白「ハヽヽヽ」と、嫁と舅の睦しさ。梅王松王兄弟の、女房が來る道草も、女子の手業笠に摘込み、蒲公英薺蕎枸杞の垣根を目印に、「サア爰じや。お春様マアお先へ」春「イヤお千代様から」と、相嫁同士が門での辭宜合、白大夫可笑しがり、白「一時に產れた三つ子の嫁共、先の跡の所かい。八重がとふから待つて居やる。どちこちなしにはいれ〳〵」春「ほんに八重様早かつた。ござんする道なれば、春が所へ誘ふても下さんしよかと、待た程が遅なはつて、心せきな道

古來稀—人世七十古來稀（杜詩の句）
御師—卑しき神官
白黑まんだらかい—四郎九郎なれば白黑斑と洒落たり
抱へ—抱帶にて今の扱帶
三十石—淀川を上下する三十石船

尋。七十と申たりや、古來稀な長生。其上珍らしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、躮共は御所の舍人、目出たい〱、產れ月產れ日、產れ出た刻限違へず、七十の賀を祝へ、其日から名も改とて、ノウ聞しやれ、伊勢の御師か何ぞの樣に、白大夫とお付なされた。そ則今日が誕生日、白黑まんだらかいは掃溜へ投て退け、今日から白大夫といふ程に、其ふ心得て下され」十「夫はめでたい。次手ながら問ましよ。三つ子產むと扶持下さる、其謂も聞かしやつたか」白「サイノ死んだ女房が產だ時は、邊隣の外聞、ひよんな事じやと、思ふたがもつけの幸、三つ子の爺親、一代は作取の田地三反、日本計じやないげな、唐迄もさふじやてゝ、男の子なりや御所の牛飼、女郎なれば東章とやら、是も御所でつかはるゝ。法式は忝い物。旦那殿は流罪なれど、おらは所も追立られず、下された田地は其儘。そちの嚊も若い程に、產すならおらにあやかりや」と、咄しの中道たどりくるは、櫻丸が女房八重、今日は舅の祝ひ日迚、風呂敷包片手に提、「嬉しや爰じや」と笠取ば、白「ホヽ、櫻丸が女房八重か、早かつた〱。外の嫁御も揃ふてくるか。マア〱上つて抱へも解きや」八「アイ〱まだ皆樣はお出ないか。遲かろと氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘、船の足の早いので、草臥もせず早ふ來たが仕合せでござんする」十「ヤコレ四

四郎九郎—松王兄弟三人の父
祝じやてゝ—祝じやというて
おらゝ—我等

を拾ふた有難い忝い、と三拜せよ」と、いはれて兩人くはつとせき上、櫻「エヽ、僻にも云分有共、親人の七十の賀、祝義濟迄ナウ梅王」梅「ヲヽ、其上では松の枝々切折て、敵の根を斷葉を枯さん」松「ヲヽ夫は此松王も親父の賀を祝ふた跡で、梅も櫻も落花微塵。足元の明い中、早く去く」兄弟「ヤア推參な。歸るを僻にならはふか」と、詰寄々々兄弟三人、互に殘す意趣遺恨、睨んで左右へ三人別れ行。春さきは、在々の鋤鍬迄も樂々と、遊びがちなる一農、一番村で年古き、人に知られし四郎九郎、律義一遍肩にて、菅丞相の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承はり、松梅櫻御愛樹に、つちかひ水の養ひも、根が農の鍬仕業、我身の老木厭ひなく、幹をこやしの百姓業、畑の世話より氣樂なり。堤端の十作が鍬打かたげ、門口から、「四郎九殿内にか」と這入を見付、四「こりや十作畑へか」十「イヤ今仕廻ふて戻つたりや、嚊がいふには、何やら目出たい祝ひじやてゝ、大な重箱に、眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の鹽にも喰足ねど、貰はぬよりも忝い。禮もいひたし、祝とは、マア何でござる」四「サイノ菅丞相樣のふつて涌た御難義、お下に住むおらゝが、身祝ひ所じやなけれど、爲にやならぬさかいで爲るは爲るが、世間へも遠慮が有て、彼岸團子程な餅七つ宛配つたは、此四郎九郎丁度七十、此春年頭のお禮に登つた時、おらが年をお

輗—車の轅の横木

牛扶持—牛には蠅がたかる故いふ

宙だめ—宙にさし上ぐ

先途と—原本せんと

あへす—流す

うづ虫—うぢ虫

な畜生め」と、輗を放せば逸散に、牛は離れてかけり行。車の内ゆるぐと見へしが、御簾も飾も踏折々々踏破り、顯れ出たる時平の大臣、金巾子の冠を著し、天子にかはらぬ其粧、赫々たる面色にて、「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら、轅にとまつて邪魔ひろがば、轍にかけて敷殺せ」兄弟「ヤアさいふ大臣を敷殺さん」と、二人が力に、車を宙だめ、引くりかへすを返されじと捻合松王、右へ押ば左へ押、上げつおろしつ二三度四五度、爰を先途と揉合しは、祭の神輿に異ならず。時平は上より金剛力、どうど踏だる其響き、車も心木もこな微塵、砕けし轅を銘々提、大臣を打んと振り上る。時「ヤア時平に向ひ推參なり」と、くはつと睨みし眼の光り、千世界の千日月、一度に照すが如くにて、追の梅王櫻丸、思はず跡へたぢ〳〵〳〵、五體すくんで働かず、無念々々と計なり。松「何と我君の御威勢見たか。此上に手向ひすると、御目通りで一討」と、刀の柄に手をかくれば、「ヤア松王待々」と、車より飛でおり、「金巾子の冠を著すれば、天子同然、太政大臣となつて、天下の政を執行時平が、眼前血をあへすは社參の穢、助けにくいやつなれ共、下郎に似合ぬ松王が働き、忠義に免じて助けてくれる。ハレ命冥加なうづ虫めら」と、邊りを睨んですゝみ行。ふり返つて松王丸、「よい兄弟を持つて兩人共に仕合者。命

いはれぬ―いはざる

弟迚用捨はせぬ」と、白張の袖まくり上、摑みひしがん其勢、梅王丸冷せ笑ひ、「ヤアいふな〳〵。氣も違はねば此車、見違へもせぬ時平の大臣。齋世親王菅丞相、讒言によつて御沈落」三人「其無念骨髓に徹し、出合所が百年目、と思ひ設けし今日只今」梅「櫻丸と此梅王、牛に手馴し牛追竹、位自慢で喰ひ肥た、時平殿の臗一つ三つ、五六百くらはさねば堪忍ならぬ」三人「いはれぬ主の肩持顏」二人「出しやばつて怪我ひろぐな」三人「ヤア法に過た案外者、アレぶちのめせ、引くゝれ」と、供の侍聲々に、前後左右に追取卷。兄弟は事共せず、取ては投退け摑んでは、ぶち付〳〵投付れば、傍に近付者もなし。松王焦つて、「ヤア命しらずのあばれ者、いづれもはお構ひ有な。御主人の目通、御奉公は此時節。兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけん。コリヤやい、松王が引かけた此車、とめらるゝなら留めて見よ」と、鼻づら取て引出す車。兄弟「ホヽウ櫻丸梅王丸、爰になくばいさしらず。一寸なりとやつて見よ」と、兩人轅に手をかけて、「エイ〳〵エイト」と押戻せば、牛も四足を立兼て、跡へ〳〵とすさり行。松王車の後方へ廻り、兩手をかけて力足、やらんやらじの諍は、世にも稀なる三つ子の舍人、互に劣らぬ主思ひ、命限り根限り、やつゝ戻しつ引合車、大地は藥研と掘穿、土ににへ込車の轍。「ヤア面倒

須彌大海—多きこと
いかつ聲—鋭き聲

を握り歯を喰しめ、先非を悔たる其有樣。梅王も理と、暫し詞もなかりしが、「ヲヽ道理々々。我迚も主君流罪に逢給ふ上は、都にとゞまる筈なけれど、御館没落以後、御臺樣のお行衞しれず。先此方を尋ふか、筑紫の配所へ行ふか、と取つ置つ心ははやれど、其方がいふごとく、年寄た親人の七十の賀の祝も此月、是も心にかゝる故思はず延引。互に思は須彌大海、是非もなき世の有樣」と、兄弟顔を見合せて、涙催す折からに、鐵棒引て先拂ひ、「先退て片寄」と、雑式がいかつ聲、梅王立寄、どなたぞと尋れば、雑「本院の左大臣時平公、吉田への御參籠、出しやばつて鐵棒くらふな」と、言捨て急ぎ行。梅「何と聞たか櫻丸、齋世の宮、菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分いはふじや有まいか」櫻「成程々々、よい所で出つくはした」と、兄弟道の左右に別れ、尻引褰げ身構へし、今や來ると待居たる。程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、さながら天子の御幸のごとく、隨身靑侍前後に列し、大路せばしと輾せたり。兩人木陰を飛んで出、「車やらぬ」と立ふさがる。隨「ヤア何者なれば狼藉する」と、顔を見れば松王が兄弟、梅王丸櫻丸。「ムヽ聞へた。主に離れ扶持に離れ、氣が違ふての狼藉か。但しは又此車、時平公と知つてとめたか、知らいでとめたか。返答次第兄

内寶―内室に同じ

罪なされてより、都の事共取賄ひ、御臺のお行衛尋んと、笠ふか〲と深緣、土手の並木にさしかゝれば、向ふからも深編笠、我に逢はぬ其出立、互に夫ぞと近く寄、櫻「梅王丸か」梅「コレハ〱櫻丸」櫻「ヤレそちに逢ひたかつた」梅「マア咄す事、聞く事有り」と兄弟木陰に笠傾け、梅「扨先問はふ。其方は日外加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋行しと、内寶八重の物語り、何とお二方に尋ね逢うたか」櫻「成程道にて追付奉り、菅丞相御流罪と聞より、對面なさしめ奉らんと、安居の岸迄御供せしに、御對面叶はず、輝國殿の計には、御歸洛願の妨と、お二方の御緣も切れ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は、法皇の御所へ供奉し奉り、事治りしと云ながら、納らぬは我身の上。冥加に叶ひお車を引、其有がたい事打忘れ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨と成、宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩請たる菅丞相樣流罪にならせ給ひしも、皆此櫻丸がなす業と、思へば胸も張裂如く、今日や切腹、あすや命を捨ふか、と思ひ詰は詰たれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べて見ると當春より、悅びいさみおはするに、我一人缺るならば、不忠の上に不幸の罪、せめて御祝義祝ふた上と、詮なき命けふ迄も、ながらへる面目なさ、推量有梅王」と、拳

泣たは云々—伏籠の中で泣たはつまり刈屋姫の爲となり

鳴はこそ云々—鷄が鳴くから別れにやならぬいつそ鳴かぬ里へ行きたい

籠の鳥云々—今囚れの身となつて昔の禁中のさまを忍ばる

鳥の子云々—二句共に便る所を失ふ喩

に」と伯母御前の、心を悟る御詞、骨身にこたへ忍び兼、思はずわつと聲立て、歎くに扨はと輝國も、心を感じ萎れ入。覺壽が心は伏籠の内、「泣たは結句あの子が爲、別れにちよつと只一目、伯母が願を叶へて」と、立寄る袖を引とゞめ、覺「お年故のそら耳か、今鳴たは慥に鷄、あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴ば親鳥も、鳴は生有ならひぞ」と、心の歎を隱し歌、「鳴ばこそ別れを急げ鷄の音の、聞へぬ里のあかつきもがな」と詠じ捨、「名殘はつきずお暇」と、立出給ふ御詠歌より、今此里に鷄無く、羽たゝきもせぬ世の中や、伏籠の内をもれ出る、姫の思ひは羽ぬけ鳥、前後左右をかこまれて、父は元より籠の鳥、雲井の昔忍ばるゝ、左迁の身の御歎き。夜は明ぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺迚今も猶、榮へまします御神の、生るが如き御姿、爰に殘れる物語、盡きぬ思ひにせきかぬる、涙の玉の木槵樹、珠數の數々くりかへし、歎の聲に只一目。見返り給ふ御顏ばせ、是ぞ此世の別れとは、知らで別るゝ別れなり。

第二

鳥の子の巣に放れ、魚陸に上るとは、浪人の身の喩種、菅丞相の舍人梅王丸、主君流

巨勢金岡―宇多帝時代の畫聖此話古今著聞集にあり
呉道子―唐玄宗時代の畫工、此話名畫錄に出でたり
外に荒木云々―餘所ならず此の荒木の天神となり
伏籠―着物を被せて中に香を燒くに用ふる籠
きかねども―嗅がねども
名は大方云々―香の名に刈屋姫をかけて伏籠の中に刈屋姫居るを知らせたり

前後をしらず。木に彫み筆に畫例は、本朝名高き絵師、巨勢の金岡が書たる馬は、夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰、唐土にも名畫の譽、呉道子が畫給の雲龍、雨を降せし例も有、又神の尊像木佛などの、人の命にかはらせ給ふ例は、かぞへ盡されず。菅丞相が三度迄造り直せし物なれば、木にも魂備はつて、我を助けし物やらん。讒者の僞に罪せられ、身は荒磯の島守と、朽果る後の世迄、筐と思し召されよ」と、仰は外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に、殘る威徳ぞ有がたき。輝國四方を打眺め、「思はざる義に隙を取、夜も明はなれ候へば、御立ぞふ」と申にぞ、又改る暇乞、「伯母が寸志の餞別せん。用意の物こなたへ」と、刈屋姫の上著の小袖、かけたる伏籠諸共に、御傍近く取直させ、覺「浪風あらき楫枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心をたきしめた、小袖を島迄召さるゝ樣に、輝國のお世話ながら頼ますする」と有ければ、輝「是は宜しき進ぜ物、菅の香防ぐとめ木の小袖、家來に持せ參らん」と、立寄伏籠に手をかくる。丞相しばしとゞめ給ひ、「御恩を厚く込給ふ、伏籠にかけし此小袖、中なる香はきかねども、名は大方伏屋か刈屋。伯母御前より道眞が、申請し女子の小袖、我身にはあはぬ筈。身幅も狹き罪人が、たゞ此儘に、お預け申す。我小袖と思し召、立田の前が追善の、佛事も倶

暫時の間―此下に寝たりの意あり

逆縁―親が子を弔ふ
種々因緣云々―樣々の因緣によりて佛道を求む
我見彼土恒沙菩薩種々因緣而求佛道（法華經）

故、睡む共なく暫時の間。物騒しく聞へし故、窺ひ見れば兵衞が工み、太郎が所爲、立田の前ははかなき最期、是非もなし。伯母御の心底さこそ〳〵。某是へ來らずば、かかる歎も有まじ」と、今更悔の御涙。覺「イヤ娘が命百人にも、かへがたき大事のお身、怪我過のなかつたを悦びこそすれ、何の泣こ。何の〳〵」といふ目に涙、「のふ輝國殿、惡事の元は其兵衞、此世の隙を早ふ〳〵。太郎も倶に」と立寄て、髻引上、「丞相の堅固の有樣、おのれ親子に見せたが本望。娘が恨も晴つらん」と、刀を抜けば息絶たり。「へエ憎いながらも不便な死ざま。有爲轉變の世のならひ、娘が最期も此刀、聟が最期も此刀、母が罪業消滅の、白髪も同じく此刀」と、取直す手に髻拂ひ、「初孫を見る迄と、貯ひ過した恥白髪、孫は得見いで憂目を見る、娘が菩提逆緣ながら、弔ふ此尼。種々因緣而求佛道、南無阿彌陀佛」と唱ふれば、菅丞相も唱名の、聲も涙に回向有。判官輝國大きに感じ、「伯母御前に先とられ、跡にさがつた儕が成敗、强欲非道の皺頭」と、水もたまらず打落す。覺壽は木像抱抱へ、菅丞相の右手の方、御座を竝べて直し置、「兵衞親子が工みも顯はれ、何も角も納りし、此木像の不思議な働き。かゝる例も有事かや」菅「いやとよ最前もいふ如く、匹夫々々が工みも顯はれ、我急難を遁れしも、暫時の睡眠

姫殿—舅の親と壻の親とをいふ（瑠璃天狗）
棟梁—かしら

擬勢云々—勢も抜けてぬけ〳〵に

とつかは—怱遽

ふ兵衛殿、相手は姑。アヽ私が手にかけた」兵「ヤア聟を手にかけ、落付自慢。何科有て身が躮を」聟「ヤアとぼけさしやんな姫殿、そいつが立田を殺した時、こなたも手傳ひ仕やろがの。娘の敵切たが何と。贋迎の棟梁殿、何も角も顯はれ時、さつぱりといふた〳〵」兵「エヽ殘念〳〵。躮めが出世を思ひ、時平公に一味して、菅丞相を殺さん爲、鷄に宵鳴させ、十が九つ仕課せた兵衛が方便、腐り婆めに嗅ぎ出され、殺された躮が敵、覺悟ひろげ」と飛びかゝるを、「ヤアさはさせじ」と判官輝國、木陰より顯はれ出、覺壽をかこふて突立たり。兵「マアどなたが出てもびくともせぬ。兵衛が工みの破れかぶれ、死物狂の働き見よ」と、切てかゝればかいくゞり、持つたる刀踏落し、利腕つかんで引くりかへし、足下に踏付け大音上、輝「ヤア輝國が家來共、贋者めらを片端から、くゝれ〳〵」といふ聲に、始の擬勢ぬけ〳〵に、一人も殘らず逃失せたり。覺壽はとつかは輿の戸の、明る間嘸やお氣詰と、内を見ればこは如何に、筐の木像又惘り、「是はいかに」と立歸り、こなたの障子押明れば、「伯母御騷がせ給ふな」と菅丞相の御詞、爰でも惘りかしこでも、惘りびくりに心の迷ひ、聟「どちらがどふじや輝國殿、目利なされて下され」と、問るゝ人も問人も、呆れ果たる計なり。丞相重て、「輝國の迎ひ遲參

で作つたはこつちにいらぬ。肉付の菅丞相、替る氣で持て來た木像、コリヤ此輿に」といふに覺壽も心付、「エヽ忝い。扨は魂を込られし木像で有たかい」猶も證據を見屆けん、と心の悦び押隱し、「此方の言分合點がいかぬ。其木像見せさつしやれ」警「ヲヲしやちこばつた荒木作、サア今見せふ」と明る戸の、輿に召たは木像ならぬ優美の姿。菅丞相莞爾と笑ふて立出給へば、警固はぎよつと覇顏、覺壽も違ひし心當、障子の内と今見る姿、心どきまぎ疑ひながら、覺「アヽよう戻して下さつた。慥に伯母が請取ました」警「ヤアどこへ〳〵、そりやならぬ。とはいふ物の、連て歸つて見たのは木像、すりかへられたと氣が付て、かへに戻つた、爰ではほんの菅丞相。おれが目の惡いのか、見所に寄てかはるはい」覺「イヤ替らふがかはるまいが、戻された菅丞相、いざ此方へ」と立寄覺壽、警「ヤア箆太い」と突飛し、丞相を又輿に乘、戸を引立て家來に向ひ、「コリヤわいらも樣子を見る通り、いかにしても怪しい事共、此分では歸られず、念の爲家搜しする」と、踏込先に宿禰太郎、半死半生のた打苦しみ、「南無三寶、太郎樣が切れてござる。旦那〳〵」と呼聲に、警固の中から親兵衛、前後もさらに辨へず、走寄て引起し、「コリヤ躮、此深手はどいつが所爲、相手を知らせ」と氣をせいたり。覺「の

安塔—安堵

けあなづり—侮る事けは發語　ぬつけり—知らぬ顔で人を欺く　次のぬつぺりも同じ

偽りは申さぬ。庭で鳴た鳥の聲、そこへござつた迎ひの衆、渡したに違ひはないが、請取ぬとおつしやるので、娘が最後聟めがあのざま、思ひ合せばさつきに來たは贋迎ひ」輝「コレ伯母御、内の騒動死人の有上、贋迎嘘では有まひ。讒者共の所爲で有ふ。一時違へば三里の後れ、ぼつ付て取返さん」と、せきにせいてかけ出す輝國、「ヤア〳〵判官先待れよ。菅丞相は是に有」と、一間より出給ふ。覺壽は恟り、「さつきに別れた菅丞相、そこにはどふして〳〵」と、不審の立も道理なり。判官輝國打笑ひ、「ぬけ〳〵とした伯母御の偽り、暫時の仰天。丞相是にましませば、輝國が安塔々々。見へ渡つた此御難義、譯も聞たし、力に成て進ぜたけれど、私ならぬ警固の役目、早刻限も移りぬれば、いざ御立」と勸むる所に、「先程見へた警固の役人、たつた今門前迄」覺「何じや警固が。ハテよい所へ戻られた。嘘つかぬ覺壽が證據。是へ通し、輝國殿へ見せませう」輝「イヤ身が名を衒つた贋役人、直に逢ては惡かるべし。忍んで様子を窺はん」と、丞相諸共一間の障子、引立内に隠れ居る。輿に先立警固が大聲、「コレ老母、輝國の名代とけあなづり、とでもない物身共に渡し、能ぬつけりさゝれたの」覺「是は迷惑、菅丞相を請取ながら、とでもないとは何おつしやる」警「アレまだぬつぺり。丞相は丞相でも、木

鼻の先云々―女の智恵の淺き諺

いはさぬ〳〵。我科を人に塗り、成敗をして見せだて。裾はせ折た下著の褄先切て有、其切はコリヤ立田が口に聲立させぬ無理殺し、齒をかみしめ放さぬ褄先、切た事を打忘れ、僣が科を僣が顯はす極重惡人。死骸の前で敵を取、母が娘へ手向の刀、肝先へこたへたか」と、大の男を仕とめる老母、遉に河内郡領の、武藝の筐殘されし、後室とこそしられけれ。稍時移れば「判官輝國、只今是へ御出」と、家來が申に老母は驚き、「丞相は先程お立、誰を迎ひに。心得ぬ事ながら、此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや。こいつはまちつと苦痛をさす」と、刀を其儘骸押退け出向へば、輝國も早入來り、「お迎ひの刻限、御用意よくば早お立」と、申詞の先折て、覺「イヤコレ輝國殿、何おつしやる。丞相の迎ひに足下の家來が先程見へ、請取て歸られたは、もふ一時も先の事」輝「ヤアこれこれ伯母御、身が家來に渡したとは旁以て心得ず。鷄の聲に刻限量り、只今鳴た旅宿の鷄、八つに參る迎ひの約束。家來といはふが、直に身共が參つた迚、刻限も來らず、鷄も鳴ぬ先、渡したといふては濟まい。船がかりの其間、伯母御に逢すは、此輝國が情の用捨。今日の今になつて、名殘も一倍、島へはやらぬ、渡したといへば夫で濟と、鼻の先な女子の了簡。菅丞相の怨にこそなれ、爲にはならぬ。僞りな申されそ」覺「イヤ

下されうで—やらうと云うて
まが〳〵し—忌忌し

ほざく—ぬかす

展轉—心を移し動かすをいふ色色に詞のかはる事(瑠璃天狗)

油斷太郎—油斷大敵にかく

拙者めにお疑はござない筈。お死骸を取上た、御褒美を下されうで一番にお呼出し、忝い義でごはりまするでごはります」太「ヤアまが〳〵しい褒美とは横著者め。立田が死骸池に有を、濟は如何して知りおつた。サヽ夫吐かせ」宅「イヤあの尻も天窓も見やう筈はごはりませぬ。池の深みへ芝から傳ふた血を證據に」太「ヤアぬかすな。挑燈の灯明で、それがそれと知れる物か。うぬが殺して沈めた池、外の者がどふしてしらふ。血の分では云譯立ぬ」宅「是はお旦那無理おつしやる。云譯立ふが立まいが、池が血へ流れ込だ、其外は存じませぬ」太「ヤア池が血へ流れたとは、血迷ふて何ほざく。きやつ詮義場で水くらはせ、白狀さする。それ引立」と、宿禰も續いて立所を、老母押とめ、「イヤ責めるに及ばぬ詞の展轉。嬉しや娘の敵がしれた」太「ハアせめなとは天晴お目高。科極つた罪人、女共へ手向る成敗、大袈裟に打放す。腕を左右へ引ばれ」と、刀引さげ立寄宿禰、覺「イヤ是成敗は常の科人。袈裟に切ては只一思、苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀は此母、跡は聟殿刀を借る」と、かひ〴〵しくも裙引上、向ふ目當は奴にあらず、油斷太郎が弓手の豁、突込刀に宅内は、命拾ふて迯て行。宿禰太郎は急所をさゝれ、もがき苦しむ息の下、「身共に何の科有て、老悖めが」といはせも果ず。覺「覺へないとは、

何じやいぬ｜何じや居らぬといふか

とつ付｜一番前身が前へ云々｜俺が前へ出やがれ

ナイ〳〵はいに同じ

宿禰太郎、娵共は立戻り、「奥にござるは刈屋姫只御一人、立田樣はござりませぬ」宿「何じやいぬ。内を放れてどこへいきやろ。今一度見てこい。座敷の隅々かくれ〳〵、尋々」と吟味の嚴しさ、挑燈手々に若黨中間、幾人有ても行屆かぬ、花壇築山手分して尋る奥の池のはた、芝に溜つた生血を見付、「コリヤ〳〵此血の流れ込、池を捜せ」と聲々に、水心得た奴共、飛込々々水底より、かづき上たる立田が死骸、驚き騷ぐ家内の騷動、太郎は鼻も動かさず、「殺したやつは内にあろ。詮議濟迄門打て、家來共動かすな」と、わめきちらせば母覺壽、姫もかしこへ轉び出、「コハ誰人の所爲ぞや。先からお顏を見なんだは、伯母樣のお傍に、と思ひ設けぬ此死骸、父上には生別れ、お前には死別れ、時もかはらず日もかはらず、悲しさつらさ一時に、かゝる例も有事か」と、老母に取付悔泣。覺「ヲヽ道理々々。そなたはおれが傍にと思ひ、おれはそなたが傍に居ると、思ひ違か娘が不運。母が因果でおじやるは」と、かつぱと伏て正體なし。太郎傍へ立寄て、「涙が死人の爲にはならぬ。女房共への追善には、殺したやつをひつぱり切。是にて詮議仕らん」と緣端に大胡座、「男女に限らず家來のやつばら、片端から詮義する。マアとつ付におる宅內め。身が前へ出あがらう」宅「ナイ〳〵ない」と、御前にかつつくばひ、「人はしらず、

函谷關—齊の孟嘗君鶏の鳴くまねをさせて越えし關

まだいの—まだ其様な事いふか

うたふ、「函谷關の關の戸も、開く心地に親子が悦、兵「是から急ぐは菅丞相、迎ひの拵へ氣がせく」と、兵衛は出て行切戸口、宿禰太郎は工の仕殘し、だめを閉して入にけり。早刻限ぞと御膳の拵へ、銚子土器熨斗昆布、姉共に島臺持せ、伯母御座敷へ出給ひ、百日千夜留たり共、別るゝ時はかはらぬ辛さ、此上頼むは御免の勅諚、歸洛を松の此島臺、行末祝ふ熨斗昆布、菅丞相も此間心づかひの御一禮、互に盡ぬ御名殘。宿禰太郎罷出、「御立の刻限迚、早門前迄迎ひの官人、判官代輝國は路次の用心辻固め、只今旅宿を立申され、輿舁の官人に譜代の家來を相添られ、只今是へ參上」と、怪しの張輿舁入て、時刻移るとせり立る。菅丞相は悠々と大廣間より出させ給ひ、輿に召迄見送る老母、人前作つてにこ〳〵と、泣ぬ別ぞ哀なる。宿禰太郎も御見立、門送りして立歸り、「ヤレ嬉しや仕廻が付た。覺壽樣もお氣休め、寐間へござつて」覺「イヤ寐たふても寐られぬわいの」太「ねられぬとは御氣色でも」覺「アレまだいの。客を立てゝ嬉しいと、一道な聟殿の悦。一つ屋敷に居ながらの、暇乞も得せいでの、苅屋姫が悲しかろ、人の逢のもげなりかろと、かけ構はぬ立田さへ、それで態と呼出さなんだが、機嫌よふ立しやつたを、悦びにはなぜこぬぞ。誰ぞいて見てこい」と、いふにきよろつく

おどぼね—聲

立田—龍田の紅葉にかく

まんが直る—運が向く

東天紅—鷄の啼聲

殺が本望か。女の義理を立過し、悔しや無念」と罵る聲、「おどぼね立てな」と宿禰が下著、褄先、口へ押込捻ふせ、肝先ぐつと一刳、兵衛は前後に心を配り、「躮息は絶たか」太「氣遣めすな只今とゞめ。扨此死骸は」兵「問ふに及ばぬ此大池。體を浮さぬ、手ごろの石」太「袂や帶にくゝり添」兵「深みへやれ」と二人して、投込死骸は紅の、血汐に染る池迄も、立田が名をや流すらん。太「コレ親人、是は是でも濟ぬは鷄。臺子の湯を取て參らふ」兵「太郎夫にはもふ及ばぬ。鳴す仕やうは身共に任せ」と、武士の嗜む懷中松明、手ばしかく燃し立、池の中へ明を見せ、挾箱の蓋仰向、鷄を上に乘、浮める池の水の面、刀の鐺指延す、腕一ぱいに押やれば、動かぬ水も夜嵐に、立や小波の容裔につれ、半端計流れ行。太「親人何をなさるゝ事。挾箱の蓋を船にして、子供のする業おとなげない。あれが何の役に立」兵「ハ、、、譯を知らずは言ふて聞ふ。惣別淵川へ沈んでしれぬ死骸は、鷄を船に乘て尋れば、其死骸の有所で時を作る、鷄の一徳思ひ出し、池へ沈めた立田が死骸、今一役に立て見る。うまい手番拍子まんが直つて來た。あれ〱太郎羽たゝきするは、死骸の上か。そりやこそ鳴たは東天紅、ソリヤ又うたふはとんてんかう」八つにもならぬ宵鳴の、聲さへかへる春の夜や、庭木の塒に羽たゝきして、一鷄鳴ば萬鷄

廢忘けでん—閉口狼狽
あたふた—あわてふためくの略（俚言集覽）
つれ／＼—つくづく

先に立田云々—先に立つ立田次も心得たり太郎

が工、南無三寶一大事、先へ廻つて、母様へおしらせ申て。イヤそふしては。イヤいはいでは又こちらが、いうてはあちらが、こちらが、と心迷ひし胸撫おろし、立「宿禰様、太郎様は何處に」と尋る聲に、はつと二人が廢忘けでん、鷄隱す挾箱、あたふたしめて左あらぬ風情、「ヤァ事々しう呼立るは、何ぞ急な用でも有か。さもない事なら不遠慮千萬。親人も此宿禰も、肝にこたへて怐りした」と、いふ顔つれ／＼打眺め、立「お前方の怐りより、わしに怐りさよしやんした。聞へぬ連合舅君、贋迎を拵へて、菅丞相様殺さふとは、あなたに何ぞ恨が有か。但しは時平に賴れし、欲には馴染の女房も捨、母様の義理も思はずか。お前は捨る心でも、わしや得捨ぬ太郎様。コレ申親父様、思ひとまつて下さりませ」と、舅を拜み夫を拜み、聲も得立ぬ貞女の思、泪操を顯はせり。兵衞は宿禰に眴せし、兵「イヤはや眞身の異見に逢て、親も躰も面目ない。向後心改める、嫁女此事聞流しに」立「アヽ勿體ない。聞流さいでよいものか、御得心と有からは、此世ばかりか未來迄、かはらぬ夫婦舅君。まだ如月の餘寒も烈し、巨燵に膚溫め、酒一つ上たい。サアお出」と、先に立田が、兵「それそこを」心得太郎が後袈裟、肩先四五寸切れながら、振返つて摑みつき、立「エヽ是人でなし、卑怯者、一人の手にも足らぬ者、欺

張輿―疊の表を張つた粗末な輿

白相國―白鷄をほめていふ

臺子―茶器を飾する棚

錠捻切て押ひらけば、外から相圖の挾箱、指出す中間徒士若黨、「コリャやい、云付た人數の裝束、丞相を迎ひの張輿、スハといふ時間に合せ」と、家來共先へ歸し、挾箱引だかへ、月かげ漏るゝ木の間〳〵、うそ〳〵窺ふ同腹中。太「親人お首尾は。件の物は參りしか」兵「躮氣遣仕るな。コリャ此中に計略の彼一物。大事の談合爰へ〳〵」と、大庭の池の邊りで呼く親子、宵から素振に氣を付て、宿禰太郎に目放しせず、立田の前が物かげより、聞共しらず宿禰太郎、「先程お聞なさるゝ通り、判官代輝國、迎に參るは八つの上刻。時平公よりお頼の、菅丞相殺す工面、贋物仕立迎ひと僞り、請取て途中でぐつとはいふ物の、一番鷄のうたはねば、姑の片意地、名殘惜んで渡されまい。八つ鷄の啼ぬ先に、宵啼する鷄是に有か」と、挾箱より取出し、「ホヽ皮膚のよい白相國。とかふする内もふ夜半。一調子はり上、存分にうたふてくれ。一聲聞ねば落付ぬ。親人なぜ鳴ませぬの」兵「イヤ其分では鳴ぬ筈。宵鳴は天然自然、極めては鳴ぬ物、夫を鳴すが祕密事。大竹の中へ熱湯を入、其上にとまらすれば、陽氣の廻るを時節と心得時をつくる。留竹も挾箱に入て來た。臺子の湯もたぎつてあろ。釜ぐちそつと取てこい」太「ホヽ取てくるは安い事。湯を仕かけても鳴ぬ時は」兵「ハテくど〳〵、鳴ぬ時は又分別」と、親子

勢魂も云々—精神も入らぬ

立ずと—立ずとも

付屆—贈物をする

ら取かゝり、初手に出來たは打破捨、二度目に作り立られしを、同じく是も打砕き、三度目に此木像作り上て、おつしやるには、前の二つは形ばかり、勢魂もなき木偶人、是は又丞相が魂殘す筐迚、下されし主の姿、物をいふまい共いはれず。帝への恐れ有ば、逢たふても逢れぬ親子。木とな思ひそ刈屋姫、物おつしやつた父上に、逢つて嬉しかろ。母も本望遂げました」と、親子三人悦びの、中へのさ〳〵立歸る、太郎が爺親土師の兵衛、「覺壽是におはするか。お客人のお立も明朝、出立の拵へ嘸取込。役に立ずとお見廻申、手傳でも仕らふ、と參りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付屆、聟が幸居合せ、用意も大方出來たと聞、先は大慶。兎角する内もふ暮相、一まづ歸つてお立の時分、又參るのも老足なれば、お邪魔ながら是に居ろ。心づかひ成下されな」覺「兵衛殿の義理々々しい。嫁子の所は内同然。斷に及ぶ事か。用が有ば遠慮なく、仰つたがよいわいの。刻限迄はコレ立田、和女の部屋にお寐間をとりや。後程お目にかゝらん」と、娘を連立入給へば、跡は親子が小聲になり、兵「コリヤ道々牒し合した通り、太郎ぬかるな」太「氣遣なさるな親人」と、奥と部屋とへ別れ行。座敷々々は燭臺照し、今宵限の御奔走、とり〳〵さはぐ計なり。土師の兵衛は一間より、そつと拔出前栽の、勝手覺へし切戸口、

の君の御不便有、娘に疵ばし付給ふな。父を床しと慕ひくる、刈屋姫に對面せん。是へ伴ひ給はれ」と、障子の内より丞相の、御聲高く聞ゆるにぞ、老母は杖をからりと投捨、わつと叫んで臥轉び、暫し答へもなかりしが、覺「産の親の打擲は、養ひ親へ立る義理、養親の慈悲心は、産の親へ立る義理。あまき詞も打擲も、子に迷ふたる親心、逢てやろとは姫よりも、母が悦び詞には、云盡されぬ刈屋姫、結構な親持た、持た〳〵」と目に持た、涙の限聲限。二人の娘は何事も、お慈悲〳〵と計にて、泣より外の事ぞなき。覺「コレなふ、爰から禮をいはふより來いと有ばいざ傍へ」と、隔の襖押明れば、菅丞相は見へ給はず、逗留の中作られし主の姿の木像計。「コハそもいかに」と刈屋姫、逢てやらふと宣ひしは、母樣の折檻をとゞめん爲、兎に角不孝な自故、お逢なされて下されぬか。今物をおつしやつたは、父上に違ひはないに、木で作りし父上樣が、但しは物を宣ひしか。又は何所ぞへ隱れてか」と、立て見居て見、うろ〳〵。覺「のふ騷がしや刈屋姫、丞相の逗留中、御馳走申は奥座敷、爰へは餘程間數も隔たり、先程聲のかよつた時、爰へはどふしてござつたと思ひながら、嬉しさに辨へなく、見れば此木像計。次手ながら刈屋姫、咄して聞さふ。逗留の中に主の像、畫いて成共作つてなりと、伯母が筐に下されと、願ふた日か

徒—翫弄

て、呵られふがどふならふが、跡は儘いな。サアこなたへ」と、姫の手を取後より、「不孝者どつちへ行」と、襖ぐはらりと母の覺壽、杖ふり上て飛かゝるを、立田ははつと抱きとめ、「お前に明ていはなんだ、隠したお腹が立ならば、此立田、打も擲きもなされませ。此中も宣はせぬか、人にやれば我子でないと、おつしやつての折檻は、母様とも覺へませぬ。丞相様の御祕藏姫、杖棒あてゝよいものか。サア自を〳〵」と、姫にかはつて身を厭はず。姫「イヤお前に科はない。不孝な自打給へ」と、立田を押やる杖の下。立「いやいやお前は打たされぬ」姫「イヤこな様は」と折檻の、杖を爭ふ姊妹思ひ、老母は猶も怒の顏色、「コリヤ立田、おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相殿は、おれが爲には甥の殿、子にやつた姫は甥孫。親も赦さぬ徒して、大事の〳〵甥の殿、流され給ふは誰が業。憎ふて〳〵、コレ此杖折ろ程擲ねば、丞相殿へ言譯立ぬ。六十に餘つて白髪天窓、連合に別れた時、剃を剃さぬ立田の前、尼に成ては便がない、力がないと留られて、法名計覺壽と呼れ、邪魔に思ふた此白髪、今日といふ今日役に立た。天窓を剃て衣を著れば、打擲の杖は持れぬはい。傍杖望む立田から」と、走り寄て丁〳〵〳〵、打るる姊妹打つ母も、倶に涙の荒折檻、「アヽこれ〳〵伯母御前、卒爾の折檻仕給ふな。齋世

伯母風吹し—伯母の威を假る
めかれぬ—聟めかれぬ、聟らしき待遇をうけられぬ
てんと云々—たまらぬ器量よし
轉業口—冗談口

に」太「ムヽ、何時の間にとはコレ立田、連添男の目をぬいて、こつそりと取込で、だいそれた身の上咄。刈屋姫はそなたが妹、藁の上から養子の子細、知ては居れど京と河内、武家と公家とは位も格別、菅丞相の伯母風吹し、聟めかしても、いつかなめかれぬ位負、名計聞て逢たは今。てんと御器量、齋世とやら様とやらが、現様にならしやつたも道理じや〳〵。姫の顔見ぬ先は、おれが楊貴妃じやと思ふたが、競べて見れば無楊貴妃、そなたの名もかへねばならぬ」太「ソリヤ又何とへ」太「ハテしれたお次の前」立「エヽずはずはと出放題。母様へも隠してゐる此譯、何共云しやんすな」太「それは氣遣仕給ふべからず。明日のお立しらされし、輝國の旅宿へ參り、此間御逗留、心づかひの一禮申、いよ〳〵刻限相違なく、一番鳥の鳴のが相圖、申合せに往て來いと覺壽の云ひ付。只今參る道で、よい思案が出たら、コレ戻つていはふお次の前」立「アレまだじやら〳〵轉業口」太「ヲツト閉口いてこふ」と、表の方へ出て行。後を見やりて刈屋姫、「彼方がお前のお連合。身の上の事に取紛れ、御挨拶も得申さぬ」立「アヽこれ挨拶はいつでも成事、こちの願ひは延されぬ。アヽどふがな」と案じ煩ひ、「ヲヽそれ〳〵、所詮母様にいふた迚、埒の明ぬはしれて有。連合も留守、母様もお傍にござらぬ折柄なれば、お前を私が連て往

刈屋姫―借るにかく
今の母云々―御臺所と菅秀才
かんまへて―構へて、必
口むしり―氣をひいて見たれば
時氣―暴風
八ツ―午前二時

づかひも同腹の、姉の情を刈屋姫、一間を出る日は涙、刈「齋世樣に別れてより、段々御世話に預かる上、父上樣にもお目にかゝり、せめて不孝の申譯。夫も叶はぬ物ならばと、我身の覺悟極めても、産の母樣、覺壽樣、今の母樣都の弟、親王樣の御事は、猶しも忘れぬ得忘れぬ。心を推量してたべ」と、歎けば共に涙ぐみ、立「悲しいは道理々々。去ながら、丞相樣に逢ぬ迚、短氣な事などかんまへて、思ひ出しても下さんすな。母樣のお願ひ立て、此屋敷に御逗留、どふぞ首尾を見繕ひ、母樣のお耳へ入、お指圖請てと、餘所ながら、口むしりかけて見たればな、こちの思ふた坪へはいかず、母樣の堅くろしさ、お果なされた郡領樣に、少しもかはらぬ行義作法。我産だ子でも人にやれば、先こそ親なれこちは他人、それを親ぢやの娘ぢやと、思ふは町人百姓の、譯をば知らぬ子にあまさと、幸先惡い訴訟もならず、外の事に言紛らし、其場は濟でも始終が濟まぬ。お宿申も今日で三日、時氣空も吹晴れて下り日和に直つたと、船場から注進故、今宵八つがお立迚、輝國殿の旅宿より、知らせに寄てお立の用意。今やなんどと思ひの外、手詰に成たが、どふして好からふ。膝共談合、コレ泣ずと、好い智恵出して下さんせ」と、とつおいつの胸算用、後にすつくと宿禰太郎、「よい分別者是に有」立「ヤア太郎樣いつの間

曹輩—姉妹
態と—原本と字なし
立田殿は云々—姫を立田の家へ連れずに覺壽の所へ預けよとなり
おふきの別—不詳
赤井の水—血の涙に通はす
水のあはれ—水の泡にかく

かし」と、叱る心も曹輩の遉よしみと知れける。輿の内には菅丞相態と詞をかけ給はず、事を量るは判官代、「ヤア立田殿、今更御異見益なき事。コリヤやい櫻丸、何をうつかり。一時も早く宮を法皇の御所へ御供申せ。立田殿は刈屋姫を、御同道は必無用ナ合點か。コレサ土師の里の親元へ、急度お預けなされよ」と、表を立て心は情、立田が持せし乘物へ、菅丞相を召かへさせ、跡と先とは警固でかため、御乗物はゆるやかに、常の旅行同然に、輝國が引添て、土師の里へと急ぎ行。姫「ナフ是父上」宮「丞相」と宮諸共に欠行給ふを、櫻丸が引とゞめ、立田が押へて引わくる、名殘盡せぬ妹脊の別、おふきの別と遉又、姉が情で引合す、いとゞ思は增井の濱、目は泣き腫らす赤井の水、いつか安居と逢坂の、水のあはれや泣別、さらばさらばと三重聲殘る。菅丞相の御別、對面有たき覺壽の願、流人預かる判官代輝國の用捨を以て、河内の屋敷へ入給へば、老の悦大方ならず、馳走の役人夜晝のわかちもしらぬ閙しさ。立田の前は船場にて、思はず逢たる刈屋姫、密に伴ひ歸れども、家來も多くはしらぬがち、隱し置たる小座敷の、襖をそつと押ひらき、立「嘸淋しからふ、精も盡ふ。顏見に來たいは山々なれど、去迚は何や角や、用事の多さ、母樣の傍放されねばえ參らぬ。今が能透、誰も來ぬ氣晴しにサァ爰へ」と、心

つらせ、おめず臆せず判官代に指向ひ、「私事は土師の里立田と申て、菅丞相の伯母の娘」と、聞に嬉しき刈屋姫、「コレ姉様ナフ立田様かいの」と、取付給ふを突退け刎退け、「母の覺壽、左遷の様子を聞及び、年寄ての悲しみ、御推量下さりませ」と、いふ内に又姫は取付、「其お歎が身に取て、猶悲しい」と歎くを振り切、「何卒此所の汐待を、土師の里にて御一宿あらば、心よく暇乞も致し度願、あすをもしらぬ老の身の、少しは歎きもとゞめたく、無體な御訴訟。夫宿禰太郎が参る筈なれ共、郡役も勤る身で、身勝手な事申も如何、女の慮外は常の事、と不調法も顧ずお願ひに参りし。お役人の御了簡、偏に頼み上ます」と、願へば輝國、「イヤ一家の願ひ叶はぬ事。大切な囚人、浪打際の一宿、心元なく、只今用心の爲、土師の里へ立越る。一宿は覺壽の元」と、聞て嬉しく、「エヽ夫はマア結構な御用心」と、悦びいさむ立田が袖、姫はひかへて、「コレ申迚もの事に、父上にお目にかゝるお願ひ」と、頼む袂を振り放し、立「恐れ多い丞相様へ、何の顔さげて逢ふと思召ぞ。元あなたに菅秀才といふお子のない先、母様がお前をば藁の上より遣はされ、私が爲に妹でも、今は菅原の姫君様。勿體ない宮様へ戀仕かけて、今此大事になつたでないか。戀は心の外でもな、是はあんまり外過て、姉のわし迄人々へ、顔が出されぬ恥

のめ〳〵―おめおめ

誰か取持たん、科人は外ならず、と悔めど今更詮方も、涙先立つばかりにて、とかふ詞もなかりしが、立直つて宮のお傍に恐れ入、「私元は土百姓の世忰。御扶持を下され、君の舍人を勤るも、皆菅丞相樣のおかげ。其恩有方を流罪させ、のめ〳〵見ては居られず。」と申てから、我々風情の及ばぬ所。輝國殿の仰のごとく、是より姫君と御縁をお切なされ、他人と成てお願ひ有ば、よもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相樣御歸洛有て後、表向の御縁結び。暫しの間のお別、御聞入下されよ」と、身にかゝつたるせつなさに、土に平伏し願ふにぞ、齋世の宮は猶涙、「一旦館を出し身の、面恥かし二度の恥」と、仰に輝國詞を返し、「御館へこそお歸りなく共、法皇の御所へお越あらば、猶以て御願の能便り。ひらに是非に」と勸むるにぞ、兎角涙にくれながら、姫君に指向ひ、齋「我戀草の思に迷ひ、丞相の歸洛を願はずば、天道怒り給ふべし。契は盡ずかはらね共、親の爲と諦めて、別れてたも刈屋姫」と、涙と倶に宣へば、姫「コハ勿體ない。お歎をかけるも元は自ゆへ。いつそ焦れて死んだらば、今の思は有まいに、お名殘惜や」と御顏を、見るも涙見らるゝも、涙片手に、齋「又逢ふ迄は隨分まめで」姫「おまへ樣にも御機嫌で」と、跡は涙のすがり泣、わつと絕入給ひける。かゝる折節いづれ共しらぬ、女中の乘物

たくば、いふて聞さふ。上より咎めの條々、具に云開き給へ共、齋世の宮と刈屋姫、密通の言譯御存なき迚あかり立ず、是非なく科に落給ふ」と、聞て悲しく刈屋姫、宮諸共にかけ出給ひ、齋「何我々故囚れとや。情なや淺ましや。不義は二人が誤りぞ、流しなり共切成共、罪に行ひ丞相を助け得させよ」姫「父上に逢はせてたべ助けてたべ」齋「對面させよ」と二方は泣さけび給ふにぞ、輝國迄に頭をさげ、「恐れながら御對面有ては、彌丞相の罪重く成道理。元此おこりは、去頃君天子に成かはり、御姿を唐僧に寫させしは、菅丞相の計ひ、唐土迄天子と思はせ、我娘を后に立、外戚とならん下工、と讒者の舌にかゝる内、宮姫を連御出奔、彌それと叡聞に達し、罪なくして罪に沈む、殊に姫君とは親子の中、是天子への恐れ有ば、よもや對面候まじ。兎角此上菅丞相の爲を思召さば、是より刈屋姫と御縁を切れ、二度禁庭へお歸り有て、謀叛なき趣きを仰わけられ、丞相歸洛を御願ひ候へかし」と、申上ぐれば齋世の宮、「我故罪に沈むも悲し、又我をのみ戀慕ひ、付添來たる契をば、見捨てゝ何と往なれうぞ」と喞ち給へば、姫は猶更、「父の爲には怨敵、我を罪して御流罪を、赦してたべ人々」と、伏沈み〳〵、消え入計に泣給へば、媒したる身に取て、辛さ苦しさ櫻丸、骨にも身にもしみ渡り、思へば〳〵我なくば、此戀

得ては云々―手の裏をかへす樣に天氣のかはる事珍らしからず

暴風―輝國の烈しき勢

世や、淺ましの身の果や」と、三世を悟る御身にも、世をつらしとの御述懷、哀れにも又いたはしゝ。日和見の船頭罷出、「今朝の天氣合、まだ二三日も御逗留と存ぜしに、思の外立直り、風治り候へば、御出船の御用意」といふより輝國、「ヤアだまりをろ。立直るまじき日和、立直つたとぬかすからは、よき日和の悪しく成も、儕が眼にかゝるまい」船「イエ〳〵左樣ぢや御座りませぬ。二八月は船頭の倦時、得ては手の裏かへします」輝「ソレまだ吐かす。左樣な手の裏かへす日和に、大切な流人の船出さるゝ物か」船「イエサ是は慥に」輝「ヤア狼狽者、向ふ山に雲がかゝつて、まだ四五日も御出船の日和はない。いらざる儕が奉公ぶり」と、呵り付ければ悔りし、「いかな巧者な船頭でも、此暴風には仕樣がない」と、つぶやき〳〵入にける。菅丞相は輝國が志、法皇の御心の有がたさに、河内の國へ赴んと、仰ゆたかに安々と、御輿とゞまる所迚、井の字を居と書かへて、安居の宮と末の世に、仰ぐも神の威德かや。かゝる折から櫻丸、宮姫君を御供申、先に進んで馳來り、「菅丞相御流罪と承はり、緣類の者暇乞の願、又一つには科の樣子も承はりたし。御役人へ直談」と、立寄を數多の官人、「ヤア直談とは慮外者」「暇乞とは無法者」「油斷ならず」と取卷を、夫と悟りて輝國、「ヤレ聊爾すな」と押しづめ、「科の樣子聞

法皇―宇多上皇
院の廳―上皇の政を聞召す所
籠輿―牢輿

面も風さはぐ、湊に御船とゞめしは、菅原の道眞公、終には讒者の舌強く、覺なき身に罪極り、筑紫宰府へ流罪の籠船、津の國安井に著しかば、警固の武士は、法皇の舊臣院の廳判官代輝國、逢坂増井に陣幕打せ、見るめ厳しき鑓長刀、數多の官人四方を圍ひ、出船を松の下かげに、日和見合せ居たりける。判官代輝國海の面を見渡し、幕絞らせて、丞相のおはします籠輿の下に手をつかへ、「沖の樣子を窺ふ所に、五三日も御出船の日和共相見へ申さず。此所に御逗留有ふより、河内の國土師の里へお越有て、伯母君覺壽公共、御暇乞候へかし」と、申上ぐれば菅丞相、面やつれたる御顏ばせ、物見より顯はし給ひ、「院の御所に使はるれば、上を學ぶ下々迄情有武士よ。斯く囚と成し身を、赦し送らば我よりも、おことが罪はいかにせん。思ひ寄ず」と宣へば、輝「コハ有がたき御仁心。左程尊き御方の、お爲に成て咎めにあはゞ、死後の面目子孫の譽。殊に私わざならず、法皇家ての仰には、土師の里に伯母有と聞及ぶ、若津の國にて汐待の隙あらば暇乞させよ、と密々の御仰、何憚る事もなし。御心置なく土師の里へ御出」と、すゝめ申せば菅丞相、都の方を打ながめさせ給ひ、「世に有がたき法皇の御心や。天子に父母なしといへ共、現在の御父君。其御力に及ばずして、斯く囚と成事は、如何成罪の報ひぞや。はかなの浮

しんどろ云々―しどろもどろにて甚だしく亂れるさま

認める間―櫻丸が飴を調へて渡す間

には、ことめづらかに引鶴の、聲に千歳もかはらじと、契りし今の閨の內、宵よりしめて寢る夜さは、月は出るやら曇るやら、歌枕とる手に寐て解帶の、いかゐお世話〳〵、枕とる手に寢てとく帶の、いかゐお世話〳〵。結ばぬ夢を覺せとや、春の風ぬるみし空の快く、行手の森の人音に、見付られじと手ばしかく、又忍ばする飴賣が、片手に太鼓片手に撥、聲おかしくも拍子どり、三下り拍子「こんりやこんりや〳〵〳〵。是は天子の始めなされた神武飴迚、神武天皇は飴がお好で、練らしやりましたる名物飴をば、こちも仕なろて嚊等や嫁等が、紅絹の襷をしんどろもんどろかけて、しんどろり、もんどろりと練りやりましたを、買をなら今ぢや〳〵」と賣聲の、子供あつめに子の親が、袖の土產を買に來て、認める間の取沙汰に、「惜や都の菅丞相、筑紫へ流され給ふ故、津の國安井に風待して、おはしまするはいたはし」と、所緣としらず告て行、跡の驚き悲しみは、箱を細目に顏計、齋「何道眞は左迁とや」姫「父上安井にましますとや。せめてお顏が拜みたい。何卒お船の出ぬ先に、逢はせてたも櫻丸。賴む〳〵」ともしどろにて、わつと計に泣給ふ、聲をも人にしらせじと、喇叭の笛に紛らして、夫より道を横切に、一荷の涙擔ひ行、先は何國ぞ津の國の、安井の岸の安からぬ、思ひ重ぬる三重哀れさよ。世につれて、海の

菅原—するにかく
土師を—恥にかく
[illegible]
石清水—いはんにかく
とめ木—着物にたきしめる匂
羽摺て云々—蝶の羽に着きたる粉を白粉に見立てたる也

いつぞやより、加茂の川浪立出し、齋世の宮と姫君に、漸々と廻り逢、一日二日は我家にも、忍ぶに何と菅原の、伯母君頼み参らせん、と行は車の供ならで、跡と先とに打荷ふ、飴の荷箱のかた〳〵に、御二方を入参らせ、浮世を土師の里へとて、飴のとり〳〵賣て行く、こゝろづかひぞせつなけれ。都をば夜を深草に、出ても道はあやなくて、御香の宮に明渡る、道を芹川淀も越え、町を過れば爰ぞよし、誰かは何と石清水、サア〳〵お出と荷をおろし、箱をひらけばうづ高き、姿あらはに刈屋姫、暫らく拜む日の影に、目なれぬ山や知らぬ里、姫「思ひなくてぞ見まほしよ。なふ宮様」と有ければ、齋「さればとよ、そなたの父菅丞相、如何なる事の誤にや、押籠の身と成けるも、我々出し跡なる故、正しくはしらね共、やがて赦され有ぬべし。兎にも角にも、我が身は今賣る飴の如くにて、傘に覆へる日蔭の身、いつかとけなん心ぞ」と、御仰に櫻丸、「左様にては候はず、御忍ましますも、飴をば上に君を下、取も直さずあめが下、しろしめす瑞相にて候」と、申上ぐるに宮は猶、「勿體なし」と身をすべる。野路の畔道そろ〳〵と、蕨が裾に手を入て、裾ひるがへす裏模樣、とめ木に草も芳しき、春の野面に群る蝶、袖にとまらば羽摺て、鏡絶せしけはひせん。爰に我名をかりやの里、今苗代の時を得て、民の手業も遠目

しる飴ー水飴の事又地黃煎とも書く江戸では下りといふ（物類稱呼）

主税目早く見付、「ヤア盜人の隙は有ど、守人の隙がない。宵覗めを手引する、內と外との相盜めら、菅秀才を盜んだ。此旨注進せん」と、かけ出す先に源藏が立ふさがつて、「どこへ〳〵、儕をやつてよい物か」と、討てかゝれば拔合せ、切結び切ほどき、追つ返しつ二人が勝負、屋根の上から見て居る梅王、棧敷正面眞向二つ、われて命は荒島主税、とゞめに及ばぬ切捨々々、危い場所を盜人夫婦、行末榮ゆる菅秀才、梅「若君賴む夫婦の衆」源「館の父君母君を、賴むぞ梅王」梅「心得た」と、互に賴み賴まるゝ、忠義々々を書傳ゆる、筆の傳授は寺子屋が、一藝一能名も高き、人の手本と成にけり。

其二

道行詞の甘替

「サア〳〵子供衆、買たり〳〵。飴の鳥ぢや飴の鳥。夫がいやならしる飴鑿切、泣子の口へは地黃煎玉。扨其外平野飴、桂の里には桂飴、西の宮には飴の金、其品々は往て買たり。拙者が自慢で賣弘める、櫻飴買つしやい。櫻飴々々」櫻々と己が名を、いへども包む頰かぶり、木綿頭巾に袖なしの、羽織は輕き身なれ共、忠義は重き牛飼の、櫻丸は

請ても—原本請けも
さいなまず—いためず

心の早咲—心の早るにかく
大事の云々—源藏の詞
心得高き—梅王の詞心得たにかく

合したな。うぬがする狼藉、菅相丞がさしたに成て、流罪の仕置が死罪になろ」と、いはせも果ず高笑。源「女房アレ聞。物覺のない抜作殿。傳授は請ても勘當赦ぬ、此源藏には主人がない。梅王は主持で、儕めをさいなまず、怺へて居るかはいさに、名代に投てこました。名代次手に皆撫切」と、女房諸共抜放し、めつたなぐりの太刀風に、小糠侍鋸屑公家、吹立られて散失けり。敵なければ立歸る、時節も幸黄昏時、門の扉をとん／＼とん、扣けば内より咎める聲、「聞覺へた梅王か」梅「さいふは武部源藏殿か」源「殿所かい若い者、油斷して居る所でない」梅「扉の釘付踏破り、御主人達の御供し、此場を退は安けれど、おことが今も聞く通り、仁義を守る道眞公」源「とあつて讒者が計ひにて、お家の斷絶覺束なし。御幼少の御若君、夫婦が預り奉らん、所存を立るはコレ梅王、若君をこつそりと、築地の上から」梅「できた／＼源藏殿。お上へいつては得心有まい。盗出すがお家の爲」源「そふぢや／＼能了簡。一刻一歩も早退たし。頼む／＼」といふ間もなく、築地の上から、梅王が心の早咲、勝色見せたる花の容顔、大事の若君怪我さしますまい。心得高き築地の屋根、延上つても屆かぬ背たけ、とやせん戸浪を抱上れば、軒に手屆く心もとどく。若君請取抱おろし、外と内とに忠臣二人、胸は開けどひらかぬ御門、荒島

腸がよれ返る—可笑されたへず

梅王丸—此下に「を」字を入れて見るべし

顯げた計—口計り

荒島—あらずにかく

打のめせ—打倒せ

たふて出しやばつたな」梅「ハレヤレしれて有下主呼はり。こなたの口から慮外とは腸がよれ返る。其割竹振上げて、誰を〳〵」希「チヽサ謀叛人の此わちよを」梅「ヤア謀叛とは誰を謀叛。御恩を忘れし人非人、菅丞相にはお構ひなくと、儕に罰は身が當る」と、又飛びかゝる梅王丸、御手を指延引寄給ひ、道「ヤア小ざかしい汝が擧動。勅諚に寄て斯成道眞。希世は扨置、其外へも手向ひするは上への恐。汝は勿論館の者共、我詞を用ひずば、七生迄の勘當ぞ」と、聞て希世がこはげも抜、「コリヤ梅王、して見ぬかい。顯げた計の腕なしめ」と、のさばる無念忍へる梅王、是非も情も荒島主税、官人原に追立られ、すご〳〵館に入給ふ、御有様こそ勞はしき。サア〳〵用意の大貫鎹、表と裏へ手分の人數、築地の穴門樋の口迄、暫時の間に打付しは、物忌はしく見えにけり。清貫見廻し、「ハレ能氣味。出口々々の締も能いか、築地の屋根も越ふも知れぬ。主税萬端油斷すな。暮に及べば希世殿、いざ歸らん」と打連れて、六七間も打過る。築地のかげに待居たる、武部源藏ぬつと出、希世を一當悶絶させ、周章淸貫相伴投、「スハ狼藉者打のめせ。殺せ縛れ」とびしめいたり。武部は戸浪に指添渡し、寄らは切んづ勢ひなり。希世は漸人心地、立上つて、「ヤアうぬは源藏め。一度ならず二度ならず、ひどいめに

あげ一斷り

后に立んとする菅丞相が兼ての工み。其罪遠島に相極り、流罪の場所は追ての沙汰、夫迄は押込置、出口々々に大貫鎹、一門の警固は身が家來、荒島主税を付置」と、呼はる聲を聞くつらさ、御臺は警固の人目も恥ず、走り寄つて「道眞公、コハそもいか成御事ぞや。齋の間の事、姫が身の上御存ない、云譯は何故なされぬ。科もない身を左遷との、仰は聞へぬ恨めしや」と歎き給へば、道「ハア愚々。道眞應命蒙むれ共、君を恨奉らず。漸齢傾きし臣が拙き筆跡迄、惜ませ給ふ傳授の勅諚。きのふ迄は叡慮に叶ひ、けふは逆鱗蒙る共、皆天命のなす所。先程冠の落たるは、殿上の札を削られ、無位無官の身と成しらせ、今さら悔むは愚々。是より配所へ行にも有ず、見苦しく、歎かれな」と御臺を遠ざけ給ひける。希世は道より取てかへし、希「清貫殿御苦勞千萬、此和郎の様子承はり、弟子の方から師匠をあげ、向後賴むは時平公。菅丞相と一つでない執成宜しく賴入」道「氣づかひ有れな、呑込んだ。作法の通り菅丞相、内へ追込み門を打て」「畏つた」と荒島主税、割竹振上立かゝる。「コレ待つた。其役目希世が替つて仕る」と割竹請取、「コレ謀叛人殿、今迄とは當りが違ふ。時平公へ宗旨を替た手見せの働。割竹一つ」と振上ぐれば血氣の梅王ずつと寄、希世を四五間突飛す。希「ヤア下主の慮外者、自滅仕

大げなし―負ふにかく
背負―机を負ふにかく
長汐―流すにかく
見るめ―海松にかく
使の廳―検非違使廳にて今の警視廳にあたる

エエヽおのれエヽエ儕をな、只助るも殘念な。寺子屋が折檻の机は、こいつが責道具。女房爰へ」と取より早く、脊中に机大げなし、兩手を引ぱる机の足、裝束の紐引しごき、雁字絡に括り付、「盗ひろいだ師匠の躾、竹篦のかはり扇の親骨、頬に見せしめひりつかせん」と、打立々々突飛せば、痛さも無念も命のかはり、恥を脊負うて歸りける。源藏夫婦手をつかへ、「禁裏の樣子承はり、歸りたく存ずれ共、長居は恐御臺樣、此上ながら夫婦が事、お捨なされて下さりますな」御臺「ヲヽ、夫は心得たが、今行といふを聞捨に、せめて一夜といはれもせぬ。命が物種緣も盡ずば又逢はふ。モウ行きやるか」「アイアイ參りませねば成ませぬでござります」と、戸浪が涙長汐に、かはく間もなき袖の海、見るめいぢらし夫婦が姿、泣々御門を三重出て行源藏と引違へ歸る梅王、靑息吐息門の臺木に足躓き、かつぱと轉て起る間も、「待れぬ〳〵待衆、御大事が發つてきた。科の樣子は何かは知らず、使の廳の官人共、丞相樣を取廻し、鐵棒破竹アレ〳〵爰へ。御臺樣へ此樣子を」と、館の騷動門外には、鐵棒打ふり警固の役人、輿にも召させ奉らず、菅丞相の前後をかこみ、先に進むは時平が方人三善の淸貫、門外に立はだかり、「齋世親王刈屋姫、加茂堤より行衛知れず。子細御詮議なされし所、親王を位に卽、娘を

御勘當―是より源藏にかゝる詞
あんじりと―とつくりと
まんがち―手前勝手

其驗でがな。イヤ〳〵左にてはよも有じ、参内の後知る事。源藏早く歸されよ」と、冠正しく参内有。希世はこは〳〵御見送。御勘當の身の悲しさは、行に行れず延上り、見やり見送る御後影、御簾にさへられ衝立の、邪魔になるのも天罰、と五體を投伏し男泣。戸浪が悔みは夫の百倍、尸「こなたは御前のお詞がゝり、直にお顏を見さしやつた。私は漸御臺樣の後に隱れてあんじりと、お顏も拜まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣。同じ科でもこなたは仕合。女子は罪が深いといふ、如何した謂でなぜ深い。鈍な女子に生れし」と、御臺のお傍も憚かりなく、果しなみだぞいぢらしゝ。希世のさく〳〵立戻り、「ヤア源藏を歸されぬは、御臺所御油斷〳〵。一刻も早くほいまくれ、と重ねて仰付けられた。そこを少身が了簡、其かはりには傳授の卷物、讀で見る望はない、筆の冥加にあやかる爲、ちよと戴かしてくれんか」と、望むに是非なく懐より、取出すを引たくり、逸足出して迯行を、「どつこいやらぬ」と源藏が、ほつ蒐けほつ詰襟髮摑み、引ずり戻してかづき投、大の男に一泡吹かせ、傳授の一卷取返し、「是をおのれが引かけふで直垂の羽繕。晝鳶の兀頂め、ぴく共せば打殺す」と、刀四五寸拔かくる。御臺「コリヤ源藏聊爾すな。戸浪過ちさするな」と、お詞かゝれば、源「エ

束帶—文官の大禮服

人參られし」と申上ぐれば御不審顏、道「七日の齋過ぎざる中、御用とは何事。隨身仕丁の用意せよ」と、裝束の間に入給ふ。參内と聞し召、立出給ふ御臺所、襠の下に戸浪を押隱し、人目包も餘所ながら、お顏をせめて拜ません、と心づかひは希世が手前、「傳授の樣子承れば、お前には殘り多からふ、仕合は源藏。さりながら御勘當は赦りぬげな。館の出入も今日限、かなたこなたを思ひやり、御參内を見送りがてら、夫で〳〵」と襠の下をしらする御目づかひ、夫婦は重々お情の、身にしみ渡る忝涙。束帶氣高き菅丞相、一間の内より立出で給ひ、神道祕文の傳授の一卷、源藏に給はりける。當座の面目、御流儀末世に傳へる、寺子屋の敬ひ申奉る、因緣斯とぞ知られける。道「サア傳授濟むからは對面是迄。罷歸れ立てよ〳〵」と頻の御諚、「コリヤ源藏、吼頰かいても最叶はぬ。腰が拔て得立たずば、引ずり出さん」と立寄る希世、御臺「なうあらけなく仕給ふな。三世の緣の切目じや物、立ぬも理り歎くも道理。涙とゞめて御暇乞、見奉れ」と、襠の、裙より覗かす戸浪が顏、それぞと推し給へ共、しらす顏にて立出で給ふ。何としてかは召されたる、御冠のおのづから落るを御手に請とめ給ひ、道「物にも障らず脫たるは、ハアはつ」と計に御氣がかり、「イヤ夫は源藏が願ひ叶はず落涙致す、落は落ると讀なれば、

鑽沙草云々―早春にて草もまだ伸びず霞も多くたゝず（和漢朗詠集）
きのふこそ云々―年が暮たは昨日と思ふに早、春日山に霞が立つた（同書）
規模―手柄（俚言集覧）
傳授、勘當云々―傳授を希世に勘を當源藏かへ〲て許されよ

上給ひ、「『鑽沙草只三分計、跨樹霞纔半段餘。』是は我作れる詩、『きのふこそ年は暮しか春霞春日の山に早立ちにけり』是は又人丸の詠歌、いづれも早春の心を詠叶へり。假名といひ眞字といひ、是に勝れし筆や有ん。出かしたり〱。惣じて筆の傳授といつぱ、永字八法筆格の十六點、名をそれ〱にいふに及ばず、人々のしる所。菅原の一流は心を傳る神道口傳。七日も満つる今日只今、神慮にも叶ひし源藏」と、御悦は限なし。源「ハア有がたや忝い。筆法御傳授有からは、御勘當も赦され、前にかはらぬ御主人様」菅「ヤア主人とは誰を主人。傳授は傳授勘當は勘當、格別の沙汰なれば、不屆成汝なれ共、能書なれば捨置れず、私の意趣は意趣、筆は筆の道を立る、道眞が心の潔白、叡聞に達しても依估とは思し召れまい。希世にも疑はれな。勘當は前のごとく、主でなし家來でなし。此以後對面叶はじ」と、尖き御聲源藏が、肝に燒鐵さゝるゝ心地、源「道理を分ての御意なれ共、傳授は外へ遊ばされ、勘當御免」と泣きわぶる。希「こりや源藏が歎くは道理。勘當を赦されねば、傳授しても規模がない。彼が願も希世が望も立やうの了簡は、傳授と勘當かへ〲にして遣はされたら、よささふな物のやうに存じまする」といふ折から、當番の諸大夫罷出、「俄の御用これ有間、只今參内遊ばされよ」と瀧口の官

天命を知る—五十歳（論語）

らぬといふ其仔細、引つまんで咄して聞ふ。此度帝の仰には、存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれ共、マア年寄から死ぬるが順道、菅丞相は當年五十二、天命を知るといふ齢も過、寄年を惜ませ給ひ、唐迄譽る菅原の一流、是迄傳授の弟子もなし、一代限で絶すは殘念、手を選んで傳授せいと勅諚で、七日の齋、殊の外お取込。事濟んでから願ふてやろ」源「ハア樣子段々承れば、御大慶な勅諚」希「サア其勅諚も大慶も、知れた事云はずとも、早々歸れ」とせり立る。道「イヤ立な源藏。云付た手本只今書け」と、仰は武部が身の大慶。希世は偏執むしやくしや腹、立寄源藏睨付、希「わりや兄弟子に遠慮もせず、書ふと思ふて出しやばるか」源「ホヽお笑ひ有ても恥しからず、御免なれ」と机にかゝり、手本を取て押戴き、心臆せず摺墨の、色も匂も薫しき、筆の冥加ぞ有がたき。希世傍へすり寄つて、「わが樣な横著者は、手本の上を透寫し。其手目は身がさせぬ。恥と天窓はかき次第、身のざまの恥頬、わりや何共思はぬか。溫袍の上に汚袴、机に直つて居るざまは、貧乏寺の講中奉加場の帳付に其儘。無縁法界を書なよ」と、惡口たら〳〵云ちらし、怪我のふりにて机を動し、肘に障つて邪魔するも、構はず咎めず手本の詩歌、心よく書課せ、机も倶に御前に直し、蹈て頭をさげ居たる。丞相清書を取

志根惡―根性惡い

箆太い―大胆

場打―場所の立派なる爲に臆すること

大鷹檀紙―みちのくに紙にて厚く柔かくしぼあり

業藝、鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り、今日迄夫婦が命毛、筆先に助られ、清書の直し字、毎日書け共上らぬ手跡、御尋に預かる程、身の不器用と御勘當、悔むに詮方なき仕合せ」と、歎くを倩聞し召、道「子供に指南致すとは、賤しからざる世の營、筆の冥加藝の德。中所に僞りなくば手跡もかはらじ、改むるに及ばね共、爰にて書せ道眞が所存は跡にて云聞さん。認め置たる眞字と假字、詩歌を手本に寫し見よ」と、白木の机御手づから差寄給へば、ハアはつと先へは出ず跡ずさり、志根惡の左中辨物陰よりずつと出、「コリヤ源藏、様子殘らずあれから立聞。師匠の指圖は兎も角も、辭退申て出る筈が、兩手をついて日をましくし、蟇の所作がらするは、書ても見様と思ふ氣か。それは箆太い叶はぬ事」源「ハアお馴染と有て忝い希世様のお詞に、一ッも進はぬ役に立ず。併身の分際を顧ぬ、源藏めでもござりませぬ。只今是にて書と有、お手本書て能やら惡いやら、跡先の様子も存ぜず、四年以來在所住居、くさ墨に三文筆、書出しや反古の裏に書ならば場打もせまい。其結構な机に墨筆、大鷹檀紙の位に負け、一字一點いかな〳〵」希「ホホ好い了簡。いかぬと知て何故立ぬ」源「サア其處でござります。御勘當の私、御意にあまへた身の願ひ、お執なし頼上まする」希「ムウ夫で聞へた。詫言はしてやろが、今はな

おはもじ―お恥かし

榮―延えにて伸す事

料借、アヽおはもじ。お上に御存ない事迄、身の恥顯はす錆刀、今日迄人手に渡さぬ武士の冥加」源「アイ女房が申上げます通、此態に成さがれば、一入昔の不義放埒、思ひ廻せば主人の罰、悔むに詮方なき仕合せ」と、夫婦諸共おろ〳〵涙、折から局は奥より立出、「お學問所へ召ますは源藏殿只一人、御用濟でお手の鳴迄、御臺様にもお出はならぬとの、仰られでござります」御臺「成程々々心得た。源藏は局と同道、戸浪はこちへ」と入給ふ。只今御前へ召出さるゝ、源藏が身の嬉しさ怖さ。局は斯と申上、立たる障子明渡せば、恭しく注連引榮、常にかはりし白木の机、欣然として座し給ふ、凡人ならざる御有様、畏れ敬ふ源藏が、五體の汗は布子を通し、肩衣絞る計なり。やゝ有て仰には、道「去がたき子細有て、汝が行衛を尋しに、住所さだかならず、漸きのふ在家を求め、今の對面滿足せり。其方儀は幼少より我膝元に奉公し、天性好いたる筆の道、好に上り習ふに覺へ、古き弟子共追拔、適手書になるべしと、思ひの外に主從の緣迄切て其風體、筆取る事も忘れつらん」と、仰に猶も恐れ入、源「御返答申は憚りながら、前髮立の時分より、お傍近ふ召仕はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の間々、書き覺へたと申も慮外、蚯蚓ののたくつた様に書手でも、藝は身を助けるとやら浪人の

素浪人—するにかく
尾羽打枯れし—やつれはてし
優曇花—三千年に一度花咲くといふ其開くと襖の開くにかく

御所を追出され、さむい暮しを素浪人、尾羽打枯れし武部夫婦、今日のお召は心の優曇華、開く襖の内外迄、勝手は今に忘れねど、身の誤りに氣おくれし、膝もわなく／＼窺足、御臺の御座を見るよりも、ハッと畏れて飛退り、蹲りたる計なり。御臺「ヤア珍らしい源藏夫婦。連合の氣に背き、此御所を出やつたを、かぞへればもふ四年。日頃人を捨給はず、慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切てはいかな事、見返らぬ夫のお心。叶はぬ事と思ひの外、源藏に參れと有御用の樣子、何かは知らぬが氣遣な事では有まい。定めて吉左右。ヤア自がいふ事計、嘸待兼ねてござるで有ろ。源藏夫婦が參りしと、誰ぞ奥へおしらせ申しや。サア二人共に顔も上、近ふ寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ、近ふ／＼。年月の浪人住居、渡世が苦に成たか、昔の面影どこへやら、源藏が著て居やるは、荒々敷下々の著物。戸浪はそれに引かへて、小袖の縫箔、遖に女子の嗜か。二人の中に子も出來たか」と、問れて戸浪は有がた涙、「冥加至極もないお詞、主人のお目をくらませし、罰が當つて苦勞の世渡、夫婦が著替も一つ賣り、二つも三つも朝夕の、煙の代に成果し、漸々殘せし此小袖は、御臺樣の下されし、御恩を忘れぬ賣殘、髪の餝の鼈甲も、いつかは檣の引櫛と、かはり果たる共挿。連合は布子の上、糊立ぬ麻上下も、けふ一ヶ日の損

一落―一件

氣が盡ふ―退屈せう

は猶もつて大切なお身の上。互に忍ぶ戀路の車、廻り逢瀬もそこ〳〵に、事顯はれしを恥しく思召され、御所へお歸りなされぬ物と有て、常の御方ならねば、宮樣附々の人人が、夫なりけりにして置くまい。又此方の娘の事は、希世樣も知ての通り、本の母樣は河内國、土師村の覺壽樣迚、連合の爲には伯母御樣。菅秀才を設ぬ先乞請て養子娘。此御所へは戻られず、伯母樣方へと心付、自が內證で尋に人を遣はした。此一落は今日が日迄、態父御へ知しませぬ。夫も何故勅諚にて、筆法傳授七日の中、參內止て取籠り、世の取沙汰は何にも知ず、傳授も過て聞給はゞ、嘸や悔り仕給はん」と彼方此方を思ひやる、心を推量してたべ」と、案じ給ふぞ理なる。內玄關の奏者番、一間此方に畏り、「先年お館に相勤し武部源藏定胤、尋參れとの仰に寄、此間所々方々吟味致して、漸只今夫婦一所に參りたり。是へ通し申さんや」と窺へば、御臺所、「ヲヲ待兼ねし源藏夫婦。早々此處へ參れといへ。コレ菅秀才、源藏に逢フ間、爰に居ては氣が盡けふ。勝野を奧へ連れて往て、機嫌能ふ遊ばつしやれ。希世樣にも暫しが間」希「ヲヲ此處に居て邪魔にならば、所替仕らん」と、續いて奧にぞ入りにける。人知れず思ひ初しが主親の、不興を請る種と成、夫婦が二世の契より、三世の御恩辨へぬ、不義より

減らず口＝強みをつくつて見せる
しだら＝ていたらく

らしい。無體な事なさるゝと聲立てるが合點か」希「ヲヽ合點じや。聲立てるが怖い迚しかけた戀人叶へおれ」と、ほうど抱へて連て行。勝「アレ〳〵申」希「申とは誰に申」勝「アア御臺樣や若君樣、申し〳〵」といふ聲の、もれ聞へてや、菅丞相の御臺所、若君の御手を引立出給へば、希世は仰天、「是は〳〵悪い所へよふ御出」と、手持不沙汰も減らず口、希「勝野に癪の療治を頼まれ、取りにかゝつて斯の仕合せ。御臺にも御存のごとく、萬能に達せし某、世に希な器用者迚、希世と付たは親共が自慢の名。其例は此若君、年よりは御發明、菅秀才と呼び給ふも、秀はひいづる、才は才智の才を取て、菅家の公達菅秀才。あら〳〵謂斯のごとし。我等は餘り器用過、取損ふた按摩のしだら、御臺所の思召が」御臺「アヽ其云譯に及びませぬ。日頃の行義知て居る。そんな疑何のいな」と、物に障らぬ御挨拶。希「アヽ夫れ聞いて落付いた。今のしだらの次手ながら、お尋申事が有。御息女の苅屋姫齋世の君と、にやほやした世間の取沙汰。けふで七日相詰る、御所には何の沙汰もない。虚說かと存れば、苅屋姫の御殿は明家。御詮議もなされぬは親御達も合點の上、欠落でがなござるか」と、問はるゝ辛さは御臺所、暫し返事もなかりしが、御臺「隱しても隱されぬ、さがなき人の口の端に、かゝるも是非なき苅屋姫、齋世の君

しよらしん—ひつそりとして居る貌
鼻明す—へこます
傳授所へ云々—傳授を受ける程度に達して居らぬ
ハッポーホイツリヤ
氣に入らずと—氣に入らずとも

次局に不足顔、希「コレ手の皮がひりつく程たゝいてもしよらしん。ムウ合點、顏出しせぬは毎日來るを面倒がり、言合せて鼻明かすのか。けふで七日此手習、おれが爲計じやない、御子息の菅秀才は年弱七つ、傳授所へ行かぬによつて、此希世が傳授して、菅秀才の成人以後、身共から又傳授。さすれば主の奉公も同じ事、ハツポというて廻はる筈。總じてこなたがなまぬるこい」局「コレ勝野よふ心得や。そなた衆の不調法、こける所は局が迷惑、何おつしやろとあい〳〵とナ。申 希世樣、成程そふじや、よい了簡」希「毎日毎日氣を詰るも、菅原の家の爲、今日も又此淸書、お目にかけて」と指出す。局「イヤけふは御赦され」希「赦せとはなぜ〳〵」局「ハアテ幾度お目にかけましても、丞相樣の氣に入ぬは、お手の業ではござるまい。取次の仕樣の惡さ。手がはりにけふは勝野」希「イヤ是左樣はならぬ。筆法傳授も神道の祕密事。學問所の注連が目に見えぬか。油濃い女子はやられぬ。昨日迄は氣に入らずと、此淸書は格別、筆先に肉を持せ、天晴骨髓を書得たれば、傳授はずる〳〵伸切つて、往てたもれ」と賴むに是非なく立つて行。希「コレ勝野、局のいはれた、あい〳〵を合點か」勝「アイ心得てをりまする」希「エヽ忝い。幸傍に人もなし、福德の三年め、屛風のかげでついちよこ〳〵」と取手を振切、勝「エヽいや

白張―白布の狩衣
させい云々―牛曳くかけ聲
廻る―車、月日兩方にかく
不成就日―何も成就せぬ日
くゑ日―占方の惡き日
鬼宿車―廿八宿中の鬼星、嫁娶に忌む日
天赦天一云々―天赦日は大吉日天一天上も間日も吉日
八專云々―壬子の日より十二日間を云ふ其中四日を間日といふ
上根―たちのよい事

なされた」「ヤアそりやマア本か」と女房は、惝りぐわつたり水桶落し、女「シテまあ此方は、こりやどこへ」櫻「ヤア何處所か、元姫君は菅家の御養子。實母は河内土師の里、菅丞相の御伯母君。先此方へ志し跡を慕ひ奉る。汝はあの御車を、宮の御所へ引て行。捨置ては後日の咎」女「成程そふじや。こな樣の姿に扮して引て行。ドレ白張」と請取て、「跡案じず共行しやんせ」櫻「ヲヽ、合點」と白砂蹴立、飛が如くに欠り行。八重はやがて、夫の姿白張肩に引かけて、車の牛を引直し、させいほうせい精一ぱい、引共遅き牛の足、女「エどんくさい」と後から、おせば車もくる／＼と、廻る月日は不成就日か、お二人樣へ凶會日か、夫の爲には十方暮、鬼宿車を押かけて、天赦天一天上の、お首尾もよかれ神よし、と祈る心は八專の、黒日に間日の斑牛、追立てこそ三重立歸る。上根と稽古と好と三つの中、好きこそ物の上手とは、藝能修行數への金言、公務の暇明暮に、好せ給へる道眞公、堂上堂下はいふに及ばず、武家町人に至る迄、風儀をしたふ御門人、數も限もなき中に、左中辨平の希世、手習稽古ふる兄弟子、今度筆法御傳授は、指詰我等に極りし、と勝手覺へし御殿の眞中、朝の夜から机を直し、烟草よ茶よと呼立る、聲も屆かぬ奥勤。女中頭が聞咎め、局「コレお次に誰も居やらぬか。希世樣の御用が有」と、呼

神いさめ―神事

金輪際云々―決して

味をやる―しやらくさい事をする

さめ、其場所へ來て不淨が有と、親王でも東宮でも、急度捕へて罪に行ふ。有様にぬかさずば、引とらへて拷問する。それ繩かけよ」と下知の下、おつ取巻くを身がまへし、櫻「知らぬといふたら金輪際、奈落の底から天迄知らぬ。聊爾召るとかたつぱし、下手のお鞠の蹴て〳〵蹴踏、足の鹽梅見せふか」と、ぐつと踏出す兩足は、顔に似合ぬ古木なり。淸「シヤ下郎めが味をやる。最前から見る所が、車の内に人こそ有。御簾引斷り檢めよ」と、いふに隨ひ立寄る所を、首筋摑んで投退々々、櫻「車は舍人が預り物。命が有ば寄て見よ」と、蒐るを蹴飛し刎飛し、十手もぎ取かたつぱし、薙立て〳〵追て行、其間に宮と姫君は、人に見られて叶はじ、と車の内より飛びおり〳〵、さすが若氣の一筋に、遁れて旅のかり衣、何國共なく落給ふ。透間を見て淸貫が、取つてかへして車の内、引明見れば内は明殼、南無三寶、見違へた。舍人めが戻つたら、大抵では有まい、と下道さして迯る跡、間もなく欠來る櫻丸、御二方の見へぬに恟り、車を見れば宮の書置、「何何、見付られて辱めを請ふより、立退く」と有文章に、ハツト驚き胸は板、「イデ追付いて御供」と、欠行向ふへ女房八重、「サア是お手洗汲で來た」と、見せるを刎退、櫻「ナニ手洗所か、淸貫めが車の内、詮議せんと來りし故、見付られじと二方は、何國共無落

手耦―都合して

口薬―他言せぬ爲の賄賂

十善―前世で十惡を犯さぬ者今世にて天子になる

九善かたし―九善半

欠來る―駈來る

せちがひ―詰責する

下として云々―下として上の事計られぬ

女「こなさんの教への通、内裏上﨟の形にやつし、社家の内へずつと行て、姫君のお傍へ通り、櫻丸が女房八重でござりまする、と申上たれば、あなたにも待兼てござつたかして、よふおじやつた、もういこか、と媼衆を待して置て、裏道から忍んでお出」櫻「ヲヽ其筈々々。此中から手耦して、菅丞相樣の筆法傳授に、取籠つてござるを幸、お袋樣へ神參りと願はせ、お供の衆には口薬、水撒く樣に飯して置た。ヤ其水で思ひ出した。あのおほこな御二人」櫻「甘いやつでは有。追付お手洗水が入ろぞよ」女「何云んすやら、あのおほこな御二人」櫻「ア、いや、コリヤ雨あがりで堤が滑る。怪我さしては晩からおれが不自由な。神前の水汲で來い」女「ソリヤマア如何やら勿躰ない」櫻「大事ないく、王は十善神は九善、其王樣の弟御、九善かたしじや往て來い」と、せり立られて女房は、神前さして汲みに行、跡は氣休め一休と、思ふ所へ三善の清貫、官人仕丁に十手持せ、裝束巻上げ欠來り、雑「ヤア夫におる櫻丸、倂最前齋世の宮を、奉幣も濟ぬ中連退いたとの風聞。何國へ供した、サア吐かせ」とせちがひかゝれば、櫻「存ぜぬく下として上の事。其方をとつくとお尋」と言はせも立ず、雑「ヤアぬかすまい。兼て倂が取持にて、物くさい事聞て居る。取分今日は、御惱平癒の神い

配劑—逢ふ手段を廻らせ

隣嚴しうて云々—隣きびしうして寶備けるといふ諺を轉用す

お姫様、申上たい事有ば、遠慮なしにおつしやれ」と、突き遣られて刈屋姫、「千束の文のお返事に、首尾あらばとのおん談、有がたいやら嬉しいやら、今日の此首尾待兼て、お呵受けに參りし」と、袂くはへて宣へば、齋世の宮も十七の、いとまだ若き初戀に、何と云寄品もなふ、齋「櫻丸がいかゐ世話、文見る度にいやまさり、逢たかつたに能ふこそ〳〵。嘸春風で寒かろ」と、仰は姫の身にこたへ、春風よりも戀風が、ぞつと身にしむ計なり。車のかげより櫻丸、ぬつと首出し、「コリヤ女房、我身抓つて人の痛さ、おりや先刻にから死脈が打、早ふ配劑仕おらぬか」とせり立てられて、女「ヲそれ〳〵、春風でお寒いとおつしやる、憚りながら御車を、暫しの内の風凌ぎ、御免有て」と姫君を無理に抱上げ押入れば、姫「アコレ、是は何しやる。勿體ない」と云つゝも、車の内へ入給へば、指心得て櫻丸、「さらば閉帳」と御簾おろす、内には宮の御聲にて、「嬉しいぞや」とのお詞と、姫「神詣の御車で、罰が當ろとシヤ儘よ」の睦言、聞て夫婦は飛退、櫻「女房共、たまらぬ〳〵、隣嚴しうて、ひよんな寶を設けた」と身もだえすれば、女「ヲこれ聞へるはいの、お二人共に御機嫌能、嬉しい事ではごんせんか」櫻「イヤもふ餘り御機嫌が能過て、近所迄難義がかゝつた。とはいふ物の、有樣はそちが働き、よふマア尋逢たな」

そびき出し―誘ひ出す

お供した、希世の卿も同然。萬一お立でない時は、あの大勢の群集の中へ、二輛の車を引かけて、怪我さしても損ねても、不調法は舍人の誤、一走往て樣子を見て、取に歸る迄の事。休んだかはりじや、サア來い」と引連立て兩人は、宮居の方へ走り行、跡見送りて櫻丸、「ハヽヽヽ、一ぱい食ふて往たは〳〵」と、獨言して相圖の手拍手、招けば招かれ戀草の、露踏分けて十五六、被の風の優しきは、菅丞相の御娘、刈屋姫迚色も香も、文は父御のお家柄、口說き落して宮樣に、逢せませんと跡に付、供は八重迚花めきし、櫻丸が自慢の女房、先へ廻りて、「コレこちのお人、首尾はよいか」と問へば點頭、男「よい共〳〵、今日此加茂堤はお車の休所、人どめして一人も通さぬ、鼠の子もない所と思ひ、宮樣をそびき出して來た所に、梅王や松王が、どんぐり目玉にほつと草臥、一生につかぬ嘘をまた吐いて、まんまと散らして仕廻た。姫君樣恥しそふな顏せず共、お出お出、ドリヤ開帳仕らふ」と、車の御簾を引上れば、齋世の宮は面慚げに、姫は猶しも顏見合せ、につと笑ふて袖覆ふ。男「サア爰らが下々と違ふて、飛付して輕業もさせにくゐ。女房共暗闇にしたいなア」女「何のいな、晝じや迚結構な車の內」男「エ、すばやい奴では有ぞ、我等は暫しお暇」と木陰へはいれば、女「それ〳〵、こんな時には男は邪魔。サ

烏帽子親―元服する時冠を著せて貰ふ人

おはずからず―諺、償ず借らず子三人

いか樣―成程

にお付なされ、おれを兄のお心でか、梅王丸とお呼なされて召使はる。其方は松王丸、櫻丸は宮の舍人、烏帽子親と云御恩の御方、家を隔てゝ奉公する共、必仇疎に思はぬがよいぞよ」松「アヽくど〳〵〳〵と永談議說人。もふ齋世の宮もお參りなされ。牛休めに櫻丸も來そふなもの、何ぞ用が有るか」梅「ハテ佐太村の親父殿から、來月は七十の賀を祝ふ程に、三女夫連で來いと人おこされた、其事いはふと思ふて」松「ソリヤ銘々に人が來て、よふ知つてゐる。思へば親父殿は、おはずからずに子三人と、果報な人では有るはいなア」と、兄弟咄しの其中へ、同じ胤腹一時に、生れて年も同年、どれが兄共弟共、梅と松とに櫻丸、三幅對の車挽こかげに一輛引捨て、堤の上から、櫻「是は〳〵ふたりとも、ゆつくりとして居らるゝ。御神事も早半過、呼立られぬ中に行たらよかろ」と、眞顏でいへば梅王丸、「御神事が濟だら、宮樣からお立で有ろが、其方や又爰へ何しにきた」櫻「イヤ此方の宮樣は、神司の方で御休足有故、お立の程がしれぬ。此方衆の乘せて來た御名代の衆は、禁庭の御用が有迚、立騷いで居たぞや。油斷して呵られまい」と、いふに松王、「いか樣、役なしの宮樣と、時平公のお目鑑で、御用繁き清貫樣とは違ふ。何時しれぬいざ行こ」と、車にかゝれば、梅「ヤレ待て松王、清貫樣がお立有ば、此梅王が

御惱の祈願―天子御病氣平癒のいのり
加茂堤―鴨にかく
わせた―來た
短い癖―短氣なくせ
行いでな―行かぬか
蓼喰ふ虫云々―人には好きぶすきあるをいふ諺

と、宣ふ詞は今の世に、傳へて殘る筆道の、道は御名に顯はれて、眞成かな誠成、君が御代こそ　三重豐なれ。引捨る車は松に輪を休め、舍人二人は肘枕、二輛並べし御所車、かたへは藤原かたへは菅原、道眞公の名代は左中辨希世、時平公の代參は三善の清貫、加茂明神へ御惱の祈願、神子が湯浴の其間、眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん。松吹風に菅原の舍人、梅王丸目を覺し、「コリャやい松王丸、そちが主の時平公は、短氣者でも根が大鳥、名代にわたせ清貫殿は、短いくせに根が惡者。呼使を請ぬ內、目を覺して行いでな」松「ホウ梅王のいはるゝ事はいの。こたなの主の名代に來た、希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好々と、あの和郎を弟子にしたり、代參におこしたりなさるゝ、菅丞相の、お心がしりたい」梅「イヤそりや其方達が、小い了簡とは違ふ。聖人の胸の廣さは、此方等が身にも覺への有事。齋世の宮樣の車を挽、櫻丸とおれと三人は、世に稀な三ツ子、顏と心はかはつても、著る物は三人一所。ひよんな者產んだ、と親父が氣の毒に思ふたをお聞なされ、三つ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守と成、成人さして牛飼に差上げよ、と菅丞相樣のお執成で、御扶持迄下され、親四郞九郞殿は、今佐太村の御領分に、御寵愛の梅櫻松を預り、安樂に暮して居らるゝ。其御寵愛の三木の名を、我々

鹿を馬―秦の趙高の故事

三善―見にかく

に成て對面せん」と一口に言放す、謀叛の萌ぞ恐ろしき。判官代輝國、階の下につゞと寄、「事新敷嚴命、唐土の天蘭敬は、時平公の御姿を寫しには參るまじ。皆上つて頤廣く、顴高き延喜帝、唐僧がよも呑込まい。神武以來獨の惡王、武烈天皇の名代ならば、時平公が幸究竟、當今の御代とは、鹿を馬との出損ひ、ハヽヽ、御無用」と嘲笑ふ。時「ヤア舌長し輝國、踏れやつ」と呵り付、「ヤア〳〵玄蕃、天蘭敬を內裏へ伴へ。天子は此時平用意せん」と、立つ所を菅丞相とゞめ給ひ、「時平の仰は天下の爲、御形代とはさる事なれども、若は彼僧相人にて、君臣の相を能く見るならば、王孫に有ぬ臣下としるべし。其時いかゞ仕らん」と、理窟に時平行當れば、三善の淸貫進出、「菅丞相の詞共覺へず。彼坊主を相人とは餘りな先ぐり、念に念が入過る。左中辨希世殿、そふじやないか」と指出口。イヤ是念に念を入てさへ、過仕落は有ならひ、假初ならぬ唐土人、御對面の事なれば、輕々敷計はれずと、暫しが間御思案有、菅「所詮天子の御代、人臣は成がたし。幸御同腹の御弟宮齋世の親王を、今日一日の天子と仰ぎ、御姿畫を唐土迄傳へて恥ぬ御粧、此儀いかゞ」と理に叶ふ、詞に違ふ時平が工、目と目を三善の淸貫も、口あんごりと明居たる。玉簾深き一間より、伊豫の內侍立出給ひ、「兩臣の御諍、我君委

瞎か缺脣―かた目かいぐちか

袞龍の御衣―天皇陛下の御正裝

の御惱日を追て快然ならず、急ぎ齋世に參內し、龍顏を拜し、御樣子有の儘に告知らせよ、と判官代を相添らる。御樣躰いかゞ渡らせ給ふやらん」菅丞相正笏有、菅「さして御變もなく候。委くは道眞に御尋有んよりは、直に天氣を窺ひ給へ」菅「然らば左樣に致さん」と、時平にも挨拶有、常寧殿に入給ふ。かゝる所へ式部省の下司、春藤玄蕃允友景罷出、庭上に頭を下ゲ、「今度、渤海國より來朝せし唐僧、天蘭敬が願ひには、唐土の徽宋皇帝、當今の聖德を傳へ聞、何卒天顏を拜し奉り、御姿を畫に寫し歸國せよ。其畫を則日本の帝と思ひ、對面せんとの望に付、數々の饋物、則是に候」と庭上に餝らすれば、菅丞相聞給ひ、「コハ珍らか成唐僧が願ひ、當今延喜の帝、聖王にて在す事隱なく、御姿を拜せんと、唐の帝の望は、直に我國の譽なれ共、折惡敷天子の御惱。有の儘に云聞せ、音物も唐僧も、唐土へ歸されんや、時平の了簡ましますか」と、仰に冠打振て、時「そふでない道眞、御病氣と申聞しても、よも誠には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも、趁跛か瞎か缺脣か膝行か、天皇らしうない形故、病氣といふは間に合と、いはるゝは日本の瑕、面倒な事いはさんより、御形代を拵へ、天皇と僞つて唐僧に拜さすれば、何事無ふ事は濟、誰彼と云んより、此時平が代を勤め、袞龍の御衣を著し、天子

菅原傳授手習鑑

第一

蒼々たる姑射の松、化して婥約の美人と顯はれ、珊々たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人となる、皆是擬議して變化をなす、豈誠の木精ならんや。唐土許か日の本にも、人を以て名付るに、松と呼梅といひ、或は櫻に准れば、花にも情天滿、大自在天神の御自愛有し御神詠、末世に傳へて有がたし。此神いまだ人臣にまします時、菅原の道眞と申奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極め給へば、才學智德兼備り、右大臣に推任有、權威に漫る左大臣、藤原の時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる、延喜の御代ぞ豐なる。然るに主上此程より、御風の心地迚、病の床に臥給ふ。天顏を窺ひ奉らんと、御弟宮無品齋世親王、參内の御供には、院の廳の官人判官代輝國、階下に伺公仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ、「今朝院參致せし所、法皇仰有樣は、當今

蒼々たる云々―婥約はやさしく美しい貌莊子に藐姑射山有二神人一居焉肌膚若二氷雪一婥約若二處子一とあるをとる

珊々たる云々―隋の趙師雄羅浮にて清麗の美人に逢ひ共に酒を飲み醉臥し覺めて見れば身は大梅樹の下に在りといふ故事

情天滿―心ありにかく

延喜の御世―醍醐帝

出雲半二 海音宗輔 淨瑠璃傑作集 目錄

區別し、難解の語句に頭註を施したるは校訂者の新に筆を加へたる所なり。

大正三年六月　　　　　　校訂者　忠見慶造

假名手本忠臣藏（七行本）寛延元年八月十四日　同

關取千兩幟（七行本）明和四年八月四日　近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛

妹脊山婦女庭訓（七行本）同　八年正月廿八日　近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南、後見三好松洛

伊賀越道中雙六（七行本）天明三年四月廿七日　近松半二、近松加作

八百屋お七（九行本）寶永元年　海音

心中二つ腹帶（十行本）享保七年　同

一谷嫩軍記（十行本）寶暦元年　並木宗輔、淺田一烏、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六

右題目の下の括弧内は、校正の原據とせる丸本の種類を示したるものにして、本文は一に之に隨ひて嚴密に校訂し、漢字送假名等もつとめて舊體を存せり。但假名の多き所に聊か漢字を配し鈎識を施して地の文と詞を

配しつゝあるは、人の知る所なり。近松海音は其の作に獨自一己の力に成れども、出雲宗輔の時より、衆智を集めて一篇を作成する例を關けり。卽ち一の作を出さんとするに、豫め一篇を數齣に分ち、立作者卽主任者より幾人の作者に配當して文を綴らしめ、各自作り了れば、一席に持ち集りて會讀し、互に論難改竄して以て完璧のものとなす。當時丸本の末に、主任者の名を筆頭として、數名の連署あるは是が爲なり。

今本集に收めたる九種の篇名及びその初めて登場せる年月、作者の氏名を擧ぐれば左の如し。

菅原傳授手習鑑（十行本）延享三年　竹田出雲、三好松洛、並木千柳

義經千本櫻（七行本）同　四年　同

緒言

元祿の頃大坂に操座二つあり、竹本義太夫の竹本座、豐竹越前少椽の豐竹座是なり。而して竹本座付の作者には近松門左衛門あり、豐竹座には紀海音ありて、盛に新作を出し、脚色の巧と行文の妙を競ひて互に相頡頏せり。近松の後を承くるものを竹田出雲とし、出雲に次ぐものを文耕堂、三好松洛、近松半二等とす。海音の後には西澤一鳳、並木宗輔、淺田一鳥の諸家あり、各ゝ文鋒を磨き趣向を凝せり。其内近松を除きて、尤も有名なるは、海音出雲宗輔半二是なり。今此四氏の傑作と認むるもの、九篇を擇びて本集に收めぬ。其文近松に及ばずと雖も、脚色變化の妙を極めて感興を惹くこと多く、随つて其の生命の斯界に不朽にして今猶寄席に操に國民の感情を支

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

海音半二
出雲宗輔
傑作集

全

